
吾輩は猫である

夏目漱石

吾輩は猫である.....	1
夏目漱石.....	1
一.....	1
二.....	42
三.....	183
四.....	301
五.....	387
六.....	473
七.....	560
八.....	651
九.....	757
十.....	858
十一.....	991

わがはい

吾輩は猫である。名前はまだ無い。

けんとう

どこで生れたかんと見当がつかぬ。何でも薄暗いじめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人間というものを見た。しかもあとで聞くとそれ

どうあく

は書生という人間中で一番獐悪な種族であったそうだ。この書生というのは時々我々を

つかま

に

捕えて煮て食うという話である。しかしその当時は何という考もなかったから別段恐しいと

てのひら

も思わなかった。ただ彼の掌に載せられてスーと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあったばかりである。掌の上で少し落ちついて書生の顔を見たのがいわゆる人間というもの

みはじめ

の見始であろう。この時妙なものだと思った

感じが今でも残っている。第一毛をもって装飾さ

れべきはずの顔がつるつるしてまるで薬^{やかん}缶だ。

その後猫にもだいぶ^あ逢ったがこんな片輪^{かたわ}には
一度も^{でく}出会わした事がない。のみならず顔の真中
があまりに突起している。そうしてその穴の中か

ら時々ぷうぷうと^{けむり}煙を吹く。どうも咽^むせぼく
て実に弱った。これが人間の飲む^{たばこ}煙草というも
のである事はようやくこの頃知った。

この書生の掌の^{うち}裏でしばらくはよい心持に
坐っておったが、しばらくすると非常な速力で運
転し始めた。書生が動くのか自分だけが動くのか

分らないが^{むやみ}無暗に眼が廻る。胸が悪くなる。

とうてい
到底助からないと思っていると、どさりと音
がして眼から火が出た。それまでは記憶している

があとは何の事やらいくら考え出そうとしても
分らない。

ふと気が付いて見ると書生はいない。たくさん
おった兄弟が一 ^{ぴき} 疋 も見えぬ。 ^{かんじん} 肝 心 の母親さ
え姿を隠してしまった。その上 ^{いま} 今 までの所とは
違って ^{むやみ} 無 暗 に明るい。眼を明いていられぬくら
いだ。はてな何でも ^{ようす} 容 子 がおかしいと、のその
^は そ這い出して見ると非常に痛い。吾輩は ^{わら} 藁 の上
から急に笹原の中へ棄てられたのである。

ようやくの思いで笹原を這い出すと向うに大
きな池がある。吾輩は池の前に坐ってどうしたら
よかろうと考えて見た。別にこれという ^{ふんべつ} 分 別
も出ない。しばらくして泣いたら書生がまた迎に
来てくれるかと考え付いた。ニャー、ニャーと試

みにやって見たが誰も来ない。そのうち池の上を
さらさらと風が渡って日が暮れかかる。腹が非常
に減って来た。泣きたくても声が出ない。仕方が

ない、何でもよいから ^{くいもの}食物のある所まである
こうと決心をしてそろりそろりと池を ^{ひだ}左りに
廻り始めた。どうも非常に苦しい。そこを我慢し

て無理やりに ^は這って行くとようやくの事で何と
なく人間臭い所へ出た。ここへ ^{はい}這入ったら、どう
にかなると思って竹垣の ^{くず}崩れた穴から、とある
邸内にもぐり込んだ。縁は不思議なもので、もし

この竹垣が破れていなかったなら、吾輩はついに
ろぼう ^{がし}路傍に餓死したかも知れんのである。一樹の蔭
とはよく云ったものだ。この垣根の穴は ^い ^{こんにち}今日
に至るまで吾輩が ^{となり}隣家の三毛を訪問する時の

通路になっている。さて やしき 邸へは忍び込んだもののこれから先どうして 善い いか分らない。そのうちに暗くなる、腹は減る、寒さは寒し、雨が降って来るといふ始末でもう一刻の ゆうよ 猶 予が出来なくなった。仕方がないからとにかく明るくて暖かそうな方へ方へとあるいて行く。今から考えるとその時はすでに家の内に這入っておったのだ。ここで吾輩は 彼 かの書生以外の人間を再び見るべき機会に そうぐう 遭 遇したのである。第一に逢ったのがおさんである。これは前の書生より一層乱暴な方で吾輩を見るや否やいきなり くびすじ 頸 筋をつかんで表へ ほう 抛り出した。いやこれは駄目だと思ったから眼をねぶって運を天に任せていた。しかしひもじいのと寒いのにはどうしても我慢が出来ん。

吾輩は再びおさんの^{すき}隙を見て台所へ^は這い^{あが}上った。すると間もなくまた投げ出された。吾輩は投げ出されては這い上り、這い上っては投げ出され、何でも同じ事を四五遍繰り返したのを記憶している。その時におさんと云う者はつくづくいやになった。この間おさんの^{さんま}三馬を^{ぬす}偷んでこの返報をしてやってから、やっと胸の^{つかえ}痞^がが下りた。吾輩が最後につまみ出されようとしたときに、この^{うち}家の主人が騒々しい何だといいいながら出て来た。下女は吾輩をぶら下げて主人の方へ向けてこの^{やど}宿なしの小猫がいくら出しても出して^{おだいどころ}も御台所へ^{あが}上って来て困りますという。主人は鼻の下の黒い毛を^{ひね}撚りながら吾輩の顔をしばらく^{なが}眺めておったが、やがてそんなら内

へ置いてやれといったまま奥へ^{はい}這入ってしまった。主人はあまり口を聞かぬ人と見えた。下女はくや口惜しそうに吾輩を台所へ^{ほう}抛り出した。かくして吾輩はついにこの^{うち}家を自分の^{すみか}住家と極める事にしたのである。

吾輩の主人は^{めった}滅多に吾輩と顔を合せる事がない。職業は教師だそうだ。学校から帰ると終日書齋に這入ったぎりほとんど出て来る事がない。家のものは大変な勉強家だと思っている。当人も勉強家であるかのごとく見せている。しかし実際はうちのものがいうような勤勉家ではない。吾輩は時々忍び足に彼の書齋を^{のぞ}覗いて見るが、彼はよく^{ひるね}昼寝をしている事がある。時々読みかけてある本の上に^{よだれ}涎をたらしている。彼は胃弱で

皮膚の色が^{たんこうしょく}淡黄色を帯びて弾力のない
ふかつぱつ
不活潑な徴候をあらわしている。その癖に大
飯を食う。大飯を食った^{あと}後でタカジャスターゼ
を飲む。飲んだ後で書物をひろげる。二三ページ
読むと眠くなる。涎を本の上へ垂らす。これが彼
の毎夜繰り返す日課である。吾輩は猫ながら時々
考える事がある。教師というものは実に^{らく}楽なもの
のだ。人間と生れたら教師となるに限る。こんな
に寝ていて勤まるものなら猫にでも出来ぬ事は
ないと。それでも主人に云わせると教師ほどつら
いものはないそうで彼は友達が来る^{たび}度に何とか
かかんとか不平を鳴らしている。

吾輩がこの家へ住み込んだ当時は、主人以外の
ものにははなはだ不人望であった。どこへ行って

は
も跳ね付けられて相手にしてくれ手がなかった。

いかに珍重されなかったかは、^{こんにち}今日に至るまで名前さえつけてくれないのでも分る。吾輩は仕方がないから、出来得る限り吾輩を入れてくれた

主人の^{そば}傍にいる事をつとめた。朝主人が新聞を読むときは必ず彼の^{ひざ}膝の上に乗る。彼が昼寝をするときは必ずその^{せなか}背中に乗る。これはあながち主人が好きという訳ではないが別に構い手がなかったからやむを得るのである。その後いろい

ろ経験の上、朝は^{めしびつ}飯櫃の上、夜は^{こたつ}炬燵の上、

天気の良い昼は^{えんがわ}椽側へ寝る事とした。しかし一番心持の好いのは^{よ い}夜に入ってこのうちの小供の寝床へもぐり込んでいっしょにねる事である。この小供というのは五つと三つで夜になると

二人が一つ床へ^{はい}入^{ひとま}って一^{おの}間^いへ寝る。吾輩はい
つでも彼等の中に^{おの}己^いれを容るべき余地を
みいだ
見出してどうにか、こうにか割り込むのである
が、運悪く小供の一人が眼を^さ醒ますが最後大変な
事になる。小供は――ことに小さい方が^{たち}質^がわ
るい――猫が来た猫が来たといって夜中でも何
でも大きな声で泣き出すのである。すると例の神
経胃弱性の主人は^{かなら}必^ずず眼をさまして次の部
屋から飛び出してくる。現にせんだってなどは
ものさし^た物^た指^たで尻^たぺたをひどく叩^{たた}かれた。

吾輩は人間と同居して彼等を観察すればする
ほど、彼等は^{わがまま}我^儘なものだと断言せざるを得
ないようになった。ことに吾輩が時々^{どうきん}同^衾する
小供のごときに至っては^{ごんごどうだん}言^語同^断であ

る。自分の勝手な時は人を逆さにしたり、頭へ袋
をかぶせたり、^{ほう}抛り出したり、へつついの中へ
押し込んだりする。しかも吾輩の方で少しでも手
出しをしようものなら^{かない}家内総がかりで追い廻
して迫害を加える。この間もちょっと畳で爪を^と磨
いだら細君が非常に^{おこ}怒ってそれから容易に座
敷へ^い入れない。台所の板の間で^{ひと}他が^{ふる}顫えてい
ても一^{いっこう}向平気なものである。吾輩の尊敬する
すじむ^{こう}向の白君などは^あ逢う^{たびごと}度毎に人間ほ
ど不人情なものはないと言っておらるる。白君は
先日玉のような子猫を^う四足産まれたのである。と
ころがその^{うち}家の書生が三日目にそいつを裏
の池へ持って行って四足ながら棄てて来たそう
だ。白君は涙を流してその一部始終を話した上、

どうしても我等 ^{ねこぞく}猫族 が親子の愛を ^{まった}完く
して美しい家族的生活をするには人間と戦って

これを ^{そうめつ}剿滅 せねばならぬといわれた。一々も
っともの議論と思う。また隣りの ^{みけ}三毛君などは人
間が所有権という事を解していないといって

おおい
大に憤慨している。元来我々同族間では
^{めざし}目刺の頭でも ^{ぼら}鰯の ^{へそ}臍でも一番先に見付け
たものがこれを食う権利があるものとなってい
る。もし相手がこの規約を守らなければ腕力に訴

^よえて善いくらいのものだ。しかるに彼等人間は
ごう

毫もこの觀念がないと見えて我等が見付けた
御馳走は必ず彼等のために ^{りゃくだつ}掠奪 せらるる
のである。彼等はその強力を頼んで正当に吾人が

食い得べきものを ^{うば}奪 ってすましている。白君は

軍人の家におり三毛君は代言の主人を持っている。吾輩は教師の家に住んでいるだけ、こんな事に関すると両君よりもむしろ楽天である。ただその日その日がどうにかこうにか送られればよい。いくら人間だって、そういつまでも栄える事もあるまい。まあ気を永く猫の時節を待つがよかろう。

わがまま
我儘で思い出したからちょっと吾輩の家の主人がこの我儘で失敗した話をしよう。元来この主人は何といって人に^{すぐ}勝れて出来る事もないが、何にでもよく手を出したがる。俳句をやっ
てほととぎすへ投書をしたり、新体詩を明星へ出
したり、間違いだらけの英文をかいたり、時によ
ると弓に^こ凝ったり、^{うたい}謡を習ったり、またある

ときはヴァイオリンなどをブーブー鳴らしたり
するが、気の毒な事には、どれもこれも物になっ
ておらん。その癖やり出すと胃弱の癖にいやに熱

心だ。^{こうか}後架の中で謡をうたって、近所で
^{こうかせんせい あだな}
後架先生と渾名をつけられているにも
^{いっこう}
関せず一向平気なもので、やはりこれは
^{たいら むねもり そうろう}
平の宗盛にて候を繰返している。

みんながそら宗盛だと吹き出すくらいである。こ
の主人がどういう考になったものか吾輩の住み

込んでから一月ばかり^{のち}後のある月の月給日に、
大きな包みを^さ提げてあわただしく帰って来た。何
を買って来たのかと思うと水彩絵具と毛筆とワ
ットマンという紙で今日から謡や俳句をやめて
絵をかく決心と見えた。果して翌日から当分の間

というものは毎日毎日書斎で昼寝もしないで絵ばかりかいている。しかしそのかき上げたものを見ると何をかいたものやら誰にも鑑定がつかない。当人もあまり^{うま}甘くないと思ったものか、ある日その友人で美学とかをやっている人が来た時に^{しも}下のような話をしているのを聞いた。

「どうも^{うま}甘くかけないものだね。人のを見ると何でもないのでが^{みずか}自^{みずか}ら筆をとって見るといまさら^し今更のようにむずかしく感ずる」これは主人の^{じゅっかい}述^{いづわ}懐である。なるほど^{めがねごし}詐^{めがねごし}りのない処だ。彼の友は金縁の眼鏡越に主人の顔を見ながら、「そう初めから上手にはかけないさ、第一室内の想像ばかりで^え画^えがかける訳のものではない。^{むか}昔^{むか}し^{イタリー}以太利の大家アンドレア・デル・サ

ルトが言った事がある。画をかくなら何でも自然

その物を写せ。天に^{せいしん}星^{ろか}辰あり。地に露華あり。

飛ぶに^{とり}禽あり。走るに^{けもの}獣あり。池に金魚あ

り。枯^{こぼく}木に寒^{かんあ}鴉あり。自然はこれ一幅の

だいかつが
大活画なりと。どうだ君も画らしい画をかこ

うと思うならちと写生をしたら」

「へえアンドレア・デル・サルトがそんな事をい

った事があるかい。ちっとも知らなかった。なる

ほどこりゃもっともだ。実にその通りだ」と主人

は^{むやみ}無暗に感心している。金縁の裏には^{あざ}嘲ける

ような^{わらい}笑が見えた。

その翌日吾輩は例のごとく^{えんがわ}椽側に出て心

持善く^{ひるね}昼寝をしていたら、主人が例になく書斎

から出て来て吾輩の^{うし}後ろで何かしきりにやっ

ている。ふと眼が^さ覚めて何をしているかと^{いちぶ}一
ばかり細目に眼をあけて見ると、彼は余念もなく

アンドレア・デル・サルトを^き極め込んでいる。吾
輩はこの有様を見て覚えず失笑するのを禁じ得

なかった。彼は彼の友に^{やゆ}擲揄せられたる結果とし
てまず手初めに吾輩を写生しつつあるのである。

吾輩はすでに^{じゅうぶん}十^{ぶん}分^{ぶん}寝た。^{あくび}欠伸^あがしたくて
たまらない。しかしせつかく主人が熱心に筆を^と執
っているのを動いては気の毒だと思って、じっと

^{しんぼう}辛^{しん}棒^{ぼう}しておった。彼は今吾輩の輪廓をかき上
げて顔のあたりを^{いろど}色^{いろ}彩^どっている。吾輩は自白す
る。吾輩は猫として決して上乘の出来ではない。

背といい毛並といい顔の造作といいあえて他の

猫に^{まさ}勝^{まさ}るとは決して思っておらん。しかしいく

ら不器量の吾輩でも、今吾輩の主人に ^{えが}描き出されつつあるような妙な姿とは、どうしても思われない。第一色が違う。吾輩は ^{ペルシャさん}波斯産の猫のごとく黄を含める淡灰色に ^{うるし}漆のごとき ^{ふい}斑入りの皮膚を有している。これだけは誰が見ても疑うべからざる事実と思う。しかるに今主人の彩色を見ると、黄でもなければ黒でもない、灰色でもなければ ^{とびいろ}褐色でもない、さればとてこれらを交ぜた色でもない。ただ一種の色であるというよりほかに評し方のない色である。その上不思議な事は眼がない。もっともこれは寝ているところを写生したのだから無理もないが眼らしい所さえ見えないから ^{めくら}盲猫だか寝ている猫だか判然しないのである。吾輩は心中ひそかにいくらアンド

レア・デル・サルトでもこれではしようがないと
思った。しかしその熱心には感服せざるを得ない。
なるべくなら動かずにおってやりたいと思った
が、さっきから小便が催うしている。^{みうち}身内の筋
肉はむずむずする。^{もはや}最早一分も^{ゆうよ}猶予が出来ぬ
し^ぎ仕儀となったから、やむをえず失敬して両足を前
へ存分のして、首を低く押し出してあ一あと^{だい}大
なる欠伸をした。さてこうなって見ると、もうお
となしくしていても仕方がない。どうせ主人の予
定は^ぶ打ち壊^こわしたのだから、ついでに裏へ行って
用を^た足そうと思つてのそのそ這い出した。すると
主人は失望と怒りを^か掻き交ぜたような声をして、
座敷の中から「この馬鹿野郎」と^{どな}怒鳴った。この
主人は人を^{ののし}罵るときは必ず馬鹿野郎という

のが癖である。ほかに悪口の言いようを知らない
のだから仕方がないが、今まで辛棒した人の気も
知らないで、無^む暗^{やみ}に馬鹿野郎^よ呼^ばわりは失敬だ
と思う。それも平生吾輩が彼の^せ背^{なか}中^なへ乗る時に
少しは好い顔でもするならこの^{まん}漫^ば罵^ばも甘んじ
て受けるが、こっちの便利になる事は何一つ快く
してくれた事もないのに、小便に立ったのを馬鹿
野郎とは^{ひど}酷^いい。元来人間というものは自己の力
量に慢じてみんな増長している。少し人間より強
いものが出て来て^{いじ}窘^めめてやらなくてはこの先
どこまで増長するか分らない。

わがまま
我^わ儘^{まま}もこのくらいなら我慢するが吾輩は
人間の不徳についてこれよりも数倍悲しむべき
報道を耳にした事がある。

吾輩の家の裏に十坪ばかりの ^{ちやえん}茶園がある。

広くはないが ^{さっぱり}瀟洒とした心持ち好く日の
^{あた}当る所だ。うちの小供があまり騒いで楽々昼寝
の出来ない時や、あまり退屈で腹加減のよくない

折などは、吾輩はいつでもここへ出て ^{こうぜん}浩然の
気を養うのが例である。ある小春の穏かな日の二

時頃であったが、吾輩は ^{ちゅうはんご}昼飯後快よく一睡
^{のち}した後、運動かたがたこの茶園へと ^ほ歩を運ばし
た。茶の木の根を一本一本嗅ぎながら、西側の杉
垣のそばまでくると、枯菊を押し倒してその上に
大きな猫が前後不覚に寝ている。彼は吾輩の近づ

くのも ^{いっこう}一向心付かざるごとく、また心付くも
無頓着なるごとく、大きな ^{いびき}鼾をして長々と体
^{よこた}を横 ^{ひと}えて眠っている。他の庭内に忍び入り

たるものがかくまで平氣に ^{ねむ} 睡 られるものかと、
吾輩は ^{ひそ} 窃 かにその大胆なる度胸に驚かざるを
得なかった。彼は純粹の黒猫である。わずかに ^ご 午
を過ぎたる太陽は、透明なる光線を彼の皮膚の上
に ^な 抛 げかけて、きらきらする ^{にこげ} 柔 毛 の間より眼に
見えぬ炎でも ^{も い} 燃 え出 ずる ように思われた。彼は猫
中の大王とも云うべきほどの偉大なる体格を有
している。吾輩の倍はたしかにある。吾輩は嘆賞
の念と、好奇の心に前後を忘れて彼の前に
^{ちよりつ} 佇 立 して余念もなく ^{なが} 眺 めていると、静かな
る小春の風が、杉垣の上から出たる ^{ごとう} 梧 桐 の枝を
^{かる} 軽 く誘ってばらばらと二三枚の葉が枯菊の茂
みに落ちた。大王はかっとその ^{まんまる} 真 丸 の眼を開
いた。今でも記憶している。その眼は人間の珍重

こはく　はる
する琥珀というものよりも遥かに美しく輝
いていた。彼は身動きもしない。そうぼう
ら射るとき光を吾輩の矮小なる額
の上にあつめて、御めえは一体何だと云った。大

いや
王にしては少々言葉が卑しいと思ったが何し
ろその声の底に犬をも挫しぐべき力が籠
いで
いるので吾輩は少なからず恐れを抱いた。しか
あいさつ　けんのん
し挨拶をしないと険呑だと思ったから
「吾輩は猫である。名前はまだない」となるべく

よそお
平気を装って冷然と答えた。しかしこの時吾
輩の心臓はたしかに平時よりも烈しく鼓動して

おおい　けいべつ
おった。彼は大に軽蔑せる調子で「何、
猫だ？　猫が聞いてあきれらあ。ぜん
ぼうじゃくぶじん
住んでるんだ」随分傍若無人である。「吾

輩はこの教師の^{うち}家^やにいるのだ」「どうせそんな事だろうと思った。いやに^や瘠せてるじゃねえか」と大王だけに^{きえん}気^{えん}焰^{えん}を吹きかける。言葉付から察するとどうも良家の猫とも思われない。しかしその^{あぶらぎ}膏^き切^けって肥満しているところを見ると御馳走を食ってるらしい、豊かに暮しているらしい。吾輩は「そう云う君は一体誰だい」と聞かざるを得なかった。^お己^{くろ}れあ車屋の黒^よ」
^{こうぜん}昂^{けい}然^{ぜん}たるものだ。車屋の黒はこの近辺で知らぬ者なき乱暴猫である。しかし車屋だけに強いばかりでちっとも教育がないからあまり誰も交際しない。同盟敬遠主義の^{まと}的^{てき}になっている奴だ。吾輩は彼の名を聞いて少々尻こそばゆき感じを起すと同時に、一方では少々^{けいぶ}軽^{けい}侮^ぶの念も生じた

のである。吾輩はまず彼がどのくらい無学である
かを^{ため}試してみようと思つて^さ左の問答をして見
た。

「一体車屋と教師とはどっちがえらいだろう」

「車屋の方が強いに^{きま}極つていらあな。御めえの
うちの主人を見ねえ、まるで骨と皮ばかりだぜ」

「君も車屋の猫だけに^{だいふ}大分強そうだ。車屋にい
ると^{ごちそう}御馳走が食えると見えるね」

「^{なあ}何におれなんぞ、どこの国へ行つたつて食
物に不自由はしねえつもりだ。御めえなんかも
ちゃば^{たけ}茶^茶 畠ばかりぐるぐる廻っていねえで、ちっ
と^{おれ}己^{あと}の後へくっ付いて来て見ねえ。一と月と
たたねえうちに見違えるように太れるぜ」

「追ってそう願う事にしよう。しかし ^{うち} 家は教師の方が車屋より大きいのに住んでいるように思われる」

べらぼう
「^た 篋 棒 め、うちなんかいくら大きくたって腹の足しになるもんか」

彼は ^{おおい} 大 に ^{かんしゃく} 肝 癪 に ^{さわ} 障 った様子で、
^{かんちく} 寒 竹 をそいだよな耳をしきりとぴく付かせてあららかに立ち去った。吾輩が車屋の黒と
^{ちき} 知己 になったのはこれからである。

その後吾輩は ^ご 度々 ^{たびたび} 黒と ^{かいこう} 邂逅 する。邂逅
する ^{ごと} 毎 に彼は車屋相当の ^{きえん} 気 焰 を吐く。先に吾輩が耳にしたという不徳事件も実は黒から聞いたのである。

或る日例のごとく吾輩と黒は暖かい

ちゃばたけ　ねころ
茶　畠　の中で寝転びながらいろいろ雑談
をしていると、彼はいつもの自慢話をさも
新しそうに繰り返したあとで、吾輩に向って下
のごとく質問した。「御めえは今までに鼠を何匹
とった事がある」智識は黒よりも余程発達してい
るつもりだが腕力と勇氣とに至っては到底
黒の比較にはならないと覚悟はしていたものの、
この間に接したる時は、さすがに極りが善くは
なかった。けれども事實は事実で詐る訳には
行かないから、吾輩は「実はとろうとろうと思っ
てまだ捕らない」と答えた。黒は彼の鼻の先から
ぴんと突張っている長い髭をびりびりと
ふる
震わせて非常に笑った。元来黒は自慢をする
だけ
丈にどこか足りないところがあって、彼の

きえん のど
気 焰 を感心したように咽喉をころころ鳴らし
て謹聴していればはなはだ ぎょ 御 しやすい猫であ
る。吾輩は彼と近付になってから すぐ 直 にこの呼吸
を飲み込んだからこの場合にもなまじい おの 己 れ
を弁護してますます形勢をわるくするのも愚で
ある、いっその事彼に自分の手柄話をしゃべらし
て御茶を濁すに しく 若くはないと思案を くだ 定 めた。そ
こでおとなしく「君などは年が年であるから
だいぶん
大 分 とったろう」とそそのかして見た。果然
彼は しょうへき けっしょ とっかん
彼は 牆 壁 の 欠 所 に 吶 喊 して来た。
「たんとでもねえが三四十はとったろう」とは得
意気なる彼の答であった。彼はなお語をつづけて
「鼠の百や二百は一人でいつでも引き受けるが
いたちってえ奴は手に合わねえ。一度いたちに向

ひど
って 酷 い目に^あ逢った」「へえなるほど」と
あいづち
相 槌 を打つ。黒は大きな眼をぱちつかせて云
う。「去年の大掃除の時だ。うちの亭主が^{いしばい}石 灰
の袋を持って^{えん}椽 の下へ^は這い込んだら御めえ大
きな^{めんくら}いたちの野郎が 面 喰 って飛び出したと
思いねえ」「ふん」と感心して見せる。「いたちっ
てけども何鼠の少し大きいぐれえのものだ。こん
ちきしょう
畜 生 って気で追っかけてとうとう^{どぶ}泥溝の
中へ追い込んだと思いねえ」「うまくやったね」

かつさい
と 喝 采 してやる。「ところが御めえいざって
え段になると奴め^{さいご}最 後 っ屁をこきやがった。
くせ
臭 えの臭くねえのってそれからってえものは
いたちを見ると胸が悪くならあ」彼はここに至つ
てあたかも去年の臭気を^{いま}今 なお感ずるごとく

前足を揚げて鼻の頭を二三遍なで廻わした。吾輩も少々気の毒な感じがする。ちっと景気を付けてやろうと思って「しかし鼠なら君に^{にら}睨まれては百年目だろう。君はあまり鼠を^と捕るのが名人で鼠ばかり食うものだからそんなに肥って色つやが善いのだろう」黒の御機嫌をとるためのこの質問は不思議にも反対の結果を^{ていしゅつ}呈出した。彼はきぜん^{たいそく}喟然として大息^{かん}している。「考^{かん}げえるとつまらねえ。いくら稼いで鼠をとったって——てえ人間ほどふてえ奴は世の中にいねえぜ。人のとった鼠をみんな取り上げやがって交番へ持って行きゃあがる。交番じゃ誰が^と捕ったか分らねえからそのたんびに五銭ずつくれるじゃねえか。うちの亭主なんか^{おれ}己の御蔭でもう壱円五十銭く

もう
らい 儲 けていやがる癖に、 ろく なものを食わせ
た事もありやしねえ。おい人間てもものあ 体 の善
い泥棒だぜ」 さすが無学の黒もこのくらいの
りくつ
理 窟 はわかると見えてすこぶる おこ 怒 った
ようす
容 子 で背中 of 毛を 逆 さかだ 立てている。吾輩は少々
気味が悪くなったから善い加減にその場を
ごまか うち
胡魔化して 家 へ帰った。この時から吾輩は決し
て鼠をとるまいと決心した。しかし黒の子分にな
って鼠以外の御馳走を あさ 獺 ってあるく事もしな
かった。御馳走を食うよりも寝ていた方が気楽で
いい。教師の うち 家 にいると猫も教師のような性質
になると見える。要心しないと今に胃弱になるか
も知れない。

教師といえは吾輩の主人も近頃に至っては

とうてい　のぞみ
到底 水彩画において 望 のない事を悟ったものと見えて十二月一日の日記にこんな事をかきつけた。

〇〇と云う人に今日の会で始めて出逢った。あの
だいぶほうとう
人は大分放蕩をした人だと云うがなるほど
つうじん　ふうさい
通人らしい風采をしている。こう云う
たち
質の人は女に好かれるものだから〇〇が放蕩をしたと云うよりも放蕩をするべく余儀なくせられたと云うのが適當であろう。あの人の妻君は
うらや
芸者だそうだ、羨ましい事である。元来放蕩家を悪くいう人の大部分は放蕩をする資格のないものが多い。また放蕩家をもって自任する連中のうちにも、放蕩する資格のないものが多い。これらは余儀なくされないのに無理に進んでやる

のである。あたかも吾輩の水彩画に於けるがごと
きもので到底卒業する気づかいはない。しかるに
も関せず、自分だけは通人だと思つて ^{すま} 済 してい
る。料理屋の酒を飲んだり待合へ ^{はい} 這入るから通人
となり得るという論が立つなら、吾輩も ^{ひとかど} 一 廉
の水彩画家になり得る ^{りくつ} 理 窟 だ。吾輩の水彩画の
ごときはかかない方がましであると同じように、
^{ぐまい} 愚 昧 なる通人よりも山出しの ^{おおやぼ} 大 野 暮 の方が
^{はる} 遙 かに上等だ。

^{つうじんろん} 通 人 論 はちょっと ^{しゅこう} 首 肯 しかねる。ま
た芸者の妻君を羨しいなどというところは教師
としては口にすべからざる愚劣の考であるが、自
己の水彩画における批評眼だけはたしかなもの
だ。主人はかくのごとく ^{じち めい} 自知の 明 あるにも関せず

うぬぼれしん
ずその 自 惚 心 は な かな かな 抜 け ない。

なかふつか
中 二 日 置 いて 十 二 月 四 日 の 日 記 に こ ん な 事
を 書 いて いる。

ゆうべ
昨 夜 は 僕 が 水 彩 画 を か いて 到 底 物 に な ら ん と
思 っ て、そ こ ら に ほう 抛 っ て 置 いた の を 誰 か が 立 派
な 額 に し て らんま か 欄 間 に 懸 け て く れ た 夢 を 見 た。さ て
額 に な っ た と こ ろ を 見 る と 我 な が ら 急 に 上 手 に
な っ た。非 常 に 嬉 し い。こ れ な ら 立 派 な も の だ と
ひと
独 り で 眺 め 暮 ら し て い る と、夜 が 明 け て 眼 が 覚
め て や は り 元 の 通 り 下 手 で あ る 事 が 朝 日 と 共 に
明 瞭 に な っ て し ま っ た。

うち
主 人 は 夢 の 裡 ま で 水 彩 画 の 未 練 を しょ 背 負 っ て
あ る い て い る と 見 え る。こ れ で は 水 彩 画 家 は 無 論
ふうし いわゆる
夫 子 の 所 謂 通 人 に も な れ ない 質 だ。たち

主人が水彩画を夢に見た翌日例の金縁^{めがね}眼鏡の美学者が久し振りで主人を訪問した。彼は座につくと劈^{へきとう}頭^え第一に「画はどうかね」と口を切った。主人は平気な顔をして「君の忠告に従って写生を^{つと}力^{つと}めているが、なるほど写生をすると今まで気のつかなかった物の形や、色の精細な変化などがよく分るようだ。西洋では昔^{むか}しから写生を主張した結果^{こんにち}今日のように発達したものである。さすがアンドレア・デル・サルトだ」と日記の事はおくびにも出さないで、またアンドレア・デル・サルトに感心する。美学者は笑いながら「実は君、あれは出鱈^{でたらめ}目^かだよ」と頭を搔く。「何が」と主人はまだわられた事に気がつかない。「何がって君のしきりに感服しているアンドレ

ア・デル・サルトさ。あれは僕のちょっと^{ねつぞう}捏造
した話だ。君がそんなに^{まじめ}真面目に信じようとは思
わなかったハハハハ」^{てい}と大喜悦の体である。吾
輩は椽側でこの対話を聞いて彼の今日の日記に
はいかなる事が^{しる}記さるるであろうかと
あらかじ
予^め想像せざるを得なかった。この美学者
はこんな^{いい}好加減な事を吹き散らして人を^{かつ}担
ぐのを唯一の^{たのしみ}楽にしている男である。彼は
アンドレア・デル・サルト事件が主人の
じょうせん
情線に^{ごう}いかなる響を伝えたかを毫も顧
慮せざるもののごとく得意になって^{しも}下のよう
な事を^{しゃべ}饒舌った。「いや時々^{じょうだん}冗談を言う
と人が^ま真に受けるので^{おおい}大に滑稽的^{こっけいてき}美
感を^{ちょうはつ}挑撥するのは面白い。せんだってある

学生にニコラス・ニッケルベールがギボンに忠告して彼の一世の大著述なる仏国革命史を仏語で書くのをやめにして英文で出版させたと言ったら、その学生がまた馬鹿に記憶の善い男で、日本文学会の演説会で真面目に僕の話した通りを繰り返したのは滑稽であった。ところがその時の傍聴者は約百名ばかりであったが、皆熱心にそれを傾聴しておった。それからまだ面白い話がある。せんだって或る文学者のいる席でハリソンの歴史小説セオファールの^{はな}話^{はな}しが出たから僕はあれは歴史小説の^{うち}中^{はく}で白^き眉^きである。ことに女主人公が死ぬところは鬼^き氣^き人を襲うようだと評したら、僕の向うに坐っている知らんと云った事のない先生が、そうそうあすこは実に名文だといった。

それで僕はこの男もやはり僕同様この小説を読んでおらないという事を知った」神経胃弱性の主人は眼を丸くして問いかけた。「そんな出鱈目でたためをいってもし相手が読んでいたらどうするつもりだ」あたかも人をあざむくのはさしつかえない、ただばけかわの皮があらわれた時は困るじゃないかと感じたもののごとくである。美学者は少しも動じない。「なにそのときゃ別の本と間違えたとか何とか云うばかりさ」と云ってけらけら笑っている。この美学者は金縁の眼鏡は掛けているがその性質が車屋の黒に似たところがある。主人は黙って日の出を輪に吹いて吾輩にはそんな勇氣はないと云わんばかりの顔をしている。美学者はそれだからえ画をかいても駄目だという目付で「しか

じょうだん
し 冗談 は冗談だが画というものは実際む
ずかしいものだよ、レオナルド・ダ・ヴィンチは
門下生に寺院の壁のしみを写せと教えた事があ
るそうだ。なるほど 雪 隠 などに這入って雨の
漏る壁を余念なく眺めていると、なかなかうまい
模様画が自然に出来ているぜ。君注意して写生し
て見給えきっと面白いものが出来るから」「また
だま
欺 すのだろう」「いえこれだけはたしかだよ。
実際奇警な語じゃないか、ダ・ヴィンチでもいい
そうな事だあね」「なるほど奇警には相違ないな」
と主人は半分降参をした。しかし彼はまだ雪隠で
写生はせぬようだ。

ごびっこ
車屋の黒はその後 跛 になった。彼の光沢あ
る毛は だんだん さ
漸々 色が褪めて抜けて来る。吾輩が

こはく^{めやに}
琥 珀 よりも美しいと評した彼の眼には 眼 脂
が一杯たまっている。ことに著るしく吾輩の注意
ひ
を惹いたのは彼の元気の消沈とその体格の悪く
なった事である。吾輩が例の ^{ちゃえん}茶 園 で彼に逢っ
た最後の日、どうだと云って尋ねたら「いたちの
さいごっぺ さかなや てんびんぼう
最 後 屁 と 肴 屋 の 天 秤 棒 には
こりごり
懲 々 だ」といった。

赤松の間に二三段の ^{こう}紅 を綴った ^{こうよう}紅 葉 は
むか
昔 しの夢のごとく散ってつくばいに近く代る
はなびら ^{こうはく} ^{さざんか}
代る 花 弁 をこぼした 紅 白 の 山 茶 花 も
残りなく落ち尽した。三間半の南向の椽側に冬の
^{こがらし}
日脚が早く傾いて 木 枯 の吹かない日はほと
^{まれ} ^{せば}
んど 稀 になってから吾輩の昼寝の時間も 狭
められたような気がする。

主人は毎日学校へ行く。帰ると書斎へ立て籠^{こも}
る。人が来ると、教師が厭^{いや}だ厭だという。水彩
画も滅多にかかない。タカジヤスターゼも機能が
ないといってやめてしまった。小供は感心に休ま
ないで幼稚園へかよう。帰ると唱歌を歌って、
まり毬^{まり}をついて、時々吾輩を尻尾^{しっぽ}でぶら下げる。

吾輩は御馳走^{ごちそう}も食わないから別段肥^{ふと}りも
しないが、まずまず健康で跛^{びっこ}にもならず
その日その日を暮している。鼠は決して取らない。

おさんは未^{いま}だに嫌^{きら}いである。名前はまだつけ
てくれないが、欲をいっても際限がないから
しょうがい生^{しょうがい}涯^涯この教師の^{うち}家で無名の猫で終るつ
もりだ。

吾輩は新年来多少有名になったので、猫ながら
ちょっと鼻が高く感ぜらるるのはありがたい。

元朝早々主人の ^{もと}許 ^{えはがき}へ一枚の絵端書が来た。
これは彼の交友某画家からの年始状であるが、上
部を赤、下部を ^{ふかみど}深緑りで塗って、その真中に
一の動物が ^{うずくま}蹲踞 っているところをパステル
で書いてある。主人は例の書齋でこの絵を、横か
ら見たり、^{たて} 豎 から眺めたりして、うまい色だな
という。すでに一応感服したものだから、もうや
めにするかと思うとやはり横から見たり、豎から
見たりしている。からだを ^ね 拗じ向けたり、手を延
ばして年寄が ^{さんぜそう}三世相 を見るようにしたり、ま

たは窓の方へむいて鼻の先まで持って来たりして
ている。早くやめてくれないと^{ひざ}膝が揺れて
けんのん
険 呑 でたまらない。ようやくの事で動揺があ
まり^{はげ}劇しくなくなったと思ったら、小さな声で
一体何をかいたのだろうと^い云う。主人は絵端書の
色には感服したが、かいてある動物の正体が分ら
ぬので、さっきから苦心をしたものと見える。そ
んな分らぬ絵端書かと思いながら、寝ていた眼を
上品に^{なか}半ば開いて、落ちつき払って見ると^{まぎ}紛
れもない、自分の肖像だ。主人のようにアンドレ
ア・デル・サルトを^き極め込んだものでもあるまい
が、画家だけに形体も色彩もちゃんと整って出来
ている。誰が見たって猫に相違ない。少し眼識の
あるものなら、猫の^{うち}中^{ほか}でも他の猫じゃない吾

輩である事が判然とわかるように立派に^か描いてある。このくらい明瞭な事を分らずにかくまで苦心するかと思うと、少し人間が気の毒になる。出来る事ならその絵が吾輩であると云う事を知らしてやりたい。吾輩であると云う事はよし分らないにしても、せめて猫であるという事だけは分らしてやりたい。しかし人間というものは^{とうてい}到底
吾輩 ^{ねこぞく}猫 属 の言語を解し得るくらいに天のめぐみ
恵 に浴しておらん動物であるから、残念ながらそのまましておいた。

ちょっと読者に断っておきたいが、元来人間が何ぞという猫々と、事もなげに軽侮の口調をもって吾輩を評価する癖があるははなはだよくない。人間の^{かす}糞 から牛と馬が出来て、牛と馬の糞

から猫が製造されたごとく考えるのは、自分の無
智に心付かんで高慢な顔をする教師などにはあ
りがちの事でもあろうが、はたから見てもあまり見
つともいい者じゃない。いくら猫だって、そう粗
末簡便には出来ぬ。よそ目には一列一体、平等無
差別、どの猫も自家固有の特色などはないよう
であるが、猫の社会に^{はい}這入って見るとなかなか複雑
なもので十人^{という}十色^{ことば}という人間界の語はそ
のままここにも応用が出来るのである。目付でも、
鼻付でも、毛並でも、足並でも、みんな違う。^{ひげ}髯
の張り具合から耳の立ち^{あんばい}按排^{しっぽ}、尻尾の垂れ
加減に至るまで同じものは一つもない。器量、不
器量、好き嫌い、^{すいぶすい}粹無^{かず}粹^つの数を悉くして千
差万別と云っても差支えないくらいである。その

ように判然たる区別が存しているにもかかわらず、人間の眼はただ向上とか何とかいって、空ばかり見ているものだから、吾輩の性質は無論
そうぼう

相貌の末を識別する事すら到底出来ぬのは
気の毒だ。同類相求むとは ^{むか}昔 ^{ことば}しからある語

だそうだがその通り、^{もちや}餅屋は餅屋、猫は猫で、
猫の事ならやはり猫でなくては分らぬ。いくら人
間が発達したってこればかりは駄目である。いわ

んや實際をいうと彼等が ^{みずか}自 ^{みずか}ら信じているご
とくえらくも何ともないのだからなおさらむず
かしい。またいわんや同情に乏しい吾輩の主人の
ごときは、相互を残りなく解するというが愛の第
一義であるということすら分らない男なのだから

ら仕方がない。彼は性の悪い ^{かき}牡蠣のごとく書斎に

吸い付いて、かつて外界に向って口を^{ひら}開いた事がない。それで自分だけはすこぶる達観したよう
な^{つらがまえ}面構をしているのはちょっとおかしい。
達観しない証拠には現に吾輩の肖像が眼の前にあるのに少しも悟った様子もなく今年は征露の
第二年目だから大方熊の^え画だろうなどと気の知れぬことをいってすましているのでもわかる。

吾輩が主人の^{ひざ}膝の上で眼をねむりながらか
く考えていると、やがて下女が第二の^{えはがき}絵端書を持
って来た。見ると活版で舶来の猫が四五^{ひき}疋ず
らりと行列してペンを握ったり書物を開いたり
勉強をしている。その内の一疋は席を離れて机の
角で西洋の猫じゃ猫じゃを^{おど}躍っている。その上
に日本の墨で「吾輩は猫である」と黒々とかいて、

右の^{わき}側^{おど}に書を読むや躍るや猫の^{はる}春^{ひとひ}一日
という俳句さえ^{したた}認められてある。これは主人
の旧門下生より来たので誰が見たって一見して
意味がわかるはずであるのに、^{うかつ}迂濶な主人はまだ
悟らないと見えて不思議そうに首を^{ひね}捻^{って}、
はてな今年は猫の年かなと^{ひとりごと}独言を言った。
吾輩がこれほど有名になったのを^ま未だ気が着か
ずにいると見える。

ところへ下女がまた第三の端書を持ってくる。
今度は絵端書ではない。恭賀新年とかいて、
かたわ^{きょうしゅく}らに乍^{ながら}恐縮かの猫へも^{よろ}宜
しく^{ごでんせい}御伝声^{ねがいあげ}奉^{たてまつり}願^{そろ}上^{とあ}候とあ
る。いかに^{うえん}迂遠な主人でもこう明らさまに書いて
あれば分るものと見えてようやく気が付いた

ようにフンと言いながら吾輩の顔を見た。その眼付が今までとは違って多少尊敬の意を含んでいるように思われた。今まで世間から存在を認められなかった主人が急に一個の^{しんめんぼく}新面目を施こしたのも、全く吾輩の御蔭だと思えばこのくらいの眼付は至当だろうと考える。

おりから門の^{こうし}格子がチリン、チリン、チリリリンと鳴る。大方来客であろう、来客なら下女が取次に出る。吾輩は^{さかなや}肴屋の梅公がくる時のほかは出ない事に^き極めているのだから、平気で、もとのごとく主人の膝に坐っておった。すると主人は高利貸にでも飛び込まれたように不安な顔付をして玄関の方を見る。何でも年賀の客を受けて酒の相手をするのが厭らしい。人間もこのくら

へんくつ
い 偏 屈 になれば申し分はない。そんなら早く
から外出でもすればよいのにそれほどの勇氣も
無い。いよいよ牡蠣の こんじょう
根 性 をあらわしてい
る。しばらくすると下女が来て かんげつ
寒 月 さんがお
いでになりましたという。この寒月という男はや
はり主人の旧門下生であったそうだが、今では学
校を卒業して、何でも主人より立派になっている
という はな
話 しである。この男がどういう訳か、よ
く主人の所へ遊びに来る。来ると自分を おも
恋 っている女が有りそうな、無さそうな、世の中が面白
そうな、つまらなそうな、 すご
凄 いような つや
艶 っぽいような文句ばかり並べては帰る。主人のような
しなびかけた人間を求めて、わざわざこんな話し
をしに来るのからして がてん
合 点 が行かぬが、あの

かきてき
牡蠣的 主人がそんな談話を聞いて時々
あいづち
相槌を打つのはなお面白い。

「しばらく御無沙汰をしました。実は去年の暮か
おおい
ら大に活動しているものですから、出よう出
ようと思っても、ついこの方角へ足が向かないの

で」と羽織の ^{ひも}紐をひねくりながら ^{なぞ}謎見たよう
な事をいう。「どっちの方角へ足が向くかね」と

主人は真面目な顔をして、^{くろもめん}黒木綿の紋付羽織

^{そでぐち}の袖口を引張る。この羽織は木綿でゆきが短
かい、下からべんべら者が左右へ五分くらいずつ
はみ出している。「エへへへ少し違った方角で」

と寒月君が笑う。見ると今日は前歯が一枚欠けて
いる。「君歯をどうかしたかね」と主人は問題を

転じた。「ええ実はある所で ^{しいたけ}椎茸を食いまし

てね」「何を食ったって?」「その、少し椎茸を食
ったんで。椎茸の^{かさ}傘を前歯で噛み切ろうとした
らぼろりと歯が欠けましたよ」「椎茸で前歯がか
けるなんざ、何だか^{じじいくさ}爺々臭いね。俳句にはな
るかも知れないが、恋にはならんようだな」と平
手で吾輩の頭を^{かる}軽く叩く。「ああその猫が例の
ですか、なかなか肥ってるじゃありませんか、そ
れなら車屋の黒にだって負けそうもありません
ね、立派なものだ」と寒月君は^{おお}大に吾輩を^ほ賞
める。「近頃^{だいぶ}大分大きくなったのさ」と自慢そ
うに頭をぽかぽかなぐる。賞められたのは得意で
あるが頭が少々痛い。「一昨夜もちょいと合奏会
をやりましてね」と寒月君はまた話しをもとへ戻
す。「どこで」「どこでもそりゃ御聞きにならんで

もよいでしょう。ヴァイオリンが三^{ちょう}挺とピアノの伴奏でなかなか面白かったです。ヴァイオリンも三挺くらいになると下手でも聞かれるもの

ですね。二人は女で^{わたし}私^ひがその中へまじりましたが、自分でも善く弾けたと思いました」「ふん、そしてその女というのは何者かね」と主人は

うらや^羨ましそうに問いかける。元来主人は平常こぼくかんがん^{枯木寒巖}のような顔付はしているものの、実のところは決して婦人に冷淡な方ではない、かつて西洋の或る小説を読んだら、その中にある一人物が出て来て、それが大抵の婦人には必ずちょ

っと^ほ惚れる。勘定をして見ると往来を通る婦人の七割弱には^{れんちゃく}恋着するということがふうしてき^{諷刺的}に書いてあったのを見て、これは真理

だと感心したくらいな男である。そんな浮気な男
なぜ
が何故牡蠣的生涯を送っているかと云うのは吾
輩猫などには ^{とうてい}到底 分らない。或人は失恋のため
だとも云うし、或人は胃弱のせいだとも云うし、
また或人は金がなくて臆病な ^{たち}性質だからだとも
云う。どっちにしたって明治の歴史に関係するほ
どな人物でもないのだから構わない。しかし寒月
君の ^{おんなづ}女 連 ^げれを羨まし気に尋ねた事だけは事
実である。寒月君は面白そうに ^{くちとり}口 取 の
かまぼこ
^{蒲 鉾}を箸で挟んで半分前歯で食い切った。吾
輩はまた欠けはせぬかと心配したが今度は大丈
夫であった。「なに二人とも去る所の令嬢ですよ、
御存じの ^{かた}方 じゃありません」と ^{よそよそ}余所余所しい返
事をする。「ナール」と主人は引張ったが「ほど」

を略して考えている。寒月君はもう善^いい加減な時
分だと思ったものか「どうも好い天気ですな、

おひま
御 閑 ならごいっしょに散歩でもしましょうか、
旅順が落ちたので市中は大変な景気ですよ」と

うな
促 がして見る。主人は旅順の陥落より

おんなづれ
女 連 の身元を聞きたいと云う顔で、しばらく
考え込んでいたがようやく決心をしたものと

見えて「それじゃ出るとしよう」と思い切って立

つ。やはり黒木綿の紋付羽織に、兄の紀^{かたみ}念とか

いう二十年来着古^{きふ}るした^{ゆうきつむぎ}結 城 紬 の綿入を
着たままである。いくら結城紬が丈夫だって、こ

う着つづけではたまらない。所々が薄くなって日
に透かして見ると裏からつぎを当てた針の目が見える。

見える。主人の服装には^{しわす}師 走 も正月もない。ふ

だん着も^{よそ}余所ゆきもない。出るときは^{ふところ}懐手
をしてぶらりと出る。ほかに着る物がないからか、
有っても面倒だから着換えないのか、吾輩には分
らぬ。ただしこれだけは失恋のためとも思われな
い。

^{ふたり}両人が出て行ったあとで、吾輩はちょっと失
敬して寒月君の食い切った^{かまぼこ}蒲鉾の残りを
^{ちょうだい}頂戴した。吾輩もこの頃では普通一般の猫
ではない。まず^{ももかわじょえん}桃川如燕以後の猫か、グ
レーの金魚を^{ぬす}偷んだ猫くらいの資格は充分あ
ると思う。車屋の黒などは^{もと}固より眼中にない。
蒲鉾の^{ひときれ}一切くらい頂戴したって人からかれ
これ云われる事もなかろう。それにこの人目を忍
んで^{かんしょく}間食をするという癖は、何も吾等猫族

に限った事ではない。うちの^{おさん}御三などはよく細君の留守中に餅菓子などを失敬しては頂戴し、頂戴しては失敬している。御三ばかりじゃない現に

上品な^{しつけ}仕付を受けつつあると細君からふいちょう^{こども}吹聴せられている小児ですらこの傾向がある。四五日前のことであったが、二人の小供が馬鹿に早くから眼を覚まして、まだ主人夫婦の

寝ている間に^{むか}対い合うて食卓に着いた。彼等は毎朝主人の食う^{パン}麵麩の幾分に、砂糖をつけて食うのが例であるが、この日はちょうど^{さとうつぼ}砂糖壺がたく^{さじ}卓の上に置かれて匙さえ添えてあった。いつものように砂糖を分配してくれるものがないので、大きい方がやがて壺の中から^{ひとさじ}一匙の砂糖をすくい出して自分の皿の上へあけた。すると小

さいのが姉のした通り同分量の砂糖を同方法で
自分の皿の上にあけた。しば 少 らく りょうにん 人 は
にら
睨み合っていたが、大きいのがまた匙をとって
一杯をわが皿の上に加えた。小さいのもすぐ匙を
とってわが分量を姉と同一にした。すると姉がま
た一杯すくった。妹も負けずに一杯を附加した。
姉がまた壺へ手を懸ける、妹がまた匙をとる。見
ているま 間に一杯一杯一杯と重なって、ついには
ふたり うずたか
両 人の皿には山盛の砂糖が 堆 くなって、
壺の中には一匙の砂糖も余っておらんようにな
ったとき、主人が寝ぼけ まなこ こす
眼 を 擦 りながら寢
室を出て来てせっかくしゃくい出した砂糖を元
のごとく壺の中へ入れてしまった。こんなところ
を見ると、人間は利己主義から割り出した公平と

いう念は猫より ^{まさ}優 っているかも知れぬが、^{ちえ}智慧
はかえって猫より劣っているようだ。そんなに山
盛にしないうちに早く ^な嘗めてしまえばいいにと
思ったが、例のごとく、吾輩の言う事などは通じ
ないのだから、^{おはち}気の毒ながら 御 櫃 の上から黙っ
て見物していた。

寒月君と出掛けた主人はどこをどう ^{ある}歩行いた
ものか、その晩遅く帰って来て、翌日食卓に ^つ就い
たのは九時頃であった。例の御櫃の上から拝見し
ていると、主人はだまって ^{ぞうに}雑 煮 を食っている。
代えては食い、代えては食う。餅の切れは小さい
が、何でも ^{むきれ}六 切 か ^{ななきれ}七 切 食って、最後の一切
れを椀の中へ残して、もうよそうと ^{はし}箸 を置いた。
他人がそんな ^{わがまま}我 儘 をすると、なかなか承知し

ないのであるが、主人の威光を振り廻わして得意
なる彼は、濁った汁の中に焦げ^こ 爛^{ただ} れた餅の死骸
を見て平気ですましている。妻君が 袋^{ふくろ} 戸^ど の奥
からタカジヤスターゼを出して卓の上に置くと、
主人は「それは利^きかないから飲まん」という。「で
もあなた 澱^{でん} 粉^{ぷん} 質^{しつ} のものには大変機能があ
るそうですから、召し上ったらいいでしょう」と
飲ませたがる。「澱粉だろうが何だろうが駄目だ
よ」と頑^{がん} 固^こ に出る。「あなたはほんとに厭^あきッ
ぽい」と細君が 独^{ひとり} 言^{ごと} のようにいう。「厭き
っぽいのではない薬が利かんのだ」「それだって
せんだってじゅうは大変によく利くよく利くと
おっしゃって毎日毎日上ったじゃありませんか」
「こないだうちは利いたのだよ、この頃は利かな

いのだよ」と対句のような返事をする。「そんなに飲んだり^や止めたりしちゃ、いくら機能のある薬でも利く^{きづか}氣遣いはありません、もう少ししんぼう

辛防がよくな^くっちゃあ胃弱なんぞはほかの病気たあ違って直らないわねえ」とお盆を持っ

て控えた^{おさん}御三を顧みる。「それは本当のところでございます。もう少し召し上ってご覧にならない

いと、とても^よ善い薬か悪い薬かわかりますまい」と御三は一も二もなく細君の肩を持つ。「何でも

いい、飲まんのだから飲まんのだ、女なんかに何がわかるものか、黙っている」「どうせ女ですわ」

と細君がタカジヤスターゼを主人の前へ突き付

けて是非^{つめばら}詰腹を切らせようとする。主人は何

にも云わず立って書齋へ^{はい}這入る。細君と御三は顔

を見合せてにやにやと笑う。こんなときに^{あと}後からくっ付いて行って^{ひざ}膝の上へ乗ると、大変な目に逢^あわされるから、そっと庭から廻って書斎の椽側へ^{あが}上^{すき}って障子の^{のぞ}隙から覗いて見ると、主人はエピクテタスとか云う人の本を^{ひら}披いて見ておった。もしそれが^{いつも}平常の通りわかるならちよつとえらいところがある。五六分するとその本^{たた}を叩き付けるように机の上へ^{ほう}抛り出す。大方そんな事だろうと思ひながらなお注意していると、今度は日記帳を出して^{しも}下のような事を書きつけた。

寒月と、根津、上野、^{いけ}池の^{はた}端、^{へん}神田辺を散歩。池の端の待合の前で芸者が裾模様の^{はるぎ}春着をきて羽根をついていた。^{いしょう}衣装は美しいが顔は

すこぶるまずい。何となくうちの猫に似ていた。

何も顔のまずい例に特に吾輩を出さなくって
も、よさそうなものだ。吾輩だって喜^{きた}多^た床^{どこ}へ行
って顔さえ剃^すって貰^{もら}やあ、そんなに人間と異^{ちが}
ったところはあるやしない。人間はこう自^{うぬ}惚^ぼれ
ているから困る。

ほうたん かど
宝 丹 の 角 を曲るとまた一人芸者が来た。こ
れは 背^{せい} のすらりとした撫^な肩^{でがた}の恰^{かっ}好^{こう}よ
く出来上った女で、着ている薄紫の衣^{きもの}服も素直
に着こなされて上品に見えた。白い歯を出して笑
いながら「源ちゃん 昨^{ゆうべ} 夕は——つい忙がしかっ
たもんだから」と云った。ただしその声は
たびがらす 旅 鴉のごとく皺^{しゃが}枯れておったので、せっ
かくの風 采^{ふうさい}も 大^{おお}に下落したように感ぜ

られたから、いわゆる源ちゃんなるもののいかな
る人なるかを振り向いて見るも面倒になって、
ふところで おなりみち
懐 手 のまま 御 成 道 へ出た。寒月は何と
なくそわそわしているごとく見えた。

人間の心理ほど解し難いものはない。この主人
の今の心は おこ 怒 っているのだか、浮かれているの
だか、または哲人の遺書に いちどう 一 道 の慰安を求め
つつあるのか、ちっとも分らない。世の中を冷笑
しているのか、世の中へ まじ 交 りたいのだか、くだ
らぬ事に かんしゃく 肝 癢 を起しているのか、 ぶつがい 物 外
に ちょうぜん 超 然 としているのだかさっぱり
けんとう 見 当 が付かぬ。猫などはそこへ行くと単純な
ものだ。食いたければ食い、寝たければ寝る、 おこ 怒
るときは一生懸命に怒り、泣くときは絶体絶命に

泣く。第一日記などという無用のものは決してつけない。つける必要がないからである。主人のように裏表のある人間は日記でも書いて世間に出されない自己の面目を暗室内に発揮する必要がある

あるかも知れないが、我等 ^{ねこぞく}猫 属 に至るとき
ぎょうじゅうざが こうしそうによう
行 住 坐 臥、行 屎 送 尿 ことごとく
真正の日記であるから、別段そんな面倒な ^{てかず}手 数
をして、 ^{おの}己 ^{しんめんもく}れの 真 面 目 を保存するには及
ばぬと思う。日記をつけるひまがあるなら椽側に
寝ているまでの事さ。

神田の某亭で ^{ばんさん}晩 餐 を食う。久し振りで正宗を
二三杯飲んだら、今朝は胃の具合が大変いい。胃
弱には晩酌が一番だと思う。タカジヤスターゼは
無論いかん。誰が何と云っても駄目だ。どうした

き
って利かないものは利かないのだ。

むやみ
無 暗 にタカジヤスターゼを攻撃する。独りで
喧嘩をしているようだ。今朝の肝癰がちょっとこ
こへ尾を出す。人間の日記の本色はこう云う へん 辺
に存するのも知れない。

あさめし
せんだって〇〇は 朝 飯 を廃すると胃がよく
なると云うたから 二 三 日 朝飯をやめて見たが
にさんち

腹がぐうぐう鳴るばかりで機能はない。△△は是非

こう もの た
香 の 物 を断てと忠告した。彼の説によるとす
べて胃病の源因は漬物にある。漬物さえ断てば胃

か
病の源を涸らす訳だから本復は疑なしという論
法であった。それから一週間ばかり香の物に 箸
はし
を触れなかったが別段の げん 験 も見えなかったか

ら近頃はまた食い出した。××に聞くとそれは
あんぷくもみりょうじ
按 腹 揉 療 治 に限る。ただし普通のでは
みながわりゅうも
ゆかぬ。皆 川 流 という古流な揉み方で一
二度やらせれば大抵の胃病は根治出来る。

やすいそっけん あんまじゅつ
安 井 息 軒 も大変この 按 摩 術 を愛し
ていた。さかもとりょうま
坂 本 竜 馬 のような豪傑でも時々
は治療をうけたと云うから、早速 上 根 岸 まで
出掛けて揉まして見た。ところが骨を揉まなけれ
なお てんとう
ば 癒 らぬとか、臓腑の位置を一度 顛 倒 しな
ければ根治がしにくいとかいって、それはそれは
も
残酷な揉み方をやる。後で身体が綿のようになっ
て こんすいびょう
昏 睡 病 にかかったような心持ちがし
たので、一度で閉口してやめにした。A君は是非
固形体を食うなという。それから、一日牛乳ばか

り飲んで暮して見たが、この時は腸の中でどぼりどぼりと音がして大水でも出たように思われて終夜眠れなかった。B氏は ^{おうかくまく}横 膈 膜 で呼吸して内臓を運動させれば自然と胃の働きが健全になる訳だから試しにやって御覧という。これも多少やったが何となく ^{ふくちゅう}腹 中 が不安で困る。それに時々思い出したように一心不乱にかかりはするものの五六分立つと忘れてしまう。忘れまいとすると横膈膜が気になって本を読む事も文章をかく事も出来ぬ。美学者の ^{めいてい}迷 亭 ^{てい}がこの 体を見て、^{さんけ}産 氣 のついた男じゃあるまいし ^よ止すがいいと冷かしたからこの頃は ^よ廃してしまった。C先生は ^{そば}蕎麦を食ったらよかろうと云うから、早速かけともりをかわるがわる食ったが、これは腹が

くだ
下るばかりで何等の功能もなかった。余は年来
の胃弱を直すために出来得る限りの方法を講じ
て見たがすべて駄目である。ただ昨^{ゆうべ}夜寒月と傾
けた三杯の正宗はたしかに利^{ききめ}目がある。これか
らは毎晩二三杯ずつ飲む事にしよう。

これも決して長く続く事はあるまい。主人の心
は吾輩の眼^{めだま}球のように間断なく変化している。
何をやっても永^{ながもち}持のしない男である。その上
日記の上で胃病をこんなに心配している癖に、表
向は^{おおい}大に瘦我慢をするからおかしい。せんだ
ってその友人で^{なにがし}某という学者が尋ねて来
て、一種の見地から、すべての病氣は父祖の罪惡
と自己の罪惡の結果にほかならないと云う議論
をした。大^{だいぶ}分研究したものと見えて、条理が

めいせき

明晰で秩序が整然として立派な説であった。

気の毒ながらうちの主人などは到底これを

はんばく

反駁するほどの頭脳も学問もないのである。

さい

しかし自分が胃病で苦しんでいる際だから、何

とかかんとか弁解をして自己の面目を保とうと

思った者と見えて、「君の説は面白いが、あのカー

ライルは胃弱だったぜ」とあたかもカーライル

が胃弱だから自分の胃弱も名誉であると云った

ような、見当違いの挨拶をした。すると友人は「カ

ーライルが胃弱だって、胃弱の病人が必ずカーラ

イルにはなれないさ」と極め付けたので主人は

もくねん

黙然としていた。かくのごとく虚栄心に富ん

でいるものの実際はやはり胃弱でない方がいい

と見えて、今夜から晩酌を始めるなどというのは

ちよつと滑稽だ。考えて見ると今朝^{ぞうに}雑煮をあん
なにたくさん食つたのも^{ゆうべ}昨夜寒月君と正宗を
ひっくり返した影響かも知れない。吾輩もちよつ
と雑煮が食つて見たくなった。

吾輩は猫ではあるが大抵のものは食う。車屋の
黒のように横丁の^{さかなや}肴屋まで遠征をする氣力
はないし、^{しんみち}新道の^{にげんきん}二絃琴の師匠の^{ところ}所の
^{みけ}三毛のように^{ぜいたく}贅沢は無論云える身分でない。
従つて存外^{きらい}嫌は少ない方だ。小供の食いこぼ
^{パン}した麵麩も食うし、餅菓子のもなめる。^{こう}香の
もの^{たくあん}物はすこぶるまずいが経験のため沢庵を
二切ばかりやった事がある。食つて見ると妙なも
ので、大抵のものは食える。あれは^{いや}嫌だ、これ
は嫌だと云うのは^{ぜいたく}贅沢な我儘で到底教師の

うち

家 にいる猫などの口にすべきところでない。主人の話によると^{フランス}仏蘭西にバルザックという小説家があったそうだ。この男が大の^{ぜいたく}贅 沢 屋で――もっともこれは口の贅沢屋ではない、小説家だけに文章の贅沢を尽したという事である。バルザックが或る日自分の書いている小説中の人間の名をつけようと思っていろいろつけて見たが、どうしても気に入らない。ところへ友人が遊びに来たのでいっしょに散歩に出掛けた。友人はもと^{なんに}固 より 何 も知らずに連れ出されたのであるが、バルザックは^か兼ねて自分の苦心している名^{めつけ}を目 付 ようという考えだから往来へ出ると何もしないで店先の看板ばかり見て^{ある}歩行いている。ところがやはり気に入った名がない。友人を連れ

むやみ
て無暗にあるく。友人は訳がわからずにくっ付
いて行く。彼等はついに朝から晩まで^{パリ}巴理を探
した。その帰りがけにバルザックはふとある裁縫
屋の看板が目についた。見るとその看板にマーカ
スという名がかいてある。バルザックは手を^う拍
て「これだこれだこれに限る。マーカスは好い名
じゃないか。マーカスの上へZという頭文字をつ
ける、すると申し^{ぶん}分のない名が出来る。Zでな
くてはいかん。Z. Marcus は実にうまい。どうも
自分で作った名はうまくつけたつもりでも何と
なく^{わざ}故意とらしいところがあって面白くない。よ
うやくの事で気に入った名が出来た」と友人の迷
惑はまるで忘れて、一人嬉しがったというが、小
説中の人間の名前をつけるに^{いちんちパリ}一日巴理を探

険しなくてはならぬようでは随分^{てすう}手数のかかる話だ。贅沢もこのくらい出来れば結構なものだが吾輩のように牡蠣^{かきてき}的主人を持つ身の上ではとてもそんな気は出ない。何でもいい、食べさえすれば、という気になるのも境遇のしからしむるところであろう。だから今^{ぞうに}雑煮が食いたくなつたのも決して贅沢の結果ではない、何でも食える時に食っておこうという考から、主人の食^{あま}い^剩した雑煮がもしや台所に残っていはいはすまいかと思ひ出したからである。……台所へ廻って見る。

今朝見た通りの餅が、今朝見た通りの色で椀の底に^{こうちゃく}膠着している。白状するが餅というものは今まで一^{ぺん}辺も口に入れた事がない。見ると

うまそうにもあるし、また少しは^{きび}気味がわるくもある。前足で上にかかっている菜^か葉を掻き寄せる。爪を見ると餅の^{うわかわ}上皮が引き掛ってねばねばする。^か嗅いで見ると釜の底の飯を^{おはち}御櫃へ移す時のような^{におい}香がする。食おうかな、やめようかな、とあたりを見廻す。幸か不幸か誰もいない。

おさん
御三は暮も春も同じような顔をして羽根をついている。小供は奥座敷で「何とおっしゃる兎さん」を歌っている。食うとすれば今だ。もしこの機をはずすと来年までは餅というものの味を知らずに暮してしまわねばならぬ。吾輩はこのせつな刹那に猫ながら一の真理を感得した。「得難き機会はずべての動物をして、好まざる事をも敢てせしむ」吾輩は実を云うとそんなに雑煮を食いた

くはないのである。否 椀^{わん}底^{てい}の様子を熟視すればするほど^{きび}気味が悪くなって、食うのが厭になったのである。この時もし御三でも勝手口を開けたなら、奥の小供の足音がこちらへ近付くのを聞き得たなら、吾輩は^{おしげ}惜気もなく椀を見棄てたろう、しかも雑煮の事は来年まで念頭に浮ばなかったろう。ところが誰も来ない、いくらしていても誰も来ない。早く食わぬか食わぬかと催促されるような心持がする。吾輩は椀の中を^{のぞ}覗き込みながら、早く誰か来てくれればいいと念じた。やはり誰も来てくれない。吾輩はとうとう雑煮を食わなければならぬ。最後にからだ全体の重量を椀の底へ落すようにして、あぐりと餅の角を^{いっすん}一寸ばかり食い込んだ。このくらい力を込めて食い付い

たのだから、大抵なものなら^か噛み切れる訳だが、
驚いた！　もうよかろうと思って齒を引こうと

すると引けない。もう一^{ぺん}辺噛み直そうとすると
動きがとれない。餅は魔物だと^{かん}疳づいた時は
すでに遅かった。沼へでも落ちた人が足を抜こう

^{あせ}と焦慮るたびにぶくぶく深く沈むように、噛めば
噛むほど口が重くなる、齒が動かなくなる。齒答
えはあるが、齒答えがあるだけでどうしても始末
をつける事が出来ない。美学者迷亭先生がかつて
吾輩の主人を評して君は割り切れない男だとい
った事があるが、なるほどうまい事をいったもの
だ。この餅も主人と同じようにどうしても割り切
れない。噛んでも噛んでも、三で十を割るごとく
じんみらいざいかた^ご
尽 未 来 際 方 の つ く 期 は ある ま い と 思 わ

れた。この^{はんもん}煩悶の際吾輩は覚えず第二の真理
に^{ほうちゃく}逢着した。「すべての動物は直覺的に事
物の適不適を予知す」真理はすでに二つまで発明

したが、餅がくっ付いているので^{ごう}毫も愉快を感じない。齒が餅の肉に吸収されて、抜けるように

痛い。早く食い切って逃げないと^{おさん}御三が来る。

小供の唱歌もやんだようだ、きっと台所へ^か馳け出して来るに相違ない。煩悶の^{きょくしっぽ}極尻尾をぐるぐる振って見たが何等の功能もない、耳を立てたり寝かしたりしたが駄目である。考えて見ると耳

と^{しっぽ}尻尾は餅と何等の關係もない。要するに振り損の、立て損の、寝かし損であると気が付いたからやめにした。ようやくの事これは前足の助けを借りて餅を払い落すに限ると考え付いた。まず右

の方をあげて口の周囲を^な撫で廻す。^な撫でたくらい
で割り切れる訳のものではない。今度は^{ひだ}左りの
方を^{のば}伸して口を中心として急劇に円を^{かく}劃し
て見る。そんな^{まじな}呪いで魔は落ちない。
しんぼう かんじん かわ がわ
辛 防 が 肝 心 だと思って左右 交 る 交
るに動かしたがやはり依然として齒は餅の中に
ぶら下っている。ええ面倒だと両足を一度に使う。

すると不思議な事にこの時だけは^{あとあし}後 足 二本
で立つ事が出来た。何だか猫でないような感じが
する。猫であろうが、あるまいがこうなった日に
ゃあ構うものか、何でも餅の魔が落ちるまでやる
べしという意気込みで無茶苦茶に顔中引^かっ搔き
廻す。前足の運動が猛烈なのでややともすると中
心を失って倒れかかる。倒れかかるたびに後足で

調子をとらなくてはならぬから、一つ所にいる訳
にも行かので、台所中あちら、こちらと飛んで
廻る。我ながらよくこんなに器用^たに起^たっていられた
ものだと思う。第三の真理^{ばくち げんぜん}が 驀^{ばくち} 地^{げんぜん}に 現^{げんぜん} 前^{げんぜん}
する。「危^{のぞ}きに 臨^{のぞ} めば平常なし 能^{あた} わざるところ
のものを為^なし能^{これ}う。之^{てんゆう} を 天^{てんゆう} 祐^{てんゆう} という」
さいわい^う 幸^う に天祐^うを享^うけたる吾輩^うが一生懸命餅の
魔と戦っていると、何だか足音がして奥より人が
来るような気^{けわい}合^{けわい}である。ここで人に来られては
大変だと思って、いよいよ躍^{やつき}起^{やつき}となって台所を
かけ廻る。足音はだんだん近付いてくる。ああ残
念だが天祐が少し足りない。とうとう小供に見付
けられた。「あら猫が御雑煮を食べて踊を踊って
いる」と大きな声をする。この声を第一に聞きつ

けたのが御三である。羽根も羽子板も打ち遣^やって
勝手から「あらまあ」と飛込んで来る。細君は
ちりめん
縮 緬 の紋付で「いやな猫ねえ」と仰せられる。
主人さえ書斎から出て来て「この馬鹿野郎」とい
った。面白い面白いと云うのは小供ばかりである。
そうしてみんな申し合せたようにげらげら笑っ
ている。腹は立つ、苦しくはある、踊はやめる訳
にゆかぬ、弱った。ようやく笑いがやみそうにな
ったら、五つになる女の子が「御かあ様、猫も随
分ね」といったので 狂^{きょう} 瀾^{らん} を既^き 倒^{とう} に何とか
するという勢でまた大変笑われた。人間の同情に
乏^{だいぶけん}しい実行も 大 分 見 聞 したが、この時ほど
うら
恨 めしく感じた事はなかった。ついに天祐もど
っかへ消え失^うせて、在来の通り四^よつ 這^{ばい} になって、

眼を白黒するの醜態を演ずるまでに閉口した。さすが見殺しにするのも気の毒と見えて「まあ餅をとってやれ」と主人が御三に命ずる。御三はもっと踊らせようじゃありませんかという眼付で細君を見る。細君は踊は見たいが、殺してまで見る気はないのでだまっている。「取ってやらんと死んでしまう、早くってやれ」と主人は再び下女

かえり おさん
を 顧 みる。御 三 は御馳走を半分食べかけて夢から起された時のように、気のない顔をして餅

をつかんでぐいと引く。 かんげつ
寒 月 君じゃないが前歯がみんな折れるかと思った。どうも痛い痛くないのって、餅の中へ堅く食い込んでいる歯を

なさ
情 け容赦もなく引張るのだからたまらない。吾輩が「すべての安楽は困苦を通過せざるべから

ず」^と云う第四の真理を経験して、けろけろとあたりを見廻した時には、家人はすでに奥座敷へはい^{はい}這入ってしまっておった。

こんな失敗をした時には内にいて御三なんぞに顔を見られるのも何となくばつが悪い。いっその事気を^か易えて新道の^{にげんきん}二絃琴の御師匠さんの^{とこ}所の三毛子でも訪問しようと台所から裏へ出た。三毛子はこの近辺で有名な^{びぼうか}美貌家である。吾輩は猫には相違ないが物の^{なさ}情けは一通り心得ている。うちで主人の^{にが}苦い顔を見たり、御三の^{けんつく}陰突を食って気分が^{すぐ}勝れん時は必ずこの異性の^{ほうゆう}朋友の^{もと}許を訪問していろいろな話をする。すると、いつの^ま間にか心が^{せいせい}晴々して今までの心配も苦労も何もかも忘れて、生れ変

ったような心持になる。女性の影響というものは
実に^{ばくだい}莫大なものだ。杉垣の隙から、いるかな
と思って見渡すと、三毛子は正月だから首輪の新

しいのをして行儀よく^{えんがわ}椽側に坐っている。そ
の背中の丸さ加減が言うに言われんほど美しい。

曲線の美を尽している。^{しっぽ}尻尾の曲がり加減、足
の折り具合、^{ものう}物憂げに耳をちょいちょい振る
けしき^{とうてい}景色なども到底形容が出来ん。ことによく

日の当る所に暖かそうに、^{ひん}品よく^{ひか}控えている
ものだから、身体は静肅端正の態度を有するにも

関らず、天鷲毛を^{びろうど}欺^{あざむ}くほどの^{なめ}滑らかな満
身の毛は春の光りを反射して風なきにむらむら
と微動するごとくに思われる。吾輩はしばらく

こうこつ^{なが}恍惚として眺めていたが、やがて我に帰る

と同時に、低い声で「三毛子さん三毛子さん」といいながら前足で招いた。三毛子は「あら先生」と椽を下りる。赤い首輪につけた鈴がちゃらちゃらと鳴る。おや正月になったら鈴までつけたな、どうもいい音だと感心している間に、吾輩のそばに来て「あら先生、おめでとう」と尾を左ひだりへ振る。吾等猫属間で御互に挨拶をするときには尾を棒のごとく立てて、それを左りへぐるりと廻すのである。町内で吾輩を先生と呼んでくれるのはこの三毛子ばかりである。吾輩は前回断わった通りまだ名はないのであるが、教師のうちにいるものだから三毛子だけは尊敬して先生先生とってくれる。吾輩も先生と云われてまんざら悪い心持ちもしないから、はいはいと返事をしてい

る。「やあおめでとう、大層立派に御化粧が出来
ましたね」「ええ去年の暮^{おししょう}御師匠^{おししょう}さんに買っ
て頂いたの、宜いでしょう」とちゃらちゃら鳴ら
して見せる。「なるほど善い^ね音ですな、吾輩など
は生れてから、そんな立派なものは見た事がない
ですよ」「あらいやだ、みんなぶら下げるのよ」
とまたちゃらちゃら鳴らす。「いい^ね音でしょう、
あたし嬉しいわ」とちゃらちゃらちゃらちゃら続
け様に鳴らす。「あなたのうちの御師匠さんは大
変あなたを可愛がっていると見えますね」と吾身
に引きくらべて^{あん}暗^{あん}に^{きんせん}欣羨^{きんせん}の意を洩らす。三
毛子は無邪気なものである「ほんとよ、まるで自
分の小供のようよ」とあどけなく笑う。猫だって
笑わないとは限らない。人間は自分よりほかに笑

えるものが無いように思っているのは間違いである。吾輩が笑うのは鼻の^{あな}孔を三角にしてのど^{ぼとけ}咽喉^{いんこう}を震動させて笑うのだから人間にはわからぬはずである。「一体あなたの^{ところ}所の御主人は何ですか」「あら御主人だって、妙なね。おし^{しょう}御師匠^{にげんきん}さんだわ。二絃琴の御師匠さんよ」「それは吾輩も知っていますがね。その御身分は何なんです。い^{むか}ずれ昔^{むか}しは立派な方なんでしょうな」「ええ」

君を待つ^ま間の姫小松……………

障子の内で御師匠さんが二絃琴を^ひ弾き出す。「^い宜い声でしょう」と三毛子は自慢する。「^い宜いよ
うだが、吾輩にはよくわからん。全体何という
のですか」「あれ？ あれは何とかってものよ。

御師匠さんはあれが大好きなの。……御師匠さんはあれで六十二よ。随分丈夫だわね」六十二で生きているくらいだから丈夫と云わねばなるまい。

吾輩は「はあ」と返事をした。少し間^まが抜けたようだが別に名答も出て来なかったから仕方がない。「あれでも、もとは身分が大変好かったんだって。いつでもそうおっしゃるの」「へえ元は何

だったんです」「何でも 天^{てん} 璋^{しょう} 院^{いん} 様^ん の
ごゆうひつ 御 祐 筆 の妹の御嫁に行った先^さきの御^おっか
さんの^{おい} 甥 の娘なんだって」「何ですって?」「あの
天璋院様の御祐筆の妹の御嫁にいった……」「な
るほど。少し待って下さい。天璋院様の妹の御祐
筆の……」「あらそうじゃないの、天璋院様の御
祐筆の妹の……」「よろしい分りました天璋院様

のでしょう」「ええ」「御祐筆のでしょう」「そう
よ」「御嫁に行った」「妹の御嫁に行ったですよ」

「そうそう間違った。妹の御嫁に入^いった先きの」
「御っかさんの甥の娘なんですとさ」「御っかさ
んの甥の娘なんですか」「ええ。分ったでしょう」

「いいえ。何だか混雑して要領を得ないですよ。

つま
詰^づるところ天璋院様の何になるんですか」「あ
なたもよっぽど分らないのね。だから天璋院様の
御祐筆の妹の御嫁に行った先きの御っかさんの

甥の娘なんだって、先^さっきから言ってるんじゃ
ありませんか」「それはすっかり分っているんで
すがね」「それが分りさえすればいいんでしょう」

「ええ」と仕方がないから降参をした。吾々は時

とすると理詰^{うそ}の虚言^つを吐かねばならぬ事がある。

障子の^{うち}中で二絃琴の^ね音がぱったりやむと、御師匠さんの声で「三毛や三毛や御飯だよ」と呼ぶ。

三毛子は嬉しそうに「あら御師匠さんが呼んでいらっしゃるから、^{あた}私し帰るわ、よくって？」わるいと云ったって仕方がない。「それじゃまた遊びにいらっしゃい」と鈴をちゃらちゃら鳴らして庭先までかけて行っただが急に戻って来て「あなた大変色が悪くってよ。どうかしやしくって」と

心配そうに問いかける。まさか^{ぞうに}雑煮を食って踊りを踊ったとも云われないから「何別段の事もあります、少し考え事をしたら頭痛がしてね。あなたと話しでもしたら直るだろうと思って実は出掛けて来たのですよ」「そう。御大事になさ

いまし。さようなら」少しは^{なご}名残り惜し気に見えた。これで雑煮の元気もさっぱりと回復した。い

い心持になった。帰りに例の^{ちゃえん}茶園を通り抜け

ようと思って^{しもばしら}霜^と柱の融けかかったのを踏

みつけながら^{けんになじ}建仁寺の^{くず}崩れから顔を出す

とまた車屋の黒が枯菊の上に^せ背を山にしてあくび

欠伸をしている。近頃は黒を見て恐怖するような吾輩ではないが、話しをされると面倒だから知

らぬ顔をして行き過ぎようとした。黒の性質とし

ひと^{おの}おの^{けいぶ}けいぶて他が己れを軽侮したと認むるや否や決

して黙っていない。「おい、名なしの^{ごんべえ}権兵衛、

近頃じゃ^{おつ}乙う高く留ってるじゃあねえか。いく

ら教師の飯を食ったって、そんな高慢ちきな^つ面ら

あするねえ。^{ひと}人つけ面白くもねえ」黒は吾輩の

有名になったのを、まだ知らんと見える。説明し

てやりたいが^{とうてい}到底分る奴ではないから、まず
一応の挨拶をして出来得る限り早く

ごめんこうむ^し
御免蒙るに若くはないと決心した。「いや

黒君おめでとう。^{あいかわらず}不^あ相^い変^わ元気がいいね」と

しっぽ
尻尾を立てて左へくるりと廻わす。黒は尻尾を
立てたぎり挨拶もしない。「何おめでてえ？ 正

月でおめでたけりゃ、御めえなんざあ年が年中お

めでてえ方だろう。気をつけろい、この吹い子^ふ_ごの
むこ^{づら}
向う面め」吹い子の向うづらという句は罵詈

の言語であるようだが、吾輩には了解が出来なか

った。「ちょっと^{うか}伺^かがうが吹い子の向うづらと
云うのはどう云う意味かね」「へん、手めえが

あくたい^{わけ}
悪^わ体^けをつかれてる癖に、その訳^{わけ}を聞きゃ世

話あねえ、だから正月野郎だって事よ」正月野郎は詩的であるが、その意味に至ると吹い子の何かよりも一層不明瞭な文句である。参考のためちよつと聞いておきたいが、聞いたって明瞭な答弁

は得られぬに^き極まっているから、^{めん}面と^{むか}対ったまま無言で立っておった。いささか手持無沙汰の

^{てい}体である。すると突然黒のうちの^{かみ}神さんが大きな声を張り揚げて「おや棚へ上げて置いた

^{しゃけ}鮭がない。大変だ。またあの黒の^{ちきしょう}畜生

が取ったんだよ。ほんとに憎らしい猫だっちゃありゃあしない。今に帰って来たら、どうするか見

^{どな}ていやがれ」と怒鳴る。^{はつはる}初^{のどか}春の長閑な空気

を無遠慮に震動させて、枝を鳴らさぬ君が^{みよ}御代をおおい^{ぞくりょう}ぞくりよう

大に俗了してしまう。黒は怒鳴るなら、

怒鳴りたいだけ怒鳴っていると云わぬばかりに
横着な顔をして、四角な^{あご}顎を前へ出しながら、
あれを聞いたかと合図をする。今までは黒との応
対で気がつかなかったが、見ると彼の足の下には
一切れ二銭三厘に相当する鮭の骨が泥だらけに
なって転がっている。「君^{あいかわらず}不^あ相^い変^くやってる
な」と今までの行き掛りは忘れて、つい感投詞を
奉呈した。黒はそのくらいな事ではなかなか機嫌
を直さない。「何がやってるでえ、この野郎。し
ゃけの一切や二切で相変らずたあ何だ。人を見^{みく}縊
びった事をいうねえ。^{はばか}憚りながら車屋の黒だ
あ」と腕まくりの代りに右の前足を逆かに肩の
へん^さか^さまで搔き上げた。「君が黒君だと云う事は、
始めから知ってるさ」「知ってるのに、相変らず

やってるたあ何だ。何だてえ事よ」と熱いのをしき頻りに吹き懸ける。人間ならむなぐら胸倉をとられて小突き廻されるところである。少々辟易して内心困った事になったなと思っていると、再び例の神さんの大声が聞える。「ちょいと西川さん、おい西川さんてば、用があるんだよこの人あ。牛肉を一^{きん}斤^{しん} すぐ持って来るんだよ。いいかい、分ったかい、牛肉の堅くないところを一斤だよ」と牛肉注文の音が^{しりん}四^{せき}隣^{ばく}の^{しん}寂^{ばん} 寞を破る。「へん年に一遍牛肉を^{あつら}誂^え えると思って、いやに大きな声を出しゃあがらあ。牛肉一斤が隣り近所へ自慢なんだから始末に終えねえ^{あま}阿魔だ」と黒はあざけ^{ふんば}嘲^り ながら四つ足を踏張る。吾輩は挨拶のしようもないから黙って見ている。「一斤くらい

じゃあ、承知が出来ねえんだが、仕方がねえ、いいから取るときゃ、今に食ってやらあ」と自分のために^{あつら}誂えたもののごとくいう。「今度は本当の御馳走だ。結構結構」と吾輩はなるべく彼を帰そうとする。「御めっちの知った事じゃねえ。

黙っている。うるせえや」と云いながら突然あとあし^{しも}ばしら^{くず}後足で霜柱の崩れた奴を吾輩の頭へばさりと^あ浴びせ掛ける。吾輩が驚ろいて、からだの泥を払っている^ま間に黒は垣根を^{くぐ}潜って、どこかへ姿を隠した。大方西川の^{ぎゅう}牛を^{ねらい}覘に行つたものであろう。

^{うち}家へ帰ると座敷の中が、いつになく春めいて主人の笑い声さえ陽気に聞える。はてなと明け放した椽側から^{あが}上つて主人の^{そば}傍へ寄って見る

と見馴れぬ客が来ている。頭を奇麗に分けて、

もめん　こくら　はかま
木綿の紋付の羽織に小倉の袴を着けて

しごく　しよせいてい
至極真面目そうな書生体の男である。主

人の手あぶりの角を見ると　しゅんけいぬ
春慶塗りの

まきたばこ　おちとうふうくん
巻煙草入れと並んで越智東風君を紹

そろ
介致候水島寒月という名刺があるので、この客
の名前も、寒月君の友人であるという事も知れた。

しゅかく
主客の対話は途中からであるから前後がよ
く分らんが、何でも吾輩が前回に紹介した美学者

迷亭君の事に関しているらしい。

「それで面白い趣向があるから是非いっしょに
来いとおっしゃるので」と客は落ちついて云う。

ひるめし
「何ですか、その西洋料理へ行って午飯を食
うのについて趣向があるというのですか」と主人

は茶を^つ續ぎ足して客の前へ押しやる。「さあ、その趣向というのが、その時は私にも分らなかったんですが、いずれあの^{かた}方の事ですから、何か面白い種があるのだろうと思ひまして……」「いっしょに行きましたか、なるほど」「ところが驚いたのです」主人はそれ見たかと云わぬばかりに、^{ひざ}膝の上に乘った吾輩の頭を^{たた}ぽかと叩く。少し痛い。「また馬鹿な茶番見たような事なんでしょう。あの男はあれが癖でね」と急にアンドレア・デル・サルト事件を思い出す。「へへー。君何か変わったものを食おうじゃないかとおっしゃるので」「何を食いました」「まず^{こんだて}献立を見ながらいろいろ料理についての御話しがありました」「^{あつ}誂らえない前にですか」「ええ」「それから」「そ

れから首を^{ひね}捻^{ひね}ってボーの方を御覧になって、どうも変ったものもないようだなおっしゃると

ボーは負けぬ^{かも}気で鴨^{かも}のロースか小牛のチャッ

プなどは^{いかが}如何^{いかが}ですと云うと、先生は、そんなつきなみ

月並^{つきなみ}を食いにわざわざここまで来やしないとおっしゃるんで、ボーは月並という意味が分らんものですから妙な顔をして黙っていましたよ」

「そうでしょう」「それから私の方を御向きにな

って、君^{フランス}仏蘭西^{イギリス}や英吉利^{イギリス}へ行くと随分てんめいちょう^{フランス}まんようちょう^{イギリス}

天^お明^お調^おや万^お葉^お調^おが食えるんだが、日本じゃどこへ行っただって版で^お圧したようで、

どうも西洋料理へ^{はい}這入る気がしないと云うよう

な^{だいきえん}大^{だいきえん}氣^{だいきえん}で――全体あ^{かた}の方^{かた}は洋行なすった事があるのですかな」「何迷亭が洋行なんかす

るもんですか、そりゃ金もあり、時もあり、行こうと思えばいつでも行かれるんですがね。大方これから行くつもりのところを、過去に見立てたしやれ洒落なんでしょう」と主人は自分ながらうまい事を言ったつもりで誘い出し笑をする。客はさまで感服した様子もない。「そうですか、私はまたいつの間に洋行なさったかと思って、つい真面目に拝聴していました。それに見て来たようになめくじのソップの御話や蛙^{かえる}のシチュの形容をなさるものですから」「そりゃ誰かに聞いたんでしょう、うそをつく事はなかなか名人ですからね」「どうもそうのようで」と花瓶^{かびん}の水仙を眺める。少しく残念の^{けしき}気色にも取られる。「じゃ趣向というのは、それなんですか」と主人が念を

押す。「いえそれはほんの冒頭なので、本論はこれからなのです」「ふーん」と主人は好奇的な感
投詞を挟む。^{はさ}「それから、とてもなめくじや蛙
は食おうっても食べやしないから、まあトチメン
ボーくらいなところで負けとく事にしようじゃ
ないか君と御相談なさるものですから、私はつい
何の気なしに、それがいいでしょう、といてしま
ったので」「へー、とちめんぼうは妙ですな」「え
え全く妙なのですが、先生があまり真面目だもの
ですから、つい気がつきませんでした」とあたか
も主人に向って^{そこつ} 僂^わ 忽を詫びているように見え
る。「それからどうしました」と主人は無頓着に
聞く。客の謝罪には一向同情を表しておらん。「そ
れからボイにおいトチメンボーを^{ににんまえ}二人前持

って来いというと、ボーがメンチボーですかと聞き直しましたが、先生はますます^{まじめ}真面目な^{かお}貌でメンチボーじゃないトチメンボーだと訂正されました」「なある。そのトチメンボーという料理は一体あるんですか」「さあ私も少しおかしいとは思いましたがいかにも先生が沈着であるし、その上あの通りの西洋通でいらっしゃるし、ことにその時は洋行なすったものと信じ切っていたものですから、私も口を添えてトチメンボーだトチメンボーだとボーに教えてやりました」「ボーはどうしました」「ボーがね、今考えると実にこっけい滑稽なんですがね、しばらく思案していただいてね、はなはだ御気の毒様ですが今日はトチメンボーは^{おあいにくさま}御生憎様でメンチボーなら

おふたりまえ
御二人前 すぐに出来ますと云うと、先生は非常に残念な様子で、それじゃせっかくここまで来

かい
た甲斐がない。どうかトチメンバーを都合して
わけ
食わせてもらう 訳 には行くまいかと、ボイに二十銭銀貨をやられると、ボイはそれではともかくも料理番と相談して参りましょうと奥へ行きましたよ」「大変トチメンバーが食いたかったと見

えますね」「しばらくしてボイが出て来て まこと 真

に御生憎で、 おあつらえ
御 誂 ならこしらえますが少々時間がかかります、と云うと迷亭先生は落ちついたもので、どうせ我々は正月でひまなんだから、

少し待って食って行こうじゃないかと云いながらポケットから葉巻を出してぷかりぷかり吹

かし始められたので、 わたくし 私 しも仕方がないから、

ふところ

懐から日本新聞を出して読み出しました、
するとボイはまた奥へ相談に行きましたよ」「い

てすう
やに手数が掛りますな」と主人は戦争の通信を

読むくらいの意気込で席をすす前める。「するとボ
イがまた出て来て、近頃はトチメンボの材料が

払底で亀屋へ行っても横浜の十五番へ行っても
買われませんから当分の間は御生憎様でと気の

毒そうに云うと、先生はそりゃ困ったな、せっか
く来たのになあと私の方を御覧になってしきり

に繰り返さるるので、私も黙っている訳にも参り

ませんから、どうもいかな遺憾ですな、遺憾きわま
ですなと調子を合せたのです」「ごもっともで」

と主人が賛成する。何がごもっともだか吾輩には
わからん。「するとボイも気の毒だと見えて、そ

の内材料が参りましたら、どうか願いますってんでしょう。先生が材料は何を使うかねと問われるとボイはへへへへと笑って返事をしないんです。材料は日本派の俳人だろうと先生が押し返して聞くとボイはへえさようで、それだものだから近頃は横浜へ行っても買われませんので、まことにお気の毒様と云いましたよ」「アハハハそれが落ちなんですか、こりゃ面白い」と主人はいつになく大きな声で笑う。^{ひざ}膝が揺れて吾輩は落ちかかる。主人はそれにも^{とんじゃく}頓着なく笑う。アンドレア・デル・サルトに^{かか}罹ったのは自分一人でないと言う事を知ったので急に愉快になったものと見える。「それから二人で表へ出ると、どうだ君うまく行ったろう、^{とちめんぼう}橡面坊を種に使った

ところが面白かろうと大得意なんです。敬服の至りですと云って御別れしたようなものの実はひるめし

午飯の時刻が延びたので大変空腹になって弱りましたよ」「それは御迷惑でしたろう」と主人は始めて同情を表する。これには吾輩も異存はない。しばらく話しが途切れて吾輩の^{のど}咽喉を鳴らす音が主客^{しゅかく}の耳に入る。

東風君は冷めたくなつた茶をぐっと飲み干して「実は今日参りましたのは、少々先生に御願があつて参つたので」と改まる。「はあ、何か御用で」と主人も負けずに^す済ます。「御承知の通り、文学美術が好きなものですから……」「結構で」

と油を^さ注す。「同志だけがよりましてせんだってから朗読会というのを組織しまして、毎月一回会

合してこの方面の研究をこれから続けたいつもりで、すでに第一回は去年の暮に開いたくらいであります」「ちょっと伺っておきますが、朗読会と云うと何か^{ふし}節奏でも附けて、^{しいか}詩歌^{るい}文章の類を読むように聞えますが、一体どんな風にやるんです」「まあ初めは古人の作からはじめて、
おいおい

追々 は同人の創作なんかもやるつもりです」
「古人の作というとは^{はくらくてん}白楽天^{びわこう}の琵琶行のようなものででもあるんですか」「いいえ」「
ぶそん ^{しゅんぷうばていきょく}蕪村の春風馬堤曲の種類ですか」
「いいえ」「それじゃ、どんなものをやったんで

す」「せんだって^{しんじゅうもの}は近松の心中物をやりました」「近松？ ^{じょうるり}あの浄瑠璃の近松ですか」
近松に二人はない。近松といえは戯曲家の近松に

きま
極 っている。それを聞き直す主人はよほど愚^ぐだ
と
思っている、主人は何にも分らずに吾輩の頭

ていねい な やぶにら ほ
を 町 寧 に撫でている。 藪 睨 みから惚れら
れたと自認している人間もある世の中だからこ

の
く
らいの 誤^ご 謬^{びゅう} は決して驚くに足らんと撫
でらるるがままにすましていた。「ええ」と答え

とうふうし うかが
て 東 風 子 は主人の顔色を 窺 う。「それじ

ゃ一人で朗読するのですか、または役割を極^きめて

やるんですか」「役を極めて 懸^{かけ} 合^{あい} でやって見
ました。その主意はなるべく作中の人物に同情を

持ってその性格を発揮するのを第一として、それ

に手真似や身振りを添えます。 せりふ
白 はなるべく

その時代の人を写し出すのが主で、御嬢さんでも

でっち
丁 稚 でも、その人物が出てきたようにやるんで

す」「じゃ、まあ芝居見たようなものじゃありませんか」「ええ ^{いしょう かきわり} 衣装と書割がないくらいなものですな」「失礼ながらうまく行きますか」

「まあ第一回としては成功した方だと思います」

「それでこの前やったとおっしゃる心中物というところ」
「その、船頭が御客を乗せて ^{よしわら} 芳原へ行く ^{ところ} 所なんで」「大変な幕をやりましたな」と教

師だけにちょっと首を ^{かたむ} 傾ける。鼻から吹き出した日の出の煙りが耳を ^{かす} 掠めて顔の横手へ廻る。「なあに、そんなに大変な事もないんです。

登場の人物は御客と、船頭と、^{おいらん なかい} 花魁と仲居 ^{やりて けんばん} と遣手と見番だけですから」と東風子は平気なものである。主人は花魁という名をきいてち

^{にが} っと苦い顔をしたが、仲居、遣手、見番とい

う術語について明瞭の智識がなかったと見えて
まず質問を呈出した。「仲居というのは^{しょうか}娼家^{かひ}
の下婢にあたるものですか」「まだよく研究は
して見ませんが仲居は茶屋の下女で、遣手という
のが^{おんなべや}女部^{じょやく}屋の助役見たようなものだろ
うと思います」東風子はさっき、その人物が出て
来るように^{こわいろ}仮色を使うと云った癖に遣手や
仲居の性格をよく解しておらんらしい。「なるほ
ど仲居は茶屋に^{れいぞく}隷属するもので、遣手は娼家^{きが}
に起臥する者ですね。次に見番と云うのは人間で
すかまたは一定の場所を^さ指すのですか、もし人間
とすれば男ですか女ですか」「見番は何でも男の
人間だと思います」「何を^{つかさ}司どっているん
ですか」「さあそこまではまだ調べが届いており

ません。その内調べて見ましょう」これで懸合を
やった日には ^{とんちんかん} 頓 珍 漢 なものが出来るだろ
うと吾輩は主人の顔をちょっと見上げた。主人は
存外真面目である。「それで朗読家は君のほかに
どんな人が加わったんですか」「いろいろおりま
した。花魁が法学士の K 君でしたが、^{くちひげ} 口 髯 を
生やして、女の甘ったるいせりふを^つ使かうのです
からちょっと妙でした。それにその花魁が^{しゃく} 癩
を起すところがあるので……」「朗読でも癩を起
さなくっちゃ、いけないんですか」と主人は心配
そうに尋ねる。「ええとにかく表情が大事ですか
ら」と東風子はどこまでも文芸家の気でいる。「う
まく癩が起りましたか」と主人は警句を吐く。「癩
だけは第一回には、ちと無理でした」と東風子も

警句を吐く。「ところで君は何の役割でした」と
主人が聞く。「^{わたく}私 しは船頭」「へー、君が船頭」
君にして船頭が^{つと}務まるものなら僕にも見番く
らいはやれると云ったような語気を^も洩らす。やが
て「船頭は無理でしたか」と御世辞のないところ
を打ち明ける。東風子は別段癪に障った様子もな
い。やはり沈着な口調で「その船頭でせっかくの
催しも^{りゅうとうだび}竜頭蛇尾に終わりました。実は会場の
隣りに女学生が四五人下宿していましてね、それ
がどうして聞いたものか、その日は朗読会がある
という事を、どこかで探知して会場の窓下へ来て
傍聴していたものと見えます。^{わたく}私 しは船頭の
^{こわいろ}仮色を使って、ようやく調子づいてこれなら
大丈夫と思って得意にやっていると、……つまり

身振りがあまり過ぎたのでしょうか、今まで耐^こらえていた女学生が一度にわっと笑いだしたものですから、驚ろいた事も驚ろいたし、極^{きま}りが悪^{わる}い事も悪^{わる}いし、それで腰を折られてから、どうしても^{あと}後^{あと}がつづけられないので、とうとうそれ^ぎ限りで散会しました」第一回としては成功だと称する朗読会がこれでは、失敗はどんなものだろうと想像すると笑わずにはいられない。覚え^えずのど^どぼとけ^け咽^お喉^{のど}仏^{ぶつ}がごろごろ鳴る。主人はいよいよ柔かに頭^なを撫^{なで}でてくれる。人を笑って可愛^{かわい}がられるのはありがたいが、いささか無気味なところもある。

「それは飛んだ事で」と主人は正月早々^{ちようじ}弔^{ちようじ}詞^しを述べている。「第二回からは、もっと奮発して盛大にやるつもりなので、今日出ましたのも全く

そのため、実は先生にも一つ御入会の上御尽力を仰ぎたいので」「僕にはとても癪なんか起せんよ」と消極的の主人はすぐに断わりかける。

「いえ、癪などは起していただくんでもよろしいので、ここに賛助員の名簿が」と云いながら紫の

風呂敷から大事そうに小^{こぎくばん}菊版の帳面を出す。

「これへどうか御署名の上御^{ごなついん}捺印をお願いたいので」と帳面を主人の^{ひざ}膝の前へ開いたまま置く。見ると現今知名な文学博士、文学士連中の名

が行儀よく^{せいぞろい}勢揃いをしている。「はあ賛成員にならん事ありませんが、どんな義務があるの

ですか」と牡蠣^{かきせんせい}先生は掛念^{けねん}の体^{てい}に見える。

「義務と申して別段是非願う事もないくらいで、ただ御名前だけを御記入下さって賛成の意さえ

おひょう　く　だ　さ
御　表　し　被　下　れ　ば　そ　れ　で　結　構　で　す」「そ　ん　な
は　い
ら　這　入　り　ま　す」と義　務　の　か　か　ら　ぬ　事　を　知　る　や　否　や
主　人　は　急　に　気　軽　に　な　る。責　任　さ　え　な　い　と　云　う　事　が
分　つ　て　お　れ　ば　謀　叛　の　連　判　状　へ　で　も　名　を　書　き　入
れ　ま　す　と　云　う　顔　付　を　す　る。　加　之　こ　う　知　名　の
学　者　が　名　前　を　列　ね　て　い　る　中　に　姓　名　だ　け　で　も　入
籍　さ　せ　る　の　は、今　ま　で　こ　ん　な　事　に　出　合　つ　た　事　の　な
い　主　人　に　と　つ　て　は　無　上　の　光　榮　で　あ　る　か　ら　返　事　の
勢　の　あ　る　の　も　無　理　は　な　い。「ち　ょ　つ　と　失　敬」と主
人　は　書　齋　へ　印　を　と　り　に　這　入　る。吾　輩　は　ぼ　た　り　と　畳
の　上　へ　落　ち　る。東　風　子　は　菓子　皿　の　中　の　カ　ス　テ　ラ　を
つ　ま　ん　で　一　口　に　頬　張　る。モ　ゴ　モ　ゴ　し　ば　ら　く　は　苦
し　そ　う　で　あ　る。吾　輩　は　今　朝　の　雑　煮　事　件　を　ち　ょ　つ
と　思　い　出　す。主　人　が　書　齋　か　ら　印　形　を　持　つ　て

出て来た時は、東風子の胃の中にカステラが落ち
ついた時であった。主人は菓子皿のカステラが
ひときれ
一切足りなくなった事には気が着かぬらし
い。もし気がつくとすれば第一に疑われるものは
吾輩であろう。

東風子が帰ってから、主人が書斎に入って机の
上を見ると、いつの間にか迷亭先生の手紙が来て
いる。

ぎょけいめでたくもうしおさめそろ
「新年の御慶目出度申納候。
……」

いつになく出が真面目だと主人が思う。迷亭先
生の手紙に真面目なのはほとんどないので、この
間などは「其後別に恋着せる婦人も
これなく、かたえんしょ
無之、いず方より艶書も参らず、まず

ま
先 ず 無 事 に 消 光 ^{まか} 罷 り 在 り ^{そろ} 候 間 、
は ば かり な が ら ^{くださるべくそろ}
^乍 憚 御 休 心 可 被 下 候 」 と 云 う

の が 来 た く ら い で あ る 。 そ れ に ^{くら} 較 べ る と こ の 年
始 状 は 例 外 に も 世 間 的 で あ る 。

「 一 寸 参 堂 仕 り ^{たく} 度 候 え ど も 、 大 兄 の 消 極 主 義 に
反 し て 、 出 来 得 る 限 り 積 極 的 方 針 を ^{もつ} 以 て 、 此 千
^{みぞう}
古 未 曾 有 の 新 年 を 迎 う る 計 画 故 、 毎 日 毎 日 目 の 廻
る 程 の 多 忙 、 御 推 察 願 上 ^{そろ} 候 …… 」

な る ほ ど あ の 男 の 事 だ か ら 正 月 は 遊 び 廻 る の
に 忙 が し い に 違 い な い と 、 主 人 は 腹 の 中 で 迷 亭 君
に 同 意 す る 。

「 昨 日 は 一 刻 の ひ ま を ^{ぬす} 偷 み 、 東 風 子 に ト チ メ ン
^{ごちそう} ^{そろ} ところ
ボー の 御 馳 走 を 致 さ ん と 存 じ 候 処 、
^{あいにく} ^た ^い かん
生 憎 材 料 払 底 の 為 め 其 意 を 果 さ ず 、 遺 憾 千

ぞんじそろ
万に 存 候 。……」

そろそろ例の通りになって来たと主人は無言
で微笑する。

「明日は某男爵^{かるたかい}の歌留多会、明後日は審美学協
会の新年宴会、其明日は鳥部教授歓迎会、其又明
日は……」

うるさいなと、主人は読みとばす。

「右の如く謡曲会、俳句会、短歌会、新体詩会等、
会の連発にて当分の間は、のべつ幕無しに出勤致

そろ やむをえず はいすう
し 候 為め、 不 得 己 賀状を以て 拝 趨 の礼
に か 易 え
そろだん あしからず ごゆうじょ
候 段 不 悪 御 宥 恕
くだされたくそろ
被 下 度 候 。……」

別段くるにも及ばんさと、主人は手紙に返事を

する。

「今度御光来の節は久し振りにて晚餐でも供し

たき
度 心得に御座 候 。 寒 厨 何の珍味も

これなくそうら

無 之 候 えども、せめてはトチメンボーで

もと只今より心掛 居 候 。……」

まだトチメンボーを振り廻している。失敬など
主人はちょっとむっとする。

しか
「然 しトチメンボーは近頃材料払底の為め、こ

とに依ると間に合い 兼 候 も計りがたきにつ

き、其節は くじゃく した
孔 雀 の 舌 でも御風味に入れ

もうすべくそろ

可 申 候 。……」

りょうてんびん
両 天 秤 をかけたなど主人は、あとが読
みたくなる。

「御承知の通り孔雀一羽につき、舌肉の分量は小

なか
指の半ばにも足らぬ程故 けんたん
健 啖 なる大兄の
いぶくろ み
胃 囊 を充たす為には……」

うそをつけと主人は打ち遣ったようにいう。

「是非共二三十羽の孔雀を捕獲致さざる べか
可 ら
ぞんじそろ
ずと 存 候 。然る所孔雀は動物園、浅草花屋
敷等には、ちらほら見受け候えども、普通の鳥屋
など には いっこう 見 当 り もうさず
不 申 、
くしんこのこと そろ
苦 心 此 事 に御座 候 。……」

独りで勝手に苦心しているのじゃないかと主

人は とう
毫 も感謝の意を表しない。

「此孔雀の舌の料理は おうせき ローマ
往 昔 羅 馬 全盛の
みぎ
砌 り、一時非常に流行致し そろ
候 ものにて、
ごうしゃ
豪 奢 風流の極度と平生よりひそかに
しょくし
食 指 を 動 か し おりそろ
居 候 次 第

ごりょうさつくださるべくそろ
御 諒 察 可 被 下 候。……」

何が御諒察だ、馬鹿なと主人はすこぶる冷淡である。

くだ
「降 って十六七世紀の頃迄は全欧を通じて孔雀は宴席に欠くべからざる好味と
あいなりおりそろ
相 成 居 候。レスター伯がエリザベス
じょうこう そろせつ
女 皇 をケニルウォースに招待致し 候 節
たし そろよう
も 慥 か孔雀を使用致し 候 様 記憶
いたしそろ えが そろ
致 候。有名なるレンブラントが 画 き 候
饗宴の図にも孔雀が尾を広げたる まま 儘 卓上に
よこた そろ
横 わり居り 候 ……」

孔雀の料理史をかくくらいなら、そんなに多忙でもなさそうだと不平をこぼす。

「とにかく近頃の如く御馳走の食べ続けにては、

さすがの小生も遠からぬうちに大兄の如く胃弱

あいな ひつじょう
と相成るは必定……」

大兄のごとくは余計だ。何も僕を胃弱の標準に
しなくても済むと主人はつぶやいた。

「歴史家の説によればローマじん
羅馬人は日に二度三
度も宴会を開きそろよし
候由。日に二度も三度も
ほうじょう しょくせん
方丈の食饌に就き候えば如何なる
健胃の人にて消化機能に不調をかも
醸すべく、従
って自然は大兄の如く……」

また大兄のごとくか、失敬な。

しか ぜいたく
「然るに贅沢と衛生とを両立せしめんと
研究を尽したる彼等は不相当に多量の滋味を
むさぼ
食ると同時に胃腸を常態に保持する必要
を認め、ここに一の秘法を案出致しそろ
候……」

はてねと主人は急に熱心になる。

「彼等は食後必ず入浴^{いたしそろ}致^候。入浴後一種の方法によりて^{よくぜん}浴^{えんか}前に^{えんか}嚥下せるものごと^{おうと}と^そ悉く嘔吐し、胃内を掃除致し^候。胃内廓清^{いのち}の功を奏したる^つ後又食卓に就き、飽く迄珍味を^あ風^{ふうこう}好し、風好し^{おわ}了れば又湯に入りて^{これ}之を吐^{としゅつ}出^{いたしそろ}致^候。かくの如くすれば好物は^{むさ}貪^{そうろう}ぼり次第貪り^候も^{ごう}毫も内臓の諸機関に障害を生ぜず、一挙兩得とは此等の事を^{もうすべき}可^可申^可かと愚考^{いたしそろ}いたし^致候^候……」

なるほど一挙兩得に相違ない。主人は^{うらや}羨^まましそうな顔をする。

「廿世紀の^{こんにち}今日^{ひんぱん}交通の頻^頻繁、宴会の増加

は申す迄もなく、軍国多事征露の第二年とも相成

そろおりから

候 折 柄、吾人戦勝国の国民は、是非共

ローマ なら

羅馬人に 倣 って此入浴嘔吐の術を研究せざ

るべからざる機会に到着致し しろ 候 事と自信

いたししろ さ せっかく

致 候。左もなくば 切 角 の大国民も近き

将来に於て ことごと 悉 く大兄の如く胃病患者と相

成る事と ひと かに心痛 罷 りあり しろ ……」

また大兄のごとくか、 しゃく さわ 癩 に 障 る男だと主人が思う。

「此際吾人西洋の事情に通ずる者が古史伝説を
考究し、既に廃絶せる秘法を発見し、之を明治の

社会に応用致し候わば 所謂 いわばわざわい 禍 を 未 萌

に防ぐの 功 徳 にも相成り平素 いたらく 逸 楽 を

ほしいまま ぞろ 擅 に致し 候 御恩返も相立ち

もうすべく ぞんじそろ
可 申 と 存 候 ……」

何だか妙だなと首を^{ひね}捻る。

「^{よっ}依て此間^{じゅう}中よりギボン、モンセン、スミ
ス等諸家の著述を^{しょうりょう}渉^お猟^り致し^{そうら}居候
えども^{いま}未だに^{たんしょ}発見の^{みいだ}端緒をも^{ぞんじそろ}見出し得
ざるは残念の至に^{ぞんじそろ}存候。然し御存じの如く
小生は一度思い立ち^{そろこと}候事は成功するまでは
決して中絶^{つかまつ}仕らざる性質に候えば
おうとほう^{そろ}嘔吐方を再興致し候も遠からぬうちと信
じ居り^{そろ}候次第。右は発見次第御報道
つかまつるべく^{そろ}可仕候につき、左様御承知
くださるべく^{そろ}可被下候。就てはさきに^{そろ}申上候トチ
メンバー及び孔雀の舌の御馳走も^{あいなるべく}可相成
は右発見後に^{たくさ}致し度、左すれば小生の都合は

もちろん
勿論、既に胃弱に悩み居らるる大兄の為にも
ごべんぎ　ぞんじそろ
御便宜かと存候草々不備」

何だとうとう^{かつ}担がれたのか、あまり書き方が
真面目なものだからつい^{しまい}仕舞まで本気にして
読んでいた。新年^{そうそう}匆々こんな^{いたずら}悪戯をやる
迷亭はよっぽどひま人だなあと主人は笑いなが
ら云った。

それから四五日は別段の事もなく過ぎ去った。
はくじ　しほ　あおじく
白磁の水仙がだんだん凋んで、青軸の梅
びん
が瓶ながらだんだん開きかかるのを眺め暮ら
してばかりいてもつまらんとって、
いちりょうど　あ
一両度三毛子を訪問して見たが逢われな
い。最初は留守だと思ったが、二返^{へんめ}目には病氣
で寝ているという事が知れた。障子の中で例の御

師匠さんと下女が話しをしているのを
ちょうずばち
手 水 鉢 の葉蘭の影に隠れて聞いていると
こうであった。

「三毛は御飯をたべるかい」「いいえ今朝からま
なん おこた
だ 何 にも食べません、あったかにして御火燵に
寝かしておきました」何だか猫らしくない。まる
で人間の取扱を受けている。

一方では自分の境遇と比べて見て うらや
羨 まし
くもあるが、一方では おの
己 が愛している猫がかく
まで厚遇を受けていると思えば嬉しくもある。

「どうも困るね、御飯をたべないと、からだ
身体 が疲
れるばかりだからね」「そうでございますとも、
私共でさえ一日 ごぜん
御 をいただかないと、明くる
日はとても働けませんもの」

下女は自分より猫の方が上等な動物であるよ
うな返事をする。実際この^{うち}家では下女より猫の
方が大切かも知れない。

「御医者様へ連れて行ったのかい」「ええ、あの
御医者はよっぽど妙でございますよ。私が三毛を
だいて診察場へ行くと、^{かぜ}風邪でも引いたのかって
私の^{みゃく}脈をとろうとするんでしょう。いえ病人
は私ではございません。これですって三毛を膝の
上へ直したら、にやにや笑いながら、猫の病気は
わしにも分らん、^{ほう}抛っておいたら今に^{なお}癒るだ
ろうってんですもの、あんまり^{ひど}苛いじゃござい
ませんか。腹が立ったから、それじゃ見ていただ
かなくってもようございますこれでも大事の猫
なんですって、三毛を^{ふところ}懷へ入れてさっさと

帰って参りました」「ほんにねえ」

「ほんにねえ」は ^{とうてい}到底 吾輩のうちなどで聞かれる言葉ではない。やはり ^{てんしょういん}天 璋 院 様の何とかの何とかでなくては使えない、はなはだ ^が雅であると感心した。

「何だかしくしく云うようだが……」「ええきつ ^{のど}と風邪を引いて咽喉が痛むんでございますよ。風邪を引くと、どなたでも ^{おせき}御 咳 が出ますからね……」

天璋院様の何とかの何とかの下女だけに馬鹿 ^{ていねい}町 寧 な言葉を使う。

「それに近頃は肺病とか云うものが出来てのう」

「ほんとにこの頃のように肺病だのペストだの ^ふって新しい病気ばかり殖えた日にゃ油断も隙も

なりやしませんのでございますよ」「旧幕時代に
無い者に^{ろく}碌な者はないから御前も気をつけな
いといかんよ」「そうでございましょうかねえ」

下女は^{おおい}大に感動している。

「^{かぜ}風邪を引くといってもあまり出あるきもしな
いようだったに……」「いえね、あなた、それが
近頃は悪い友達が出来ましてね」

下女は国事の秘密でも語る時のように大得意
である。

「悪い友達?」「ええあの表通りの教師の^{とこ}所に
いる薄ぎたない^{おねこ}雄猫でございますよ」「教師と
云うのは、あの毎朝無作法な声を出す人かえ」「え
え顔を洗うたんびに^{がちょう}鵜^し鳥が絞め殺されるよ
うな声を出す人でござんす」

鵝鳥が絞め殺されるような声はうまい形容で

ある。吾輩の主人は毎朝風呂場で^{うがい}含嗽をやる時、
^{ようじ}楊枝で^{のど}咽喉をつっ突いて妙な声を無遠慮に出
す癖がある。機嫌の悪い時はやけにがあがあやる、
機嫌の好い時は元気づいてなおがあがあやる。つ
まり機嫌のいい時も悪い時も休みなく勢よくが
あがあやる。細君の話しではここへ引越す前まで
はこんな癖はなかったそうだが、ある時ふとやり
出してから^{きょう}今日まで一日もやめた事がないと
いう。ちょっと厄介な癖であるが、なぜこんな事
を根気よく続けているのか吾等猫などには
^{どうてい}到底想像もつかん。それもまず善いとして
「薄ぎたない猫」とは随分酷評をやるものだな
お耳を立ててあとを聞く。

「あんな声を出して何の^{まじな}呪いになるか知ら
ん。御^ご維^い新^{しん}前^{まえ}は中^{ちゅう}間^{げん}でも草履^{ぞうり}取り
でも相応の作法は心得たもので、屋敷町などで、
あんな顔の洗い方をするものは一人もおらなか
ったよ」「そうでございましょうともねえ」

下女は^{むやみ}無暗に感服しては、無暗にねえを使用
する。

「あんな主人を持っている猫だから、どうせ
のらねこ^たた野良猫さ、今度来たら少し叩いておやり」「叩
いてやりますとも、三毛の病気になったのも全く
あいつの御蔭に相違ございませんもの、きっと
かたき^き讐をとってやります」

飛んだ冤^{えんざい}罪を^{こうむ}蒙ったものだ。こいつは
滅^{めつ}多^ちに近か寄れないと三毛子にはとうとう逢

わずに帰った。

帰って見ると主人は書斎の^{うち}中で何か
ちんぎん^{てい}と^{にげんきん}
沈吟の体で筆を執っている。二絃琴の
御師匠さんの^{ところ}所で聞いた評判を話したら、さぞ
おこ
怒るだろうが、知らぬが仏とやらで、うんうん
云いながら神聖な詩人になりすましている。

ところへ当分多忙で行かれないと云って、わざ
わざ年始状をよこした迷亭君が^{ひょうぜん}飄然とや
って来る。「何か新体詩でも作っているのかね。
面白いのが出来たら見せたまえ」と云う。「うん、
ちょっとうまい文章だと思ったから今翻訳して
見ようと思ってね」と主人は重たそうに口を開く。

「文章？^だ誰れの文章だい」「誰れのか分らんよ」
「無名氏か、無名氏の作にも随分善いのあるか

らなかなか馬鹿に出来ない。全体どこにあったのか」と問う。「第二読本」と主人は落ちつきはらって答える。「第二読本？ 第二読本がどうしたんだ」「僕の翻訳している名文と云うのは第二読本の^{うち}中にあると云う事さ」「^{じょうだん}冗談じゃない。孔雀の舌の^{かたき}讐を^{きわ}際どいところで討とうと云う寸法なんだろう」「僕は君のような法螺吹きとは違うさ」と^{くちひげ}口髯を^{ひね}捻る。泰然たるものだ。「^{むか}昔しある人が山陽に、先生近頃名文はござらぬかといったら、山陽が^{まご}馬子の書いた借金の催促状を示して近来の名文はまずこれでしょうと云ったという話があるから、君の審美眼も存外たしかかも知れん。どれ読んで見給え、僕が批評してやるから」と迷亭先生は審美眼の^{ほんけ}本家の

ような事を云う。主人は禅坊主が^{だいとうこくし}大燈国師

の^{ゆいかい}遺誠を読むような声を出して読み始める。

「^{きょじん いんりょく}巨人、引力」「何だいその巨人引力と

云うのは」「巨人引力と云う題さ」「妙な題だな、

僕には意味がわからんね」「引力と云う名を持つ

ている巨人というつもりさ」「少し無理なつもり

だが表題だからまず負けておくとしよう。それか

ら^{そうそう}早々本文を読むさ、君は声が善いからなか

なか面白い」「^ま雑ぜかえしてはいかんよ」と^{あらか}予

じめ念を押してまた読み始める。

ケートは窓から^{そと}外面を^{なが}眺める。^{しょうに}小児が^{たま}球

を投げて遊んでいる。彼等は高く球を空中に

^{なげう}擲

つ。球は上へ上へと**のぼる**。しばらくする

と落ちて来る。彼等はまた球を高く擲つ。再び三

度。擲つたびに球は落ちてくる。なぜ落ちるのか、なぜ上へ上へとのみのぼらぬかとケートが聞く。

「巨人が地中に住む故に」と母が答える。「彼は巨人引力である。彼は強い。彼は万物を ^{おの}己れの方へと引く。彼は家屋を地上に引く。引かねば飛んでしまう。小児も飛んでしまう。葉が落ちるのを見たろう。あれは巨人引力が呼ぶのである。本を落す事がある。巨人引力が来いというからである。球が空にあがる。巨人引力は呼ぶ。呼ぶと落ちてくる」

「それぎりかい」「むむ、^{うま}甘いじゃないか」「いやこれは恐れ入った。飛んだところでトチメンボ一の御返礼に ^{あずか}預った」「御返礼でもなんでもないさ、実際うまいから訳して見たのさ、君はそ

う思わんかね」と金縁の眼鏡の奥を見る。「どう
も驚ろいたね。君にしてこの^{ぎりょう}伎倆あらんとは、
全く^{こんど}此度という^{こんど}今度は^{かつ}担がれたよ、降参降
参」と一人で承知して一人で^{しゃべ}喋舌る。主人には
^{いっこう}一向通じない。「何も君を降参させる考えは
ないさ。ただ面白い文章だと思ったから訳して見
たばかりさ」「いや実に面白い。そう来なくっち
や本ものでない。^{すご}凄いものだ。恐縮だ」「そん
なに恐縮するには及ばん。僕も近頃は水彩画をや
めたから、その代りに文章でもやろうと思って
ね」「どうして
^{えんきんむさべつこくびやくびょうどう}遠近無差別黒白平等の水彩
画の比じゃない。感服の至りだよ」「そうほめて
くれると僕も乗り気になる」と主人はあくまでも

かんちが
瘡 違 いをしている。

かんげつ
ところへ 寒 月 君が先日は失礼しましたと
はい
這入って来る。「いや失敬。今大変な名文を拝聴
してトチメンボーの亡魂を たいじ
退 治 られたところ
で」と迷亭先生は訳のわからぬ事をほのめかす。

「はあ、そうですか」とこれも訳の分らぬ挨拶を
する。主人だけは 左のみ浮かれた けしき
気 色 もない。

おちとうふう
「先日は君の紹介で 越 智 東 風 と云う人が来
たよ」「ああ かが 上 りましたか、あの おちこち
越智東風と云
う男は至って正直な男ですが少し変っているところがあるので、あるいは御迷惑かと思いましたが、是非紹介してくれというものですから……」

かが
「別に迷惑の事もないがね……」「こちらへ 上
っても自分の姓名のことについて何か弁じて行

きゃしませんか」「いいえ、そんな話もなかった
ようだ」「そうですか、どこへ行っても初対面の

人には自分の名前の ^{こうしゃく}講 釈 をするのが癖で
してね」「どんな講釈をするんだい」と事あれか

しと待ち構えた迷亭君は口を入れる。「あの ^{こち}東風

と云うのを ^{おん}音 で読まれると大変気にするので」

「はてね」と迷亭先生は ^{きんからかわ}金 唐 皮 の
たばこいれ ^{わたく}私 しの
煙 草 入 から煙草をつまみ出す。「

名は ^{おちとうふう}越 智 東 風 ではありません、^{おち}越智こちです

と必ず断りますよ」「妙だね」と ^{くもい}雲 井 を腹の底

まで ^の呑み込む。「それが全く文学熱から来たので、

こちと読むと遠近と云う ^{せいご}成 語 になる、のみなら

ずその姓名が ^{いん}韻 を踏んでいると云うのが得意

なんです。それだから ^{こち おん}東風を 音 で読むと僕がせ

っかくの苦心を人が買ってくれないといって不平を云うのです」「こりゃなるほど変ってる」と迷亭先生は図に乗って腹の底から雲井を鼻の
あな
孔 まで吐き返す。途中で煙が 戸 ^{とまど} 迷いをして
のど
咽喉の出口へ引きかかる。先生は ^{きせる} 煙 管 を握って
ごほんごほんと ^{むせ} 咽 び返る。「先日来た時は朗読
会で船頭になって女学生に笑われたといってい
たよ」と主人は笑いながら云う。「うむそれぞれ」

と迷亭先生が ^{きせる} 煙 管 で ^{ひざがしら} 膝 頭 を ^{たた} 叩 く。吾輩
^{けんのん} は 險 呑 になったから少し ^{そば} 傍 を離れる。「そ
の朗読会さ。せんだってトチメンボーを御馳走し
た時にね。その話しが出たよ。何でも第二回には
知名の文士を招待して大会をやるつもりだから、
先生にも是非御臨席を願いたって。それから僕

が今度も近松の世話物をやるつもりかいと聞く

と、いえこの次はずっと新しい者を^{えら}撰んで
こんじきやしや
金 色 夜 叉 にしましたと云うから、君にゃ何

の役が当てるかと聞いたら私は^{おみや}御 宮 ですと
いったのさ。^{とうふう}東 風 の御宮は面白かろう。僕は

是非出席して^{かつさい}喝 采 しようと思ってるよ」「面
白いでしょう」と寒月君が妙な笑い方をする。「し

かしあの男はどこまでも誠実で軽薄なところが
ないから好い。迷亭などとは大違いだ」と主人は

アンドレア・デル・サルと^{くじゃく}孔 雀 の舌とトチ

メンボーの^{かたき}復 讐 を一度にとる。迷亭君は気にも
留めない様子で「どうせ僕などは^{ぎょうとく}行 徳 の
まないた

俎 と云う格だからなあ」と笑う。「まずそ
んなところだろう」と主人が云う。実は行徳の俎

と云う語を主人は ^{かい}解さないのであるが、さすが
永年教師をして ^{ごまか}胡魔化しつけているものだから、
こんな時には教場の経験を社交上にも応用する
のである。「行徳の俎というのは何の事ですか」

と寒月が ^{しんそつ}真率に聞く。主人は床の方を見て
「あの水仙は暮に僕が風呂の帰りがけに買って

来て ^さ挿したのだが、よく持つじゃないか」と行徳
の俎を無理にねじ伏せる。「暮といえば、去年の
暮に僕は実に不思議な経験をしたよ」と迷亭が

きせる ^{だいかぐら}煙管を大神楽のごとく指の ^{さき}尖で廻わす。

「どんな経験か、聞かし ^{たま}玉え」と主人は行徳の
俎を遠く ^{うしろ}後に見捨てた気で、ほっと息をつく。

迷亭先生の不思議な経験というのを聞くと左の ^さ
ごとくである。

「たしか暮の二十七日と記憶しているがね。例の
とうふう
東 風 から参堂の上是非文芸上の御高話を伺
いたいから御在宿を願うと云う先^さき^ぶ触れがあつ
たので、朝から心待ちに待っていると先生なかなか
来ないやね。昼飯を食ってストーブの前でバリ
ー・ペーンの^{こっけいもの}滑稽物を読んでいるところへ
静岡の母から手紙が来たから見ると、年寄だけに
いつまでも僕を小供のように思ってね。寒中は夜
間外出をするなとか、冷水浴もいいがストーブを
た^{へや} 焚いて^{あたた} 室を^{かぜ} 暖かにしてやらないと風邪を
引くとかいろいろの注意があるのさ。なるほど親
はありがたいものだ、他人ではとてもこうはいか
ないと、^{のんき}呑気な僕もその時だけは^{おおい}大に感動
した。それにつけても、こんなにのらくらしてい

もったい
ては 勿 体 ない。何か大著述でもして家名を揚
げなくてはならん。母の生きているうちに天下を
して明治の文壇に迷亭先生あるを知らしめたい
と云う気になった。それからなお読んで行くと御

前なんぞは実に仕合せ者だ。^{ロシア}露西亞と戦争が始ま
って若い人達は大変な^{しんく}辛 苦^{みくに}をして 御 国 のた
めに働らいているのに^{せっきしわす}節 季 師 走 でもお正月
のように気楽に遊んでいると書いてある。――僕
はこれでも母の思ってるように遊んじゃいない

やね――そのあとへ^{もっ}以 て来て、僕の小学校時代
の^{ほうゆう}朋 友 で今度の戦争に出て死んだり負傷し
たものの名前が列举してあるのさ。その名前を
一々読んだ時には何だか世の中が^{あじき}味 気 なくな
って人間もつまらないと云う気が起ったよ。一番

しまい　　わた　　はつはる
仕舞にね。私しも取る年に候えば初春の
おぞうに
御雑煮を祝い候も今度限りかと……何だか心
細い事が書いてあるんで、なおのこと気がくさく

さしてしまって早く　とうふう　東風が来れば好いと思
ったが、先生どうしても来ない。そのうちとうと
う晩飯になったから、母へ返事でも書こうと思っ
てちょっと十二三行かいた。母の手紙は六尺以上
もあるのだが僕にはとてもそんな芸は出来んか
ら、いつでも十行内外で御免　こうむ　蒙る事に極めて
あるのさ。すると一日動かずにおったものだから、
胃の具合が妙で苦しい。東風が来たら待たせてお
けと云う気になって、郵便を入れながら散歩に出
掛けたと思い給え。いつになく富士見町の方へは
足が向かないで　どてさんばんちょう　土手三番町の方へ我れ

知らず出てしまった。ちょうどその晩は少し曇って、から風が^{おほり}御^{むこ}濠の向うから吹き付ける、非常に寒い。^{かぐらざか}神楽坂の方から汽車がヒューと鳴って土手下を通り過ぎる。大変^{さみ}淋しい感じがする。暮、戦死、老衰、無常迅速などと云う奴が頭の中をぐるぐる^{かめぐ}馳け廻る。よく人が首を^{くく}縊ると云うがこんな時にふと誘われて死ぬ気になるのじゃないかと思ひ出す。ちょいと首を上げて土手の上を見ると、いつの^ま間にか例の松の^{ました}真下に來ているのさ」

「例の松た、何だい」と主人が^{だんく}断句を投げ入れる。

^{くびかけ}「首懸の松さ」と迷亭は^{えり}領を縮める。

^{こうだい}「首懸の松は鴻の台でしょう」寒月が^{はもん}波紋

をひろげる。

こう だい かねかけ
「鴻の台のは鐘懸の松で、土手三番町の
くびかけ
は首懸の松さ。なぜこう云う名が付いたかと
云うと、昔^{むか}しからの言い伝えで誰でもこの松の
下へ来ると首が^{くく}縊りたくなる。土手の上に松は
何十本となくあるが、そら^{くびくく}首縊りだと来て見
ると必ずこの松へぶら下がっている。年に二三
べん
返はきつとぶら下がっている。どうしても^{ほか}他
の松では死ぬ気にならん。見ると、うまい具合に
枝が往来の方へ横に出ている。ああ好い枝振りだ。
あのままにしておくのは惜しいものだ。どうかし
てあすこの所へ人間を下げて見たい、誰か来ない
かしらと、^{あたり}四辺を見渡すと^{あいにく}生憎誰も来ない。
仕方がない、自分で下がろうか知らん。いやいや

自分が下がっては命がない、^{あぶ}危ないからよそう。

しかし昔の^{ギリシャじん}希臘人は宴会の席で^{くびくく}首縊りの真似をして余興を添えたと言う話しがある。

一人が台の上へ登って縄の結び目へ首を入れる

途端に^{ほか}他のものが台を蹴返す。首を入れた当人は台を引かれると同時に縄をゆるめて飛び下り

るという^{しゅこう}趣向である。果してそれが事実なら別段恐るるにも及ばん、僕も一つ試みようと思へ

手を懸けて見ると好い具合に^{しわ}撓る。撓り^{あんばい}按排

が実に美的である。首がかかってふわふわするところを想像して見ると嬉しくてたまらん。是非やる事にしようと思ったが、もし

^{とうふう}東風が来て待っていると気の毒だと考え出

した。それではまず^{とうふう}東風に逢って^あ約束通り話

しをして、それから出直そうと云う気になってついにうちへ帰ったのさ」

「それで ^{いち}市 が栄えたのかい」と主人が聞く。

「面白いですな」と寒月がにやにやしながら云う。

「うちへ帰って見ると東風は来ていない。しかし

こんにち ^{よんどころなきさ}しつか
今日 は 無 抛 処 差 支 え が あ っ て

出られぬ、いずれ ^{えいじつごめんご}永 日 御 面 晤 を 期 す と い う

は ^{がき}端 書 が あ っ た の で 、 や っ と 安 心 し て 、 こ れ な ら

心置きなく首が ^{くく}縊 れる嬉しいと思った。で早速

下駄を引き懸けて、急ぎ足で元の所へ引き返して

見る……」と云って主人と寒月の顔を見てすまし

ている。

「見るとどうしたんだい」と主人は少し ^じ焦れる。

「いよいよ佳境に入りますね」と寒月は羽織の
ひも
紐 をひねくる。

「見ると、もう誰か来て先へぶら下がっている。
たった一足違いでねえ君、残念な事をしたよ。考
えると何でもその時は ^{しにがみ}死 神 に取り着かれた
んだね。ゼームスなどに云わせると副意識下の
^{ゆうめいかい}幽 冥 界 と僕が存在している現実界が一種
の因果法によって互に ^{かんのう}感 応 したんだろう。実
に不思議な事があるものじゃないか」迷亭はすま
し返っている。

主人はまたやられたと思いながら何も云わず
^{くうやもち}空 也 ^{ほおば}餅 を ^{ほおば}頬 張 って口をもごもご云わし
ている。

寒月は火鉢の灰を丁寧にか 掻き馴らして、うつむ 向
いてにやにや笑っていたが、やがて口を開く。極
めて静かな調子である。

「なるほど伺って見ると不思議な事でちょっと
有りそうにも思われませんが、私などは自分でや
はり似たような経験をつい近頃したものですか
ら、少しも疑がう気になりません」

「おや君も首を く 縊りたくなつたのかい」

「いえ私のは首じゃないんで。これもちょうど明
ければ去年の暮の事でしかも先生と同日同刻く
らいに起った出来事ですからなおさら不思議に
思われます」

「こりゃ面白い」と迷亭も空也餅を頬張る。

「その日は向島の知人の うち 家で忘年会 けん 兼 合奏

会がありまして、私もそれへヴァイオリンを
たずさ

携えて行きました。十五六人令嬢やら令夫人
が集ってなかなか盛会で、近來の快事と思うくら

いに万事が整っていました。晩**ばんさん**餐**さん**もすみ合奏

もすんで**よも**四方の話しが出て時刻も**だいぶ**大分遅くな

ったから、もう**いとまご**暇乞いをして帰ろうかと思っ

ていますと、某博士の夫人が私のそばへ来てあな

たは〇〇子さんの御病気を御承知ですかと小声

で聞きますので、実はその**りょうさん**両三**にちまえ**日前に

逢った時は平常の通りどこも悪いようには見受

けませんでしたから、私も驚ろいて**くわ**精しく様子

を聞いて見ますと、**わたく**私**し**の逢ったその晩から

急に発熱して、いろいろな**うわごと**譫語を絶間なく

くちばし**い**口走るようで、それだけなら宜いですがその

譚語のうちに私の名が時々出て来るといいます」

主人は無論、迷亭先生も「御^{おやす}安くないね」などという月^{つき}並^{なみ}は云わず、静肅に謹聴している。

「医者を呼んで見てもらうと、何だか病名はわからんが、何しろ熱が^{はげ}劇しいので脳を犯しているから、もし^{すいみんざい}睡眠剤が思うように功を奏しないと危険であると云う診断だそうで私はそれを聞くや否や一種いやな感じが起ったのです。ちょうど夢でうなされる時のような重くるしい感じで周囲の空気が急に固形体になって四方から吾が身をしめつけるごとく思われました。帰り道にもその事ばかりが頭の中にあって苦しくてたま

らない。あの奇麗な、あの快活なあの健康な〇〇
子さんが……」

「ちょっと失敬だが待ってくれ給え。さっきから
伺っていると〇〇子さんと云うのが二^{へん}返ばかり
り聞えるようだが、もし^{さしつか}差支えがなければ
うけたま^{かえり}承^{なまへんじ}わりたいね、君」と主人を顧みると、
主人も「うむ」と生返事をする。

「いやそれだけは当人の迷惑になるかも知れま
せんから^よ廃しましょう」

「すべて^{あいあいぜん}曖々然として^{まいまいぜん}昧々然たる
かたで行くつもりかね」

「冷笑なさってはいけません、^{ごくまじめ}極真面目な話し
なんですから……とにかくあの婦人が急にそん
な病気になった事を考えると、実に^{ひからくよう}飛花落叶

の感慨で胸が一杯になって、^{そうしん} 総 身 の活気が一度にストライキを起したように元気がにわかに

めい 減入ってしまいまして、ただ ^{そうそう} 躊 々 として

ろうろう ^{かた} 跟 々 という 形 ちで ^{あずまばし} 吾 妻 橋 へきかかっ

たのです。欄干に ^よ 倚 っ て 下 を 見 る と ^{まんちょう} 満 潮 か

^{かんちょう} 干 潮 か 分 り ま せ ん が、黒い水がかたまっ

ただ動いているように見えます。^{はなかわど} 花 川 戸 の 方

から人力車が一台 ^か 馳 け て 来 て 橋 の 上 を 通 り ま し

た。その ^{ちょうちん} 提 灯 の 火 を 見 送 っ て い る と、だん

だん 小 く な っ て ^{さっぽろ} 札 幌 ビール の 処 で 消 え ま し

た。私はまた水を見る。すると ^{はる} 遥 かの川上の方

で私の名を呼ぶ声が聞えるのです。はてな今時分

人に呼ばれる訳はないが誰だろうと水の ^{おもて} 面

をすかして見ましたが暗くて ^{なん} 何 にも 分 り ま せ

ん。気のせいに違いない ^{そうそう} 早々 帰ろうと思って
一足二足あるき出すと、また ^{かす} 微かな声で遠くか
ら私の名を呼ぶのです。私はまた立ち留って耳を
立てて聞きました。三度目に呼ばれた時には欄干

^{つか} に 捕まっていたながら ^{ひざがしら} 膝頭 ががくがく
^{ふる} 悸え出したのです。その声は遠くの方か、川の
底から出るようですが ^{まぎ} 紛れもない〇〇子の声
なんでしょう。私は覚えず「はい」と返事をし
たのです。その返事が大きかったものですから静
かな水に響いて、自分で自分の声に驚かされて、
はっと周囲を見渡しました。人も犬も月も ^{なん} 何に
も見えません。その時に私はこの「^{よる} 夜」の中に
巻き込まれて、あの声の出る所へ行きたいと云う
気がむらむらと起ったのです。〇〇子の声がまた

苦しうに、訴えるように、救を求めるように私の耳を刺し通したので、今度は「今^{すぐ}直に行きます」と答えて欄干から半身を出して黒い水を眺めました。どうも私を呼ぶ声が^{なみ}浪の下から無理にも洩れて来るように思われましてね。この水の下だなと思いながら私はとうとう欄干の上に乗りましたよ。今度呼んだら飛び込もうと決心して流を見つめているとまた憐れな声が糸のように浮いて来る。ここだと思って力を込めて一^{いったん}反飛び上がっておいて、そして小石か何ぞのように未練なく落ちてしまいました」

「とうとう飛び込んだのかい」と主人が眼をぱちつかせて問う。

「そこまで行こうとは思わなかった」と迷亭が自

分の鼻の頭をちょいをつまむ。

「飛び込んだ^{あと}後 は気が遠くなって、しばらくは夢中でした。やがて眼がさめて見ると寒くはあるが、どこも濡れた^ぬ所^{ところ} も何もない、水を飲んだような感じもしない。たしかに飛び込んだはずだが実に不思議だ。こりゃ変だと気が付いてそこいらを見渡すと驚きましたね。水の中へ飛び込んだつもりでいたところが、つい間違っ
て橋の真中へ飛び下りたので、その時は実に残念でした。前と
うし^{うし}後 ろの間違だけであの声の出る所へ行く事が出来なかったのです」寒月はにやにや笑いながら例のごとく羽織の^{ひも}紐^{にやっかい}を 荷 厄 介 にしている。

「ハハハハこれは面白い。僕の経験と善く似てい

るところが奇だ。やはりゼームス教授の材料になるね。人間の感応と云う題で写生文にしたらきつと文壇を驚かすよ。……そしてその〇〇子さんの病気はどうなったかね」と迷亭先生が追窮する。

にさんちまえ
「二三日前年始に行きましたら、門の内で下女と羽根を突いていましたから病気は全快したものと見えます」

主人は最前から沈思の^{てい}体であったが、この時ようやく口を開いて、「僕にもある」と負けぬ気を出す。

「あるって、何があるんだい」迷亭の眼中に主人などは無論ない。

「僕のも去年の暮の事だ」

「みんな去年の暮は^{あんごう}暗合で妙ですな」と寒月が笑う。欠けた前歯のうちに^{くうやもち}空也餅が着いている。

「やはり同日同刻じゃないか」と迷亭がまぜ返す。

「いや日は違うようだ。何でも^{はつか}二十日頃だよ。細君が御歳暮の代りに^{せつつだいじょう}摂津大掾を聞かしてくれろと云うから、連れて行ってやらん事もないが今日の語り物は何だと聞いたら、細君が新聞を参考して^{うなぎだに}鰻谷だと云うのさ。鰻谷は嫌いだから今日はよそうとその日はやめにした。翌日になると細君がまた新聞を持って来て今日は^{ほりかわ}堀川だからいいでしょうと云う。堀川は三味線^みもので賑やかなばかりで実がないからよそう

と云うと、細君は不平な顔をして引き下がった。

その翌日になると細君が云うには今日は三十三

間堂です、私は是非^{せつつ}摂津の三十三間堂が聞きたい。あなたは三十三間堂も御嫌いか知らないが、

私に聞かせるのだからいっしょに行って下すっ

ても^い宜いでしょうと^{てづめ}手詰の談判をする。御前が

そんなに行きたいなら行っても^よ宜ろしい、しかし
一世一代と云うので大変な大入だから

とうていつつか^{はい}到底突懸けに行ったら^{きづか}って這入れる気遣

いはない。元来ああ云う場所へ行くには茶屋と云

うものが^あ在ってそれと交渉して相当の席を予約
するのが正当の手続きだから、それを踏まないで

常規を脱した事をするのはよくない、残念だが今

日はやめようと云うと、細君は^{すご}凄^い眼付をして、

私は女ですからそんなむずかしい手続きなんか知りませんが、大原のお母あさんも、鈴木の君代さんも正当の手続きを踏まないで立派に聞いて来たんですから、いくらあなたが教師だからって、
てすう
そう手数のかかる見物をしないでもすみましよう、あなたはあんまりだと泣くような声を出す。
それじゃ駄目でもまあ行く事にしよう。晩飯をくって電車で行こうと降参をすると、行くなら四時までに向うへ着くようにしなくっちゃいけません、そんなぐずぐずしてはいられませんと急に勢がいい。なぜ四時までに行かなくては駄目なんだと聞き返すと、そのくらい早く行って場所をとらなくちゃ這入れないからですと鈴木の君代さんから教えられた通りを述べる。それじゃ四時を過

ぎればもう駄目なんだねと念を押して見たら、ええ駄目ですともと答える。すると君不思議な事にはその時から急に ^{おかん}悪寒がし出してね」

「奥さんがですか」と寒月が聞く。

「なに細君はぴんぴんしていあらあね。僕がさ。何だか穴の明いた風船玉のように一度に ^{いしゅく}萎縮する感じが起ると思うと、もう眼がぐらぐらして動けなくなった」

「急病だね」と迷亭が註釈を加える。

「ああ困った事になった。細君が年に一度の願だから是非 ^{かな}叶えてやりたい。 ^{いつも}平生叱りつけたり、口を聞かなかつたり、 ^{しんしょう}身の上の苦勞をさせたり、小供の世話をさせたりするばかりで何一つさいそうしんすい ^{むく}酒掃薪水の勞に酬いた事はない。今日

は幸い時間もある、^{のうちゅう} 囊 中 には四五枚の
^{とぶつ} 堵 物 もある。連れて行けば行かれる。細君も行
きたいだろう、僕も連れて行ってやりたい。是非
連れて行ってやりたいがこう悪寒がして眼がく
ら^{くつぬぎ}んでは電車へ乗るどころか、靴 脱 へ降りる
事も出来ない。ああ気の毒だ気の毒だと思うとな
お悪寒がしてなお眼がくらんでくる。早く医者に見
てもらって服薬でもしたら四時前には全快す
るだろうと、それから細君と相談をして^{あまき}甘 木 医
学士を迎いにやると^{あいにくゆうべ}生 憎 昨 夜 が当番でま
だ大学から帰らない。二時頃には御帰りになります
から、帰り次第すぐ上げますと云う返事である。

困ったなあ、今^{きょうにんすい}杏 仁 水 でも飲めば四時前
には^{なお}き^{きま}っと癒 るに 極 っているんだが、運の悪

い時には何事も思うように行かんもので、たまさ
か妻君の喜ぶ笑顔を見て楽もうと云う予算も、が
らりと^{はず}外れそうになって来る。細君は^{うら}恨めし
い顔付をして、^{とうてい}到底いらっしゃれませんかと
聞く。行くよ必ず行くよ。四時までにはきっと直
って見せるから安心しているがいい。早く顔でも
洗って着物でも着換えて待っているがいい、と口
では云ったようなものの胸中は無限の感慨であ
る。悪寒はますます^{はげ}劇しくなる、眼はいよいよ
ぐらぐらする。もしや四時までに全快して約束を
り^{こう}履行する事が出来なかったら、気の狭い女の事
だから何をするかも知れない。^{なさ}情けない仕儀に
なって来た。どうしたら善かろう。万一の事を考
えると今の内に^{ういてんぺん}有為転変の理、

しょうじゃひつめつ

生 者 必 滅 の道を説き聞かして、もしも
の変が起った時取り乱さないくらいの覚悟をさ

せるのも、おっと つま
夫 の 妻 に対する義務ではあるま

いかと考え出した。僕は すみや
速 かに細君を書斎へ
呼んだよ。呼んで御前は女だけれども many a

slip 'twixt the cup and the lip と云う西洋の

ことわざ

諺 くらいは心得ているだろうと聞くと、そ
んな横文字なんか誰が知るもんですか、あなたは
人が英語を知らないのを御存じの癖にわざと英

語を使って人にからかうのだから、よろ
宜 しゅうご
ざいます、どうせ英語なんかは出来ないんですか

ら、そんなに英語が御好きなら、なぜ

ヤソがっこう

耶 蘇 学 校 の卒業生かなんかをお貰いなさら
なかったんです。あなたくらい冷酷な人はありは

けんまく
しないと非常な 権 幕 などで、僕もせっかくの
計画の腰を折られてしまった。君等にも弁解する
が僕の英語は決して悪意で使った訳じゃない。全

さい
く 妻 を愛する至情から出たので、それを妻のよ
うに解釈されては僕も立つ瀬がない。それにさっ

おかん めまい
きからの 悪 寒 と 眩 暈 で少し脳が乱れていた
ところへもって来て、早く有為転変、生者必滅の

せ
理を呑み込ませようと少し急き込んだものだから、
つい細君の英語を知らないと言う事を忘れて、
何の気も付かずに使ってしまった訳さ。考えると

わ
これは僕が悪るい、全く手落ちであった。この失
敗で悪寒はますます強くなる。眼はいよいよぐら
ぐらする。妻君は命ぜられた通り風呂場へ行っ

もろはだ たんす
両 肌 を脱いで御化粧をして、 簞 笥 から着物

を出して着換える。もういつでも出掛けられます
と云う ^{ふぜい}風情 で待ち構えている。僕は気が気でな
い。早く甘木君が来てくれれば善いがと思って時
計を見るともう三時だ。四時にはもう一時間しか
ない。「そろそろ出掛けましょうか」と妻君が書
斎の開き戸を明けて顔を出す。自分の ^{さい}妻 ^ほを褒め
るのはおかしいようであるが、僕はこの時ほど細
君を美しいと思った事はなかった。もろ肌を脱い
で石 鹼で ^{みが}磨き上げた皮膚がぴかついて
^{くろちりめん}黒 縮 緬 の羽織と反映している。その顔が石
鹼と ^{せつつだいじょう}摂 津 大 掾 を聞こうと云う希望との
二つで、有形無形の両方面から輝やいて見える。
どうしてもその希望を満足させて出掛けてやろ
うと云う気になる。それじゃ奮発して行こうかな、

と一ぷくふかしているとようやく甘木先生が来た。うまい注文通りに行った。が容体をはなすと、

甘木先生は僕の舌を ^{なが}眺めて、手を握って、胸を
たた ^な 叩いて背を撫でて、目 ^{まぶち} 縁を引っ繰り返して、
ずがいこつ
頭 ^{かぶ} 蓋骨をさすって、しばらく考え込んでいる。

「どうも少し ^{けんのん} 陰呑のような気がしまして」と
僕が云うと、先生は落ちついて、「いえ格別の事
もございませんまい」と云う。「あのちょっとくら

い外出致しても ^{さしつか} 差支えはございませんまいね」
と細君が聞く。「さよう」と先生はまた考え込む。

「御気分さえ御悪くなければ……」「気分は悪い
ですよ」と僕がいう。「じゃともかくも ^{とんぷく} 頓服と
すいやく
水 ^{すいやく} 薬を上げますから」「へえどうか、何だか
ちと、^{あぶ} 危ないようになりそうですな」「いや決

して御心配になるほどの事じゃございません、神経を御起しになるといけませんよ」と先生が帰る。

三時は三十分過ぎた。下女を薬取りにやる。細君

の厳命で馳^かけ出して行って、馳^かけ出して返ってくる。四時十五分前である。四時にはまだ十五分ある。すると四時十五分前頃から、今まで何とも無

かったのに、急に嘔^{はきけ}氣^{もよ}を催^{もよ}おして来た。細君は水^{すいやく}薬^つを茶碗へ注いで僕の前へ置いてくれたから、茶碗を取り上げて飲もうとすると、胃の

中からげーと云う者が呐^{とっかん}喊^{かん}して出てくる。や

むをえず茶碗を下へ置く。細君は「早く御飲みに

なったら宜いでしょう」と逼^いる。早く飲んで早く出掛けなくては義理が悪い。思い切って飲んで

しまおうとまた茶碗を唇へつけるとまたゲーが

しゅうねんぶか

執念深く妨害をする。飲もうとしては茶碗を置き、飲もうとしては茶碗を置いていると茶碗の間の柱時計がチンチンチンチンと四時を打った。さあ四時だ愚図愚図してはおられんと茶碗をまた取り上げると、不思議だねえ君、実に不思議とはこの事だろう、四時の音と共に吐き^はけ^け気がすっかり留まって水薬が何の苦なしに飲めたよ。それから四時十分頃になると、甘木先生の名医という事も始めて理解する事が出来たんだが、背中がぞくぞくするのも、眼がぐらぐらするのも夢のように消えて、当分立つ事も出来まいと思った病気がたちまち全快したのは嬉しかった」

「それから歌舞伎座へいっしょに行ったのかい」
と迷亭が要領を得んと云う顔付をして聞く。

「行きたかったが四時を過ぎちゃ、^{はい}這入れないと
云う細君の意見なんだから仕方がない、やめにし
たさ。もう十五分ばかり早く甘木先生が来てくれ
たら僕の義理も立つし、^{さい}妻も満足したろうに、
わずか十五分の差でね、実に残念な事をした。考
え出すとあぶないところだったと今でも思うの
さ」

語り^{おわ}了った主人はようやく自分の義務をす
ましたような風をする。これで兩人に対して顔が
立つと云う気かも知れん。

寒月は例のごとく欠けた齒を出して笑いなが
ら「それは残念でしたな」と云う。

迷亭はとぼけた顔をして「君のような親切な
おっと^{ひと}夫を持った妻君は実に仕合せだな」と独り

ごと
言 のようにいう。障子の蔭でエヘンと云う細君
せきばら
の 咳 払いが聞える。

吾輩はおとなしく三人の話しを順番に聞いて
いたがおかしくも悲しくもなかった。人間という
ものは時間を つぶ 潰すために 強^しいて口を運動させ
て、おかしくもない事を笑ったり、面白くもない
事を嬉しがったりするほかに能もない者だと思
った。吾輩の主人の わがまま へんきょう
我 儘 で 偏 狭 な事は
前から承知していたが、 平^{ふだん}常は言葉数を使わな
いので何だか了解しかねる点があるように思わ
れていた。その了解しかねる点に少しは恐しいと
云う感じもあったが、今話を聞いてから急に
けいべつ
軽 蔑 したくなった。かれはなぜ兩人の話しを
沈黙して聞いていられないのだろう。負けぬ気に

な^ぐって愚にもつかぬ駄弁を弄^{ろう}すれば何の所得があるだろう。エピクテタスにそんな事をしと書いてあるのか知らん。要するに主人も寒月も迷

亭も太^{たい}平^{へい}の逸^{いつ}民^{みん}で、彼等は糸^へ瓜^{ちま}のごとく風に吹かれて超然と澄^{すま}し切っているようなものの、その実はやはり娑^{しゃ}婆^ば気^けもあり慾^{よく}気^けもある。競争の念、勝とう勝とうの心は彼等が日常の談笑中にもちらちらとほのめいて、一步進めば彼等が平常罵^ば倒^{とう}している俗^ぞ骨^こ共^つと一つ穴の動物になるのは猫より見て気の毒の至りである。ただその言語動作が普通の半^{はん}可^か通^{つう}のごとく、文^{もん}切^きり形^{がた}の厭味を帯びてないのはいささかの取^とり得^えでもあろう。

こう考えると急に三人の談話が面白くなくな

ったので、三毛子の様子でも見て来^きようかと
にげんきん
二 絃 琴 の 御 師 匠 さ ん の 庭 口 へ 廻 る 。

かどまつしめかざ
門 松 注 目 飾 り は す で に 取 り 払 わ れ て 正 月
は
も 早 や 十 日 と な っ た が 、 う ら ら か な 春^{はる} 日 は 一 流
れ の 雲 も 見 え ぬ 深 き 空 よ り 四 海 天 下 を 一 度 に 照

ら して 、 十 坪 に 足 ら ぬ 庭 の お も も 元 日 の 曙^{しょう} 光
を 受 け た 時 よ り あざや
鮮 かな 活 気 を 呈 し て い る 。 椽
側 に 座 蒲 団^{ざぶとん} が 一 つ あ っ て 人 影 も 見 え ず 、 障 子 も
立 て 切 っ て あ る の は 御 師 匠 さ ん は 湯 に で も 行 っ
た の か 知 ら ん 。 御 師 匠 さ ん は 留 守 で も 構 わ ん が 、

三毛子は少しは宜^いい方か、それが気掛りである。
ひっそりして人の気^け 合^{わい} も し な い か ら 、 泥 足 の ま
えんがわ あが
ま 椽 側 へ 上 っ て 座 蒲 団 の 真 中 へ 寝 転 ろ ん
で 見 る と い い 心 持 ち だ 。 つ い う と う と と し て 、 三

毛子の事も忘れてうたた寝をしていると、急に障子のうちで人声がする。

「御苦労だった。出来たかえ」御師匠さんはやはり留守ではなかったのだ。

「はい遅くなりまして、^{ぶっしや}仏師屋へ参りましたらちょうど出来上ったところだと申しまして」「どれお見せなさい。ああ奇麗に出来た、これで三毛も浮かばれましょう。^{きん}金^はは剥げる事はあるまいね」「ええ念を押しましたら上等を使ったからこれなら人間の^{いはい}位牌よりも持つと申しております。……それから^{みょうよしんによ}猫^み譽^う信^{しん}女^{にょ}の譽の字はくず^{くず}崩^かした方が^{かつこう}恰^か好^くがいいから少し^{かく}劃^かを易^いえたと申しました」「どれどれ早速御仏壇へ上げて御線香でもあげましょう」

三毛子は、どうかしたのかな、何だか様子が変わ
だ と 蒲 団 の 上 へ 立 ち 上 る 。 チ ー ン
なむみょうよしんにょ なむあみだぶつ
南 無 猫 誉 信 女、南無阿弥陀仏南無阿弥
陀仏と御師匠さんの声がする。

えこう
「御前も回向をしておやりなさい」

チーン南無猫誉信女南無阿弥陀仏南無阿弥陀
仏と今度は下女の声がする。吾輩は急に動悸^{どうき}が
して来た。座蒲団の上に立ったまま、木彫^{きぼり}の猫
のように眼も動かさない。

「ほんとに残念な事を致しましたね。始めはちょ
いとかぜ^{かせ}風邪を引いたんでございましょうがねえ」
「甘木さんが薬でも下さると、よかったかも知れ
ないよ」「一体あの甘木さんが悪うございますよ、
あんまり三毛を馬鹿にし過ぎませうね」「そう

ひとさま
人様の事を悪く云うものではない。これも
じゅみょう
寿命だから」

三毛子も甘木先生に診察して貰ったものと見える。

「つまるところ表通りの教師のうちの^{のらねこ}野良猫
^{むやみ}が無暗に誘い出したからだ、わたしは思う
よ」「ええあの^{ちきしょう}畜生が三毛のかたきでござ
いますよ」

少し弁解したかったが、ここが我慢のしどころ
^{つば}と唾を呑んで聞いている。話しはしばし^{とぎ}途切れる。

「世の中は自由にならん者でう。三毛のような
器量よしは^{はやじに}早死をするし。不器量な野良猫は
達者でいたずらをしているし……」「その通りで

ございますよ。三毛のような可愛らしい猫は鐘と太鼓で探してあるいたって、^{ふたり}二人とはおりませんからね」

二匹と云う代りに^ふ二たりといった。下女の考えでは猫と人間とは同種族ものと思っているらしい。そう云えばこの下女の顔は吾等^{ねこぞく}猫属とはなはだ類似している。

「出来るものなら三毛の代りに……」「あの教師の所の^{のら}野良が死ぬと^{おあつら}御誂え通りに参ったんでございますがねえ」

御誂え通りになつては、ちと困る。死ぬと云う事はどんなものか、まだ経験した事がないから好きとも嫌いとも云えないが、先日あまり寒いので^{ひけしつぽ}火消壺の中へもぐり込んでいたら、下女が吾

輩がいるのも知らんで上から ^{ふた}蓋 をした事があ
った。その時の苦しさは考えても恐しくなるほど
であった。白君の説明によるとあの苦しみが今少
し続くと死ぬのであるそうだ。三毛子の ^{みがわ}身代り
になるのなら苦情もないが、あの苦しみを受けな
くでは死ぬ事が出来ないのなら、誰のためでも死
にたくはない。

「しかし猫でも坊さんの御経を読んでもらった
り、 ^{かいみょう}戒名 をこしらえてもらったのだから心
残りはあるまい」「そうでございますとも、全く
^{かほうもの}果報者でございますよ。ただ慾を云うとあの
坊さんの御経があまり軽少だったようでござい
ますね」「少し短か過ぎたようだったから、大変
御早うございますねと御尋ねをしたら、

げっけいじ
月 桂 寺 さんは、ええ^{ききめ}利 目のあるところをち
よいとやっておきました、なに猫だからあのくら
いで充分浄土へ行かれますとおっしゃったよ」

「あらまあ……しかしあの野良なんかは……」

吾輩は名前はないとしばしば断っておくのに、
この下女は野良野良と吾輩を呼ぶ。失敬な奴だ。

「罪が深いんですから、いくらありがたい御経だ
って浮かばれる事はございませんよ」

吾輩はその^ご後野良が何百遍繰り返されたかを
知らぬ。吾輩はこの際限なき談話を途中で聞き棄
てて、^{ふとん}布 団をすべり落ちて椽側から飛び下りた
時、八万八千八百八十本の毛髪を一度にたてて
みぶる^{ごにげんきん}身 震いをした。その後二 絃 琴の御師匠さん

の近所へは寄りついた事がない。今頃は御師匠さん自身が月桂寺さんから軽少な^{ごえこう}御回向を受けているだろう。

近頃は外出する勇氣もない。何だか世間が^{もの}懣うく感ぜらるる。主人に劣らぬほどのぶしょうねこ無性猫となった。主人が書齋にのみ閉じこも籠っているのを人が失恋だ失恋だと評するのも無理はないと思うようになった。

ねずみ鼠はまだ取った事がないので、一時はおさん^{ほうちくろん}御三から放逐論さえ呈出された事もあったが、主人は吾輩の普通一般の猫でないと云う事を知っているものだから吾輩はやはりのらくらしてこの家^やに^{きが}起臥している。この点については深く主人の恩を感謝すると同時にその

かつがん
活 眼 に対して敬服の意を表するに
ちゅうちょ
躊 躇 しないつもりである。御三が吾輩を知
らずして虐待をするのは別に腹も立たない。今に
ひだりじんごろう
左 甚 五 郎 が出来て、吾輩の肖像を
ろうもん きざ
楼 門 の柱に 刻 み、日本のスタンランが好ん
で吾輩の似顔をカンヴァスの上に えが 描 くようにな
ったら、彼等 どんかつかん 鈍 瞎 漢 は始めて自己の不明
は
を恥ずるであろう。

三

三毛子は死ぬ。黒は相手にならず、いささか
せきばく
寂 寞 の感はあるが、幸い人間に知己が出来た
ちき
のでさほど退屈とも思わぬ。せんだっては主人の
もと
許 へ吾輩の写真を送ってくれと手紙で依頼し

た男がある。この間は岡山の名産吉備団子^{きびだんご}をわざわざ吾輩の名宛で届けてくれた人がある。だんだん人間から同情を寄せらるるに従って、おのれ己^{おのれ}が猫である事はようやく忘却してくる。猫よりはいつの間^まにか人間の方へ接近して来たような心持になって、同族を^{きゅうごう}糾合して二本足の先生と雌雄^{しゆう}を決しようなどと云う量見^いは昨今のところ毛頭^{もうとう}ない。そのみか折々は吾輩もまた人間世界の一人だと思ふ折さえあるくらいに進化したのはたのもしい。あえて同族を^{けいべつ}輕蔑する次第ではない。ただ性情の近きところに向って一身の安きを置くは^{いきおい}勢のしからしむるところで、これを変心とか、輕薄とか、裏切りとか評せられてはちと迷惑する。かような言語を^{ろう}弄

して人を罵詈^{ばり}するものに限って融通の利^きかぬ貧乏性の男が多いようだ。こう猫の習癖を脱化して見ると三毛子や黒の事ばかり荷厄介にしている

訳には行かん。やはり人間同等の気^き位^{ぐらい}で彼等の思想、言行を評^{ひょう}しつ^{しつ}したくなる。これも無理はあるまい。ただそのくらいな見識を有している

吾輩をやはり一般猫^{びょうじ}児^はの毛の生えたものくらいに思っ、主人が吾輩に一言^{いちごん}の挨拶もなく、吉備団子^{きびだんご}をわが物顔に喰い尽したのは残念の次第である。写真もまだ撮^とって送らぬ容^{よう}子^すだ。これも不平と云えば不平だが、主人は主人、

吾輩は吾輩で、相互の見解が自然^{こと}異^{こと}なるのは致し方もあるまい。吾輩はどこまでも人間になりすましているのだから、交際をせぬ猫の動作は、ど

うしてもちょっと筆に^{のぼ}上りにくい。迷亭、寒月
諸先生の評判だけで御免^{こうむ}蒙る事に致そう。

今日は上天気の日曜なので、主人はのそのそ書

斎から出て来て、吾輩の^{そば}傍へ^{ふですずり}筆硯と原稿

用紙を並べて^{はらばい}腹這になって、しきりに何か

うな^{おろ}唸っている。大方草稿を書き^{じょびら}卸す序開き

として妙な声を発するのだろうと注目している

と、ややしばらくして^{ふでぶと}筆太に「^{こういっしゅ}香一」

とかいた。はてな詩になるか、俳句になるか、香

一^{しゃれ}炷とは、主人にしては少し洒落過ぎているが

と思う間もなく、彼は香一炷を書き放しにして、

新たに^{ぎょう}行を改めて「さっきから^{てんねんこじ}天然居士

の事をかこうと考えている」と筆を走らせた。筆

はそれだけではたと留ったぎり動かない。主人は

筆を持って首を^{ひね}捻ったが別段名案もないもの
と見えて筆の穂を^な管めだした。唇が真黒になった
と見ていると、今度はその下へちょいと丸をかい
た。丸の中へ点を二つうって眼をつける。真中へ
小鼻の開いた鼻をかいて、真一文字に口を横へ引
張った、これでは文章でも俳句でもない。主人も
自分で^{あいそ}愛想が尽きたと見えて、そこそこに顔を
塗り消してしまった。主人はまた^{ぎょう}行を改める。
彼の考によると行さえ改めれば詩か賛か語か録
^{なん}か何かになるだろうとただ^{あて}宛もなく考えて
いるらしい。やがて「天然居士は空間を研究し、
論語を読み、^{やきいも}焼芋を食い、^{はな}鼻汁を垂らす人で
ある」と言文一致体で^{いっきかせい}一気呵成に書き流した、
何となくごたごたした文章である。それから主人

はこれを遠慮なく朗読して、いつになく「ハハハ
ハ面白い」と笑ったが「鼻汗^{はな}を垂らすのは、ちと
こく
酷だから消そう」とその句だけへ棒を引く。一
本ですむところを二本引き三本引き、奇麗な
へいこうせん か ぎょう は
併行線を描く、線がほかの行まで食み
出しても構わず引いている。線が八本並んでもあ
との句が出来ないと見えて、今度は筆を捨てて
ひげ ひね
髭を捻って見る。文章を髭から捻り出して御
覧に入れますと云う けんまく
見幕で猛烈に捻っては
ねじ上げ、ねじ下ろしているところへ、茶の間か
さいくん
ら妻君が出て来てぴたりと主人の鼻の先へ
す
坐わる。「あなたちょっと」と呼ぶ。「なんだ」と
主人は水中で銅鑼を どん たた
叩くような声を出す。返事
が気に入らないと見えて妻君はまた「あなたちょ

っと」と出直す。「なんだよ」と今度は鼻の穴へ親指と人さし指を入れて鼻毛をぐっと抜く。「今月はちっと足りませんが……」「足りんはずはない、医者へも薬礼はすましたし、本屋へも先月払ったじゃないか。今月は余らなければならん」とすまして抜き取った鼻毛を天下の奇観のごとくなが

眺めて^いる。「それでもあなたが御飯を召し上^{パン おた}らんで^{おな}麵麩を御食べになったり、ジャムを御舐めになるものですから」「元来ジャムは^{いくかん}幾^い缶^い舐めたのかい」「今月は八つ入りましたよ」「八つ？そんなに舐めた覚えはない」「あなたばかりじゃありません、子供も舐めます」「いくら舐めたって五六円くらいなものだ」と主人は平気な顔で鼻毛を一本一本丁寧に原稿紙の上へ植付ける。肉が

付いているのでぴんと針を立てたごとくに立つ。

主人は思わぬ発見をして感じ入った^{てい}体で、ふつと吹いて見る。^{ねん}粘^{ちゃ}着^{くり}力^{よく}が強いので決して

飛ばない。「いやに^{がんこ}頑固だな」と主人は一生懸命に吹く。「ジャムばかりじゃないんです、ほかに買わなけりゃ、ならない物もあります」と妻

君は^{おお}大に不平な^{けしき}気色^{みなぎ}を両頬に漲らす。

「あるかも知れないさ」と主人はまた指を突っ込んでぐいと鼻毛を抜く。赤いのや、黒いのや、種々

の色が^{まじ}交る中に一本真白なのがある。大に驚いた様子で穴の^あ開くほど眺めていた主人は指の股へ挟んだまま、その鼻毛を妻君の顔の前へ出す。

「あら、いやだ」と妻君は顔をしかめて、主人の

手を突き戻す。「ちょっと見ろ、鼻毛の^{しら}白髪^だだ」

と主人は大に感動した様子である。さすがの妻君
も笑いながら茶の間へ^{はい}這入る。経済問題は断念し
たらしい。主人はまた^{てんねんこじ}天然居士に取り^{かか}懸る。

鼻毛で妻君を追払った主人は、まずこれで安心
と云わぬばかりに鼻毛を抜いては原稿をかこう
と^{あせ}焦る^{てい}体であるがなかなか筆は動かない。
「焼芋を食うも^{だそく}蛇足だ、^{かつあい}割愛しよう」とつ
いにこの句も^{まっさつ}抹殺する。「香一炷もあまり
とうとつ^や唐突だから己めろ」と惜気もなく^{ひっちゅう}筆誅
する。余す所は「天然居士は空間を研究し論語を
読む人である」と云う一句になってしまった。主
人はこれでは何だか簡単過ぎるようだなと考え
ていたが、ええ面倒臭い、文章は^{おはい}御廃しにして、

銘だけにしろと、筆を十文字に^{ふる}揮って原稿紙の上へ下手な文人画の蘭を勢よくかく。せっかくの苦心も一字残らず落第となった。それから裏を返

して「空間に生れ、空間を^{きわ}究め、空間に死す。

空たり間たり^{てんねんこじああ}天然居士噫」と意味不明な語

を^{つら}連ねているところへ例のごとく迷亭が^{はい}這入

って来る。迷亭は人の^{うち}家も自分の家も同じものと心得ているのか案内も乞わず、ずかずか上って

くる、のみならず時には勝手口から^{ひょうぜん}飄然と

舞い込む事もある、心配、遠慮、^{きがね}気兼ね、苦勞、を生れる時どこかへ振り落した男である。

「また巨人引力かね」と立ったまま主人に聞く。

「そう、いつでも巨人引力ばかり書いてはおらん

さ。天然居士の墓銘を^{せん}撰しているところなん

おおげさ
だ」と大袈裟な事を云う。「天然居士と云うな
あやはり偶然童子のような戒名かね」と迷亭は

あいかわらずでたらめ
不 相 変 出 鱈 目 を云う。「偶然童子と云う
のもあるのかい」「なに有りゃしないがまずその

けんとう
見 当 だろうと思っていらあね」「偶然童子と
云うのは僕の知ったものじゃないようだが天然
居士と云うのは、君の知ってる男だぜ」「一体だ
れが天然居士なんて名を付けてすましているん

そろさき
だい」「例の曾 呂 崎 の事だ。卒業して大学院へ
這入って空間論と云う題目で研究していたが、あ
まり勉強し過ぎて腹膜炎で死んでしまった。曾呂
崎はあれでも僕の親友なんだからな」「親友でも
いいさ、決して悪いと云やしない。しかしその曾
呂崎を天然居士に変化させたのは一体誰の

しよさ
所作^{だい}」「僕さ、僕がつけてやったんだ。元
来坊主のつける戒名ほど俗なものは無いからな」

と天然居士はよほど雅^がな名のように自慢する。迷
亭は笑いながら「まあその墓^ぼ碑^ひ銘^{めい}と云う奴を見
せ給え」と原稿を取り上げて「何だ……空間に生

れ、空間を^{きわ}究め、空間に死す。空たり間たり天

然居士^{ああ} 噫」と大きな声で読み^{あげ}上る。「なるほ

どこりゃあ^い善い、天然居士相当のところだ」主人

は嬉しそうに「善いだろう」と云う。「この墓^ぼ碑^{めい}銘

を^{たくあんいし}沢庵石^ほへ彫り付けて本堂の裏手へ

ちからいし^{ほう}力石のように抛り出して置くんだね。雅^が

でいいや、天然居士も浮かばれる訳だ」「僕もそ

うしようと思っているのさ」と主人は^{しごく}至極真面

目に答えたが「僕あちょっと失敬するよ、じき帰

るから猫にでもからかっていてくれ給え」と迷亭

の返事も待たず^{ふうぜん}風 然 と出て行く。

計らずも迷亭先生の接待掛りを命ぜられて

ぶあいそ
無 愛 想 な顔もしてられないから、ニャーニャー

一と^{あいきょう}愛 嬌 を^ま振り^{ひざ}蒔いて^は膝 の上へ^は這い
あが

上 っ て見た。すると迷亭は「イヨー^{だいぶふと}大 分 肥

ったな、どれ」と^{ぶさほう}無 作 法 にも吾輩の^{えりがみ}襟 髪 を
つか

攫 んで宙へ釣るす。「あと足をこうぶら下げて

は、^{ねずみ}鼠 は取れそうもない、……どうです奥さ

んこの猫は鼠を捕りますかね」と吾輩ばかりでは

不足だと見えて、隣りの^{へや}室 の妻君に話しかける。

「鼠どころじゃございませぬ。^{おぞうに}御 雑 煮 を食べて

踊りをおどるんですもの」と妻君は飛んだところ

で旧悪を^{あば}暴 く。吾輩は^{ちゅうの}宙 乗 りをしながらも

少々極りが悪かった。迷亭はまだ吾輩を^{おろ}卸して
くれない。「なるほど踊りでもおどりそうな顔だ。

奥さんこの猫は油断のならない^{そうごう}相好ですぜ。
むか^{くさぞうし}昔しの草双紙にある猫^{ねこまた}又^{ねこまた}に似ていま
すよ」と勝手な事を言いながら、しきりに
^{さいくん}細君に話しかける。細君は迷惑そうに針仕事
の手をやめて座敷へ出てくる。

「どうも御退屈様、もう帰りましょう」と茶を^つ注
^かぎ易えて迷亭の前へ出す。「どこへ行ったんです
かね」「どこへ参るにも断わって行った事の無い
男ですから分りかねますが、大方御医者へでも行
ったんでしょう」「甘木さんですか、甘木さんも
あんな病人に^{つら}捕まっちゃ災難ですな」「へえ」
と細君は挨拶のしようもないと見えて簡単な答

えをする。迷亭は ^{いっこう}一向 頓着しない。「近頃は
どうです、少しは胃の加減が ^い能いんですか」「^い能い
か悪い ^{とん}か 頓 と分りません、いくら甘木さんにか
かったって、あんなにジャムばかり ^な嘗めては胃病
の直る訳がないと思います」と細君は ^{せんこく}先 刻 の
不平を ^{あん}暗 に迷亭に ^も洩らす。「そんなにジャムを
嘗めるんですかまるで小供のようですね」「ジャ
ムばかりじゃないんで、この頃は胃病の薬だとか
云って ^{だいこおろ}大 根 卸 しを ^{むやみ}無 暗 に嘗めますので
……」「驚ろいたな」と迷亭は感嘆する。「何でも
^{だいこおろし}大 根 卸 の中にはジャスターゼが有るとか
云う話しを新聞で読んでからです」「なるほどそ
れでジャムの損害を ^{つぐな}償 おうと云う趣向です
な。なかなか考えていらあハハハハ」と迷亭は細

君の ^{うったえ}訴 ^を聞いて ^{おお}大 に ^{けしき}愉快的な ^き気色で
ある。「この間などは赤ん坊にまで嘗めさせまし
て……」「ジャムをですか」「いいえ ^{だいこおろし}大 根 卸
を……あなた。坊や御父様がうまいものをやるか
らおいでてって、——たまに小供を可愛がってく
れるかと思うとそんな馬鹿な事ばかりするんで
す。^{にさんちまえ}二 三 日 前 には中の娘を抱いて ^{たんす}箆 笥 の上
へあげましてね……」「どう云う趣向がありました
た」と迷亭は何を聞いても趣向ずくめに解釈する。
「なに趣向も何も有りゃしません、ただその上か
ら飛び下りて見ろと云うんですわ、三つや四つの
女の子ですもの、そんな ^{おてんば}御 転 婆 な事が出来るは
ずがないです」「なるほどこりゃ趣向が無さ過ぎ
ましたね。しかしあれで腹の中は毒のない善人で

すよ」「あの上腹の中に毒があっちゃ、辛^{しんぼう}防^{ぼう}は
出来ませんわ」と細君は^{おお}大^{きえん}に^{きえん}氣^き焰^{えん}を揚げる。
「まあそんなに不平を云わんでも善いでさあ。こ
うやって不足なくその日その日が暮らして行か
れれば^{じょう}上^{ぶん}の^{ぶん}分^{ぶん}ですよ。^{くしゃみくん}苦^く沙^{しゃ}弥^み君^{くん}などは
道楽はせず、服装にも構わず、地味に^{しょうたいむ}世^{しょう}帯^{たい}向^む
きに出来上った人でさあ」と迷亭は^{がら}柄^{がら}にない説
教を陽気な調子でやっている。「ところがあなた
大違いで……」「何か内々でやりますかね。油断
のならない世の中だからね」と^{ひょうぜん}飄^{ひょう}然^{ぜん}とふわ
ふわした返事をする。「ほかの道楽はないですが、
^{むやみ}無^む暗^{あん}に読みもしない本ばかり買いましてね。そ
れも善い加減に^{みはか}見^み計^{けい}らって買ってくれると善
いんですけれど、勝手に丸善へ行っちゃ何冊でも

取って来て、月末になると知らん顔をしているんですもの、去年の暮なんか、月々のが^{たま}溜^りって大変困りました」「なあに書物なんか取って来るだけ取って来て構わんですよ。払いをとりに来たら今にやる今にやると云っていりゃ帰ってしまいまさあ」「それでも、そういつまでも引張る訳にも参りませんか」と妻君は^{ぶぜん}慥然^{ぜん}としている。「それじゃ、訳を話して^{しょじゃくひ}書籍費^{しよじゃくひ}を削減させるさ」「どうして、そんな^{こと}言^{こと}を云ったって、なかなか聞くものですか、この間などは貴様は学者^{さい}の妻^{さい}にも似合わん、^{ごう}毫^{ごう}も^{しよじゃく}書籍^{しよじゃく}の価値を解しておらん、^{むか}昔^{むか}し^{ローマ}羅馬^{ローマ}にこう云う話しがある。後学のため聞いておけと云うんです」「そりゃ面白い、どんな話しですか」迷亭は乗気になる。

細君に同情を表しているというよりむしろ好奇心に^か駆られている。「何んでも昔し^{ローマ}羅馬に
たるきん
樽金とか云う王様があって……」「
たるきん
樽金？ 樽金はちと妙ですぜ」「私は
とうじん
唐人の名なんかむずかしくて覚えられませ
んわ。何でも七代目なんだそうです」「なるほど
七代目樽金は妙ですな。ふんその七代目樽金がど
うかしましたかい」「あら、あなたまで冷かして
は立つ瀬がありませんわ。知っていらっしゃるな
ら教えて下さればいいじゃありませんか、人の悪
い」と、細君は迷亭へ食って掛る。「何冷かすな
んて、そんな人の悪い事をする僕じゃない。ただ
七代目樽金は^{ふる}振ってるとあってね……ええお
待ちなさいよ^{ローマ}羅馬の七代目の王様ですね、こう

っとたしかには覚えていないがタークイン・ゼ・
プラウドの事でしょう。まあ誰でもいい、その王
様がどうしました」「その王様の所へ一人の女が
本を九冊持って来て買ってくれないかと云った
んだそうです」「なるほど」「王様がいくらなら売
るといって聞いたら大変な高い事を云うんです
って、あまり高いもんだから少し負けないかと云
うとその女がいきなり九冊の内の三冊を火にく
べて^や焚いてしまったそうです」「惜しい事をしま
したな」「その本の内には予言か何かほかで見ら
れない事が書いてあるんですって」「へえー」「王
様は九冊が六冊になったから少しは^ね価も減った
ろうと思って六冊でいくらだと聞くと、やはり元
の通り一文も引かないそうです、それは乱暴だと

云うと、その女はまた三冊をとって火にくべたそうです。王様はまだ未練があったと見えて、余った三冊をいくらで売ると聞くと、やはり九冊分のねだんをくれと云うそうです。九冊が六冊になり、六冊が三冊になっても代価は、元の通り一厘も引かない、それを引かせようとすると、残ってる三冊も火にくべるかも知れないので、王様はとうとう高い御金を出して焚け^や余^{あま}りの三冊を買ったんですって……どうだこの話しで少しは書物のありがた^み味^{りき}が分ったろう、どうだと力味むのですけれど、私にゃ何かがありがたいんだか、まあ分りませんね」と細君は一家の見識を立てて迷亭の返答を^{うな}促^ながす。さすがの迷亭も少々窮したと見えて、^{たもと}袂^{たもと}からハンケチを出して吾輩をじゃらし

ていたが「しかし奥さん」と急に何か考えついた
ように大きな声を出す。「あんなに本を買って
やたら
矢鱈に詰め込むものだから人から少しは学者
だとか何とか云われるんですよ。この間ある文学

雑誌を見たら ^{くしゃみくん} 苦沙弥君の評が出ていました
よ」「ほんとに？」と細君は向き直る。主人の評
判が気にかかるのは、やはり夫婦と見える。「何
とかいてあったんです」「なあに二三行ばかりで
すがね。苦沙弥君の文は ^{こううんりゅうすい} 行雲流水のご
としとありましたよ」細君は少しにこにこして

「それぎりですか」「その次にね――出ずるか
と思えば ^{たちま} 忽ち消え、^ゆ 逝いては ^{とこしな} 長えに帰る
を忘るとありましたよ」細君は妙な顔をして「賞
めたんでしょうか」と心元ない調子である。「ま

あ賞めた方でしょうな」と迷亭は済ましてハンケチを吾輩の眼の前にぶら下げる。「書物は商買道具で仕方もございますが、よっぽど^{へんくつ}偏屈^{へんくつ}でしてねえ」迷亭はまた別途の方面から来たなと思つて「偏屈は少々偏屈ですね、学問をするものはどうせあんなですよ」と調子を合わせるような弁護をするような不即不離の妙答をする。「せんだつてなどは学校から歸つてすぐわきへ出るのに着物を着換えるのが面倒だものですから、あなたが^{いとう}外^{いとう}套^{いとう}も脱がないで、机へ腰を掛けて御飯を食べるのです。^{おぜん}御膳^{こたつ}を^{こたつ}火^{やぐら}燵^{やぐら}櫓^{やぐら}の上へ乗せまして――私は^{おはち}御櫃^{かか}を^{かか}抱^{かか}えて坐つておりましたがおかしくって……」「何だかハイカラの首実検のようですな。しかしそんなところが苦沙弥君

の苦沙弥君たるところで——とにかく^{つきなみ}月並
でない」と^{せつ}切^ほない褒め方をする。「月並か月並
でないか女には分りませんが、なんぼ何でも、あ
まり乱暴ですわ」「しかし月並より好いですよ」
と無暗に加勢すると細君は不満な様子で「一体、
月並月並と皆さんが、よくおっしゃいますが、ど
んなのが月並なんです」と開き直って月並の定義
を質問する、「月並ですか、月並と云うと——さ
ようちと説明しにくいのですが……」「そんな
^{あいまい}曖昧なものなら月並だって好きそうなもの
じゃありませんか」と細君は^{にょにん}女^{にん}人一流の論理
法で詰め寄せる。「曖昧じゃありませんよ、ちゃ
んと分っています、ただ説明しにくいだけの事で
さあ」「何でも自分の嫌いな事を月並と云うんで

しょう」と細君は^{われ}我^{うが}知らず穿った事を云う。
迷亭もこうなると何とか月並の処置を付けなければならぬ仕儀となる。「奥さん、月並と云うのはね、まず年は二八か二九からぬと言わず語らず
物思いの^{あいだ}間に寝転んでいて、この日や天気晴朗とくると必ず一瓢を携えて墨堤に遊ぶ
^{れんじゅう}連中を云うんです」「そんな連中があるで
しょうか」と細君は分らんものだから^{いい}好加減な
挨拶をする。「何だかごたごたして私には分りま
せんわ」とついに^が我を折る。「それじゃ^{ばきん}馬琴の
胴へメジョオ・ペンデニスの首をつけて一二年欧
州の空気で包んでおくんですね」「そうすると月
並が出来るでしょうか」迷亭は返事をしないで笑
っている。「何そんな^{てすう}手数のかかる事をしない

でも出来ます。中学校の生徒に白木屋の番頭を加えて二で割ると立派な月並が出来上ります」「そうでしょうか」と細君は首を^{ひね}捻ったままなっとく^{ふぜい}納得し兼ねたと云う風情に見える。

「君まだいるのか」と主人はいつの^ま間にやら帰って来て迷亭の^{そば}傍へ^す坐わる。「まだいるのかはちと^{こく}酷だな、すぐ帰るから待ってい給えと言ったじゃないか」「万事あれなんですもの」と細君は迷亭を^{かえり}顧みる。「今君の留守中に君の逸話を残らず聞いてしまったぜ」「女はとにかく多弁でいかん、人間もこの猫くらい沈黙を守るといいがな」と主人は吾輩の頭を^な撫でてくれる。「君は赤ん坊に^{だいこおろ}大根卸しを^な嘗めさしたそうだな」「ふむ」と主人は笑ったが「赤ん坊でも近頃の赤ん坊

はなかなか利口だぜ。それ以来、坊や^{から} 辛^いのは
どこと聞くときつと舌を出すから妙だ」「まるで
犬に芸を仕込む気でいるから残酷だ。時に
かんげつ

寒^月はもう来そうなものだな」「寒月が来る
のかい」と主人は不審な顔をする。「来るんだ。

午後一時までに^{くしゃみ} 苦沙弥^{うち}の^{はがき} 家^へ来いと^{端書}
を出しておいたから」「人の都合も聞かんで勝手
な事をする男だ。寒月を呼んで何をするんだい」

「なあに今日のはこっちの趣向じゃない寒月先
生自身の要求さ。先生何でも理学協会で演説をす
るとか云うのでね。その稽古をやるから僕に聴い
てくれと云うから、そりゃちょうどいい苦沙弥に
も聞かしてやろうと云うのでね。そこで君の^{うち} 家^へ
へ呼ぶ事にしておいたのさ——なあに君はひま

人だからちょうどいいやね——^{さしつか}差支えなん
ぞある男じゃない、聞くがいいさ」と迷亭は^{ひと}独
りで呑み込んでいる。「物理学の演説なんか僕に

ゃ分らん」と主人は少々迷亭の^{せんたん}専断を
いきどお

憤ったもののごとくに云う。「ところがそ
の問題がマグネ付けられたノズルについてな
どと云う乾燥無味なものじゃないんだ。首縊りの

力学と云う^{だつぞく}脱俗^{ちょうぼん}超凡な演題なのだから
ら傾聴する価値があるさ」「君は首を^{くく}縊り^そ損く
なった男だから傾聴するが好いが僕なんざあ

……」「歌舞伎座で^{おかん}悪寒がするくらいの人間だ
から聞かれないと云う結論は出そうもないぜ」と
例のごとく軽口を叩く。妻君はホホと笑って主人

^{かえり}を顧みながら次の間へ退く。主人は無言のま

ま吾輩の頭を撫でる。この時のみは非常に丁寧な撫で方であった。

それから約七分くらいすると注文通り寒月君が来る。今日は晩に演 舌^{えんぜつ}をするというので例になく立派なフロックを着て、洗濯し立てのカラー そび白襟^{そび}を聳^{そび}やかして、男振りを二割方上げて、「少し 後^{おく}れまして」と落ちつき払って、挨拶をする。「さっきから二人で大待ちに待ったところなんだ。早速願おう、なあ君」と主人を見る。主人もやむを得ず「うむ」と生返^{なまへんじ}事をする。寒月君はいそがない。「コップへ水を一杯頂戴しましょう」と云う。「いよ一本式にやるのか次には拍手の請求とおいでなさるだろう」と迷亭は独りで騒ぎ立てる。寒月君はうちがく^{うちがく}内 隠 してから草稿を取

り出して ^{おもむ} 徐ろに「稽古ですから、御遠慮なく御批評を願います」と前置をして、いよいよ演舌

^{おさら} の御 浚いを始める。

「罪人を ^{こうざい} 絞罪 の刑に処すると云う事は ^{おも} 重にアングロサクソン民族間に行われた方法であ

りまして、それより古代に ^{さかのぼ} 溯って考えます

と ^{くびくく} 首 縊りは重に自殺の方法として行われた

者であります。 ^{ユダヤじんちゅう} 猶太人中に在っては罪人

を石を ^な 抛げつけて殺す習慣であったそうでご

います。旧約全書を研究して見ますといわゆるハ

ングングなる語は罪人の死体を釣るして野獣ま

たは肉食鳥の ^{えじき} 餌食とする意義と認められます。

ヘロドタスの説に従って見ますと ^{ユダヤじん} 猶太人は

エジプトを去る以前から ^{やちゅう} 夜中 ^{さら} 死骸を 曝さ

れることを痛く忌^いみ嫌ったように思われます。エ
ジプト人は罪人の首を斬って胴だけを十字架に

くぎづ
釘^{くぎ}付けにして夜中曝し物にしたそうで御座い
ます。ペルシャじん
波斯人は……」「寒月君首縊りと縁
がだんだん遠くなるようだが大丈夫かい」と迷亭

が口を入れる。「これから本論に^{はい}這入るところで
すから、少々御^ご辛^{しん}防^{ぼう}を願います。……さて波
斯人はどうかと申しますとこれもやはり処刑に

はりつけ
は磔^{はりつけ}を用いたようでございます。但し生き

ているうちに^{はりつ}張^{はりつ}付けに致したもののか、死んでか
ら釘を打ったもののかその^{へん}辺^{へん}はちと分りかねま
す……」「そんな事は分らんでもいいさ」と主人

は^{あくび}退屈^{あくび}そうに欠^{あぐ}伸^びをする。「まだいろいろ御話
し致したい事もございますが、御迷惑であらっし

やいましょうから……」「あらっしやいましょう
より、いらっしやいましょうの方が聞きいいよ、
ねえ ^{くしゃみくん} 苦沙弥君」とまた迷亭が ^{とが} 咎め ^{だて} 立 をす
ると主人は「どっちでも同じ事だ」と気のない返
事をする。「さていよいよ本題に入りまして弁じ
ます」「弁じますなんか講釈師の云い草だ。演舌
家はもっと上品な ^{ことば} 詞 を使って貰いたいね」と
迷亭先生また ^ま 交ぜ返す。「弁じますが下品なら何
と云ったらいいでしょう」と寒月君は少々むっと
した調子で問いかける。「迷亭のは聴いているの
か、^ま 交ぜ返しているのか判然しない。寒月君そん
な ^{やじうま} 弥次馬に構わず、さっさとやるが好い」と主
人はなるべく早く難関を切り抜けようとする。
「むっとして弁じましたる柳かな、かね」と迷亭

はあいかわらず^{ひょうぜん} 飄然たる事を云う。寒月は
思わず吹き出す。「真に処刑として絞殺を用いま
したのは、私の調べました結果によりますと、

オディセーの二十二巻目に出ております。^{すなわ} 即

^か ち彼のテレマカスがペネロピーの十二人の侍女
を絞殺するという^{くだ} 条りでございます。

^{ギリシャ} ギリシャ^ご 語で本文を朗読しても^{よろ} 宜しゅうござ
います、ちと^{てら} 銜うような気味にもなりますか
らやめに致します。四百六十五行から、四百七十

三行を御覧になると分ります」「希臘語^{うんぬん} 云々
はよした方がいい、さも希臘語が出来ますと云わ
んばかりだ、ねえ苦沙弥君」「それは僕も賛成だ、

そんな物欲しそうな事は言わん方が^{おくゆか} 奥床し
くて好い」と主人はいつになく直ちに迷亭に加担

する。^{りょうにん}両人は^{ごう}毫も希臘語が読めないのである。「それではこの両三句は今晚抜く事に致しまして次を弁じ——ええ申し上げます。

この絞殺を今から想像して見ますと、これを執行するに二つの方法があります。第一は、^か彼のテレマカスがユーミアス及びフヒリーシャスの^{たすけ}援^かを藉りて縄の一端を柱へ^{くく}括りつけます。そしてその縄の所々へ結び目を穴に開けてこの穴へ女の頭を一つずつ入れておいて、片方の^{はじ}端をぐいと引張って釣し上げたものと見るのです」

「つまり西洋洗濯屋のシャツのように女がぶら下ったと見れば好いんだろう」「その通りで、それから第二は縄の一端を前のごとく柱へ^{くく}括り付けて他の一端も始めから天井へ高く釣るので

す。そしてその高い縄から何本か別の縄を下げて、
それに結び目の輪になったのを付けて女の^{くび}頸
を入れておいて、いざと云う時に女の足台を取り
はずすと云う趣向なのです」「たとえて云うと
なわのれん　　ちょうちんだま
縄 暖 簾 の先へ 提 灯 玉 を釣したよう
けしき
な 景 色 と思えば間違はあるまい」「提灯玉と云
う玉は見た事がないから何とも申されませんが、
もしあるとすればその^{へん}辺のところかと思いま
す。――それでこれから力学的に第一の場合は到
底成立すべきものでないと云う事を証拠立てて
御覧に入れます」「面白いな」と迷亭が云うと「う
ん面白い」と主人も一致する。

「まず女が同距離に釣られると仮定します。また
一番地面に近い二人の女の首と首を^{つな}繋いでい

る縄は水平と仮定します。そこで $\alpha_1, \alpha_2, \dots, \alpha_6$ を縄が地平線と形づくる角度とし、 T_1, T_2, \dots, T_6 を縄の各部が受ける力と見做し、 $T_7 = X$ は縄のもっとも低い部分の受ける力とします。W は勿論女の体重と御承知下さい。どうです御分りになりましたか」

迷亭と主人は顔を見合せて「大抵分った」と云う。但しこの大抵と云う度合は両人が勝手に作ったのだから他人の場合には応用が出来ないかも知れない。「さて多角形に関する御存じの平均性理論によりますと、下のごとく十二の方程式が立ちます。 $T_1 \cos \alpha_1 = T_2 \cos \alpha_2, \dots$ (1) $T_2 \cos \alpha_2 = T_3 \cos \alpha_3, \dots$ (2) \dots 」 「方程式はそのくらいで沢山だろう」と主人は乱暴な事を云う。

「実はこの式が演説の首脳なんですが」と寒月君ははなはだ残り惜し気に見える。「それじゃ首脳だけは^お逐って伺う事にしようじゃないか」と迷亭も少々恐縮の^{てい}体に見受けられる。「この式を略してしまうとせっかくの力学的研究がまるで駄目になるのですが……」「何そんな遠慮はいらんから、ずんずん略すさ……」と主人は平気で云う。

「それでは仰せに従って、無理ですが略しましょう」「それがよかろう」と迷亭が妙なところで手をぱちぱちと叩く。

「それから英国へ移って論じますと、ベオウルフの中に^{こうしゅかすなわ}絞首架即ちガルガと申す字が見えますから絞罪の刑はこの時代から行われたものに違ないと思われます。ブラクストーンの説に

よるともし絞罪に処せられる罪人が、万一縄の具合で死に切れぬ時は ^{ふたたび} 再度 同様の刑罰を受くべきものだとしてありますが、妙な事にはピヤース・プローマンの中には ^{たとい} 仮令 ^し 兇漢でも二度絞める法はないと云う句があるのです。まあどっちが本当か知りませんが、悪くすると一度で死ねない事が往々実例にあるので。千七百八十六年に有名なフヒツ・ゼラルドと云う悪漢を絞めた事がありました。ところが妙なはずみで一度目には台から飛び降りるときに縄が切れてしまったのです。またやり直すと今度は縄が長過ぎて足が地面へ着いたのでやはり死ねなかったのです。とうとう三返目に見物人が手伝って ^{おうじょう} 往生 さしたと云う話しです」「やれやれ」と迷亭はこんなところ

へくると急に元気が出る。「本当に死に^{ぞこ}ない
だな」と主人まで浮かれ出す。「まだ面白い事が

あります首を^{くく}縊ると^{せい}背が^{いっすん}一寸ばかり延
びるそうです。これはたしかに医者が計って見た

のだから間違はありません」「それは新工夫だね、

どうだい^{くしゃみ}苦沙弥などはちと釣って貰っちゃあ、
一寸延びたら人間並になるかも知れないぜ」と迷

亭が主人の方を向くと、主人は案外真面目で「寒

月君、一寸くらい^{せい}背が延びて生き返る事がある

だろうか」と聞く。「それは駄目に^{きま}極っています

す。釣られて^{せきずい}脊髄が延びるからなんで、早く

云うと背が延びると云うより^{こわ}壊れるんですか

らね」「それじゃ、まあ^や止めよう」と主人は断念
する。

演説の続きは、まだなかなか長くあって寒月君は首縊りの生理作用にまで論及するはずでいたが、迷亭が無暗に ふうらいぼう 風 来 坊 のような珍語をはさ 挟 むのと、主人が時々遠慮なく 欠 あくび 伸 をするので、ついに途中でやめて帰ってしまった。その晩は寒月君がいかなる態度で、いかなる雄弁を 振 ふる ったか遠方で起った出来事の事だから吾輩には知れよう訳がない。

にさんち
二 三 日は事もなく過ぎたが、或る日の午後二時頃また迷亭先生は例のごとく くうくう 空 々 として偶然童子のごとく舞い込んで来た。座に着くと、いきなり「君、越 智 東 風 おちとうふう たかなわじけん の高 輪 事 件 を聞いたかい」と旅順陥落の号外を知らせに来たほどの勢を示す。「知らん、近頃は あ 合 わ ん から」と

主人は ^{いつも}平生の通り陰気である。「きょうはその
とうふうし
東風子の失策物語を御報道に及ぼうと思っ
て忙しいところをわざわざ来たんだよ」「またそ
んな ^{ぎょうさん}仰 ^{ふらち}山 な事を云う、君は全体不埒な男
だ」「ハハハハハ不埒と云わんよりむしろ ^{むらち}無埒
の方だろう。それだけはちょっと区別しておいて
貰わんと名誉に関係するからな」「おんなし事だ」

と主人は ^{うそぶ}嘯 いている。純然たる天然居士の再
来だ。「この前の日曜に ^{とうふうし}東風子が
たかなわせんがくじ
高輪泉岳寺に行ったんだそうだ。この寒
いのによせばいいのに――第一 ^{いまどき}今 時 泉岳寺
などへ参るのはさも東京を知らない、^{いなかもの}田舎者
のようじゃないか」「それは東風の勝手さ。君が
それを留める権利はない」「なるほど権利は ^{まさ}正

にない。権利はどうでもいいが、あの寺内に義士
遺物保存会と云う見世物があるだろう。君知って
るか」「うんにゃ」「知らない？　だって泉岳寺へ
行った事はあるだろう」「いいや」「ない？　こり
ゃ驚ろいた。道理で大変東風を弁護すると思った。

江戸っ子が泉岳寺を知らないのは^{なさ}情けない」

「知らなくても教師は^{つと}務まるからな」と主人は
いよいよ天然居士になる。「そりゃ好いが、その

展覧場へ東風が^{はい}這入って見物していると、そこへ
ドイツじん^{づれ}独逸人が夫婦連で来たんだって。それが最
初は日本語で東風に何か質問したそうだと。ところが
先生例の通り独逸語が使って見たくてたまら
ん男だろう。そら二口三口べらべらやって見たと
さ。すると存外うまく出来たんだ――あとで考え

るとそれが^{わざわい}災^{もと}の本さね」「それからどうした」と主人はついに釣り込まれる。「独逸人がおおたかげんご^{まきえ}大鷹源吾^{いんろう}の蒔絵の印籠を見て、これを買いたいが売ってくれるだろうかと聞くんだそうだ。その時東風の返事が面白いじゃないか、

日本人は清廉の^{くんし}君子ばかりだから^{とうてい}到底駄目だと云ったんだとさ。その辺は^{だいぶ}大分景気がよかったが、それから独逸人の方では^{かつこう}恰好な通弁を得たつもりでしきりに聞くそうだ」「何を？」

「それがさ、何だか分るくらいなら心配はないん

だが、早口で^{むやみ}無暗に問い掛けるものだから少しも要領を得ないのさ。たまに分るかと思うととびぐち

鳶口や掛矢の事を聞かれる。西洋の鳶口や掛矢は先生何と翻訳して善いのか習った事が無い

よ
んだから弱わらあね」「もっともだ」と主人は教師の身の上に引き^{くら} 較べて同情を表する。「ところ^{ひまじん} へ 閑 人 が物珍しそうにぽつぽつ集ってくる。^{しまい} 仕 舞 には東風と独逸人を四方から取り巻いて見物する。東風は顔を赤くしてへどもどする。

初めの勢に引き^か 易えて先生大弱りの^{てい} 体 さ」「結局どうなったんだい」「仕舞に東風が我慢出来なくなつたと見えてさいならと日本語で云ってぐんぐん帰って来たそうだ、さいならは少し変だ君の国ではさよならをさいならと云うかって聞いて見たら何やっぱりさよならですが相手が西洋人だから調和を計るために、さいならにしたんだって、東風子は苦しい時でも調和を忘れない男だと感心した」「さいならはいいが西洋人はどうし

た」「西洋人はあっけに取られて^{ぼうぜん}茫然と見て
いたそうだハハハハ面白いじゃないか」「別段面
白い事もないようだ。それをわざわざ^{しらせ}報知に来
る君の方がよっぽど面白いぜ」と主人は
まきたばこ^{ひおけ}
巻煙草の灰を火桶の中へはたき落す。
おりから
折柄格子戸のベルが飛び上るほど鳴って「御
免なさい」と鋭どい女の声がする。迷亭と主人は
思わず顔を見合わせて沈黙する。

主人のうちへ女客は^{けう}稀有だなと見てみると、か
の鋭どい声の所有主は^{ちりめん}縮緬の二枚重ねを畳
す
へ擦り付けながら^{はい}這入って来る。年は四十の上を
少し^こ超したくらいだろう。抜け上った^は生え際^{ぎわ}か
ら前髪が堤防工事のように高く^{そび}聳えて、少なく
とも顔の長さの二分の一だけ天に向ってせり出

している。眼が切り通しの坂くらいな ^{こうばい} 勾配 で、
直線に釣るし上げられて左右に対立する。直線と

^{くじら}
は 鯨 より細いという形容である。鼻だけは無
暗に大きい。人の鼻を盗んで来て顔の真中へ ^す 据え
付けたように見える。三坪ほどの小庭へ

しょうこんしゃ いしどうろう
招魂社の石灯籠 を移した時のご

とく、 ^{ひと} 独りで幅を利かしているが、何となく落
ちつかない。その鼻はいわゆる ^{かぎばな} 鍵鼻 で、ひと
たび

度は精一杯高くなって見たが、これではあんま
りだと中途から ^{けんそん} 謙遜 して、先の方へ行くと、

初めの勢に似ず垂れかかって、下にある唇を ^{のぞ} 覗

き込んでいる。かく ^{いちじ} 著るしい鼻だから、この
女が物を言うときは口が物を言うと言わんより、

鼻が口をきいているとしか思われない。吾輩はこ

の偉大なる鼻に敬意を表するため、以来はこの女
を称して鼻^{はなこ}子^こ鼻子と呼ぶつもりである。鼻子は
先ず初対面の挨拶を終って「どうも結構な
おすまい^{おすまい}
御住居^ねですこと」と座敷中を睨め廻わす。主人
は「嘘をつけ」と腹の中で言ったまま、ぷかぷか
たばこ^{たばこ}
煙草をふかす。迷亭は天井を見ながら「君、あ
りゃ雨^{あまも}洩りか、板の木^{もくめ}目か、妙な模様が出て
いるぜ」と暗に主人を^{うな}促^{うな}がす。「無論雨の洩り
さ」と主人が答えると「結構だなあ」と迷亭がす
まして云う。鼻子は社交を知らぬ人達だと腹の中
で^{いきどお}憤^{ていざ}る。しばらくは三人鼎坐のまま無言
である。

「ちと伺いたい事があって、参ったんですが」と
鼻子は再び話の口を切る。「はあ」と主人が極め

て冷淡に受ける。これではならぬと鼻子は、「実は私はつい御近所で――あの向う横丁のかどやしき角屋敷なんですが」「あの大きな西洋館の倉のあるうちですか、道理ですこには金田と云う標札が出ていますな」と主人はようやく金田の西洋館と、金田の倉を認識したようだが金田夫人に対する尊敬の度合は前と同様である。「実は宿が出まして、御話を伺うんですが会社の方が大変忙がしいもんですから」と今度は少し利いたろうという眼付をする。主人は一向動じない。鼻子の先刻からの言葉遣いが初対面の女としてはあまり存在過ぎるのですでに不平なのである。「会社でも一つじゃ無いんです、二つも三つも兼ねているんです。それにどの会社

でも重役なんで――多分御存知でしょうが」これでも恐れ入らぬかと云う顔付をする。元来この主人は博士とか大学教授とかいうと非常に恐縮する男であるが、妙な事には実業家に対する尊敬の度は極めて低い。実業家よりも中学校の先生の方がえらいと信じている。よし信じておらんでも、融通の利かぬ性質として、到底実業家、金満家の恩顧を^{こうむ}蒙^{おぼつか}る事は^{あき}覚^{あき}束^{あき}ないと諦^{あき}らめている。いくら先方が勢力家でも、財産家でも、自分が世話になる見込のないと思いついた人の利害には極めて無頓着である。それだから学者社会を除いて他の方面の事には極めて^{うかつ}迂^{うかつ}濶^{うかつ}で、ことに実業界などでは、どこに、だれが何をしているか一向知らん。知っても尊敬畏服の念は^{ごう}毫^{ごう}も起

らんのである。鼻子の方では ^{あめ}天 が ^{した}下 の一隅に
こんな変人がやはり日光に照らされて生活して
いようとは夢にも知らない。今まで世の中の人間
にも ^{だいぶ}大 分 接して見たが、金田の ^{さい}妻 ですと名乗
って、急に取扱いの変らない場合はない、どこの
会へ出ても、どんな身分の高い人の前でも立派に
金田夫人を通して行かれる、いわんやこんな
くすぶ ^{わたし}煙 り返った老書生においてをやで、私 の
うち ^{かどやしき}家は向う横丁の 角 屋 敷 ですとさえ云えば
職業などは聞かぬ先から驚くだろうと予期して
いたのである。

「金田って人を知ってるか」と主人は ^{むぞうさ}無 雑 作 に
迷亭に聞く。「知ってるとも、金田さんは僕の伯
父の友達だ。この間なんざ園遊会へおいでになっ

た」と迷亭は真面目な返事をする。「へえ、君の
伯父さんてえな誰だい」「^{まきやまだんしゃく}牧山男爵さ」
と迷亭はいよいよ真面目である。主人が何か云お
うとして云わぬ先に、鼻子は急に向き直って迷亭
の方を見る。迷亭は^{おおしまつむぎ}大島紬に
^{こわたりさらさ}こわたりさらさ
古渡更紗か何か重ねてすましている。「お
や、あなたが牧山様の――何でいらっしゃいます
か、ちっとも存じませんで、はなはだ失礼を致し
ました。牧山様には始終御世話になると、^{やど}宿で
^{おうわさ}毎々御噂を致しております」と急に^{ていねい}丁寧
な言葉使をして、おまけに御辞儀までする、迷亭
は「へええ何、ハハハハ」と笑っている。主人は
^けあっ気にとられて無言で二人を見ている。「たし
か娘の^{えんぺん}縁辺の事につきましてもいろいろ牧

山さまへ御心配を願いましたそうで……」「へえ
一、そうですか」とこればかりは迷亭にもちと

とうとつ
唐 突 過ぎたと見えてちょっと魂^{たまげ}消^{たまげ}たよう
な声を出す。「実は方々からくれくれと申し込は
ございますが、こちらの身分もあるものでござい

ますから、滅^{めった}多^{ところ}な所へも片付けられませんの
で……」「ごもっともで」と迷亭はようやく安心
する。「それについて、あなたに伺おうと思って
上がったんですがね」と鼻子は主人の方を見て急

ぞんざい
に 存 在 な言葉に返る。「あなたの所へ
みずしまかんげつ
水 島 寒 月 という男が度^{たび}々^{たび}上がるそ
うですが、あの人は全体どんな風な人でしょう」

「寒月の事を聞いて、何^{なん}にするんです」と主人
にがにが
は 苦 々 しく云う。「やはり御令嬢の御婚儀上

の関係で、寒月君の^{せいこう}性^{いっぱん}行^の一^斑を御承知
になりたいという訳でしょう」と迷亭が氣転^きを利
かす。「それが伺えれば大変都合が^{よろ}宜^{しい}ので
ございますが……」「それじゃ、御令嬢を寒月
におやりになりたいとおっしゃるんで」「やりたい
なんてえんじゃ無いんです」と鼻子は急に主人を
参らせる。「ほかにもだんだん口が有るんですか
ら、無理に貰っていただかないだって困りやしま
せん」「それじゃ寒月の事なんか聞かんでも好い
でしょう」と主人も^{やつき}躍^起となる。「しかし御隠
しなさる訳もないでしょう」と鼻子も少々喧嘩腰
になる。迷亭は双方の間に坐って、^{ぎんぎせる}銀^煙煙^管管を
^{ぐんばいうちわ}軍^配配^団団^扇扇のように持って、^{うち}心の^{うち}裡^でで
^{はつけ}八^卦卦よいやよいやと怒鳴っている。「じゃあ寒

月の方では是非貰いたいとでも云ったのですか」と
主人が正面から鉄砲を^{くら}喰^くわせる。「貰いたいと
云ったんじゃないんですけれども……」「貰いた
いだろうと思っていらっしゃるんですか」と主人
はこの婦人鉄砲に限ると^{さと}覺^さったらしい。「話し
はそんなに運んでるんじゃないありませんが――寒
月さんだって^{まんざら}満^{まん}更^{ざら}嬉しくない事もないでし
ょう」と土俵際で持ち直す。「寒月が何かその御
令嬢に^{れんちゃく}恋^{れん}着^{ちゃく}したというような事でもあり
ますか」あるなら云って見ろと云う^{けんまく}権^{けん}幕^{まく}で主
人は^そ反^そり返る。「まあ、そんな^{けんとう}見^{けん}当^{とう}でしょう
ね」今度は主人の鉄砲が少しも功を奏しない。今
まで^{おもしろげ}面白^{おもしろ}氣^げに^{ぎょうじ}行^{ぎょう}司^じ氣取りで見物してい
た迷亭も鼻子の^{いちごん}一^{いち}言^{ごん}に好奇心を^{ちょうはつ}挑^{ちょう}撥^{はつ}

されたものと見えて、煙^{きせる}管を置いて前へ乗り出す。「寒月が御嬢さんに付け^つ文^{ぶみ}でもしたんですか、こりゃ愉快だ、新年になって逸話がまた一つ^ふ殖えて話しの好材料になる」と一人で喜んでいる。

「付け文じゃないんです、もっと烈しいんでさあ、御二人とも御承知じゃありませんか」と鼻子はおつ

乙^{おつ}にからまって来る。「君知ってるか」と主人は狐付きのような顔をして迷亭に聞く。迷亭もばかげ

馬鹿気^{ばかげ}た調子で「僕は知らん、知っていりゃ君だ」とつまらんとこ^{けんそん}ろで謙遜する。「いえおふたりとも

御^お両^{りやう}人^{にん}共^{ども}御存じの事ですよ」と鼻子だけ大得意である。「へえー」と御両人は一度に感じ入る。

「御忘れになったら^{わた}私^{わたし}しから御話をしましう。去年の暮向島の阿部さんの御屋敷で演奏会が

あつて寒月さんも出掛けたじゃありませんか、その晩歸りに ^{あずまばし} 吾妻橋 で何かあったでしょう——詳しい事は言いますまい、当人の御迷惑になるかも知れませんか——あれだけの証拠がありゃ充分だと思いますが、どんなものでしょう」

^{ダイヤ}と金剛石入りの指環の ^{はま} 嵌った指を、膝の上へ ^{なら} 併べて、つんと居ずまいを直す。偉大なる鼻がますます異彩を放って、迷亭も主人も有れども無きがごとき有様である。

主人は無論、さすがの迷亭もこの ^{ふいうち} 不意撃には ^{きも} 胆を抜かれたものと見えて、しばらくは ^{ぼうぜん} 呆然として ^{おこり} 瘡の落ちた病人のように坐っていたが、^{きょうがく} 驚愕の ^{たが} 箍がゆるんでだんだん持前の本態に復すると共に、滑稽と云う感じが

一度に^{とっかん} 唸 喊 してくる。^{ふたり} 両 人は申し合せたごとく「ハハハハハ」と笑い崩れる。鼻子ばかりは少し当てがはずれて、この際笑うのははなはだ失

礼だと両人を^{にら} 睨 みつける。「あれが御嬢さんですか、なるほどこりゃいい、おっしゃる通りだ、

^{くしゃみ} ねえ 苦 沙 弥 君、全く寒月はお嬢さんを^{おも} 恋 ってるに相違ないね……もう隠したってしょうがないから白状しようじゃないか」「ウフン」と主人は云ったままである。「本当に御隠しなさってもいけませんよ、ちゃんと種は上ってるんですからね」と鼻子はまた得意になる。「こうなりゃ仕方がない。何でも寒月君に関する事実は御参考のために陳述するさ、おい苦沙弥君、君が主人だのに、

そう、にやにや笑っていては^{らち} 埒 があかんじゃな

いか、実に秘密というものは恐ろしいものだねえ。

いくら隠しても、どこからか^{ろけん}露見するからな。

——しかし不思議と云えば不思議ですねえ、金田の奥さん、どうしてこの秘密を御探知になったん

です、実に驚ろきますな」と迷亭は一人で^{しゃべ}喋舌

る。「^{わた}私しの方だって、ぬかりはありませんやね」と鼻子はしたり顔をする。「あんまり、ぬかり

りが無さ過ぎるようですぜ。一体誰に御聞きにな

ったんです」「じきこの裏にいる車屋の^{かみ}神さんからです」「あの黒猫のいる車屋ですか」と主人

は眼を丸くする。「ええ、寒月さんの事じゃ、よっぽど使いましたよ。寒月さんが、ここへ来る度に、どんな話しをするかと思って車屋の神さんを

頼んで一々知らせて貰うんです」「そりゃ^{ひど}苛い」

と主人は大きな声を出す。「なあに、あなたが何をなさろうとおっしゃろうと、それに構ってるんじゃないんです。寒月さんの事だけですよ」「寒月の事だって、誰の事だって――全体あの車屋の神さんは気に食わん奴だ」と主人は一人 ^{おこ}怒り出す。「しかしあなたの垣根のそとへ来て立っているのは向うの勝手じゃありませんか、話しが聞えてわるけりゃもっと小さい声でなさるか、もっと大きなうちへ ^{おはい}御這入んなさるがいいでしょう」と鼻子は少しも赤面した様子がない。「車屋ばかりじゃありません。 ^{しんみち}新 ^{にげんきん}道の二 ^{だいぶ}絃 ^だ琴の師匠からも大分いろいろな事を聞いています」「寒月の事をですか」「寒月さんばかりの事じゃありません」と少し ^{すご}凄 ^い事を云う。主人は恐れ入るか

と思うと「あの師匠はいやに上品ぶって自分だけ人間らしい顔をしている、馬鹿野郎です」「^{はばか}懾り様、女ですよ。野郎は^{おかどちが}御門違いです」と鼻子の言葉使いはますます^{おさと}御里をあらわして来る。これではまるで喧嘩をしに来たようなものであるが、そこへ行くと迷亭はやはり迷亭でこの談判を面白そうに聞いている。^{てっかいせん}鉄枌仙人^{にん}が^{しゃも}軍鶏^{けあ}の蹴合いを見るような顔をして平気で聞いている。

^{あっこう}悪口の交換では到底鼻子の敵でないと自覚した主人は、しばらく沈黙を守るのやむを得ざるに至らしめられていたが、ようやく思い付いたか「あなたは寒月の方から御嬢さんに恋着したようにばかりおっしゃるが、^{わたし}私の聞いたんじゃ、

少し違いますぜ、ねえ迷亭君」と迷亭の救いを求める。「うん、あの時の話しじゃ御嬢さんの方が、始め病気になって――何だか ^{うわごと} 譫 語 をいったように聞いたね」「なにそんな事はありません」と金田夫人は判然たる直線流の言葉使いをする。

「それでも寒月はたしかに〇〇博士の夫人から聞いたと云っていましたぜ」「それがこっちの手なんでさあ、〇〇博士の奥さんを頼んで寒月さんの気を引いて見たんでさあね」「〇〇の奥さんは、それを承知で引き受けたんですか」「ええ。引き受けて貰うたって、ただじゃ出来ませんやね、それやこれやでいろいろ物を使っているんですから」「是非寒月君の事を根堀り葉堀り御聞きにならなくっちゃ御帰りにならないと云う決心です

かね」と迷亭も少し気持ちを悪くしたと見えて、いつになく手^{てざわ}障りのあらい言葉を使う。「いいや君、話したって損の行く事じゃなし、話そうじゃないか苦沙弥君――奥さん、^{わたし}私でも苦沙弥でも寒月君に関する事実で^{さしつか}差支えのない事は、みんな話しますからね、――そう、順を立ててだんだん聞いて下さると都合がいいですね」

鼻子はようやく^{なっとく}納得してそろそろ質問を呈出する。一時荒立てた言葉使いも迷亭に対してはまたもとのごとく叮嚀になる。「寒月さんも理学士だそうですが、全体どんな事を専門にしているのでございます」「大学院では地球の磁気の研究をしています」と主人が真面目に答える。不幸にしてその意味が鼻子には分らんものだから

「へえー」とは云ったが^{けげん}怪訝な顔をしている。
「それを勉強すると博士になれませんか」と聞く。
「博士にならなければやれないとおっしゃる
んですか」と主人は不愉快そうに尋ねる。「ええ。
ただの学士じゃね、いくらでもありますからね」
と鼻子は平気で答える。主人は迷亭を見ていよいよ
いやな顔をする。「博士になるかならんかは僕
等も保証する事が出来んから、ほかの事を聞いて
いただく事にしよう」と迷亭もあまり好い機嫌で
はない。「近頃でもその地球の――何かを勉強し
ているんでございましょうか」「^{にさんちまえ}二三日前は
首縊りの力学と云う研究の結果を理学協会で演
説しました」と主人は何の気も付かずに云う。「お
やいやだ、首縊りだなんて、よっぽど変人ですね

え。そんな首縊りや何かやってたんじゃ、とても
博士にはなれますまいね」「本人が首を^{くく}縊^くっちゃあむずかしいですが、首縊りの力学なら成れないとも限らんです」「そうでしょうか」と今度は
主人の方を見て顔色を^{うかが}窺^うう。悲しい事に力学
と云う意味がわからなので落ちつきかねている。
しかしこれしきの事を尋ねては金田夫人の面目
に關すると思つてか、ただ相手の顔色で^{はっけ}八^は卦^けを
立てて見る。主人の顔は渋い。「そのほかになに
か、分り^{やす}易^いいものを勉強しておりますまいか」
「そうですな、せんだって団栗のスタビリチーを
論じて併せて天体の運行に及ぶと云う論文を書
いた事があります」「^{どんぐり}団栗^栗なんぞでも大学校
で勉強するものでしょうか」「さあ僕も^{しろ}素^{うと}人

だからよく分らんが、何しろ、寒月君がやるくらいなんだから、研究する価値があると見えますな」と迷亭はすまして冷かす。鼻子は学問上の質問は手に合わんと断念したものと見えて、今度は話題を転ずる。「御話は違いますが――この御正

月に ^{しいたけ} 椎 茸 を食べて前歯を二枚折ったそうじゃございませんか」「ええその欠けたところに

^{くうやもち} 空 也 餅 がくっ付いていましてね」と迷亭はこ

の質問こそ吾 ^{なわばりうち} 縄 張 内 だと急に浮かれ出す。

「色気のない人じゃございませんか、何だって

^{ようじ} 楊 子 を使わないんでしょう」「今度逢ったら注意しておきましょう」と主人がくすくす笑う。「椎

茸で歯がかけるくらいじゃ、よほど歯の ^{しょう} 性 が

悪いと思われませんが、^{いかが} 如何 なものでしょう」「善

いとは言われますまいな——ねえ迷亭」「善い事

はないがちょっと ^{あいきょう}愛嬌 があるよ。あれぎり、

まだ ^つ 詰めないところが妙だ。今だに空也餅
ひっかけどころ

引 掛 所 になってるなあ奇観だぜ」「齒を

^{こづかい} 填める 小遣 がないので欠けなりにしておく

んですか、または物好きで欠けなりにしておくん

でしょうか」「何も永く ^{まえ} 前 齒 欠 成 を名乗る

訳でもないでしょうから御安心なさいよ」と迷亭

の機嫌はだんだん回復してくる。鼻子はまた問題

を改める。「何か御宅に手紙かなんぞ当人の書いた

ものでもございますならちょっと拝見したい

もんでございますが」「 ^{はがき} 端書 なら沢山あります、

御覧なさい」と主人は書斎から三四十枚持って来

る。「そんなに沢山拝見しないでも——その内の

二三枚だけ……」「どれどれ僕が好いのを^よ撰^よってやろう」と迷亭先生は「これなぞあ面白いでしょう」と一枚の絵葉書を出す。「おや絵もかくんでございますか、なかなか器用ですね、どれ拝見しましょう」と眺めていたが「あらいやだ、^{たぬき}狸だよ。何だって撰りに撰って狸なんぞかくんでしょうね——それでも狸と見えるから不思議だよ」と少し感心する。「その文句を読んで御覧なさい」と主人が笑いながら云う。鼻子は下女が新聞を読むように読み出す。「旧暦の^{とし}歳^よの夜、山の狸が園遊会をやって^{さかん}盛^{さかん}に舞踏します。その歌にいわ^こく、来いさ、^よとしの夜で、^{おやまふみ}御山婦美も来まいぞ。スッポコポンノポン」「何ですこりゃ、人を馬鹿にしているじゃございせんか」と鼻子は

不平の^{てい}体である。「この^{てんにょ}天女は御気に入
りませんか」と迷亭がまた一枚出す。見ると天女が
はごろも^{びわ ひ}羽衣を着て琵琶を弾いている。「この天女の
鼻が少し小さ過ぎるようですが」「何、それが人
並ですよ、鼻より文句を読んで御覧なさい」文句

にはこうある。^{むか}「昔しある所に一人の天文学者
がありました。ある^よ夜いつものように高い台に登
って、一心に星を見ていますと、空に美しい天女
が現われ、この世では聞かれぬほどの微妙な音楽
を奏し出したので、天文学者は身に沁^しむ寒さも忘
れて聞き惚^ほれてしまいました。朝見るとその天文
学者の死^{しがい}骸に^{しも}霜が真白に降っていました。こ
れは本当の^{はなし}噺だと、あのうそつきの^{じい}爺やが
申しました」「何の事ですこりゃ、意味も何もな

いじゃありませんか、これでも理学士で通るんですかね。ちっと文芸倶楽部でも読んだらよさそうなものですがねえ」と寒月君さんごんにやられる。

迷亭は面白半分に「こりゃどうです」と三枚目を

出す。今度は活版で帆^{ほかけぶね}懸舟が印刷してあって、例のごとくその下に何か書き散らしてある。「よ

べ^{とま}の泊りの十^{じゅう}六^{ろく}小女^{こじょ}郎、親がないとて、ありそ^{ねざめ}荒磯の千鳥、さよの寝覚の千鳥に泣いた、親は船乗り波の底」「うまいのねえ、感心だ事、話

せるじゃありませんか」「話せますかな」「ええこれなら三味線に乗りますよ」「三味線に乗りゃ本

物だ。こりゃ^{いかが}如何です」と迷亭は^{むやみ}無暗に出す。

「いえ、もうこれだけ拝見すれば、ほかのは沢山

で、そんなに^{やぼ}野暮でないんだと云う事は分りまし

たから」と一人で合点している。鼻子はこれで寒月に関する大抵の質問を^お卒えたものと見えて、「これははなはだ失礼を致しました。どうか私の参った事は寒月さんへは内々に願います」とえてかって得手勝手な要求をする。寒月の事は何でも聞かなければならないが、自分の方の事は一切寒月へ知らしてはならないと云う方針と見える。迷亭も主人も「はあ」と気のない返事をする。「いずれその内御礼は致しますから」と念を入れて言いながら立つ。見送りに出た^{ふたり}両人が席へ返るや否や迷亭が「ありゃ何だい」と云うと主人も「ありゃ何だい」と双方から同じ問をかける。奥の部屋で細君が^{こら}怵え切れなかったと見えてクツクツ笑う声が聞える。迷亭は大きな声を出して「奥さん

奥さん、月並の標本が来ましたぜ。月並もあのくら
いになるとなかなか^{ふる}振っていますなあ。さあ
遠慮はいらんから、存分御笑いなさい」

主人は不満な^{こうき}口気で「第一気に喰わん顔だ」
と^{にく}悪らしそうに云うと、迷亭はすぐ引きうけて
「鼻が顔の中央に陣取って^{おつ}乙に構えているな
あ」とあとを付ける。「しかも曲っていなあ」「少
ねこそ^{ねこそ}し猫背だね。猫背の鼻は、ちと^{きばつ}奇抜過ぎる」
と面白そうに笑う。「^{おっと}夫を^{こく}剋する顔だ」と
主人はなお^{くや}口惜しそうである。「十九世紀で売れ
残って、二十世紀で^{たなざら}店曝しに逢うと云う^{そう}相
だ」と迷亭は妙な事ばかり云う。ところへ妻君が
奥の^ま間から出て来て、女だけに「あんまり悪口を
おっしゃると、また車屋の^{かみ}神さんにいつけられ

ますよ」と注意する。「少しいづける方が薬ですよ、奥さん」「しかし顔の^{ざんそ}讒訴などをなさるのは、あまり下等ですわ、誰だって好んであんな鼻を持ってる訳でもありませんから——それに相手が婦人ですからね、あんまり^{ひど}苛いわ」と鼻子の鼻を弁護すると、同時に自分の^{ようぼう}容貌も間接に弁護しておく。「何ひどいものか、あんなのは婦人じゃない、愚人だ、ねえ迷亭君」「愚人かも知れんが、なかなかえら者だ、^{だいぶ}大分^か引き搔かれたじゃないか」「全体教師を何と心得ているんだろう」「裏の車屋くらいに心得ているのさ。ああ云う人物に尊敬されるには博士になるに限るよ、一体博士になっておかんのが君の^{ふりようけん}不了見さ、ねえ奥さん、そうでしょう」と迷亭は笑いな

がら細君を^{かえり}顧みる。「博士なんて到底駄目ですよ」と主人は細君にまで見離される。「これでも今になるかも知れん、^{けいべつ}軽蔑するな。貴様なぞは知るまいが^{むか}昔しアイソクラチスと云う人は九十四歳で大著述をした。ソフォクリスが傑作を出して天下を驚かしたのは、ほとんど百歳の高齢だった。シモニジスは八十で妙詩を作った。おれだって……」「馬鹿馬鹿しいわ、あなたのような胃病でそんなに永く生きられるものですか」と細君はちゃんと主人の寿命を予算している。「失敬な、――甘木さんへ行って聞いて見ろ――元来御前がこんな^{しわくちゃ}皺^{くろもめん}苦茶な黒木綿の羽織や、つぎだらけの着物を着せておくから、あんな女に馬鹿にされるんだ。あしたから迷亭の着ているよ

うな奴を着るから出しておけ」「出しておけって、
あんな立派な^{おめし}御召はござんせんわ。金田の奥さん
が迷亭さんに叮嚀になったのは、伯父さんの名
前を聞いてからですよ。着物の^{とが}咎じゃございま
せん」と細君うまく責任を^の逃がれる。

主人は伯父さんと云う言葉を聞いて急に思い
出したように「君に伯父があると云う事は、今日
始めて聞いた。今までついに^{うわさ}噂をした事がない
じゃないか、本当にあるのかい」と迷亭に聞く。
迷亭は待ってたと云わぬばかりに「うんその伯父
さ、その伯父が馬鹿に^{がんぶつ}頑物でねえ——やはり
その十九世紀から連綿と^{こんにち}今日まで生き延び
ているんだがね」と主人夫婦を半々に見る。「オ
ホホホホ面白い事ばかりおっしゃって、どこに

生きていらっしゃるんです」「静岡に生きてますがね、それがただ生きてるんじゃ無いです。頭に
ちょん ^{まげ} 髷 を頂いて生きてるんだから恐縮しま
さあ。帽子を ^{かぶ} 被 れってえと、おれはこの年にな
るが、まだ帽子を被るほど寒さを感じた事はない
と威張ってるんです——寒いから、もっと ^ね 寝てい
らっしゃいと云うと、人間は四時間寝れば充分だ。
四時間以上寝るのは ^{ぜいたく} 贅 沢 の沙汰だって朝暗
いうちから起きてくるんです。それでね、おれも
睡眠時間を四時間に縮めるには、永年修業をした
もんだ、若いうちはどうしても ^{ねむ} 眠 たくていかな
んだが、近頃に至って始めて随処任意の
^{しよきょう} 庶 境 に入ってはなはだ嬉しいと自慢する
んです。六十七になって寝られなくなるなあたり

前でさあ。修業も ^{へちま い} 糸 瓜 も入ったものじゃないの
に当人は全く ^{こつき} 克 己 の力で成功したと思ってる
んですからね。それで外出する時には、きつと
てっせん

鉄 扇 をもって出るんですがね」「なににする
んだい」「何にするんだか分らない、ただ持って
出るんだね。まあステッキの代りくらいに考えて
るかも知れんよ。ところがせんだって妙な事があ
りましてね」と今度は細君の方へ話しかける。「へ

えー」と細君が ^{さ あい} 差し 合 のない返事をする。「
^{ことし} 此 年 の春突然手紙を寄こして山高帽子とフロ
ックコートに至急送れと云うんです。ちょっと驚
ろいたから、郵便で問い返したところが老人自身
が着ると云う返事が来ました。二十三日に静岡で
^{しゅくしょうかい} 祝 捷 会 があるからそれまでに ^ま 間に合

うように、至急調達しろと云う命令なんです。ところがおかしいのは命令中にこうあるんです。帽子は好い加減な大きさのを買ってくれ、洋服も寸法を見計らって ^{だいまる}大丸へ注文してくれ……」

「近頃は丸でも洋服を仕立てるのかい」「なあに、先生、^{しろきや}白木屋と間違えたんだあね」「寸法を見計ってくれたって無理じゃないか」「そこが伯父の伯父たるところさ」「どうした?」「仕方がないから見計らって送ってやった」「君も乱暴だな。それで間に合ったのかい」「まあ、どうにか、こうにかおっついたんだろう。国の新聞を見たら、当日牧山翁は珍らしくフロックコートにて、例の ^{てっせん}鉄扇を持ち……」「鉄扇だけは離さなかったと見えるね」「うん死んだら棺の中へ鉄扇だけは

入れてやろうと思っているよ」「それでも帽子も洋服も、うまい具合に着られて善かった」「ところが大間違さ。僕も無事に行つてありがたいと思つてると、しばらくして国から小包が届いたから、何か礼でもくれた事と思つて開けて見たら例の山高帽子さ、手紙が添えてあつてね、せっかく御

求め^{くだされそうら}被下候えども少々大きく
そろあいだ^{おつか}候間、帽子屋へ御遣わしの上、御縮め
くだされたくそろ^{こがわせ}被下度候。縮め賃は小為替にて此方
より^{おんおくりもうしあぐべきそろ}御送可申上候とあるのさ」

「なるほど^{うかつ}迂濶だな」と主人は^{おの}己れより迂濶
なものの天下にある事を発見して^{おおい}大に満足
の^{てい}体に見える。やがて「それから、どうした」と聞く。「どうするつたつて仕方がないから僕が

頂戴して^{かぶ}被^ていてらあ」「あの帽子かあ」と主人がにやにや笑う。「その^{かた}方^が男爵でいらっしゃるんですか」と細君が不思議そうに尋ねる。「誰がです」「その鉄扇の伯父さまが」「なあに漢学者

でさあ、若い時^{せいどう}聖^{しゅ}堂^{しがく}で朱子学か、何かにこり固まったものだから、電気灯の下で^{うやうや}恭^{まげ}しくちょん^{まげ}髷^を頂いているんです。仕方ありません」とやたらに^{あご}顎^なを撫で廻す。「それでも君は、さっきの女に牧山男爵と云ったようだぜ」

「そうおっしゃいましたよ、私も茶の間で聞いておりました」と細君もこれだけは主人の意見に同意する。「そうでしたかなアハハハハハ」と迷亭

^{わけ}は^{うそ}訳もなく笑う。「そりゃ嘘ですよ。僕に男爵の伯父がありゃ、今頃は局長くらいになってい

まさあ」と平気なものである。「何だか変だと思
った」と主人は嬉しそうな、心配そうな顔付をす
る。「あらまあ、よく真面目であんな嘘が付けま
すねえ。あなたもよっぽど^{ほら}法螺が御上手でいらっ
しゃる事」と細君は非常に感心する。「僕より、
あの女の方が^う上^て手でさあ」「あなただって御負
けなさる^{きづか}氣遣いはありません」「しかし奥さん、
僕の法螺は単なる法螺ですよ。あの女のは、みん
な魂胆があつて、^{いわ}曰く付きの嘘ですぜ。たちが
悪いです。^{さるぢえ}猿智慧から割り出した術数と、天来
の滑稽趣味と混同されちゃ、コメディーの神様も
活眼の士なきを嘆ぜざるを得ざる訳に立ち至り
ますからな」主人は^{ふしめ}俯目になって「どうだか」
と云う。妻君は笑いながら「同じ事ですわ」と云

う。

吾輩は今まで向う横丁へ足を踏み込んだ事はない。^{かどやしき}角屋敷の金田とは、どんな構えか見た事は無論ない。聞いた事さえ今が始めてである。

主人の^{うち}家で実業家が話頭に^{のぼ}上った事は一返もないので、主人の飯を食う吾輩までがこの方面には単に無関係なるのみならず、はなはだ冷淡で

あった。しかるに先刻^{はか}図らずも鼻子の訪問を受けて、^{よそ}余所ながらその談話を拝聴し、その令嬢の^{えんび}艶美を想像し、またその^{ふうき}富貴、権勢を思い浮べて見ると、猫ながら安閑として^{えんがわ}椽側に寝転んでいられなくなった。しかのみならず吾輩は寒月君に対してはなはだ同情の至りに堪えん。先方

では博士の奥さんやら、車屋の^{かみ}神さんやら、

にげんきん てんしょういん
二 絃 琴 の 天 璋 院 まで買収して知ら

ぬ^ま間に、前歯の欠けたのさえ探偵しているのに、
寒月君の方ではただニヤニヤして羽織の紐ばかり
気にしているのは、いかに卒業したての理学士
にせよ、あまり能がなさ過ぎる。と言って、ああ

云う偉大な鼻を顔の^{うち}中 に安置している女の事
だから、滅^{めった}多 なる者では寄り付ける訳の者ではな
い。こう云う事件に関しては主人はむしろ無頓着

でかつあまりに^{ぜに}錢 がなさ過ぎる。迷亭は錢に不
自由はしないが、あんな偶然童子だから、寒月に

たす^{べんぎ} 援 けを与える 便 宜 は ^{すくな} 尠 かるう。して見る

^{かわいそう}と 可 哀 相 なのは首縊りの力学を演説する先
生ばかりとなる。吾輩でも奮発して、敵城へ乗り
込んでその動静を偵察してやらなくては、あまり

不公平である。吾輩は猫だけれど、エピクテタス
を読んで机の上へ叩きつけるくらいな学者の
うち ^{きぐう} 家に寄寓する猫で、世間一般の ^{ちびょう} 痴猫、
^{ぐびょう} 愚猫とは少く ^{せん} 撰 ^{こと} を殊にしている。この
冒険をあえてするくらいの義侠心は ^{もと} 固より
^{しっぽ} 尻尾の先に畳み込んである。何も寒月君に恩に
なつたと云う訳もないが、これはただに個人のた
めにする ^{けっきそうきょう} 血氣躁狂の沙汰ではない。大き
く云えば公平を好み中庸を愛する天意を現実
に ^{あっぱれ} する天晴な美挙だ。人の許諾を ^へ 経ずして
^{あずまばし} 吾妻橋事件などを至る処に振り廻わす以上
は、人の軒下に犬を忍ばして、その報道を得々と
して逢う人に ^{ふいちょう} 吹聴する以上は、車夫、
^{ばてい} 馬丁、^{ぶらいかん} 無頼漢、^{ごろつき} ごろつき書生、

ひやといばばあ　　ようば　あんま　とんま
日　雇　婆、産婆、妖　婆、按　摩、頓　馬に

至るまでを使用して国家有用の材に^{はん}煩　を及ぼ

して^{かえり}顧　みざる以上は――猫にも覚悟がある。

幸い天気も好い、^{しもどけ}霜　解　は少々閉口するが道の
ためには一命もすてる。足の裏へ泥が着いて、

^{えんがわ}椽　側　へ梅の花の印を押すくらいな事は、ただ

^{おさん}御　三　の迷惑にはなるか知れんが、吾輩の苦痛と

は申されない。^{あす}翌日とも云わずこれから出掛けよ

うと^{ゆうもうしょうじん}勇　猛　精　進　の大決心を起して台所
まで飛んで出たが「待てよ」と考えた。吾輩は猫

として進化の極度に達しているのみならず、脳力
の発達においてはあえて中学の三年生に劣らざ

るつもりであるが、悲しいかな^{のど}咽喉の構造だけは

どこまでも猫なので人間の言語が^{しゃべ}饒　舌　れない。

よし首尾よく金田邸へ忍び込んで、充分敵の情勢
を見届けたところで、^{かんじん}肝心の寒月君に教えて
やる訳に行かない。主人にも迷亭先生にも話せな
い。話せないとすれば土中にある^{ダイヤモンド}金剛石の
日を受けて光らぬと同じ事で、せっかくの智識も
無用の長物となる。これは^ぐ愚だ、やめようかしら
んと上り口で^{たたず}佇んで見た。

しかし一度思い立った事を途中でやめるのは、
^{ゆうだち}白雨が来るかと待っている時^{とも}黒雲共隣国
へ通り過ぎたように、何となく残り惜しい。それ
も非がこっちにあれば格別だが、いわゆる正義の
ため、人道のためなら、たとい^{むだじに}無駄死をやるま
でも進むのが、義務を知る男児の本懐であろう。
無駄骨を折り、無駄足を^{よご}汚すくらいは猫として

適當のところである。猫と生れた^{いんが}因果で寒月、
迷亭、苦沙弥諸先生と三寸の^{ぜつとう}舌頭に相互の思
想を交換する^{ぎりょう}技倆はないが、猫だけに忍びの
術は諸先生より達者である。他人の出来ぬ事を
^{じょうじゅ}成就するのはそれ自身において愉快であ
^{われ}る。吾一箇でも、金田の内幕を知るのは、誰も
知らぬより愉快である。人に告げられんでも人に
知られているなと云う自覚を彼等に与うるだけ
が愉快である。こんなに愉快が続々出て来ては行
かずにはいられない。やはり行く事に致そう。

向う横町へ来て見ると、聞いた通りの西洋館が
かどじめん わがものがお
角地面を吾物顔に占領している。この
主人もこの西洋館のごとく^{ごうまん}傲慢に構えてい
るんだらうと、門を^{はい}這入ってその建築を^{なが}眺めて

見たがただ人を威圧しようと、二階作りが無意味
に突っ立っているほかに何等の能もない構造で
あった。迷亭のいわゆる ^{つきなみ}月並 とはこれであろ
うか。玄関を右に見て、植込の中を通り抜けて、
勝手口へ廻る。さすがに勝手は広い、苦沙弥先生
の台所の十倍はたしかにある。せんだって日本新
聞に詳しく書いてあった ^{おおくまはく}大隈伯 の勝手にも
劣るまいと思うくらい整然とぴかぴかしてい
る。「模範勝手だな」と ^{はい}這入り込む。見ると
^{しっくい}漆喰 で叩き上げた二坪ほどの土間に、例の車
屋の ^{かみ}神さんが立ちながら、^{ごはんた}御飯焚きと車夫を
相手にしきりに何か弁じている。こいつは
^{けんのん}けんのおん ^{みずおけ}みずおけ だと水桶の裏へかくれる。「あの教
師あ、うちの旦那の名を知らないのかね」と

めしたき

飯 焚 が云う。「知らねえ事があるもんか、こ

かいわい

の 界 限 で金田さんの御屋敷を知らなけりゃ

かたわ

眼も耳もねえ 片 輪 だあな」これは抱え車夫の声

である。「なんとも云えないよ。あの教師と来た

ら、本よりほかに何にも知らない変人なんだから

ねえ。旦那の事を少しでも知ってりゃ恐れるかも

とし

知れないが、駄目だよ、自分の小供の 歳 さえ知

らないんだもの」と神さんが云う。「金田さんで

とうへんぼく

も恐れねえかな、厄介な 唐 変 木 だ。 かま

こた

おど

事 あねえ、みんなで威嚇かしてやろうじゃねえ

か」「それが好いよ。奥様の鼻が大き過ぎるの、

ひど

顔が気に喰わないのって――そりゃあ 酷 い事

つら

いまどやき

たぬき

を云うんだよ。自分の 面 あ 今 戸 焼 の 狸

いちにんまえ

見たような癖に――あれで 一 人 前 だと思

っているんだからやれ切れないじゃないか」「顔ばかりじゃない、^{てぬぐい}手^さ拭を提げて湯に行くところからして、いやに高慢ちきじゃないか。自分くらいえらい者は無いつもりでいるんだよ」と苦沙弥先生は飯焚にも^{おおい}大に不人望である。「何でも大勢であいつの垣根の^{そば}傍へ行って悪口をさんざんいってやるんだね」「そうしたらきっと恐れ入るよ」「しかしこっちの姿を見せちゃあ面白くねえから、声だけ聞かして、勉強の邪魔をした上に、出来るだけじらしてやれって、さっき奥様が言い付けておいでなすったぜ」「そりゃ分っているよ」と神さんは悪口の三分の一を引き受ける^と云う意味を示す。なるほどこの手合が苦沙弥先生を冷やかしに来るなと三人の横を、そっと通り

抜けて奥へ這入る。

猫の足はあれども無きがごとし、どこを歩いて
も不器用な音のした試しがない。空を踏むがごと

く、雲を行くがごとく、水中に^{けい}磬を打つがごと
く、洞^{とうり}裏^{しつ}に^こ瑟を鼓するがごとく、^{だいご}醒^{せい}酬^{じう}の妙
味^なを嘗^{ごんせん}めて^{れい}言^{だん}詮^{じち}のほかに^{れい}冷^{だん}暖^{じち}を自知す
るがごとし。月並な西洋館もなく、模範勝手もな

く、車屋の神さんも、^{ごんすけ}権^{ごん}助^{すけ}も、飯焚も、御嬢
さまも、^{なかばたら}仲^{なか}働^{ばたら}きも、鼻子夫人も、夫人の旦那
様もない。行きたいところへ行つて聞きたい話

を聞いて、舌を出し^{しっぽ}尻^ふ尾^{ひげ}を掉^{ひげ}って、^{ひげ}髭^{ひげ}をぴん
と立てて^{ゆうゆう}悠^{ゆう}々^{ゆう}と帰るのみである。ことに吾輩

はこの道に掛けては日本一の^{かんのう}堪^{かんのう}能^うである。

くさぞうし^{ねこまた}
草^{くさ}双^{ぞうし}紙^しにある猫^{ねこ}又^{また}の血脈を受けており

みずか
はせぬかと 自 ら疑うくらいである。 蟄 の

ひたい やこう めいしゅ
額 には 夜 光 の 明 珠 があると云うが、吾

輩の尻尾には しんぎしゃっきょう こいむじょう
神 祇 釈 教 恋 無 常

は無論の事、満天下の人間を馬鹿にする

いっかそうでん

一 家 相 伝 の妙薬が詰め込んである。金田家

の廊下を人の知らぬ^ま間に横行するくらいは、仁王

様^{ところてん}が 心 太^{つぶ}を踏み 潰 すよりも容易である。

この時吾輩は我ながら、わが力量に感服して、こ

れも普段大事にする尻尾の御蔭だたと気が付い

て見るとただ置かれない。吾輩の尊敬する尻尾大

明神を^{らいはい}礼 拝 してニャン運長久を祈らばやと、

ちょっと低頭して見たが、どうも少し^{けんとう}見 当 が

違うようである。なるべく尻尾の方を見て三拝し

なければならん。尻尾の方を見ようと身体を廻す

と尻尾も自然と廻る。追付こうと思って首をねじ

ると、尻尾も同じ間隔をとって、先へ^か馳け出す。

なるほど^{てんちげんこう}天^り地^り玄^り黄^りを三寸裏に収めるほどの
の霊物だけあって、到底吾輩の手に合わない、尻

尾を^{めぐ}環^る事^{ななた}七^{くたび}度^び半にして草臥れたから
やめにした。少々眼がくらむ。どこにいるのだから

ちょっと方角が分らなくなる。構うものかと滅茶

苦茶にあるき廻る。障子の^{うち}裏で鼻子の音がする。

ここだと立ち留まって、左右の耳をはすに切って、

息を^こ凝らす。「貧乏教師の癖に生意気じゃありませんか」

と例の^{かなき}金^{ごえ}切り^{ごえ}声^{ごえ}を振り立てる。「う

ん、生意気な奴だ、ちと^こ懲らしめのためにいじめ
てやろう。あの学校にゃ国のものもいるからな」

「誰がいるの？」「津木^{つき}ピン^{すけ}助^{ふくち}や福^{ふくち}地^{ふくち}キシャ

ゴがいるから、頼んでからかわしてやろう」吾輩は金田君の^{しょうごく}生国は分らんが、妙な名前の人間ばかり^{そろ}揃った所だと少々驚いた。金田君はなお語をついで、「あいつは英語の教師かい」と聞く。「はあ、車屋の神さんの話では英語のリードルか何か専門に教えるんだって云います」「どう^{ろく}せ碌な教師じゃあるめえ」あるめえにも^{すく}妙なからず感心した。「この間ピン助に^あ遇ったら、わたし^私の学校にゃ妙な奴がおります。生徒から先生番茶は英語で何と云いますと聞かれて、番茶はSavage tea であると真面目に答えたんで、教員間の物笑いとなっています、どうもあんな教員があるから、ほかのものの、迷惑になって困りますと云ったが、^{おおかた}大の方あいつの事だぜ」「あいつ

きま
に 極 っ て い ま さ あ、 そ ん な 事 を 云 い そ う な
つ ら が ま
面 構 え で す よ、 い や に ひげ は
「怪しからん奴だ」髭を生やして怪しからなければ猫などは一疋だって怪しかりようがない。「それにあの迷亭とか、へべれけとか云う奴は、まあ何てえ、頓狂な跳返りなんでしょう、伯父の牧山男爵だなんて、あんな顔に男爵の伯父なんぞ、有るはずがないと思ったんですもの」「御前がどこの馬の骨だか分らんものの言う事を真に受けるのも悪い」「悪いって、あんまり人を馬鹿にし過ぎるじゃありませんか」と大変残念そうである。不思議な事には寒月君の事はいちごんはんく
一言半句も出ない。吾輩の忍んで来る前に評判記はすんだものか、またはすでに落第と事が

きま へん けねん
極 っ て念頭にないものか、その 辺 は 懸 念 も
あるが仕方がない。しばらく たたず 佇 んでいると廊
下を隔てて向うの座敷でベルの音ができる。そらあ
すこにも何か事がある。 おく
後 れぬ先に、とその方
角へ歩を向ける。

ひと
来て見ると女が 独 りで何か大声で話してい
る。その声が鼻子とよく似ているところをもって
お
推すと、これが即ち当家の令嬢寒月君をして
みすいじゅすい しろもの
未 遂 入 水 をあえてせしめたる 代 物 だ
ろう。 おしいかな おんすがた
惜 哉 障子越しで玉の 御 姿 を拝
する事が出来ない。従って顔の真中に大きな鼻を
祭り込んでいるか、どうだか受合えない。しかし
談話の模様から鼻息の荒いところなどを
そうごう まんざら
綜 合 して考えて見ると、 満 更 人の注意を

ひ　　ししばな
惹かぬ　獅　鼻　とも思われない。女はしきりに
しゃべ
喋　舌　っているが相手の声が少しも聞えないの
うわさ
は、　噂　にきく電話というものである。「御
やまと　あした
前は　大　和　かい。　明　日　ね、行くんだからね、
うずら
鶉　の三を取っておいておくれ、いいかえ――
分ったかい――なに分らない？　　おやいやだ。鶉
の三を取るんだよ。――なんだって、――取れな
い？　取れないはずはない、とるんだよ――へへ
ごじょうだん
へへへ　御　冗　談　をだって――何が御冗談な
んだよ――いやに人をおひゃらかすよ。全体御前
ちようきち
は誰だい。　長　吉　だ？　長吉なんぞじゃ訳が
分らない。お神さんに電話口へ出ろって御云いな
――なに？　　わたく
私　しで何でも弁じます？――
あた
お前は失敬だよ。　妾　しを誰だか知ってるのかい。

金田だよ。――へへへへへ善く存じておりますだ
って。ほんとに馬鹿だよこの人あ。――金田だっ
てえばさ。――なに？――毎度御^{ごひいき}鼻^び眞^まにあずか
りましてありがとうございます？――何があり
がたいんだね。御礼なんか聞きたかあないやね
――おやまた笑ってるよ。お前はよっぽど愚^{ぐぶつ}物
だね。――仰せの通りだって？――あんまり人を
馬鹿にすると電話を切ってしまうよ。いいのかい。
困らないのかよ――黙ってちゃ分らないじゃな
いか、何とか御云いなさいな」電話は長吉の方か
ら切ったものか何の返事もないらしい。令嬢は
かんしゃく
癪^{しやく}癪^{しやく}を起してやけにベルをジャラジャラ
と廻す。足元で^{ちん}狎^{ちん}が驚ろいて急に吠え出す。こ
れは^{うかつ}迂^う濶^{かつ}に出来ないと、急に飛び下りて^{えん}椽^{えん}の

下へもぐり込む。

おりから ちかづ
折 柄 廊下を 近 く足音がして障子を開
ける音がする。誰か来たなと一生懸命に聞いていると「御嬢様、旦那様と奥様が呼んでいらっしや
います」と小間使らしい声がある。「知らないよ」

と令嬢は けんつく
と令嬢は 剣 突 を食わせる。「ちょっと用があ
るから じょう
嬢 を呼んで来いとおっしゃいました」
「うるさいね、知らないてば」と令嬢は第二の剣
突を食わせる。「……水島寒月さんの事で御用が

あるんだそうでございます」と小間使は気を利か
して機嫌を直そうとする。「寒月でも、水月でも

知らないんだよ——大嫌いだわ、糸 瓜 へちま とまと
が 戸 迷
いをしたような顔をして」第三の剣突は、憐れな
る寒月君が、留守中に頂戴する。「おや御前いつ

そくはつ い
束 髪 に結ったの」小間使はほっと一息ついて

こんにち たんかん
「今日」となるべく 単 簡 な挨拶をする。

「生意気だねえ、小間使の癖に」と第四の剣突を

別方面から食わす。「そうして新しい はんえり 半 襟 を
掛けたじゃないか」「へえ、せんだって御嬢様か

らいただきましたので、結構過ぎて もったい 勿 体 ない

と思って こうり 行李の中へしまっておきましたが、今

までのがあまり よご 汚 れましたからかけ易えまし

た」「いつ、そんなものを上げた事があるの」「こ

の御正月、白木屋へいらっしゃいまして、御求め

遊ばしたので―― うぐいすちゃ すもう
鶯 茶 へ 相撲 の

ばんづけ
番 附 を染め出したのでございます。 あた 妾 しに

は地味過ぎていやだから御前に上げようとおっ

しやった、あれでございます」「あらいやだ。善

く似合うのね。にくらいいわ」「恐れ入ります」「褒
めたんじゃない。にくらいいんだよ」「へえ」「そ
んなによく似合うものをなぜだまって貰ったん
だい」「へえ」「御前にさえ、そのくらい似合うな

あた
ら、妾しにだっておかしい事はないだろうじゃ
ないか」「きっとよく御似合い遊ばします」「似あ
うのが分ってる癖になぜ黙っているんだい。そう
してすまして掛けているんだよ、人の悪い」

けんつく
剣突は留めどもなく連発される。このさき、
事局はどう発展するかと謹聴している時、向うの
座敷で「富子や、富子や」と大きな声で金田君が
令嬢を呼ぶ。令嬢はやむを得ず「はい」と電話室

を出て行く。吾輩より少し大きな^{ちん}狎が顔の中心
に眼と口を引き集めたような^{かお}面をして付いて

行く。吾輩は例の忍び足で再び勝手から往来へ出て、急いで主人の家に帰る。探険はまず十二分のせいせき成績である。

帰って見ると、奇麗な^{うち}家から急に汚ない所へ移ったので、何だか日当りの善い山の上から薄黒

い^{どうくつ}洞窟の中へ^{はい}入り込んだような心持ちがする。探険中は、ほかの事に気を奪われて部屋の

装飾、^{ふすま}襖、^{しょうじ}障子の具合などには眼も留ら

なかったが、わが^{すまい}住居の下等なるを感ずると同

時に^か彼のいわゆる^{つきなみ}月並が恋しくなる。教師よりもやはり実業家がえらいように思われる。吾輩

も少し変だと思って、例の^{しっぽ}尻尾に伺いを立てて見たら、その通りその通りと尻尾の先から

^{ごたくせん}御託宣があった。座敷へ^{はい}這入って見ると驚い

たのは迷亭先生まだ帰らない、^{まきたばこ}巻煙草の吸い殻を蜂の巣のごとく火鉢の中へ突き立てて、
おおあぐら^ま大胡坐で何か話し立てている。いつの間にか寒月君さえ来ている。主人は手枕をして天井の
あまもり雨洩を余念もなく眺めている。あいかわらず太平の逸民の会合である。

「寒月君、君の事を^{うわごと}譚語にまで言った婦人の名は、当時秘密であったようだが、もう話しても善かろう」と迷亭がからかい出す。「御話しをしても、私だけに關する事なら^{さしつか}差支えないんですが、先方の迷惑になる事ですから」「まだ駄目かなあ」「それに〇〇博士夫人に約束をしてしまったもんですから」「他言をしないと云う約束かね」「ええ」と寒月君は例のごとく羽織の^{ひも}紐を

ひねくる。その紐は売品にあるまじき紫色である。

「その紐の色は、ちと ^{てんぽうちょう}天保調 だな」と主人が寝ながら云う。主人は金田事件などには無頓

着である。「そうさ、^{とうてい}到底 日露戦争時代のも

のではないな。^{じんがさ}陣笠に^{たちあおい}立葵の紋の付い

たぶっ^さ割き羽織でも着なくっちゃ納まりの付か

ない紐だ。織田信長が^{むこいり}賀入をするとき頭の髪

を^{ちゃせん}茶筌に^い結ったと云うがその節用いたのは、
たしかそんな紐だよ」と迷亭の文句はあいかわら

ず長い。「実際これは^{じじい}爺が長州征伐の時に用

いたのです」と寒月君は真面目である。「もうい

い加減に博物館へでも献納してはどうだ。首縊り

の力学の演者、理学士水島寒月君ともあろうもの
が、売れ残りの旗本の^いような出で^{たち}立をするのは

ちと体面に関する訳だから」「御忠告の通りに致してもいいのですが、この紐が大変よく似合うと云ってくれる人もありますので――」「誰だい、そんな趣味のない事を云うのは」と主人は寝返りを打ちながら大きな声を出す。「それは御存じの方なんじゃないんで――」「御存じでなくてもいいや、一体誰だい」「去る^{によしょう}女^{にょ}性^{しょう}なんです」「ハハハハよほど茶人だなあ、当てて見ようか、やはり隅田川の底から君の名を呼んだ女なんだろう、その羽織を着てもう一返^{おだぶつき}御駄^{ごだ}仏^{ぶつ}を極め込んじゃどうだい」と迷亭が横合から飛び出す。「へへへへもう水底から呼んではおりません。ここから^{いぬい}乾^{かん}の方角にあたる^{しょうじょう}清^{せい}浄^{じょう}な世界で……」「あんまり清浄でもなさそうだ、毒々し

い鼻だぜ」「へえ？」と寒月は不審な顔をする。「向う横丁の鼻がさっき押しかけて来たんだよ、ここへ、実に僕等二人は驚いたよ、ねえ苦沙弥君」「うむ」と主人は寝ながら茶を飲む。「鼻って誰の事です」「君の親愛なる^{くおん}久遠の^{によしょう}女性^{せい}の御母堂様だ」「へえー」「金田の^{さい}妻^{さい}という女が君の事を聞きに来たよ」と主人が真面目に説明してやる。驚くか、嬉しがるか、恥ずかしがるかと寒月君の様子を^{うかが}窺^{うかが}って見ると別段の事もない。例の通り静かな調子で「どうか私に、あの娘を貰ってくれと云う依頼なんでしょう」と、また紫の紐をひねくる。「ところが大違さ。その御母堂なるものが偉大なる鼻の所有^{ぬし}主^{ぬし}でね……」迷亭が^{なか}半^{なか}ば言い懸けると、主人が「おい君、僕はさっきから、

あはいたしいし
あの鼻について 俳 体 詩 を考えているんだが
ね」と木に竹を^つ接いだような事を云う。隣の^{へや}室
で妻君がくすくす笑い出す。「随分君も^{のんき}呑 気 だ
なあ出来たのかい」「少し出来た。第一句がこの
顔に鼻祭りと言ふのだ」「それから?」「次がこの
鼻に神酒供えというのさ」「次の句は?」「まだそ
れぎりしか出来ておらん」「面白いですな」と寒
月君がにやにや笑う。「次へ穴二つ幽かなりと付
けちゃどうだ」と迷亭はすぐ出来る。すると寒月
が「奥深く毛も見えずはいけますまいか」と
おのおのでたらめ
各 々 出 鱈 目 を並べていると、垣根に近く、
往来で「今^い戸^{まど}焼^{やき}の^{たぬき}狸^き 今戸焼の狸」と四五
人わいわい云う声がする。主人も迷亭もちょっと
驚ろいて表の方を、垣の^{すき}隙 からすかして見ると

「ワハハハハハ」と笑う声がして遠くへ散る足の音がする。「今戸焼の狸というな何だい」と迷亭が不思議そうに主人に聞く。「何だか分らん」と主人が答える。「なかなか ^{ふる}振っていますな」と寒月君が批評を加える。迷亭は何を思い出したか急に立ち上って「吾輩は年来美学上の見地からこの鼻について研究した事がございますから、そのいっぱん ^{ひれき}一 斑 を披瀝して、御両君の清聴を ^{わずら}煩 わしたいと思います」と演舌の真似をやる。主人はあまりの突然にぼんやりして無言のまま迷亭を見ている。寒月は「是非 ^{うけたまわ}承 りたいものです」と小声で云う。「いろいろ調べて見ましたが鼻の起源はどうも ^{しか}確 と分りません。第一の不審は、もしこれを実用上の道具と仮定すれば穴が二

つでたくさんである。何もこんなに横^{おうふう}風に真
中から突き出して見る必用がないのである。とこ
ろがどうしてだんだん御覧のごとく斯^{かよう}様にせ
り出して参ったか」と自分の鼻を^{つま}抓んで見せる。
「あんまりせり出してもおらんじゃないか」と主
人は御世辞のないところを云う。「とにかく引ッ
込んではおりませんからな。ただ二個の^{あな}孔が
なら
併^なんでいる状態と混同なすっては、誤解を生ず
るに至るかも計られませんから、^{あらかじ}予め御注
意をしておきます。――で愚見によりますと鼻の
発達^{はな}は吾々人間が鼻汁をかむと申す微細なる行
為の結果が自然と蓄積してかく著明なる現象を
呈出したものでございます」「^{いつわ}佯りのない愚
見だ」とまた主人が寸評を^{そうにゅう}挿入する。「御

承知の通り鼻^{はな}汁をかむ時は、是非鼻を抓みます、鼻を抓んで、ことにこの局部だけに刺激を与えますと、進化論の大原則によって、この局部はこの刺激に応ずるがため他に比例して不相当な発達を致します。皮も自然堅くなります、肉も次第にかた^こ硬^{かた}くなります。ついに凝^こって骨となります」「それは少し——そう自由に肉が骨に一足飛に変化は出来ますまい」と理学士だけあって寒月君が抗議を申し込む。迷亭は何喰わぬ顔^ので陳べ続ける。「いや御不審はごもっともですが論より証拠この通り骨があるから仕方ありません。すでに骨が出来る。骨は出来ても鼻^{はな}汁は出ますな。出ればかまずにはいられません。この作用で骨の左右が削^{けず}り取られて細い高い隆起と変化して参りま

す――実に恐ろしい作用です。てんてき 点 滴 の石を
うが びんずる おのず
穿 つがごとく、賓 頭 顱の頭が 自 から光明
を放つがごとく、ふしぎくん ふしぎしゅう
たとえ かよう
喩 のごとく、斯 様に鼻筋が通って堅くなり
ます」[#「なります」は底本では「なります。」「それでも君のなんぞ、ぶくぶくだぜ」「演者自身の局部

かいご
は 回 護の恐れがありますから、わざと論じません。かの金田の御母堂の持たせらるる鼻のごときは、もっとも発達せるもっとも偉大なる天下の珍品として御両君に紹介しておきたいと思います」
寒月君は思わずヒヤヤヤと云う。「しかし物も極
度に達しますと偉観には相違ございませんが何
となく おそろ 怖 しくて近づき難いものであります。
びりょう
あの 鼻 梁 などは素晴らしいには違いございま

せんが、少々 ^{しゅんけん}峻 嶮 過ぎるかと思われます。

古人のうちにてもソクラチス、ゴールドスミスも
しくはサッカレーの鼻などは構造の上から云う
と随分申し分はございましょうがその申し分の

あるところに ^{あいきょう}愛 嬌 がございます。鼻高きが

故に ^{たっと}貴 からず、^き奇なるがために貴しとはこの

故でもございましょうか。^{げせわ}下世話にも鼻より団子
と申しますれば美的価値から申しますとまず迷
亭くらいのところが適當かと存じます」寒月と主

人は「フフフ」^いと笑い出す。迷亭自身も愉快そ

うに笑う。「さてただ ^{いま}今 まで弁じましたのは
――」「先生弁じましたは少し講釈師のようで下
品ですから、よしていただきましょう」と寒月君

は先日の ^{ふくしゅう}復 讐 をやる。「さようしからは顔

を洗って出直しましょうかな。——ええ——これ
から鼻と顔の^{けんこう} 権 衡 に^{いちごん} 一言 論及したいと
思います。他に関係なく単独に鼻論をやりますと、
かの御母堂などはどこへ出しても恥ずかしから
ぬ鼻——^{くらまやま} 鞍 馬 山 で展覧会があっても恐らく
一等賞だろうと思われるくらいな鼻を所有して
いらせられますが、悲しいかなあれは眼、口、そ
の他の諸先生と何等の相談もなく出来上った鼻
であります。ジュリアス・シーザーの鼻は大した
ものに相違ございません。しかしシーザーの鼻を
はさみ^{はさみ} 鋏 でちょん切って、当家の猫の顔へ安置した
らどんな者でございましょうか。^{たと} 喩 えにも猫の
ひたい^{ひたい} 額 と云うくらいな地面へ、英雄の鼻柱が
とっこつ^{そび} 突 兀 として 聳 えたら、碁盤の上へ奈良の大

す
仏を据え付けたようなもので、少しく比例を失するの極、その美的価値を落す事だろうと思います。

御母堂の鼻はシーザーのそれのごとく、まさしく
えいしさっそう

英 姿 颯 爽 たる隆起に相違ございません。し
かしその周囲を 囲 繞 する 顔 面 的 条 件 は
い か が

如 何 な 者 で あ り ま し ょ う 。 無 論 当 家 の 猫 の ご と
く 劣 等 で は な い 。 し か し 癲 癇 病 みの御かめの

ご と く まゆ
眉 の 根 に 八 字 を 刻 ん で 、 細 い 眼 を 釣 る し
上 げ ら る る の は 事 実 で あ り ま す 。 諸 君 、 こ の 顔 に
し て こ の 鼻 あ り と 嘆 ぜ ざ る を 得 ん で は あ り ま せ

ん か 」 迷 亭 の 言 葉 が 少 し 途 切 れ る と た ん
途 端 、 裏 の 方
で 「 ま だ 鼻 の 話 し を し て い る ん だ よ 。 何 て え

ご う つ ば り
剛 突 く 張 だ ろ う 」 と 云 う 声 が 聞 え る 。 「 車 屋
の 神 さ ん だ 」 と 主 人 が 迷 亭 に 教 え て や る 。 迷 亭 は

またやり初める。「計らざる裏手にあたって、新たに異性の傍聴者のある事を発見したのは演者の深く名誉と思うところであります。ことに

えんてん きょうおん
宛 転 たる 嬌 音 をもって、乾燥なる
こうえん えんみ
講 筵 に一点の 艶 味 を添えられたのは実に
望外の幸福であります。なるべく通俗的に引き直

かじんしゅくじょ けんこ そむ
して 佳 人 淑 女 の 眷 顧 に 背 かざらん
事を期する訳であります、これからは少々力学

いきおい
上の問題に立ち入りますので、 勢 御婦人方
には御分りにくいかも知れません、どうか

ごしんぼう
御 辛 防 を願います」寒月君は力学と云う語を
聞いてまたにやにやする。「私の証拠立てようと
するのは、この鼻とこの顔は到底調和しない。ツ
アイシングの黄金律を失っていると云う事なん

で、それを厳格に力学上の公式から演^{えん}繹^{えき}して御覧に入れようと云うのであります。まずHを鼻の高さとします。 α は鼻と顔の平面の交叉より生ずる角度であります。Wは無論鼻の重量と御承知下さい。どうです大抵お分りになりましたか。……」「分るものか」と主人が云う。「寒月君はどうだい」「私にもちと分りかねますな」「そりゃ困ったな。苦^く沙^{しゃ}弥^みはとにかく、君は理学士だから分るだろうと思ったのに。この式が演説の首脳なんだからこれを略しては今までやった^{かい}甲斐^{かい}がないのだが――まあ仕方がない。公式は略して結論だけ話そう」「結論があるか」と主人が不思議そうに聞く。「当り前さ結論のない演舌は、デザートのない西洋料理のようなものだ、――いいか両

よ
君能く聞き給え、これからが結論だぜ。――さて
以上の公式にウィルヒョウ、ワイスマン諸家の説
を参酌して考えて見ますと、先天的形体の遺伝は
無論の事許さねばなりません。またこの形体に
ついで

追 陪 して起る心意的状況は、たとい後天性は
遺伝するものにあらずとの有力なる説あるにも
関せず、ある程度までは必然の結果と認めねばな
りません。従ってかくのごとく身分に不似合なる
鼻の持主の生んだ子には、その鼻にも何か異状が
ある事と察せられます。寒月君などは、まだ年が
御若いから金田令嬢の鼻の構造において特別の
異状を認められんかも知れませんが、かかる遺伝
は潜伏期の長いものでありますから、いつ
な

時 候 気候の劇変と共に、急に発達して御母堂

のそれのごとく、とっさ ^{かん} 膨 ^{ぼう} 張 ^{ちよう} する
の 咄 嗟 の 間 に 膨 張 する
かも知れません、それ故にこの御婚儀は、迷亭の
学理的論証によりますと、今の中御断念になった
方が安全かと思われ、これには当家の御主人
は無論の事、そこに寝ておらる ^{ねこまたどの} 猫 又 殿 に
も御異存は無かろうと存じます」主人はようよう
起き返って「そりゃ無論さ。あんなものの娘を誰
が貰うものか。寒月君もらっちゃいかんよ」と大
変熱心に主張する。吾輩もいささか賛成の意を表
するためににゃーにゃーと二声ばかり鳴いて見
せる。寒月君は別段騒いだ様子もなく「先生方の
御意向がそうなら、私は断念してもいいんですが、
もし当人がそれを気にして病気にでもなったら
罪ですから――」「ハハハハハ ^{えんざい} 艶 罪 と云う

わけ
訳だ」主人だけは ^{おお}大にむきになって「そんな馬鹿があるものか、あいつの娘なら ^{ろく}碌な者でないに ^{きま}極ってらあ。初めて人のうちへ来ておれをやり込めに掛った奴だ。 ^{ごうまん}傲慢な奴だ」とひと ^{ひとり}独りでぷんぷんする。するとまた垣根のそばで三四人が「ワハハハハハ」と云う声がする。一人が「高慢ちきな ^{とうへんぼく}唐変木だ」と云うと一人が「もっと大きな ^{うちはい}家へ這入りてえだろう」と云う。また一人が「御気の毒だが、いくら威張ったって ^{かげべんけい}蔭弁慶だ」と大きな声をする。主人は ^{えんがわ}縁側へ出て負けないような声で「やかましい、何だわざわざそんな ^{へい}塀の下へ来て」と ^{どな}怒鳴る。「ワハハハハハサヴェジ・チーだ、サヴェジ・チーだ」と口々に ^{のの}罵しる。主人は ^{おお}大に

げきりん てい た
逆 鱗 の 体 で突然起^たってステッキを持って、
往来へ飛び出す。迷亭は手を拍^うって「面白い、や
れやれ」と云う。寒月は羽織の紐を 撚^{ひね} ってにや
にやする。吾輩は主人のあとを付けて垣の崩れか
ら往来へ出て見たら、真中に主人が手持無沙汰に
ステッキを突いて立っている。人通りは一人もな
い、ちょっと きつね つま てい
狐 に 抓 まれた 体 である。

四

例によって金田邸へ忍び込む。

例によってとは いまさら
今 更 解釈する必要もない。
しばしばを じじょう
自 乗 したほどの度合を示す
ことば
語 である。一度やった事は二度やりたいもの
で、二度試みた事は三度試みたいのは人間にのみ

限らるる好奇心ではない、猫といえどもこの心理的特権を有してこの世界に生れ出でたものと認定していただかねばならぬ。三度以上繰返す時始めて習慣なる語を冠せられて、この行為が生活上の必要と進化するのもまた人間と相違はない。何のために、かくまで^{あししげ}足繁く金田邸へ通うのかと不審を起すならその前にちょっと人間に反問したい事がある。なぜ人間は口から煙を吸い込んで鼻から吐き出すのであるか、腹の^た足しにも血の道の薬にもならないものを、^{はず}恥かし^げ気もなくとどん^{はば}吐吞して憚からざる以上は、吾輩が金田にしゅつにゅう^{とが}出入するのを、あまり大きな声で咎めだ^{たばこ}立てをして貰いたくない。金田邸は吾輩の煙草である。

忍び込むと云うと語弊がある、何だか泥棒か

まおとこ

間男のようで聞き苦しい。吾輩が金田邸へ行

くのは、招待こそ受けないが、決してかつお鰹の
きりみ切り身をちょろまかしたり、眼鼻が顔の中心に

けいれんてきてきちんに密着しているちん狎君などと密談

するためではない。――何探偵？――もってのほ

かの事である。およそ世の中に何がいや賤しい
かぎょう家業だと云って探偵と高利貸ほど下等な職

はないと思っている。なるほど寒月君のために猫

にあるまじきほどのぎきょうしん義侠心を起して、
ひとたびよそ一度は金田家の動静を余所ながらうかが窺っ

た事はあるが、それはただの一遍で、その後は決

して猫の良心に恥ずるようなろうれつ陋劣な振舞を
致した事はない。――そんなら、なぜ忍び込むと

い　　うろん
云うような胡　乱　な文字を使用した？――さあ、
それがすこぶる意味のある事だて。元来吾輩の考

　　たいくう　　おお
によると大　空　は万物を覆　うため大地は万
物の　の
載せるために出来ている――いかに
しつよう

執　拗　な議論を好む人間でもこの事実を否定
する訳には行くまい。さてこの　　たいくうだいち
大　空　大　地　を
製造するために彼等人類はどのくらいの労力を

　　つゐ　　せきすん
費　やしているかと云うと尺　寸　の手伝もし
ておらぬではないか。自分が製造しておらぬもの

を自分の所有と極める法はなかろう。自分の所有

と極めても差し　　さ　つか　　しゅつにゆう
支　えないが他の出　入

を禁ずる理由はあるまい。この　　ぼうぼう
茫　々　たる大地

　　こざか　　めぐ　　ぼうぐい
を、小　賢　しくも垣を　囲　らし棒　杭　を立てて

　　かく
某々所有地などと劃　し限るのはあたかもかの

そうてん なわばり われ
蒼 天 に 縄 張 して、この部分は 我 の天、
あな部分は かれ
彼の天と届け出るような者だ。もし
土地を切り刻んで一坪いくらの所有権を売買す
るなら我等が呼吸する空気を一尺立方に割って
切売をしても善い訳である。空気の切売が出来ず、
空の縄張が不当なら地面の私有も不合理ではな
いか。 によぜかん によぜほう
如 是 観 によりて、如 是 法 を信じて
いる吾輩はそれだからどこへでも はい
這入って行く。
もっとも行きたくない処へは行かぬが、志す方角
へは東西南北の差別は入らぬ、平氣な顔をして、
のそのそと参る。金田ごときものに遠慮をする訳
がない。――しかし猫の悲しさは力づくでは
とうてい かな
到 底 人間には 叶 わない。強勢は權利なりと
の格言さえあるこの浮世に存在する以上は、いか

にこっちに道理があっても猫の議論は通らない。

無理に通そうとすると車屋の黒のごとく不意に

さかなや てんびんぼう くら
肴 屋 の 天 秤 棒 を 喰 う 恐れがある。理

はこっちにあるが権力は向うにあると云う場合

に、理を曲げて一も二もなく屈従するか、または

権力の目を^{かす}掠めて我理を貫くかと云えば、吾輩

は無論後者を^{えら}択ぶのである。天秤棒は避けざる

べからざるが故に、忍ばざるべからず。人の邸内

へは這入り込んで^{さしつか}差支えなき故込まざるを
得ず。この故に吾輩は金田邸へ忍び込むのである。

忍び込む^ど度が重なるにつけ、探偵をする気はない
が自然金田君一家の事情が見たくもない吾輩

の眼に映じて覺えたくもない吾輩の^{のうり}脳裏に印

象を^{とど}留むるに至るのはやむを得ない。鼻子夫人
が顔を洗うたんびに念を入れて鼻だけ拭く事や、

富子令嬢が^{あべかわもち}阿倍川餅を^{むやみ}無暗に召し上がら
るる事や、それから金田君自身が――金田君は妻
君に似合わず鼻の低い男である。単に鼻のみでは
ない、顔全体が低い。小供の時分喧嘩をして、

がきだいしょう^{くびすじ} 餓鬼大將のために頸筋を^{つら}捉まえら
れて、うんと精一杯に^{どべい}土堀へ^お押し付けられた時
の顔が四十年後の^{こんにち}今日まで、^{いんが}因果をなして

おりはせぬかと^{あやし}怪まるるくらい平坦な顔で
ある。^{しごく}至極穏かで危険のない顔には相違ないが、
何となく変化に乏しい。いくら^{おこ}怒っても^{たいら}平
かな顔である。――その金田君が^{まぐろ}鮪の^{さしみ}刺身
を食って自分で自分の^{はげあたま}禿頭をぴちゃぴち

たた
や 叩く事や、それから顔が低いばかりでなく背
が低いので、無暗に高い帽子と高い下駄を^は穿く事
や、それを車夫がおかしがって書生に話す事や、
書生がなるほど君の観察は機敏だと感心する事
や、――一々数え切れない。

つきやま
近頃は勝手口の横を庭へ通り抜けて、^築山
の陰から向うを見渡して障子が立て切って物静
かであるなど見極めがつくと、^{そろそろ}徐々^そ上り込む。
もし人声が^{にぎや}賑かであるか、座敷から^{みす}見透かさ
るる恐れがあると思えば池を東へ廻って
せついん
雪^ま隠の横から知らぬ間に^{えん}椽の下へ出る。悪
い事をした^{おぼえ}覚はないから何も隠れる事も、恐
れる事もないのだが、そこが人間と云う無法者に
逢っては不運と^{あきら}諦めるより仕方がないので、

もし世間がくまさかちょうはん
熊坂長範ばかりになつた
らいかなる盛徳の君子もやはり吾輩のような態
度に出ずるであろう。金田君は堂々たる実業家で

あるからもと
固より熊坂長範のように五尺三寸を
振り廻すきづかい
気遣はあるまいが、うけたまわ
承る処
によれば人を人と思わぬ病氣があるそうである。

人を人と思わないくらいなら猫を猫とも思うま
い。して見れば猫たるものはいかなる盛徳の猫で

も彼の邸内で決して油断は出来ぬわけ
訳である。し
かしその油断の出来ぬところが吾輩にはちょっ
と面白いので、吾輩がかくまでに金田家の門を

しゅつにゅう
出するの、ただこの危険がおか
冒して
見たいばかりかも知れぬ。それは追つてとく
篤と考
えた上、猫ののうり
脳裏を残りなく解剖し得た時改め

ごふいちょうつかまつ
て 御 吹 聴 仕 ろう。

今日はどんな模様だかと、例の築山の^{しばふ}芝生の
上に^{あご}顎を押しつけて前面を見渡すと十五畳の
客間を^{やよい}弥生の春に明け放って、中には金田夫婦
と一人の来客との^{おはなしさいちゅう}御話最中である。
^{あいにく}生憎鼻子夫人の鼻がこっちを向いて池越し
に吾輩の額の上を正面から^{にら}睨め付けている。鼻
に睨まれたのは生れて今日が始めてである。金田
君は幸い横顔を向けて客と相対しているから例
の平坦な部分は半分かくれて見えぬが、その代り
鼻の^{ありか}在所が判然しない。ただ^{ごましお}胡麻塩色の
^{くちひげ}口髯が好い加減な所から乱雑に^{もせい}茂生して
いるので、あの上に^{あな}孔が二つあるはずだと結論
だけは苦もなく出来る。^{はるかぜ}春風もああ云う

なめら^{らく}
滑 かな顔ばかり吹いていたら定めて 楽 だ
ろうと、ついでながら想像を^{たくま} 逞 しゅうして見
た。御客さんは三人の^{うち} 中 で一番普通な^{ようぼう} 容 貌
を有している。ただし普通なだけに、これぞと取
り立てて紹介するに足るような^{ぞうさく} 雑 作 は一つ
もない。普通と云うと結構なようだが、普通の
きよく^{のぼ} 極 平凡の堂に 上 り、庸俗の室に入ったのは
むしろ^{びんぜん} 憫 然 の至りだ。かかる無意味な
つらがまえ
面 構 を有すべき宿命を帯びて明治の
しょうだい
昭 代 に生れて来たのは誰だろう。例のごと
く椽の下まで行ってその談話を承わらなくては
分らぬ。

さい
「……それで 妻 がわざわざあの男の所まで出
ようす
掛けて行って 容 子を聞いたんだがね……」と金

田君は例のごとく ^{おうふう}横風 な言葉使である。横風
ではあるが ^{ごう しゅんけん}毫も峻嶮 なところがない。言
語も彼の顔面のごとく ^{へいばんぼうだい}平板 竜大 である。

「なるほどあの男が水島さんを教えた事がござ
いますので——なるほど、よい御思い付きで——
なるほど」となるほどずくめのは御客さんである。

「ところが何だか要領を得ないので」

「ええ ^{くしゃみ}苦沙弥 じゃ要領を得ない ^{わけ}訳 で——あ
の男は私がいっしょに下宿をしている時分から
^に実に煮え切らない——そりゃ御困りでございま
したろう」と御客さんは鼻子夫人の方を向く。

「困るの、困らないのってあなた、 ^{わた}私 しゃこの

年になるまで人のうちへ行つて、あんな
ふとりあつかい
不 取 扱 を受けた事はありません」と
鼻子は例によって鼻嵐を吹く。

「何か無礼な事でも申しましたか、^{むか}昔 しか
が^{んこ}頑 固 な性分で――何しろ十年一日のごとくり
ードル専門の教師をしているのでも大体御分り
になりましょう」と御客さんは^{てい}体 よく調子を合
せている。

「いや御話しにもならんくらいで、^{さい}妻 が何か聞
くとまるで剣もほろろの挨拶だそうで……」

「それは^け怪しからん訳で――一体少し学問をし
ているととかく慢心が^{きざ}萌 すもので、その上貧乏
をすると負け惜しみが出ますから――いえ世の
中には随分無法な奴がおりますよ。自分の働きの

ないのになが気が付かないで、^{むやみ}無暗に財産のあるものに喰って掛るなんてえのが――まるで彼等の財産でも^ま捲き上げたような気分ですから驚きますよ、あははは」と御客さんは大恐悦の^{てい}体である。

「いや、まことに^{ごんごどうだん}言語同断で、ああ云うのは^{ひっきょう}必竟^{わがまま}世間見ずの我儘から起るのだから、ちつと^こ懲らしめのためにいじめてやるが好かろうと思って、少し当ってやったよ」

「なるほどそれでは^{だいぶ}大分答えましたろう、全く本人のためにもなる事ですから」と御客さんはいかなる当り方か^{うけたまわ}承らぬ先からすでに金田君に同意している。

「ところが鈴木さん、まあなんて頑固な男なんで

しょう。学校へ出ても福^{ふくち}地^ちさんや、津^つ木^きさんには口も利^きかないんだそうです。恐れ入って黙っているのかと思ったらこの間は罪もない、^{たく}宅^{たく}の書生をステッキを持って追っ懸けたってんです——三十^{づら}面^{づら}さげて、よく、まあ、そんな馬鹿な真似が出来たもんじゃありませんか、全くやけで少し気が変になってるんですよ」

「へえどうしてまたそんな乱暴な事をやったんで……」とこれには、さすがの御客さんも少し不審を起したと見える。

「なあに、ただあの男の前を何とか云って通ったんだそうです、すると、いきなり、ステッキを持^はだ^だし^しって^は跌^だ足^だで飛び出して来たんだそうです。よしんば、ちっとやそっと、何か云ったって小供じゃ

ひげづら おおぞう
ありませんか、髯 面 の 大 僧 の癖にしかも
教師じゃありませんか」

「さよう教師ですからな」と御客さんが云うと、
金田君も「教師だからな」と云う。教師たる以上
はいかなる侮辱を受けても木像のようにおとな
しくしておらねばならぬとはこの三人の期せず
して一致した論点と見える。

「それに、あの迷亭って男はよっぽどな
すいきょうじん うそ
酔 興 人 ですね。役にも立たない 嘘 八百
を並べ立てて。 わた へんてこ
私 しゃあんな 変 梃 な人にや
初めて逢いましたよ」

「ああ迷亭ですか、あいかわらず^{ほら}法螺を吹くと見
えますね。やはり苦沙弥の所で御逢いになったん
ですか。あれに掛っちゃたまりません。あれも

むか

昔し自炊の仲間でしたがあんまり人を馬鹿にするものですから^よ能く喧嘩をしましたよ」

「誰だって怒りまさあね、あんなじゃ。そりゃ嘘をつくのも^よ宜うござんしょうさ、ね、義理が悪るいとか、ばつを合せなくっちゃあならないとか——そんな時には誰しも心にない事を云うもんでさあ。しかしあの男のは吐^つかなくってすむのにやたら矢鱈^おに吐くんだから始末に了えないじゃありませんか。何が欲しくって、あんな^{でたらめ}出鱈目を——よくまあ、しらじらしく云えると思いますよ」

「ごもったもで、全く道楽からくる嘘だから困ります」

「せっかくあなた真面目に聞きに行った水島の

めちゃめちゃ わたし
事も滅茶滅茶になってしまいました。私

ごうはら いまいま
ゃ剛腹で忌々しくって——それでも義
理は義理でさあ、人のうちへ物を聞きに行って知

らん顔の半兵衛もあんまりですから、あと
にビールを一ダース持たせてやったんです。とこ
ろがあなたどうでしょう。こんなものを受取る理
由がない、持って帰れって云うんだそうで。いえ
御礼だから、どうか御取り下さいって車夫が云っ

たら——^に悪くいじゃありませんか、俺はジャム
は毎日舐めるがビールのような^{にが}苦い者は飲ん
だ事がないって、ふいと奥へ^{はい}這入ってしまったっ
て——言い草に事を欠いて、まあどうでしょう、
失礼じゃありませんか」

「そりゃ、ひどい」と御客さんも今度は本気に

ひど
苛 いと感じたらしい。

「そこで今日わざわざ君を招いたのだがね」とし
ばらく途切れて金田君の声が聞える。「そんな馬
鹿者は陰から、からかってさえいればすむような
ものの、少々それでも困る事があるじゃて……」

まぐろ はげあたま
と 鮪 の刺身を食べる時のごとく 禿 頭 を
ぴちゃぴちゃ たた 叩 く。もっとも吾輩は えん 椽 の下に
いるから実際叩いたか叩かないか見えようはず

だいぶ
がないが、この禿頭の音は近来 大 分 聞馴れてい
る。比丘尼が木魚の音を聞き分けるごとく、椽の
下からでも音さえたしかであればすぐ禿頭だな

しゅっしょ
と 出 所 を鑑定する事が出来る。「そこでち
よっと君を わずら 煩 わしたいと思ってな……」

「私に出来ます事なら何でも御遠慮なくどうか

——今度東京勤務と云う事になりましたのも全くいろいろ御心配を掛けた結果にほかならん訳でありますから」と御客さんは快よく金田君の依頼を承諾する。このくちょう調で見るとこの御客さんはやはり金田君の世話になる人と見える。いядんだん事件が面白く発展してくるな、今日はあまり天氣が宜いので、来る気もなしに来たのであるが、こう云う好材料を得ようとは全く思い掛けなんだ。おひがんとてらまい御彼岸にお寺詣りをして偶然ほうじょうぼたもち方丈で牡丹餅の御馳走になるような者だ。金田君はどんな事を客人に依頼するかなと、椽の下から耳を澄して聞いている。

「あの苦沙弥と云うへんぶつ変物が、どう云う訳か水島に入れぢえ智慧をするので、あの金田の娘を貰って

い
は行かんなどとはのめかすそうだ——なあ鼻子
そうだな」

「ほのめかすどころじゃないんです。あんな奴の
娘を貰う馬鹿がどこの国にあるものか、寒月君決
して貰っちゃいかんよって云うんです」

「あんな奴とは何だ失敬な、そんな乱暴な事を云
ったのか」

「云ったどころじゃありません、ちゃんと車屋の
神さんが知らせに来てくれたんです」

「鈴木君どうだい、御聞の通りの次第さ、随分厄
介だろうが？」

「困りますね、ほかの事と違って、こう云う事に
は他人が ^{みだ} 妄りに ^{ようかい} 容喙するべきはずの者で
はありませんからな。そのくらいな事はいかな苦

沙弥でも心得ているはずですが。一体どうした訳
なんでしょう」

「それでの、君は学生時代から苦沙弥と同宿をし
ていて、今はとにかく、昔は親密な間柄であった
そうだから御依頼するのだが、君当人に逢ってな、
よく利害を^{さと}諭して見てくれんか。何か^{おこ}怒って
いるかも知れんが、怒るのは^{むこう}向^わが悪るいから
で、先方がおとなしくしてさえいれば一身上の便
宜も充分計ってやるし、気に^さ障わるような事もや
めてやる。しかし向が向ならこっちもこっちと云
う気になるからな——つまりそんな^が我を張るのは
は当人の損だからな」

「ええ全くおっしゃる通り^ぐ愚な抵抗をするのは
本人の損になるばかりで何の益もない事ですか

ら、善く申し聞けましょう」

「それから娘はいろいろと申し込もある事だから、必ず水島にやると極^きめる訳にも行かんが、だんだん聞いて見ると学問も人物も悪くもないようだから、もし当人が勉強して近い内に博士にでもなったらあるいはもらう事が出来るかも知れんくらいはそれとなくほのめかしても構わん」

「そう云ってやったら当人も^{はげ}励^{よろ}みになって勉強する事でしょう。宜^{よろ}しゅうございます」

「それから、あの妙な事だが――水島にも似合^{へんぶつ}わん事だと思うが、あの^{へんぶつ}変^{へんぶつ}物の苦沙弥を先生先生と云って苦沙弥の云う事は大抵聞く様子だから困る。なにそりゃ何も水島に限る訳では無論ないのだから苦沙弥が何と云って邪魔をしようと、

わしの方は別に ^{さしつか} 差 支 えもせんが……」

「水島さんが可哀そうですからね」と鼻子夫人が口を出す。

「水島と云う人には逢った事もございせんが、とにかくこちらと御縁組が出来れば ^{しょうがい} 生 涯 の幸福で、本人は無論異存はないのでしょう」

「ええ水島さんは貰いたがっているんですが、苦沙弥だの迷亭だのって変り者が何だとか、かんだとか云うものですから」

「そりゃ、善くない事で、相当の教育のあるものにも似合わん ^{しょさ} 所 作 ですな。よく私が苦沙弥の所へ参って談じましょう」

「ああ、どうか、御面倒でも、一つ願いたい。それから実は水島の事も苦沙弥が一番 ^{くわ} 詳 しいの

だがせんだって ^{さい}妻 が行った時は今の始末で
ろくろく 碌々 聞く事も出来なかった訳だから、君から
今一応本人の性行学才等をよく聞いて貰いたい
て」

「かしこまりました。今日は土曜ですからこれから
廻ったら、もう帰っております。近頃はど
こに住んでおりますか知らん」

「この前を右へ突き当って、左へ一丁ばかり行
くと崩れかかった黒塀のあるうちです」と鼻子が
教える。

「それじゃ、つい近所ですな。訳はありません。
帰りにちょっと寄って見ましょう。なあに、大体
分りましょう ^{ひょうさつ}標 札 を見れば」

「標札はあるときと、ないときとありますよ。名

刺を^{ごぜんつぶ}御饌粒で門へ^は貼り付けるのでしょう。雨がふると^は剥がれてしましましょう。すると御天氣の日にまた貼り付けるのです。だから標札は^{あて}当にやなりませんよ。あんな面倒臭い事をするよりせめて^{きふだ}木札でも懸けたらよさそうなもんですがねえ。ほんとうにどこまでも気の知れない人ですよ」

「どうも驚きますな。しかし崩れた黒塀のうちと聞いたら大概分るでしょう」

「ええあんな汚ないうちは町内に一軒しかないから、すぐ分りますよ。あ、そうそうそれで分らなければ、好い事がある。何でも屋根に草が^は生えたうちを探して行けば間違っこありませんよ」

「よほど特色のある^{いえ}家ですなアハハハハ」

鈴木君が御光来になる前に帰らないと、少し都合が悪い。談話もこれだけ聞けば大丈夫沢山である。^{えん} 椽 の下を伝わって ^{せついん} 雪 隠 を西へ廻ってつきやま 築 山 の陰から往来へ出て、急ぎ足で屋根に草の生えているうちへ帰って来て何喰わぬ顔をして座敷の椽へ廻る。

主人は椽側へ ^{しろげっと} 白 毛 布 を敷いて、^{はらばい} 腹 這 になつて ^{うらら} 麗 ^{はるび} かな ^{こうら} 春日に甲羅を干している。太陽の光線は存外公平なもので屋根にペンペン草の目標のある ^{ろうおく} 陋 屋 でも、金田君の客間のごとく陽気に暖かそうであるが、気の毒な事には ^{けっと} 毛 布 だけが春らしくない。製造元では白のつもりで織り出して、^{とうぶつや} 唐 物 屋 でも白の気で売りさば ^捌 いたのみならず、主人も白と云う注文で買っ

て来たのであるが――何しろ十二三年以前の事だから白の時代はとくに通り越してただ今は
うかいしょく　　そうぐう
濃　灰　色　なる変色の時期に　遭　遇　しつ
つある。この時期を経過して他の暗黒色に化ける
まで毛布の命が続くかどうかは、疑問である。

今でもすでに万遍なく^す擦り切れて、^{たてよこ}豎　横　の筋
は明かに読まれるくらいだから、毛布と称するの

はもはや^{せんじょう}僭　上　の沙汰であって、毛の字は
はぶ
省　いて単にットとでも申すのが適當である。し
かし主人の考えでは一年持ち、二年持ち、五年持

ち十年持った以上は^{しょうがい}生　涯　持たねばならぬ
とされているらしい。随分^{のんき}呑　氣　な事である。さ

てその^{いんねん}因　縁　のある^{けっと}毛　布　の上へ^{ぜん}前　申す通
り腹這になって何をしているかと思うと両手で

出張った^{あご}頤を支えて、右手の指の股に
まきたばこ
巻煙草を挟んでいる。ただそれだけである。

もっとも彼がフケだらけの頭の^{うち}裏には宇宙の
大真理が火の車のごとく廻転しつつあるかも知
れないが、外部から拝見したところでは、そんな
事とは夢にも思えない。

煙草の火はだんだん吸口の方へ^{せま}逼って、
いっすん
一寸ばかり燃え尽した灰の棒がぱたりと毛
布の上に落つるのも構わず主人は一生懸命に煙
草から立ち^{のぼ}上る煙の行末を見詰めている。その
煙りは春風に浮きつ沈みつ、流れる輪を^{いくえ}幾重に
も描いて、紫深き細君の^{あらいがみ}洗髪^{あらいがみ}の根本へ吹き
寄せつつある。――おや、細君の事を話しておく
はずだった。忘れていた。

細君は主人に^{しり}尻を向けて――なに失礼な細君だ？ 別に失礼な事はないさ。礼も非礼も相互の解釈次第でどうでもなる事だ。主人は平気で細君の尻のところへ^{ほおづえ}頬杖を突き、細君は平気で主人の顔の先へ^{そうごん}荘厳なる尻を^す据えたまでの事で無礼も^{へちま}糸瓜もないのである。御兩人は結婚後一ヵ年も立たぬ^ま間に礼儀作法などと窮屈な境遇を脱却せられた超然的夫婦である。――さてかくのごとく主人に尻を向けた細君はどう云う^{りょうけん}了見か、今日の天気に乗じて、尺に余る緑の黒髪を、^{ふのり}麩海苔と生卵でゴシゴシ洗濯せられた者と見えて癖のない奴を、見よがしに肩から背へ振りかけて、無言のまま小供の袖なしを熱心に縫っている。実はその洗髪を乾かすために

とうちりめん ふとん えんがわ
唐 縮 緬 の 布 団 と 針 箱 を 椽 側 へ 出 し

て、 うやうや 恭 しく主人に尻を向けたのである。あ

るいは主人の方で尻のある けんとう 見 当 へ顔を持っ
て来たのかも知れない。そこで先刻御話しをした

たばこ なび
煙 草 の 煙 り が、 豊 かに 靡 く黒髪の上に流れ流

れて、時ならぬ かげろう 陽 炎 の燃えるところを主人は

余念もなく眺めている。しかしながら煙は もと 固 よ

り いっしょ とど
一 所 に 停 まるものではない、その性質と

して上へ上へと立ち登るのだから主人の眼もこ

の煙りの かみげ もつ
髪 毛 と 纏 れ合う奇観を落ちなく見
ようとすれば、是非共眼を動かさなければならな

い。主人はまず腰の辺から観察を始めて じょじょ 徐 々

と背中を つた くびすじ
伝 っ て、 肩 から 頸 筋 に掛ったが、

それを通り過ぎてようよう脳天に達した時、覚え

ずあっと驚いた。――主人が^{かいろうどうけつ}偕老同穴を
^{ちぎ}契った夫人の脳天の真中には^{まんまる}真丸な大き
^{はげ}な禿がある。しかもその禿が暖かい日光を反射
して、今や時を得顔に輝いている。思わざる^{へん}辺
にこの不思議な大発見をなした時の主人の眼は
^{まば}眩ゆい中に充分の驚きを示して、烈しい光線で
^{どうこう}瞳孔の開くのも構わず一心不乱に見つめて
いる。主人がこの禿を見た時、第一彼の^{のうり}脳裏に
浮んだのはかの^{いえ}家伝来の仏壇に幾世となく飾
り付けられたる^{おとうみょうざら}御灯明皿である。彼の
^{いっけ}一家は真宗で、真宗では仏壇に身分不相応な金
を掛けるのが古例である。主人は幼少の時その家
の倉の中に、薄暗く飾り付けられたる^{きんぱく}金箔厚
^{ずし}き厨子があって、その厨子の中にはいつでも

しんちゅう
真 鍮 の灯明皿がぶら下って、その灯明皿に
は昼でもぼんやりした^ひ灯がついていた事を記憶
している。周囲が暗い中にこの灯明皿が比較的明
瞭に輝やいていたので小供心にこの灯を何遍と
なく見た時の印象が細君の禿に^よ喚び起されて突
然飛び出したものであろう。灯明皿は一分立たぬ
ま
間に消えた。この^{たび}度は^{かんのんさま}観 音 様 の鳩の事を
思い出す。観音様の鳩と細君の禿とは何等の関係
もないようであるが、主人の頭では二つの間に密
接な聯想がある。同じく小供の時分に浅草へ行く
と必ず鳩に豆を買ってやった。豆は一皿が
ぶんきゅう
文 久 二つで、赤い^{かわらけ}土 器^{はい}へ這入っていた。
その^{かわらけ}土 器^{おおき}が、色と云い^大さと云いこの禿
によく似ている。

「なるほど似ているな」と主人が、さも感心したらしく云うと「何がです」と細君は見向きもしない。

「何だって、御前の頭にゃ大きな禿があるぜ。知ってるか」

「ええ」と細君は依然として仕事の手をやめずに答える。別段露見を恐れた様子もない。超然たる模範妻君である。

「嫁にくるときからあるのか、結婚後新たに出来たのか」と主人が聞く。もし嫁にくる前から禿げているなら ^{だま} 欺 されたのであると口へは出さないが心の ^{うち} 中 で思う。

「いつ出来たんだか覚えちゃいませんわ、禿なんざどうだって ^い 宜いじゃありませんか」と ^{おおい} 大 に

悟ったものである。

「どうだって宜いって、自分の頭じゃないか」と主人は少々怒気を帯びている。

「自分の頭だから、どうだって宜^いんだわ」と云ったが、さすが少しは気になると見えて、右の手を頭に乘せて、くるくる禿を撫^なでて見る。「おやだいぶ大分大きくなった事、こんなじゃ無いと思っていた」と言ったところをもって見ると、年に合わせて禿があまり大き過ぎると云う事をようやく自覚したらしい。

「女は髷^{まげ}に結^ゆうと、ここが釣れますから誰でも禿げるんですわ」と少しく弁護しだす。

「そんな速度で、みんな禿げたら、四十くらいになれば、から薬^{やかん}缶ばかり出来なければならん。

そりゃ病気に違いない。伝染するかも知れん、今のうち早く甘木さんに見て貰え」と主人はしきりに自分の頭を撫^なで廻して見る。

「そんなに人の事をおっしゃるが、あなただって鼻の^{あな}孔^{しらが}へ白^は髪が生えてるじゃありませんか。禿が伝染するなら白髪だって伝染しますわ」と細君少々ぷりぷりする。

「鼻の中の白髪は見えんから害はないが、脳天が――ことに若い女の脳天がそんなに禿げちゃ見^{かたわ}苦しい。不^不具^具だ」

「^{かたわ}不^不具^具なら、なぜ御貰いになったのです。御自分が好きで貰っておいて不具だなんて……」

「知らなかったからさ。全く^{きょう}今日^うまで知らなかったんだ。そんなに威張るなら、なぜ嫁に来る時

頭を見せなかったんだ」

「馬鹿な事を！　どこの国に頭の試験をして及第したら嫁にくるなんて、ものが在るもんですか」

「禿はまあ我慢もするが、御前は^せ背^{はず}いが人並外れて低い。はなはだ見苦しくていかん」

「背いは見ればすぐ分るじゃありませんか、^{せい}背^背の低いのは最初から承知で御貰いになったんじゃないありませんか」

「それは承知さ、承知には相違ないがまだ延びるかと思ったから貰ったのさ」

「^{はたち}廿^せにもなって背^せいが延びるなんて――あなたもよっぽど人を馬鹿になさるのね」と細君は
そで^袖なしを^{ほう}抛^ねり出して主人の方に^ね搦^ねじ向く。返

答次第ではその分にはすまさんと云う^{けんまく}権幕
である。

「^{はたち}廿になつたって背いが延びてならんと云
う法はあるまい。嫁に来てから滋養分でも食わし
たら、少しは延びる見込みがあると思ったんだ」

と真面目な顔をして妙な^{りくつ}理窟を述べていると
かどぐち^{いきおい}門口のベルが勢よく鳴り立てて頼む
と云う大きな声がする。いよいよ鈴木君がペンペ

^{めあて} 草を^{くしゃみ} 目的に^{がりょうくつ} 苦沙弥先生の臥竜窟を
尋ねあてたと見える。

細君は喧嘩を後日に譲って、^{そうこう}倉皇針箱と袖
^{かか} なしを抱えて茶の間へ逃げ込む。主人は鼠色の
けっと
毛布を丸めて書斎へ投げ込む。やがて下女が持
って来た名刺を見て、主人はちょっと驚ろいたよ

うな顔付であつたが、こちらへ御通し申してと言
い棄てて、名刺を握ったまま^{こうか はい}後架へ這入った。
何のために後架へ急に這入ったか一向要領を得
ん、何のために^{すずきとうじゅうろう}鈴木藤十郎君の名刺を
後架まで持って行ったのかなおさら説明に苦し
む。とにかく迷惑なのは臭い所へ随行を命ぜられ
た名刺君である。

下女が^{さらさ}更紗の座布団を^{とこ}床の前へ直して、ど
うぞこれへと引き下がった、^{あと}跡で、鈴木君は一
応室内を見廻わす。床に掛けた
はなひらくばんこくのはる^{もくあん}木菴の
^い花開万国春とある^{やすせいじ}安青磁に活けた
にせもの^い贋物や、京製の^い安青磁に活けた
ひがんざくら
彼岸桜などを一々順番に点検したあとで、
ふと下女の勧めた布団の上を見るといつの^ま間に

か一^{ぴき} 疋の猫がすまして坐っている。申すまでもなくそれはかく申す吾輩である。この時鈴木君の胸のうちにちょっとした間顔色にも出ぬほどの風波が起った。この布団は疑いもなく鈴木君のために敷かれたものである。自分のために敷かれた布団の上に自分が乗らぬ先から、断りもなく妙な動物が平然と^{そんきょ} 蹲 踞 している。これが鈴木君の心の平均を破る第一の条件である。もしこの布団が^{ぬし} 勧められたまま、主 なくして春風の吹くに任せてあったなら、鈴木君はわざと^{けんそん} 謙 遜 の意を^{ひょう} 表 して、主人がさあどうぞと云うまでは堅い畳の上で我慢していたかも知れない。しかし早晩自分の所有すべき布団の上に挨拶もなく乗ったものは誰であろう。人間なら譲る事であろうが猫

け
とは怪しからん。乗り手が猫であると云うのが一段と不愉快を感じしめる。これが鈴木君の心の平均を破る第二の条件である。最後にその猫の態度がもっとも ^{しゃく}癩 に障る。少しは気の毒そうにでもしている事か、乗る権利もない布団の上に、
ごうぜん ^{ぶあいきょう}傲然と構えて、丸い無愛嬌な眼をぱちつかせて、御前は誰だいと云わぬばかりに鈴木君の顔を見つめている。これが平均を破壊する第三の条件である。これほど不平があるなら、吾輩のくびね ^{とら}頸根っこを捉えて引きずり卸したら ^よ宜さそうなものだが、鈴木君はだまって見ている。堂々たる人間が猫に恐れて手出しをせぬと云う事は有ろうはずがないのに、なぜ早く吾輩を処分して自分の不平を ^も洩らさないかと云うと、これは全く

鈴木君が一個の人間として自己の体面を維持する自重心の故であると察せらるる。もし腕力に訴えたなら三尺の童子も吾輩を自由に上下し得るであろうが、体面を重んずる点より考えるといか

ここう
に金田君の股肱たる鈴木藤十郎その人もこの二尺四方の真中に鎮座まします猫大明神をい

いかん
如何ともする事が出来ぬのである。いかに人の見ていぬ場所でも、猫と座席争いをしたとあってはいささか人間の威厳に関する。真面目に猫を相

手にしてきょくちよく
曲直を争うのはいかにも

おとなげ
大人気ない。滑稽である。この不名誉を避けるためには多少の不便は忍ばねばならぬ。しかし忍

ばねばならぬだけそれだけ猫に対するぞうお
憎悪の念は増す訳であるから、鈴木君は時々吾輩の顔を

見ては ^{にが} 苦い顔をする。吾輩は鈴木君の不平な顔を拝見するのが面白いから滑稽の念を ^{おさ} 抑えてなるべく何喰わぬ顔をしている。

吾輩と鈴木君の間に、かくのごとき無言劇が行われつつある間に主人は ^{えもん} 衣紋をつくろって ^{こうか} 後架から出て来て「やあ」と席に着いたが、手に持っていた名刺の影さえ見えぬところをもって見ると、鈴木藤十郎君の名前は臭い所へ無期徒刑に処せられたものと見える。名刺こそ飛んだ ^{やくうん} 厄運に際会したものだと思ふ ^ま 間もなく、主人はこの野郎と吾輩の ^{えり} 襟がみを ^{つか} 攫んでえいとはかりに ^{えんがわ} 椽側へ ^{たた} 擲きつけた。

「さあ敷きたまえ。珍らしいな。いつ東京へ出て来た」と主人は旧友に向って布団を勧める。鈴木

君はちょっとこれを裏返した上で、それへ坐る。

「ついまだ忙がしいものだから報知もしなかったが、実はこの間から東京の本社の方へ帰るようになってね……」

「それは結構だ、大^{だいぶ}分長く逢わなかったな。君が田^{いな}舎へ行ってから、始めてじゃないか」

「うん、もう十年近くになるね。なにその後時々東京へは出て来る事もあるんだが、つい用事が多いもんだから、いつでも失敬するような訳さ。悪^{わる}く思ってくれたもうな。会社の方は君の職業とは違って随分忙がしいんだから」

「十年立つうちには大分違うもんだな」と主人は鈴木君を見上げたり見下ろしたりしている。鈴木

君は頭を^{きれい}美 麗に分けて、英国仕立のトウィード
を着て、派手な^{えりかざ}襟 飾りをして、胸に金鎖りさ
えピカつかせている体裁、どうしても^{くしゃみ}苦 沙 弥 君
の旧友とは思えない。

「うん、こんな物までぶら下げなくちゃ、ならん
ようになってね」と鈴木君はしきりに金鎖りを気
にして見せる。

「そりゃ本ものかい」と主人は^{ぶさほう}無 作 法 な質問を
かける。

「十八金だよ」と鈴木君は笑いながら答えたが
「君も大分年を取ったね。たしか小供があるはず
だったが一人かい」

「いいや」

「二人？」

「いいや」

「まだあるのか、じゃ三人か」

「うん三人ある。この先 ^{いくにん} 幾人 出来るか分らん」

「相変らず気楽な事を云ってるぜ。一番大きいのはいくつになるかね、もうよっぽどだろう」

「うん、いくつか ^よ 能く知らんが ^{おおかた} 大 方 六つか、七つかだろう」

「ハハハ教師は ^{のんき} 呑 氣 でいいな。僕も教員にでもなれば善かった」

「なって見ろ、三日で ^{いや} 嫌 になるから」

「そうかな、何だか上品で、気楽で、^{ひま} 閑暇 があって、すきな勉強が出来て、よさそうじゃないか。

実業家も悪くもないが我々のうちは駄目だ。実業

家になるならずと上にならなくっちゃいかん。

下の方になるとやはりつまらん御世辞を振り撒^ま
いたり、好かん猪^{ちょこ}口^ぐをいただきに出たり随分愚
なもんだよ」

「僕は実業家は学校時代から大嫌だ。金さえ取れ
れば何でもする、昔で云えば^すち^{ょう}う^{にん}素^す町^{まち}人^{ひと}だから
な」と実業家を前に^{ひか}控^{ひか}えて太平楽を並べる。

「まさか——そうばかりも云えんがね、少しは下
品なところもあるのさ、とにかく^{かね}金^{かね}と
しんじゅう^{しんじゅう}情^{じょう}死^しをする覚悟でなければやり通せない
から——ところがその金と云う奴が^くせ^{もの}曲^{まが}者^{もの}で、
——今もある実業家の所へ行って聞いて来たん
だが、金を作るにも三角術を使わなくちゃいけな
いと云うのさ——義理をかく、人情をかく、恥を

かくこれで三角になるそう面白いじゃないか
アハハハハ」

「誰だそんな馬鹿は」

「馬鹿じゃない、なかなか利口な男なんだよ、実
業界でちょっと有名だがね、君知らんかしら、つ
いこの先の横丁にいるんだが」

「金田か？ ^な何んだあんな奴」

「大変怒ってるね。なあに、そりゃ、ほんの
^{じょうだん}冗談 だろうがね、そのくらいにせんと金は
溜らんと云う ^{たとえ}喩 さ。君のようにそう真面目に
解釈しちゃ困る」

「三角術は冗談でもいいが、あすこの女房の鼻は
なんだ。君行ったんなら見て来たろう、あの鼻を」

「細君か、細君はなかなかさばけた人だ」

「鼻だよ、大きな鼻の事を云ってるんだ。せんだ
って僕はあの鼻について ^{はいたいし} 俳 体 詩 を作ったが
ね」

「何だい俳体詩と云うのは」

「俳体詩を知らないのか、君も随分時勢に暗い
な」

「ああ僕のように忙がしいと文学などは
とうてい ^{すき}
到 底 駄目さ。それに以前からあまり数奇でな
い方だから」

「君シャーレマンの鼻の ^{かっこう} 恰 好 を知ってるか」

「アハハハハ随分気楽だな。知らんよ」

「エルリントンは部下のものから鼻々と

いみょう
異名をつけられていた。君知ってるか」

「鼻の事ばかり気にして、どうしたんだい。好い
じゃないか鼻なんか丸くても尖^とんがってても」

「決してそうでない。君パスカルの事を知ってる
か」

「また知ってるかか、まるで試験を受けに来たよ
うなものだ。パスカルがどうしたんだい」

「パスカルがこんな事を云っている」

「どんな事を」

「もしクレオパトラの鼻が少し短かかったなら
ば世界の表面に大変化を^{きた}来したろうと」

「なるほど」

「それだから君のようにそう無^{むぞうさ}雑作に鼻を馬
鹿にしてはいかん」

「まあいいさ、これから大事にするから。そりゃ
そうとして、今日来たのは、少し君に用事があっ
て来たんだがね——あの^{もと}元君の教えたとか云
う、水島——ええ水島ええちょっと思い出せない。
——そら君の所へ始終来ると云うじゃないか」

かんげつ
「寒月か」

「そうそう寒月寒月。あの人の事についてちょっ
と聞きたい事があって来たんだがね」

「結婚事件じゃないか」

「まあ多少それに類似の事さ。今日金田へ行っ
た……」

「この間鼻が自分で来た」

「そうか。そうだって、細君もそう云っていたよ。
苦沙弥さんに、よく伺おうと思って上ったら、

あいにく

生 憎 迷亭が来ていて茶々を入れて何が何だか分らなくしてしまったって」

「あんな鼻をつけて来るから悪るいや」

「いえ君の事を云うんじゃないよ。あの迷亭君がおったもんだから、そう立ち入った事を聞く訳にも行かなかったので残念だったから、もう一遍僕に行ってよく聞いて来てくれないかって頼まれたものだからね。僕も今までこんな世話はした事はないが、もし当人同士が嫌^いやでないなら中へ立^まって纏めるのも、決して悪い事はないからね——それでやって来たのさ」

「御苦労様」と主人は冷淡に答えたが、腹の内では当人同士と云う^{ことば} 語 を聞いて、どう云う訳か分らんが、ちょっと心を動かしたのである。蒸^むし

熱い夏の夜に ^{いちる} 一縷の ^{れいふう} 冷風が ^{そでぐち} 袖口をくぐ

潜ったような気分になる。元来この主人はぶっ
切ら棒の、^{がんこつや} 頑固 ^{むね} 光沢消しを ^{むね} 旨として製造され
た男であるが、さればと云って冷酷不人情な文明

の産物とは ^{おのず} 自 ^{せん} からその ^{こと} 撰を異にしてい

る。彼が ^{なん} 何ぞと云うと、むかつ腹をたててぶん
ぶんするのも ^{しゃり} 這裏の消息は ^{えとく} 会得できる。先
日鼻と喧嘩をしたのは鼻が気に食わぬからで鼻
の娘には何の罪もない話しである。実業家は嫌い

だから、実業家の片割れなる金田某も ^{きらい} 嫌に相
違ないがこれも娘その人とは没交渉の沙汰と云

わねばならぬ。娘には恩も ^{うら} 恨みもなく、寒月
は自分が実の弟よりも愛している門下生である。

もし鈴木君の云うごとく、当人同志が好いた仲な

ら、間接にもこれを妨害するのは君子のなすべき
しよさ
所作でない。――苦沙弥先生はこれでも自分を
君子と思っている。――もし当人同志が好いてい
るなら――しかしそれが問題である。この事件に
対して自己の態度を改めるには、まずその真相か
ら確めなければならん。

「君その娘は寒月の所へ来たがってるのか。金田
や鼻はどうでも構わんが、娘自身の意向はどうな
んだ」

「そりゃ、その――何だね――何でも――え、来
たがってるんだろうじゃないか」鈴木君の挨拶は
少々 曖昧 ^{あいまい} である。実は寒月君の事だけ聞いて
復命さえすればいいつもりで、御嬢さんの意向ま
では確かめて来なかったのである。従って円転

かつだつ　滑　脱　の鈴木君もちょっと　ろうばい　狼　狽　の気味に見える。

「だろうた判然しない言葉だ」と主人は何事によらず、正面から、どやし付けないと気がすまない。

「いや、これやちょっと僕の云いようがわるかった。令嬢の方でもたしかに意があるんだよ。いえ全くだよ——え？——細君が僕にそう云ったよ。何でも時々は寒月君の悪口を云う事もあるそうだがね」

「あの娘がか」

「ああ」

け
「怪しからん奴だ、悪口を云うなんて。第一それ
じゃ寒月に意がないんじゃないか」

「そこがさ、世の中は妙なもので、自分の好いて
いる人の悪口などは ^{ことさら} 殊 更 云って見る事もある
からね」

「そんな愚^ぐな奴がどこの国にいるものか」と主人
は ^{かよう} 斯 様な人情の機微に立ち入った事を云われ
ても ^{とん} 頓 と感じがない。

「その愚な奴が随分世の中にゃあるから仕方が
ない。現に金田の妻君もそう解釈しているのさ。

と ^{まど} 戸 惑いをした ^{へちま} 糸 瓜 のようだなんて、時々寒月
さんの悪口を云いますから、よっぽど心の ^{うち} 中 で
は思ってるに相違ありませんと」

主人はこの不可思議な解釈を聞いて、あまり思
い掛けないものだから、眼を丸くして、返答もせ
ず、鈴木君の顔を、 ^{だいどうえきしゃ} 大 道 易 者 のように

じっ
昵と見つめている。鈴木君はこいつ、この様子
では、ことによるとやり損なうなと^{かん} 痞づいたと
見えて、主人にも判断の出来そうな方面へと話頭
を移す。

「君考えても分るじゃないか、あれだけの財産が
あってあれだけの器量なら、どこへだって相応の
うち
家へやれるだろうじゃないか。寒月だってえら
いかも知れんが身分から云や――いや身分と云
っちゃ失礼かも知れない。――財産と云う点から
云や、まあ、だれが見たって釣り合わんのだから
ね。それを僕がわざわざ出張するくらい両親が気
も
を揉んでるのは本人が寒月君に意があるからの
事じゃあないか」と鈴木君はなかなかうまい理窟
をつけて説明を与える。今度は主人にも納得が出

来たらしいのでようやく安心したが、こんなところ
にまごまごしているとまた ^{とっかん} 唸 喊 を喰う危険
があるから、早く話しの歩を進めて、一刻も早
く使命を ^{まっと} 完 うする方が万全の策と心付いた。

「それでね。今云う通りの訳であるから、先方で
云うには何も金銭や財産はいらんからその代り
当人に附属した資格が欲しい――資格と云うと、
まあ肩書だね、――博士になったらやってもいい
なんて威張ってる次第じゃない――誤解しちゃ
いかん。せんだって細君の来た時は迷亭君がいて
妙な事ばかり云うものだから――いえ君が悪い
のじゃない。細君も君の事を御世辞のない正直な
いい ^{かた} 方 ^ほ だと賞めていたよ。全く迷亭君がわるか

ったんだろう。――それでさ本人が博士にでもな
ってくれば先方でも世間へ対して肩身が広い、
めんぼく
面目があると云うんだがね、どうだろう、
きんきん
近々の内水島君は博士論文でも呈出して、博
士の学位を受けるような運びには行くまいか。な
あに――金田だけなら博士も学士もいらんのさ、
ただ世間と云う者があるとね、そう手軽にも行か
んからな」

こう云われて見ると、先方で博士を請求するの
も、あながち無理でもないように思われて来る。
無理ではないように思われて来れば、鈴木君の依
頼通りにしてやりたくなる。主人を^い活かすのも殺
すのも鈴木君の意のままである。なるほど主人は
単純で正直な男だ。

「それじゃ、今度寒月が来たら、博士論文をかくように僕から勧めて見よう。しかし当人が金田の娘を貰うつもりかどうか、それからまず問いた^{ただ}

正して見なくちゃいかんからな」

「問^{かどば}い正すなんて、君そんな角張った事をして物が^{まと}纏まるものじゃない。やっぱり普通の談話の際にそれとなく気を引いて見るのが一番近道だよ」

「気を引いて見る？」

「うん、気を引くと云うと語弊があるかも知れん。――なに気を引かんでもね。話しをしていると自然分るもんだよ」

「君にゃ分るかも知れんが、僕にゃ判然と聞かん事は分らん」

「分らなけりゃ、まあ好いさ。しかし迷亭君見た
ように余計な茶々を入れて^ぶ打ち^こ壊わすのは善く
ないと思う。^{たとい}仮令勧めないまでも、こんな事は
本人の随意にすべきはずのものだからね。今度寒
月君が来たらなるべくどうか邪魔をしないよう
にしてくれ給え。——いえ君の事じゃない、あの
迷亭君の事さ。あの男の口にかかると到底助かり
っこないんだから」と主人の代理に迷亭の悪口を
きいていると、^{うわさ}噂^ををすれば陰の^{たとえ}喩^もに洩れ
ず迷亭先生例のごとく勝手口から^{ひょうぜん}飄然^と
^{しゅんぷう}春風^にに乗じて舞い込んで来る。

「いや一珍客だね。僕のような^{こうかく}狎客^{になる}になると
^{くしゃみ}苦沙弥^ははとかく粗略にしたがっていかん。何で
も苦沙弥のうちへは十年に一遍くらいくるに限

る。この菓子はいつもより上等じゃないか」と
ふじむら　ようかん　むぞうさ　ほおば
藤　村　の　羊　羹　を　無　雑　作　に　頬　張　る。鈴木
君はもじもじしている。主人はにやにやしている。

迷亭は口をもがもがさしている。吾輩はこの瞬時
の光景を　えんがわ
椽　側　から拝見して無言劇と云うも
のは優に成立し得ると思った。ぜんけ
禅　家　で無言の問
答をやるのが以心伝心であるなら、この無言の芝
居も明かに以心伝心の幕である。すこぶる短かい
けれどもすこぶる鋭どい幕である。

「君は一生　たびがらす
旅　　鳥　かと思ってたら、いつの間
にか舞い戻ったね。ながいき
長　生　はしたいもんだな。
どんな　ぎょうこう　めぐ
僂　倅　に　廻　り合わんとも限らんか
らね」と迷亭は鈴木君に対しても主人に対するご
とく　ごう
毫　も遠慮と云う事を知らぬ。いかに自炊の

仲間でも十年も逢わなければ、何となく気のおけるものだが迷亭君に限って、そんな^{そぶり}素振も見えぬのは、えらいのだから馬鹿なのかちょっと見当がつかぬ。

「可哀そうに、そんなに馬鹿にしたものでもない」と鈴木君は当らず^{さわ}障らずの返事はしたが、何となく落ちつきかねて、例の金鎖を神経的にいじっている。

「君電気鉄道へ乗ったか」と主人は突然鈴木君に対して奇問を発する。

「今日は諸君からひやかされに来たようなものだ。なんぼ田舎者だって――これでも^{がいてつ}街鉄を六十株持ってるよ」

「そりゃ馬鹿に出来ないな。僕は八百八十八株半

持っていたが、惜しい事に ^{おおかた}大 方 虫が喰ってしま
って、今じゃ半株ばかりしかない。もう少し早
く君が東京へ出てくれば、虫の喰わないところを
十株ばかりやるところだったが惜しい事をした」

「相変らず口が悪るい。しかし冗談は冗談として、
ああ云う株は持ってて損はないよ、^{ねんねん}年 々 高く
なるばかりだから」

「そうだ ^{たとい}仮 令 半株だって千年も持ってるうち
にゃ倉が三つくらい建つからな。君も僕もその辺
にぬかりはない当世の才子だが、そこへ行くと苦
沙弥などは憐れなものだ。株と云えば大根の兄弟
分くらいに考えているんだから」とまた ^{ようかん}羊 羹
をつまんで主人の方を見ると、主人も迷亭の ^く食

け　おの
気が伝染して　自　ずから菓子皿の方へ手が出る。

世の中では万事積極的のものが人から真似らるる権利を有している。

「株などはどうでも構わんが、僕は　そろさき　曾　呂　崎　に一度でいいから電車へ乗らしてやりたかった」と主

人は喰い欠けた羊羹の　はあと　ぶぜん　歯　痕　を　撫　然　として眺める。

「曾呂崎が電車へ乗ったら、乗るたんびに品川まで行ってしまふは、それよりやっぱりてんねんこじ　たくあんいし　ほ
天　然　居　士　で　沢　庵　石　へ彫り付けられてる方が無事でいい」

「曾呂崎と云えば死んだそうだな。気の毒だねえ、いい頭の男だったが惜しい事をした」と鈴木君が

云うと、迷亭は　ただ　直　ちに引き受けて

「頭は善かったが、飯を^た焚く事は一番下手だったぜ。曾呂崎の当番の時には、僕あいつでも外出を
して蕎麦で^{そば} ^{しの}凌いでいた」

「ほんとに曾呂崎の焚いた飯は^こ焦げくさくって
^{しん}心^{おかず}があって僕も弱った。御負けに御菜に必ず
豆腐をなまで食わせるんだから、冷たくて食われ
やせん」と鈴木君も十年前の不平を記憶の底から
よ
喚び起す。

「苦沙弥はあの時代から曾呂崎の親友で毎晩い
っしょに^{しるこ}汁粉を食いに出たが、その^{たた}祟りで今
じゃ慢性胃弱になって苦しんでいるんだ。実を云
うと苦沙弥の方が汁粉の数を余計食ってるから
曾呂崎〔#「曾呂崎」は底本では「曾兄崎」〕より先へ死
んで^い宜い訳なんだ」

「そんな論理がどこの国にあるものか。俺の汁粉

より君は運動と号して、毎晩^{しない}竹刀を持って裏の
らんとう^ば卵塔婆へ出て、石塔を^{たた}叩いてるところを坊

主に見つかって^{けんつく}剣突を食ったじゃないか」と

主人も負けぬ気になって迷亭の旧悪を^{あば}曝く。

「アハハハそうそう坊主が仏様の頭を叩いては
安眠の妨害になるからよしてくれって言ったっ

け。しかし僕のは竹刀だが、この鈴木將軍のは
てあら^手暴だぜ。石塔と相撲をとって大小三個ばかり

転がしてしまったんだから」

「あの時の坊主の怒り方は実に烈しかった。是非

元のように起せと云うから人足を^{やと}備うまで待
ってくれと云ったら人足じゃい^{ざんげ}かん懺悔の意
を表するためにあなたが自身で起さなくては仏

の意に^{そむ}背くと云うんだからね」

「その時の君の^{ふうさい}風采はなかったぜ、^{かなきん}金巾
のしゃつに^{えっちゅうふんどし}越中禪で雨上りの水溜
りの中でうんうん^{うな}唸って……」

「それを君がすました顔で写生するんだから
ひど^苛い。僕はあまり腹を立てた事のない男だが、
あの時ばかりは失敬だと^{しん}心から思ったよ。あの
時の君の言草をまだ覚えているが君は知ってる
か」

「十年前の言草なんか誰が覚えているものか、し
か　し　あ　の　石　塔　に
きせんいんでんこうかくだいこじ^{たつ}
帰泉院殿黄鶴大居士安永五年辰
正月と^ほ彫ってあったのだけはいまだに記憶して
いる。あの石塔は古雅に出来ていたよ。引き越す

時に盗んで行きたかったくらいだ。実に美学上の
原理に^{かな}叶^てって、ゴシック趣味な石塔だった」と
迷亭はまた好い加減な美学を振り廻す。

「そりゃいいが、君の言草がさ。こうだぜ——吾
輩は美学を専攻するつもりだから^{てんちかん}天地間の
面白い出来事はなるべく写生しておいて将来の
参考に供さなければならん、気の毒なの、
^{かわいそう}可哀相だのと云う私情は学問に忠実なる吾
輩ごときものの口にすべきところでないと平氣
で云うのだろう。僕もあんまりな不人情な男だと
思ったから泥だらけの手で君の写生帖を引き裂
いてしまった」

「僕の有望な画才が^{とんざ}頓挫して^{いっこう}一向振わな
くなったのも全くあの時からだ。君に^{きほう}機鋒を折

られたのだね。僕は君に^{うらみ}恨がある」

「馬鹿にしちゃいけない。こっちが恨めしいくらいだ」

「迷亭はあの時分から^{ほらふき}法螺吹だったな」と主人は^{ようかん}羊羹を^{おわ}食い^了って再び二人の話の中に割り込んで来る。

「約束なんか^{りこう}履行した事がない。それで詰問を受けると決して^わ詫びた事がない何とか蚊とか云う。あの寺の境内に^{さるすべり}百日紅が咲いていた時分、この百日紅が散るまでに美学原論と云う著述をすると云うから、駄目だ、到底出来る^{きづかい}気遣はないと云ったのさ。すると迷亭の答えに僕はこう見えても見掛けに寄らぬ意志の強い男である、そんなに疑うなら^{かけ}賭をしようと云うから僕は真

面目に受けて何でも神田の西洋料理を^{おご}奢りっ
こかなに^き極めた。きっと書物なんか書く気遣
はないと思ったから賭をしたようなものの内心
は少々恐ろしかった。僕に西洋料理なんか奢る金
はないんだからな。ところが先生^{いっこう}一向稿を起
す^{けしき}景色^{なぬか}がない。七^{はつか}日立っても二十日立っても
一枚も書かない。いよいよ百日紅が散って一輪の
花もなくなっても当人平気でいるから、いよいよ
西洋料理に有りついたなと思って契約履行を
せま^{りくつ}逼ると迷亭すまして取り合わない」

「また何とか^{りくつ}理窟をつけたのかね」と鈴木君が
相の手を入れる。

「うん、実にずうずうしい男だ。吾輩はほかに能
はないが意志だけは決して君方に負けはせんと

剛情を張るのさ」

「一枚も書かんのにか」と今度は迷亭君自身が質問をする。

「無論さ、その時君はこう云ったぜ。吾輩は意志の一点においてはあえて^{なんびと}何人にも一步も譲らん。しかし残念な事には記憶が人一倍無い。美学原論を著わそうとする意志は充分あったのだがその意志を君に発表した翌日から忘れてしまった。それだから百日紅の散るまでに著書が出来なかったのは記憶の罪で意志の罪ではない。意志の罪でない以上は西洋料理などを奢る理由がないと威張っているのさ」

「なるほど迷亭君一流の特色を発揮して面白い」と鈴木君はなぜだか面白がっている。迷亭のおら

ぬ時の語気とはよほど違っている。これが利口な
人の特色かも知れない。

「何が面白いものか」と主人は今でも ^{おこ}怒っている
様子である。

「それは御気の毒様、それだからその ^{うめあわ}埋合せ
をするために ^{くじゃく}孔雀の舌なんかを金と太鼓で
探しているじゃないか。まあそう ^{おこ}怒らずに待つ
ているさ。しかし著書と云えば君、今日は一大珍
報を ^{もた}齎らして来たんだよ」

「君はくるたびに珍報を齎らす男だから油断が
出来ん」

「ところが今日の珍報は真の珍報さ。正札付一厘
も引けなしの珍報さ。君寒月が博士論文の稿を起
したのを知っているか。寒月はあんな妙に見識張

った男だから博士論文なんて無趣味な労力はやるまいと思ったら、あれでやっぱり色気があるからおかしいじゃないか。君あの鼻に是非通知してやるがいい、この頃は ^{どんぐりはかせ} 団栗博士の夢でも見ているかも知れない」

鈴木君は寒月の名を聞いて、話してはいけぬ話してはいけぬと ^{あご} 顰と眼で主人に合図する。主人には ^{いっこう} 一向意味が通じない。さっき鈴木君に逢って説法を受けた時は金田の娘の事ばかりが気の毒になったが、今迷亭から鼻々と云われるとまた先日喧嘩をした事を思い出す。思い出すと滑稽でもあり、また少々は ^{にく} 悪らしくもなる。しかし寒月が博士論文を草しかけたのは何よりの ^{おみ} 御見やげで、こればかりは迷亭先生自賛のごとくまず

まず近來の珍報である。^{ただ}啻に珍報のみならず、
嬉しい快よい珍報である。金田の娘を貰おうが貰
うまいがそんな事はまずどうでもよい。とにかく
寒月の博士になるのは結構である。自分のように
出来損いの木像は仏師屋の隅で虫が喰うまで
しらき　くすぶ　いかん
白木のまま　燻　っていても　遺憾はないが、
これは　うま　く仕上がったと思う彫刻には一日も
早く　はく　箔を塗ってやりたい。

「本当に論文を書きかけたのか」と鈴木君の合図
はそっち^の除けにして、熱心に聞く。

「よく人の云う事を疑ぐる男だ。――もっとも問
題は　どんぐり　くびくく　しか
団栗だか　首　縊りの力学だか　確と
分らんがね。とにかく寒月の事だから鼻の恐縮す
るようなものに違いない」

さっきから迷亭が鼻々と無遠慮に云うのを聞くたんびに鈴木君は不安の様子をする。迷亭は少しも気が付かないから平気なものである。

「その後鼻についてまた研究をしたが、この頃トリストラム・シャンデーの中に ^{はなろん}鼻論があるのを発見した。金田の鼻などもスターンに見せたら

善い材料になったろうに残念な事だ。 ^{びめい}鼻名を ^{せんざい}せんざい

千載に垂れる資格は充分ありながら、あのま ^くまで朽ち果つるとは ^{ふびんせんばん}不憫千萬だ。今度ここへ来たら美学上の参考のために写生してやろう」

と相変らず口から ^{でまか}出 ^{しゃべ}任せに喋舌り立てる。

「しかしあの娘は寒月の所へ来たいのだそうだ」

と主人が今鈴木君から聞いた通りを述べると、鈴木君はこれは迷惑だと云う顔付をしてしきりに

主人に目くばせをするが、主人は不導体のごとく
いっこう
一 向 電気に感染しない。

「ちょっと ^{おつ} 乙 だな、あんな者の子でも恋をする
ところが、しかし大した恋じゃなからう、大方
はなごい
鼻 恋 くらいなところだぜ」

「鼻恋でも寒月が貰えばいいが」

「貰えばいいがって、君は先日大反対だったじゃ
ないか。今日はいやに軟化しているぜ」

「軟化はせん、僕は決して軟化はせんしかし
……」

「しかしどうかしたんだろう。ねえ鈴木、君も実
業家の ^{ばっせき} 末 席 ^{けが} を 汚 す一人だから参考のため
に言って聞かせるがね。あの金田某なる者さ。あ
の某なるものの息女などを天下の秀才水島寒月

の令夫人と ^{あが}崇め奉るのは、少々 ^{ちようちん}提灯と釣
鐘と云う次第で、我々 ^{ほうゆう}朋友たる者が ^{れいれい}冷々
黙過する訳に行かん事だと思ふんだが、たとい実
業家の君でもこれには異存はあるまい」

「相変らず元気がいいね。結構だ。君は十年前と
^{ようす}容子が少しも変っていないからえらい」と鈴木
君は柳に受けて、^{ごまか}胡麻化そうとする。

「えらいと褒めるなら、もう少し博学なところを
御目にかけるがね。 ^{むか}昔 ^{ギリシャじん}しの希臘人は非常
に体育を重んじたものであらゆる競技に貴重なる
懸賞を出して百方奨励の策を講じたものだ。し
かるに不思議な事には学者の智識に対してのみ
は ^{ほうび}何等の褒美も与えたと云う記録がなかった
ので、 ^{こんにち}今日まで実は ^{おお}大に怪しんでいたと

ころさ」

「なるほど少し妙だね」と鈴木君はどこまでも調子を合せる。

「しかるについ両三日前に至って、美学研究の際ふとその理由を発見したので多年の^{ぎだん}疑團は一度に氷解。^{しっつう}漆桶を抜くがごとく痛快なる悟りを得て^{かんでんきち}歡天喜地の至境に達したのさ」

あまり迷亭の言葉が^{ぎょうさん}仰山なので、さすがおじょうずもの御上手者の鈴木君も、こりゃ手に合わないと云う顔付をする。主人はまた始まったなと云わ

ぬばかりに、^{ぞうげ}象牙の^{はし}箸で菓子皿の^{ふち}縁をかんかん叩いて俯つ向いている。迷亭だけは得意で弁じつづける。

「そこでこの矛盾なる現象の説明を明記して、暗

黒の^{ふち}淵から吾人の疑を^{せんざい}千載の^{もと}下に救い
出してくれた者は誰だと思う。学問あって以来の
学者と称せらるる彼の^かギリシャ^{ギリシャ}の哲人、
しょうようは
道遥派の元祖アリストートルその人であ
る。彼の説明に^{いわ}曰くさ——おい菓子皿などを叩
かんで謹聴していなくちゃいかん。——彼等希臘
人が競技において得るところの賞与は彼等が演
ずる技芸その物より貴重なものである。それ故に
ほうび
褒美にもなり、奨励の具ともなる。しかし智識
その物に至ってはどうかである。もし智識に対する
報酬として何物をか与えんとするならば智識以
上の価値あるものを与えざるべからず。しかし智
識以上の珍宝が世の中にあるか。無論あるはず
がない。下手なものをやれば智識の威厳を損する

訳になるばかりだ。彼等は智識に対して千両箱を
オリムパスの山ほど積み、クリーサスの富を
かたむ つく
傾 け 尽 しても相当の報酬を与えんとした
のであるが、いかに考えても とうてい 到底 釣り合うは
ずがないと云う事を かんぱ 観 破 して、それより以来と
云うものは奇麗さっぱり何にもやらない事にし
てしまった。 こうはくせいせん ひつてき
黄 白 青 銭 が智識の 匹 敵
でない事はこれで十分理解出来るだろう。さてこ
の原理を ふくよう のぞ
服 膺 した上で時事問題に 臨 んで
見るがいい。金田某は何だい紙幣に眼鼻をつけた
だけの人間じゃないか、奇警なる語をもって形容
するならば彼は一個の かつどうしへい
活 動 紙 幣 に過ぎん
のである。活動紙幣の娘なら活動切手くらいなと
ころだろう。 ひるがえ いかん
翻 って寒月君は 如 何 と見れ

ばどうだ。^{かたじ}辱^けけなくも学問最高の府を第一位
に卒業して^{ごう}毫^{けんたい}も^倦怠^怠の念なく長州征伐時
代の羽織の紐をぶら下げて、日夜^{どんぐり}団^栗のスタ
ビリチーを研究し、それでもなお満足する様子も
なく、^{きんきん}近^々の中ロード・ケルヴィンを圧倒す
るほどな大論文を発表しようとしつつあるでは
ないか。たまたま^{あずまばし}吾^妻橋^橋を通り掛って身投げ
の芸を仕損じた事はあるが、これも熱誠なる青年
に有りがちの^{ほっさてきしよい}発^作的^所為^為で^{ごう}毫^も彼が智
識^{とんや}の^問屋^屋たるに^{わずら}煩^煩いを及ぼすほどの出来
事ではない。迷亭一流の^{たとえ}喩^喩をもって寒月君を
評すれば彼は活動図書館である。智識をもって^こ捏
ね上げたる二十八^{サンチ}珊^珊の弾丸である。この弾丸
が一たび時機を得て学界に爆発するなら、――も

し爆発して見給え——爆発するだろう——」迷亭
はここに至って迷亭一流と自称する形容詞が思
うように出て来ないので俗に云う

りゅうとうだび

竜頭蛇尾の感に多少ひるんで見えたがた
ちまち「活動切手などは何千万枚あったって粉な
みじん

微塵になってしまうさ。それだから寒月には、

あんな釣り合わない女^{によしょう}性は駄目だ。僕が不

承知だ、百獣の^{うち}中^{うち}でもっとも聡明なる大象と、

もっとも^{たんらん}貪婪なる小豚と結婚するようなも

のだ。そうだろう苦沙弥君」と云って退ける^のと、

主人はまた黙って菓子皿を叩き出す。鈴木君は少

し^{へこ}凹んだ気味で

「そんな事も無かろう」と^{じゅつ}術^{じゅつ}なげに答える。

さっきまで迷亭の悪口を随分ついた揚句ここで

むやみ

無暗な事を云うと、主人のような無法者はどん

な事を^す素っ^{ぱぬ}破抜くか知れない。なるべくここは
いい

好加減に迷亭の鋭鋒をあしらって無事に切り
抜けるのが上分別なのである。鈴木君は利口者で
ある。いらざる抵抗は避けらるるだけ避けるのが
当世で、無要の口論は封建時代の遺物と心得てい

る。人生の目的は^{こうぜつ}口舌ではない実行にある。

自己の思い通りに着々事件が^{しんちよく}進捗すれば、
それで人生の目的は達せられたのである。苦勞と
心配と争論とがなくて事件が進捗すれば人生の

目的は^{ごくらくりゅう}極楽流に達せられるのである。鈴
木君は卒業後この極楽主義によって成功し、この
極楽主義によって金時計をぶら下げ、この極楽主
義で金田夫婦の依頼をうけ、同じくこの極楽主義

でまんまと首尾よく苦沙弥君を説き落して
とうがい
当該事件が十中八九まで成就したと
ころへ、迷亭なる常規をもって律すべからざる、
普通の人間以外の心理作用を有するかと怪まる
ふうらいぼう
る風来坊が飛び込んで来たので少々その
突然なるにめんくら
面喰っているところである。極楽
主義を発明したものは明治の紳士で、極楽主義を
実行するものは鈴木藤十郎君で、今この極楽主義
で困却しつつあるものもまた鈴木藤十郎君であ
る。

「君は何にも知らんからそうでもなかろうなど
と澄し返って、例になくことばずく
言葉寡なに上品に
ひか
控え込むが、せんだってあの鼻の主が来た時の
ようす
容子を見たらいかに実業家鼻負の尊公でも

へきえき きま
辟 易 するに 極 ってるよ、ねえ苦沙弥君、君
おお
大 に奮闘したじゃないか」

「それでも君より僕の方が評判がいいそうだ」

「アハハハなかなか自信が強い男だ。それではなくてはサヴェジ・チーなんて生徒や教師にからかわれてすまして学校へ出ちゃいられん訳だ。僕も意志は決して人に劣らんつもりだが、そんなに図太くは出来ん敬服の至りだ」

「生徒や教師が少々愚図愚図言っただって何が恐ろしいものか、サントブーヴは古今独歩の評論家

であるが^{パリ}巴里大学で講義をした時は非常に不評判で、彼は学生の攻撃に應ずるため外出の際必ず

あいくち そで ぼうぎょ
匕 首 を 袖 の下に持って 防 禦 の具とした事がある。ブルヌチエルがやはり巴里の大学

でゾラの小説を攻撃した時は……」

「だって君や大学の教師でも何でもないじゃないか。高がリードルの先生でそんな大家を例に引くのはざこ雑魚がくじら鯨をもってみずか自たとらえるようなもんだ、そんな事を云うとなおからかわれるぜ」

「黙っている。サントブーヴだって俺だって同じくらいな学者だ」

「大変な見識だな。しかし懐剣をもってある歩行くだけはあぶないからまね真似ない方がいいよ。大学の教師が懐剣ならリードルの教師はまあこがたな小刀くらいなところだな。しかしそれにしても刃物はけんのんなかみせ剣呑だから仲見世へ行っておもちゃの空気銃を買って来てしよ背負ってあるくがよかろう。

あいきょう
愛 嬌 があっていい。ねえ鈴木君」と云うと
鈴木君はようやく話が金田事件を離れたのでほ
っと一息つきながら

「相変らず無邪気で愉快だ。十年振りで始めて君
等に逢ったんで何だか窮屈な路次^{ろじ}から広い野原
へ出たような気持がする。どうも我々仲間の談話
は少しも油断がなくてね。何を云うにも気をお
おかなくちゃならんから心配で窮屈で実に苦し
いよ。話は罪がないのがいいね。そして昔しの書
生時代の友達と話すのが一番遠慮がなくっていい。
ああ今日は 図^は らず迷亭君に^あ 遇って愉快だった。僕はちと用事があるからこれで失敬する」と
鈴木君が立ち懸^かけると、迷亭も「僕もいこう、僕は
これから日本橋の 演 芸 えんげい きょうふうかい 矯 風 会 に

行かなくっちゃならんから、そこまでいっしょに行こう」「そりゃちょうどいい久し振りでいっしょに散歩しよう」と両君は手を^{たずさ}携えて帰る。

五

二十四時間の出来事を^も洩れなく書いて、洩れなく読むには少なくとも二十四時間かかるだろう、いくら写生文を^{こすい}鼓吹する吾輩でもこれは到底猫の^{くわだ}企て及ぶべからざる芸当と自白せざるを得ない。従っていかに吾輩の主人が、二六時中精細なる描写に価する奇言奇行を^{ろう}弄するにもかかわ^{かん}らず逐一これを読者に報知するの能力と根気のないのははなはだ^{いかん}遺憾である。遺憾ではあるがやむを得ない。休養は猫といえども必要で

ある。鈴木君と迷亭君の帰ったあとは^{こがら}木枯しの
はたと吹き^や息んで、しんしんと降る雪の夜のごと
く静かになった。主人は例のごとく書齋へ引き
^{こも}籠る。小供は六畳の^ま間へ枕をならべて寝る。一
間半の^{ふすま}襖を隔てて南向の^{へや}室には細君が数
え年三つになる、めん子さんと^{そえぢ}添乳して横にな
る。花曇りに暮れを急いだ日は^と疾く落ちて、表を
通る駒下駄の音さえ手に取るように茶の間へ響
く。^{となりちょう}隣町の^{みんてき}下宿で明笛を吹くのが絶
えたり続いたりして眠い^{じてい}耳底に折々鈍い刺激
を与える。外面は大方^{おぼろ}朧であろう。晚餐に
はん^{だし}半ぺんの^{あわびがい}煮汁で鮑貝をからにした腹で
はどうしても休養が必要である。

ほのかに^{うけたま}承われば世間には猫の恋とか

はいかい
称する 俳諧 趣味の現象があつて、春さきは町
内の同族共の夢安からぬまで浮かれ^あ歩るく夜も
あるとか云うが、吾輩はまだかかる心的変化に
そうほう
遭逢した事はない。そもそも恋は宇宙的の活
力である。^{かみ}上は在天の神ジュピターより^{しも}下は
土中に鳴く^{みみず}蚯蚓、おけらに至るまでこの道にか
けて浮身を^{やつ}窶すのが万物の習いであるから、吾
輩どもが^{おぼろ}朧うれしと、物騒な風流氣を出すの
も無理のない話しである。回顧すればかく云う吾
輩も^{みけこ}三毛子に^こ思い焦がれた事もある。三角主義の
張本金田君の令嬢阿倍川の富子さえ寒月君に恋
慕したと云う^{うわさ}噂である。それだから千金の
しゅんしょう
春宵を心も空に満天下の^{めねこおねこ}雌猫雄猫
が狂い廻るのを^{ぼんのう}煩惱の^{まよい}迷の^{けいべつ}と軽蔑

する念は毛頭ないのであるが、いかんせん誘われてもそんな心が出ないから仕方がない。吾輩目下の状態はただ休養を欲するのみである。こう眠く
ては恋も出来ぬ。のそのそと小供の^{ふとん}布^{すそ}団^の裾
へ廻^こちよ^ちて心地快く眠る。……

ふと眼を^あ開いて見ると主人はいつの^ま間にか書
斎から寢室へ来て細君の隣に延べてある^{ふとん}布^の団
の中にいつの間にか^{もぐ}潜^り込んでいる。主人の癖
として寝る時は必ず横文字の^{こほん}小^{の本}本^をを書斎から
た^ずさ^さ携^えて来る。しかし横になってこの本を二
ペー^ジ頁^と続けて読んだ事はない。ある時は持って
来て枕元へ置いたなり、まるで手を触れぬ事さえ
ある。一行も読まぬくらいならわざわざ^さ提^げてく
る必要もなさそうなものだが、そこが主人の主人

たるところでいくら細君が笑っても、止せと云っても、決して承知しない。毎夜読まない本をご苦労千万にも寝室まで運んでくる。ある時は慾張って三四冊も抱えて来る。せんだってじゅうは毎晩ウェブスターの大字典さえ抱えて来たくらいである。思うにこれは主人の病気で贅^{ぜいたく}沢^{ぜいたく}な人がりゅうぶんどう^{りゅうぶんどう}竜文堂に鳴る松風の音を聞かないと寝つかれないごとく、主人も書物を枕元に置かないと眠れないのであろう、して見ると主人にとって は書物は読む者ではない眠を誘う器械である。活版の睡眠剤である。

今夜も何か有るだろうと覗^{のぞ}いて見ると、赤い薄い本が主人の口髯^{くちひげ}の先につかえるくらいな地位に半分開かれて転がっている。主人の左の

手の ^{おやゆび} 拇 指 が本の間に ^{はさ} 挟 まったままである
ところから ^お 推すと奇特にも今夜は五六行読んだ
ものらしい。赤い本と並んで例のごとくニッケル
の ^{たもとどけい} 袂 時 計 が春に似合わぬ寒き色を放って
いる。

細君は ^{ちのみご} 乳 呑 児 を一尺ばかり先へ放り出して
口を開いていびきをかいて枕を ^{はず} 外 している。お
よそ人間において何が見苦しいと云って口を開
けて寝るほどの不体裁はあるまいと思う。猫など
は ^{しょうがい} 生 涯 こんな恥をかいた事がない。元来口
は音を出すため鼻は空気を ^{とどん} 吐 呑 するための道
具である。もっとも北の方へ行くと人間が無精に
なってなるべく口をあくまいと儉約をする結果
鼻で言語を使うようなズーズーもあるが、鼻を

へいそく

閉塞して口ばかりで呼吸の用を弁じているのはズーズーよりも見ともないと思う。第一天井

から ^{ねずみ}鼠 ^{ふん}の糞でも落ちた時危険である。

小供の方とは見るとこれも親に劣らぬ ^{てい}体たらくで寝そべっている。姉のとん子は、姉の権利はこんなものだと言わぬばかりにうんと右の手を延ばして妹の耳の上へのせている。妹のすん子はその ^{ふくしゅう}復讐に姉の腹の上に片足をあげて ^{ふんぞ}踏反り返っている。双方共寝た時の姿勢より九十度はたしかに廻転している。しかもこの不自然なる姿勢を維持しつつ両人とも不平も云わずおとなしく熟睡している。

さすがに春の ^{ともしび}灯火は格別である。天真らんまん ^{うち}爛漫ながら無風流極まるこの光景の裏に

良夜を惜しめとばかり ^{ゆか}床 しげに輝やいて見える。
もう ^{なんじ}何時 だろうと ^{へや}室 の中を見廻すと四隣
はしんとしたただ聞えるものは柱時計と細君の
いびきと遠方で下女の ^{はぎし}齒 軋 りをする音のみで
ある。この下女は人から齒軋りをすると云われる
といつでもこれを否定する女である。私は生れて
から ^{こんにち}今日 に至るまで齒軋りをした ^{おぼえ}覚 は
ございませんと強情を張って決して直しまし
うとも御気の毒でございますとも云わず、ただそ
んな覚はございませんと主張する。なるほど寝て
いてする芸だから覚はないに違ない。しかし事實
は覚がなくても存在する事があるから困る。世の
中には悪い事をしておりながら、自分はどこまで
も善人だと考えているものがある。これは自分が

罪がないと自信しているのだから無邪気で結構
ではあるが、人の困る事実はいかに無邪気でも滅
却する訳には行かぬ。こう云う紳士淑女はこの下
女の系統に属するのだと思う。――夜は^よ大^{だい}分^{ぶん}更
けたようだ。

台所の雨戸にトントんと二返ばかり軽く^{あた}中
った者がある。はてな今頃人の来るはずがない。

大方例の鼠だろう、鼠なら^と捕らん事に極めている
から勝手にあばれるが^{よろ}宜しい。――またトント
ンと^{あた}中る。どうも鼠らしくない。鼠としても大
変用心深い鼠である。主人の内の鼠は、主人の出
る学校の生徒のごとく^{にちゅう}日^{にちゅう}中^{やちゅう}でも夜^{やちゅう}中
でも乱暴^{ろうぜき}狼^{ろうぜき}藉^{じん}の練修に余念なく、^{びんぜん}憫^{びんぜん}然^{ぜん}な
る主人の夢を^{きょうは}驚^{きょうは}破^はするのを天職のごとく心

得ている連中だから、かくのごとく遠慮する訳がない。今のはたしかに鼠ではない。せんだってなどは主人の寢室にまで ^{ちんにゅう} 闖入して高からぬ主人の鼻の頭を ^か 嚙んで ^{がいか} 凱歌を奏して引き上げたくらいの鼠にしてはあまり臆病すぎる。決して鼠ではない。今度はギーと雨戸を下から上へ持ち上げる音がする、同時に腰障子を出来るだけ ^{ゆる} 緩やかに、溝に添うて ^{すべ} 滑らせる。いよいよ鼠ではない。人間だ。この深夜に人間が案内も乞わずとじまり ^は 戸締を外ずして御光来になるとすれば迷亭先生や鈴木君ではないに ^{きま} 極っている。御高名だけはかねて ^{うけたま} 承わっている ^{どろぼういんし} 泥棒陰士ではないか知らん。いよいよ陰士とすれば早く ^{そんがん} 尊顔を拝したいものだ。陰士は今や勝手の上

に大いなる泥足を上げて ^{ふたあし}二足ばかり進んだ
模様である。三足目と思う頃 ^{あげいた}揚板に ^{つまず}蹶い
てか、ガタリと ^{よる}夜に響くような音を立てた。吾
輩の背 ^{せなか}中の毛が靴 ^{くつばけ}刷毛で逆に擦 ^こすられたよ
うな心持がする。しばらくは足音もしない。細君

を見ると ^ま未だ口をあいて太平の空気を夢中に
とどん ^{おやゆび}吐吞している。主人は赤い本に ^{はさ}拇指を挟
まれた夢でも見ているのだろう。やがて台所でマ
チを擦 ^する音が聞える。陰士でも吾輩ほど夜陰に眼
は ^き利かぬと見える。勝手がわるくて定めし不都合
だろう。

この時吾輩は ^{うずく}蹲踞まりながら考えた。陰士は
勝手から茶の間の方面へ向けて出現するのであ
ろうか、または左へ折れ玄関を通過して書斎へと

抜けるであろうか。――足音は^{ふすま}襖の音と共に
^{えんがわ}椽側へ出た。陰士はいよいよ書齋へ^{はい}這入った。
それぎり音も沙汰もない。

吾輩はこの^ま間に早く主人夫婦を起してやりたい
ものだとうやく気が付いたが、さてどうした
ら起きるやら、^{いっこう}一向要領を得ん考のみが頭の
中に^{みずぐるま}水車の勢で廻転するのみで、何等の分
別も出ない。^{ふとん}布団の^{すそ}裾を^{くわ}唧えて振って見た
らと思って、二三度やって見たが少しも効用がな
い。冷たい鼻を頬に^す擦り付けたらと思って、主人
の顔の先へ持って行ったら、主人は眠ったまま、
手をうんと延ばして、吾輩の鼻づらを^い否やと云う
ほど突き飛ばした。鼻は猫にとっても急所である。
痛む事おびただしい。此^{こんど}度は仕方がないからに

やーにやーと二返ばかり鳴いて起こそうとした
が、どう云うものかこの時ばかりは^{のど}咽喉に物が
つか
痞えて思うような声が出ない。やっとの思いで
渋りながら低い奴を少々出すと驚いた。^{かんじん}肝心
の主人は^さ覚める^{けしき}気色もないのに突然陰士の足
音がし出した。ミチリミチリと椽側を^{つた}伝って近
づいて来る。いよいよ来たな、こうなってはもう
駄目だと^{あき}諦^{ふすま}らめて、^{やなぎごうり}襖と柳行李の間
にしばしの間身を忍ばせて動静を^{うか}窺^うがう。

陰士の足音は寢室の障子の前へ来てぴたりと
や
已む。吾輩は息を^こ凝^こらして、この次は何をするだ
ろうと一生懸命になる。あとで考えたが鼠を^と捕^と
時は、こんな気分になれば訳はないのだ、
たましい
魂が両方の眼から飛び出しそうな

いきおい^{さとり}
勢^悟である。陰士の御蔭で二度とない

を開いたのは実にありがたい。たちまち障子の
さん

棧の三つ目が雨に濡れたように真中だけ色が
すか^{うすくれない}
変る。それを透して薄^紅なものがだん
だん濃く写ったと思うと、紙はいつか破れて、赤

い舌がべろりと見えた。舌はしばしの^ま間に暗い中
に消える。入れ代って何だか恐しく光るものが一

つ、破れた^{あな}孔の向側にあらわれる。疑いもなく
陰士の眼である。妙な事にはその眼が、部屋の中

にある何物をも見ないで、ただ柳行李の^{うしろ}後^に
隠れていた吾輩のみを見つめているように感ぜ

られた。一分にも足らぬ間ではあったが、こう

に^ら
睨まれては寿命が縮まると思ったくらいであ
る。もう我慢出来んから行李の影から飛出そうと

決心した時、寢室の障子がスーと明いて待ち兼ねた陰士がついに眼前にあらわれた。

吾輩は叙述の順序として、不時の珍客なる泥棒陰士その人をこの際諸君に御紹介するの榮譽を

有する^{わけ} 訳であるが、その前ちょっと卑見を
開^{かい} 陳^{ちん} してご高慮を^わ 煩^ず らわしたい事がある。

古代の神は全智全能と^あ 崇^が められている。ことに
ヤソ^き 蘇^{ょう} 教の神は二十世紀の^{こんにち} 今^{こん} 日^{にち} までもこ

の全智全能の^{めん} 面^{かぶ} を被^{かぶ} っている。しかし俗人の
考うる全智全能は、時によると無智無能とも解釈
が出来る。こう云うのは明かにパラドックスであ

る。しかるにこのパラドックスを^{どうは} 道^{どう} 破^は した者は
てん^ち ち^{かい} び^{ゃく} 天^{てん} 地^ち 開^{かい} 闢^{びやく} 以来吾輩のみであろうと考え

ると、自分ながら^{まんざら} 満^{まん} 更^{ざら} な猫でもないと言う虚

栄心も出るから、是非共ここにその理由を申し上げて、猫も馬鹿に出来ないと云う事を、高慢なる人間諸君の脳^{のうり}裏に叩き込みたいと考える。天地万有は神が作ったような、して見れば人間も神の御製作であろう。現に聖書とか云うものにはその通りと明記してあるそうだ。さてこの人間について、人間自身が数千年来の観察を積んで、^{おお}大に玄妙不思議がると同時に、ますます神の全智全能を承認するように傾いた事実がある。それは^{ほか}外でもない、人間もかようにうじゃうじゃいるが同じ顔をしている者は世界中に一人もいない。顔の道具は無論^{きま}極っている、^{おお}大さも大概是似たり寄ったりである。換言すれば彼等は皆同じ材料から作り上げられている、同じ材料で出来て

いるにも関らず一人も同じ結果に出来上っておらん。よくまああれだけの簡単な材料でかくまで異様な顔を思いついた者だと思つと、製造家のぎりょう

伎倆に感服せざるを得ない。よほど独創的な想像力がないとこんな変化は出来ないのである。一代の画工が精力をしょうこうして変化を求めた顔でも十二三種以外に出る事が出来んのをもつ

おて推せば、人間の製造をいってうけお一手で受負った神のてぎわ

手際は格別な者だと驚嘆せざるを得ない。到底人間社会において目撃し得ざるてい底の伎倆であるから、これを全能的伎倆と云つても差しつかえないだろう。人間はこの点においておおい大に神に恐れ入っているようである、なるほど人間の観察点から云えばもっともな恐れ入り方である。しか

し猫の立場から云うと同一の事実がかえって神の無能力を証明しているとも解釈が出来る。もし全然無能でなくとも人間以上の能力は決してない者であると断定が出来るだろうと思う。神が人間の数だけそれだけ多くの顔を製造したと云うが、当初から胸中に成算があつてかほどの変化を示したもののか、または猫も ^{しゃくし} 杓子 も同じ顔に造ろうと思ってやりかけて見たが、とうてい ^{うま} 旨く行かなくて出来るのも出来るのも作り ^{そこ} 損ねてこの乱雑な状態に ^{おちい} 陥ったもののか、分らんではないか。彼等顔面の構造は神の成功の記念と見らると同時に失敗の ^{こんせき} 痕迹とも判ぜらるるではないか。全能とも云えようが、無能と評したって差し支えはない。彼等人間の眼は平面の上に二

つ並んでいるので左右を一^{いちじ}時に見る事が出来
んから事物の半面だけしか視線内に^{はい}這入らんの
は気の毒な次第である。立場を^か換えて見ればこの
くらい単純な事実は彼等の社会に日夜間断なく
起りつつあるのだが、本人^{のぼ}逆^{さか}せ上がって、神に
の
呑まれているから悟りようがない。製作の上に変
化をあらわすのが困難であるならば、その上に徹
頭徹尾の^{もこう}模^も倣^{こう}を示すのも同様に困難である。ラ
ファエルに寸分違わぬ聖母の像を二枚かけと注
文するのは、全然似寄らぬマドンナを^{そうふく}双^{そう}幅^{ふく}見
せろと^{せま}逼^{せま}ると同じく、ラファエルにとっては迷
惑であろう、否同じ物を二枚かく方がかえって困
難かも知れぬ。弘法大師に向って^{きのう}昨^{きのう}日^{にち}書いた通
りの筆法で空海と願いますと云う方がまるで書

か
体を換えてと注文されるよりも苦しいかも知ら
ん。人間の用うる国語は全然^{もこうしゅぎ}模倣主義で伝習
するものである。彼等人間が母から、^{うば}乳母から、
他人から実用上の言語を習う時には、ただ聞いた
通りを繰り返すよりほかに毛頭の野心はないの
である。出来るだけの能力で人真似をするのであ
る。かように人真似から成立する国語が十年二十
年と立つうち、発音に自然と変化を生じてくるの
は、彼等に完全なる^{もこう}模倣の能力がないと云う事
を証明している。純粹の^{もこう}模倣はかくのごとく至
難なものである。従って神が彼等人間を区別の出
来ぬよう、^{しっかい}悉皆焼印の御かめのごとく作り得
たならばますます神の全能を表明し得るもので、
同時に^{こんにち}今日のごとく勝手次第な顔を^{てんぴ}天日

に曝^さらさして、目まぐるしきまでに変化を生ぜしめたのはかえってその無能力を推知し得るの具ともなり得るのである。

吾輩は何の必要があつてこんな議論をしたか忘れてしまった。^{もと}本を忘却するのは人間にさえありがちの事であるから猫には当然の事さと大目に見て貰いたい。とにかく吾輩は寢室の障子をあけて敷居の上にぬっと現われた泥棒陰士をべっけん^わ瞥見した時、以上の感想が自然と胸中に湧き出でたのである。なぜ湧いた？——なぜと云う質問が出れば、今一応考え直して見なければならん。——ええと、その訳はこうである。

吾輩の眼前に^{ゆうぜん}悠然とあらわれた陰士の顔を見るとその顔が——^{ふだん}平常神の製作について

できばえ
その出来栄をあるいは無能の結果ではあるまいかと疑っていたのに、それを一時に打ち消すに足るほどの特徴を有していたからである。特徴とはほかではない。彼の^{びもく}眉目がわが親愛なる好男子水島寒月君に^{うり}瓜二つであると云う事実である。吾輩は無論泥棒に多くの^{ちき}知己は持たぬが、その行為の乱暴なところから^{ふだん}平常想像して^{ひそ}私かに胸中に^{えが}描いていた顔はないでもない。小鼻の左右に展開した、一銭銅貨くらいの眼をつけた、いがぐりあたま^き毬栗頭にきまっていると自分で勝手に極めたのであるが、見ると考えるとは天地の相違、想像は決して^{たくまし}逞くするものではない。この^{せい}陰士は背のすらりとした、色の浅黒い一の字眉の、意気で立派な泥棒である。年は二十六七歳で

もあろう、それすら寒月君の写生である。神もこんな似た顔を二個製造し得る^{てぎわ}手際があるとなれば、決して無能をもって目する訳には行かぬ。

いや実際の事を云うと寒月君自身が気が変になって深夜に飛び出して来たのではあるまいかと、はっと思ったくらいよく似ている。ただ鼻の下に薄黒く^{ひげ}髯^{めば}の芽生えが植え付けてないのでさては別人だと気が付いた。寒月君は^{にかみ}苦味ばした好男子で、活動小切手と迷亭から称せられたる、金田富子嬢を優に吸収するに足るほどな念入れの製作物である。しかしこの陰士も人相から観察するとその婦人に対する引力上の作用において決して寒月君に一步も譲らない。もし金田の令嬢が寒月君の眼付や口先に迷ったのなら、同等の熱

度をもってこの泥棒君にも^ほ惚れ込まなくては義理が悪い。義理はとにかく、論理に合わない。ああ云う才気のある、何でも早分りのする^{たち}性質だからこのくらいの事は人から聞かんでもきっと分るであろう。して見ると寒月君の代りにこの泥棒を差し出しても必ず満身の愛を捧げて^{きんしつ}琴瑟調和の実を挙げらるるに相違ない。万一寒月君が迷亭などの説法に動かされて、この千古の良縁が破れるとしても、この陰士が健在であるうちは大丈夫である。吾輩は未来の事件の発展をここまで予想して、富子嬢のために、やっと安心した。この泥棒君が天地の間に存在するのは富子嬢の生活を幸福ならしむる一大要件である。

陰士は小脇になにか抱えている。見ると^{さっき}先刻

主人が書齋へ放り込んだ ^{ふるげっと}古毛布 である。

とうざん はんてん おなんど はかた
唐 棧 の 半 纏 に、御納戸の博多の帯を

尻の上にむすんで、^{なまじろ すね ひざ}生 白 い 脛 は 膝 から下
むき出しのまま今や片足を挙げて畳の上へ入れ

る。^{さっき}先 刻 から赤い本に指を^か噛まれた夢を見てい

た、主人はこの時寝返りを^{どう}堂 と打ちながら「寒

月だ」と大きな声を出す。陰士は^{けっと}毛 布 を落して、

出した足を急に引き込めます。障子の影に細長い

むこうずね^{かす}
向 脛 が二本立ったまま 微 かに動くのが

見える。主人はうーん、むにゃむにゃと云いなが

ら例の赤本を突き飛ばして、黒い腕を^{ひぜんや}皮癬病み

のようにぼりぼり^か搔く。そのあとは静まり返って、

枕をはずしたなり寝てしまう。寒月だと云ったの

は全く我知らずの寝言と見える。陰士はしばらく

えんがわ
椽側 に立ったまま室内の動静をうかがって
いたが、主人夫婦の熟睡しているのを見^{みすま}済して
また片足を畳の上に入れる。今度は寒月だと云う
声も聞えぬ。やがて残る片足も踏み込む。

いっすい しゅんとう
一穂の春灯で豊かに照らされていた
六畳の間^まは、陰士の影に鋭どく二分せられて
やなぎごうり へん
柳行李の辺から吾輩の頭の上を越えて
壁^{なか}の半ばが真黒になる。振り向いて見ると陰士
の顔の影がちょうど壁の高さの三分の二の所に
ばくぜん
漠然と動いている。好男子も影だけ見ると、
やがしら ば もの
八つ頭の化け物のごとくまことに妙な
かつこう のぞ
恰好である。陰士は細君の寝顔を上から覗
き込んで見たが何のためかにはやにやと笑った。笑
い方までが寒月君の模写であるには吾輩も驚い

た。

細君の枕元には四寸角の一尺五六寸ばかりの
くぎづ
釘 付けにした箱が大事そうに置いてある。これ
は肥前の国は ^{からつ} 唐 津 の住人 ^{たたらさんぺいくん} 多 々 良 三 平 君
が先日帰省した時 ^{おみやげ} 御 土 産 に持って来た山の
いも
芋 である。山の芋を枕元へ飾って寝るのはあまり
例のない話しではあるがこの細君は煮物に使
^{さんぼん} う 三 盆 を ^{ようだんす} 用 簞 笥 へ入れるくらい場所の
適不適と云う觀念に乏しい女であるから、細君に
とれば、山の芋は ^{おろ} 愚 か、 ^{たくあん} 沢 庵 が ^あ 寢室に在っ
ても平気かも知れん。しかし神ならぬ陰士はそん
な女と知ろうはずがない。かくまで ^{ていちょう} 鄭 重 に
肌身に近く置いてある以上は大切な品物であろ
うと鑑定するのも無理はない。陰士はちょっと山

の芋の箱を上げて見たがその重さが陰士の予期
と合して大^{だいぶ}分^{ぶん}目方が懸^かりそうなのですこぶ
る満足^{てい}の体である。いよいよ山の芋を盗むなど
思ったら、しかもこの好男子にして山の芋を盗む
など思ったら急におかしくなった。しかし滅^め多^た
に声を立てると危険であるからじっと^こら^らえて
いる。

やがて陰士は山の芋の箱を^{うやうや}恭^{きん}しく
ふるげつと
古毛布にくるみ初めた。なにかからげるもの
はないかとあたりを見廻す。と、幸い主人が寝る
と^{ちりめん}ちりめんへこおび
時に解きすてた^{へこおび}縮^{しゅく}緬^{めん}の兵古帯がある。陰士
は山の芋の箱をこの帯でしっかり^{くく}括^{くく}って、苦も
なく背中へしょう。あまり女が好^すく体裁ではない。
それから小供のちゃんちゃんを二枚、主人のめり

やす ももひき

安の股引の中へ押し込むと、股のあたりが

丸く^{ふく}膨れて青大將^{あおだいしょう}が蛙^{かえる}を飲んだ

ような――あるいは青大將の^{りんげつ}臨月と云う方がよく形容し得るかも知れん。とにかく変な

かつこう

恰好になった。嘘だと思うなら試しにやって

見るがよろしい。陰士はめり安をぐるぐる^{くび}首った

たま^ま環へ捲きつけた。その次はどうするかと思うと

主人の^{つむぎ}紬の上着を大風呂敷のように^{ひろ}広げ

てこれに細君の帯と主人の羽織と^{じゅばん}襦絆とそ

の他あらゆる^{ぞうもつ}雑物を奇麗に畳んでくるみ込む。その熟練と器用なやり口にもちょっと感心し

た。それから細君の帯上げとしごきとを^つ続き合わ

せてこの包みを^{くく}括って片手にさげる。まだ

ちょうだい

頂戴するものは無いかなと、あたりを見廻

していたが、主人の頭の先に「朝日」の袋がある
のを見付けて、ちょっと^{たもと}袂へ投げ込む。また
その袋の中から一本出してランプに^{かざ}翳して火
をつける。^う旨まそうに深く吸って吐き出した煙り
が、乳色のホヤを^{めぐ}繞ってまだ消えぬ^ま間に、陰土
の足音は^{えんがわ}椽側を次第に遠のいて聞えなくな
った。主人夫婦は依然として熟睡している。人間
も存外^{うかつ}迂濶なものである。

吾輩はまた^{ざんじ}暫時の休養を要する。のべつに
^{しゃべ}喋舌^さっていては身体が続かない。ぐっと寝込ん
で眼が^さ覚めた時は^{やよい}弥生の空が朗らかに晴れ渡
って勝手口に主人夫婦が巡查と対談をしている
時であった。

「それでは、ここから^{はい}這入って寝室の方へ廻った

んですな。あなた方は睡眠中で ^{いっこう}一向 気がつか
なかったのですな」

「ええ」と主人は少し ^{きま}極 りがわるそうである。

「それで盗難に ^{かか}罹 ったのは ^{なんじ}何時 頃ですか」と
巡査は無理な事を聞く。時間が分るくらいなら何
にも盗まれる必要はないのである。それに気が付
かぬ主人夫婦はしきりにこの質問に対して相談
をしている。

「何時頃かな」

「そうですね」と細君は考える。考えれば分ると
思っているらしい。

「あなたは ^{ゆう}夕 べ何時に御休みになったんです
か」

「俺の寝たのは御前よりあとだ」

「ええ ^{わたく}私 しの伏せったのは、あなたより前です」

「眼が覚めたのは何時だったかな」

「七時半でしたらう」

「すると盗賊の ^{はい}這入ったのは、何時頃になるかな」

「なんでも夜なかでしょう」

「 ^{よなか}夜中は分りきっているが、何時頃かと云うんだ」

「たしかなところはよく考えて見ないと分りませんわ」と細君はまだ考えるつもりでいる。巡査はただ形式的に聞いたのであるから、いつ這入ったところが ^{いっこうつうよう}一向 痛 痒 を感じないのであ

る。嘘でも何でも、いい加減な事を答えてくれれば^よ宜いと思っているのに主人夫婦が要領を得ない問答をしているものだから少々^じ焦れたくなかったと見えて

「それじゃ盗難の時刻は不明なんですな」と云うと、主人は例のごとき調子で

「まあ、そうですな」と答える。巡査は笑いもせず

「じゃあね、明治三十八年何月何日戸締りをして寝たところが盗賊が、どこそこの雨戸を^{はず}外してどこそこに忍び込んで品物を何点盗んで行ったから^{みぎ}右^{こく}告^そ訴^{におよび}及^{そう}候^{ろう}也^{なり}という書面をお出しなさい。届ではない告訴です。^な宛^{あて}はない方がいい」

「品物は一々かくんですか」

「ええ羽織何点代価いくらと云う風に表にして出すんです。――いや^{はい}這入って見たって仕方がない。^と盗られたあとなんだから」と平気な事を云って帰って行く。

主人は^{ふですずり}筆硯を座敷の真中へ持ち出して、細君を前に呼びつけて「これから盗難告訴をかくから、盗られたものを一々云え。さあ云え」とあたかも喧嘩でもするような口調で云う。

「あら^{いや}厭だ、さあ云えだなんて、そんなけんぺい^{権柄}ずくで誰が云うもんですか」と細帯を巻き付けたままどっかと腰を^す据える。

「その風はなんだ、宿場女郎の^{できそこな}出来損い見たようだ。なぜ帯をしめて出て来ん」

「これで悪るければ買って下さい。宿場女郎でも何でも盗られりゃ仕方がないじゃありませんか」

「帯までとって行ったのか、^{ひど}苛い奴だ。それじゃ帯から書き付けてやろう。帯はどんな帯だ」

「どんな帯って、そんなに何本もあるもんですか、くろじゅす ちりめん
黒 緇 子 と 縮 緬 の腹合せの帯です」

「黒緇子と縮緬の腹合せの帯一筋――^{あたい}価は
いくらくらいだ」

「六円くらいでしょう」

「生意気に高い帯をしめてるな。今度から一円五十銭くらいののにしておけ」

「そんな帯があるものですか。それだからあなたは不人情だと云うんです。女房なんどは、どんな

汚ない風をしていても、自分さい^よ宜けりゃ、構わないんでしょう」

「まあいいや、それから何だ」

「いとおり^{いとお}織の羽織です、あれは^{こうの}河野の叔母さん
^{かたみ}の形身にもらったんで、同じ糸織でも今の糸織
とは、たちが違います」

「そんな講釈は聞かんでもいい。値段はいくら
だ」

「十五円」

「十五円の羽織を着るなんて身分不相当だ」

「いいじゃありませんか、あなたに買っていただ
きゃあしまいし」

「その次は何だ」

「黒足袋が一足」

「御前のか」

「あなたんでさあね。代価が二十七銭」

「それから？」

「山の芋が一箱」

「山の芋まで持って行ったのか。煮て食うつもりか、とろろ汁にするつもりか」

「どうするつもりか知りません。泥棒のところへ行って聞いていらっしやい」

「いくらするか」

「山の芋のねだんまでは知りません」

「そんなら十二円五十銭くらいにしておこう」

「馬鹿馬鹿しいじゃありませんか、いくら^{からつ}唐津から掘って来たって山の芋が十二円五十銭してたまるもんですか」

「しかし御前は知らんと云うじゃないか」

「知りませんわ、知りませんが十二円五十銭なんて法外ですもの」

「知らんけれども十二円五十銭は法外だとは何だ。まるで論理に合わん。それだから貴様はおタンチン・パレオロガスだと云うんだ」

「何ですって」

「おタンチン・パレオロガスだよ」

「何ですそのおタンチン・パレオロガスって云うのは」

「何でもいい。それからあとは――俺の着物は
いっこう
一 向 出て来んじゃないか」

「あとは何でも宜^ようござんす。おタンチン・パレ
オロガスの意味を聞かして 頂^{ちょうだい} 戴」

「意味も何^なにもあるもんか」

「教えて下すってもいいじゃありませんか、あなたはよっぽど私を馬鹿にしていらっしゃるのね。きっと人が英語を知らないと思って悪口をおっしゃったんだよ」

「愚^ぐな事を言わんで、早くあとを云うが好い。早く告訴をせんと品物が返らんぞ」

「どうせ今から告訴をしたって間に合いやしません。それよりか、オタンチン・パレオロガスを教えて頂戴」

「うるさい女だな、意味も何にも無いと云うに」

「そんなら、品物の方もあとはありません」

「頑^{がん}愚^ぐだな。それでは勝手にするがいい。俺は

もう盗難告訴を書いてやらんから」

「私も^{しな}品^{かず}数を教えて上げません。告訴はあなたが御自分でなさるんですから、私は書いていただかないでも困りません」

「それじゃ^よ廃^{そう}」と主人は例のごとくふいと立って書齋へ^{はい}這入る。細君は茶の間へ引き下がって針箱の前へ坐る。^{ふたり}両人共十分間ばかりは何にもせず^{にら}に黙って障子を睨め付けている。

ところへ威勢よく玄関をあけて、山の芋の寄贈^{たたらさん}さん^{あが}べい三平君が上ってくる。多々良三平君はも^やとこの家の書生であつたが今では法科大学を卒業してある会社の鉱山部に雇われている。

これも実業家の^{めばえ}芽生で、鈴木藤十郎君の後進生である。三平君は以前の関係から時々旧先生の

そうろ
草廬を訪問して日曜などには一日遊んで帰る
くらい、この家族とは遠慮のない間柄である。

「奥さん。よか天気でございます」と唐津訛
りか何かで細君の前にズボンのまま立て膝をつ
く。

「おや多々良さん」

「先生はどこぞ出なすったか」

「いいえ書斎にいます」

「奥さん、先生のごと勉強しなさんと毒ですばい。
たまの日曜だもの、あなた」

「わたしに言っても駄目だから、あなたが先生に
そうおっしゃい」

「そればってんが……」と言い掛けた三平君は座
敷中を見廻わして「今日は御嬢さんも見えんな」

と半分妻君に聞いているや否や次の間^まからとん子とすん子が馳け出して来る。

「多々良さん、今日は御^お寿司^{すし}を持って来て？」と姉のとん子は先日の約束を覚えていて、三平君の顔を見るや否や催促する。多々良君は頭^かを掻きながら

「よう覚えているのう、この次はきっと持って来ます。今日は忘れた」と白状する。

「いや一だ」と姉が云うと妹もすぐ真似をして「いや一だ」とつける。細君はようやく御機嫌が直って少々笑顔になる。

「寿司は持って来んが、山の芋は上げたろう。御嬢さん喰べなさったか」

「山の芋ってなあに？」と姉がきくと妹が今度も

また真似をして「山の芋ってなあに？」と三平君に尋ねる。

「まだ食いなさらんか、早く^{おか}御母あさんに煮て御貰い。^{からつ}唐津の山の芋は東京のとは違ってうまかあ」と三平君が国自慢をすると、細君はようやく気が付いて

「多々良さんせんだって御親切に沢山ありがとう」

「どうです、喰べて見なすったか、折れんように箱を^{あつ}誂らえて堅くつめて来たから、長いままでありましたろう」

「ところがせっかく下すった山の芋を^{ゆう}夕べ泥棒に取られてしまつて」

「ぬす^と盗が？　馬鹿な奴ですなあ。そげん山の芋

の好きな男がおりますか？」と三平君 ^{おおい}大に感
心している。

^{おか}「御母あさま、夕べ泥棒が^{はい}這入ったの？」と姉が
尋ねる。

「ええ」と細君は ^{かろ}軽く答える。

「泥棒が這入って——そうして——泥棒が這入
って——どんな顔をして這入ったの？」と今度は
妹が聞く。この奇問には細君も何と答えてよいか
分らるので

^{こわ}「^{こわ}恐い顔をして這入りました」と返事をして
多々良君の方を見る。

「恐い顔って多々良さん見たような顔なの」と姉
が気の毒そうにもなく、押し返して聞く。

「何ですね。そんな失礼な事を」

「ハハハハ ^{わたし}私 の顔はそんなに恐いですか。困ったな」と頭を^か掻く。多々良君の頭の後部には直径一寸ばかりの^{はげ}禿がある。一カ月前から出来だして医者に見て貰ったが、まだ容易に^{なお}癒りそうもない。この禿を第一番に見付けたのは姉の息子である。

「あら多々良さんの頭は^{おかあ}御母さまのように^ひ光かってよ」

「だまっていらっしゃいと云うのに」

「御母あさま夕べの泥棒の頭も光かってて」とこれは妹の質問である。細君と多々良君とは思わず吹き出したが、あまり^{わずら}煩わしくて話も何も出来ぬので「さあさあ御前さん達は少し御庭へ出て御遊びなさい。今に御母あさまが好い御菓子を上

げるから」と細君はようやく子供を追いやって

「多々良さんの頭はどうしたの」と真面目に聞いて見る。

「虫が食いました。なかなか癒りません。奥さんも有んなさるか」

「やだわ、虫が食うなんて、そりゃ^{まげ}鬚で釣るところは女だから少しは禿げますさ」

「禿はみんなバクテリアですばい」

「わたしのはバクテリアじゃありません」

「そりゃ奥さん意地張りたい」

「何でもバクテリアじゃありません。しかし英語で禿の事を何とか云うでしょう」

「禿はボールドとか云います」

「いいえ、それじゃないの、もっと長い名がある

でしょう」

「先生に聞いたら、すぐわかりましょう」

「先生はどうしても教えて下さらないから、あなたに聞くんです」

わたし
「私」はボードより知りませんが。長かって、どげんですか」

「オタンチン・パレオロガスと云うんです。オタンチンと云うのが禿と云う字で、パレオロガスが頭なんでしょう」

「そうかも知れませんか。今に先生の書斎へ行ってウェブスターを引いて調べて上げましょう。しかし先生もよほど変っていなさいますな。この天気の良いのに、うちにじっとして――奥さん、あれじゃ胃病は癒りませんな。ちと上野へでも花

見に出掛けなさるごと勧めなさい」

「あなたが連れ出して下さい。先生は女の云う事は決して聞かない人ですから」

「この頃でもジャムを舐^なめなさるか」

「ええ相変らずです」

「せんだって、先生こぼしていなさいました。どうも妻^{さい}が俺のジャムの舐め方が烈しいと云って困るが、俺はそんなに舐めるつもりはない。何か勘定違いだろうと云いなさるから、そりゃ御嬢さんや奥さんがいっしょに舐めなさるに違いない——」

「いやな多々良さんだ、何だってそんな事を云うんです」

「しかし奥さんだって舐めそうな顔をしていな

さるばい」

「顔でそんな事がどうして分ります」

「分らんばってんが――それじゃ奥さん少しも舐めなさらんか」

「そりゃ少しは舐めますさ。舐めたって好いじゃありませんか。うちのものだもの」

「ハハハハそうだろうと思った――しかし^{ほん}本
の^{こと}事、泥棒は飛んだ災難でしたな。山の芋ばかり
持^いって行たのですか」

「山の芋ばかりなら困りゃしませんが、不断着を
みんな取って行きました」

「早速困りますか。また借金をしなければならん
ですか。この猫が犬ならよかったに――惜しい事
をしたなあ。奥さん犬の^{ふと}大^{やつ}か奴を是非一丁飼

いなさい。――猫は駄目ですばい、飯を食うばかりで――ちっとは鼠でも^と捕りますか」

「一匹もとった事はありません。本当に横着なずうずう
図々図々しい猫ですよ」

「いやそりゃ、どうもこうもならん。早々棄てなさい。^{わたし}私 が貰って行って煮て食おうか知らん」

「あら、多々良さんは猫を食べるの」

「食いました。猫は^{うも}旨うござります」

「随分豪傑ね」

下等な書生のうちには猫を食うような野蛮人がある^{よし}由 はかねて伝聞したが、吾輩が平生けんこ かたじけの
眷顧を 辱 うする多々良君その人もまたこの同類ならんとは今が今まで夢にも知らな

かった。いわんや同君はすでに書生ではない、卒業の日は浅きにも ^{かか}係わらず堂々たる一個の法学士で、^{む い}六つ井物産会社の役員であるのだから吾輩の ^{きょう}驚 ^{うがく}愕 もまた一と通りではない。人を見たら泥棒と思えと云う格言は寒月第二世の行為によってすでに証拠立てられたが、人を見たら猫食いと思えとは吾輩も多々良君の御蔭によって始めて感得した真理である。世に住めば事を知る、事を知るは嬉しいが日に日に危険が多くて、日に日に油断がなくなる。^{こうかつ}狡 猾 になるのも卑劣になるのも表裏二枚合せの護身服を着けるのも皆事を知るの結果であって、事を知るのは年を取るの罪である。老人に ^{ろく}碌 なものがないのはこの理だな、吾輩などもあるいは今のうちに多々

良君の ^{なべ}鍋 ^{たまねぎ}の中で ^{じょうぶつ}玉葱と共に 成 仏 す

る方が得策かも知れんと考えて ^{すみ}隅 の方に小さ

くなっていると、 ^{さいぜん}最 前 細君と喧嘩をして
いったん

一 反 書斎へ引き上げた主人は、多々良君の声を聞きつけて、のそのそ茶の間へ出てくる。

「先生泥棒に逢いなさったそうですね。なんぢ^ぐ愚な事です」と ^{へきとう}劈 頭 一番にやり込める。

「^{はい}這入る奴が^ぐ愚なんだ」と主人はどこまでも賢人をもって自任している。

「這入る方も愚だばってんが、取られた方もあま^{かし}り 賢 こくはなかごたる」

「何にも取られるものの無い多々良さんのよう
なのが一番賢いんでしょう」と細君が ^{こんど}此 度 は
おっと
良 人 の肩を持つ。

「しかし一番愚なのはこの猫ですばい。ほんにまあ、どう云う了見じゃろう。鼠は捕^とらず泥棒が来ても知らん顔をしている。――先生この猫をわたし私にくんなさらんか。こうしておいたっちゃ何の役にも立ちませんばい」

「やっても好い。何にするんだ」

「煮て喰べます」

主人は猛烈なるこの一^{いち}言^{ごん}を聞いて、うふと気味の悪い胃弱性の笑を洩^もらしたが、別段の返事もしないので、多々良君も是非食いたいとも云わなかったのは吾輩にとって望外の幸福である。主人はやがて話頭を転じて、

「猫はどうでも好いが、着物をとられたので寒くていかん」と大^{おお}に銷^{しょう}沈^{ちん}の体^{てい}である。

なるほど寒いはずである。^{きのう}昨日までは綿入を二枚重ねていたのに今日は^{あわせ}袷^{はんそで}に半袖のシャツだけで、朝から運動もせず^{こぞ}枯坐したざりであるから、不十分な血液はことごとく胃のために働いて手足の方へは少しも巡回して来ない。

「先生教師などをしておったちゃとうていあかんですばい。ちょっと泥棒に逢っても、すぐ困る——^{いっちょ}丁^か今から考を換えて実業家にでもなんなさらんか」

「先生は実業家は^{きらい}嫌だから、そんな事を言ったって駄目よ」

と細君が^{そば}傍から多々良君に返事をする。細君は無論実業家になって貰いたいのである。

「先生学校を卒業して何年になんなさるか」

「今年で九年目でしょう」と細君は主人を^{かえり}顧みる。主人はそうだとも、そうで無いとも云わない。

「九年立っても月給は上がらず。いくら勉強しても人は^ほ褒めちゃくれず、^{ろうくんひとりせきばく}郎君独寂寞ですたい」と中学時代で覚えた詩の句を細君のために朗吟すると、細君はちょっと分りかねたものだから返事をしない。

「教師は無論^{きらい}嫌だが、実業家はなお嫌いだ」と主人は何が好きだか心の^{うち}裏で考えているらしい。

「先生は何でも嫌なんだから……」

「嫌でないのは奥さんだけですか」と多々良君が^{じょうだん}柄に似合わぬ冗談を云う。

「一番嫌だ」主人の返事はもっとも簡明である。

細君は横を向いてちょっと^{すま}澄したが再び主人の方を見て、

「生きていらっしゃるのも^{おきらい}御嫌なんでしょう」と充分主人を^{へこ}凹ましたつもりで云う。

「あまり好いてはおらん」と存外^{のんき}呑気な返事をする。これでは手のつけようがない。

「先生ちっと^{かっぱつ}活潑に散歩でもしなさらんと、からだを^{こわ}壊してしまいますばい。——そうして実業家になんなさい。金なんか^{もう}儲けるのは、ほんとに^{ぞうさ}造作もない事でござります」

「少しも儲けもせん癖に」

「まだあなた、去年やっと会社へ^{はい}這入ったばかりですもの。それでも先生より貯蓄があります」

「どのくらい貯蓄したの？」と細君は熱心に聞く。

「もう五十円になります」

「一体あなたの月給はどのくらいなの」これも細君の質問である。

「三十円ですたい。その内を毎月五円^{ずつ}宛 会社の方で預って積んでおいて、いざと云う時にやります。――奥さん小遣錢で^{そとぼりせん}外 濠 線 の株を少し買いなさらんか、今から三四個月すると倍になります。ほんに少し金さえあれば、すぐ二倍にでも三倍にでもなります」

「そんな御金があれば泥棒に逢ったって困りゃしないわ」

「それだから実業家に限ると云うんです。先生も

法科でもやって会社か銀行へでも出なされば、今頃は月に三四百円の収入はありますのに、惜しい事でござんしたな。――先生あの鈴木藤十郎と云う工学士を知ってなさるか」

きのう
「うん 昨日 来た」

「そうでござんすか、せんだってある宴会で逢いました時先生の御話をしたら、そうか君はくしゃみ
苦沙弥君のところの書生をしていたのか、僕も苦沙弥君とはむか
昔 小石川の寺でいっしょに自炊をしておった事がある、今度行ったらよろ
宜 しく云うてくれ、僕もその内尋ねるからと云っていました」

「近頃東京へ来たそうだな」

「ええ今まで九州の炭坑におりましたが、こない

だ東京^{づめ}詰^{うま}になりました。なかなか旨^{うま}いです。

わたし
私^{わたし} なぞにでも朋友のように話します。――先生あの男がいくら貰^{もら}ってると思いなさる」

「知らん」

「月給が二百五十円で盆暮に配当がつきますから、何でも平均四五百円になりますばい。あげな男が、よかしこ取っておるのに、先生はリーダー専門で十年^{いちこきゅう}一^{いち}狐^こ裘^{きゅう}じゃ馬鹿気ておりますなあ」

「實際馬鹿気ているな」と主人のような超然主義の人でも金銭の觀念は普通の人間と^{こと}異^{こと}なるところはない。否困窮するだけに人一倍金が欲しいのかも知れない。多々良君は充分実業家の利益をふい^{ふい}ち^ちょう^{ょう}吹^ふ聴^きしてもう云う事が無くなったものだ

から

「奥さん、先生のところへ水島寒月と云う^{じん}人が来ますか」

「ええ、善くいらっしゃいます」

「どげんな人物ですか」

「大変学問の出来る方だそうです」

「好男子ですか」

「ホホホホ多々良さんくらいなものでしょう」

「そうですか、^{わたし}私くらいなものですか」と多々良君真面目である。

「どうして寒月の名を知っているのかい」と主人が聞く。

「せんだって或る人から頼まれました。そんな事を聞くだけの価値のある人物でしょうか」多々良

君は聞かぬ先からすでに寒月以上に構えている。

「君よりよほどえらい男だ」

「そうでございますか、^{わたし}私よりえらいですか」と笑いもせず^{おこ}怒りもせぬ。これが多々良君の特色である。

「^{きんきん}近々博士になりますか」

「今論文を書いてるそうだ」

「やっぱり馬鹿ですな。博士論文をかくなんて、もう少し話せる人物かと思ったら」

「相変らず、えらい見識ですね」と細君が笑いながら云う。

「博士になったら、だれとかの娘をやるとかやらんとか云うていましたから、そんな馬鹿があらう

か、娘を貰うために博士になるなんて、そんな人物にくれるより僕にくれる方がよほどましだと云ってやりました」

「だれに」

「わたし
私」に水島の事を聞いてくれと頼んだ男です」

「鈴木じゃないか」

「いいえ、あの人にゃ、まだそんな事は云い切りません。向うは大頭ですから」

「多々良さんは ^{かげべんけい} 蔭 弁 慶 ね。うちへなんぞ来ちゃ大変威張っても鈴木さんなどの前へ出ると小さくなってるんでしょう」

「ええ。そうせんと、あぶないです」

「多々良、散歩をしようか」と突然主人が云う。

さっき　あわせ
先刻から　裕　一枚であまり寒いので少し運動でもしたら暖かになるだろうと云う考から主人はこの先例のない動議を呈出したのである。行き当りばったりの多々良君は無論　しゅんじゅん　逡　巡　する訳がない。

「行きましょう。上野にしますか。芋　いも　ざか　坂　へ行って団子を食いましょうか。先生あすこの団子を食った事がありますか。奥さん一返行って食って御覧。柔らかくて安いです。酒も飲ませます」と例によって秩序のない駄弁を　ふる　揮　ってるうちに主人はもう帽子を被って　くつぬぎ　沓　脱　へ下りる。

吾輩はまた少々休養を要する。主人と多々良君が上野公園でどんな真似をして、芋坂で団子を幾皿食ったかその辺の逸事は探偵の必要もなし、ま

びこう
た尾行する勇氣もないからずっと略してその
あいだ

間 休養せんければならん。休養は万物の
びんてん

旻 天 から要求してしかるべき権利である。こ

の世に生息すべき義務を有して しゅんどう
蠢 動 する
者は、生息の義務を果すために休養を得ねばなら

ぬ。もし神ありて なんじ
汝 は働くために生れたり寝
るために生れたるに非ずと云わば吾輩はこれに
答えて云わん、吾輩は仰せのごとく働くために生
れたり故に働くために休養を乞うと。主人のごと

く 器 械 に 不 平 を 吹 き 込 ん だ ま で の
ぼくきょうかん

木 強 漢 ですら、時々は日曜以外に自弁休
養をやるではないか。多感多恨にして日夜心神を

労する吾輩ごとき者は たとい
仮 令 猫といえども主人
以上に休養を要するは勿論の事である。ただ

さっき
先刻多々良君が吾輩を目して休養以外に何等
の能もない贅物のごとくに罵ったのは
少々気掛りである。とかく物象にのみ使役
せらるる俗人は、五感の刺激以外に何等の活動も
ないので、他を評価するのも形骸以外に渉ら
んのは厄介である。何でも尻でも端折って、汗
でも出さないと働らいていないように考えてい
る。だるま
達磨と云う坊さんは足の腐るまで座禅をし
て澄ましていたと云うが、仮令壁の隙から
つた
蔭が這い込んで大師の眼口を塞ぐまで動か
ないにしろ、寝ているんでも死んでいるんでもな
い。頭の中は常に活動して、廓然無聖な
どと乙な理窟を考え込んでいる。儒家にも静坐の
工夫と云うのがあるそうだ。これだって一室の

うち　いざり
中　に閉居して安閑と　壁　の修行をするので
はない。脳中の活力は人一倍　さかん　熾　に燃えている。
ただ外見上は至極沈静端肅の　てい　態　であるから、天
下の凡眼はこれらの知識巨匠をもつて
こんすいかし　ようじん　みな
昏睡仮死の庸人　と見做して無用の長物
とか　ごくつぶ　しとか入らざる　ひぼう　誹　謗　の声を立て
るのである。これらの凡眼は皆形を見て心を見ざ
る不具なる視覚を有して生れついた者で、――し
か
かも彼の多々良三平君のごときは形を見て心
を見ざる第一流の人物であるから、この三平君が吾
輩を目して　かんしけつ
乾　屎　同等に心得るのももっと
もだが、恨むらくは少しく古今の書籍を読んで、
やや事物の真相を解し得たる主人までが、浅薄な
る三平君に一も二もなく同意して、　ねこなべ
猫　鍋　に故

障を ^{さしはさ} 挟 ^{けしき} む 景 色 のない事である。しかし一
歩退いて考えて見ると、かくまでに彼等が吾輩を
けいべつ
軽 蔑 するの、あながち無理ではない。大声
^{りじ}
は俚耳に入らず、陽春白雪の詩には和するもの少
^{たとえ}
なしの 喩 も古い昔からある事だ。形体以外の
^{あた} ^{これい}
活動を見る 能 わざる者に向って 己 霊 の光輝
^し ^い ^{せま}
を見よと強ゆるは、坊主に髪を結えと 逼 るがご
^{まぐろ}
とく、 鮪 に演説をして見ろと云うがごとく、
電鉄に脱線を要求するがごとく、主人に辞職を勧
告するごとく、三平に金の事を考えるなど云うが
ごときものである。 ^{ひっきょう}
必 竟 無理な注文に過ぎ
ん。しかしながら猫といえども社会的動物である。

社会的動物である以上はいかに高く ^{みずか}
自 ら標
置するとも、或る程度までは社会と調和して行か

ねばならん。主人や細君や^{ないしお}乃至御さん、三平
づれ

連が吾輩を吾輩相当に評価してくれんのは残念ながら致し方がないとして、不明の結果皮を剥いで三味線屋に売り飛ばし、肉を刻んで多々良君

の膳に^{のぼ}上すような無分別をやられては^{ゆゆ}由々しき大事である。吾輩は頭をもって活動すべき天命

を受けてこの^{しゃば}娑婆に出現したほどのここんらい

古今来の猫であれば、非常に大事な身体である。千金の子は^{し どうすい}堂陞に坐せずとの^{ことわざ}諺も

ある事なれば、好んで^{ちょうまい}超邁を^{そう}宗として、いたず

徒らに吾身の危険を求むるのは単に自己のわざわい

^{そむ}災なるのみならず、また大いに天意に背

く訳である。猛虎も動物園に入れば^{ふんとん}糞豚の隣

りに居を占め、^{こうがん}鴻雁も鳥屋に^{いけど}生擒らるれば

すうけい まないた おな ようじん
雛 鶏 と 俎 を 同じゅうす。庸 人 と
あいご くだ ようびょう
相 互 する以上は 下 っ て 庸 猫 と 化 せ ざ
る べ から ず。庸猫たらんとすれば鼠を捕らざるべ
から ず。――吾輩はとうとう鼠をとる事に極めた。

せんだってじゅうから日本は露西亞と大戦争
をしているそうだ。吾輩は日本の猫だから無論日
本 覇 負 である。出来得べくんば
こんせいねこりょだん
混 成 猫 旅 団 を組織して露西亞兵を引
か
っ搔いてやりたいと思うくらいである。かくまで
おうせい
に元気 旺 盛 な吾輩の事であるから鼠の一足
や二足はとろうとする意志さえあれば、寝ていて
も訳なく捕れる。昔 しある人当時有名な禅師に
向って、どうしたら悟れましようと言いたら、猫

が鼠を^{ねら} 覘 うようにさしやれと答えたそうだ。猫
が鼠をとるようにとは、かくさえすれば^は外ずれっ
こはござらぬと云う意味である。女^{さか} 賢 しゅうし
てと云う諺はあるが猫^{さか} 賢 しゅうして鼠^と 捕り
そこな^損 うと云う格言はまだ無いはずだ。して見れ
ばいかに^{かし} 賢 こい吾輩のごときものでも鼠の捕
れんはずはあるまい。とれんはずはあるまいどこ
ろか捕り損うはずはあるまい。今まで捕らんのは、
捕りたくないからの事さ。春の日はきのうのごと
く暮れて、折々の風に誘わるる^{はなふぶき} 花 吹 雪 が台所
の腰障子の破れから飛び込んで^{ておけ} 手 桶 の中に浮
ぶ影が、薄暗き勝手用のランプの光りに白く見え
る。今夜こそ大手柄をして、うちじゅう驚かして
やろうと決心した吾輩は、あらかじめ戦場を見廻

って地形を飲み込んでおく必要がある。戦闘線は
もちろん
勿論 あまり広かろうはずがない。畳数にした
ら四畳敷もあろうか、その一畳を仕切って半分は
流し、半分は酒屋八百屋の御用を聞く土間である。

へっついには貧乏勝手に似合わぬ立派な者で赤の

どうこ うし ま
銅 壺 がぴかぴかして、 後 ろは羽目板の間を二

のこ あわびがい
尺 遺 して吾輩の 鮑 貝 の所在地である。茶

の間に近き六尺は ぜんわんさらこばち
膳 椀 皿 小 鉢 を入れる

せま
戸棚となって 狭 き台所をいとど狭く仕切って、

横に差し出すむき出しの棚とすれすれの高さに

すりばち あおむ
なっている。その下に 摺 鉢 が仰 向けに置か
れて、摺鉢の中には小桶の尻が吾輩の方を向いて

すりこぎ か
いる。大根卸し、摺 小 木 が並んで懸 [#ルビの「か」

かたわ
は底本では「け」] けてある 傍 らに火消壺だけが

しょうぜん ひか たるき
悄 然 と 控 えている。真黒になった 樽 木
の交叉した真中から一本の じざい 自 在 を下ろして、先
へは平たい大きな かご 籠 をかける。その籠が時々風
に揺れて おうよう 鷹 揚 に動いている。この籠は何のため
に釣るすのか、この うち 家 へ来たてには いっこう 一 向
要領を得なかったが、猫の手の届かぬためわざと
食物をここへ入れると云う事を知ってから、人間
の意地の悪い事をしみじみ感じた。

これから作戦計画だ。どこで鼠と戦争するかと
云えば無論鼠の出る所でなければならぬ。いかに
こっちに べんぎ 便 宜 な地形だからと云って一人で待
ち構えていてはてんで戦争にならん。ここにおい
てか鼠の出口を研究する必要が生ずる。どの方面
から来るかなと台所の真中に立って四方を見廻

わす。何だか東郷大将のような心持がする。下女はさっき湯に行つて戻つて来^こん。小供はとくに寝ている。主人は芋^{いも}坂^{ざか}の団子を喰つて歸つて来て相変らず書齋に引き籠^{こも}っている。細君は――細君は何をしているか知らない。大方居眠りをして山芋の夢でも見ているのだろう。時々門前をじんりき人^{じん}力^{りき}が通るが、通り過ぎた後^{あと}は一段と淋しい。わが決心と云い、わが意氣と云い台所の光景と云い、四^し辺^{へん}の寂^{せき}寞^{ばく}と云い、全体の感じがことごと^{ねこちゅう}く悲壯である。どうしても猫^{ねこ}中^{ちゅう}の東郷大将としか思われ^{きょうがい}ない。こう云う境^{きょう}界^{がい}に入ると物^{もの}凄^{すご}い内に一種の愉快を覚えるのは誰しも同じ事であるが、吾輩はこの愉快の底に一大心配が横^{よこた}わっているのを発見した。鼠と

戦争をするのは覚悟の前だから何足来ても ^{こわ}恐
くはないが、出てくる方面が明瞭でないのは不都
合である。周密なる観察から得た材料を ^{そうごう}綜 合
して見ると ^{そぞく いっしゅつ}鼠 賊 の 逸 出 するのには三つ
の行路がある。彼れらがもしどぶ鼠であるならば
土管を沿うて流しから、へっついの裏手へ廻るに
相違ない。その時は火消壺の影に隠れて、帰り道
を絶ってやる。あるいは ^{みぞ}溝 へ湯を抜く ^{しっくい}漆 喰
の穴より風呂場を ^{うかい}迂 回 して勝手へ不意に飛び
出すかも知れない。そうしたら釜の ^{ふた}蓋 の上に陣
取って眼の下に来た時上から飛び下りて
ひとつか
一 攫 みにする。それからとまたあたりを見廻
すと戸棚の戸の右の下隅が ^{はんげつけい}半 月 形 に喰い
破られて、彼等の ^{しゅつにゅう}出 入 に便なるかの疑が

ある。鼻を付けて臭^かいで見ると少々鼠^{くさ}臭^{くさ}い。もしここから^{とっかん}吶^な喊^{かん}して出たら、柱を^{たて}楯^{たて}にやり過^すしておいて、横合からあっと爪^{つめ}をかける。も

し天井から来たらと上を仰ぐと真黒な^{すす}煤^{すす}がランプの光で輝やいて、地獄を裏返しに釣^つるしたご

とくちよつと吾輩の^{てぎわ}手^て際^{ぎわ}では^{のぼ}上^{のぼ}る事も、^{くだ}下^{くだ}る事も出来ん。まさかあんな高い処から落ちてく

る事もなかろうからとこの方面だけは警戒^とを解^とく事にする。それにしても三方から攻撃される

^{けねん}懸^け念^{ねん}がある。一口なら片眼でも退治して見せる。

二口ならどうにか、こうにかやっつてのける自信が

ある。しかし三口となるといかに本能的に鼠^とを捕^とるべく予期せらるる吾輩も手の付けようがない。

さればと云って車屋の黒ごときものを助勢に頼

んでくるのも吾輩の威厳に関する。どうしたら好
かろう。どうしたら好かろうと考えて好い^{ちえ}智慧が
出ない時は、そんな事は起る^{きづかい}氣遣はないと決
めるのが一番安心を得る近道である。また法のつ
かない者は起らないと考えたくなるものである。
まず世間を見渡して見給え。きのう貰った花嫁も
今日死なんとも限らんではないか、しかし
むこどの
聶殿は玉椿千代も八千代もなど、おめでたい
事を並べて心配らしい顔もせんではないか。心配
せんのは、心配する価値がないからではない。い
くら心配したって法が付かんからである。吾輩の
場合でも三面攻撃は必ず起らぬと断言すべき相
当の論拠はないのであるが、起らぬとする方が安
心を得るに便利である。安心は万物に必要である。

吾輩も安心を欲する。よって三面攻撃は起らぬと
き
極める。

それでもまだ心配が取れぬから、どう云うもの
かとだんだん考えて見るとようやく分った。三個
の計略のうちいずれを選んだのがもっとも得策
であるかの問題に対して、^{みずか}自^ら明瞭なる答弁
を得るに苦しむからの^{はんもん}煩悶である。戸棚から
出るときには吾輩これに応ずる策がある、風呂場
から現われる時はこれに対する^{はかりごと}計^があ
る、また流しから這い上るときはこれを迎うる成
算もあるが、そのうちどれか一つに^き極めねばなら
ぬとなると^{おお}大^にに当惑する。東郷大將はバルチ
ック艦隊が^{つしまかいきょう}対馬海峡^{を通るか、}
つがるかいきょう
津軽海峡へ出るか、あるいは遠く

そうやかいきょう　　おおい
宗　谷　海　峡　を廻るかについて　大　に心
配されたそうだが、今吾輩が吾輩自身の境遇から
想像して見て、ご困却の段実に御察し申す。吾輩
は全体の状況において東郷閣下に似ているのみ
ならず、この格段なる地位においてもまた東郷閣
下とよく苦心を同じゅうする者である。

吾輩がかく夢中になって智謀をめぐらしてい
ると、突然破れた腰障子が開いて　あ　おさん
御　三　の顔がぬ
うと出る。顔だけ出ると云うのは、手足がないと
云う訳ではない。ほかの部分は　よめ
夜目でよく見えん
のに、顔だけが著るしく強い色をして判然
ぼうてい
眸　底　に落つるからである。御三はその平常よ
り赤き頬をますます赤くして洗湯から帰ったつ
いでに、　ゆうべ　こ
昨　夜　に懲りてか、早くから勝手の

とじまり

戸締をする。書齋で主人が俺のステッキを枕元へ出しておけと云う声が聞える。何のために枕頭にステッキを飾るのか吾輩には分らなかった。

まさか ^{えきすい} 易水 の壮士を気取って、^{りゅうめい} 竜 鳴 を聞こうと云う酔狂でもあるまい。きのうは山の芋、

^{きょう} 今日 はステッキ、^{あす} 明日は何になるだろう。

夜はまだ浅い鼠はなかなか出そうにない。吾輩は大戦の前に一と休養を要する。

主人の勝手には引窓がない。座敷なら ^{らんま} 欄 間 と云うような所が幅一尺ほど切り抜かれて夏冬吹き通しに引窓の代理を勤めている。惜し気もなく

^{ひがんざくら} 散る 彼 岸 桜 を誘うて、^{さつ} 颯 と吹き込む風に驚ろいて眼を ^さ 覚ますと、^{おぼろづき} 朧 月 さえいつの ^ま 間に差してか、^{へつつい} 竈 の影は斜めに ^{あげいた} 揚 板 の上

にかかる。寝過ぎはせぬかと二三度耳を振って
家内の容子を窺うと、しんとして昨夜のご
とく柱時計の音のみ聞える。もう鼠の出る時分だ。
どこから出るだろう。

戸棚の中でことごと音^{ふち}がしだす。小皿の縁
を足で抑えて、中をあらしているらしい。ここから
出るわいと穴の横へすくんで待っている。なか
なか出て来る景色^{けしき}はない。皿の音はやがてやん
だが今度はどんぶりか何かに掛ったらしい、重い
音が時々ごとごととする。しかも戸を隔ててすぐ
向う側でやっている、吾輩の鼻づらと距離にした
ら三寸も離れておらん。時々はちょろちょろと穴
の口まで足音が近寄るが、また遠のいて一匹も顔
を出すものはない。戸一枚向うに現在敵が暴行を

たくま

遅くしているのに、吾輩はじっと穴の出口で待っておらねばならん随分気の長い話だ。鼠は

りょじゅんわん

旅順 椀の中で盛に舞踏会を催うしている。せめて吾輩の這^{はい}入れるだけ御三がこの戸を開けておけば善いのに、気の利かぬ山出しだ。

あわびがい

今度はへっついの影で吾輩の鮑貝^{あわびがい}がことりと鳴る。敵はこの方面へも来たかと、そっ

ておけ

しっぽ

と忍び足で近寄ると手桶の間から尻尾^{しっぽ}がちらと見えたぎり流しの下へ隠れてしまった。しば

かなだら

らくすると風呂場でうがい茶碗が金盥^{かなだら}に

うしろ

かちりと当る。今度は後方^{うしろ}だと振りむく途端に、

おおき

五寸近くある大^{おおき}な奴がひらりと齒磨の袋を

えん

か

落して椽^{えん}の下へ馳^かけ込む。逃がすものかと続い

と

て飛び下りたらもう影も姿も見えぬ。鼠を捕^とるの

は思ったよりむずかしい者である。吾輩は先天的
鼠を捕る能力がないのか知らん。

吾輩が風呂場へ廻ると、敵は戸棚から馳け出し、
戸棚を警戒すると流しから飛び上り、台所の真中

がんば
に頑張っていると三方面共少々ずつ騒ぎ立て

る。こしゃく 小癩 と云おうか、ひきょう 卑怯 と云おうかと

うてい彼等は君子の敵でない。吾輩は十五六回は

あちら、こちらと気を疲らし しん つか
心を勞らして奔走努力して見たがついに一度も成功しない。残念

ではあるがかかる しょうじん
小じん 人を敵にしてはいか

なる東郷大將も ほど
施こすべき策がない。始めは勇

気もあり てきがいしん
敵愾心 もあり悲壮と云う崇高な

美感さえあったがついには面倒と馬鹿気ている

のと眠いのと疲れたので台所の真中へ坐ったな

り動かない事になった。しかし動かんでも
はっぼうにら^き
八^き方^き睨^きみを極め込んでいれば敵は小人だ
から大した事は出来ないのである。目ざす敵と思っ
た奴が、存外けちな野郎だと、戦争が名誉だと云
う感じが消えて悪^にくいと云う念だけ残る。悪^にくいと
云う念を通り過すと張り合が抜けてぼ一とす
る。ぼ一としたあとは勝手にしろ、どうせ気の利^き
いた事は出来ないのだからと^{けいべつ}軽^き蔑^きの
きよくねむ
極^き眠^きたくなる。吾輩は以上の径路をたどっ
て、ついに眠くなった。吾輩は眠る。休養は敵中
あ
に在っても必要である。

横^{ひさし}向^{ひさし}に^{ひさし}庇^{ひさし}を向いて開いた引窓から、また
はなふぶき^{ひとかたま}
花^{ひとかたま}吹^{ひとかたま}雪^{ひとかたま}を一^{ひとかたま}塊^{ひとかたま}りなげ込んで、烈しき風
めぐ
の吾を^{めぐ}遶^{めぐ}ると思えば、戸棚の口から弾丸のごと

く飛び出した者が、避くる^ま間もあらばこそ、風を
切って吾輩の左の耳へ喰いつく。これに続く黒い
影は^{うし}後ろに廻るかと思う間もなく吾輩の
しっぽ^{またた}尻尾へぶら下がる。瞬^{またた}く間の出来事である。

吾輩は何の目的もなく器械的に^{はねあが}跳上る。満身
の力を毛穴に込めてこの怪物を振り落とそうと
する。耳に喰い下がったのは中心を失ってだらり

と吾が横顔に懸る。^{ゴムかん}護謄管のごとき柔かき尻尾
の先が思い掛なく吾輩の口に這入る。^{くつきょう}屈^{くつきょう}竟
^{てがか}の手懸りに、^{くだ}砕^{くわ}けよとばかり尾を^{くわ}啣えなが
ら左右にふると、尾のみは前歯の間に残って胴体

は古新聞で張った壁に当って、揚板の上に^は跳ね返
る。起き上がる^{すきま}ところを^の隙間なく^{かか}乗し掛れば、
^{まり}まり^けけ^{かす}毬^{かす}を蹴たるごとく、吾輩の鼻づらを^{かす}掠めて釣

り段の^{ふち}縁に足を縮めて立つ。彼は棚の上から吾輩を見おろす、吾輩は板の間から彼を見上ぐる。

距離は五尺。その中に月の光りが、^{おおはば}大 幅 の帯^{くう}を 空 に張るごとく横に差し込む。吾輩は前足に力を込めて、やっとばかり棚の上に飛び上がろう

とした。前足だけは首尾よく棚の^{ふち}縁にかかった^{あとあし}が 後 足 は宙にもがいている。尻尾には最前の黒いものが、死ぬとも離るまじき勢で喰い下って

いる。吾輩は^{あや}危 うい。前足を^{か か}懸け易えて^{あしがか}足 懸 りを深くしようとする。懸け易える度に

尻尾の重みで浅くなる。^{にさんぶ}二 三 分滑れば落ちねばならぬ。吾輩はいよいよ危うい。棚板を爪で^か搔きむしる音ががりがりと聞える。これではならぬと左の前足を抜き易える拍子に、爪を見事に懸け損

じたので吾輩は右の爪一本で棚からぶら下った。

自分と尻尾に喰いつくものの重みで吾輩のからだ
がぎりぎりと廻わる。この時まで身動きもせず

ねら
に 覗 いをつけていた棚の上の怪物は、ここぞと
吾輩の額を目懸けて棚の上から石を投ぐるがご

とく飛び下りる。吾輩の爪は ^{いちる}一 縷 のかかりを失
う。三つの ^{かた}塊 まりが一つとなって月の光を ^{たて}豎
に切って下へ落ちる。次の段に乗せてあった

すりばち ^{こおけ}
摺鉢 と、摺鉢の中の 小 桶 とジャムの
あきかん ^{ひとかたまり}
空 缶 が同じく 一 塊 となって、下にあ

る火消壺を誘って、半分は ^{みずがめ}水 甕 の中、半分は
板の間の上へ転がり出す。すべてが深夜にただな
らぬ物音を立てて死物狂いの吾輩の魂をさえ寒
からしめた。

「泥棒！」と主人は ^{どうまごえ} 胴 間 声 を張り上げて寝室
から飛び出して来る。見ると片手にはランプを提
げ、片手にはステッキを持って、寝ぼけ ^{まなこ} 眼 よ
りは身分相応の ^{けいけい} 炯々たる光を放っている。吾
輩は ^{あわびがい} 鮑 貝 の ^{そば} 傍 におとなしくして
^{うずくま} 蹲 踞 する。二疋の怪物は戸棚の中へ姿をかくす。
主人は手持無沙汰に「何だ誰だ、大きな音をさせ
たのは」と怒気を帯びて相手もいないのに聞いて
いる。月が西に傾いたので、白い光りの一帯は
^{はんきれ} 半 切 ほどに細くなった。

六

こう暑くては猫といえどもやり切れない。皮を
脱いで、肉を脱いで骨だけで涼みたいものだ

イギリス
英吉利のシドニー・スミスとか云う人が苦し
がったと云う話があるが、たとい骨だけにならなく

とも好いから、せめてこの淡灰色の斑入の
けごろも

毛衣だけはちょっと洗い張りでもするか、も
しくは当分のうち
質にでも入れたいような気がする。人間から見たら猫などは年が年中同じ顔を

して、春夏秋冬一枚看板で押し通す、至って単純

な無事な錢のかからない生涯を送って
いるように思われるかも知れないが、いくら猫だ

って相応に暑さ寒さの感じはある。たまには

ぎょうずい
行水の一度くらいあびたくない事もない

が、何しろこの毛衣の上から湯を使った日には乾
かすのが容易な事でないから汗臭いのを我慢し

てこの年になるまで洗湯の暖簾を潜った事

はない。折々は^{うちわ}団扇でも使って見ようと云う気も起らんでもないが、とにかく握る事が出来ないのだから仕方がない。それを思うと人間はぜいたく贅沢なものだ。なまで食ってしかるべきものをわざわざ煮て見たり、焼いて見たり、^す酢に^つ漬けて見たり、^{みそ}味噌をつけて見たり好んで余計なてすう手数^を懸けて御互に恐悦している。着物だってそうだ。猫のように一年中同じ物を着通せと云うのは、不完全に生れついた彼等にとって、ちと無理かも知れんが、なにもあんなに雑多なものを皮膚の上へ^の載せて暮さなくてももの事だ。羊の御厄介になったり、^{かいこ}蚕の御世話になったり、綿畠のおなさ御情けさえ受けるに至っては^{ぜいたく}贅沢は無能の結果だと断言しても好いくらいだ。衣食はまず

大目に見て勘弁するとしたところで、生存上直接
の利害もないところまでこの調子で押して行く

のは ^{ごう}毫 ^{がてん}も合点が行かぬ。第一頭の毛などと云

うものは自然に生えるものだから、^{ほう}放はなっておく
方がもっとも簡便で当人のためになるだろうと

思うのに、彼等は入らぬ算段をして種々雑多な
かっこう

恰好をこしらえて得意である。坊主とか自称
するものはいつ見ても頭を青くしている。暑いと

その上へ日傘をかぶる。寒いと^{ずきん}頭巾づきんで包む。こ
れでは何のために青い物を出しているのか主意

が立たんではないか。そうかと思うと^{くし}櫛くしとか称

する無意味な^{のこぎりよう}鋸のこぎり様の道具を用いて頭の
毛を左右に等分して嬉しがってるのもある。等分

にしないと七分三分の割合で^{ずがいこつ}頭蓋骨ずがいこつの上へ

人為的の^{くかく}区劃を立てる。中にはこの仕切りがつ
むじを通り過して^{うし}後ろまで^は食み出しているの
がある。まるで^{がんぞう}贗造の^{ばしょうは}芭蕉葉のようだ。

その次には脳天を平らに刈って左右は真直に切

り落す。丸い頭へ四角な^{わく}枠をはめているから、
植木屋を入れた杉垣根の写生としか受け取れな
い。このほか五分刈、三分刈、一分刈さえあると
云う話だから、しまいには頭の裏まで刈り込んで
マイナス一分刈、マイナス三分刈などと云う新奇
な奴が流行するかも知れない。とにかくそんなに
^{うきみ}憂^{やつ}身を^を窶してどうするつもりか分らん。第一、
足が四本あるのに二本しか使わないと云うのから
贅沢だ。四本であるけばそれだけはかも行く訳
なのに、いつでも二本ですまして、残る二本は到

来の^{ぼうだら}棒 鱈 のように手持無沙汰にぶら下げているのは馬鹿馬鹿しい。これで見ると人間はよほ

ど猫より^{ひま}閑 なもので退屈のあまりかようないたずらを考案して楽んでいるものと察せられる。

ただおかしいのはこの^{ひまじん}閑 人 がよると^さ障わると多忙だ多忙だと触れ廻わるのみならず、その顔色がいかにも多忙らしい、わるくすると多忙に食い殺されはしまいかと思われるほどこせついている。彼等のあるものは吾輩を見て時々あんなになったら気楽でよかろうなどと云うが、気楽でよければなるが好い。そんなにこせこせしてくれと誰も頼んだ訳でもなかろう。自分で勝手な用事を手に負えぬほど製造して苦しい苦しいと云うのは自分で火をかんかん起して暑い暑いと云うよ

うなものだ。猫だって頭の刈り方を二十通りも考え出す日には、こう気楽にしておられんさ。気楽になりたければ吾輩のように夏でも^{けごろも}毛衣を着て通されるだけの修業をするがよろしい。――とは云うものの少々熱い。毛衣では全く^あ熱つ過ぎる。

これでは一手専売の昼寝も出来ない。何かないかな、永らく人間社会の観察を^{おこた}怠ったから、今日は久し振りで彼等が酔興に^{あくせく}齷齪する様子を拝見しようかと考えて見たが、^{あいにく}生憎主人はこの点に関してすこぶる猫に近い^{しょうぶん}性分である。昼寝は吾輩に劣らぬくらいやるし、ことに暑中休暇後になってからは何一つ人間らしい仕事をせんので、いくら観察をしても^{いっこう}一向観

察する張合がない。こんな時に迷亭でも来ると胃弱性の皮膚も幾分か反応を呈して、しばらくでも猫に遠ざかるだろうに、先生もう来ても好い時だと思っていると、誰とも知らず風呂場でざあざあ水を浴びるものがある。水を浴びる音ばかりではない、折々大きな声で相の手を入れている。「いや結構」「どうも良い心持ちだ」「もう一杯」などうちじゅうと家中に響き渡るような声を出す。主人のうちへ来てこんな大きな声と、こんな無作法な真似をやるものはほかにはない。迷亭に極まっている。

いよいよ来たな、これで今日半日は潰せると思っていると、先生汗を拭いて肩を入れて例のごとく座敷までずかずか上って来て「奥さん、

くしゃみ
苦沙弥君はどうしました」と呼ばわりながら帽子を畳の上へ^{ほう}抛り出す。細君は隣座敷で針箱のそば側へ突っ伏して好い心持ちに寝ている最中にワンワンと何だか鼓膜へ答えるほどの響がしたのではっと驚ろいて、^さ醒めぬ眼をわざとって座敷へ出て来ると迷亭が^{さつまじょうふ}薩摩上布を着て勝手な所へ陣取ってしきりに扇使いをしている。

「おやいらしゃいまし」と云ったが少々^{ろうばい}狼狽の気味で「ちっとも存じませんでした」と鼻の頭へ汗をかいたまま御辞儀をする。「いえ、今来たばかりなんですよ。今風呂場で^{おさん}御三に水を掛けて貰ってね。ようやく生き帰ったところで——どうも暑いじゃありませんか」「この^{りょうさんち}両三日は、ただじっとしておりまして汗が出るくらい

で、大変御暑うございます。——でも御変りもございませんで」と細君は依然として鼻の汗をとらない。「ええありがとうございます。なに暑いくらいでそんなに変りやしませんや。しかしこの暑さは別物ですよ。どうも体がだるくってね」「^{わたく}私^しなども、ついに昼寝などを致した事がないんでございますが、こう暑いとつい——」「やりますかね。好いですよ。昼寝られて、夜寝られりゃ、こんな結構な事はないでさあ」とあいかわらず^{のんき}呑^き気な事を並べて見たがそれだけでは不足と見えて「わたし^{たち}私^{たち}なんざ、寝たくない、^質でね。苦沙弥君などのように来るたんびに寝ている人を見るとうらやま^羨しいですよ。もっとも胃弱にこの暑さは答えるからね。丈夫な人でも今日なんかは首を肩

の
の上に載せてるのが退儀でさあ。さればと云って
載ってる以上はもぎとる訳にも行かずね」と迷亭
君いつになく首の処置に窮している。「奥さんな
んぞ首の上へまだ載っておくものがあるんだ
から、坐っちゃいられないはずだ。鬻^{まげ}の重みだ
けでも横になりたくくなりますよ」と云うと細君は
今まで寝ていたのが鬻^{まげ}の恰^{かつこう}好から露見した
と思って「ホホホ口の悪い」と云いながら頭をい
じって見る。

迷亭はそんな事には頓着なく「奥さん、昨^{きのう}日はね、屋根の上で玉子のフライをして見ました
よ」と妙な事を云う。「フライをどうなさったん
でございます」「屋根の瓦があまり見事に焼けて
いましたから、ただ置くのも勿体ないと思ってね。

バタを溶かして玉子を落したんでさあ」「あらまあ」「ところがやっぱり天^{てん}日^びは思うように行きませんや。なかなか半熟にならないから、下へおりて新聞を読んでいると客が来たもんだからつい忘れてしまって、今朝になって急に思い出して、もう大丈夫だろうと上って見たらね」「どうなっておりました」「半熟どころか、すっかり流れてしまいました」「おやおや」と細君は八の字を寄せながら感嘆した。

「しかし土用中あんなに涼しくって、今頃から暑くなるのは不思議ですね」「ほんとでございますよ。せんだってじゅうは単^{ひとえ}衣^えでは寒いくらいでございましてのに、一^{おと}昨^{とい}日から急に暑くなりましてね」「蟹^{かに}なら横^はに這^はうところだが今年の気

候はあとびさりをするんですよ。^{とうこう}倒行して
げきし
逆施すまた可ならずやと云うような事を言っ
ているかも知れない」「なんでござんす、それは」
「いえ、何でもないので。どうもこの気候の逆
戻りをするところはまるでハーキュリスの牛で
すよ」と図に乗っていよいよ変ちきりんな事を言
うと、果せるかな細君は分らない。しかし最前の
倒行して逆施すで少々^こ懲りているから、今度はた
だ「へえー」と云ったのみで問い返さなかった。
これを問い返されないと迷亭はせっかく持ち出
した^{かい}甲斐がない。「奥さん、ハーキュリスの牛を
御存じですか」「そんな牛は存じませんわ」「御存
じないですか、ちょっと講釈をしましょうか」と
云うと細君もそれには及びませんとも言い兼ね

たものだから「ええ」と云った。「^{むか}昔しハーキュリスが牛を引っ張って来たんです」「そのハーキュリスと云うのは牛飼でもござんすか」「牛飼じゃありませんよ。牛飼やいろはの亭主じゃありません。その節は^{ギリシャ}希臘にまだ牛肉屋が一軒もない時分の事ですからね」「あら希臘のお話しなの？　そんなら、そうおっしゃればいいのに」と細君は希臘と云う国名だけは心得ている。「だってハーキュリスじゃありませんか」「ハーキュリスなら希臘なんですか」「ええハーキュリスは希臘の英雄でさあ」「どうりで、知らないと思いました。それでその男がどうしたんで――」「その男がね奥さん見たように眠くなってぐうぐう寝ている――」「あらいやだ」「寝ている^ま間に、ヴ

アルカンの子が来ましてね」「ヴァルカンで何です」「ヴァルカンは^{かじや}鍛冶屋ですよ。この鍛冶屋のせがれがその牛を盗んだんでさあ。ところがね。

牛の^{しっぽ}尻尾を持ってぐいぐい引いて行ったものだからハーキュリスが眼を^さ覚まして牛やーい牛やーいと尋ねてあるいても分らないんです。分らないはずでさあ。牛の足跡をつけたって前の方へあるかして連れて行ったんじゃないもん、
うし　　うし
後　ろ　へ　後　ろ　へと引きずって行ったんですからね。鍛冶屋のせがれにしては大出来ですよ」と迷亭先生はすでに天気の話は忘れている。

「時に御主人はどうしました。相変らず^{ひるね}午睡ですかね。午睡も支那人の詩に出てくると風流だが、苦沙弥君のように日課としてやるのは少々俗気

がありますね。何の事もない毎日少しずつ死んで
見るようなものですぜ、奥さん ^{おてすう}御手数だがちょ
っと起していращゃい」と催促すると細君は同
感と見えて「ええ、ほんとにあれでは困ります。
第一あなた、からだが悪くなるばかりですから。
今御飯をいただいたばかりなのに」と立ちかけ
ると迷亭先生は「奥さん、御飯と云やあ、僕はまだ
御飯をいただかないんですがね」と平気な顔をし
て聞きもせぬ事を ^{ふいちょう}吹聴する。「おやまあ、
時分どきだのにちっとも気が付きませんで――
それじゃ何もございせんが御茶漬でも」「いえ
御茶漬なんか頂戴しなくっても好いですよ」「そ
れでも、あなた、どうせ御口に合うようなものは
ございせんが」と細君少々厭味を並べる。迷亭

は悟ったもので「いえ御茶漬でも御湯漬でも御免
蒙るんです。今途中で御馳走を^{あつ}誂らえて来まし
たから、そいつを一つここでいただきますよ」と
とうてい^{しろ}素人^{うと}には出来そうもない事を述べ
る。細君はたった^{ひと}一言「まあ!」と云ったが
そのまあの^{うち}中^{ちゆう}には驚ろいたまあと、気を悪るく
したまあと、^{てすう}手数^{てすう}が省けてありがたいと云うま
あが合併している。

ところへ主人が、いつになくあまりやかましい
ので、寝つき掛った眠をさかに^こ扱かれたような心
持で、ふらふらと書斎から出て来る。「相変らず
やかましい男だ。せっかく好い心持に寝ようとし
たところを」と^{あくびまじ}欠伸^{あくびまじ}交^{まじ}りに^{ぶっ}仏^{ぶっ}頂^{ちゆう}面^{づら}を
する。「いや御^{おめざめ}目^め覚^{さめ}かね。^{ほう}鳳^{ほう}眠^{みん}を驚かし奉

ってはなはだ相済まん。しかしたまには好かろう。
さあ坐りたまえ」とどっちが客だか分らぬ挨拶を
する。主人は無言のまま座に着いて寄^よ木^せ細^ぎ工^ざ
の^ま巻^き煙^た草^ば入^こから「朝日」を一本出してすばす
ば吸い始めたが、ふと^む向^{こう}の^す隅^みに転がってい
る迷亭の帽子に眼をつけて「君帽子を買ったね」
と云った。迷亭はすぐさま「どうだい」と自慢ら
しく主人と細君の前に差し出す。「まあ奇麗だ事。
大変目が細かくって柔らかいんですね」と細君は
しきりに撫で廻わす。「奥さんこの帽子は
ちょうほう^{重宝}ですよ、どうでも言う事を聞きますか
らね」と拳^{げん}骨^{こつ}をかためてパナマの横ッ腹をぽ
かりと張り付けると、なるほど意のごとく^こ拳^{ぶし}
ほどな穴があいた。細君が「へえ」と驚く^ま間^まもな

く、この^{たび}度は拳骨を裏側へ入れてうんと突ッ張
ると^{かま}釜の頭がぽかりと^と尖んがる。次には帽子を
取って^{つば}鍔と鍔とを両側から^お圧し^{つぶ}潰して見せ
る。潰れた帽子は^{めんぼう}麵^の棒^{そば}で延した蕎麦のように
平たくなる。それを片端から^{むしろ}蓆でも巻くごと
くぐるぐる畳む。「どうですこの通り」と丸めた
帽子を懷中へ入れて見せる。「不思議です事ねえ」

と細君は^{きてんさいしょういち}歸天斎正一の手品でも見物
しているように感嘆すると、迷亭もその気になっ
たものと見えて、右から懷中に収めた帽子をわざ

と^{そでぐち}左の袖口から引っ張り出して「どこにも傷
はありません」と元のごとくに直して、人さし指
の先へ釜の底を^の載せてくるくると廻す。もう^や休め
るかと思ったら最後にぽんと^{うし}後ろへ^な放げてそ

の上へ^ど堂っさりと尻餅を突いた。「君大丈夫かい」
と主人さえ^{けねん}懸念らしい顔をする。細君は無論の
事心配そうに「せっかく見事な帽子をもし^こ壊わし
でもしちゃあ大変ですから、もう好い加減になす
ったら^よ宜うござんしょう」と注意をする。得意な
のは持主だけで「ところが壊われないから妙でし
ょう」と、くちゃくちゃになったのを尻の下から
取り出してそのまま頭へ載せると、不思議な事に
は、頭の^{かつこう}恰好にたちまち回復する。「実に丈
夫な帽子です事ねえ、どうしたんでしょう」と細
君がいよいよ感心すると「なにどうもしたんじゃ
ありません、元からこう云う帽子なんです」と迷
亭は帽子を被ったまま細君に返事をしている。

「あなたも、あんな帽子を御買になったら、いい

でしょう」としばらくして細君は主人に勧めかけた。「だって苦沙弥君は立派な^{むぎわら}麦藁の奴を持ってるじゃありませんか」「ところがあなた、せんだって小供があれを踏み^{つぶ}潰してしまいました」「おやおやそりゃ惜しい〔#「惜しい」は底本では「措しい」〕事をしましたね」「だから今度はあなたのような丈夫で奇麗なのを買ったら善かろうと思いますんで」と細君はパナマの^{ねだん}価段を知らないものだから「これになさいよ、ねえ、あなた」としきりに主人に勧告している。

迷亭君は今度は右の^{たもと}袂の中から赤いケース入りの^{はさみ}鋏を取り出して細君に見せる。「奥さん、帽子はそのくらいにしてこの鋏を御覧なさい。これがまたすこぶる^{ちょうほう}重宝な奴で、これ

で十四通りに使えるんです」この鋏が出ないと主人は細君のためにパナマ責めになるところであったが、幸に細君が女として持って生れた好奇心のために、この^{やくうん}厄^{まぬ}運^をを^免免^かれたのは迷亭の機転と云わんよりむしろ^{ぎょうこう}僥^倖の仕合せだと吾輩は看破した。「その鋏がどうして十四通りに使えます」と聞くや否や迷亭君は大得意な調子で「今一々説明しますから聞いていらっしゃい。

^{みかづきがた}いいですか。ここに三日月形の欠け目がありましよう、ここへ葉巻を入れてぷつりと口を切るんです。それからこの根にちょっと細工がありましよう、これで針金をぽつぽつやりますね。次には^{じょうぎ}平たくして紙の上へ横に置くと定規の用をする。また^は刃^はの裏には^{どもり}度盛^ががしてあるから

ものさし

物 指 の代用も出来る。こちらの表にはヤスリ
が付いているこれで爪を磨^すりまさあ。ようがすか。

この先きを 螺^さ 旋^{らせん} 鋸^{びょう} の頭へ刺し込んでざり

ざり廻^{かなづち}すと 金 槌 にも使える。うんと突き込ん

でこじ開けると大抵の 釘^{くぎ} 付 の箱なんぞあ苦

もなく 蓋^{ふた} がとれる。まった、こちらの刃の先は

きり 錐^{きり} に出来ている。ここん 所^{ところ} は書き損いの字を

削^{けず} る場所で、ばらばらに離すと、ナイフとなる。

一番しまいに――さあ奥さん、この一番しまいが

大変面白いんです、ここに 蠅^{はえ} の眼玉くらいな大

きさの 球^{たま} がありましょう、ちょっと、覗^{のぞ} いて

御覧なさい」「いやですわまたきつと馬鹿になさ

るんだから」「そう信用がなくっちゃ困ったね。

だ^{だま} が 欺 されたと思って、ちょいと覗いて御覧な

さいな。え？ ^{いや} 厭 ですか、ちょっとでいいから」

はさみ
と 鋏 を細君に渡す。細君は ^{おぼつか} 覚 束 なげに鋏
を取りあげて、例の蠅の眼玉の所へ自分の眼玉を

付けてしきりに ^{ねらい} 覘 をつけている。「どうです」

「何だか真黒ですわ」「真黒じゃいけませんね。

も少し障子の方へ向いて、そう鋏を寝かさずに
——そうそうそれなら見えるでしょう」「おやま
あ写真ですねえ。どうしてこんな小さな写真を張
り付けたんでしょう」「そこが面白いところでさ
あ」と細君と迷亭はしきりに問答をしている。最
前から黙っていた主人はこの時急に写真が見た

くなくなったものと見えて「おい俺にもちょっと ^み 覽せ
ろ」と云うと細君は鋏を顔へ押し付けたまま「実
に奇麗です事、裸体の美人ですね」と云ってなか

なか離さない。「おいちょっと御見せと云うのに」

「まあ待っていらっしゃいよ。美しい髪ですね。

腰までありますよ。少し仰^{あおむ}向^{むか}いて恐ろしい背^{せい}

の高い女だ事、しかし美人ですね」「おい御見せ

と云ったら、大抵にして見せるがいい」と主人は

おおい せ
大^おに急き込んで細君に食って掛る。「へえ御
待遠さま、たと御覧遊ばせ」と細君が鋏を主人

に渡す時に、勝手から御^{おさん}三^{さん}が御客さまの

おあつらえ
御^お誂^{たづね}が参りましたと、二個の箸^{ざるそば}蕎麦^{そば}を座

敷へ持って来る。

「奥さんこれが僕の自^じ弁^{べん}の御馳走ですよ。ちょ
っと御免蒙って、ここではくつく事に致しますか

ら」と町^{てい}寧^{ねい}に御辞儀をする。真面目なような
ふざけ
巫山戯^{ふざけ}たような動作だから細君も応対に窮した

と見えて「さあどうぞ」と軽く返事をしたざり拝見している。主人はようやく写真から眼を放して

「君この暑いのに蕎麦は毒だぜ」と云った。「なあに大丈夫、好きなものは滅多に中るもんじ

ゃない」と蒸籠の蓋をとる。「打ち立てはあ

りがたいな。蕎麦の延びたのと、人間の間が抜けたのは由来たのもしくないもんだよ」と薬味を

ツユの中へ入れて無茶苦茶に掻き廻わす。「君そ

んなに山葵を入れると辛らいぜ」と主人は心配そうに注意した。「蕎麦はツユと山葵で食うもん

だあね。君は蕎麦が嫌いなんだろう」「僕はうどん

が好きだ」「うどんは馬子が食うもんだ。蕎麦の味を解しない人ほど気の毒な事はない」と云いなが

ら箸をむぎと突き込んで出来るだけ多く

の分量を二寸ばかりの高さにしゃくい上げた。

「奥さん蕎麦を食うにもいろいろ流儀がありま
すがね。初^{しょ}心^{しん}の者に限って、無^む暗^{やみ}にツユを

着けて、そうして口の内にくちゃくちゃやってい
ますね。あれじゃ蕎麦の味はないですよ。何でも、

こ^ひう、一としゃくいに引っ掛けてね」と云いつつ

箸を上げると、長い奴が勢^{せい}揃^{ぞろ}いをして一尺ば
かり空中に釣るし上げられる。迷亭先生もう善か
ろうと思って下を見ると、まだ十二三本の尾が蒸

籠の底を離れないで簀^{すだ}垂^たれの上に纏^{てん}綿^{めん}して
いる。「こいつは長いな、どうです奥さん、この

長さ加減は」とまた奥さんに相の手を要求する。

奥さんは「長いものでございますね」とさも感心
したらしい返事をする。「この長い奴へツユを

さんぶいち

三分一つけて、一口に飲んでしまうんだね。

か

噛んじゃいけない。噛んじゃ蕎麦の味がなくなる。

つるつると咽喉を^{のど}滑^{すべ}り込むところがねうちだ

よ」^{はし}と思い切って箸を高く上げると蕎麦はよう

やくの事で地を離れた。^{ゆんで}左手に受ける茶碗の中

へ、箸を少しずつ落して、尻尾の先からだんだん

に^{ひた}浸すと、アーキミジスの理論によって、蕎麦

の^{つか}浸った分量だけツユの^{かさ}嵩が増してくる。と

ころが茶碗の中には元からツユが八分目^{はい}這入っ

ているから、迷亭の箸にかかった蕎麦の

しはんぶん^{つか}

四半分も浸らない先に茶碗はツユで一杯

になってしまった。迷亭の箸は茶碗を^さ去る五寸の

上に至ってぴたりと留まったきりしばらく動か

ない。動かないのも無理はない。少しでも^{おろ}卸せ

こぼ
ばツユが溢れるばかりである。迷亭もここに至
てい
って少しの体であったが、たちまち脱兎の勢
だっと
を以て、口を箸の方へ持って行ったなと思う間も
ま
なく、つるつるちゅうと音がして咽喉笛が一二
のどぶえ
度上^{じょうげ}下へ無理に動いたら箸の先の蕎麦は消
えてなくなっておった。見ると迷亭君の両眼から
めじり
涙のようなものが一二滴眼尻から頬へ流れ出
した。山葵^{わさび}が利いたものか、飲み込むのに骨が
き
折れたものかこれはいまだに判然しない。「感心
だなあ。よくそんなに一どきに飲み込めたもの
だ」と主人が敬服すると「御見事です事ねえ」と
てぎわ
細君も迷亭の手際を激賞した。迷亭は何にも云
わな^{たた}いで箸を置いて胸を二三度敲いたが「奥さ
ざる
ん^{ざる} 箸は大抵三口半か四口で食うんですね。それ

てすう　うま
より手数を掛けちゃ旨く食べませんよ」とハンケチで口を拭いてちょっと一息入れている。

ところへ寒月君が、どう云う　りょうけん　見　かこの
暑いのに御苦労にも冬帽をかぶ　被　って両足を
ほこり
埃だらけにしてやってくる。「いや好男子の
ごにゅうらい
御入来だが、喰い掛けたものだからちょっ
と失敬しますよ」と迷亭君は　しゅうじんかんざ
衆人環座の
うち　おくめん
裏にあって臆面もなく残った蒸籠を
たいら　さっき　めざま
平げる。今度は先刻のように目覚しい食
方もしなかった代りに、ハンケチを使って、中途
で息を入れると云う不体裁もなく、蒸籠　せいろ　二つを
安々とやってのけたのは結構だった。

「寒月君博士論文はもう脱稿するのかね」と主人
が聞くと迷亭もその　あと
後から「金田令嬢がお待ち

かねだから　そう　そう　てい　しゅ　つ
早　々　呈　出　したまえ」と云う。

寒月君は例のごとく薄気味の悪い笑を^も洩らして
「罪ですからなるべく早く出して安心させてや
りたいのですが、何しろ問題が問題で、よほど労

力^いの入る研究を要するのですから」と本気の沙汰
とも思われない事を本気の沙汰らしく云う。「そ
うさ問題が問題だから、そう鼻の言う通りにもな
らないね。もっともあの鼻なら充分鼻息をうかが
うだけの価値はあるがね」と迷亭も寒月流な挨拶
をする。比較的に真面目なのは主人である。「君

の論文の問題は何とか云ったっけな」「蛙の
めだま　　しが　い　こう　せん
眼　球　の　電　動　作　用　に　対　す　る　紫　外　光　線　の　影
響と云うのです」「そりゃ奇だね。さすがは寒月

先生だ、蛙の眼球は^{ふる}振　ってるよ。どうだろう苦

沙弥君、論文脱稿前にその問題だけでも金田家へ
報知しておいては」主人は迷亭の云う事には取り
合わないで「君そんな事が骨の折れる研究かね」
と寒月君に聞く。「ええ、なかなか複雑な問題で
す、第一蛙の眼球のレンズの構造がそんな
たんかん
単 簡 なものではありませんからね。それでいろ
いろ実験もしなくちゃなりませんがまず丸い
ガラス たま
硝子の球をこしらえてそれからやろうと思
っています」「硝子の球なんかガラス屋へ行けば
訳ないじゃないか」「どうして——どうして」と
寒月先生少々 そりみ 反身になる。「元来 えん 円とか直線
とか云うのは幾何学的のもので、あの定義に合っ
たような理想的な円や直線は現実世界にはない
もんです」「ないもんなら、^よ廃したらよかろう」

と迷亭が口を出す。「それでまず実験上^さ差し^{つか}支
えないくらいな球を作って見ようと思ひまして
ね。せんだってからやり始めたのです」「出来た
かい」と主人が訳のないようにきく。「出来るも
のですか」と寒月君が云ったが、これでは少々矛
盾だと気が付いたと見えて「どうもむずかしいで
す。だんだん^す磨^つって少しこっち側の半径が長過ぎ
るからと思つてそっちを心持落すと、さあ大変今
度は^{むこうがわ}向^側が長くなる。そいつを骨を折って
ようやく^す磨^{つぶ}り潰したかと思うと全体の形がい
びつになるんです。やっとの思ひでこのいびつを
取るとまた直径に狂いが出来ます。始めは^{りんご}林檎
ほどな大きさのものがだんだん小さくなって
^{いちご}苺ほどになります。それでも根気よくやって

いると大^{だいず}豆ほどになります。大豆ほどになってもまだ完全な円は出来ませんよ。私も随分熱心に磨りましたが――この正月からガラス玉を大小六個磨り潰しましたよ」と嘘だか本当だか見当のつかぬところを^{ちようちよう}喋々と述べる。「どこでそんなに磨っているんだい」「やっぱり学校の実験室です、朝磨り始めて、昼飯のときちょっと休んでそれから暗くなるまで磨るんですが、なかなか楽じゃありません」「それじゃ君が近頃忙がしい忙がしいと云って毎日日曜でも学校へ行くのはその珠を磨りに行くんだね」「全く目下のところは朝から晩まで珠ばかり磨っています」「珠作りの博士となって入り込みしは――と云うところだね。しかしその熱心を聞かせたら、いかな鼻

でも少しはありがたがるだろう。実は先日僕がある用事があって図書館へ行って帰りに門を出ようとしたら偶然^{ろうばい}老梅君に出逢ったのさ。あの男が卒業後図書館に足が向くとはよほど不思議な事だと思って感心に勉強するねと云ったら先生妙な顔をして、なに本を読みに来たんじゃない、今門前を通り掛ったらちょっと^{こよう}小用がしたくなったから拝借に立ち寄ったんだと云ったんで大笑をしたが、老梅君と君とは反対の好例としてしんせんもうぎゅう^{しんせんもうぎゅう}新撰蒙求に是非入れたいよ」と迷亭君例のごとく長たらしい註釈をつける。主人は少し真面目になって「君そう毎日毎日珠ばかり磨ってるのもよかろうが、元来いつ頃出来上るつもりかね」と聞く。「まあこの^{ようす}容子じゃ十年くらいか

かりそうです」と寒月君は主人より ^{のんき} 呑氣に見受けられる。「十年じゃ——もう少し早く磨り上げたらよかろう」「十年じゃ早い方です、事によると廿年くらいかかります」「そいつは大変だ、それじゃ容易に博士にゃなれないじゃないか」「ええ一日も早くなって安心さしてやりたいのですがとにかく珠を磨り上げなくっちゃ肝心の実験が出来ませんから……」

寒月君はちょっと句を切って「何、そんなにご心配には及びませんよ。金田でも私の珠ばかり磨ってる事はよく承知しています。実は ^{にさんち} 二三日前行った時にもよく事情を話して来ました」としたがり顔に述べ立てる。すると今まで三人の談話を分らぬながら傾聴していた細君が「それでも金田さ

んは家族中残らず、先月から大磯へ行っていっ
しゃるじゃありませんか」と不審そうに尋ねる。

寒月君もこれには少し 辟^{へき} 易^{えき} の 体^{てい} であった
が「そりゃ妙ですな、どうしたんだろう」ととぼ
けている。こう云う時に重宝なのは迷亭君で、話

の途切れた時、^{とき} 極^{きま} りの悪い時、眠くなつた時、
困つた時、どんな時でも必ず横合から飛び出して

くる。「先月大磯へ行ったものに^{りょうさんち} 両^{りやう} 三^{さん} 日^{にち} 前
東京で逢うなどは神秘的でいい。いわゆる霊の交
換だね。相思の情の切な時にはよくそう云う現象
が起るものだ。ちょっと聞くと夢のようだが、夢
にしても現実よりたしかな夢だ。奥さんのように
別に思いも思われもしない苦沙弥君の所へ片付

いて^{しょうがい} 生^{しょう} 涯^{がい} 恋の何物たるを御解しにならん

方には、御不審ももつともだが……」「あら何を
証拠にそんな事をおっしゃるの。随分 ^{けいべつ} 軽 蔑 な
さるのね」と細君は中途から不意に迷亭に切り付
ける。「君だって ^{こいわずら} 恋 煩 いなんかした事はな
さそうじゃないか」と主人も正面から細君に助太
刀をする。「そりゃ僕の ^{えんぶん} 艶 聞 などは、いくら
有ってもみんな七十五日以上経過しているから、
^{きみがた} 君 方 の記憶には残っていないかも知れない
が――実はこれでも失恋の結果、この歳になるま
で独身で暮らしているんだよ」と一順列座の顔を
公平に見廻わす。「ホホホホ面白い事」と云った
のは細君で、「馬鹿にしていあらあ」と庭の方を向
いたのは主人である。ただ寒月君だけは「どうか
その懷旧談を ^{こうがく} 後 学 のために伺いたいもので」

と相変らずにやにやする。

「僕のも ^{だいぶ}大分神秘的で、故小泉八雲先生に話したら非常に受けるのだが、惜しい事に先生は永眠されたから、実のところ話す張合もないんだが、せっかくだから打ち開けるよ。その代りしまいまで謹聴しなくっちゃいけないよ」と念を押していよいよ本文に取り掛る。「回顧すると今を去る事——ええと——何年前だったかな——面倒だから ^{じょうだん} ほぼ十五六年前としておこう」「^{冗談} 冗談じゃない」と主人は鼻からフンと息をした。「大変物覚えが御悪いのね」と細君がひやかした。寒月君だけは約束を守って ^{いちごん} 一言も云わずに、早くあとが聴きたいと云う風をする。「何でもある年の冬の事だが、僕が越後の国は

かんばらごおり たけのこだに
蒲 原 郡 筍 谷 を 通 っ て 、

たこつぼとうげ
蛸 壺 峠 へかかって、これからいよいよ

あいづりょう
会 津 領 [＃ルビの「あいづりょう」は底本では「あい

ずりょう」] へ出ようとするところだ」「妙なところ

だな」と主人がまた邪魔をする。「だまって聴い

ていらっしゃいよ。面白いから」と細君が制する。

「ところが日は暮れる、路は分らず、腹は減る、

仕方がないから峠の真中にある一軒屋を ^{たた} 敲い
て、これこれかようかようしかじかの次第だから、

どうか留めてくれと云うと、御安い御用です、さ

あ御上がんなさいと ^{はだかろうそく} 裸 蝋 燭 を僕の顔に

差しつけた娘の顔を見て僕はぶるぶると ^{ふる} 慄え

たがね。僕はその時から恋と云う ^{くせもの} 曲 者 の魔力

を切実に自覚したね」「おやいやだ。そんな山の

中にも美しい人があるんでしょうか」「山だって
海だって、奥さん、その娘を一目あなたに見せた
いと思うくらいですよ、^{ぶんきん}文^{たかし}金の^{まだ}高島田に
^い髪を結いましてね」「へえー」と細君はあっけに
取られている。^{はい}「這入って見ると八畳の真中に大
^{いろり}きな囲炉裏が切ってあって、その^{まわ}周りに娘と娘
の^{じい}爺さんと^{ばあ}婆さんと僕と四人坐ったんです
がね。さぞ^{おなか}御腹が^{おへ}御減りでしょうと云いますか
ら、何でも善いから早く食わせ給えと請求したん
です。すると爺さんがせっかくの御客さまだから
^{へびめし}蛇飯^たでも炊いて上げようと云うんです。さあ
これからがいよいよ失恋に取り掛るところだか
らしっかりして聴きたまえ」「先生しっかりして
聴く事は聴きますが、なんぼ越後の国だって冬、

蛇がいやしますまい」「うん、そりゃ一応もっともな質問だよ。しかしこんな詩的な話しになると
そう理窟^{りくつ}にばかり拘泥^{こうでい}してはいられないからね。鏡花の小説にゃ雪の中から蟹^{かに}が出てくるじゃないか」と云ったら寒月君は「なるほど」と云ったきりまた謹聴の態度に復した。

「その時分の僕は随分悪^{あく}もの食いの隊長で、いなご蝗^あ、なめくじ、赤蛙などは食い厭^あきていたくらいなところだから、蛇飯は乙^{おつ}だ。早速御馳走になろうと爺さんに返事をした。そこで爺さん囲炉裏の上へ鍋^{なべ}をかけて、その中へ米を入れてぐずぐず煮出したものだね。不思議な事にはそのなべ^{なべ}ふた^{ふた}鍋^{なべ}の蓋^{ふた}を見ると大小十個ばかりの穴があいている。その穴から湯気がぷうぷう吹くから、

うま
旨 い工夫をしたものだ、田舎^{いなか}にしては感心だ
と見てみると、爺さんふと立って、どこかへ出て
行ったがしばらくすると、大きな^{ざる} 箆^かを小脇に抱
い込んで帰って来た。何気なくこれを囲炉裏の
そば^{そば}
傍^{のぞ}へ置いたから、その中を覗いて見ると――
いたね。長い奴が、寒いもんだから御互にとぐろ
の^ま捲きくらをやって^{かた} 塊^よまっていたね」「も
うそんな御話しは^よ 廃しになさいよ。厭らしい」と
細君は眉に八の字を寄せる。「どうしてこれが失
恋の大原因になるんだからなかなか廃せません
や。爺さんはやがて左手に鍋の蓋をとって、右手
に例の塊^{むぞうさ}まった長い奴を^{むぞうさ} 無^{むぞうさ} 雑作につかまえて、
いきなり鍋の中へ^{ほう} 放^{ほう}り込んで、すぐ上から蓋を
したが、さすがの僕もその時ばかりははっと息の

穴が^{ふさが}塞^{ふさが}ったかと思ったよ」「もう御やめにな
さいよ。^{きび}気味の悪^{きび}るい」と細君しきりに^{こわ}怖^{こわ}がっ
ている。「もう少しで失恋になるからしばらく
^{しんぼう}辛^{しんぼう}抱^{しんぼう}していらっしやい。すると一分立つか立
たないうちに蓋の穴から^{かまくび}鎌^{かまくび}首^{かまくび}がひょいと一
つ出ましたのには驚ろきましたよ。やあ出たなと
思うと、隣の穴からもまたひょいと顔を出した。
また出たよと云ううち、あちらからも出る。こち
らからも出る。とうとう^{なべじゅう}鍋^{なべじゅう}中^{なべじゅう}蛇^{なべじゅう}の^{つら}面^{つら}だら
けになってしまった」「なんで、そんなに首を出
すんだい」「鍋の中が熱いから、苦しまぎれに這
い出そうとするのさ。やがて爺さんは、もうよか
ろう、引っ張らっしとか何とか云うと、婆さんは
はあ一と答える、娘はあいと挨拶をして、

めいめい

名々 に蛇の頭を持ってぐいと引く。肉は鍋の中に残るが、骨だけは奇麗に離れて、頭を引くと共に長いのが面白いように抜け出してくる」「蛇の骨抜きですね」と寒月君が笑いながら聞くと「全くの事骨抜きだ、器用な事をやるじゃないか。

それから蓋を取って、しゃくし杓子でもって飯と肉をやたらかま矢鱈に掻き交せて、さあ召し上がれと来た」「食ったのかい」と主人が冷淡に尋ねると、細君はにがよ苦い顔をして「もう廃しになさいよ、胸が悪くって御飯も何もたべられやしない」と愚痴をこぼす。「奥さんは蛇飯を召し上がらんから、そんな事をおっしゃるが、まあ一遍たべてご覧なさい、あの味ばかりはしょうがい生涯忘れられませんぜ」「おお、いやだ、誰が食べるもんですか」「そこ

で充分^{ごぜん}御饌も頂戴し、寒さも忘れるし、娘の顔も遠慮なく見るし、もう思いおく事はないと考えていると、御休みなさいましと云うので、旅の

つか^{おおせ}労れもある事だから、仰に従って、ごろりと横になると、すまん訳だが前後を忘却して寝てしまった」「それからどうなさいました」と今度

は細君の方から催促する。「それから^{あくるあさ}明^{あくるあさ}朝^{あくるあさ}になって眼を^{さま}覚^{さま}してからが失恋でさあ」「どうかなさったんですか」「いえ別にどうもしやしま

せんがね。朝起きて^{まきたばこ}巻煙草^{まきたばこ}をふかしながら裏の窓から見ていると、向うの^{かけひ}筧^{かけひ}の^{そば}傍^{そば}で、やかんあた^まま

薬缶頭^まが顔を洗っているんでさあ」「爺さんか婆さんか」と主人が聞く。「それがさ、僕にも識別しにくかったから、しばらく拝見していて、

その薬缶がこちらを向く段になって驚ろいたね。

それが僕の初恋をした^{ゆうべ}昨夜の娘なんだもの」

「だって娘は島田に^い結っているとさっき云ったじゃないか」「前夜は島田さ、しかも見事な島田さ。ところが翌朝は丸薬缶さ」「人を馬鹿にしていらあ」と主人は例によって天井の方へ視線をそ

らす。「僕も不思議の^{きよく}極^{こわ}内心少々怖くなっ

たから、なお余所ながら^{よそ}容^{ようす}子を^{うかが}窺っている

と、薬缶はようやく顔を洗^{おわ}い^{かた}了って、^{えの}傍の

石の上に置いてあった高島田の^{かずら}髪^を無雑作

に^{かぶ}被^{はい}って、すましてうちへ這入ったんでなるほどと思った。なるほどとは思ったようなもののそ

の時から、とうとう失恋の^{はか}果敢なき運命をかこつ身となってしまった」「くだらない失恋もあった

もんだ。ねえ、寒月君、それだから、失恋でも、
こんなに陽気で元気がいいんだよ」と主人が寒月
君に向って迷亭君の失恋を評すると、寒月君は
「しかしその娘が丸薬缶でなくってめでたく東
京へでも連れて御帰りになったら、先生はなお元
気かも知れませんよ、とにかくせっかくの娘が
はげ^{せんしゅう} 禿であったのは 千 秋 の 恨 事^{こんじ} ですねえ。
それにしても、そんな若い女がどうして、毛が抜
けてしまったんでしょう」「僕もそれについては
だんだん考えたんだが全く蛇飯を食い過ぎたせ
いに相違ないと思う。蛇飯てえ奴はのぼせるから
ね」「しかしあなたは、どこも何ともなくて結構
でございましたね」「僕は禿にはならずすんだ
が、その代りにこの通りその時から 近^{きんがん} 眼 にな

りました」と金縁の眼鏡をとってハンケチで
ていねい ぶ
町 嚙 に拭いている。しばらくして主人は思い
出したように「全体どこが神秘的なんだい」と念
のために聞いて見る。「あの鬘はどこで買ったの
か、拾ったのかどう考えても いま 未 だに分らないか
らそこが神秘さ」と迷亭君はまた眼鏡を元のごと
く鼻の上へかける。「まるで はな か 嚙 し家の話を聞く
ようでござんすね」とは細君の批評であった。

迷亭の駄弁もこれで一段落を告げたから、もう
やめるかと思いのほか、先生は さるぐつわ は
猿 轡 でも嵌
められないうちはとうてい黙っている事が出来
たち
ぬ 性 と見えて、また次のような事をしゃべり出
した。

「僕の失恋も にが 苦 い経験だが、あの時あの やかん 薬 缶

を知らずに貰ったが最後生涯の ^{めざわ}目障りになる

んだから、よく考えないと ^{けんのん}険 呑 だよ。結婚な
んかは、いざと云う間際になって、飛んだところ

に傷口が隠れているのを見 ^{みいだ}出す事がある者だ

から。寒月君などもそんなに ^{しょうけい}懂 憬 したりし

たり ^{ひと}独 りでむずかしがらないで、^{とく}篤 と気を落

ちつけて ^{たま}珠 ^すを磨るがいいよ」といやに異見めい

た事を述べると、寒月君は「ええなるべく珠ばかり
磨っていたいんですが、向うでそうさせないん

だから弱り切ります」とわざと ^{へきえき}辟 易 したよう
な顔付をする。「そうさ、君などは先方が騒ぎ立

てるんだが、中には滑稽なのがあるよ。あの図書

館へ小便をしに来た ^{ろうばい}老 梅 君などになるとす
こぶる奇だからね」「どんな事をしたんだい」と

主人が調子づいて ^{うけたま}承^る。「なあに、こう
云う訳さ。先生その昔静岡の東西館へ泊った事があるのさ。――たった一と晩だぜ――それでその
晩すぐにそこの下女に結婚を申し込んだのさ。僕

も随分 ^{のんき}呑^気だが、まだあれほどには進化しない。

もっともその時分には、あの宿屋に ^{おなつ}御^夏さんと
云う有名な ^{べっぴん}別^嬪がいて老梅君の座敷へ出た
のがちょうどその御夏さんなのだから無理はないがね」「無理がないどころか君の何とか峠とま
るで同じじゃないか」「少し似ているね、実を云
うと僕と老梅とはそんなに差異はないからな。と
にかく、その御夏さんに結婚を申し込んで、まだ
返事を聞かぬうちに ^{すいか}水^瓜が食いたくなっ
たんだがね」「何だって？」と主人が不思議な顔を

する。主人ばかりではない、細君も寒月も申し合
せたように首をひねってちょっと考えて見る。迷
亭は構わずどんどん話を進行させる。「御夏さん
を呼んで静岡に水瓜はあるまいかと聞くと、御夏
さんが、なんぼ静岡だって水瓜くらいはあります
よと、御盆に水瓜を山盛りにして持ってくる。そ
こで老梅君食ったそうだ。山盛りの水瓜をことご
とく平らげて、御夏さんの返事を待っていると、
返事の来ないうちに腹が痛み出してね、うーんう
ーんと^{うな}唸^{ききめ}ったが少しも利^{ききめ}目がないからまた
御夏さんと呼んで今度は静岡に医者はあるまい
かと聞いたら、御夏さんがまた、なんぼ静岡だっ
て医者くらいはありますよと云って、
てんちげんこう^{せんじもん}
天 地 玄 黄 とかいう 千 字 文 を盗んだよ

うな名前のドクトルを連れて来た。^{あくるあさ}翌朝になって、腹の痛みも御蔭でとれてありがたいと、

出立する十五分前に御夏さんと呼んで、^{きのう}昨日申し込んだ結婚事件の諾否を尋ねると、御夏さんは笑いながら静岡には水瓜もあります、御医者もありますが一夜作りの御嫁はありませんよと出て行ったきり顔を見せなかったそうだ。それから老梅君も僕同様失恋になって、図書館へは小便をするほか来なくなったんだって、考えると女は罪な者だよ」と云うと主人がいつになく引き受けて「本当にそうだ。せんだってミュッセの脚本を読

んだらそのうちの人物が^{ローマ}羅馬の詩人を引用してこんな事を云っていた。――羽より軽い者はちり塵である。塵より軽いものは風である。風より

軽い者は女である。女より軽いものは^む無である。

——よく^{うが}穿^うってるだろう。女なんか仕方がない」と妙なところで^{りき}力^{りき}味^{りき}んで見せる。これ^うを^けた^まわ

承^うった細君は承知しない。「女の軽いのがいけないとおっしゃるけれども、男の重いんだって好い事はないでしょう」「重いた、どんな事だ」「重いと云うな重い事ですわ、あなたのようです」「俺がなんで重い」「重いじゃありませんか」と妙な議論が始まる。迷亭は面白そうに聞いていたが、やがて口を開いて「そう赤くなって互に弁難攻撃をするところが夫婦の真相と云うものかな。どうも昔の夫婦なんてものはまるで無意味なものだったに違いない」とひやかすのだから^ほ賞^ほめる^あの^あだ^いか^ま ^あい^まい^い ^あい^まい^い 暖^あ昧^まな事を言ったが、それでや

めておいても好い事をまた例の調子で^{ふえん}布^し衍^もして、^{しも}下のごとく述べられた。

「昔は亭主に口返答なんかした女は、一人もなかったんだって云うが、それなら^{おし}唾^{いっこう}を女房にしていると
同じ事で僕などは一向^{いっこう}ありがたいくない。やっぱり奥さんのようにあなたは重いじゃありませんかとか何とか云われて見たいね。同じ女房を持つくらいなら、たまには喧嘩の一つ二つしなくっちゃ退屈でしようがないからな。僕の母などと来たら、おやじの前へ出てはいとへいで持ち切っていたものだ。そうして二十年もいっしょになっているうちに寺参りよりほかに外へ出た事がないと云うんだから情けないじゃないか。もっとも御蔭で先祖代々の^{かいみょう}戒名^うはことごとく

暗記している。男女間の交際だってそうさ、僕の
小供の時分などは寒月君のように意中の人と合
奏をしたり、霊の交換をやって ^{もうろうたい} 朦朧体 で出
合って見たりする事はとうてい出来なかった」

「御気の毒様で」と寒月君が頭を下げる。「実に
御気の毒さ。しかもその時分の女が ^{かなら} 必 ずしも
今の女より品行がいいと限らんからね。奥さん近
頃は女学生が墮落したの何だのとやかましく云
いますがね。なに昔はこれより ^{はげ} 烈 しかったんで
すよ」「そうでしょうか」と細君は真面目である。

「そうですとも、^{でたらめ} 出鱈目じゃない、ちゃんと証
拠があるから仕方ありませんや。苦沙弥君、君
も覚えているかも知れんが僕等の五六歳の時ま
では女の子を ^{とうなす} 唐茄子 のように ^{かご} 籠 へ入れて

てんびんぼう かつ
天 秤 棒 で 担 いで売ってあるいたもんだ、
ねえ君」「僕はそんな事は覚えておらん」「君の国
じゃどうだか知らないが、静岡じゃたしかにそう
だった」「まさか」と細君が小さい声を出すと、「本
当ですか」と寒月君が本当らしからぬ様子で聞く。

「本当さ。現に僕のおやじが^ね価を付けた事がある。
その時僕は何でも六つくらいだったろう。おやじ
といっしょに ^{あぶらまち}油 町 から ^{とおりちょう}通 町 へ散
歩に出ると、向うから大きな声をして女の子はよ
しかな、女の子はよしかなと^{どな}怒鳴ってくる。僕等
がちょうど二丁目の角へ来ると、^{いせげん}伊勢源と云う
呉服屋の前でその男に出っ食わした。伊勢源と云
うのは間口が十間で ^{くら}蔵 が五つ ^{とまえ}戸 前 あって静

岡第一の呉服屋だ。今度行ったら見て来給え。今でも歴然と残っている。立派なうちだ。その番頭が甚兵衛と云ってね。いつでも ^{おふくろ} 御 袋 が三日前に ^な 亡くなりましたと云うような顔をして帳場の所へ ^{ひか} 控 えている。甚兵衛君の隣りには ^{はつ} 初 さんという二十四五の若い ^{しゅ} 衆 が坐っているが、この初さんがまた ^{うんしょうりっし} 雲 照 律 師 に ^{きえ} 帰依して三七二十一日の ^{そばゆ} 間 蕎麦湯 だけで通したと云うような青い顔をしている。初さんの隣りが ^{ちょう} 長 どんでこれは ^{きのう} 昨 日 ^や 火事で 焚き出されたかのごとく ^{しゅうぜん} 愁 然 と ^{そろばん} 算 盤 に ^{もた} 身を 凭 している。長どんと ^{なら} 併 んで……」「君は呉服屋の話をするのか、人売りの話をするのか」「そうそう人売りの話をやっていたんだっけ。実はこの伊勢源について

もすこぶる^{きだん}奇譚があるのだが、それは^{かつあい}割愛
して今日は人売りだけにしておこう」「人売りも
ついでにやめるがいい」「どうしてこれが二十世

紀の^{こんにち}今日と明治初年頃の女子の品性の比較
について^{だい}大なる参考になる材料だから、そんな

に^{たやす}容易くやめられるものか——それで僕がお
やじと伊勢源の前までくると、例の人売りがおや

じを見て旦那女の子の^{しまいもの}仕舞物はどうです、安
く負けておくから買っておくんなさいと云いな

が^{てんびんぼう}天秤棒をおろして汗を^ふ拭いているの

さ。見ると籠の中には前に一人^{うし}後ろに一人両方
とも二歳ばかりの女の子が入れてある。おやじは
この男に向って安ければ買ってもいいが、もうこ

れぎりかいと聞くと、へえ^{あいにく}生憎今日はみんな

売り^{つく}尽してたった二つになっちまいました。ど
っちでも好いから取っとくんなさいなと女の子
を両手で持って^{とうなす}唐茄子か何ぞのようにおやじ
の鼻の先へ出すと、おやじはぽんぽんと頭を^{たた}叩
いて見て、ははあかなりな音だと云った。それか
らいよいよ談判が始まって^{さんざねぎ}散々^{さんざねぎ}価値切った末お
やじが、買っても好いが品はたしかだろうなと聞
くと、ええ前の奴は始終見ているから間違はあり
ませんがね^{うし}後ろに^{かつ}担いでる方は、何しろ眼が
ないんですから、ことによるとひびが入ってるか
も知れませんが。こいつの方なら受け合えない代り
^{ねだん}に価値段を引いておきますと云った。僕はこの問
答を^{いま}未だに記憶しているんだがその時小供心
に女と云うものはなるほど油断のならないもの

だと思ったよ。――しかし明治三十八年の
こんにち
今日 こんな馬鹿な真似をして女の子を売っ
てあるくものもなし、眼を放して 後ろへ 担い
だ方は 陰 呑 だなどと云う事も聞かないよう
だ。だから、僕の考ではやはり 泰 西 文明の御
蔭で女の品行もよほど進歩したものだろうと断
定するのだが、どうだろう寒月君」

寒月君は返事をする前にまず 鷹 揚 な
せきばらい
咳 払 を一つして見せたが、それからわざと
落ちついた低い声で、こんな観察を述べられた。

「この頃の女は学校の行き帰りや、合奏会や、慈
善会や、園遊会で、ちょいと買って頂戴な、あら
おいや？　などと自分で自分を売りにあるいて
いますから、そんな やおや 八百屋のお余りを雇って、女

いたくはんばい
の子はよしか、なんて下品な 依 托 販 売 をや
る必要はないですよ。人間に独立心が発達してく
ると自然こんな風になるものです。老人なんぞは
いらぬ取越苦勞をして何とかかとか云いますが、

すうせい
實際を云うとこれが文明の 趨 勢 ですから、私
などは おおい 大 に喜ばしい現象だと、ひそかに慶賀
の意を表しているのです。買う方だって頭を たた
いて品物は確かかなんて聞くような野暮は一人
もいないんですからその辺は安心なものでさあ。

てすう
またこの複雑な世の中に、そんな 手 数 をする日
にゃあ、際限がありませんからね。五十になった
って六十になったって亭主を持つ事も嫁に行く
事も出来やしません」寒月君は二十世紀の青年だ

おおい
けあって、 大 に当世流の考を かいちん 開 陳 してお

いて、敷島^{しきしま}の煙をふうーと迷亭先生の顔の方
へ吹き付けた。迷亭は敷島の煙くらいで辟^{へき}易^{えき}
する男ではない。「仰せの通り方^{ほう}今^{こん}の女生徒、
令嬢などは自尊自信の念から骨も肉も皮まで出
来ていて、何でも男子に負けないところが敬服の
至りだ。僕の近所の女学校の生徒などと来たらえ
らいものだぜ。筒袖^{つつそで}は^はかなぼう^{かなぼう}鉄棒^{てつぼう}へぶら
下がるから感心だ。僕は二階の窓から彼等の体操
を目撃するたんびに古代^{ギリシャ}希臘^{ギリシャ}の婦人を追懷
するよ」「また希臘か」と主人が冷笑するように
云い放つと「どうも美な感じのするものは大抵希
臘から源を発しているから仕方がない。美学者と
希臘とはとうてい離れられないやね。――ことに
あの色の黒い女学生が一心不乱に体操をしてい

るところを拝見すると、僕はいつでも Agnodice
の逸話を思い出すのさ」と物知り顔にしゃべり立
てる。「またむずかしい名前が出て来ましたね」
と寒月君は依然としてにやにやする。「Agnodice
はえらい女だよ、僕は実に感心したね。当時
アテン
亜典の法律で女が産婆を営業する事を禁じて
あった。不便な事さ。Agnodice だってその不便
を感じてだろうか」「何だい、その――
何とか云うのは」「女さ、女の名前だよ。この女
がつらつら考えるには、どうも女が産婆になれな
いのは情けない、不便極まる。どうかして産婆に
なりたいもんだ、産婆になる工夫はあるまいかと
三日三晩手をこまぬ
拱いて考え込んだね。ちょうど
あけがた
三日目の 暁 方に、隣の家で赤ん坊がおぎゃあ

と泣いた声を聞いて、うんそうだと
かつぜんたいご

豁然大悟して、それから早速長い髪を切っ
て男の着物をきて Hierophilus の講義をききに

行った。首尾よく講義をきき ^{おお}終^おせて、もう大丈夫
と云うところでもって、いよいよ産婆を開業し

た。ところが、奥さん ^{はや}流行^りりましたね。あちらで
もおぎゃあと生れるこちらでもおぎゃあと生れ
る。それがみんな Agnodice の世話なんだから大

もう ^{さいおう}塞翁^の馬、
変儲^なかった。ところが人間万事 ^や塞翁^の馬、
七 ^た転^りび八起^きき、弱り目に崇^りり目で、ついこ

の秘密が露見に及んでついに ^{おかみ}御上^{ごは}の御法度
を破ったと云うところで、重き御仕 ^{しおき}置^にに仰せつ
けられそうになりました」「まるで講釈見たよう

です事」「なかなか ^{うま}旨^いいでしょう。ところが

アテン

亜典の女連が一同連署して嘆願に及んだから、

時の御奉行もそう木で鼻を^{くく}括ったような挨拶も出来ず、ついに当人は無罪放免、これからはたとい女たりとも産婆営業勝手たるべき事と云う

おふれ

御布令さえ出てめでたく落着を告げました」「よくいろいろな事を知っていらっしゃるのね、感心ねえ」「ええ大概の事は知っていますよ。知らないのは自分の馬鹿な事くらいなものです。しかしそれも薄々は知ってます」「ホホホホ面白い事ば

かり……」と細君^{そうごう}相形を崩して笑っていると、

こうしど

格子戸のベルが相変らず着けた時と同じような音を出して鳴る。「おやまた御客様だ」と細君は茶の間へ引き下がる。細君と入れ違いに座敷へ

はい

這入って来たものは誰かと思ったらご存じの

おちとうふう
越 智 東 風 君であつた。

ここへ東風君さえくれば、主人の^{うち}家へ^で出入
する変人はことごとく網羅し^{つく}尽したとまで行
かずとも、少なくとも吾輩の^{ぶり}無^{りょう}聊を慰むるに
足るほどの^{あた}頭^ま数^{かず}は^お御^{そろ}揃^いになつたと云
わねばならぬ。これで不足を云つては^も勿^{った}体^いな
い。運悪るくほかの家へ飼われたが最後、生涯人
間中にかかる先生方が一人でもあらうとさえ気
が付かずに死んでしまうかも知れない。^{さい}幸^{わい}
にして苦沙弥先生門下の^{びょう}猫^{うじ}児となつて
^{ちやう}朝^{せき}夕^{こひ}虎皮の前に^{はん}侍^{はん}べるので先生は無論
の事迷亭、寒月^{ない}乃^し至東風などと云う広い東京に
さえあまり例のない一騎当千の豪傑連の挙止動
作を寝ながら拝見するのは吾輩にとって千載一

遇の光栄である。御蔭様でこの暑いのに毛袋でつ
つまれていると云う難儀も忘れて、面白く半日を
消光する事が出来るのは感謝の至りである。どう
せこれだけ集まれば ^{ただごと} 只 事 ではすまない。何か
持ち上がるだろうと ^{ふすま} 襖 の陰から ^{つつし} 謹 んで
拝見する。

「どうもご無沙汰を致しました。しばらく」と御
辞儀をする東風君の顔を見ると、先日のごとくや
はり奇麗に光っている。頭だけで評すると何か
どんちゅうやくしゃ
綴 帳 役 者 のようにも見えるが、白い
こくら はかま
小倉の袴 のゴワゴワするのを御苦勞にも
しかつめ は
鹿 爪 らしく穿 いて いる ところ は
さかきばらけんきち
榊 原 健 吉 の内弟子としか思えない。従
って東風君の身体で普通の人間らしいところは

肩から腰までの間だけである。「いや暑いのに、よく御出掛だね。さあずっと、こっちへ通りたまえ」と迷亭先生は自分の ^{うち}家らしい挨拶をする。

「先生には ^{だいぶ}大分久しく御目にかかりません」

「そうさ、たしかこの春の朗読会ぎりだったね。

朗読会と云えば近頃はやはり ^{おさかん}御盛かね。その ^{ごおみや}後御宮にやありませんか。あれは ^{うま}旨かったよ。

僕は ^{おお}大に拍手したぜ、君気が付いてたかい」

「ええ御蔭で大きに勇気が出まして、とうとうし

まいまで ^こ漕ぎつけました」「今度はいつ御催しがありますか」と主人が口を出す。「七八 ^{ふたつき}両月は休んで九月には何か ^{にぎ}賑やかにやりたいと思っております。何か面白い趣向はございますまいか」「さよう」と主人が気のない返事をする。「東

風君僕の創作を一つやらないか」と今度は寒月君が相手になる。「君の創作なら面白いものだろうが、一体何かね」「脚本さ」と寒月君がなるべく押しを強く出ると、案のごとく、三人はちょっと毒気をぬかれて、申し合せたように本人の顔を見る。「脚本はえらい。喜劇かい悲劇かい」と東風君が歩を進めると、寒月先生なお澄し返って「なに喜劇でも悲劇でもないさ。近頃は旧劇とか新劇

だいぶ
とか大部やかましいから、僕も一つ新機軸を出
はいげき
して俳劇と云うのを作って見たのさ」「俳劇
たどんなものだい」「俳句趣味の劇と云うのを詰
めて俳劇の二字にしたのさ」と云うと主人も迷亭

けむ ま ひか
も多少煙に捲かれて控えている。「それでその趣向と云うのは？」と聞き出したのはやはり東

風君である。「根が俳句趣味からくるのだから、あまり長たらしくって、毒悪なのはよくないと思って一幕物にしておいた」「なるほど」「まず道具立てから話すが、これも ^{ごく} 極簡単な方がいい。舞台の真中へ大きな柳を一本植え付けてね。それからその柳の幹から一本の枝を右の方へヌッと出させて、その枝へ ^{からす} 鳥を一羽とまらせる」「鳥がじっとしていればいいが」と主人が ^{ひと} ひとり ^{ごと} 言のように心配した。「何わけは有りません、鳥の足を糸で枝へ ^{しば} 縛り付けておくんです。でその下へ ^{ぎょう} 行 ^{ずい} 水 ^{だらい} 盥を出しましてね。美人が横向きになって手拭を使っているんです」「そいつは少しデカダンだね。第一誰がその女になるんだい」と迷亭が聞く。「何これもすぐ出来ます。美

術学校のモデルを雇ってくるんです」「そりゃ警
視庁がやかましく云いそうだな」と主人はまた心
配している。「だって興行さえしなければ構わん
じゃありませんか。そんな事をとにかく云った日
にゃ学校で裸体画の写生なんざ出来っこありま
せん」「しかしあれは稽古のためだから、ただ見
ているのとは少し違うよ」「先生方がそんな事を
云った日には日本もまだ駄目です。絵画だって、
演劇だって、おんなじ芸術です」と寒月君大いに
きえん
氣 焰 を吹く。「まあ議論はいいが、それからど
うするのだい」と東風君、ことによると、やる
りょうけん
了 見 と見えて筋を聞きたがる。「ところへ
花道から俳人 高 浜 虚 子 ^{たかはまきよし} がステッキを持っ
て、白い 灯 心 ^{とうしん} 入りの帽子を ^{かぶ} 被 っ て、^{すきや} 透 綾

の羽織に、^{さつまがすり}薩摩飛白の^{しりっぱしよ}尻端折りの半靴
と云うこしらえで出てくる。着付けは陸軍の
^{ごようたし}御用達見たようだけれども俳人だからなる
べく^{ゆうゆう}悠々として腹の中では句案に余念のな
^{てい}い体であるがなくっちゃいけない。それで虚子
が花道を行き切っていよいよ本舞台に懸った時、
ふと句案の眼をあげて前面を見ると、大きな柳が
あって、柳の影で白い女が湯を浴びている、はっ
と思って上を見ると長い柳の枝に鳥が一羽とま
って女の行水を見下ろしている。そこで虚子先生
^{おおい}大に俳味に感動したと云う思い入れが五十
秒ばかりあって、行水の女に惚れる鳥かなと大き
な声で一句朗吟するのを合図に、^{ひょうしぎ}拍子木を入
れて幕を引く。――どうだろう、こう云う趣向は。

御気に入りませんか。君 ^{おみや} 御 宮 になるより虚子
になる方がよほどいいぜ」東風君は何だか物足ら
ぬと云う顔付で「あんまり、あっけないようだ。

もう少し人情を加味した事件が欲しいようだ」と
真面目に答える。今まで比較のおとなしくしてい
た迷亭はそういつまでもだまっているような男
ではない。「たったそれだけで俳劇はすさまじい

^{うえだびん}
ね。上 田 敏 君の説によると俳味とか滑稽とか
云うものは消極的で亡国の ^{いん} 音 だそうだが、敏君
だけあってうまい事を云ったよ。そんなつまらな
い物をやって見給え。それこそ上田君から笑われ
るばかりだ。第一劇だか茶番だか何だかあまり消
極的で分らないじゃないか。失礼だが寒月君はや

^{たま}
はり実験室で 珠 を磨いてる方がいい。俳劇なん

ぞ百作ったって二百作ったって、亡国の^{いん}音じゃ駄目だ」寒月君は少々^{むっ}憤として、「そんなに消極的でしょうか。私はなかなか積極的なつもりなんですが」どっちでも構わん事を弁解しかける。

「虚子がですね。虚子先生が女に惚れる烏かなと烏を^{とら}捕えて女に惚れさしたところが^{おお}大に積極的だろーと思います」「こりゃ新説だね。是非御講釈を伺がいましょう」「理学士として考えて見ると烏が女に惚れるなどと云うのは不合理でしょう」「ごもつとも」「その不合理な事をむぞうさ^{むぞうさ}無雑作に言い放って少しも無理に聞えません」「そうかしら」と主人が疑った調子で割り込んだが寒月は一向頓着しない。「なぜ無理に聞えないかと云うと、これは心理的に説明するとよく分り

ます。実を云うと惚れるとか惚れないとか云うのは俳人その人に存する感情で烏とは没交渉の沙汰であります。しかるところあの烏は惚れてるなと感ずるのは、つまり烏がどうのこうのと云う訳

じゃない、^{ひっきょう}必^{きょう}竟 自分が惚れているんでさあ。

虚子自身が美しい女の^{ぎょうずい}行^{ぎょう}水^{ずい} しているところを見てはっと思う途端にずっと惚れ込んだに相違ないです。さあ自分が惚れた眼で烏が枝の上で動きもしないで下を見つめているのを見たものだから、ははあ、あいつも俺と同じく参ってる

^{かんちが}なと癩^{かん}違^{ちが}いをしたのです。癩違いには相違ないですがそこが文学的でかつ積極的なところなんです。自分だけ感じた事を、断りもなく烏の上に拡張して知らん顔をしてすましているところ

なんぞは、よほど積極主義じゃありませんか。どうです先生」「なるほど御名論だね、虚子に聞かしたら驚くに違いない。説明だけは積極だが、実際あの劇をやられた日には、見物人はたしかに消極になるよ。ねえ東風君」「へえどうも消極過ぎるように思います」と真面目な顔をして答えた。

主人は少々談話の局面を展開して見たくなったと見えて、「どうです、東風さん、近頃は傑作もありますか」と聞くと東風君は「いえ、別段これと云って御目にかけるほどのものも出来ませんが、近日詩集を出して見ようと思ひまして――
こうほん
――稿本を幸い持って参りましたから御批評を願ひましょう」と懷から紫の袷紗包を

出して、その中から五六十枚ほどの原稿紙の帳面
を取り出して、主人の前に置く。主人はもっとも
らしい顔をして拝見と云って見ると第一頁に
世の人に似ずあえかに見え給う

富子嬢に捧ぐ

と二行にかいてある。主人はちょっと神秘的な顔
をしてしばらく一頁を無言のまま ^{なが}眺めている
ので、迷亭は横合から「何だい新体詩かね」と云
いながら ^{のぞ}覗き込んで「やあ、捧げたね。東風君、
思い切って富子嬢に捧げたのはえらい」としきり
^ほに賞める。主人はなお不思議そうに「東風さん、
この富子と云うのは本当に存在している婦人な
のですか」と聞く。「へえ、この前迷亭先生とご
いっしょに朗読会へ招待した婦人の一人です。つ

いこの御近所に住んでおります。実はただ今詩集
を見せようと思ってちょっと寄って参りましたが、
あいにく 生 憎 先月から大磯へ避暑に行つて留守で
した」と真面目くさつて述べる。「苦沙弥君、こ
れが二十世紀なんだよ。そんな顔をしないで、早
く傑作でも朗読するさ。しかし東風君この捧げ方
は少しまずかったね。このあえかにと云う ^{がげん} 雅 言
は全体何と言う意味だと思つてゐるかね」^{かよわ}「蚊 弱
いとかたよわくと云う字だと思います」「なるほ
どそうも取れん事はないが本来の字義を云うと
危う氣にと云う事だぜ。だから僕ならこうは書か
ないね」「どう書いたらもっと詩的になりましょ
う」「僕ならこうさ。世の人に似ずあえかに見え
給う富子嬢の鼻の下に捧ぐとするね。わずかに三

字のゆきさつだが鼻の下があるのとないのとでは大変感じに相違があるよ」「なるほど」と東風君は^げ解しかねたところを無理に^{なっとく}納得したてい^{てい}体にもてなす。

主人は無言のままようやく一頁をはぐっていいいよ巻頭第一章を読み出す。

う^{くん} 倦んじて 薫^{こうり}ずる 香 裏に君の
霊か相思の煙のたなびき

おお我、ああ我、^{から} 辛 きこの世に
あまく得てしか熱き口づけ

「これは少々僕には解しかねる」と主人は嘆息しながら迷亭に渡す。「これは少々振り過ぎてる」と迷亭は寒月に渡す。寒月は「なああるほど」と云って東風君に返す。

「先生御分りにならんのはごもっともで、十年前の詩界と^{こんにち}今日の詩界とは見違えるほど発達しておりますから。この頃の詩は寝転んで読んだり、駐車場で読んではとうてい分りようがないので、作った本人ですら質問を受けると返答に窮する事がよくあります。全くインスピレーションで書くので詩人はその他には何等の責任もないのです。註釈や^{くんぎ}訓義は学究のやる事で私共の方では^{とん}頓と構いません。せんだっても私の友人で^{そうせき}送籍と云う男が一夜という短篇をかきましたが、誰が読んでも^{もうろう}朦朧として取り留めがつかないので、当人に逢って^{とく}篤と主意のあるところを^{ただ}糺して見たのですが、当人もそんな事は知らないよと云って取り合わないのです。全くその

辺が詩人の特色かと思います」「詩人かも知れないが随分妙な男ですね」と主人が云うと、迷亭が

「馬鹿だよ」と ^{たんかん} 単 簡 に送籍君を打ち留めた。東風君はこれだけではまだ弁じ足りない。「送籍

は吾々仲間のうちでも ^{とりの} 取 除 けですが、私の詩もどうか心持ちその気で読んでいただきたいので。

ことに御注意を願いたいのはからきこの世と、あ

まき口づけと ^{つい} 対 をとったところが私の苦心です」「よほど苦心をなすった ^{こんせき} 痕 迹 が見えます」

「あまいとからいと反照するところなんか

じゅうしちみちょうとうがらしちょう
十 七 味 調 唐 辛 子 調 で面白い。

全く東風君独特の伎倆で敬々服々の至りだ」としきりに正直な人をまぜ返して喜んでいる。

主人は何と思ったか、ふいと立って書斎の方へ

行ったがやがて一枚の半紙を持って出てくる。

「東風君の御作も拝見したから、今度は僕が短文を読んで諸君の御批評を願おう」といささか本気

の沙汰である。「^{てんねんこじ}天然居士の^{ぼひめい}墓碑銘ならもう二三遍拝聴したよ」「まあ、だまっていなさい。

東風さん、これは決して得意のものではありませんが、ほんの座興ですから聴いて下さい」「是非伺がいきましょう」「寒月君もついでに聞き給え」

「ついででなくても聴きますよ。長い物じゃないでしょう」「僅々六十余字さ」と苦沙弥先生いよいよ手製の名文を読み始める。

「^{やまとだましい}大和魂！ と叫んで日本人が肺病や^{せき}みのような咳をした」

「^{とっこつ}起し得て突兀ですね」と寒月君がほめる。

「大和魂！　と新聞屋が云う。大和魂！　と^{すり}掬
が云う。大和魂が一躍して海を渡った。英国で大
和魂の演説をする。^{ドイツ}独逸で大和魂の芝居をす
る」

「なるほどこりゃ^{てんねんこじ}天然居士以上の作だ」と今
度は迷亭先生がそり返って見せる。

「東郷大將が大和魂を^も有っている。^{さかなや}肴屋の銀
さんも大和魂を有っている。^{さぎし やまし}詐偽師、山師、人殺
しも大和魂を有っている」

「先生そこへ寒月も有っているとつけて下さい」

「大和魂はどんなものかと聞いたら、大和魂さと
答えて行き過ぎた。五六間行ってからエヘンと云

う声が聞こえた」

「その一句は大出来だ。君はなかなか文才があるね。それから次の句は」

「三角なものが大和魂か、四角なものが大和魂か。大和魂は名前の示すごとく魂である。魂であるから常にふらふらしている」

「先生だいぶ面白うございますが、ちと大和魂が多過ぎはしませんか」と東風君が注意する。「賛成」と云ったのは無論迷亭である。

「誰も口にせぬ者はないが、誰も見たものはない。

誰も聞いた事はあるが、誰も^あ遇った者がない。大和魂はそれ^{てんぐ たぐい}天狗の類か」

主人は^{いっけつようぜん}一結杳然と云うつもりで読み終ったが、さすがの名文もあまり短か過ぎるのと、

主意がどこにあるのか分りかねるので、三人はまだあとがある事と思って待っている。いくら待っていても、うんとも、すんとも、云わないので、最後に寒月が「それぎりですか」と聞くと主人は
かろ
軽 く「うん」と答えた。うんは少し気楽過ぎる。

不思議な事に迷亭はこの名文に対して、いつものようにあまり駄弁を振わなかったが、やがて向き直って、「君も短篇を集めて一巻として、そうして誰かに捧げてはどうだ」と聞いた。主人は事もなげに「君に捧げてやろうか」と聴くと迷亭は
まっぴら
「真 平 だ」と答えたぎり、先 刻 細君に見せ
はさみ
びらかした 鋏 をちょきちょき云わして爪をとっている。寒月君は東風君に向って「君はあの

金田の令嬢を知ってるのかい」と尋ねる。「この
春朗読会へ招待してから、懇意になってそれから
は始終交際をしている。僕はあの令嬢の前へ出る
と、何となく一種の感に打たれて、当分のうちは
詩を作っても歌を詠^よんでも愉快に興が乗って出
て来る。この集中にも恋の詩が多いのは全くああ
云う異性の^{ほうゆう} 朋 友 からインスピレーションを
受けるからだろうと思う。それで僕はあの令嬢に
対しては切実に感謝の意を表しなければならん
からこの機を利用して、わが集を捧げる事にした
のさ。^{むか} 昔 しから婦人に親友のないもので立派な
詩をかいたものはないそうだ」「そうかなあ」と
寒月君は顔の奥で笑いながら答えた。いくら駄弁
家の寄合でもそう長くは続かんものと見えて、談

話の火の手は ^{だいぶ}大分下火になった。吾輩も彼等の
変化なき雑談を終日聞かねばならぬ義務もない
から、失敬して庭へ ^{かまきり}蟬 螂 を探しに出た。
^{あおぎり}梧 ^{つづ}桐 の緑を 綴 る間から西に傾く日が ^{まだ}斑
^もらに洩れて、幹にはつくつく ^{ぼうし}法師 が懸命にない
ている。晩はことによると一雨かかるかも知れな
い。

七

吾輩は近頃運動を始めた。猫の癖に運動なんて
^き利いた風だと一概に ^{れいば}冷 罵 し去る ^{てあい}手 合 にちょ
っと申し聞けるが、そう云う人間だってつい近年
までは運動の何者たるを解せず、食って寝るの
を天職のよう に心得ていたではないか。

ぶじこれきにん　とな　ふところで
無事是貴人とか称えて、懐手をして

ざぶとん
座布団から腐れかかった尻を離さざるをもっ

やにさが
て旦那の名誉と脂下って暮したのは覚えて
いるはずだ。運動をしろの、牛乳を飲めの冷水を

浴びろの、海の中へ飛び込めの、夏になったら山

こも　くら
の中へ籠って当分霞を食えのとくだらぬ注
文を連発するようになったのは、西洋から神国へ

ばんきん
伝染した輓近の病気で、やはりペスト、肺
病、神経衰弱の一族と心得ていいくらいだ。もっ

とも吾輩は去年生れたばかりで、当年とって一歳

かか
だから人間がこんな病気に罹り出した当時の

みぎ
有様は記憶に存しておらん、のみならずその砌

かざなか
りは浮世の風中にふわついておらなかった

か
に相違ないが、猫の一年は人間の十年に懸け合う

と云ってもよろしい。吾等の寿命は人間より二倍も三倍も短いに^{かかわ}係らず、その短日月の間に猫一疋の発達^{つかまつ}は十分仕るところをもって推論すると、人間の年月と猫の^{せいそう}星霜を同じ割合に打算するのははなはだしき^{ごびゅう}誤謬である。第一、一歳何ヵ月に足らぬ吾輩がこのくらいの見識を有しているのでも分るだろう。主人の第三女などは数え年で三つだそうだが、智識の発達から云うと、いやはや鈍いものだ。泣く事と、寝小便をする事と、おっぱいを飲む事よりほかに何にも知らない。世を憂い時を^{いきどお}憤る吾輩などに^{くら}較べると、からたわいのない者だ。それだから吾輩が運動、海水浴、転地療養の歴史を方寸のうちに^{ごう}畳み込んでいたって毫も驚くに足りない。これ

しきの事をもし驚ろく者があつたなら、それは人
間と云う足の二本足りない野呂間に^{のろま きま}極^{きま}っている。人間は昔から野呂間である。であるから近頃
に至って^{ようよう}漸々運動の機能を^{ふいちよう}吹聴^{ふいちよう}したり、海水浴の利益を^{ちようちよう}喋々^{ちようちよう}して大発明のよ
うに考えるのである。吾輩などは生れない前から
そのくらいな事はちゃんと心得ている。第一海水
がなぜ薬になるかと云えばちょっと海岸へ行け
ばすぐ分る事じゃないか。あんな広い所に魚が何
びき^{びき}足^{びき}おるか分らないが、あの魚が一疋も病気をし
て医者にかかった^{ため}試^{ため}しがない。みんな健全に泳
いでいる。病気をすれば、からだ^きが利^きかなくなる。
死ねば必ず浮く。それだから魚の往生をあがると
云って、鳥の^{こうきよ}薨去^{こうきよ}を、落ちると^{とな}唱^{とな}え、人間

じゃくめつ
の 寂 滅 をごねると号している。洋行をして
印度洋を横断した人に君、魚の死ぬところを見た
事がありますかと聞いて見るがいい、誰でもいい
えと答えるに極っている。それはそう答える訳だ。

いくら往復したって一匹も波の上に今^{いき}呼吸を引
き取った――^{いき}呼吸ではいかん、魚の事だから^{しお}潮
を引き取ったと云わなければならん――潮を引
き取って浮いているのを見た者はないからだ。あ

の ^{びょうびょう}渺々たる、あの ^{まんまん}漫々たる、
^{たいかい}大 海 を日となく夜となく続けざまに石炭を
た ^さ焚いて探がしてあるいても古往 ^{こんらい}今 来 一匹も
魚が上がっておらんところをもって推論すれば、
魚はよほど丈夫なものに違ないと云う断案はす
ぐに下す事が出来る。それならなぜ魚がそんなに

丈夫なのかと云えばこれまた人間を待ってしか

のち
る 後 に知らざるなりで、わけ
訳 はない。すぐ分る。

しおみず
全く 潮 水 を呑んで始終海水浴をやっている
からだ。海水浴の功能はしかく魚に取って

けんちょ
顕 著 である。魚に取って顕著である以上は人
間にとっても顕著でなくてはならん。一七五〇年

そくせき
の海水に飛込めば四百四病 即 席 全快と

おおげさ
大袈裟な広告を出したのは遅い遅いと笑って
もよろしい。猫といえども相当の時機が到着すれ
ば、みんな鎌倉あたりへ出掛けるともりでいる。

ただ
但 し今はいけない。物には時機がある。

ごいっしんまえ
御 維 新 前 の日本人が海水浴の機能を味わ

う事が出来ずに死んだごとく、
こんにち
今 日 の猫はい

まだ裸体で海の中へ飛び込むべき機会に
そうぐう
遭遇しておらん。せいては事を仕損ずる、
つきじ
今日のように築地へ打っちゃられに行った猫
むやみ
が無事に帰宅せん間は無暗に飛び込む訳には
行かん。進化の法則で吾等猫輩の機能が
きょうらんどとう
狂瀾怒濤に対して適當の抵抗力を生ず
るに至るまでは――換言すれば猫が死んだと云
う代りに猫が上がったと云う語が一般に使用せ
らるるまでは――容易に海水浴は出来ん。

海水浴は追って実行する事にして、運動だけは
取りあえずやる事に取り極めた。どうも二十世紀
こんにち
の今日運動せんのはいかにも貧民のようで
人聞きがわるい。運動をせんと、運動せんのでは
ない。運動が出来ないのである、運動をする時間が

ないのである、余裕がないのだと鑑定される。昔
は運動したものが^{おりすけ}折 助 と笑われたごとく、今
では運動をせぬ者が下等と^{みな}見做されている。吾人
の評価は時と場合に応じ吾輩の眼玉のごとく変
化する。吾輩の眼玉はただ小さくなったり大きく
なったりするばかりだが、人間の^{ひんしつ}品 隲 とくる
と^{まっさ}真 逆 かさまにひっくり返る。ひっくり返って
^{さ つか}も差し 支 えはない。物には両面がある、
^{りょうたん}両 端 がある。両端を^{たた}叩 いて^{こくびやく}黒 白 の
変化を同一物の上に起こすところが人間の融通
のきくところである。方寸を^さ逆かさまにして見る
と寸方となるところに^{あいきよう}愛 嬌 がある。^{あま}天 の
はしだて ^{またぐら}またぐら ^{のぞ}のぞ
^{橋 立}橋 立 を ^{股 倉}股 倉 から ^覗覗 いて見るとまた格
別な^{おもむき}趣 が出る。セクスピヤも千古万古セク

スピヤではつまらない。^{たま}偶には股倉からハムレットを見て、君こりゃ駄目だよくらいに云う者がないと、文界も進歩しないだろう。だから運動をわるく云った連中が急に運動がしたくなって、女までがラケットを持って往来をあるき廻った

て^{いっこう}一向不思議はない。ただ猫が運動するのをき利いた風だなどと笑いさえしなければよい。さて吾輩の運動はいかなる種類の運動かと不審をいだ

抱く者があるかも知れんから一応説明しようと思う。御承知のごとく不幸にして機械を持つ事が出来ん。だからボールもバットも取り扱い方に

困窮する。次には金がないから買う^{わけ}訳に行かない。この二つの原因からして吾輩の選んだ運動は

いちもん^{もん}一 文 いらす器械なしと名づくべき種類に属

する者と思う。そんなら、のそのそ歩くか、ある
いは まぐろ くわ か
いは 鮪 の切身を 啣 えて馳け出す事と考える
かも知れんが、ただ四本の足を力学的に運動さ
せて、地球の引力に ^{したが} 順 って、大地を横行する
のは、あまり ^{たんかん} 単 簡 で興味がない。いくら運動
と名がついても、主人の時々実行するような、読
んで字のごとき運動はどうも運動の神聖を汚^け
す者だろうと思う。勿^{もちろん} 論 ただの運動でもある
刺激の ^{もと} 下 には やらんとは限らん。
かつぶしきょうそう ^{しゃけさが}
鰹 節 競 争、鮭 探 しなどは結構だ
がこれは ^{かんじん} 肝 心 の対象物があつての上の事で、
この刺激を取り去ると ^{さくぜん} 索 然 として没趣味な
ものになってしまう。懸賞的興奮剤がないとすれ
ば何か芸のある運動がして見たい。吾輩はいろい

ろ考えた。台所の^{ひさし} 廂 から^{やね} 家根に飛び上がる方、
家根の^{てっぺん} 天 辺 にある^{ばいか} 梅 花 形 の^{かわら} 瓦 の上
に四本足で立つ術、^{ものほし} 物 干 竿 を渡る事——こ
れはとうてい成功しない、竹がつるつる^す 滑べって
爪が立たない。^{うし} 後 ろから不意に小供に飛びつく
事、——これはすこぶる興味のある運動の^{ひとつ} 一
だが^{めった} 滅 多 にやるとひどい目に逢うから、
たかだか
^高 々 月に三度くらいしか試みない。
^{かんぶくろ} 紙 袋 を頭へかぶせらるる事——これは苦
しいばかりではなはだ興味の^{とぼ} 乏 しい方法であ
る。ことに人間の相手がおらんと成功しないから
駄目。次には書物の表紙を爪で引き^か 掻く事、——
これは主人に見付かると必ずどやされる危険が
あるのみならず、割合に手先の器用ばかりで総身

の筋肉が働かない。これらは吾輩のいわゆる旧式運動なる者である。新式のうちにはなかなか興味

の深いがある。第一に ^{とうろうが} 螳螂狩り。――螳螂

狩りは ^{ねずみが} 鼠狩りほどの大運動でない代りにそ

れほどの危険がない。夏の ^{なかば} 半 から秋の始めへかけてやる遊戯としてはもっとも上乘のものだ。

その方法を云うとまず庭へ出て、一匹の ^{かまきり} 螳螂をさがし出す。時候がいいと一匹や二匹見付け出

すのは ^{ぞうさ} 雑作もない。さて見付け出した螳螂君の

^{そば} 傍へはっと風を切って ^か 馳けて行く。するとすわ

こそと云う ^{みがまえ} 身構をして鎌首をふり上げる。螳

螂でも ^{けなげ} なかなか健気なもので、相手の力量を知

らんうちは抵抗するつもりでいるから面白い。振り上げた鎌首を右の前足でちょっと参る。振り上

げた首は軟かいからぐにゃり横へ曲る。この時の
蝸螂君の表情がすこぶる興味を添える。おやと云
う思い入れが充分ある。ところを ^{いっそく} 一足 飛びに
きみ ^{うし} 君 の 後 ろへ廻って今度は背面から君の羽根
^{かろ} を 軽 く ^か 引き搔く。あの羽根は平生大事に ^{たた} 畳 ん
であるが、引き搔き方が ^{はげ} 烈 しいと、ぱっと乱れ
て中から吉野紙のような薄色の下着があらわれ
る。君は夏でも御苦労千万に二枚重ねで ^{おつ} 乙 ^き に極
まっている。この時君の長い首は必ず後ろに向き
直る。ある時は向ってくるが、大概の場合には首
だけぬっと立てて立っている。こっちから手出し
をするのを待ち構えて見える。先方がいつまでも
この態度でいては運動にならんから、あまり長く
なるとまたちょいと一本参る。これだけ参ると眼

識のある螳螂なら必ず逃げ出す。それを
がむしゃら
我無洒落に向ってくるのはよほど無教育な野
蛮的螳螂である。もし相手がこの野蛮な振舞をや
ると、向って来たところを^{ねら}覘いすまして、いや
と云うほど張り付けてやる。大概は二三尺飛ばさ
れる者である。しかし敵がおとなしく背面に前進
すると、こっちは気の毒だから庭の立木を二三度
飛鳥のごとく廻ってくる。^{かまきりくん}螳螂君はまだ五
六寸しか逃げ延びておらん。もう吾輩の力量を知
ったから手向いをする勇氣はない。ただ右往左往
へ逃げ^{まど}惑うのみである。しかし吾輩も右往左往
へ追っかけるから、君はしまいには苦しがつて羽
根を^{ふる}振って一大活躍を試みる事がある。元来螳
螂の羽根は彼の首と調和して、すこぶる細長く出

来上がったものだが、聞いて見ると全く装飾用だ
それで、人間の英語、仏語、^{ドイツ}独逸語のごとく^{ごう}毫
も実用にはならん。だから無用の長物を利用して
一大活躍を試みたところが吾輩に対してあまり
機能のありよう訳がない。名前は活躍だが事実は
地面の上を引きずってあるくと云うに過ぎん。こ
うなると少々気の毒な感はあるが運動のためだ
から仕方がない。^{ごめんこうむ}御免蒙ってたちまち前面
^かへ馳け抜ける。君は惰性で急廻転が出来ないから
やはりやむを得ず前進してくる。その鼻をなぐり
つける。この時蠐螬君は必ず羽根を広げたまま
た^おお^{おさ}れる。その上をうんと前足で^{おさ}抑えて少しく
休息する。それからまた放す。放しておいてまた
抑える。^{しちきんしちしょうこうめい}七擒七縦孔明の軍略で攻

めつける。約三十分この順序を繰り返して、身動きも出来なくなるところを見すましてちょっと口へ^{くわ} 唧 えて振って見る。それからまた吐き出す。今度は地面の上へ寝たぎり動かないから、こっちの手で突っ付いて、その勢で飛び上がるところをまた抑えつける。これもいやになってから、最後の手段としてむしゃむしゃ食ってしまう。ついでだから蟪蛄を食った事のない人に話しておくが、蟪蛄はあまり^{うま} 旨 い物ではない。そうして滋養分も存外少ないようである。^{とうろうが} 蟪蛄 狩りに^{せみと} 次いで 蟬 取りと云う運動をやる。単に蟬と云ったところが同じ物ばかりではない。人間にもあぶらやろう^{あぶらやろう} 油 野 郎、みんな野郎、おしいつつく野郎があるごとく、蟬にも油蟬、みんな、おしい

つくつくがある。油蝉はしつこく^いて行かん。みんなは^{おうふう}横風で困る。ただ取って面白いのはおもしろい^いつくつくである。これは夏の末にならないと出て来ない。八つ^や口の^{くち}綻^{ほころ}びから^{あき}秋風^{かせ}が断わりなしに^{はだ}膚^なを撫^なでては^{かせ}くしょ^よ風邪^よを引いたと云う頃^{さかん}熾^ふに尾^ふを掉^ふり立ててなく。善く鳴く奴で、吾輩から見ると鳴くのと猫にとられるよりほかに天職がないと思われるくらいだ。秋の初はこいつを取る。これを称して蝉取り運動と云う。ちょっと諸君に話しておくがいやしくも蝉と名のつく以上は、地面の上に^{ころ}転^{ころ}がってはおらん。地面の上に落ちているものには必ず^{あり}蟻^{あり}がついている。吾輩の取るのはこの蟻の領分に寝転んである奴ではない。高い木の枝にとまって、おいしい

つくつくと鳴いている連中を^{とら}捕えるのである。
これもついでだから博学なる人間に聞きたいが
あれはおしいつくつくと鳴くのか、つくつくおし
いと鳴くのか、その解釈次第によっては蟬の研究
上少なからざる関係があると思う。人間の猫に
まさ
優るところはこんなところに存するので、人間
の^{みずか}自^ら誇る点もまたかような点にあるのだ
から、今即答が出来ないならよく考えておいたら
よかろう。もっとも蟬取り運動上はどっちにして
さ^{つか}も差し支^えはない。ただ声をするべに木を^{のぼ}上
って行って、先方が夢中になって鳴いているところ
をうんと捕えるばかりだ。これはもっとも簡略
な運動に見えてなかなか骨の折れる運動である。
吾輩は四本の足を有しているから大地を行く事

においてはあえて他の動物には劣るとは思わない。少なくとも二本と四本の数学的智識から判断して見て人間には負けないつもりである。しかし

木登りに至っては ^{だいぶ}大分吾輩より巧者な奴がいる。本職の猿は別物として、猿の ^{ばっそん}末孫たる人間にもなかなか ^{あなど}侮るべからざる ^{てあい}手合がいる。元来が引力に逆らっての無理な事業だから出来なくても別段の ^{ちじょく}恥辱とは思わんけれども、

蝉取り運動上には少なからざる不便を与える。幸に爪と云う利器があるので、どうかこうか登りをするものの、はたで見るほど楽ではござらん。の

みならず蝉は飛ぶものである。 ^{かまきりくん}蟪蛄君と違って一たび飛んでしまったが最後、せっかくの木

登りも、木登らずと何の ^{えら}択むところなしと云う

悲運に際会する事がないとも限らん。最後に時々
蟬から小便をかけられる危険がある。あの小便が
ややともすると眼を^{ねら} 覘^{ねら} ってしょぐってくるよ
うだ。逃げるのは仕方がないから、どうか小便ば
かりは垂れんように致したい。飛ぶ^{まぎわ} 間^{いば} 際に 溺
りを^{つかまつ} 仕^{つかまつ} るのは一体どう云う心理的状态の
生理的器械に及ぼす影響だろう。やはりせつなさ
のあまりかしらん。あるいは敵の不意に出でて、
ちょっと逃げ出す余裕を作るための方便か知ら
ん。そうすると^{いか} 烏賊の墨を吐き、ベランメーの
^{ほりもの} 刺^{ほりもの} 物を見せ、主人が^{ラテンご} 羅 甸 語を弄する^{たぐい} 類
と同じ^{こうもく} 綱^{こうもく} 目に入るべき事項となる。これも蟬
^{ゆる} 学上^{ゆる} 忽^{ゆる} かせにすべからざる問題である。充分研
究すればこれだけでたしかに博士論文の価値は

ある。それは余事だから、そのくらいにしてまた
本題に帰る。蝉のもっとも集注するのは――集注
がおかしければ集合だが、集合は^{ちんぷ}陳腐だからや
はり集注にする。――蝉のもっとも集注するのは
あおざり^{ごとう}青桐である。漢名を梧桐と号するそうだ。
ところがこの青桐は葉が非常に多い、しかもその
葉は皆^{うちわ}団扇^{おおき}くらいな大さであるから、彼等
^おが生い重なると枝がまるで見えないくらい茂っ
ている。これがはなはだ蝉取り運動の妨害になる。

声はすれども姿は見えずと云う^{ぞくよう}俗謡はとく
に吾輩のために作った者ではなかろうかと怪し
まれるくらいである。吾輩は仕方がないからただ
声を知るべに行く。下から一間ばかりのところで
梧桐は注文通り^{ふたまた}二又になっているから、ここ

ひとやすみ
で一 休 息 して葉裏から蝉の所在地を探偵する。もっともここまで来るうちに、がさがさと音を立てて、飛び出す気早な連中がいる。一羽飛ぶともういけない。真似をする点において蝉は人間に劣らぬくらい馬鹿である。あとから続々飛び出す。

ようようふたまた
す。漸 々 二 叉 に到着する時分には満樹
せき へんせい
寂 として 片 声 をとどめざる事がある。かつてここまで登って来て、どこをどう見廻わしても、

せみけ
耳をどう振っても 蝉 気 がないので、出直すのも面倒だからしばらく休息しようと、^{また} 叉 の上に陣取って第二の機会を待ち合せていたら、いつの間^まにか眠くなって、つい 黒 甜 郷 裡 に遊んだ。
こくてんきょうり
おや と思 っ て 眼 が 醒 め た ら、二 叉 の 黒 甜 郷 裡 から庭の敷石の上へどたりと

落ちていた。しかし大概は登る度に一つは取って
来る。ただ興味の薄い事には樹の上で口に^{くわ} 啣^え
てしまわなくてはならん。だから下へ持って来て
吐き出す時は^{おおかた} 大 方 死んでいる。いくらじゃら
しても引^か 搔いても確然たる手答がない。蝉取り
の妙味はじっと忍んで行っておしい^{くん} 君 が一生
懸命に^{しっぽ} 尻^{ちぢ} 尾を延ばしたり^{ちぢ} 縮 ましたりしてい
るところを、わっと前足で^{おさ} 抑 える時にある。こ
の時つくつく^{くん} 君 は悲鳴を揚げて、薄い透明な羽
根を縦横無尽に振う。その早い事、美事なる事は
言語道断、実に蝉世界の一偉観である。余はつく
つく君を抑える^{たび} 度 にいつでも、つくつく君に請
求してこの美術的演芸を見せてもらう。それがい
やになるとご免を^{こうむ} 蒙 っ^{ほおば} 口の内へ^{ほおば} 頬 張 っ

てしまう。蟬によると口の内へ^{はい}這入ってまで演芸をつづけているのがある。蟬取りの次にやる運動

は^{まつすべ}松滑りである。これは長くかく必要もないから、ちょっと述べておく。松滑りと云うと松を滑るように思うかも知れんが、そうではないやはり木登りの一種である。ただ蟬取りは蟬を取るために登り、松滑りは、登る事を目的として登る。

これが両者の差である。元来松は^{ときわ}常磐にてさいみょうじ　ごちそう
最明寺の御馳走をしてから以来
こんにち
今日に至るまで、いやにごつごつしている。

従って松の幹ほど滑らないものはない。手懸りのいいものはない。足懸りのいいものはない。――

換言すれば^{つまがか}爪懸りのいいものはない。その爪
懸りのいい幹へ^{いっきかせい　か　あが}一気呵成に馳け上る。馳け

上っておいて馳け下がる。馳け下がるには二法ある。一はさかさになって頭を地面へ向けて下りてくる。一は^{のぼ}上ったままの姿勢をくずさずに尾を下にして降りる。人間に問うがどっちがむずかしいか知ってるか。人間のあさはかな^{りょうけん}了見では、どうせ降りるのだから^{したむき}下向に馳け下りる方が楽だと思うだろう。それが間違ってる。君等は義経が^{ひよどりごえ}鶺鴒^お越を落としたことだけを心得て、義経でさえ下を向いて下りるのだから猫なんぞは無論^し下た向きでたくさんだと思うのだろう。そう^{けいべつ}軽蔑するものではない。猫の爪はどっちへ向いて^は生えていると思う。みんな^{うし}後ろへと^{とびぐち}びぐち折れている。それだから^{とびぐち}鳶口のように物をかけて引き寄せる事は出来るが、逆に押し出す力は

ない。今吾輩が松の木を勢よく馳け登ったとする。
すると吾輩は元来地上の者であるから、自然の傾向から云えば吾輩が長く松樹の^{いただき}巔^{とど}に留まるを許さんに相違ない、ただおけば必ず落ちる。しかし手放しで落ちては、あまり早過ぎる。だから何等かの手段をもってこの自然の傾向を幾分かゆるめなければならん。これ^{すなわ}即ち降りるのである。落ちるのと降りるのは大変な違のようだが、その実思ったほどの事ではない。落ちるのを遅くすると降りるので、降りるのを早くすると落ちる事になる。落ちると降りるのは、ちとりの差である。吾輩は松の木の上から落ちるのはいやだから、落ちるのを^{ゆる}緩めて降りなければならない。
^{すなわ}即ちあるものをもって落ちる速度に抵抗し

なければならん。吾輩の爪は ^{ぜん}前 ^{うし}申す通り皆 ^後後
ろ向きであるから、もし頭を上にして爪を立てれ
ばこの爪の力は ^{ことごと}悉 ^さく、落ちる勢に ^さ逆 ^{から}逆 ^っつ
て利用出来る訳である。従って落ちるが変じて降

りになる。実に ^{みやす}見 ^易易 ^きき道理である。しかるに
また身を ^{さか}逆 ^{ごえ}にして義経流に松の木 ^越越 ^ををやっ
て見給え。爪はあっても役には立たん。ずるずる
滑って、どこにも自分の体量を持ち答える事は出
来なくなる。ここにおいてかせっかく降りようと

^{くわだ}企 ^ててた者が変化して落ちる事になる。この通
^{ひよどりごえ}り ^鶉鶉 ^越越 ^ははむずかしい。猫のうちでこの芸
が出来る者は恐らく吾輩のみであろう。それだか
ら吾輩はこの運動を称して松滑りと云うのであ

る。最後に ^{かきめぐ}垣 ^巡巡 ^りりについて ^{いちげん}一 ^言言 ^{する}する。主

人の庭は竹垣をもって四角にしきられている。

えんがわ
椽側と平行している 一 片 は八九間もあ
ろう。左右は双方共四間に過ぎん。今吾輩の云っ
た垣巡りと云う運動はこの垣の上を落ちないよ

うに一周するのである。これはやり 損 ぐそこな
う事も
ままあるが、首尾よく行くとお 慰 なぐさみ
になる。
ことに所々に根を焼いた丸太が立っているから、

ちょっと休息に 便 ぎ 宜 がある。今日は出来がよか
ったので朝から昼までに三 返 べん
やって見たが、や
るたびにうまくなる。うまくなる 度 たび
に面白くな
る。とうとう四返繰り返したが、四返目に半分は

ど まわ
巡りかけたら、隣の屋根から烏が三羽飛んで
来て、一間ばかり向うに列を正してとまった。こ

れは推参な奴だ。人の運動の さまたげ
妨 をする、こ

とにどこの鳥だか^{せき}籍^{ぶんざい}もない分^{ぶんざい}在^{ぶんざい}で、人の堀
へとまるといふ法があるもんかと思ったから、通
るんだおい除きたまえと声をかけた。真先の鳥は
こっちを見てにやにや笑っている。次のは主人の
庭を^{なが}眺^{なが}めている。三羽目は^{くちばし}嘴^{くちばし}を垣根の竹
で^ふ拭^ふいている。何か食って来たに違ない。吾輩は
返答を待つために、彼等に三分間の^{ゆうよ}猶^{ゆうよ}予^{ゆうよ}を与えて、垣の上に立っていた。鳥は通称を勘左衛門と
云うそうだが、なるほど勘左衛門だ。吾輩がいく
ら待ってても挨拶しなければ、飛びもしない。
吾輩は仕方がないから、そろそろ歩き出した。す
ると真先の勘左衛門がちょいと羽を広げた。やっ
と吾輩の威光に恐れて逃げるなどと思ったら、右向
から左向に姿勢をかえただけである。この野郎！

地面の上ならその分に捨ておくのではないが、いかんせん、たださえ骨の折れる道中に、勘左衛門などを相手にしている余裕がない。といってまた

立留^のまって三羽が立ち退くのを待つのもいやだ。第一そう待っていては足がつづかない。先方は羽根のある身分であるから、こんな所へはとまりつけている。従って気に入ればいつまでも

とうりゅう
逗留するだろう。こっちはこれで四回目だ

たださえ大分^{だいぶつか}労れている。いわんや綱渡りにも劣らざる芸当兼運動をやるのだ。何等の障害物がなくてさえ落ちんとは保証が出来んのに、こん

くろしょうぞく
な黒装束が、三個も前途を^{さえぎ}遮っては
容易ならざる不都合だ。いよいよとなれば^{みずか}自
ら運動を中止して垣根を下りるより仕方がない。

面倒だから、いっそさよう仕ろうか、敵は大勢の
事ではあるし、ことにはあまりこの辺には見馴れ

ぬ ^{にんてい}人 ^{くちばし}体 ^{おつ}である。口 ^{とん}嘴 ^乙が ^尖に ^が尖 ^{って}が
何 ^{てんぐ}だ ^{もう}か ^ご天 ^{たち}狗 ^のの ^啓啓 ^し子 ^のの ^{よう}よう ^だだ。どう ^せせ ^質質 ^のの

い ^きい ^ま奴 ^ででない ^{には}には ^極極 ^っっ ^てて ^いい ^るる。退却が安全だろ
う、あまり深入りをして万一落ちでもしたらなお

さ ^ひら ^だら ^恥恥 ^辱辱 ^だだ。と ^思っ ^てて ^いい ^るる ^と ^左 ^む ^け ^を ^し ^た ^鳥 ^を ^し ^た ^鳥
が ^あ ^{ほう} ^と ^云 ^っ ^た [。] ^次 ^の ^も ^真 ^似 ^を ^し ^て ^阿 ^呆 ^と ^云 ^っ ^た [。]

た。最 ^ご ^て ^い ^ね ^い ^る [。] ^最 ^後 ^の ^奴 ^は ^御 ^鄭 ^寧 ^に ^も ^阿 ^呆 ^阿 ^呆 ^と ^二 ^声 ^叫 ^ん ^だ [。] ^い ^か ^に ^温 ^厚 ^な ^る ^吾 ^輩 ^で ^も ^こ ^れ ^は ^看 ^過 ^出 ^来 ^な ^い [。]

ない。第 ^か ^ら ^す ^は ^い [。] ^第 ^一 ^自 ^己 ^の ^邸 ^内 ^で ^鳥 ^輩 ^に ^侮 ^辱 ^さ ^れ ^た ^と ^あ ^っ ^て ^は [、] ^吾 ^輩 ^の ^名 ^前 ^に ^か ^か ^わ ^る [。] ^名 ^前 ^は ^ま ^だ ^な ^い ^か ^ら ^係 ^わ ^り ^よ ^う ^が ^な ^か ^ろ ^う ^と ^云 ^う ^な ^ら ^体 ^面 ^に ^係 ^わ ^る [。] ^決 ^し ^て ^退 ^却 ^は ^出 ^来 ^な ^い [。]

こと ^わ ^ざ ^に ^も [。] ^決 ^し ^て ^退 ^却 ^は ^出 ^来 ^な ^い [。] ^諺 ^に ^も [。]

うごう

鳥合の衆と云うから三羽だって存外弱いかも知れない。進めるだけ進めと度胸を^す据えて、のそのそ歩き出す。鳥は知らん顔をして何か御互に話

をしている様子だ。いよいよ^{かんしゃく}肝癪に^{さわ}障る。

垣根の幅がもう五六寸もあつたらひどい目に合

せてやるんだが、残念な事にはいくら^{おこ}怒っても、のそのそとしかあるかれない。ようやくの事

せんぼう

先鋒を去る事約五六寸の距離まで来てもう一息だと思うと、勘左衛門は申し合せたように、

いきなり^{はばたき}羽搏をして一二尺飛び上がった。その風が突然余の顔を吹いた時、はっと思ったら、

つい踏み^は外ずして、すんと落ちた。これはしくじったと垣根の下から見上げると、三羽共元の所

にとまって上から^{くちばし}嘴を^{そろ}揃えて吾輩の顔

を見下している。図太い奴だ。^{にら}睨めつけてやっ
たが、^{いっこうき}一向利かない。背を丸くして、少々^{うな}唸
ったが、ますます駄目だ。俗人に靈妙なる象徴詩
がわからぬごとく、吾輩が彼等に向って示す怒り
の記号も何等の反応を呈出しない。考えて見ると
無理のないところだ。吾輩は今まで彼等を猫とし
て取り扱っていた。それが悪るい。猫ならこのく
らいやればたしかに^{こた}応えるのだが^{あいにく}生憎相
手は烏だ。烏の勘公とあって見れば致し方がない。

実業家が主人^{くしゃみ}苦沙弥先生を圧倒しようとあせ
るごとく、^{さいぎょう}西行に銀製の吾輩を進呈するが
ごとく、西郷隆盛君の銅像に勘公が^{ふん}糞をひるよ
うなものである。機を見るに敏なる吾輩はとうて
い駄目と見て取ったから、奇麗さっぱりと椽側へ

引き上げた。もう晩飯の時刻だ。運動もいいが度を過^いぐすと行かぬ者で、からだ全体が何となくしま^し緊^りがない、ぐたぐたの感がある。のみならずまだ秋の取り付きで運動中に照り付けられた毛ごろもは、西日を思う存分吸収したと見えて、ほてってたまらない。毛穴から染^しみ出す汗が、流れればと思うのに毛の根にあぶ^ら膏^{あぶら}のようにねばり付く。背^せ中^{なか}がむずむずする。汗でむずむずするの^{のみ}と^は蚤^はが這^はってむずむずするのは判然と区別が出来る。口の届く所なら噛^かむ事も出来る、足の達^かする領分は引き搔^かく事も心得にあるが、せき^{せき}ずい^{ずい}脊^{せき}髓^{ずい}の縦に通う真中と来たら自分の及ぶか^かぎり^り限^りでない。こう云う時には人間を見懸けてやたら^{やたら}矢^や鱈^{たら}にこすり付けるか、松の木の皮で充分摩擦

術を行うか、二者その一を^{えら}択^ばんと不愉快で安
眠も出来兼ねる。人間は^ぐ愚^なものであるから、猫
なで声で――猫なで声は人間の吾輩に対して出
す声だ。吾輩を^{めやす}目^安にして考えれば猫なで声で
はない、なでられ声である――よろしい、とにか
く人間は愚^ななものであるから撫^なでられ声で膝の
^{そば}傍^へ寄って行くと、大抵の場合において彼もし
くは彼女を愛するものと誤解して、わが^な為^すまま
に任せるのみか折々は頭さえ撫^なでてくれるもの
だ。しかるに近来吾輩の^{もうちゅう}毛^中にのみと号す
る一種の寄生虫が繁殖したので滅^{めった}多^たに寄り添
うと、必ず^{くびすじ}頸^筋を持って向うへ^{ほう}抛^り出され
る。わずかに眼に入るか入らぬか、取るにも足ら
ぬ虫のために^{あいそ}愛^想をつかしたと見える。手を

ひるがえ^{くつがえ}
翻^覆 せば雨、手を せば雲とはこの事

だ。高がのみの千^{びき} 疋^疋 や二千疋でよくまあこんなに現金な真似が出来たものだ。人間世界を通じて行われる愛の法則の第一条にはこうあるそうだ。

——自己の利益になる間は、すべからく人を愛す

べし。——人間の取り扱が^{がぜんひょうへん} 俄^然 豹^変 したので、いくら痒ゆくても人力を利用する事は出来

ん。だから第二の方法によって

しょうひまさつほう
松皮摩擦法^{しょうひまさつほう} をやるよりほかに分別はない。しからはちょっとこすって参ろうかとまた

えんがわ^{えんがわ}
椽側^{えんがわ} から降りかけたが、いやこれも利害相償わぬ愚策だと心付いた。と云うのはほかでもない。

松には^{やに} 脂^{やに} がある。この脂^{やに} たるすこぶる執着心の強い者で、もし一たび、毛の先へくっ付けよう

ものなら、雷が鳴ってもバルチック艦隊が全滅しても決して離れない。しかのみならず五本の毛へこびりつくが早いか、十本に ^{まんえん}蔓 延 する。十本やられたなと気が付くと、もう三十本引っ懸っている。吾輩は ^{たんぱく}淡 泊 ^{ちゃじんてきねこ}を愛する 茶 人 的 猫 である。こんな、しつこい、毒悪な、ねちねちした、^{しゅうねんぶか}執 念 深 い奴は大嫌だ。たとい天下の ^{びみょう}美 猫 といえどもご免蒙る。いわんや ^{まつやに}松 脂 においてをやだ。車屋の黒の両眼から北風に乗じて流れる目糞と ^{えら}択 ぶところなき身分をもって、この ^{たんかいしよく}淡 灰 色 ^{けごろも}の 毛 衣 ^{だい}を 大 なしにす ^けるとは怪しからん。少しは考えて見るがいい。と ^{きづかい}いったところできゃつなかなか考える 気 遣 はない。あの皮のあたりへ行って背中をつけるが

早いかならずべたりとおいでになるに^{きま}極^まっている。こんな無分別な^{とんちき}頓痴奇^きを相手にしては吾輩の顔に係わるのみならず、引いて吾輩の毛並に關する訳だ。いくら、むずむずしたって我慢するよりほかに致し方はあるまい。しかしこの二方法共実行出来んとなるとはなはだ心細い。今においてひとくふう
一工夫^{ふう}しておかんとしまいにはむずむず、ねちねちの結果病気に^{かか}罹^るかも知れない。何か分別はあるまいかなと、^あ後と^{あし}足を折って思案したが、ふと思い出した事がある。うちの主人は時々手拭と^{シャボン}石鹼^{けん}をもって^{ひょうぜん}飄然^{ぜん}といずれへか出て行く事がある、三四十分して帰ったところを見ると彼の^{もうろう}朦朧^{たう}たる^{がんしよく}顔色が少しは活気を帯びて、晴れやかに見える。主人のような

むさくる

汚 苦 しい男にこのくらいな影響を与えるな

ら吾輩にはもう少し利^{ききめ}目があるに相違ない。吾輩はただでさえこのくらいな器量だから、これよ

り色男になる必要はないようなものの、万一病氣

かか^{かか} 懼^{なん} 一歳^{げつ} 何^{よう} が月^{せつ} で天^{てん} 折^{せつ} するよう

な事があっては天下の蒼^{そう} 生^{せい} に対して申し訳

がない。聞いて見るとこれも人間のひま^{つぶ} 潰^{つぶ} しに

案出^{せん} した洗^{せん} 湯^{とう} なるものだそうだ。どうせ人間

の作ったものだから碌^{ろく} なものでないには極^{きま}

っているがこの際の事だから試^{はい} しに這^{はい} 入^{はい} っ^{はい} て見るのもよかろう。やって見て功験がなければよす

までの事だ。しかし人間が自己のために設備した

浴場へ異類の猫を入れるだけの洪^{こう} 量^{りょう} があ

るだろうか。これが疑問である。主人がすまして

はい
這入るくらいのところだから、よもや吾輩を断わ
る事もなからうけれども万一お気の毒様を食う
ような事があっては外聞がわるい。これは一先
ようす
ず容子を見に行くに越した事はない。見た上で
これならよいと当りが付いたら、手拭をくわ
啣えて
飛び込んで見よう。とここまで思案を定めた上で
のそのそと洗湯へ出掛けた。

横町を左へ折れると向うに高いとよ竹のよう
なものがきつりつ
屹立して先から薄い煙を吐いてい
る。これすなわ
即ち洗湯である。吾輩はそっと裏口
から忍び込んだ。裏口から忍び込むのをひきょう
卑怯
とか未練とか云うが、あれは表からでなくては訪
問する事が出来ぬものがしっと
嫉妬半分にはや
囃し立
くごと
てる繰り言である。昔から利口な人は裏口から

不意を襲う事にきまっている。紳士養成^{ほう}方^{ほう}の第二巻第一章の五ページにそう出ているそうだ。その次のページには裏口は紳士の遺書にして自身徳を得るの門なりとあるくらいだ。吾輩は二十世紀の猫だからこのくらいの教育はある。あんまり

けいべつ
軽蔑^{けいべつ}してはいけない。さて忍び込んで見ると、左の方に松を割って八寸くらいにしたのが山のように積んであって、その隣りには石炭が岡のよ

うに盛ってある。なぜ^{まつまき}松薪^{まつまき}が山のように、石炭が岡のようかと聞く人があるかも知れないが、別に意味も何もない、ただちょっと山と岡を使い分けただけである。人間も米を食ったり、鳥を食

ったり、^{さかな}肴^{さかな}を食ったり、^{けもの}獣^{けもの}を食ったりいろいろの^{あく}悪^{あく}もの食いをしつくしたあげくつい

に石炭まで食うように墮落したのは不^ふ憫^{びん}である。行き当りを見ると一間ほどの入口が明け放しになって、中を^{のぞ}覗くとがんがらがんのがあんと物静かである。その^{むこうがわ}向側で何かしきりに人間の声がする。いわゆる洗湯はこの声の発する^{へん}辺に相違ないと断定したから、松薪と石炭の間に出来てる谷あいを通り抜けて左へ廻って、前進すると右手に^{ガラスまど}硝子窓があって、そのそとに丸い^{こおけ}小桶が三角^{すなわ}即ちピラミッドのごとく積みかさねてある。丸いものが三角に積まれるのは不本意千万だろうと、ひそかに小桶諸君の意を^{りょう}諒とした。小桶の南側は四五尺の^{あいだ}間板が余って、あたかも吾輩を迎えるもののごとく見える。板の高さは地面を去る約一メートルだから飛

おあつら
び上がるには 御 誂 えの上等である。よろしい
と云いながらひらりと身を ^{おど} 躍 らすといわゆる
洗湯は鼻の先、眼の下、顔の前にぶらついている。

天下に何が面白いと云って、 ^{いま} 未 だ食わざるもの
を食い、未だ見ざるものを見るほどの愉快はない。

諸君もうちの主人のごとく一週三度くらい、この

洗湯界に三十分 ^{ないし} 乃 至 四十分を暮すならいいが、
もし吾輩のごとく風呂と云うものを見た事がな

いなら、早く見るがいい。親の ^{しにめ あ} 死 目に逢わなく
てもいいから、これだけは是非見物するがいい。

世界広しといえどもこんな ^{きかん} 奇 観 はまたとある
まい。

何が奇観だ？ 何が奇観だって吾輩はこれを

口にするを ^{はば} 憚 かるほどの奇観だ。この

ガラスまで

硝子窓の中にうじゃうじゃ、があがあ騒いで
いる人間はことごとく裸体である。台湾の

せいばん

生蕃である。二十世紀のアダムである。そも

そもいしょう 装の歴史をひもと 繻けば――長い事だ
からこれはトイフェルスドレック君に譲って、繻

くだけはやめてやるが、――人間は全く服装で持
ってるのだ。十八世紀の頃大英国バスの温泉場
においてボー・ナッシが嚴重な規則を制定した時な
どは浴場内で男女共肩から足まで着物でかくし

たくらいである。今を去る事六十年^{ぜん}前 これも英
国の去る都で図案学校を設立した事がある。図案
学校の事であるから、裸体画、裸体像の模写、模
型を買い込んで、ここ、かしこに陳列したのはよ
かったが、いざ開校式を挙行する一段になって当

局者を初め学校の職員が大困却をした事がある。

開校式をやるとすれば、市の淑女を招待しなければならん。ところが当時の貴婦人方の考によると人間は服装の動物である。皮を着た猿の子分ではないと思っていた。人間として着物をつけないのは象の鼻なきがごとく、学校の生徒なきがごとく、兵隊の勇気なきがごとく全くその本体を^{しっ}失している。いやしくも本体を失している以上は人間としては通用しない、獣類である。^{たとい}仮令模写模型にせよ獣類の人間と伍するのは貴女の品位を害する訳である。でありますから^{しょうら}妾等は出席御断わり申すと云われた。そこで職員共は話せない連中だとは思ったが、何しろ女は東西両国を通じて一種の装飾品である。^{こめつき}米春にもなれん志

願兵にもなれないが、開校式には欠くべからざる
けしょうどうぐ
化粧道具である。と云うところから仕方が
ない、呉服屋へ行って 黒^{くろぬの}布を三十五反
はちぶんのしち
八分七 買って来て例の獣類の人間にこ
とごとく着物をきせた。失礼があつてはならんと
念に念を入れて顔まで着物をきせた。かようにし
てようやくの事^{とどこお} 滞りなく式をすましたと
云う話がある。そのくらい衣服は人間にとって大
切なものである。近頃は裸体画裸体画と云ってし
きりに裸体を主張する先生もあるがあれはあや
まっている。生れてから^{こんにち} 今日に至るまで一日
も裸体になった事がない吾輩から見ると、どうし
ても間違っている。裸体は^{ギリシャ}希臘、^{ローマ}羅馬の遺
風が文芸復興時代の^{いんび}淫靡の^{ふう}風に誘われてか

はや
ら流行りだしたもので、希臘人や、羅馬人は
ふだん　　みな
平常から裸体を見做れていたのだから、これを
もって風教上の利害の関係があるなどとは　　ごう
毫
も思い及ばなかったのだろうが北欧は寒い所だ。

日本でさえ裸で道中になるものかと云うくらい

ドイツ　イギリス
だから独逸や英吉利で裸になっておれば死
んでしまう。死んでしまつてはつまらないから着
物をきる。みんなが着物をきれば人間は服装の動

物になる。一たび服装の動物となつた　　のち
後　に、突
然裸体動物に出逢えば人間とは認めない、

けだもの
獣　　と思う。それだから歐洲人ことに北方の
歐洲人は裸体画、裸体像をもって獣として取り扱
つていいのである。猫に劣る獣と認定していいの
である。美しい？　美しくても構わんから、美し

みな
い獣と見做せばいいのである。こう云うと西洋婦
人の礼服を見たかと云うものもあるかも知れな
いが、猫の事だから西洋婦人の礼服を拝見した事
はない。聞くところによると彼等は胸をあらわし、
肩をあらわし、腕をあらわしてこれを礼服と称し
ているそうだ。怪しからん事だ。十四世紀頃まで
は彼等の出で立ち^{いた}はしかく滑稽ではなかった、や
はり普通の人間の着るものを着ておった。それが
なぜこんな下等な^{かるわざし}軽術師流に転化してきた
かは面倒だから述べない。知る人ぞ知る、知らぬ
ものは知らん顔をしておればよろしかろう。歴史
はとにかく彼等はかかる異様な風態をして夜間
だけは^{とく}得々たるにも係わらず内心は少々人
間らしいところもあると見えて、日が出ると、肩

をすぼめる、胸をかくす、腕を包む、どこもかしこもことごとく見えなくしてしまうのみならず、足の爪一本でも人に見せるのを非常に恥辱と考えている。これで考えても彼等の礼服なるものは一種の ^{とんちんかんてきさよう} 頓 珍 漢 的 作 用 によって、馬鹿と馬鹿の相談から成立したものだと言う事が分る。

それが口惜しければ ^{くや} ^{にっちゅう} 日 中 でも肩と胸と腕を出して見て見るがいい。裸体信者だってその通りだ。それほど裸体がいいものなら娘を裸体にして、ついでに自分も裸になって上野公園を散歩でもするがいい、できない？ 出来ないのではない、西洋人がやらないから、自分もやらないのだろう。現にこの不合理極まる礼服を着て威張って帝国ホテルなどへ ^{でか} 出懸けるではないか。その ^{いんねん} 因 縁

を尋ねると何にもない。ただ西洋人がきるから、着ると云うまでの事だろう。西洋人は強いから無理でも馬鹿気ていても真似なければやり切れないのだろう。長いものには^ま捲かれろ、強いものには折れろ、重いものには^お圧されろと、そうれろ尽しでは気が^き利かんではないか。気が^き利かんでも仕方がないと云うなら勘弁するから、あまり日本人をえらい者と思つてはいけない。学問といえどもその通りだがこれは服装に関係がない事だから以下略とする。

衣服はかくのごとく人間にも大事なものである。人間が衣服か、衣服が人間かと云うくらい重要な条件である。人間の歴史は肉の歴史にあらず、骨の歴史にあらず、血の歴史にあらず、単に衣服

の歴史であると申したいくらいだ。だから衣服を着けない人間を見ると人間らしい感じがしない。

ばけもの かいこう
まるで 化 物 に 邂 逅 したようだ。化物でも全体が申し合せて化物になれば、いわゆる化物は消えてなくなる訳だから構わんが、それでは人間

自身がおおい 大 に困却する事になるばかりだ。そのむか

昔 し自然は人間を平等なるものに製造して世の中に ほう 抛 り出した。だからどんな人間でも生れ

るときは必ず あかはだか 赤 裸 である。もし人間のほんせい

本 性 が平等に安んずるものならば、よろしくこの赤裸のままで生長してしかるべきだろう。しかるに赤裸の一人が云うにはこう誰も彼も同じ

では勉強する かい 甲斐がない。骨を折った結果が見えぬ。どうかして、おれはおれだ誰が見てもおれだ

と云うところが目につくようにしたい。それにつ
いては何か人が見てあつと魂^{たまげ}消る物をからだ
につけて見たい。何か工夫はあるまいかと十年間
考えてようやく猿^{さる}股^{また}を発明してすぐさまこ
れを穿^はいて、どうだ恐れ入ったろうと威張ってそ
こいらを歩いた。これが今^{こんにち}日の車夫の先祖で
ある。単^{たん}簡^{かん}なる猿股を発明するのに十年の長
日月を費^{つい}やしたのはいささか異^いな感もあるが、
それは今日から古代にさかのぼ^{さかのぼ}って身を
もうまい蒙^{もうまい}昧の世界に置いて断定した結論と云うも
ので、その当時にこれくらいの大発明はなかった
のである。デカルトは「余は思考す、故に余は存
在す」という三^みつ子^ごにでも分るような真理を考え
出すのに十何年か懸ったそうだ。すべて考え出す

時には骨の折れるものであるから猿股の発明に
十年を費やしたって車夫の^{ちえ}智慧には出来過ぎる
と云わねばなるまい。さあ猿股が出来ると世の中
で幅のきくのは車夫ばかりである。あまり車夫が
猿股をつけて天下の大道を我物顔に横行^{かつぽ} 潤歩
するのを憎らしいと思って負けん気の化物が六
年間工夫して羽織と云う無用の長物を発明した。

すると猿股の勢力は^{とみ} 頓に衰えて、羽織全盛の時
代となった。八百屋、生^{きぐすりや} 薬屋、呉服屋は皆こ
の大発明家の^{ばつりゅう} 末流である。猿股期、羽織期
の^{あと} 後に来るのが^{はかまき} 袴期である。これは、何だ
羽織の癖にと^{かんしゃく} 癪癢を起した化物の考案に
なったもので、昔の武士今の官員などは皆この種
属である。かように化物共がわれもわれもと^い 異を

てら しん きそ つばめ
銜 い 新 を 競 って、ついには 燕 の尾にか

きけい
たどった 崎 形 まで出現したが、退いてその由来
を案ずると、何も無理矢理に、出 鱈 目に、偶然
に、漫然に持ち上がった事実では決してない。皆

勝ちたい勝ちたいの勇猛心の凝^こってさまざまの

しんがた
新 形 となったもので、おれは手前じゃないぞ

かぶ
と振れてあるく代りに 被 っているのである。し
て見るとこの心理からして一大発見が出来る。そ

いはほかでもない。自然は真空を忌^いむごとく、人
間は平等を嫌うと云う事だ。すでに平等を嫌って

やむを得ず衣服を骨肉のごとくかようにつけ

まと
纏 う今日において、この本質の一部分たる、こ

もくあみ
れ等を打ちやって、元の 奎 阿 弥 の公平時代に帰
るのは狂人の沙汰である。よし狂人の名称を甘ん

じても帰る事は到底出来ない。帰った連中を
かいめいじん 開明人の目から見れば化物である。仮令
たとい
世界何億万の人口を^あ挙げて化物の域に引ずりお
ろしてこれなら平等だろう、みんなが化物だから
恥ずかしい事はないと安心してやっぱり駄目
である。世界が化物になった翌日からまた化物の
競争が始まる。着物をつけて競争が出来なければ
化物なりで競争をやる。^{あかはだか}赤裸は赤裸でどこ
までも差別を立ててくる。この点から見ても衣服
はどうてい脱ぐ事は出来ないものになっている。

しかるに今吾輩が^{がんか みおろ}眼下に見下した人間の
一団体は、この脱ぐべからざる猿股も羽織も
ないしは^{かま}乃至袴もことごとく棚の上に上げて、無遠

慮にも本来の狂態を^{しゅうもくかんし}衆目環視の^{うち}裡に
露出して^{へいへいぜん}平々然と談笑を^{ほしいま}縦まにし

ている。吾輩が^{さつき}先刻一大奇観と云ったのはこの
事である。吾輩は文明の諸君子のためにここに
つつし

謹んでその一般を紹介するの栄を有する。

何だかごちゃごちゃして^ないて何にから記述し
ていいか分らない。化物のやる事には規律がない
から秩序立った証明をするのに骨が折れる。まず

^{ゆぶね}湯槽から述べよう。湯槽だか何だか分らないが、
^{おおかた}おおかた

大方湯槽というものだろうと思うばかりで
ある。幅が三尺くらい、^{ながさ}長は一間半もあるか、

それを二つに仕切って一つには^{はい}白い湯が這入っ
ている。何でも^{くすりゆ}薬湯とか号するのだそうで、

^{いしばい}石灰を溶かし込んだような色に濁っている。

もっともただ濁っているのではない。^{あぶら}膏^ぎぎっ

て、重た^げ気に濁っている。よく聞くと腐って見えるのも不思議はない、一週間に一度しか水を^か易えないのだそうだ。その隣りは普通一般の湯の^{よし}由

だがこれまたもって透明、^{えいてつ}瑩^徹などとは誓っ

て申されない。^{てんすいおけ}天水^か桶^まを攪き混ぜたくらいの価値はその色の上において充分あらわれている。

これからが化物の記述だ。^{だいぶ}大分^{ぶん}骨が折れる。

天水桶の方に、突っ立っている^{わかぞう}若造^{わかし}が二人いる。立ったまま、向い合って湯をざぶざぶ腹の上

へかけている。いい^{なぐさ}慰^{なぐさ}みだ。双方共色の黒い

点において^{かんぜん}間然^{かんぜん}するところなきまでに発達

している。この化物は^{だいぶ}大分^{ぶん}遅ましいなと見てい

ると、やがて一人が手拭で胸のあたりを^な撫^なで廻し

ながら「金さん、どうも、ここが痛んでいけねえ
が何だろう」と聞くと金さんは「そりゃ胃さ、胃
て云う奴は命をとるからね。用心しねえとあぶな
いよ」と熱心に忠告を加える。「だってこの左の

方だぜ」た^{さはい}左肺の方を指す。「そこが胃だあな。
左が胃で、右が肺だよ」「そうかな、おらあまた

胃はここいらかと思った」と今度は腰の辺を^{たた}叩
いて見せると、金さんは「そりゃ^{せんき}疝気だあね」
と云った。ところへ二十五六の薄い^{ひげ}髯^はを生やし
た男がどぶんと飛び込んだ。すると、からだに付

いていた^{シャボン}石鹼^{あか}が垢と共に浮きあがる。
かなけ^す鉄気のある水を透かして見た時のようにきら
きらと光る。その隣りに頭の^は禿げた爺さんが五分
刈を^{とら}捕えて何か弁じている。双方共頭だけ浮か

しているのみだ。「いやこう年をとっては駄目さ
ね。人間もやきが廻っちゃ若い者には^{かな}叶^なわない
よ。しかし湯だけは今でも熱いのでないと心持が
悪くてね」「旦那なんか丈夫なものですぜ。その
くらい元気がありゃ結構だ」「元気もないのさ。
ただ病気をしないだけさ。人間は悪い事さえしな
けりゃあ百二十までは生きるもんだからね」「へ
え、そんなに生きるもんですか」「生きるとも百
二十までは受け合う。^{ごいっしんまえ}御 維 新 前 牛込に
^{まがりぶち}曲 淵 ^{はたもと}と云う 旗 本 があって、そこにいた
下男は百三十だったよ」「そいつは、よく生きた
もんですね」「ああ、あんまり生き過ぎてつい自
分の年を忘れてね。百までは覚えていましたがそ
れから忘れてしまいましたと云ってたよ。それで

わしの知っていたのが百三十の時だったが、それで死んだんじゃない。それからどうなったか分らない。事によるとまだ生きてるかも知れない」と

云いながら ^{ふね} 槽 ^{あが} から ^{ひげ} 上 ^は る。 ^髯 を生やしている男は ^{きらら} 雲 ^ま 母 のようなものを自分の廻りに ^ま 蒔き散らしながら ^{ひと} 独 ^{ひと} りでにやにや笑っていた。入れ代って飛び込んで来たのは普通一般の化物とは違

って ^{せなか} 背 ^{せなか} 中 に模様画をほり付けている。いわみじゅうたろう ^{だいとう} 大 ^{かざ} 刀 を振り ^{かざ} 翳 してうわばみ ^{たいじ} 退 ^{たいじ} 治 るところのようだが、惜しい事 ^ま 未 ^{しゅんこう} だ ^{しゅんこう} 竣 ^{しゅんこう} 功 の期に達せんので、鱗はどこにも見えない。従って重太郎先生いささか拍子抜けの気味に見える。飛び込みながら「^{べらぼう} 篋 ^ぬ 棒 に温るいや」と云った。するとまた一人続いて乗り込

んだのが「こりゃどうも……もう少し熱くなくっちゃあ」と顔をしかめながら熱いのを我慢する

けしき
気色とも見えたが、重太郎先生と顔を見合せて

「やあ親方」と ^{あいさつ} 挨拶をする。重太郎は「やあ」と云ったが、やがて「民さんはどうしたね」と聞く。「どうしたか、じゃんじゃんが好きだからね」

「じゃんじゃんばかりじゃねえ……」「そうかい、あの男も腹のよくねえ男だからね。——どう云うもんか人に好かれねえ、——どう云うものだか、——どうも人が信用しねえ。職人てえものは、あんなもんじゃねえが」「そうよ。民さんなんざあ

腰が低いんじゃねえ、^ず ^た 頭が高けえんだ。それだからどうも信用されねえんだね」「本当によ。あれ

^い
で一っぱし腕があるつもりだから、——つまり自

分の損だあな」「^{しろかねちょう}白銀町にも古い人が^な亡
くなってね、今じゃ^{おけや}桶屋の元さんと^{れんがや}煉瓦屋の
大将と親方ぐれえな者だあな。こちとらあこうし
てここで生れたもんだが、民さんなんざあ、どこ
から来たんだか分りゃしねえ」「そうよ。しかし
よくあれだけになったよ」「うん。どう云うもん
か人に好かれねえ。人が^{つきあ}交際わねえからね」と
徹頭徹尾民さんを攻撃する。

天水桶はこのくらいにして、白い湯の方を見る
とこれはまた非常な^{おおいり}大入で、湯の中に人が
^{はい}這入ってると云わんより人の中に湯が這入って
ると云う方が適當である。しかも彼等はすこぶる
^{ゆうゆうかんかん}悠々閑々たる物で、^{さつき}先刻から這入るも
のはあるが出る物は一人もない。こう這入った上

に、一週間もとめておいたら湯もよごれるはずだ

と感心してなおよく ^{おけ} 槽の中を見渡すと、左の隅

に ^お 押しつけられて苦沙弥先生が ^{まっか} 真赤になって

すくんでいる。^{かわい} 可哀そうに誰か路をあけて出してやればいいのになと思うのに誰も動きそうにも

しなければ、主人も出ようとする ^{けしき} 気色も見せない。ただじっとして赤くなっているばかりである。

これはご苦勞な事だ。なるべく二錢五厘の湯錢を活用しようと云う精神からして、かように赤くな

るのだろうが、早く上がらんと湯氣に ^{ゆけ} あがるがと

^{しゅうおも} 主 思 ^{たな} いの吾輩は窓の ^{たな} 棚から少なからず心配した。すると主人の一軒置いて隣りに浮いて

る男が八の字を寄せながら「これはちと ^き 利き過ぎ

るようだ、どうも ^{せなか} 背中の方から熱い奴がじりじ

わ
り湧いてくる」と暗に列席の化物に同情を求めた。

「なあにこれがちょうどいい加減です。薬湯はこ
のくらいでないと利ききません。わたしの国なぞで
はこの倍も熱い湯へ這入ります」と自慢らしく説
き立てるものがある。「一体この湯は何に利くん

でしょう」と手拭をたた 畳たた んで 凸でこ 凹ぼこ 頭あたま をか
くした男が一同に聞いて見る。「いろいろなもの
に利きますよ。何でもいいてえんだからね。

ごうぎ
豪ごうぎ 気ぎ だあね」と云ったのは瘠や せた 黄きゅうり 瓜り のよ
うな色と形とを兼ね得たる顔の所有者である。そ
んなに利く湯なら、もう少しは丈夫そうになれそ
うなものだ。「薬を入れ立てより、三日目か四日
目がちょうどいいようです。きょうなど 今きょう 日など 等ら は這入り
頃ですよ」と物知り顔に述べたのを見ると、ふく 膨

れ返った男である。これは多分^{あかぶと}垢^{あか}肥^{ぶと}りだろう。

「飲んでも利きましようか」とどこからか知らないが黄色い声を出す者がある。「冷えた^ひ後^{あと}など
は一杯飲んで寝ると、奇^{きたい}体に小便に起きないから、まあやって御覧なさい」と答えたのは、どの
顔から出た声か分らない。

ゆぶね^{ゆぶね}湯槽^{ゆぶね}の方はこれぐらいにして板間^{いたま}を見渡
すと、いるわいるわ絵にもならないアダムがずら

りと並んで^{おのおの}各^{おのおの}勝手次第な姿勢で、勝手次第
なところを洗っている。その中にもっとも驚ろく

べきのは仰^{あおむ}向けに寝て、高い明かり^あ取^{とり}を眺^{なが}

めているのと、腹^{はらば}這いになって、溝^{みぞ}の中を
のぞ

覗^{のぞ}き込んでいる両アダムである。これはよほど
ひま^{ひま}閑^{ひま}なアダムと見える。坊主が石壁を向いてしゃ

がんでいると 後^{うし}ろから、小坊主がしきりに肩を
たた^{さんすけ}叩^{さんすけ}いている。これは師弟の関係上 三 介 の代
理^{つと}を 務^{つと}めるのであろう。本当の三介もいる。
かぜ
風邪を引いたと見えて、このあついのにちゃんち
ゃんを着て、小^こ判^{はん}形^{なり}の 桶^{おけ} からざあと旦那の
肩へ湯をあびせる。右の足を見ると親指の股に
ごろ あかす はさ
呉^ご絹^{きう}の 垢^{あかす} 擦^{はさ}りを 挟^{はさ}んでいる。こちらの方では
こおけ
小^こ 桶^{おけ} を慾^こ張^{おけ}って三つ抱え込んだ男が、隣りの人
に シャボン
石^{しゃ} 鹼^{ぼん} を使え使えと云いながらしきりに長
談議をしている。何だろうと聞いて見るとこんな
事を言っていた。「鉄砲は外国から渡ったもんだ
ね。昔は斬り合いばかりさ。外国は卑怯だからね、
それであんなものが出来たんだ。どうも支那じゃ
ねえようだ、やっぱり外国のようだ。和^わ 唐^{とう} 内^{ない}

の時にゃ無かったね。和唐内はやはり清和源氏さ。

なんでも義経が^{えぞ}蝦夷から満洲へ渡った時に、蝦夷の男で^{がく}大變 学 のできる人がくっ付いて行っ
てえ話しだね。それでその義経のむすこが

^{たいみん}大 明 を攻めたんだが大明じゃ困るから、三代
將軍へ使をよこして三千人の兵隊を^か借してくれ
ろと云うと、^{さんだいさま}三 代 様 がそいつを留めておい
て帰さねえ。――何とか云ったっけ。――何でも
何とか云う使だ。――それでその使を二年とめて

おいてしまいに長崎で^{じょうろう}女 郎 を見せたんだが
ね。その女郎に出来た子が和唐内さ。それから国
へ帰って見ると大明は国賊に亡ぼされていた。

……」何を云うのかさっぱり分らない。その^{うし}後
ろに二十五六の陰気な顔をした男が、ぼんやりし

て股の所を白い湯でしきりにたでている。

はれもの

腫物 何かで苦しんでいると見える。その横に年の頃は十七八で君とか僕とか生意気な事を

べらべら ^{しゃべ}喋舌 ってるのはこの近所の書生だろ

う。そのまた次に妙な ^{せなか}背中 が見える。尻の中か

ら ^{かんちく}寒竹 を押し込んだように ^{せぼね}背骨 の節が
ありあり

歴々と出ている。そうしてその左右に十六むさしに似たる形が四個ずつ行儀よく並んでいる。

その十六むさしが赤く ^{ただ}爛れて ^{まわり}周囲に ^{うみ}膿 を
もっているのもある。こう順々に書いてくると、

書く事が多過ぎて到底吾輩の ^{てぎわ}手際 にはその
いっぱん

一 斑 さえ形容する事が出来ん。これは厄介な
事をやり始めた者だと少々 ^{へきえき}辟易 していると

入口の方に ^{あさぎもめん}浅黄木綿 の着物をきた七十ばか

りの坊主がぬっと^{あら}見^{うやうや}われた。坊主は^恭しくこれらの裸体の化物に一礼して「へい、どなた様も、毎日相変らずありがとうございます。今日は少々御寒うございますから、どうぞ^{ごゆっ}御^{はい}緩^{はい}くり――どうぞ白い湯へ出たり^{はい}這^{はい}入^{はい}ったりして、ゆるりと御あったまり下さい。――番頭さんや、どうか湯加減をよく見て上げてな」とよどみなく述べ立てた。番頭さんは「おーい」と答えた。和唐内は「^{あいきょう}愛^{しょうばい}嬌^{おおい}ものだね。あれでなくては^{しょうばい}商^{おおい}買^{おおい}は出来ないよ」と^{おおい}大^{おおい}に爺さんを激賞した。吾輩は突然この異な^い爺さんに逢ってちょっと驚ろいたからこっちの記述はそのままにして、しばらく爺さんを専門に観察する事にした。爺さんはやがて今^{あが}上^たり立ての四つばかりの男

の子を見て「坊ちゃん、こちらへおいで」と手を出す。小供は大福を踏み付けたような爺さんを見て大変だと思ったか、わーっと悲鳴を^あ揚げてなき出す。爺さんは少しく不本意の気味で「いや、御泣きか、なに？　爺さんが^{こわ}恐い？　いや、これはこれは」と感嘆した。仕方がないものだからたちまち^{きほう}機鋒を転じて、小供の親に向った。「や、これは源さん。今日は少し寒いな。ゆうべ、おうみや近江屋へ這入った泥棒は何と云う馬鹿な奴じやの。あの戸の^{くぐ}潜りの所を四角に切り破っての。そうしてお前の。何も取らずに^い行んだげな。おまわ御巡りさんか夜番でも見えたものであろう」とおおい^{びんしょう}大に泥棒の無謀を憫笑したがまた一人^つを捉らまえて「はいはい御寒う。あなた方は、

御若いから、あまりお感じにならんかの」と老人だけにただ一人寒がっている。

しばらくは爺さんの方へ気を取られて他の化物の事は全く忘れていたのみならず、苦しそうに
すくんでいた主人さえ記憶の^{うち}中から消え去った時突然流しと板の間で大きな声を出す
ものがある。見ると^{まぎ}紛れもなき苦沙弥先生である。主人の声の図抜けて大いなるのと、その濁って聴き苦しいのは今日に始まった事ではないが
場所が場所だけに吾輩は少からず驚ろいた。これ
は^{まさ}正しく熱湯の^{うち}中に長時間のあいだ我慢を
して^{つか}浸っておったため^{ぎゃくじょう}逆上したに相
違ないと^{とっさ}咄嗟の際に吾輩は鑑定をつけた。それ
も単に病気の^{せい}所為なら^{とが}咎むる事もないが、彼は

逆上しながらも充分本心を有しているに相違ない事は、何のためにこの法外の^{どうまごえ}胴間声を出したかを話せばすぐわかる。彼は取るにも足らぬなまいき^{おとなげ}生意氣書生を相手に大人気もない喧嘩を始めたのである。「もっと下がれ、おれの小桶に湯^{はい}が這入っていかん」と怒鳴るのは無論主人である。物は見ようでどうでもなるものだから、この怒号をただ逆上の結果とばかり判断する必要はない。

万人のうちに一人くらいは^{たかやまひこくろう}高山彦九郎が山賊を^{しっ}叱したようだくらいに解釈してくれるかも知れん。当人自身もそのつもりでやった芝居かも知らんが、相手が山賊をもって^{みずか}自^{きま}ららん以上は予期する結果は出て来ないに^{うし}極^{うし}っている。書生は後ろを振り返って「僕はもとか

らここにいたのです」とおとなしく答えた。これは尋常の答で、ただその地を去らぬ事を示しただけが主人の思い通りにならなかったので、その態度と云い言語と云い、山賊として^{ののし}罵り返すべきほどの事でもないのは、いかに逆上の気味の主人でも分っているはずだ。しかし主人の怒号は書生の席そのものが不平なのではない、^{さっき}先刻からこの兩人は少年に似合わず、いやに高慢^きちきな、利いた風の事ばかり^{なら}併べていたので、始終それを聞かされた主人は、全くこの点に立腹したものと見える。だから先方でおとなしい挨拶をしても黙って板の間へ上がりはせん。今度は「何だ馬鹿野郎、人の^{おけ}桶へ汚ない水をぴちゃぴちゃ^は跳ねかす奴があるか」と^{かつ}喝し去った。吾輩もこの小僧を

少々心憎く思っていたから、この時心中にはちょ

っと快哉かいさいを呼んだが、学校教員たる主人の言
動としてはおだや穩かならぬ事と思うた。元来主人

はあまり堅過ぎていかん。石炭のたきがら殻見たよ
うにかさかさしてしかもいやに硬い。むかしハン

ニバルがアルプス山をこ超える時に、路の真中に当
って大きな岩があって、どうしても軍隊が通行上
の不便邪魔をする。そこでハンニバルはこの大き

な岩へす醋をかけて火をた焚いて、柔かにしておいて、

それからのこぎり鋸でこの大岩をかまぼこ蒲鉾のよう

に切つてとどこお滞りなく通行をしたそうだ。主人

のごとくこんなききめ利目のある薬湯へう煮だるほど
はい

這入っても少しも機能のない男はやはり醋をか

けてひあぶ火炙りにするに限ると思う。しからずんば、

こんな書生が何百人出て来て、何十年かかったって主人の頑固は癒りっこない。この湯槽に浮いているもの、この流しにごろごろしているものは文明の人間に必要な服装を脱ぎ棄てる化物の団体であるから、無論常規常道をもって律する訳にはいかん。何をしたって構わない。肺の所に胃が陣取って、和唐内が清和源氏になって、民さんが不信用でもよかろう。しかし一たび流しを出て板の間に上がれば、もう化物ではない。普通の人類の生息する娑婆へ出たのだ、文明に必要な着物をきるのだ。従って人間らしい行動をとらなければならんはずである。今主人が踏んでいるところは敷居である。流しと板の間の境にある敷居の上であって、当人はこれから

かんげんゆしょく えんてんかつだつ
歎言愉色、円転滑脱の世界に逆

戻りをしようと云う間^{まぎわ}際である。その間際です

らかくのごとく頑^{がんこ}固であるなら、この頑固は本

人にとって牢^{ろう}として抜くべからざる病気に相

違ない。病気なら容易に矯^{きょう}正^{せい}する事は出来

まい。この病気を癒^{なお}す方法は愚考によるとただ

一つある。校長に依頼して免職して貰^{すなわ}う事^即

ちこれなり。免職になれば融通^きの利かぬ主人の事

だからきつと路頭に迷うに極^{きま}ってる。路頭に迷

う結果はのたれ死にをしなければならぬ。換言

すると免職は主人にとって死の遠因になるので

ある。主人は好んで病気をして喜こんでいるけれ

ど、死ぬのは大^{だい}嫌^{きらい}である。死なない程度に

おいて病気と云う一種の贅^{ぜい}沢^{たく}がしたい

のである。それだからそんなに病氣をしていると
殺すぞと ^{おど} 嚇 かせば臆病なる主人の事だからび
りびりと ^{ふる} 悸 え上がるに相違ない。この悸え上が
る時に病氣は奇麗に落ちるだろうと思う。それで
も落ちなければそれまでの事さ。

いかに馬鹿でも病氣でも主人に变りはない。
いっぱん
一 飯 君恩を重んずと云う詩人もある事だから
猫だって主人の身の上を思わない事はあるま
い。気の毒だと云う念が胸一杯になったため、つ
いそちらに気が取られて、流しの方の觀察を ^{おこ} 怠
たっていると、突然白い ^{ゆぶね} 湯 槽 の方面に向って
ののし
口々に 罵 る声が聞える。ここにも喧嘩が起っ
たのかと振り向くと、狭い ^{ざくろぐち} 柵 榴 口 に ^{いっすん} 一寸
の余地もないくらいに化物が取りついて、毛のあ

る脛と、毛のない股と入り乱れて動いている。折
から ^{はつあき} 初 秋 の日は暮るるになんなんとして流
しの上は天井まで一面の湯気が立て ^こ 籠める。かの
化物の ^{ひしめ} 犇 ^{さま} く 様 がその間から ^{もうろう} 朦 朧 と見
える。熱い熱いと云う声が吾輩の耳を ^{つら} 貫 ぬいて
左右へ抜けるように頭の中で乱れ合う。その声には
黄なもの、青いもの、赤いもの、黒いものもある
が互に ^{かさ} 畳 なりかかって一種名状すべからざる
音響を浴場内に ^{みなぎ} 漲 らす。ただ混雑と迷乱とを
形容するに適した声と云うのみで、ほかには何の
役にも立たない声である。吾輩は ^{ぼうぜん} 茫 然 として
この光景に ^{みい} 魅入られたばかり立ちすくんでいた。
やがてわーわーと云う声が混乱の極度に達して、
これよりはもう一歩も進めぬと云う点まで張り

詰められた時、突然無茶苦茶に押し寄せ押し返している群の中から一大長漢がぬっと立ち上がった。彼の身の丈を見つめると、他の先生方よりはたしかに三寸くらいは高い。のみならず顔からひげが生えているのか髯の中に顔が同居しているのか分らない赤つらを返り返して、日盛りに破れ鐘をつくような声を出して「うめろうめろ、熱い熱い」と叫ぶ。この声とこの顔ばかりは、かふんぷんもつの紛々と纏れ合う群衆の上に高く傑出して、その瞬間には浴場全体がこの男一人になったと思わるるほどである。超人だ。ニーチェのいわゆる超人だ。魔中の大王だ。化物の頭梁だ。と思って見ていると湯槽の後ろでおいと答えたものがある。おやとまたもそちらにひとみ

をそらすと、^{あんたん}暗 懨 として物色も出来ぬ中に、
例のちゃんちゃん姿の^{さんすけ}三 介 が砕けよと
ひとかたま^{かまど}一塊 りの石炭を 竈 の中に投げ入れる
のが見えた。竈の^{ふた}蓋 をくぐって、この塊りがば
ちぱちと鳴るときに、三介の半面がぱっと明るく
なる。同時に三介の^{うし}後 ろにある^{れんが}煉 瓦 の壁が
やみ暗 を通して燃えるごとく光った。吾輩は少々
ものすご^{そうそう}物 凄 くなったから 早 々 窓から飛び下り
^{いえ}て 家 に帰る。帰りながらも考えた。羽織を脱ぎ、
猿股を脱ぎ、^{はかま}袴 を脱いで平等になろうと^{つと}力
める赤裸々の中には、また赤裸々の豪傑が出て来
て他の群小を圧倒してしまう。平等はいくらはだ
かになったって得られるものではない。

帰って見ると天下は太平なもので、主人は湯上

がりの顔をテラテラ光らして ^{ばんさん}晩餐 を食っている。吾輩が ^{えんがわ}椽側 から上がるのを見て、のんきな猫だなあ、今頃どこをあるいているんだろう

と云った。膳の上を見ると、^{ぜに}銭のない癖に二三 ^{おかず}品御菜 をならべている。そのうちに ^{さかな}肴の焼いたのが一 ^{ぴき}疋 ある。これは何と称する肴か知らんが、何でも ^{きのう}昨日あたり ^{おだいば}御台場近辺でやられたに相違ない。肴は丈夫なものだと説明しておいたが、いくら丈夫でもこう焼かれたり煮られたり

してはたまらん。多病にして ^{ざんぜん}残喘 を ^{たも}保つ方がよほど結構だ。こう考えて膳の ^{そば}傍 に坐って、^{すき}隙 があったら何か頂戴しようと、見るごとく見ざるごとく ^{よそお}装 っていた。こんな装い方を知らないものはとうていうまい肴は食えないと

あきら
諦めなければいけない。主人は肴をちょっと
突つuitしたが、うまくないと云う顔付をして^{はし}箸
を置いた。正面に^{ひか}控へたる妻君はこれまた無言
のまま箸の^{じょうげ}上^{じょうげ}下^{じょうげ}に運動する様子、主人の
りょうがく^{りごうかいこう}両顎の離合開闔の具合を熱心に研
究している。

「おい、その猫の頭をちょっと^ぶ撲って見ろ」と主
人は突然細君に請求した。

「撲てば、どうするんですか」

「どうしてもいいからちょっと撲って見ろ」

こうですかと細君は^{ひらて}平手で吾輩の頭をちょ
と^{たた}敲く。痛くも何ともない。

「鳴かんじゃないか」

「ええ」

「もう一^{ぺん}返^ん やって見ろ」

「何返やったって同じ事じゃありませんか」と細君また平手でぽかと^{まい}参^{まゐ}る。やはり何ともないから、じっとしていた。しかしその何のためたるやは智慮深き吾輩には^{とん}頓^{とん}と了解し難い。これが了解出来れば、どうかこうか方法もあろうがただ撲って見ろだから、撲つ細君も困るし、撲たれる吾輩も困る。主人は二度まで思い通りにならるので、少々焦れ^じ気味^{ぎみ}で「おい、ちょっと鳴くようにぶって見ろ」と云った。

細君は面倒な顔付で「鳴かして何になさるんですか」と問いながら、またびしゃりとおいでになった。こう先方の目的がわかれば訳はない、鳴いてさえやれば主人を満足させる事は出来るのだ。

主人はかくのごとく愚物だから厭になる。鳴
かせるためなら、ためと早く云えば二返も三返も

てすう
余計な手数^{てすう}はしなくてもすむし、吾輩も一度で
放免になる事を二度も三度も繰り返えされる必

要はないのだ。ただ打^ぶって見ろと云う命令は、打
つ事それ自身を目的とする場合のほかに用うべ
きものでない。打つのは向うの事、鳴くのはこっ
ちの事だ。鳴く事を始めから予期して懸って、た
だ打つと云う命令のうちに、こっちの随意たるべ
き鳴く事さえ含まってるように考えるのは失敬
千万だ。他人の人格を重んぜんと云うものだ。猫

だかつ
を馬鹿にしている。主人の蛇蝎^{だかつ}のごとく嫌う金
田君ならやりそうな事だが、赤裸々をもって誇る
主人としてはすこぶる卑劣である。しかし実のと

ころ主人はこれほどけちな男ではないのである。

だから主人のこの命令は ^{こうかつ} 狡猾 ^{きよく} の ^い 極 ^い に出

でたのではない。つまり ^{ちえ} 智慧の足りないところか

わ ^{ぼう} 湧いた ^{ふら} 子 ^{しい} 子 ^{しい} のようなものと思惟する。飯を

食えば腹が張るに ^き 極まっている。切れば血が出る
に極っている。殺せば死ぬに極まっている。それ

だから ^ぶ 打てば鳴くに極っていると速断をやった
んだらう。しかしそれはお気の毒だが少し論理に
合わない。その格で行くと川へ落ちれば必ず死ぬ

事になる。 ^{てんぷら} 天麩羅 ^{げり} を食えば必ず下痢する事にな
る。月給をもらえば必ず出勤する事になる。書物
を読めば必ずえらくなる事になる。必ずそうなっ
ては少し困る人が出来てくる。打てば必ずなかな
ければならんとなると吾輩は迷惑である。目白の

時の鐘と同一に^{みな}見倣されては猫と生れた^{かい}甲斐がない。まず腹の中でこれだけ主人を^{へこ}凹ましておいて、しかる後にゃーと注文通り鳴いてやった。

すると主人は細君に向って「今鳴いた、にゃあ」と云う声は感投詞か、副詞か何だか知ってるか」と聞いた。

細君はあまり突然な問なので、何にも云わない。実を云うと吾輩もこれは洗湯の逆上がまださめないためだろうと思ったくらいだ。元来この主人は^{きんじょ}近所合壁^{がっぺき}有名な変人で現にある人はたしかに神経病だとまで断言したくらいである。ところが主人の自信はえらいもので、おれが神経病じゃない、世の中の奴が神経病だと^{がんば}頑張って

いる。近辺のものが主人を犬々と呼ぶと、主人は公平を維持するため必要だとか号して彼等をぶたぶた豚々と呼ぶ。実際主人はどこまでも公平を維持するつもりらしい。困ったものだ。こう云う男だからこんな奇問を細君に^{むか}対^て呈出するの^{あさめしまえ}も、主人に取っては朝食前の小事件かも知れないが、聞く方から云わせるとちょっと神経病に近い人の云いそうな事だ。だから細君は^{けむ}煙に^ま捲かれた気味で何とも云わない。吾輩は無論何とも答えようがない。すると主人はたちまち大きな声で

「おい」と呼びかけた。

細君は^{びっくり}吃驚して「はい」と答えた。

「そのはいは感投詞か副詞か、どっちだ」

「どっちですか、そんな馬鹿気た事はどうでもいいじゃありませんか」

「いいものか、これが現に国語家の頭脳を支配している大問題だ」

「あらまあ、猫の鳴き声ですか、いやな事ねえ。だって、猫の鳴き声は日本語じゃあないじゃありませんか」

「それだからさ。それがむずかしい問題なんだよ。比較研究と云うんだ」

「そう」と細君は利口だから、こんな馬鹿な問題には関係しない。「それで、どっちだか分ったんですか」

「重要な問題だからそう急には分らんさ」と例の
さかな
肴 をむしゃむしゃ食う。ついでにその隣にあ

る豚と^{いも}芋のにころばしを食う。「これは豚だな」

「ええ豚でござんす」「ふん」と^{だいけいべつ}大軽蔑の調子をもって飲み込んだ。「酒をもう一杯飲もう」

と^{さかずき}杯を出す。

「今夜はなかなかあがるのね。もう^{だいぶ}大分赤くな
っていらっしやいますよ」

「飲むとも――御前世界で一番長い字を知って
るか」

「ええ、^{さき}前の関白太政大臣でしょう」

「それは名前だ。長い字を知ってるか」

「字って横文字ですか」

「うん」

「知らないわ、――御酒はもういいでしょう、こ
れで御飯になさいな、ねえ」

「いや、まだ飲む。一番長い字を教えてやろうか」

「ええ。そうしたら御飯ですよ」

「Archaiomelesidonophrunicherata と云う字だ」

でたらめ
「出鱈目でしょう」

「出鱈目なものか、ギリシャ^{ギリシャ}語だ」

「何という字なの、日本語にすれば」

「意味はしらん。ただ綴^{つづ}りだけ知ってるんだ。
長く書くと六寸三分くらいにかける」

他人なら酒の上で云うべき事を、正気で云って
いるところがすこぶる奇観である。もっとも今夜
に限って酒を^{むやみ}無暗にのむ。平生なら^{ちょこ}猪口に二
杯ときめているのを、もう四杯飲んだ。二杯でも

随分赤くなるところを倍飲んだのだから顔が
やけひばし
焼 火 箸 のようにほてって、さも苦しそうだ。
それでもまだやめない。「もう一杯」と出す。細
君はあまりの事に

「もう御よしになったら、いいでしょう。苦しい
ばかりですわ」と ^{にがにが} 苦 々 しい顔をする。

「なに苦しくってもこれから少し稽古するんだ。
おおまちけいげつ
大 町 桂 月 が飲めと云った」

「桂月って何です」さすがの桂月も細君に逢って
^{いちもん}
は 一 文 の価値もない。

「桂月は現今一流の批評家だ。それが飲めと云う
のだからいいに ^{きま} 極 っているさ」

「馬鹿をおっしゃい。桂月だって、梅月だって、
苦しい思をして酒を飲めなんて、余計な事です

わ」

「酒ばかりじゃない。交際をして、道楽をして、旅行をしろといった」

「なおわるいじゃありませんか。そんな人が第一流の批評家なの。まああきれた。妻子のあるものに道楽をすすめるなんて……」

「道楽もいいさ。桂月が勧めなくっても金さえあればやるかも知れない」

「なくって仕合せだわ。今から道楽なんぞ始められちゃあ大変ですよ」

「大変だと云うならよしてやるから、その代りも
う少し おっと 夫 を大事にして、そうして晩に、もっと御馳走を食わせろ」

「これが精一杯のところですよ」

「そうかしらん。それじゃ道楽は追って金が這入^{はい}り次第やる事にして、今夜はこれでやめよう」と飯茶碗を出す。何でも茶漬を三ぜん食ったようだ。

吾輩はその夜豚肉^よ三^み片^{きれ}と塩焼の頭を頂戴した。

八

かきめぐ^い垣^い巡りと云う運動を説明した時に、主人の庭を結い^ゆめぐ^{めぐ}繞らしてある竹垣の事をちょっと述べたつもりであるが、この竹垣の外がすぐ隣家、

即ち^{みな}南^{みどなり}隣^{じろ}の次郎ちゃんと思つては誤解である。家賃は安いがそこは^くしゃみ^み苦沙弥先生である。^よ与^よっちゃんや次郎ちゃんなどと号する、いわゆるちゃん付きの連中と、薄っ^ぺら^ら片^らな垣一重を隔てて御隣り同志の親密なる交際は結んでおら

ぬ。この垣の外は五六間の^{あきち}空地であって、その
尽くるところに^{ひのき}檜が^{こんもり}蓊然と五六本^{なら}併
んでいる。^{えんがわ}椽側から拝見すると、向うは茂つ
た森で、ここに往む先生は野中の一軒家に、無名
の猫を友にして^{じつげつ}日月を送る^{こうこ}江湖の^{しよし}処士
であるかのごとき感がある。^{ただ}但し檜の枝は
^{ふいちよう}吹聴するごとく密生しておらんので、その
^{あいだ}間から^{ぐんかくかん}群鶴館という、名前だけ立派な
安下宿の安屋根が遠慮なく見えるから、しかく先
生を想像するのにはよほど骨の折れるのは無論
である。しかしこの下宿が群鶴館なら先生の^{きよ}居
はたしかに^{がりようくつ}臥竜窟くらいな価値はある。名
前に税はかからんから御互にえらそうな奴を勝
手次第に付ける事として、この幅五六間の空地が

竹垣を添うて東西に走る事約十間、それから、たちまち^{かぎ}鉤の手に屈曲して、臥竜窟の北面を取り囲んでいる。この北面が騒動の種である。本来なら空地を行き尽してまたあき地、とか何とか威張ってもいいくらいに家の^{ふたがわ}二側を包んでいるのだが、^{がりょうくつ}臥竜窟の主人は無論窟内の^{れいびょう}霊猫たる吾輩すらこのあき地には手こずっている。南側に^{ひのき}檜が幅^きを利かしているごとく、北側には^{きり}桐の木が七八本行列している。もう周囲一尺くらいにのびているから下駄屋さえ連れてくればいい^ね価になるんだが、^{しゃくや}借家の悲しさには、いくら気が付いても実行は出来ん。主人に対しても気の毒である。せんだって学校の小使が来て枝を一本切って行ったが、そのつぎに来

まないたげた は
た時は新らしい桐の 俎 下 駄 を穿いて、この
間の枝でこしらえましたと、聞きもせんのに
ふいちょう
吹 聴 していた。ずるい奴だ。桐はあるが吾
輩及び主人家族にとっては一文にもならない桐

いだ
である。玉を 抱 いて罪ありと云う古語があるそ
うだが、これは桐を^は生やして^{ぜに} 銭 なしと云っても
しかるべきもので、いわゆる宝の持ち^{ぐさ} 腐 れであ
る。愚^ぐなるものは主人にあらず、吾輩にあらず、
やぬし
家 主 の伝兵衛である。いないかな、いないかな、
下駄屋はいないかなと桐の方で催促しているの

かお やちん
に知らん 面 をして 屋 賃 ばかり取り立てにく
る。吾輩は別に伝兵衛に^{うらみ} 恨 もないから彼の
あっこう
悪 口 をこのくらいにして、本題に戻ってこの
あきち ちんだん
空 地 が騒動の種であると云う 珍 譚 を紹介

つかまつ

仕 　るが、決して主人にいつてはいけない。

これぎりの話しである。そもそもの空地に關して第一の不都合なる事は垣根のない事である。吹き払い、吹き通し、抜け裏、通行御免天下晴れての空地である。あると云うと嘘をつくようでよろしくない。實を云うとあつたのである。しかし話

さかのぼ

しは過去へ 　溯 　らんと源因が分からない。源因が分からないと、医者でも 　^{しょうほう} 処 　方 　に迷惑する。

だからここへ引き越して来た當時からゆっくりと話し始める。吹き通しも夏はせいせいして心持ちがいいものだ、不用心だって金のないところに盜難のあるはずはない。だから主人の家に、あら

^{へい} 　　^{ないし} 　　^{らんぐい} 　　^{さかもぎ}
ゆる 　堀 　、垣、乃至は 乱 　杭 　、逆茂木の類は全く不要である。しかしながらこれは空地の向

すまい
うに 住 居 する人間もしくは動物の種類 いかん
によって決せらるる問題であろうと思う。従って
この問題を決するためには勢い向う側に陣取っ
ている君子の性質を明かにせんければならん。人
間だか動物だか分らない先に君子と称するのは
はなはだ早計のようではあるが大抵君子で間違
はない。 りょうじょう
梁 上 の君子などと云って泥棒さ
え君子と云う世の中である。 ただ
但 しこの場合にお
ける君子は決して警察の厄介になるような君子
ではない。警察の厄介にならない代りに、数でこ
なした者と見えて沢山いる。うじゃうじゃいる。

らくうんかん
落 雲 館 と称する私立の中学校――八百の
君子をいやが上に君子に養成するために毎月二
円の月謝を徴集する学校である。名前が落雲館だ

から風流な君子ばかりかと思うと、それがそもそもの間違になる。その信用すべからざる事はぐんかくかん
群 鶴 館 に鶴の下りざるごとく、臥竜窟に猫がいるようなものである。学士とか教師とか号するものに主人苦沙弥君のごとき気違のある事を知った以上は落雲館の君子が風流漢ばかりでないと云う事がわかる ^{わけ} 訳 だ。それがわからんと主張するならまず三日ばかり主人のうちへ ^{とま} 宿 りに来て見るがいい。

^{ぜん} 前 申すごとく、ここへ引き越しの当時は、例 ^{あきち} の空地に垣がないので、落雲館の君子は車屋の黒のごとく、のそのそと ^{きりばたけ} 桐 畠 ^{はい} に這入り込んで、話をする、弁当を食う、^{ささ} 笹 ^{ねころ} の上に寝転ぶ――いろいろの事をやったものだ。それから

弁当の死骸^{すなわ} 即ち竹の皮、古新聞、あるいは
ふるぞうり
古草履、古下駄、ふると云う名のつくものを
大概ここへ棄てたようだ。無頓着なる主人は存外

平気に構えて、別段抗議も申し込まずに打ち過ぎ
たのは、知らなかったのか、知っても^{とが}咎めんつ
もりであったのか分らない。ところが彼等諸君子
は学校で教育を受くるに従って、だんだん君子ら
しくなったものと見えて、次第に北側から南側の

方面へ向けて^{さんしょく} 蚕食を企だてて来た。蚕食と
云う語が君子に不似合ならやめてもよろしい。

ただ
但しほかに言葉がないのである。彼等は
すいそう
水草を追うて居を変ずる^{さばく} 沙漠の住民のご
とく、^{きり} 桐の木を去って^{ひのき} 檜の方に進んで来た。
檜のある所は座敷の正面である。よほど大胆なる

君子でなければこれほどの行動は取れんはずである。一両日の^{のち}後 彼等の大胆はさらに一層の大^{だいたい}胆 となった。教育の結果ほど^{せい}恐しいものはない。彼等は単に座敷の正面に^{せま}逼るのみならず、この正面において歌をうたいだした。何と云う歌か忘れてしまったが、決して^{みそ}ひともじ ^{たぐい}三十一文字の 類 ではない、もっと ^{かっぱ}活 潑^つで、もっと ^{ぞくじ}俗 耳^{やす}に入り 易い歌であった。驚ろいたのは主人ばかりではない、吾輩までも彼等君子の才芸に ^{たんぷく}嘆 服 して覚えず耳を傾けたくらいである。しかし読者もご案内であろうが、嘆服と云う事と邪魔と云う事は時として両立する場合がある。この両者がこの際 ^{はか}図 らずも合して一となったのは、今から考えて見ても返す返す残念

である。主人も残念であったろうが、やむを得ず
書齋から飛び出して行って、ここは君等の^{はい}這入る
所ではない、出給えと云って、二三度追い出した
ようだ。ところが教育のある君子の事だから、こ
んな事でおとなしく聞く訳がない。追い出されれ
ばすぐ這入る。這入れば活潑なる歌をうたう。

こうせい

高 声 に談話をする。しかも君子の談話だから
いっふう

一 風 違って、おめえだの知らねえのと云う。

そんな言葉は ^{ごいっしんまえ} 御 維 新 前 は ^{おりすけ} 折 助 と
^{くもすけ} くもすけ ^{さんすけ} さんすけ

雲 助 と 三 助 の専門的知識に属していた
そうだが、二十世紀になってから教育ある君子の

学ぶ唯一の言語であるそうだ。一般から ^{けいべつ} 軽 蔑

せられたる運動が、かくのごとく ^{こんにち} 今 日 歓迎せ
らるるようになったのと同じの現象だと説明し

た人がある。主人はまた書齋から飛び出してこの
君子流の言葉にもっとも^{かんのう}堪能なる一人を
つら
捉まえて、なぜここへ這入るかと詰問したら、
君子はたちまち「おめえ、知らねえ」の上品な言
葉を忘れて「ここは学校の植物園かと思いまし
た」とすこぶる下品な言葉で答えた。主人は将来
いまし
を戒めて放してやった。放してやるのは亀の
子のおかしいが、実際彼は君子の^{そで}袖を
とら
捉えて談判したのである。このくらいやかまし
く云ったらもうよかろうと主人は思っていたそ
うだ。ところが実際は^{じょかし}女^めの時代から予期と
違うもので、主人はまた失敗した。今度は北側か
ら邸内を横断して表門から抜ける、表門をがらり
とあけるから御客かと思うと桐畠の方で笑う声

がする。形勢はますます不穩である。教育の功果
はいよいよ顯著になってくる。気の毒な主人はこ
いつは手に合わんと、それから書齋へ立て籠^{こも}っ
て、^{うやうや}恭しく一書を落雲館校長に奉って、少々
御取締をと哀願した。校長も^{ていちょう}鄭重なる返書
を主人に送って、垣をするから待ってくれと云っ
た。しばらくすると二三人の職人が来て半日ばか
りの間に主人の屋敷と、落雲館の境に、高さ三尺
ばかりの四つ目垣が出来上がった。これでようよ
う安心だと主人は喜こんだ。主人は愚物である。
このくらいの事で君子の挙動の変化する訳がな
い。

全体人にからかうのは面白いものである。吾輩
のような猫ですら、時々は当家の令嬢にからかつ

て遊ぶくらいだから、落雲館の君子が、気の利^きかない苦沙弥先生にからかうのは至^し極^{ごく}もつともなところで、これに不平なのは恐らく、からかわれる当人だけであろう。からかうと云う心理を解剖して見ると二つの要素がある。第一からかわれる当人が平気ですましてはならん。第二からかう者が勢力において人数において相手より強くなくてはいかん。この間主人が動物園から帰って来てしきりに感心して話した事がある。聞いて見ると駱^{らく}駝^だと小犬の喧嘩を見たのだそうだ。小犬が駱駝の周囲を疾風のごとく廻^ほ転して吠え立てると、駱駝は何の気もつかずに、依然としてせなかこぶ背^{せなか}中^{こぶ}へ瘤^{こぶ}をこしらえて突っ立ったままであるそうだ。いくら吠えても狂っても相手にせんの

で、しまいには犬も^{あいそ}愛想をつかしてやめる、実に駱駝は無神経だと笑っていたが、それがこの場合の適例である。いくらからかうものが上手でも相手が駱駝と来ては成立しない。さればと云ってしし^{とら}獅子や虎のように先方が強過ぎても者にならん。からかいかけるや否や八つ裂きにされてしまう。からかうと齒をむき出して^{おこ}怒る、怒る事は怒るが、こっちをどうする事も出来ないと言う安心のある時に愉快は非常に多いものである。なぜこんな事が面白いと云うとその理由はいろいろある。まずひまつぶしに適している。退屈な時に^{ひげ}は髯の数さえ勘定して見たくなる者だ。^{むか}昔し獄に投ぜられた囚人の一人は^{ぶりょう}無聊のあまり、^{へや}房の壁に三角形を重ねて^か画いてその日をくら

したと云う話がある。世の中に退屈ほど我慢の出来にくいものはない、何か活気を刺激する事件がないと生きているのがつらいものだ。からかうと云うのもつまりこの刺激を作って遊ぶ一種の娯楽である。^{ただ}但し多少先方を怒らせるか、じらせるか、弱らせるかしなくては刺激にならんから、昔しからからかうと云う娯楽に^{ふけ}耽るものは人の氣を知らない馬鹿大名のような退屈の多い者、もしくは自分のなぐさみ以外は考うるに^{いとま}暇なきほど頭の発達が幼稚で、しかも活気の使い道に窮する少年かに限っている。次には自己の優勢な事を実地に証明するものにはもっとも簡便な方法である。人を殺したり、人を^{きずつ}傷けたり、または人を^{おとしい}陥れたりしても自己の優勢な

事は証明出来る訳であるが、これらはむしろ殺したり、傷けたり、陥れたりするのが目的のときによるべき手段で、自己の優勢なる事はこの手段をすいこう のち
遂行した後に必然の結果として起る現象に過ぎん。だから一方には自分の勢力が示したくって、しかもそんなに人に害を与えたくないと云う場合には、からかうのが一番 ^{おかっこう}御恰好である。多少人を傷けなければ自己のえらい事は事実の上に証拠だてられない。事実になって出て来ないと、頭のうちで安心していても存外快樂のうすいものである。人間は自己を ^{たの}恃むものである。否、恃み難い場合でも恃みたいものである。それだから自己はこれだけ恃める者だ、これなら安心だと云う事を、人に対して実地に応用して見ないと気

がすまない。しかも ^{りくつ}理窟 のわからない俗物や、
あまり自己が恃みになりそうもなくて落ちつき
のない者は、あらゆる機会を利用して、この証券
を握ろうとする。柔術使が時々人を投げて見たく
なるのと同じ事である。柔術の怪しいものは、ど
うか自分より弱い奴に、ただの一 ^{ぺん}返 でいいから
出逢って見たい、 ^{しろ}素 ^{うと}人 ^なでも構わないから抛げ
て見たいと至極危険な了見を ^{いだ}抱 いて町内をあ
るくのもこれがためである。その他にも理由はい
ろいろあるが、あまり長くなるから略する事に致
す。聞きたければ ^{かつぶし}鰹 ^{ひとおり}節 の一 折 も持って習
いにくるがいい、いつでも教えてやる。以上に説
くところを参考して推論して見ると、吾輩の
かんがえ ^{おくやま} ^{さる}考 では 奥 山 の 猿 と、学校の教師がか

らかうには一番手頃である。学校の教師をもって、
奥山の猿に比較しては ^{もったい} 勿体ない。――猿に対
して勿体ないのではない、教師に対して勿体ない
のである。しかしよく似ているから仕方がない、
御承知の通り奥山の猿は ^{くさり} 鎖 で ^{つな} 繋がれてい
る。いくら齒をむき出しても、きゃっきゃっ騒い
でも引き搔かれる ^か 氣 ^{きづかい} 遣はない。教師は鎖で繋
がれておらない代りに月給で縛られている。いく
らからかったって大丈夫、辞職して生徒をぶんな
ぐる事はない。辞職をする勇氣のあるようなもの
なら最初から教師などをして生徒の ^{おも} 御守りは勤
めないはずである。主人は教師である。落雲館の
教師ではないが、やはり教師に相違ない。からか
うには ^{しごく} 至極 適當で、至極 ^{あんちよく} 安直 で、至極無

事な男である。落雲館の生徒は少年である。から
かう事は自己の鼻を高くする^{ゆえん}所以で、教育の功
果として至当に要求してしかるべき権利とまで
心得ている。のみならずからかいでもしなければ、
活気に^み充ちた五体と頭脳を、いかに使用してしか
るべきか^{じっぶん}十分の休暇中^も持てあまして困って
いる連中である。これらの条件が備われば主人は
おのず
自 からからかわれ、生徒は自からからかう、
誰から云わしても^{ごう}毫 も無理のないところであ
る。それを^{おこ}怒る主人は^{やぼ}野暮の極、間拔の骨頂で
しょう。これから落雲館の生徒がいかに主人にか
らかったか、これに対して主人がいかに野暮を極
めたかを逐一かいてご覧に入れる。

諸君は四つ目垣とはいかなる者であるか御承

知であろう。風通しのいい、簡便な垣である。吾輩などは目の間から自由自在に往来する事が出来る。こしらえたって、こしらえなくたって同じ事だ。然し落雲館の校長は猫のために四つ目垣を作ったのではない、自分が養成する君子が^{くぐ}潜られんために、わざわざ職人を入れて^{ゆ めぐ}結い繞らせたのである。なるほどいくら風通しがよく出来ていても、人間には^{くぐ}潜れそうにない。この竹をもって組み合せたる四寸角の穴をぬける事は、^{しんこく}清 国 の奇術師 ^{ちょうせいそん}張 世 尊 その人といえどもむずかしい。だから人間に対しては充分垣の機能をつくしているに相違ない。主人がその出来上ったのを見て、これならよかろうと喜んだのも無理はない。しかし主人の論理には ^{おお}大 なる穴

がある。この垣よりも大いなる穴がある。

どんしゅう
呑 舟 の魚をも洩らすべき大穴がある。彼は

垣は^こ踰ゆべきものにあらざとの仮定から出立している。いやしくも学校の生徒たる以上はいかに

粗末の垣でも、垣と云う名がついて、分界線の区域さえ判然すれば決して乱入される気遣はない

と仮定したのである。次に彼はその仮定をしばらく

く打ち^{くず}崩して、よし乱入する者があっても大丈夫

と論断したのである。四つ目垣の穴を^{くぐ}潜り得る事は、いかなる小僧といえどもとうてい出来る

気遣はないから乱入の^{おそれ}虞は決してないと
そくてい

速定してしまったのである。なるほど彼等が猫でない限りはこの四角の目をぬけてくる事は

しまい、したくても出来まいが、乗り^こ踰える事、

飛び越える事は何の事もない。かえって運動になって面白いくらいである。

垣の出来た翌日から、垣の出来ぬ前と同様に彼等は北側の空地へばかりばかりと飛び込む。ただし座敷の正面までは深入りをしない。もし追い懸けられたら逃げるのに、少々ひまがいるから、あらかじ
予め逃げる時間を勘定に入れて、捕えら
るる危険のない所で遊ゆうよく弋ぎをしている。彼等が何をしているか東の離れにいる主人には無論目
い
に入らない。北側の空あきち地に彼等が遊弋している状態は、木戸をあけて反対の方角から鉤かぎの手に曲って見るか、または後こうか架の窓から垣根越しになが
眺めるよりほかに仕方がない。窓から眺める時はどこに何がいるか、一いちもく目明瞭に見渡す事が

出来るが、よしや敵を ^{いくたり} 幾人 見出したからと云
って捕える訳には行かぬ。ただ窓の ^{こうし} 格子の中か
ら叱りつけるばかりである。もし木戸から ^{うかい} 迂回
して敵地を突こうとすれば、足音を聞きつけて、

ばかりばかりと ^{つら} 捉まる前に向う側へ下りてし
まう。 ^{おっとせい} 膂 脇 臍 がひなたぼっこをしているところ
へ密猟船が向ったような者だ。主人は無論後架
で張り番をしている訳ではない。と云って木戸を
開いて、音がしたら直ぐ飛び出す用意もない。も
しそんな事をやる日には教師を辞職して、その方
専門にならなければ追いつかない。主人方の不利
を云うと書斎からは敵の声だけ聞えて姿が見え
ないのと、窓からは姿が見えるだけで手が出せない
事である。この不利を看破したる敵はこんな軍

略を講じた。主人が書齋に立て ^{こも}籠 っていると探偵した時には、なるべく大きな声を出してわあわあ云う。その中には主人をひやかすような事を聞こえよがしに述べる。しかもその声の出所を極めて不分明にする。ちょっと聞くと垣の内で騒いでいるのか、あるいは向う側であばれているのか判定しにくいようにする。もし主人が出懸けて来たら、逃げ出すか、または始めから向う側にいて知らん顔をする。また主人が後架へ——吾輩は最前からしきりに後架後架ときたない字を使用するのを別段の光栄とも思っておらん、実は迷惑千万であるが、この戦争を記述する上において必要であるからやむを得ない。—— ^{すなわ}即 ち主人が後架へまかり越したと見て取るときは、必ず桐の木の

はいかい
附近を徘徊してわざと主人の眼につくよう
にする。主人がもし後架から^{しりん}四隣に響く大音を
揚げて怒鳴りつければ敵は^{あわ}周章てる^{けしき}気色もな
^{ゆうぜん}く悠然と根拠地へ引きあげる。この軍略を用
いられると主人ははなはだ困却する。たしかに
はい
這入っているなと思ってステッキを持って出懸
けると^{せきぜん}寂然として誰もいない。いないかと思
って窓からのぞくと必ず一二人這入っている。主
人は裏へ廻って見たり、後架から^{のぞ}覗いて見たり、
後架から覗いて見たり、裏へ廻って見たり、何度
言っても同じ事だが、何度云っても同じ事を繰り
返している。^{ほんめい}奔命に疲れるとはこの事である。
教師が職業であるか、戦争が本務であるかちよっ
と分らないくらい^{ぎゃくじょう}逆上して来た。この逆

上の頂点に達した時に^{しも}下の事件が起ったのである。

事件は大概逆上から出る者だ。逆上とは読んで字のごとく逆かさに^さ上^{のぼ}るのである、この点に関してはゲーレンもパラセルサスも旧弊なる

へんじゃく^{とな}扁鵲も異議を唱^{とな}うる者は一人もない。た

だどこへ逆かさに^さ上^{のぼ}るかが問題である。また何が逆かさに上るかが議論のあるところである。古来歐洲人の伝説によると、吾人の体内には四種の

液が循環しておったそうだ。第一に怒^{どえき}液と云う

やつ^{おこ}奴がある。これが逆かさに上ると怒^{おこ}り出す。

第二に鈍^{どんえき}液と名づくるのがある。これが逆か

さに上ると神経が^{にぶ}鈍くなる。次には憂^{ゆうえき}液、

これは人間を陰気にする。最後が血^{けつえき}液、これ

しし　さか
は四肢を 壮 んにする。その後^ご人文が進むに従って鈍液、怒液、憂液はいつの間^まになくなって、現今に至っては血液だけが昔のように循環していると云う話しだ。だからもし逆上する者があらば血液よりほかにはあるまいと思われる。しかるにこの血液の分量は個人によってちゃんと極^きまっている。性分によって多少の増減はあるが、まず大抵一人前に付五升五合の割合である。だによって、この五升五合が逆かさに上ると、上ったところだけは 燂^{さか} んに活動するが、その他の局部は欠乏を感じて冷たくなる。ちょうど交番焼打の当時巡査がことごとく警察署へ集って、町内には一人もなくなったようなものだ。あれも医学上から診断をすると警察の逆上と云う者である。でこの

逆上を癒^いやすには血液を従前のごとく体内の各部へ平均に分配しなければならん。そうするには

逆かさに上った奴を下へ^{おろ}降^ささなくてはならん。

その方にはいろいろある。今は故人となられたが

主人の先君などは濡^ぬれ手^て拭^{ぬぐい}を頭にあてて

こたつ炬燵にあたっておられたそうだ。

ずかんそくねつ頭寒足熱は延命息災の徴と

しょうかんろん傷寒論にも出ている通り、濡れ手拭は長

寿法において一日も欠くべからざる者である。そ

れでなければ坊主の慣用する手段を試みるがよ

い。一^{いっしょ}所^{ふじゅう}不住^の

しゃもんうんすいあんぎゃのうそう沙門雲水行脚の衲僧は必ず樹

下石上を^{やど}宿とすとある。樹下石上とは難行苦行

のためではない。全くのぼせを^さ下げ^さるために

ろくそ　　つ
六 祖 が米を舂きながら考え出した秘法である。

試みに石の上に坐ってご覧、尻が冷えるのは当り
前だろう。尻が冷える、のぼせが下がる、これま

た自然の順序にして　　ごう　　さしはさ
毫　も疑を　挟　むべき
余地はない。かようにいろいろな方法を用いての

ぼせを下げる工夫は　　だいぶ　大　分　発明されたが、まだの
ぼせを引き起す良方が案出されないのは残念で
ある。一概に考えるとのぼせは損あって益なき現
象であるが、そうばかり速断してならん場合があ
る。職業によると逆上はよほど大切な者で、逆上

せんと何にも出来ない事がある。その　うち　でもっ
とも逆上を重んずるのは詩人である。詩人に逆上
が必要なる事は汽船に石炭が欠くべからざるよ
うな者で、この供給が一日でも途切れると彼れ等

は手を ^{こまぬ} 拱 いて飯を食うよりほかに何等の能
もない凡人になってしまう。もっとも逆上は気違

の ^{いみょう} 異 名 で、気違にならないと ^{かぎょう} 家 業 が立ち
行かんとあつては ^{せけんてい} 世 間 体 が悪いから、彼等の
仲間では逆上を呼ぶに逆上の名をもってしない。

申し合せてインスピレーション、インスピレーシ

ョンとさも ^{もったい} 勿 体 ^{とな} そうに 称 えている。これは
彼等が世間を ^{まんちゃく} 瞞 着 するために製造した名
でその実は正に逆上である。プレートーは彼等の
肩を持ってこの種の逆上を神聖なる狂気と号し
たが、いくら神聖でも狂気では人が相手にしない。

やはりインスピレーションと云う新発明の売薬
のような名を付けておく方が彼等のためによか

ろうと思う。しかし ^{かまぼこ} 蒲 鉾 の種が ^{やまいも} 山 芋 であ

るごとく、^{かんのん}観音の像が一寸八分の^{くちき}朽木であるごとく、^{かもなんばん}鴨南蛮の材料が烏であるごとく、下宿屋の^{ぎゅうなべ}牛鍋が馬肉であるごとくインスピレーションも実は逆上である。逆上であって見れば臨時の気違である。巢鴨へ入院せずに済むのは単に臨時気違であるからだ。ところがこの臨時の気違を製造する事が困難なのである。

いっしょうがい
一生涯の狂人はかえって出来安いが、筆^とを執って紙に向う^{あいだ}間だけ気違にするのは、いかに^{こうしゃ}巧者な神様でもよほど骨が折れると見えて、なかなか^{こしら}拵えて見せない。神が作ってくれん以上は自力で拵えなければならん。そこで昔から^{こんにち}今日まで逆上術もまた逆上とりのけ術と同じく^{おお}大に学者の頭脳を悩ました。ある

人はインスピレーションを得るために毎日渋柿
を十二個ずつ食った。これは渋柿を食べば便秘す
る、便秘すれば逆上は必ず起るという理論から来
たものだ。またある人はかん徳利を持って
てっぼうぶろ
鉄砲風呂へ飛び込んだ。湯の中で酒を飲んだ
ら逆上するに^{きま}極まっていると考えたのである。そ
の人の説によるとこれで成功しなければ
ぶどうしゅ
葡萄酒の湯をわかして^{はい}這入れれば一^{ぺん}返で功
能があると信じ切っている。しかし金がないので
ついに実行する事が出来なくて死んでしまった
のは気の毒である。最後に古人の真似をしたらい
ンスピレーションが起るだろうと思いついた者
がある。これはある人の態度動作を真似ると心的
状態もその人に似てくると云う学説を応用した

のである。酔っぱらいのように^{くだ}管^まを捲いている
と、いつの間^まにか酒飲みのような心持になる、坐
禅をして線香一本の間我慢しているとどことな
く坊主らしい気分になれる。だから昔からインス
ピレーションを受けた有名な大家の^{しょ}所^さ作^さを真
似れば必ず逆上するに相違ない。聞くところによ
ればユーゴーは^{ヨット}快走船の上へ^{ねころ}寝転んで文章の
趣向を考えたそうだから、船へ乗って青空を見つ
めていれば必ず逆上^{うけあい}受合である。スチーヴ
ン^{はらばい}ソンは腹這に寝て小説を書いたそうだから、
^{うぶ}打つ伏しになって筆を持てばきつと血が逆かさ
^{のぼ}に上ってくる。かようにいろいろな人がいろい
ろの事を考え出したが、まだ誰も成功しない。ま
ず^{こんにち}今日のところでは人為的逆上は不可能の

事となっている。残念だが致し方がない。早晚随意にインスピレーションを起し得る時機の到来するは^{うたがい}疑もない事で、吾輩は人文のためにこの時機の一日も早く来らん事を切望するのである。

逆上の説明はこのくらいで充分だろうと思うから、これよりいよいよ事件に取りかかる。しかしすべての大事件の前には必ず小事件が起るものだ。大事件のみを述べて、小事件を逸するのは古来から歴史家の常に^{おちい}陥^{へい}る^{とう}弊^は寶^{はう}である。主人の逆上も小事件に逢う度に一層の^{げきじん}劇^{げき}甚^{じん}を加えて、ついに大事件を引き起したのであるからして、幾分かその発達を順序立てて述べないと主人がいかに逆上しているか分りにくい。分りに

くいと主人の逆上は空名に帰して、世間からはよ
もやそれほどでもなかろうと見くびられるかも
知れない。せっかく逆上しても人から ^{あっぱれ}天 晴 な
逆上と ^{うた}謡 われなくては張り合がないだろう。こ
れから述べる事件は大小に ^{かかわ}係 らず主人に取
って名誉な者ではない。事件その物が不名誉であ
るならば、^せ責めて逆上なりとも、^{しょうめい}正 銘 の逆
上であって、決して人に劣るものでないと云う事
を明かにしておきたい。主人は他に対して別にこ
れと云って誇るに足る性質を有しておらん。逆上
でも自慢しなくてはほかに骨を折って書き立て
てやる種がない。

落雲館に群がる敵軍は近日に至って一種のダ
ムダム弾を発明して、^{じっぶん}十 分 の休暇、もしくは

放課後に至って ^{さかん} 熾 に ^{あきち} 北側の空地 に向って
砲火を浴びせかける。このダムダム弾は通称をボ
ールと ^{とな} 称 えて、^{すりこぎ} 搗粉木の大きな奴をもって任
意これを敵中に発射する仕掛である。いくらダム
ダムだって落雲館の運動場から発射するのだから、
書齋に立て ^{こも} 籠 ってる主人に ^{あた} 中 ^{きづかい} る気遣
はない。敵といえども弾道のあまり遠過ぎるのを
自覚せん事はないのだけれど、そこが軍略である。
旅順の戦争にも海軍から間接射撃を行って偉大
な功を奏したと云う話であれば、空地へころがり
落つるボールといえども相当の功果を収め得ぬ
事はない。いわんや一発を送る ^{たび} 度 に総軍力を合
せてわーと ^{いかくせいだいおんじょう} 威嚇性大音 声 を出す
においてをやである。主人は恐縮の結果として手

足に通う血管が収縮せざるを得ない。^{はんもん}煩悶の
^{きよく}極 ^{まごつ}そこいらを迷付 ^{さか}いている血が逆さに
^{のぼ}上るはずである。敵の ^{はかりごと}計 はなかなか巧
妙と云うてよろしい。^{むか}昔し ^{ギリシャ}希臘にイスキラ
スと云う作家があったそうだ。この男は学者作家
に共通なる頭を有していたと云う。吾輩のいわゆ
る学者作家に共通なる頭とは ^{はげ}禿 と云う意味で
ある。なぜ頭が禿げるかと云えば頭の栄養不足で
毛が生長するほど活気がないからに相違ない。学
者作家はもっとも多く頭を使うものであって大
概は貧乏に ^{きま}極 っている。だから学者作家の頭は
みんな栄養不足でみんな禿げている。さてイスキ
ラスも作家であるから自然の ^{いきおい}勢 禿げなく
てはならん。彼はつるつる然たる ^{きんかんあたま}金柑頭

を有しておった。ところがある日の事、先生例の
頭――頭に^{よそゆき}外^{ふだんぎ}行も普段着もないから例の
頭に極ってるが――その例の頭を振り立て振り
立て、太陽に照らしつけて往来をあるいていた。

これが間違いのもとである。禿げ頭を日にあてて
遠方から見ると、大変よく光るものだ。高い木に
は風があたる、光かる頭にも何かあたらなくては

ならん。この時イスキラスの頭の上に一羽の^{わし}鷺
が舞っていたが、見るとどこかで^{いけど}生捕った一
びき^{つか}足の亀を爪の先に攫んだままである。亀、ス
ッポンなどは美味に相違ないが、希臘時代から堅

^{こうら}い甲羅をつけている。いくら美味でも甲羅つき
ではどうする事も出来ん。^{えび}海老の^{おにがら}鬼殻^{やき}焼は
あるが亀の子の甲羅煮は今でさえないくらいだ

から、当時は無論なかったに極っている。さすが
わし
の 鷲 も少々持て余した おりから はる
折 柄、 遥 かの下界
にぴかと光った者がある。その時鷲はしめたと思

った。あの光ったものの上へ亀の子を落したなら、

甲羅は まさ しく砕けるに 極 しまった。砕けたあと

から舞い下りて なかみ ちようだい
中 味 を 頂 戴 すれば訳は

ない。そうだそうだと ねらい
覗 を定めて、かの亀の
子を高い所から挨拶も無く頭の上へ落した。

あいにく
生 憎 作家の頭の方が亀の甲より軟らかであ
ったものだから、禿はめっちゃめっちゃに砕けて有名

なるイスキラスはここに 無 むざん 惨 の最後を遂げた。

それはそうと、 げ
解しかねるのは鷲の了見である。

例の頭を、作家の頭と知って落したのか、または

禿岩と間違えて落したのか、解決しよう次第で、

落雲館の敵とこの驚とを比較する事も出来るし、
また出来なくもなる。主人の頭はイスキラスのそ

れのごとく、また ^{おれきれき}御歴々の学者のごとくぴか
ぴか光ってはおらん。しかし六畳敷にせよいやし

くも書齋と号する一室を ^{ひか}控えて、居眠りをしな
がらも、むずかしい書物の上へ顔を ^{かざ}翳す以上は、

学者作家の同類と見倣さなければならん。そうす
ると主人の頭の禿げておらんのは、まだ禿げるべ
き資格がないからで、その内に禿げるだろうとは

^{きんきん}近々この頭の上に落ちかかるべき運命であ
ろう。して見れば落雲館の生徒がこの頭を目懸け

て例のダムダム ^{がん}丸を集注するのは策のもっと

^{じぎ}も時宜に適したものと云わねばならん。もし敵が
この行動を二週間継続するならば、主人の頭は

いふ はんもん
畏怖と 煩 悶 のため必ず營養の不足を訴えて、
きんかん やかん どうこ
金 柑 とも 薬 缶 とも 銅 壺 とも変化するだ
ろう。なお二週間の砲撃を 食 えば金柑は 潰 れ
るに相違ない。薬缶は 洩るに相違ない。銅壺なら
ひびが入るにきまっている。この 睹 易 き結果を
予想せんで、あくまでも敵と戦鬪を継続しようと
苦心するのは、ただ本人たる苦沙弥先生のみであ
る。

ある日の午後、吾輩は例のごとく 椽 側 へ出
て 午 睡 をして虎になった夢を見ていた。主人に
けいにく
鶏 肉 を持って来いと云うと、主人がへえと恐
る恐る鶏肉を持って出る。迷亭が来たから、迷亭
が 雁 が食いたい、 雁 鍋 へ行つて 誂 らえて
来いと云うと、 蕪 の 香 の 物 と、

しおせんべい

塩煎餅といっしょに召し上がりますと雁

の味が致しますと例のごとく茶羅ッ^{ちゃら}鉢^{ぼこ}を云

うから、大きな口をあいて、うーと^{うな}唸って

おどか

嚇^{あお}してやったら、迷亭は蒼^{あお}くなって

やました

山下の雁鍋は廃業致しましたがいかが取り

はから

計^かいましょうかと云った。それなら牛肉で勘

弁するから早く西川へ行ってロースを一斤取っ

て来い、早くせんと貴様から食い殺すぞと云った

ら、迷亭は尻を^{はしよ}端^か折って馳け出した。吾輩は急

にからだが大きくなったので、椽側一杯に寝そべ

って、迷亭の帰るのを待ち受けていると、たちま

^{うちじゅう}

ち家中に響く大きな声がしてせっかくの

ぎゅう

牛も^ま食わぬ間に夢がさめて吾に帰った。する

と今まで恐る恐る吾輩の前に平伏していたと思

いのほかの主人が、いきなり ^{こうか}後架から飛び出して来て、吾輩の横腹をいやと云うほど蹴^けたから、おやと思ううち、たちまち庭下駄をつっかけて木戸から廻って、落雲館の方へかけて行く。吾輩は虎から急に猫と収縮したのだから何となく ^{きま}極りが悪くもあり、おかしくもあったが、主人のこの権幕と横腹を蹴られた痛さとで、虎の事はすぐ忘れてしまった。同時に主人がいよいよ出馬して敵と交戦するな面白いわいと、痛いのを我慢して、
^{あと}後 を慕って裏口へ出た。同時に主人がぬすつと
うと怒鳴る声が聞える、見ると制帽をつけた十八
九になる ^{くっきょう}倔強な奴が一人、四ツ目垣を向う
へ乗り越えつつある。やあ遅かったと思ううち、
^か彼の制帽は馳け足の姿勢をとって根拠地の方へ

いだてん
韋駄天のごとく逃げて行く。主人はぬすっとう
おおい
が「大」に成功したので、またもぬすっとうと高
く叫びながら追いかけて行く。しかしかの敵に追
いつくためには主人の方で垣を越さなければな
らん。深入りをすれば主人^{みずか}「自」らが泥棒になる
はずである。^{ぜん}「前」申す通り主人は立派なる逆上家
である。こう^{いきおい}「勢」に乗じてぬすっとうを追
懸ける以上は、^{ふうし}「夫子」自身がぬすっとうに成って
も追い懸けるつもりと見えて、引き返す^{けしき}「気色」も
なく垣の根元まで進んだ。今一步で彼はぬすっとう
の領分に^{はい}「入」らなければならんと云う^{まぎわ}「間際」
に、敵軍の中から、^{ひげ}「薄い髯」を^は「勢なく生やした将
官がのこのこと出馬して来た。^{ふたり}「両人」は垣を境に
何か談判している。聞いて見るとこんなつまらな

い議論である。

「あれは本校の生徒です」

「生徒たるべきものが、何で^{ひと}他の邸内へ侵入するのですか」

「いやボールがつい飛んだものですから」

「なぜ断って、取りに来ないのですか」

「これから^よ善く注意します」

「そんなら、よろしい」

りゅうとうこう
竜 騰 虎 闘 の壮観があるだろうと予期した交渉はかくのごとく散文的な談判をもって無事に迅速に結了した。主人の^{さか}壮んなるはただ意気込みだけである。いざとなると、いつでもこれでおしまいだ。あたかも吾輩が虎の夢から急に猫に返ったような観がある。吾輩の小事件と云

うのは ^{すなわ} 即ちこれである。小事件を記述したあとには、順序として是非大事件を話さなければならん。

主人は座敷の障子を開いて ^{はらばい} 腹 這 になって、何か思案している。恐らく敵に対して ^{ぼうぎょさく} 防禦 策 を講じているのだろう。落雲館は授業中と見えて、運動場は存外静かである。ただ校舎の一室で、倫理の講義をしているのが手に取るように聞える。朗々たる音声でなかなかうまく述べ立てているのを聴くと、全く ^{きのう} 昨日 敵中から出馬して談判の ^{しょう} 衝 に当った将軍である。

「……で公德と云うものは大切な事で、あちらへ ^{フランス} フランス ^{ドイツ} ドイツ ^{イギリス} イギリス 行って見ると、仏 蘭 西 でも 独 逸 でも 英 吉 利 でも、どこへ行っても、この公德の行われておら

ん国はない。またどんな下等な者でもこの公德を
重んぜぬ者はない。悲しいかな、我が日本に^あ在っ
ては、未だこの点において外国と^ま拮^{きっこう}抗する事
が出来ないのである。で公德と申すと何か新しく外
国から輸入して来たように考える諸君もあるか

も知れんが、そう思うのは^{だい}大なる誤りで、
せきじん ふうし みちいつ もっ これ
昔 人 も 夫子 の 道 一 以 て 之 を
つらぬ ちゅうじょ い
貫 く、 忠 恕 のみ矣と云われた事がある。

この^{じょ}恕と申すのが取りも直さず公德の
しゅっしょ
出 所 である。私も人間であるから時には大
きな声をして歌などうたって見たくなる事があ
る。しかし私が勉強している時に隣室のものなど
が放歌するのを聴くと、どうしても書物の読めぬ
のが私の性分である。であるからして自分が

とうしせん こうせい
唐詩選でも高声に吟じたら気分が
せいせい
晴々してよかろうと思う時ですら、もし自分
のように迷惑がる人が隣家に住んでおって、知ら
ず知らずその人の邪魔をするような事があって
はすまんと思うて、そう云う時はいつでも ^{ひか}控える
のである。こう云う訳だから諸君もなるべく公
徳を守って、いやしくも人の妨害になると思う事
は決してやってはならぬのである。……」

主人は耳を傾けて、この講話を謹聴していたが、
ここに至ってにやりと笑った。ちょっとこのにや
りの意味を説明する必要がある。皮肉家がこれを
よんだらこのにやりの ^{うち}裏には冷評的分子が交
わっていると思うだろう。しかし主人は決して、そ
んな人の悪い男ではない。悪いと云うよりそんな

ちえ
に智慧の発達した男ではない。主人はなぜ笑った
かと云うと全く嬉しくって笑ったのである。倫理
の教師たる者がかように痛切なる訓戒を与える
からはこの^{のち}後^{まぬ}は永久ダムダム弾の乱射を免
がれるに相違ない。当分のうち頭も禿げずにすむ、
逆上は一時に直らんでも時機さえくれば^{ぜんじ}漸次
回復するだろう、濡れ^ぬ手^{てぬぐい}拭^{こたつ}を頂いて、炬燵
にあたらなくとも、樹下石上を^{やど}宿としなくとも
大丈夫だろうと鑑定したから、にやにやと笑った
のである。借金はず返す者と二十世紀の
^{こんにち}今日にもやはり正直に考えるほどの主人が
この講話を真面目に聞くのは当然であろう。

やがて時間が来たと見えて、講話はぱたりとや
んだ。他の教室の課業も皆一度に終わった。すると

今まで室内に密封された八百の同勢は ^{とき} 鬨 の声をあげて、建物を飛び出した。その ^{いきおい} 勢 と云うものは、一尺ほどな ^{はち} 蜂 の巣を ^{たた} 敲 き落したごとくである。ぶんぶん、わんわん云うて窓から、戸口から、開きから、いやしくも穴の ^あ 開いている所なら何の容赦もなく我勝ちに飛び出した。これが大事件の発端である。

まず蜂の陣立てから説明する。こんな戦争に陣立てても何もあるものかと云うのは間違っている。

普通の人は戦争とさえ云えば ^{しゃか} 沙河 とか ^{ほうてん} 奉天 とかまた ^{りょじゅん} 旅順 とかそのほかに戦争はないもののごとくに考えている。少し詩がかった野蛮人になると、アキリスがヘクトーの死骸を引きずって、トロイの城壁を ^{さんそう} 三 匝 したとか、

えん ちょうはんきょう じょうはち
燕 びと張飛が 長 坂 橋 に 丈 八

だぼう よこた そうそう
の 蛇 矛 を 横 えて、 曹 操 の 軍 百 万 人 を

にら おおげさ
睨 め返したとか大袈裟な事ばかり連想する。

連想は当人の随意だがそれ以外の戦争はないも

の と心得るのは不都合だ。 たいこもうまい
太 古 蒙 昧 の 時代

あ
に 在 っ て こ そ、 そ ん な 馬 鹿 気 た 戦 争 も 行 わ れ た か

も 知 れ ん、 し か し 太 平 の こんにち
今 日、 大 日 本 国 帝 都
の 中 心 に お い て か く の ご と き 野 蛮 的 行 動 は あ り

得 べ か ら ざ る 奇 蹟 に 属 し て い る。 い か に 騒 動 が 持

ち 上 が っ て も 交 番 の 焼 打 以 上 に 出 る きづかい
気 遣 は

な い。 し て 見 る と がりょうくつ
臥 竜 窟 主 人 の 苦 沙 弥 先 生

り
と 落 雲 館 裏 八 百 の 健 児 と の 戦 争 は、 ま ず 東 京 市 あ
っ て 以 来 の 大 戦 争 の 一 と し て 数 え て も し か る べ

き も の だ。 さし たたかい
左 氏 が の 戦 を 記 す る に 当 っ て も

まず敵の陣勢から述べている。古来から叙述に巧みなるものは皆この筆法を用いるのが通則になっている。だによって吾輩が蜂の陣立てを話すの

しさい
も仔細なかろう。それでまず蜂の陣立ていかんと見てみると、四つ目垣の外側に縦列を^{かた}形ちづくった一隊がある。これは主人を戦闘線内に誘致する職務を帯びた者と見える。「降参しねえか」

「しねえしねえ」「駄目だ駄目だ」「出てこねえ」

「落ちねえかな」「落ちねえはずはねえ」「吠えて

見ろ」「わんわん」「わんわん」「わんわんわんわ

ん」これから先は縦隊総がかりとなって^{とっかん}呐喊
の声を揚げる。縦隊を少し右へ離れて運動場の方

面には砲隊が形勝の地を占めて陣地を^し布いてい

る。^{がりょうくつ}臥竜窟に面して一人の将官が^{すりこぎ}搗粉木

ひか
の大きな奴を持って 控 える。これと相対して五
六間の間隔をとってまた一人立つ、搗粉木のあと
にまた一人、これは臥竜窟に顔をむけて突っ立っ
ている。かくのごとく一直線にならんで向い合っ
ているのが砲手である。ある人の説によるとこれ
はベースボールの練習であって、決して戦闘準備
ではないそうだ。吾輩はベースボールの何物たる

もんもうかん
を解せぬ 文 盲 漢 である。しかし聞くところ
によればこれは米国から輸入された遊戯で、

こんにち
今日 中学程度以上の学校に行わるる運動の
うちでもっとも流行するものだそうだ。米国は

とっぴ
突 飛 な事ばかり考え出す国柄であるから、砲隊
と間違えてもしかるべき、近所迷惑の遊戯を日本
人に教うべくだけそれだけ親切であったかも知

れない。また米国人はこれをもって真に一種の運動遊戯と心得ているのだろう。しかし純粹の遊戯でもかように四隣を驚かすに足る能力を有している以上は使いようで砲撃の用には充分立つ。吾輩の眼をもって觀察したところでは、彼等はこの運動術を利用して砲火の功を収めんと企てつつあるとしか思われぬ。物は云いようでどうでもなるものだ。慈善の名を借りて詐偽^{さぎ}を働らき、インスピレーションと号して逆上をうれしがる者がある以上はベースボールなる遊戯の^{もと}下^{もと}に戦争をなさんとも限らない。或る人の説明は世間一般のベースボールの事であろう。今吾輩が記述するベースボールはこの特別の場合に限らるるベースボール^{すなわ}即^{すなわ}ち攻城的砲術である。これから

ダムダム弾を発射する方法を紹介する。直線^しに布
かれたる砲列の中の一人が、ダムダム弾を右の手
に握って搗粉木の所有者に^{ほう}抛^{ごていねい}りつける。ダムダ
ム弾は何で製造したか局外者には分らない。堅い
丸い石の団子のようなものを御^ご鄭^{てい}寧^{ねい}に皮で
くるんで縫い合せたものである。^{ぜん}前^{ぜん}申す通りこ
の弾丸が砲手の一人の手中を離れて、風を切って
飛んで行くと、向うに立った一人が例の搗粉木を
やっと振り上げて、これを^{たた}敲^{たた}き返す。たまには
敲^{そこ}き^{そこ}損^{そこ}なった弾丸が流れてしまう事もあるが、
大概はポカンと大きな音を立てて^は弾^はね返る。その
勢は非常に猛烈なものである。神経性胃弱なる主
人の頭を^{つぶ}潰^{つぶ}すくらいは容易に出来る。砲手はこ
れだけで事足るのだが、その周囲附近には

やじうま　うんか
弥次馬兼援兵が雲霞のごとく付き添うてい
る。ポカーンと搗粉木が団子に^{あた}中るや否やわー、
ぱちぱちぱちと、わめく、手を^う拍つ、やれやれと
云う。^{あた}中ったろうと云う。これでも^き利かねえか
と云う。恐れ入らねえかと云う。降参かと云う。

これだけならまだしもであるが、^{たた}敲き返された
弾丸は三度に一度必ず臥竜窟邸内へころがり込
む。これがころがり込まなければ攻撃の目的は達
せられんのである。ダムダム弾は近来諸所で製造
するが随分高価なものであるから、いかに戦争で
もそう充分な供給を仰ぐ訳に行かん。大抵一隊の
砲手に一つもしくは二つの割である。ポンと鳴る
度にこの貴重な弾丸を消費する訳には行かん。そ
こで彼等はたま^{ひろい}拾と称する一部隊を設けて

おちだま
落 弾 を拾ってくる。落ち場所がよければ拾う
のに骨も折れないが、草原とか人の邸内へ飛び込
むとそう容^{たやす}易くは戻って来ない。だから平生な
らなるべく労力を避けるため、拾い^{やす}易い所へ打
ち落すはずであるが、この際は反対に出る。目的
が遊戯にあるのではない、戦争に存するのだから、
わざとダムダム弾を主人の邸内に降らせる。邸内
に降らせる以上は、邸内へ這^{はい}入って拾わなければ
ならん。邸内に這入るもっとも簡便な方法は四つ
目垣を越えるにある。四つ目垣のうちで騒動すれ
ば主人が怒^{おこ}り出さなければならん。しからずん
かぶと
ば兜^{かぶと}を脱いで降参しなければならん。苦心の
あまり頭がだんだん禿げて来なければならん。

今しも敵軍から打ち出した一弾は、

しょうじゅんあやま
照 準 誤 たず、四つ目垣を通り越して
きり
桐 の下葉を振り落して、第二の城壁 すなわ 即 ち竹
垣に命中した。随分大きな音である。ニュートン

の運動律第一に いわ 曰 くもし他の力を加うるにあ
らざれば、一 ひとた 度 び動き出したる物体は均一の速
度をもって直線に動くものとす。もしこの律のみ
によって物体の運動が支配せらるるならば主人
の頭はこの時にイスキラスと運命を同じくした
であろう。 さいわい 幸 にしてニュートンは第一則を
定むると同時に第二則も製造してくれたので主
人の頭は危うきうちに一命を取りとめた。運動の
第二則に曰く運動の変化は、加えられたる力に比
例す、しかしてその力の働く直線の方角において
起るものとす。これは何の事だか少しくわかり兼

ねるが、かのダムダム弾が竹垣を突き通して、
しょうじ
障子 を裂き破って主人の頭を破壊しなかつ
たところをもって見ると、ニュートンの ^{おかげ}御蔭に
相違ない。しばらくすると案のごとく敵は邸内に
乗り込んで来たものと覺しく、「ここか」「もっと
左の方か」などと棒でもって ^{ささ}笹の葉を敲き廻わ
る音がする。すべて敵が主人の邸内へ乗り込んで
ダムダム弾を拾う場合には必ず特別な大きな声
を出す。こっそり這入って、こっそり拾っては
かんじん
肝心の目的が達せられん。ダムダム弾は貴重
かも知れないが、主人にからかうのはダムダム弾
以上に大事である。この時のごときは遠くから弾
の所在地は判然している。竹垣に ^{あた}中った音も知
っている。中った場所も分っている、しかしてそ

の落ちた地面も心得ている。だからおとなしくして拾えば、いくらでもおとなしく拾える。ライブニッツの定義によると空間は出来得べき同在現象の秩序である。いろはにほへとはいつでも同じ順にあらわれてくる。柳の下には必ず^{どじょう}鰯^ながいる。^{こうもり}蝙蝠に夕月はつきものである。垣根にボールは不似合かも知れぬ。しかし毎日毎日ボールを人の邸内に^{ほう}抛り込む者の眼に映ずる空間はたしかにこの排列に^な慣れている。^{ひとめ}一眼見ればすぐ分る訳だ。それをかくのごとく騒ぎ立てるのは^{ひっきょう}必^{いど}竟ずるに主人に戦争を挑む策略である。

こうなっではいかに消極的な主人といえども応戦しなければならん。さっき座敷のうちから

倫理の講義をきいてにやにやしていた主人は奮然として立ち上がった。猛然として馳^かけ出した。ばくぜん いけど 驀 然 として敵の一人を生捕った。主人にしては大出来である。大出来には相違ないが、見ると十四五の小供である。髯^{ひげ}の生^はえている主人の敵として少し不似合だ。けれども主人はこれで沢山だと思ったのだろう。詫^わび入るのを無理に引っ張^{えんがわ}って椽側の前まで連れて来た。ここにちょっと敵の策略について一^{いちげん}言 する必要がある、敵は主人が昨^{きのう}日^{けんまく}の権幕を見てこの様子では今日も必ず自身で出馬するに相違ないと察した。その時万一逃げ損^{おおぞう}じて大僧がつらまっては事面倒になる。ここは一年生か二年生くらいな小供を玉拾いにやって危険を避けるに越した事

はない。よし主人が小供をつらまえて
ぐずぐずりくつこ
愚図愚図理窟を捏ね廻したって、落雲館の名誉
には関係しない、こんなものを大人^{おとなげ}気もなく相
手にする主人の^{ちじょく}恥辱になるばかりだ。敵の考
はこうであった。これが普通の人間の考で^{しごく}至極
もっともなところである。ただ敵は相手が普通の
人間でないと云う事を勘定のうちに入れるのを
忘れたばかりである。主人にこれくらいの常識が
あれば昨日だって飛び出しはしない。逆上は普通
の人間を、普通の人間の程度以上に釣るし上げて、
常識のあるものに、非常識を与える者である。女
だの、小供だの、車引きだの、馬子だのと、そん
^{みさか}
な見境いのあるうちは、まだ逆上を以て人に誇
るに足らん。主人のごとく相手にならぬ中学一年

いけど
生を生捕って戦争の人質とするほどの了見で
なくては逆上家の仲間入りは出来ないのである。

かわい
可哀 そうなのは捕虜である。単に上級生の命令
によって玉拾いなる ぞうひょう 雑兵 の役を勤めたる
ところ、運わるく非常識の敵将、逆上の天才に追

い詰められて、垣越える 間 もあらばこそ、庭前に
引き据えられた。こうなると敵軍は安閑と味方の
恥辱を見ている訳に行かない。我も我もと四つ目
垣を乗りこして木戸口から庭中に乱れ入る。その
数は約一ダースばかり、ずらりと主人の前に並ん

だ。大抵は うわぎ 上衣 もちょっ き 着もつけておらん。白
シャツの腕をまくって、腕組をしたのがある。

めん
綿 ネルの洗いざらしを申し訳に背中だけへ乗
せているのがある。そうかと思うと白の 帆 木 綿 ほもめん

に黒い^{ふち}縁をとって胸の真中に花文字を、同じ色
に縫いつけた^{しゃれもの}洒落者もある。いずれも一騎当
千の猛将と見えて、^{たんば}丹波の国は笹山から昨夜着
し立てでござると云わぬばかりに、黒く^{たくま}逞しく
く筋肉が発達している。中学などへ入れて学問を
させるのは惜しいものだ。^{りょうし}漁師か船頭にしたら
定めし国家のためになるだろうと思われるく
らいである。彼等は申し合せたごとく、素足に
もも^{ひき}股引を高くまくって、近火の手伝にでも行き
そうな^{ふうてい}風体に見える。彼等は主人の前になら
んだぎり^{もくねん}黙然として^{いちごん}一言も発しない。主
人も口を^{ひら}開かない。しばらくの間双方共^{にら}睨め
くらをしているなかにちょっと殺気がある。

「貴様等はぬすっとうか」と主人は尋問した。

だいきえん
大 気 である。奥 歯 で 噛 み 潰 し た
かんしゃくだま
癩 癩 玉 が 炎 となつて鼻の穴から抜ける
ので、小鼻が、いちじるしく 怒 っ て 見える。
えちごじし おこ かつこう
越 後 獅 子 の 鼻 は 人 間 が 怒 っ た 時 の 恰 好
かた
を 形 どつて作つたものであろう。それでなくて
は あんなに恐しく出来るものではない。

「いえ泥棒ではありません。落雲館の生徒です」

「うそをつけ。落雲館の生徒が無断で人の庭宅に
侵入する奴があるか」

「しかしこの通りちゃんと学校の 徽 章 の つ
かぶ
いている帽子を 被 っています」

「にせものだろう。落雲館の生徒ならなぜむやみに侵入した」

「ボールが飛び込んだものですから」

「なぜボールを飛び込ました」

「つい飛び込んだんです」

け
「怪しからん奴だ」

「以後注意しますから、今度だけ許して下さい」

「どこの何者かわからん奴が垣を越えて邸内に
ちんにゅう 闖入 するのを、そう 容 易 くと許されると思
うか」

「それでも落雲館の生徒に違いないんですから」

「落雲館の生徒なら何年生だ」

「三年生です」

「きっとそうか」

「ええ」

主人は奥の方を^{かえり}顧みながら、おいこら
と云う。

埼玉生れの^{おさん}御三が^{ふすま}襖をあけて、へえと顔
を出す。

「落雲館へ行って誰か連れてこい」

「誰を連れて参ります」

「誰でもいいから連れてこい」

下女は「へえ」と答えが、あまり庭前の光景が
妙なのと、使の^{おもむき}趣が判然しないのと、さっ
きからの事件の発展が馬鹿馬鹿しいので、立ちも
せず、坐りもせずにやにや笑っている。主人はこ
れでも大戦争をしているつもりである。逆上の敏
腕を^{おおい}大に^{ふる}振っているつもりである。しかる
ところ自分の召し使たる当然こっちの肩を持つ

べきものが、真面目な態度をもって事に臨まのみか、用を言いつけるのを聞きながらにやにや笑っている。ますます逆上せざるを得ない。

「誰でも構わんから呼んで来いと云うのに、わからんか。校長でも幹事でも教頭でも……」

「あの校長さんを……」下女は校長と云う言葉だけしか知らないのである。

「校長でも、幹事でも教頭でもと云っているのにわからんか」

「誰もおりませんでしたら小使でもよろしゅうございますか」

「馬鹿を云え。小使などに何が分かるものか」

ここに至って下女もやむを得んと心得たものか、「へえ」と云って出て行った。使の主意はや

はり飲み込めのである。小使でも引張って来は
せんかと心配していると、あに計らんや例の倫理
の先生が表門から乗り込んで来た。平然と座に就^つ
くを待ち受けた主人は直ちに談判にとりかかる。

「ただ今邸内にこの者共が乱入致して……」と忠
臣蔵のような古風な言葉を使ったが「本当に
おんこう
御 校 の生徒でしょうか」と少々皮肉に語尾を
切った。

倫理の先生は別段驚いた様子もなく、平気で庭
前にならんでいる勇士を一通り見廻わした上、も
とのごとく^{ひとみ}瞳 を主人の方にかえして、^{しも}下 の
ごとく答えた。

「さようみんな学校の生徒であります。こんな事

のないように始終訓戒を加えておきますが……
どうも困ったもので……なぜ君等は垣などを乗
り越すのか」

さすがに生徒は生徒である、倫理の先生に向っ
ては ^{いちごん}一言 もないと見えて何とも云うものは
ない。おとなしく庭の隅にかたまって羊の ^{むれ}群 が
雪に逢ったように ^{ひか}控 えている。

^{たま}「丸 ^{はい}が這入るのも仕方がないでしょう。こうし
て学校の隣りに住んでいる以上は、時々はボール
も飛んで来ましょう。しかし……あまり乱暴です
からな。^{たとい}仮令垣を乗り越えるにしても知れない
ないように、そっと拾って行くなら、まだ勘弁の
しようもありますが……」

「ごもつともで、よく注意は致しますが何分

たにんず
多人数の事で……よくこれから注意をせんと
いかんぜ。もしボールが飛んだら表から廻って、
御断りをして取らなければいかん。いいか。――
広い学校の事ですからどうも世話ばかりやけて
仕方がないです。で運動は教育上必要なものであ
りますから、どうもこれを禁ずる訳には参りかね
るので。これを許すといつて御迷惑になるような事
が出来ますが、これは是非御容赦を願いたいと思
います。その代り 向 後 是 後 は きっと表門から廻って
御断りを致した上で取らせますから」

「いや、そう事が分かればよろしいです。たま 球 は
いくら御投げになっても 差 支 え はないです。
表からきてちょっと断わって下されば構いませ
ん。ではこの生徒はあなたに御引き渡し申します

からお連れ帰りを願います。いやわざわざ御呼び立て申して恐縮です」と主人は例によって例のごりゅうとうだびとく竜頭蛇尾の挨拶をする。倫理の先生は丹波の笹山を連れて表門から落雲館へ引き上げる。吾輩のいわゆる大事件はこれで一とまず落着を告げた。何のそれが大事件かと笑うなら、笑うがいい。そんな人には大事件でないまでだ。吾輩は主人の大事件を写したので、そんな人の大事件をしるを記したのではない。尻が切れてきょうど強弩のばっせい末勢だなどと悪口するものがあるなら、これが主人の特色である事を記憶して貰いたい。主人が滑稽文の材料になるのもまたこの特色に存する事を記憶して貰いたい。十四五の小供を相手にするのは馬鹿だと云うなら吾輩も馬鹿に相違な

いと同意する。だから大町桂月は主人をつらまえ

いま ちき
て 未だ稚氣を免がれずと云っている。

吾輩はすでに小事件を叙し おわ
了り、今また大事
件を述べ了ったから、これより大事件の あと
に起
る 余らん えが
瀾を 描き出だして、全篇の結びを付ける
つもりである。すべて吾輩のかく事は、口から
でまか
出 任 せのいい加減と思う読者もあるかも知れ
ないが決してそんな軽率な猫ではない。一字一句

うち
の 裏 に宇宙の一大哲理を包含するは無論の事、
その一字一句が そうそう
層々 連続すると首尾相応じ
前後相照らして、さだんせんわ
瑣 談 織 話 と思ってうっかり
と読んでいたものが こつぜんひょうへん
忽 然 豹 変 して容
易ならざる法語となるんだから、決して寝ころん
だり、足を出して五行ごとに一度に読むのだなど

と云う無礼を演じてはいけない。柳 宗 元
かんたいし しょうび みず
は 韓 退 之 の文を読むごとに 薔 薇 の 水
で手を清めたと云うくらいだから、吾輩の文に対
してもせめて じばら
自 腹 で雑誌を買って来て、友人の
御余りを借りて間に合わすと云う不始末だけは
ない事に致したい。これから述べるのは、吾輩
みずか
自 ら余瀾と号するのだけれど、余瀾ならどう
せつまらんに きま
極 っている、読まんでもよかろう
などと思うと飛んだ後悔をする。是非しまいまで
精読しなくてはいかん。

大事件のあった翌日、吾輩はちょっと散歩がし
たくなつたから表へ出た。すると向う横町へ曲が
ろうと云う角で金田の旦那と鈴木の とう
藤 さんが
しきりに立ちながら話をしている。金田君は車で

うち
自宅へ帰るところ、鈴木君は金田君の留守を訪問

して引き返す途中で ^{ふたり} 両 人 がばったりと出逢ったのである。近来は金田の邸内も珍らしくなくな

ったから、^{めった} 滅 多 にあちらの方角へは足が向かなか
ったが、こう御目に懸って見ると、何となく

おなつ ^{ひさびさ} 懐かしい。鈴木にも 久 々 だから余所なが
ら拝顔の栄を得ておこう。こう決心してのそのそ

御両君の ^{ちょりつ} 佇 立 しておらるる ^{そば} 傍 近く歩み寄

って見ると、自然両君の談話が耳に ^い 入る。これは
吾輩の罪ではない。先方が話しているのがわるい

のだ。金田君は探偵さえ付けて主人の動静を ^{うか} 窺
がうくらいの程度の良心を有している男だから、

吾輩が偶然君の談話を拝聴したって ^{おこ} 怒 らるる
きづかい

気 遣 はあるまい。もし怒られたら君は公平と

云う意味を御承知ないのである。とにかく吾輩は
両君の談話を聞いたのである。聞きたくて聴いた
のではない。聞きたくもないのに談話の方で吾輩
の耳の中へ飛び込んで来たのである。

「只今御宅へ伺いましたところで、ちょうどよい
所で御目にかかりました」と ^{とう}藤 ^{ていねい}さんは 鄭 寧
に頭をびよこつかせる。

「うむ、そうかえ。実はこないだから、君にちょ
っと逢いたいと思っていたがね。それはよかった」

「へえ、それは好都合でございました。何かご用
で」

「いや何、大した事でもないのさ。どうでもいい
んだが、君でないと出来ない事なんだ」

「私に出来る事なら何でもやりましょう。どんな事で」

「ええ、そう……」と考えている。

「何なら、御都合のとき出直して伺いましょう。

いつがよろ 宜 しゅう、ございますか」

「なあに、そんな大した事じゃ無いのさ。――それじゃせっかくだから頼もうか」

「どうか御遠慮なく……」

「あの変人ね。そら君の旧友さ。苦沙弥とか何とか云うじゃないか」

「ええ苦沙弥がどうかしましたか」

「いえ、どうもせんがね。あの事件以来 胸 糞 ぐわくそ 胸 糞 がわるくってね」

「ごもっともで、全く苦沙弥は剛慢ですから……

少しは自分の社会上の地位を考えているといい
のですけれども、まるで一人天下ですから」

「そこさ。金に頭はさげん、実業家なんぞ——と
か何とか、いろいろ小生意気な事を云うから、そ
んなら実業家の腕前を見せてやろう、と思ってね。

こないだから ^{だいぶ}大分弱らしているんだが、やっぱ
^{がんば}り頑張っているんだ。どうも剛情な奴だ。驚ろ
いたよ」

「どうも損得と云う観念の ^{とぼ}乏しい奴ですから
^{むやみ}無暗に瘦我慢を張るんでしょう。昔からああ云
う癖のある男で、つまり自分の損になる事に気が

付かないんですから ^ど度し ^{がた}難いです」

「あはははほんとに ^ど度し ^{がた}難い。いろいろ手を ^か易
^かえ品を易えてやって見るんだがね。とうとうしま

いに学校の生徒にやらした」

「そいつは妙案ですな。利^{ききめ}目^めがございましたか」

「これにゃあ、奴も大^{だいふ}分^{ぶん}困^こったようだ。もう遠^{とほ}からず落城^{らくじやう}するに極^{きま}っている」

「そりゃ結構です。いくら威張^{たいざい}っても多^た勢^{せい}にぶぜい^{ぶぜい}無^む勢^{せい}ですからな」

「そうさ、一人じゃあ仕方がねえ。それで大^{だいふ}分^{ぶん}弱^{じやく}ったようだが、まあどんな様子か君に行^いって見て来^きてもらおうと云^いうのさ」

「はあ、そうですか。なに訳^{わけ}はありません。すぐ行^いって見^みましょう。容^{ようす}子^しは帰^{かへ}りがけに御報知^{ごほうち}を致^{いた}す事^{こと}にして。面白^{おもしろ}いでしょう、あの頑^{がんこ}固^こなの^のが意^{いき}氣^き銷^{しょう}沈^{ちん}しているところは、きっと

みもの
見物ですよ」

「ああ、それじゃ歸りに御寄り、待っているから」

ごめんこうむ
「それでは 御 免 蒙 ります」

おや今度もまた こんたん 魂 胆 だ、なるほど実業家の
勢力はえらいものだ、石炭の もえがら 燃 殻 のような主
人を逆上させるのも、 くもん 苦 悶 の結果主人の頭が
はえすべ 蠅 滑 りの難所となるのも、その頭がイスキラ
スと同様の運命に おちい 陥 るのも皆実業家の勢力
である。地球が地軸を廻転するのは何の作用かわ
からないが、世の中を動かすものはたしかに金で
ある。この金の くりき 功 力 を心得て、この金の威光を
自由に發揮するものは実業家諸君をおいてほかに
一人もない。太陽が無事に東から出て、無事に

西へ入るのも全く実業家の御蔭である。今までは
わからずやの^{きゅうそだい}窮措大の家に養なわれて実
業家の^{ごりやく}御利益を知らなかったのは、我ながら不
覚である。それにしても^{めいがんふれい}冥頑不霊の主人も
今度は少し悟らずばなるまい。これでも冥頑不霊
で押し通す了見だと^{あぶ}危ない。主人のもっとも貴
重する命があぶない。彼は鈴木君に逢ってどんな
挨拶をするのか知らん。その模様で彼の悟り具合
も^{おのず}自^{ぶんみょう}から分^{ぶん}明^{めい}になる。愚図愚図しては
おられん、猫だって主人の事だから^{おおい}大に心配
になる。早々鈴木君をすり抜けて御先へ帰宅する。

鈴木君はあいかわらず調子のいい男である。今日
は金田の事などはおくびにも出さない、しきり

に当り ^{さわ}障りのない世間話を面白そうにしている。
る。

「君少し顔色が悪いようだぜ、どうかしやせんか」

「別にどこも何ともないさ」

「でも ^{あお}蒼いぜ、用心せんといかんよ。時候がわるいからね。よるは安眠が出来るかね」

「うん」

「何か心配でもありゃしないか、僕に出来る事なら何でもするぜ。遠慮なく云い給え」

「心配って、何を？」

「いえ、なければいいが、もしあればと云う事さ。心配が一番毒だからな。世の中は笑って面白く暮すのが得だよ。どうも君はあまり陰気過ぎるよう

だ」

「笑うのも毒だからな。無暗に笑うと死ぬ事があるぜ」

「^{じょうだん}冗談云っちゃいけない。笑う^{かど}門には福きた来るさ」

「^{むか}昔^{ギリシャ}し希臘にクリシッパスと云う哲学者があつたが、君は知るまい」

「知らない。それがどうしたのさ」

「その男が笑い過ぎて死んだんだ」

「へえー、そいつは不思議だね、しかしそりゃ昔の事だから……」

「昔しだって今だって変りがあるものか。^{ろば}驢馬が銀の^{どんぶり}井^{いちじゅく}から無花果を食うのを見て、おかしくってたまらなくて^{むやみ}無暗に笑ったんだ。

ところがどうしても笑いがとまらない。とうとう
笑い死にに死んだんだあね」

「はははしかしそんなに^と留め^ど度もなく笑わなく
ってもいいさ。少し笑う——^{てきぎ}適宜に、——そう
するといい心持ちだ」

鈴木君がしきりに主人の動静を研究している
と、表の門ががらがらとあく、^{きゃくらい}客来かと思
うとそうでない。

「ちょっとボールが^{はい}這入りましたから、取らして
下さい」

下女は台所から「はい」と答える。書生は裏手
へ廻る。鈴木は妙な顔をして何だいと聞く。

「裏の書生がボールを庭へ投げ込んだんだ」

「裏の書生？　裏に書生がいるのかい」

「落雲館と云う学校さ」

「ああそうか、学校か。随分騒々しいだろうね」

「騒々しいの何のって。碌々勉強も出来やしない。僕が文部大臣なら早速閉鎖を命じてやる」

「ハハハ大分怒ったね。何かしゃくさわる癩に障る事でも有るのかい」

「あるの無いのって、朝から晩まで癩に障り続けだ」

「そんなに癩に障るなら越せばいいじゃないか」

「誰が越すもんか、失敬千万な」

「僕に怒ったって仕方がない。なあに小供だあね、

うっ
打 ちゃっておけばいいさ」

「君はよからうが僕はよくない。昨^{きのう}日は教師を
呼びつけて談判してやった」

「それは面白かったね。恐れ入ったろう」

「うん」

この時また^{かどぐち}門 口 をあけて「ちょっとボール
^{はい}が這入りましたから取らして下さい」と云う声が
する。

^{だいぶ}
「いや大 分 来るじゃないか、またボールだぜ
君」

「うん、表から来るように契約したんだ」

「なるほどそれであんなにくるんだね。そう一か、
分った」

「何が分ったんだい」

「なに、ボールを取りにくる源因がさ」

「今日はこれで十六返目だ」

「君うるさくないか。来ないようにしたらいいじゃないか」

「来ないようにするったって、来るから仕方がないさ」

「仕方がないと云えばそれまでだが、そう ^{がんこ}頑固
にしていなくてもよからう。人間は ^{かど}角 があると
世の中を ^{ころ}転 がって行くのが骨が折れて損だよ。
丸いものはごろごろどこへでも ^く苦なしに行ける
が四角なものはころがるに骨が折れるばかりじ
ゃない、転がるたびに角がすれて痛いものだ。ど
うせ自分一人の世の中じゃなし、そう自分の思う
ように人はならないさ。まあ何だね。どうしても

金のあるものに、たてを突いちゃ損だね。ただ神経ばかり痛めて、からだは悪くなる、人は褒めてくれず。向うは平気なものさ。坐って人を使いさ

えすればすむんだから。多勢に無勢どうせ、かな
叶わないのは知れているさ。頑固もいいが、立て通すつもりでいるうちに、自分の勉強に障った

り、毎日の業務に煩^{はん}を及ぼしたり、とどのつまりが骨折り損の草^{くたびれもう}臥^ふ儲^{もく}けだからね」

「ご免なさい。今ちょっとボールが飛びましたから、裏口へ廻って、取ってもいいですか」

「そらまた来たぜ」と鈴木君は笑っている。

「失敬な」と主人は真^ま赤^かになっている。

鈴木君はもう大概訪問の意を果したと思ったから、それじゃ失敬ちと来^きたまえと帰って行く。

入れ代ってやって来たのが^{あまき}甘木先生である。

逆上家が自分で逆上家だと名乗る者は^{むか}昔しか

ら例が少ない、これは少々変だなと^{さと}覺った時は

逆上の^{とうげ}峠はもう越している。主人の逆上は

きのう
昨日の大事件の際に最高度に達したのである

が、談判も竜頭蛇尾たるに^{かかわ}係らず、どうかこ

うか始末がついたのでその晩書齋でつくづく考

えて見ると少し変だと気が付いた。もっとも落雲

館が変なのか、自分が変なのか^{うたがい}疑を存する

余地は充分あるが、何しろ変に違ない。いくら中

学校の隣に居を構えたって、かくのごとく年が年

中^{かんしゃく}肝癩を起しつつけはちと変だと気が付

いた。変であって見ればどうかしなければならん。

どうするったって仕方がない、やはり医者^の薬でも飲んで ^{かんしゃく}肝 癪 ^{みなもと}の 源 ^{わいろ}に 賄 賂 でも使
って慰撫^{いぶ}するよりほかに道はない。こう ^{さと}覚 った
から平生かかりつけの甘木先生を迎えて診察を
受けて見ようと云う量見を起したのである。賢か
愚か、その辺は別問題として、とにかく自分の逆
上に気が付いただけは ^{しゅしょう}殊 勝 ^{きどく}の志、奇 特 の
心得と云わなければならん。甘木先生は例のごと
くにここにこと落ちつき払って、「どうです」と云
う。医者は大抵どうですと云うに極^きまってる。吾
輩は「どうです」と云わない医者はどうも信用を
おく気にならん。

「先生どうも駄目ですよ」

「え、何そんな事があるものですか」

「一体医者の薬は利^きくもののでしょうか」

甘木先生も驚ろいたが、そこは温厚の
ちょうじゃ
長 者 だから、別段激した様子もなく、

「利かん事もないです」と おだや
穩 かに答えた。

わたし
「私 の胃病なんか、いくら薬を飲んでも同じ
事ですぜ」

「決して、そんな事はない」

「ないですか。少しは善くなりますかな」と自
分の胃の事を人に聞いて見る。

「そう急には、癒^{なお}りません、だんだん利きます。

今でももとより だいぶ
大 分 よくなっています」

「そうですかな」

「やはり かんしゃく
肝 癰 が起りますか」

「起りますとも、夢にまで肝癰を起します」

「運動でも、少しなさったらいいでしょう」

「運動すると、なお肝癰が起ります」

甘木先生もあきれ返ったものと見えて、

「どれ一つ拝見しましょうか」と診察を始める。

診察を終るのを待ちかねた主人は、突然大きな声を出して、

「先生、せんだって催眠術のかいてある本を読んだら、催眠術を応用して手癰のわるいんだの、いろいろな病気だのを直す事が出来ると書いてあったですが、本当でしょうか」と聞く。

「ええ、そう云う療法もあります」

「今でもやるんですか」

「ええ」

「催眠術をかけるのはむずかしいものでしょう

か」

「なに訳はありません、^{わたし}私などもよく懸けます」

「先生もやるんですか」

「ええ、一つやって見ましょうか。誰でも ^{かか}懸 ^らなければならん ^{りくつ}理窟 ^よのものです。あなたさえ ^善善ければ懸けて見ましょう」

「そいつは面白い、一つ懸けて下さい。^{わたし}私 ^ももとうから懸かって見たいと思ったんです。しかし懸かりきりで眼が ^さ覚めないと困るな」

「なに大丈夫です。それじゃやりましょう」

相談はたちまち一決して、主人はいよいよ催眠術を懸けらるる事となった。吾輩は今までこんな事を見た事がないから心ひそかに喜んでその結

果を座敷の隅から拝見する。先生はまず、主人の
眼からかけ始めた。その方法を見ていると、
りょうがん うわまぶた な
両 眼 の 上 瞼 を上から下へと撫でて、
主人がすでに眼を ねむ 眠 っているにも かかわ
係 らず、
しきりに同じ方向へくせを付けたがっている。し
ばらくすると先生は主人に向って「こうやって、
まぶた
瞼 を撫でていると、だんだん眼が重たくなる
でしょう」と聞いた。主人は「なるほど重くなり
ますな」と答える。先生はなお同じように撫でお
ろし、撫でおろし「だんだん重くなりますよ、よ
うござんすか」と云う。主人もその気になったも
のか、何とも云わずに黙っている。同じ摩擦法は
また三四分繰り返される。最後に甘木先生は「さ
あ
あもう開きませんぜ」と云われた。 かわいそう
可 哀 想 に

主人の眼はとうとう^{つぶ}潰れてしまった。「もう開
かんのですか」「ええもうあきません」主人は
もくねん
黙然として目を眠っている。吾輩は主人がも
めくら
う盲目になったものと思い込んでしまった。し
ばらくして先生は「あけるなら開いて御覧なさい。
とうていあけないから」と云われる。「そうです
か」と云うが早いかな主人は普通の通り^{りょうがん}両眼
を開いていた。主人はにやにや笑いながら「懸か
りませんな」と云うと甘木先生も同じく笑いなが
ら「ええ、懸りません」と云う。催眠術はついに
不成功に^{おわ}了る。甘木先生も帰る。

その次に来たのが――主人のうちへこのくら
い客の来た事はない。交際の少ない主人の家にし
てはまるで^{うそ}嘘のようである。しかし来たに相違

ない。しかも珍客が来た。吾輩がこの珍客の事を
いちごん
一言でも記述するのは単に珍客であるがた
めではない。吾輩は先刻申す通り大事件の余瀾
えが
を描きつつある。しかしてこの珍客はこの余瀾
あた
を描くに方って逸すべからざる材料である。何
と云う名前か知らん、ただ顔の長い上に、やぎ
ひげ
は
のような髯を生やしている四十前後の男と云え
ばよかろう。迷亭の美学者たるに対して、吾輩は
この男を哲学者と呼ぶつもりである。なぜ哲学者
と云うと、何も迷亭のように自分で振り散らすか
らではない、ただ主人と対話する時の様子を拝見
しているといかにも哲学者らしく思われるから
である。これもむか昔しの同窓と見えてふたりとも
しごくうと
應對振りは至極打ち解けた有様だ。

「うん迷亭か、あれは池に浮いてる金魚麩の
ようにふわふわしているね。せんだって友人を連
れて一面識もない華族の門前を通行した時、ちょ
っと寄って茶でも飲んで行こうと云って引っ張
り込んだそうだが随分呑気だね」

「それでどうしたい」

「どうしたか聞いても見なかったが、——そうさ、
まあ天稟の奇人だろう、その代り考も何もの
い全く金魚麩だ。鈴木か、——あれがくるのかい、
へえ一、あれは理窟はわからんが世間的には利
口な男だ。金時計は下げられるたちだ。しかし奥
行きがないから落ちつきがなくって駄目だ。

えんかつ
円滑円滑と云うが、円滑の意味も何もわかり
はせんよ。迷亭が金魚麩ならあれは藁で括っ

こんにゃく
た蒟蒻だね。ただわるくなめらかでぶるぶ
ふる
る振えているばかりだ」

主人はこのきけいひゆ
奇警な比喻を聞いて、おおい
大に感
心したものらしく、久し振りでハハハと笑った。

「そんなら君は何だい」

「僕か、そうさな僕なんかは――まあじねんじょ
自然薯
くらいなところだろう。長くなって泥の中にうま
埋
ってるさ」

「君は始終泰然として気楽なようだが、うらや
羨ま
しいな」

「なに普通の人間と同じようにしているばかり
さ。別に羨まれるに足るほどの事もない。ただあ
りがたい事に人を羨む気も起らんから、それだけ

いいね」

「会計は近頃豊かかね」

「なに同じ事さ。足るや足らずさ。しかし食うて
いるから大丈夫。驚かないよ」

「僕は不愉快で、^{かんしゃく}肝 癩 が起ってたまらん。
どっちを向いても不平ばかりだ」

「不平もいいさ。不平が起ったら起してしまえば
当分はいい心持ちになれる。人間はいろいろだから、
そう自分のように人にもなれと勧めたって、
なれるものではない。^{はし}箸 は人と同じように持た
んと飯が食いにくいが、自分の^{パン}麵麩は自分の勝手に
切るのが一番都合がいいようだ。^{じょうず}上 手 な仕
立屋で着物をこしらえれば、着たてから、からだ
に合ったのを持ってくるが、^{へた}下手の^{したてや}裁 縫 屋 に

あつら

誂 えたら当分は我慢しないと駄目さ。しかし世の中はうまくしたもので、着ているうちには洋服の方で、こちらの骨格に合わしてくれるから。

今の世に合うように上等な両親が^{てぎわ}手際よく生んでくれれば、それが幸福なのさ。しかし^{できそ}出来損なったら世の中に合わないで我慢するか、または世の中で合わせるまで辛抱するよりほかに道はなかろう」

「しかし僕なんか、いつまで立っても合いそうにないぜ、心細いね」

「あまり合わない^{せびろ}背広を無理にきると^{ほころ}綻びる。^{けんか}喧嘩をしたり、自殺をしたり騒動が起るんだね。しかし君なんかただ面白くないと云うだけで自殺は無論しやせず、喧嘩だってやった事は

あるまい。まあまあいい方だよ」

「ところが毎日喧嘩ばかりしているさ。相手が出て来なくっても怒っておれば喧嘩だろう」

「なるほど一ひとりげんか人 喧嘩だ。面白いや、いくらでもやるがいい」

「それがいやになった」

「そんならよすさ」

「君の前だが自分の心がそんなに自由になるものじゃない」

「まあ全体何がそんなに不平なんだい」

主人はここにおいて落雲館事件を始めとして、
いまだやき たぬき
今 戸 焼 の 狸 から、ぴん助、きしゃごその
ほかあらゆる不平を挙げて とうとう 溜 々 と哲学者の
前に述べ立てた。哲学者先生はだまって聞いている

たが、ようやく口を^{ひら}開いて、かように主人に説き出した。

「ぴん助やきしゃごが何を云ったって知らん顔をしておればいいじゃないか。どうせ下らんのだから。中学の生徒なんか構う価値があるものか。

なに妨害になる。だって談判しても、喧嘩してもその妨害はとれんのじゃないか。僕はそう云う

点になると西洋人より^{むか}昔しの日本人の方がよほどえらいと思う。西洋人のやり方は積極的積極

的と云って近頃^{だいぶはや}大分流行るが、あれは^{だい}大なる欠点を持っているよ。第一積極的と云ったって際限がない話しだ。いつまで積極的にやり通したっ

て、満足と云う域とか完全と云う^{さかい}境にいはる

ものじゃない。^{むこう}向に^{ひのき}檜があるだろう。あ

めざわ
れが目障りになるから取り払う。とその向うの
下宿屋がまた邪魔になる。下宿屋を退去させると、
その次の家がしゃく癩に触る。どこまで行っても際
限のない話しさ。西洋人の遣り口はみんなこれ
さ。ナポレオンでも、アレキサンダーでも勝って
満足したものは一人もないんだよ。人が気に喰わ
ん、喧嘩をする、先方が閉口しない、ほうてい
法 庭 へ
訴える、法 庭 で勝つ、それで落着くと思うのは間違
さ。心の落着くは死ぬまで あせ
焦 ったって片付く事
があるものか。 寡人政治 がい かん から、
だいぎせいたい
代 議 政 体 にする。代議政体がい かん から、
また何かにしたくなる。川が生意気だって橋をか
ける、山が気に喰わんと云って トンネル
隧 道 を掘る。
交通が面倒だと云って 鉄道 を 布 く。それで永久満

足が出来るものじゃない。さればと云って人間だものどこまで積極的に我意を通す事が出来るものか。西洋の文明は積極的、進取的かも知れないがつまり不満足で一生をくらす人の作った文明さ。日本の文明は自分以外の状態を変化させて満足を求めるのじゃない。西洋と^{おおい}大に違うところは、根本的に周囲の境遇は動かすべからざるものと云う一大仮定の^{もと}下^{もと}に発達しているのだ。親子の関係が面白くないと云って歐洲人のようにこの関係を改良して落ちつきをとろうとするのではない。親子の関係は在来のままでとうてい動かす事が出来んものとして、その関係の^{もと}下^{もと}に安心を求むる手段を講ずるにある。夫婦君臣の間柄もその通り、武士町人の区別もその通り、自然そ

の物を^み観るのもその通り。――山があつて隣国へ
行かれなければ、山を崩すと云う考を起す代りに
隣国へ行かんでも困らないと云う工夫をする。山
を越さなくとも満足だと云う心持ちを養成する
のだ。それだから君見給え。^{ぜんけ}禅家でも^{じゅか}儒家でも
きつと根本的にこの問題をつらまえる。いくら
自分がえらくても世の中はとうてい意のごとく
なるものではない、^{らくじつ}落日を^{めぐ}回らす事も、加
^{さか}茂川を逆^{さか}に流す事も出来ない。ただ出来るもの
は自分の心だけだからね。心さえ自由にする修業
をしたら、落雲館の生徒がいくら騒いでも平気な
ものではないか、今戸焼の狸でも構わんでおられ
そうなものだ。ぴん助なんか^ぐ愚な事を云ったらこ
の馬鹿野郎とすましておれば^{しさい}仔細なかるう。何

でも昔しの坊主は人に斬^きり付けられた時
でんこうえいり しゅんぷう
電 光 影 裏 に 春 風 を斬るとか、何とか
し^ゃ
洒落れた事を云ったと云う話だぜ。心の修業がつ
んで消極の極に達するとこんな靈活な作用が出
来るのじゃないかしらん。僕なんか、そんなむず
かしい事は分らないが、とにかく西洋人風の積極
主義ばかりがいいと思うのは少々誤まっている
ようだ。現に君がいくら積極主義に働いたって、
生徒が君をひやかしにくるのをどうする事も出
来ないじゃないか。君の権力であの学校を閉鎖す
るか、または先方が警察に訴えるだけのわるい事
をやれば格別だが、さもない以上は、どんなに積
極的に出たって勝てっこないよ。もし積極的に
出るとすれば金の問題になる。たぜい ぶぜい
多 勢 に 無 勢 の

問題になる。換言すると君が金持に頭を下げなければならんと云う事になる。衆を^{たの}侍む小供に恐れ入らなければならんと云う事になる。君のような貧乏人でしかもたった一人で積極的に喧嘩をしようと云うのがそもそも君の不平の種さ。どうだい分ったかい」

主人は分ったとも、分らないとも言わずに聞いていた。珍客が帰ったあとで書斎へ^{はい}這入って書物も読まずに何か考えていた。

鈴木^{とう}の藤さんは金と衆とに従えと主人に教えたのである。甘木先生は催眠術で神経を沈めろと^{じょごん}助言したのである。最後の珍客は消極的の修養で安心を得ろと説法したのである。主人がいずれを^{えら}択ぶかは主人の随意である。ただこのま

までは通されないに極^きまっている。

九

あばたづら 痘痕面である。ごいっしんまえ 御維新前はあ
だいぶはや ばたも大分流行ったものだそうだが日英同盟
こんにち の今日から見ると、こんな顔はいささか時候
おく 後の感がある。あばたの衰退は人口の増殖と
反比例して近き将来には全くそのあと 迹を絶つに
至るだろうとは医学上の統計から精密に割り出
されたる結論であって、吾輩のごとき猫といえど
ごう 毫も疑を さしはさ 挟む余地のないほどの名論
である。現今地球上にあばたっ 面^{つら}を有して生息
している人間は何人くらいあるか知らんが、吾輩
が交際の区域内において打算して見ると、猫には

一匹もない。人間にはたった一人ある。しかして
その一人が ^{すなわ} 即ち主人である。はなはだ気の毒
である。

吾輩は主人の顔を見る度に考える。まあ何の因
果でこんな妙な顔をして ^{おくめん} 臆面なく二十世紀
の空気を呼吸しているのだろう。昔なら少しは幅
も ^き 利いたか知らんが、あらゆるあばたが二の腕へ
の
立ち退きを命ぜられた昨今、依然として鼻の頭や
頬の上へ陣取って ^{がん} 頑として動かないのは自慢
にならんのみか、かえってあばたの体面に関する
訳だ。出来る事なら今のうち取り払ったらよさそ
うなものだ。あばた自身だって心細いに違いない。

それとも党勢不振の際、誓って落日を ^{ちゅうてん} 中 天
^{ばんかい}
に 挽 回 せずんばやまずと云う意気込みで、あ

おうふう
んなに 横 風 に顔一面を占領しているのか知
らん。そうするとこのあばたは決して けいべつ
意をもって視るべきものでない。 とうとう
俗に抗する ばんこふま
万古不磨の穴の集合体であって、
おおい
大 に吾人の尊敬に値する でこぼこ
凸 凹 と云って
よろ
宜 しい。ただきたならしいのが欠点である。

主人の小供のときに牛込の山伏町に
あさだそうはく
浅 田 宗 伯 と云う漢法の名医があつたが、こ
の老人が病家を見舞うときには必ずかごに乗
てそろりそろりと参られたそうだ。ところが宗伯
老が亡くなられてその養子の代になったら、かご
がたちまち人力車に変じた。だから養子が死んで
そのまた養子が跡を つ かっ こんとう
葛 根 湯 がア
ンチピリンに化けるかも知れない。かごに乗って

東京市中を練りあるくのは宗伯老の当時ですら
あまり見っともいいものでは無かった。こんな真
似をして ^{すま}澄^{もうじゃ}していたものは旧弊な亡者と、
汽車へ積み込まれる豚と、宗伯老とのみであった。

主人のあばたもその振わざる事においては宗
伯老のかごと一般で、はたから見ると気の毒なく
らいだが、漢法医にも劣らざる ^{がんこ}頑固な主人は依
然として孤城落日のあばたを天下に ^{ばくろ}曝露しつ
つ毎日登校してリードルを教えている。

かくのごとき前世紀の紀念を満面に ^{こく}刻して
教壇に立つ彼は、その生徒に対して授業以外に
^{だい}大なる訓戒を垂れつつあるに相違ない。彼は
「猿が手を持つ」を反覆するよりも「あばたの顔

面に及ぼす影響」と云う大問題を造^{ぞう}作^さもなく解釈して、不^ふ言^{げん}の^{かん}間^{かん}にその答案を生徒に与えつつある。もし主人のような人間が教師として存在

しなくなった^{あかつき} 暁^{あかつき}には彼等生徒はこの問題を研究するために図書館もしくは博物館へ馳け

つけて、吾人がミイラによって^{エジプトじん} 埃^{エジ} 及^{プト} 人^{じん}を^{ほうふつ} ほうふつ

髣^{ほう} 髴^{ふつ} すると同程度の労力を^{つい} 費^{つい} やさねばな

らぬ。この^{てん} 点^{てん} から見ると主人の^{あばた} 痘^{あばた} 痕^{あばた} も

めいめい^{うち} うち^{くどく} 冥^{くどく} 々^{くどく} の^{くどく} 裡^{くどく} に妙な功^{くどく} 徳^{くどく} を施こしている。

もっとも主人はこの功德を施こすために顔一

面^{ほうそう} 面^{ほうそう} に^う 疱^{ほう} 瘡^{そう} を種え付けたのではない。これでも実は種え疱瘡をしたのである。不幸にして腕に種

えたと思ったのが、いつの^ま 間^ま にか顔へ伝染していたのである。その頃は小供の事で今のように

いろけ
色 氣 も な に も な か っ た も の だ か ら、 痒 い 痒 い
と 云 い な が ら 無 暗 に 顔 中 引 き 搔 い た の だ そ う
だ。 ち ょ う ど 噴 火 山 が 破 裂 し て ラ ヴ ァ が 顔 の 上 を
流 れ た よ う な も の で、 親 が 生 ん で く れ た 顔 を 台 な
し に し て し ま っ た。 主 人 は 折 々 細 君 に 向 っ て 庖 瘡
を せ ぬ う ち は 玉 の よ う な 男 子 で あ っ た と 云 っ て
い る。 浅 草 の 観 音 様 で 西 洋 人 が 振 り 反 っ
て 見 た く ら い 奇 麗 だ っ た な ど と 自 慢 す る 事 さ え
あ る。 な る ほ ど そ う か も 知 れ な い。 た だ 誰 も 保 証
人 の い な い の が 残 念 で あ る。

い く ら 功 徳 に な っ て も 訓 戒 に な っ て も、 き た な
い 者 は や っ ぱ り き た な い も の だ か ら、 物 心
が つ い て 以 来 と 云 う も の 主 人 は 大 に あ ば た
に つ い て 心 配 し 出 し て、 あ ら ゆ る 手 段 を 尽 し て こ

の醜態を揉み潰^{も つぶ}そうとした。ところが宗伯老のかごと違って、いやになったからと云うてそう急に打ちやられるものではない。今だに歴然と残っている。この歴然が多少気にかかると見えて、主人は往来をあるく度毎にあばた^{づら}面を勘定してあるくそうだ。今日何人あばたに出逢って、そのぬし主^{ぬし}は男か女か、その場所は小川町の勧工場^{かんこうば}であるか、上野の公園であるか、ことごとく彼の日記につけ込んである。彼はあばたに関する智識においては決して誰にも譲るまいと確信している。せんだってある洋行帰りの友人が来た折なぞは、「君西洋人にはあばたがあるかな」と聞いたくらいだ。するとその友人が「そうだな」と首を曲げながらよほど考えたあとで「まあ滅多^{めった}にな

いね」と云ったら、主人は「滅多になくっても、少しはあるかい」と念を入れて聞き返えした。友人は気のない顔で「あっても乞食か ^{たち}立 ^{ぼう}ん 坊 だよ。教育のある人にはないようだ」と答えたら、主人は「そうかなあ、日本とは少し違うね」と云った。

哲学者の意見によって落雲館との喧嘩を思い留った主人はその後書斎に立て ^{こも}籠 ってしきりに何か考えている。彼の忠告を容れて静坐の ^いうち 裡に靈活なる精神を消極的に修養するつもりかも知れないが、元来が気の小さな人間の癖に、ああ陰気な ^ふところ ^で懐 手 ばかりしては ^{ろく}碌 な結果の出ようはずがない。それより英書でも質に入れて芸者から ^{らっばぶし}喇 叭 節 でも習った方が ^{はる}遙 かに

ましたとまでは気が付いたが、あんな^{へんくつ}偏屈な男はとうてい猫の忠告などを聴く^{きづかい}気遣はないから、まあ勝手にさせたらよかろうと五六日は近寄りもせずに暮した。

今日はあれからちょうど^{なぬかめ}七日目である。禅家などでは^{いちしちにち}一七日を限って大悟して見せるなどと^{すさま}凄じい^{いきおい}勢で^{けっか}結跏する連中もある事だから、うちの主人もどうかなったろう、死ぬか生きるか何とか片付いたろうと、のそのそ^{えんがわ}椽側から書斎の入口まで来て室内の動静を^{ていさつ}偵察に及んだ。

書斎は南向きの六畳で、日当りのいい所に大きな机が^す据えてある。ただ大きな机ではわかるまい。長さ六尺、幅三尺八寸高さこれにかなうと云う大

きな机である。無論出来合のものではない。近所の建具屋に談判して寝台^{けん}兼机として製造せしめたる^{きたい}稀代の品物である。何の故にこんな大きな机を新調して、また何の故にその上に寝て見ようなどという^{りょうけん}了見^んを起したのか、本人に聞いて見ない事だから^{とん}頓^んとわからない。ほんの一時の出来心で、かかる難物を^{かつ}担^んぎ込んだのかも知れず、あるいはことによると一種の精神病者において吾人がしばしば^{みいだ}見^み出すごとく、縁もゆかりもない二個の観念を連想して、机と寝台を勝手に結び付けたものかも知れない。とにかく奇抜な考えである。ただ奇抜だけで役に立たないのが欠点である。吾輩はかつて主人がこの机の上へ昼寝をして寝返りをする^{ひょうし}拍^ぱ子^しに椽側へ転げ落

ちたのを見た事がある。それ以来この机は決して
寝台に転用されないようである。

机の前には薄っぺらなメリンスの^{ざぶとん}座布団が
あって、^{たばこ}煙草の火で焼けた穴が三つほどかたま
ってる。中から見える綿は薄黒い。この座布団の
上に^{うし}後ろ向きにかしこまっているのが主人で
ある。鼠色によごれた兵^{へこおび}児帯をこま結びにむす
んだ左右がだらりと足の裏へ垂れかかっている。
この帯へじゃれ付いて、いきなり頭を張られたの
はこないだの事である。^{めった}滅多に寄り付くべき帯
ではない。

まだ考えているのか^{へた}下手の考と云う^{たとえ}喩も
あるのにと^{うし}後ろから^{のぞ}覗き込んで見ると、机の
上でいやにぴかぴかと光ったものがある。吾輩は

思わず、続け様に二三度^{まばたき}瞬をしたが、こいつは変だとまぶしいのを我慢してじっと光るものを見つめてやった。するとこの光りは机の上で動いている鏡から出るものだと云う事が分った。

しかし主人は何のために書斎で鏡などを振り舞わしているのであろう。鏡と云えば風呂場にある^きに極まっている。現に吾輩は今朝風呂場でこの鏡を見たのだ。この鏡ととくに云うのは主人のうちにはこれよりほかに鏡はないからである。主人が毎朝顔を洗ったあとで髪を分けるときにもこの鏡を用いる。――主人のような男が髪を分けるの

かと聞く人もあるかも知れぬが、実際彼は^{ほか}他の事に^{ぶしょう}無精なるだけそれだけ頭を^{ていねい}丁寧にする。吾輩が当家に参ってから今に至るまで主人

はいかなる炎熱の日といえども五分刈に刈り込
んだ事はない。^{かなら}必ず二寸くらいの長さにして、
それを^{ごたい}御大そうに左の方で分けるのみか、右の
はじ^は端をちょっと跳ね返して^{すま}澄している。これも
精神病の徴候かも知れない。こんな気取った分け
方はこの机と^{いっこう}一向調和しないと思うが、あえ
て他人に害を及ぼすほどの事でないから、誰も何
とも云わない。本人も得意である。分け方のハイ
カラなのはさておいて、なぜあんなに髪を長くす
るのかと思ったら実はこう云う^{わけ}訳である。彼の
あばたは単に彼の顔を^{しんしょく}侵蝕せるのみなら
ず、とくの^{むか}昔しに脳天まで食い込んでいるのだ
そうだ。だからもし普通の人のように五分刈や三
分刈にすると、短かい毛の根本から何十となくあ

ばたがあらわれてくる。いくら撫^なでても、さすっ
てもぽつぽつがとれない。枯野に^{ほたる}螢を放った
ようなもので風流かも知れないが、細君の^{ぎょい}御意
に入らんのは^{もちろん}勿論の事である。髪さえ長くし
ておけば露見しないですむところを、好んで自己
の非を^{あば}曝くにも当らぬ訳だ。なろう事なら顔ま
で毛を生やして、こっちのあばたも^{ないさい}内済にし
たいくらいなところだから、ただで^は生える毛を
ぜに^{ずがいこつ}銭を出して刈り込ませて、私は頭蓋骨の上
まで^{てんねんとう}天然痘にやられましたよと
吹^{ふいちょう}聴する必要はあるまい。――これが主人
の髪を長くする理由で、髪を長くするのが、彼の
髪をわける原因で、その原因が鏡を見る訳で、そ
の鏡が風呂場にある^{ゆえん}所以で、しこうしてその鏡

が一つしかないと云う事実である。

風呂場にあるべき鏡が、しかも一つしかない鏡が書齋に來ている以上は鏡が^{りこんびょう}離魂病にかか^か罹ったのかまたは主人が風呂場から持って來たに相違ない。持って來たとすれば何のために持って來たのだろう。あるいは例の消極的修養に必要な道具かも知れない。^{むか}昔し或る学者が何とかいう智識を^と訪うたら、^{おしょう}和尚^と両肌を抜いで^まから^まを磨しておられた。何をこしらえなさんと質問をしたら、なにさ今鏡を造ろうと思うて一生懸命にやっておるところじゃと答えた。そこで学者は驚ろいて、なんぼ名僧でも甌を磨して鏡とする事は出来まいと云うたら、和尚からからと笑いながらそうか、それじゃやめよ、いくら書物を読

んでも道はわからぬのもそんなものじゃろと
ののし

罵 ったと云うから、主人もそんな事を聞き
かじ

啗 って風呂場から鏡でも持って来て、したり顔
に振り廻しているのかも知れない。大 分 物騒に

な っ て 来 た な と、そ っ と 窺 っ て い る。

かくとも知らぬ主人ははなはだ熱心なる
ようす
容 子 を も っ て い っ ち ょ う ら い
一 張 来 の鏡を見つめて
いる。元来鏡というものは気味の悪いものである。

ろうそく
深夜 蝋 燭 を立てて、広い部屋のなかで一人鏡
のぞ
を 覗 き込むにはよほどの勇気がいるそうだ。吾
輩などは始めて当家の令嬢から鏡を顔の前へ押

し付けられた時に、は っ と ぎ ょ う て ん
仰 天 して屋敷の
まわりを三度馳け回ったくらいである。いかに白
昼といえども、主人のようにかく一生懸命に見つ

めている以上は自分で自分の顔が^{こわ}怖くなるに相違ない。ただ見てさえあまり気味のいい顔じゃない。ややあって主人は「なるほどきたない顔だ」

ひとごとと独り言を云った。自己の醜を自白するのはなかなか見上げたものだ。様子から云うとたしか

に気違の^{しょさ}所作だが言うことは真理である。これがもう一步進むと、^{おの}己れの醜惡な事が^{こわ}怖くなる。人間は吾身が怖ろしい悪党であると云う事実を徹骨徹髓に感じた者でないと苦勞人とは云え

ない。苦勞人でないととうてい^{げだつ}解脱は出来ない。

主人もここまで来たらついでに「^{こわ}おお怖い」とでも云いそうなものであるがなかなか云わない。

「なるほどきたない顔だ」と云ったあとで、何を

考え出したか、^ほぷうと頬つぺたを^{ふく}膨らました。

ひらて
そうしてふくれた頬っぺたを平手で二三度
たた

叩いて見る。何のまじないだか分らない。この
時吾輩は何だかこの顔に似たものがあるらしい
と云う感じがした。よくよく考えて見るとそれは

おさん
御三の顔である。ついでだから御三の顔をちょ
っと紹介するが、それはそれはふくれたものであ

る。この間さる人が^{あなもりいなり}穴守^{ふぐ}稲荷から河豚の
ちょうちん

提灯をみやげに持って来てくれたが、ちょ
うどあの^{ふぐちょうちん}河豚提灯のようにふくれている。

あまりふくれ方が残酷なので眼は両方共紛失し
ている。もっとも河豚のふくれるのは万遍なく

まんまる
真丸にふくれるのだが、お三とくると、元来
の骨格が多角性であって、その骨格通りにふくれ

上がるのだから、まるで^{すいき}水気になやんでいる六

角時計のようなものだ。御三が聞いたらさぞ^{おこ}怒
るだろうから、御三はこのくらいにしてまた主人
の方に帰るが、かくのごとくあらん限りの空気をも
って^ほ頬^{ぜん}つ^{ぜん}ぺたをふくらませたる彼は前申す
通り手のひらで^{ほっ}頬^{ぜん}ぺたを叩きながら「このくら
い皮膚が緊張するとあばたも眼につかん」とまた
ひと^{ごと}独り語をいった。

こんどは顔を横に向けて半面に光線を受けた
所を鏡にうつして見る。「こうして見ると大変目
立つ。やっぱりまともに日の向いてる方が^{たいら}平
に見える。奇体な物だなあ」と大^{だいぶ}分感心した様
子であった。それから右の手をうんと^{のば}伸して、
出来るだけ鏡を遠距離に持って行って静かに熟
視している。「このくらい離れるとそんなでもな

い。やはり近過ぎるといかん。――顔ばかりじゃない何でもそんなものだ」と悟ったようなことを云う。次に鏡を急に横にした。そうして鼻の根を中心にして眼や額や^{まゆ}眉を一度にこの中心に向ってくしゃくしゃとあつめた。見るからに不愉快な^{ようぼう}容^{ようぼう}貌^{ようぼう}が出来上ったと思ったら「いやこれは駄目だ」と当人も気がついたと見えて^{そうそう}早^{そう}々^{そう}やめてしまった。「なぜこんなに毒々しい顔だろう」と少々不審の^{てい}体^{てい}で鏡を眼を去る三寸ばかりの所へ引き寄せる。右の人指しゆびで小鼻を^な撫^なでて、撫でた指の頭を机の上にあった^{すいと}吸^{すいと}取^{すいと}り^{がみ}紙^{がみ}の上へ、うんと押しつける。吸い取られた鼻の^{あぶら}あぶ^まら^ま膏^まが丸るく紙の上へ浮き出した。いろいろな芸をやるものだ。それから主人は鼻の膏を^{とまつ}塗^{とまつ}抹^{とまつ}

しとう うがん したまぶた
した 指 頭 を転じてぐいと 右 眼 の 下 瞼

を裏返して、俗に云うべっかんこうを見事にやっ

の
て退けた。あばたを研究しているのか、鏡と 睨

くら
め 競 をしているのかその辺は少々不明である。

気の多い主人の事だから見ているうちにいろい

ろになると見える。それどころではない。もし善

意をもって こんにゃくもんどうてき
蒟 蒻 問 答 的 に解釈して

けんしょうじかく ほうべん
やれば主人は 見 性 自 覚 の 方 便 とし

てかように鏡を相手にいろいろな しがさ
仕 草 を演じ

ているのかも知れない。すべて人間の研究と云う

ものは自己を研究するのである。天地と云い

さんせん じつげつ せいしん
山 川 と云い 日 月 と云い 星 辰 と云う

いみょう お
も皆自己の 異 名 に過ぎぬ。自己を措いて他に

たれびと みいだ
研究すべき事項は 誰 人 にも 見 出 し得ぬ訳

だ。もし人間が自己以外に飛び出す事が出来たら、
飛び出す途端に自己はなくなってしまう。しかも
自己の研究は自己以外に誰もしてくれる者はない。
いくら仕てやりたくても、貰いたくても、出
来ない相談である。それだから古来の豪傑はみんな
自力で豪傑になった。人のお蔭で自己が分るく
らいなら、自分の代理に牛肉を喰わして、堅いか

柔かい^{あした}か判断の出来る訳だ。朝^{あした}に法を聴き、
ゆうべ^{ごぜんとうか}に道を聴き、梧^{ごぜんとうか}前^{ごぜんとうか}灯^{ごぜんとうか}下^{ごぜんとうか}に書巻を手にする
のは皆この^{じしょう}自^{じしょう}証^{じしょう}を^{ちようはつ}挑^{ちようはつ}撥^{ちようはつ}するの
ほうべん^ぐぐ^ぐ方便^ぐの具に過ぎぬ。人の説く法のうち、他の
弁ずる道のうち、^{ないし}乃至^{ないし}は^{ごしゃ}五^{ごしゃ}車^{ごしゃ}にあまると
した^{いり}いた^{いり}り^{いり}蠹^{いり}紙^{いり}堆^{いり}裏^{いり}に自己が存在する^{ゆえん}所^{ゆえん}以^{ゆえん}がない。あれ
ば自己の幽霊である。もっともある場合において

幽霊は^{むれい}無霊より優るかも知れない。影を追えば
本体に^{ほうちゃく}逢着する時がないとも限らぬ。多くの影は大抵本体を離れぬものだ。この意味で主人
が鏡をひねくっているなら^{だいぶ}大分話せる男だ。エ
ピクテタスなどを^{うのみ}鵜呑にして学者ぶるよりも
はる
^遙かにましだと思う。

鏡は^{うぬぼれ}己惚の醸造器であるごとく、同時に自
慢の消毒器である。もし浮華虚栄の念をもってこ
れに対する時はこれほど愚物を^{せんどう}煽動する道
具はない。昔から^{ぞうじょうまん}増上慢をもって^{おのれ}己
を害し他を^{じせき}うた事蹟の三分の二はたしかに鏡
^{しょさ}の所作である。仏国革命の当時物好きな御医者
さんが改良首きり器械を発明して飛んだ罪をつ
くったように、始めて鏡をこしらえた人も定めし

ねざめ
寢 覚 のわるい事だろう。しかし自分に^{あいそ}愛 想 の
尽きかけた時、自我の萎縮した折は鏡を見るほど

薬になる事はない。^{けんしゅうりょうぜん}妍 醜 瞭 然 だ。こ

んな顔でよくまあ人で^{そうろう}候 と反りかえって
こんにち

今 日 まで暮らされたものだと気がつくにき
まっている。そこへ気がついた時が人間の
しょうがい

生 涯 中もっともありがたい期節である。自
分で自分の馬鹿を承知しているほど^{たっ}尊 とく見

える事はない。この^{じかくせい}自 覚 性 馬鹿の前にはあら
ゆるえらがり屋がことごとく頭を下げて恐れ入

らねばならぬ。当人は^{こうぜん}昂 然 として吾を
けいぶちょうしょう

軽 侮 嘲 笑 しているつもりでも、こちら
から見るとその昂然たところが恐れ入って頭

を下げている事になる。主人は鏡を見て^{おの}己 れの

愚を悟るほどの賢者ではあるまい。しかし吾が顔
に印せられる^{とうこん めい}痘 痕 の 銘 くらいは公平に読
み得る男である。顔の醜いのを自認するのは心の
いや^{えとく かいてい}賤 しきを会 得 する 楷 梯 にもなろう。たの
もしい男だ。これも哲学者からやり込められた結
果かも知れぬ。

かように考えながらなお様子をうかがって
いると、それとも知らぬ主人は思う存分あかんべえ
をしたあとで「大^{だいぶ}分 充血しているようだ。やっ
ぱり慢性結膜炎だ」と言いながら、人さし指の横
つらでぐいぐい充血した^{まぶた} 瞼 をこすり始めた。
おおかたかゆ^{おおかたかゆ}
大 方 痒 いのだろうけれども、たださえあん
なに赤くなっているものを、こう^{こす} 擦 ってはたま
るまい。遠からぬうちに^{しおだい} 塩 鯛 の眼玉のごとく

ふらん
腐爛するにきまつてる。やがて眼を^{ひら}開いて鏡
に向ったところを見ると、果せるかなどんよりと
して北国の冬空のように曇っていた。もっとも
ふだん
平常からあまり晴れ晴れしい眼ではない。誇大
な形容詞を用いると^{こんとん}混沌として黒眼と白眼
^{ほうはん}が^{ばくぜん}剖判しないくらい漠然としている。彼
の精神が^{もうろう}朦朧として^{てい}不得要領底に一貫し
ているごとく、彼の眼も
^{あいあいぜん}曖々然^{まいまいぜん}昧々然として^{とし}長えに
^{がんか}がんかの奥に^{ただよ}漂うている。これは^{たいどく}胎毒の
ためだとも云うし、あるいは^{ほうそう}疱瘡の余波だとも
解釈されて、小さい時分はだいぶ柳の虫や赤蛙
の厄介になった事もあるそうだが、せっかく母親
の丹精も、あるにその^{かい}甲斐あらばこそ、^{こんにち}今日

まで生れた当時のままでぼんやりしている。吾輩
ひそかに思うにこの状態は決して胎毒や疱瘡の
ためではない。彼の眼玉がかように
かいじゅうこんだく ほうこう
晦 澁 濁 濁 の悲境に 彷徨 している
のは、とりも直さず彼の頭脳が ふうとうふめい
不 透 不 明 の実
質から構成されていて、その作用が
あんたんめいもう
暗 憺 溟 濛 の極に達しているから、自然と
これが形体の上にあられて、知らぬ母親にいら
ぬ心配を掛けたんだろう。煙たって火あるを知り、
まなこ濁って愚^ぐなるを証す。して見ると彼の眼は
彼の心の象徴で、彼の心は てんぼうせん
天 保 銭 のごとく
穴があいているから、彼の眼もまた天保銭と同じ
く、大きな割合に通用しないに違ない。

ひげ
今度は 髯 をねじり始めた。元来から行儀のよ

くない髯でみんな思い思いの姿勢をとって生^はえ
ている。いくら個人主義が流^は行^やる世の中だって、
こ^まう^ま町^ち々^ちに我^わ儘^がを尽くされては持主の
迷惑はさこそと思いやられる、主人もここに
かん^が鑑^{かん}みるところあ^おい^いって近頃は^大に訓練を
与えて、出来る限り系統的に^{あん}ばい^い按^{あん}排^{ぱい}するように
尽力している。その熱心の功^{こう}果^かは^むな^な空^くしからず
して昨今ようやく歩調が少しととのうようにな
って来た。今までは髯が生^はえておったのであるが、
この頃は髯を生やしているのだと自慢するくら
いになった。熱心は成効の度に^こぶ^ぶ鼓舞^{こぶ}せられ
るものであるから、吾が髯の前途有望なりと見て
とって主人は朝な夕な、手がすいておれば必ず
ひげ^{ひげ}髯^{ひげ}に向^{べん}つ^{たつ}て鞭^{べん}撻^{たつ}を加える。彼のアムビショ

ドイツは独逸皇帝陛下のように、向上の念の^{さかん}熾^{さかん}
な髯を^{たくわ}蓄^{たくわ}えるにある。それだから毛^け孔^{あな}が横
向であろうとも、下向であろうとも^{いささ}聊^{いささ}か頓着
なく十把一とからげに^{にぎ}握^{にぎ}っては、上の方へ引
っ張り上げる。髯もさぞかし難儀であろう、所有
主たる主人すら時々は痛い事もある。がそこが訓
練である。^{いや}否^{いや}でも^こ忝^こでもさかに扱^こき上げる。門
外漢から見ると気の知れない道楽のようである
が、当局者だけは至当の事と心得ている。教育者
がいたずらに生徒の^{ほんせい}本^{ほん}性^{せい}を^た撓^ためて、僕の手柄
を見給えと誇るようなもので^{ごう}毫^{ごう}も非難すべき
理由はない。

主人が^{まんこう}満^{まん}腔^{こう}の熱誠をもって髯を調練して
いると、台所から多角性の^{おさん}御^お三^{さん}が郵便が参りま

したと、例のごとく赤い手をぬっと書齋の^{うち}中へ
出した。^{みぎ}右手に髯をつかみ、^{ひだり}左手に鏡を持った
主人は、そのまま入口の方を振りかえる。八の字

の尾に逆^さか立^だちを命じたような髯を見るや否や
おたかく
御多角はいきなり台所へ引き戻して、ハハハハ

^{おかま}と御釜の^{ふた}蓋へ身をもたして笑った。主人は平
気なものである。^{ゆうゆう}悠々と鏡をおろして郵便を
取り上げた。第一信は活版ずりで何だかいかめし
い文字が並べてある。読んで見ると

拝啓^{いよいよ}愈御多祥^{がしたてまつり}奉賀^{そろ}候回顧す
れば日露の戦役は連戦連勝の^{いきおい}勢に乗じて
平和克復を告げ吾忠勇義烈なる将士は今や過半
万歳^り声裡に凱歌を奏し国民の歡喜何ものか^{これ}之
に^し若かん^{さき}曩に宣戦の^{たいしょう}大詔^{かんぱつ}煥發^{せら}せら

るるや義勇公に奉じたる将士は久しく万里の異
境に在りて^あ克^よく寒暑の苦難を忍び一意戦闘に従
事し^{めい}命を国家に捧げたるの至誠は永く銘して
忘るべからざる所なり^{しこう}而して軍隊の凱旋は
本月を以て^{ほと}殆んど終了を告げんとす依って本
会は来る二十五日を期し本区内一千有余の出征
将校下士卒に対し本区民一般を代表し以て一大
凱旋祝賀会を開催し兼て軍人遺族を^{いしゃ}慰^{せん}藉せん
が為め熱誠^{これ}之^{いささか}を迎え^{びちゅう}聊^う感謝の微衷
を表し^{たくつ}度^つ就ては各位の御協賛を仰ぎ此盛典
を挙行するの^{さいわい}幸を得ば本会の面目
これにすぎず^{そろ}なにとぞ^{ふる}
不^{ごえん}過^{ひたすら}之と存候間何卒御賛成奮^た
て義捐あらんことを^た只^え管希望の至に堪え
ず^{そろ}候敬具

とあって差し出し人は華族様である。主人は黙読
一過の^{のち}後直ちに封の中へ巻き納めて知らん顔
をしている。義捐などは恐らくしそうにない。せ
んだって東北凶作の義捐金を二円とか三円とか
出してから、逢う人^{ごと}毎に義捐をとられた、とら
れたと^{ふいちょう}吹聴しているくらいである。義捐と
ある以上は差し出すもので、とられるものでない
には^{きま}極っている。泥棒にあったのではあるまい
し、とられたとは不穩当である。しかるにも関せ
ず、盗難にでも^{かか}罹ったかのごとくに思ってるら
しい主人がいかにも軍隊の歡迎だと云って、いかに
華族様の勧誘だと云って、^{ごうだん}強談で持ちかけた
らいざ知らず、活版の手紙くらいで金銭を出すよ
うな人間とは思われない。主人から云えば軍隊を

歓迎する前にまず自分を歓迎したいのである。自
分を歓迎した^{あと}後なら大抵のものは歓迎しそう
であるが、自分が^{ちようせき}朝^さ夕に差し^{つか}支える間は、
歓迎は華族様に^{まか}任せておく了見らしい。主人は
第二信を取り上げたが「ヤ、これも活版だ」と云
った。

時下秋冷の^{こう}候^{そろ}に^候処貴家益々御隆盛の段
がしあげたてまつり^{のぶ}候^奉陳れば本校儀も御承
知の通り一昨々年以來二三野心家の為めに妨げ

られ一時其極に達し^{そうらえども}候^得共是れ皆
ふしょうしんさく
不肖針作が足らざる所に起因すと存じ
深く^{みずか}自^{いまし}ら^警むる所あり
がしんしょうたん^{くしん}臥薪嘗胆其の苦辛の結果^{ようや}漸く
ここ
茲に独力以て我が理想に適するだけの校舎新

築費を得るの途を講じ^{そろそ}候 其は別義にも御座な
く別冊裁縫秘術綱要と命名せる書冊出版の義に

御座^{そろ}候 本書は不肖^{しんさく}針^{のっ}作^{のっ}が多年苦心研究せ
る工芸上の原理原則に^{のっ}法^{のっ}とり真に肉を裂き血
を絞るの思を^な為して著述せるものに御座^{そろよ}候 因

って本書を^{あまね}普^{あまね}く一般の家庭へ製本実費に
さしょう^{さしょう}些^{さしょう}少^{さしょう}の利潤を附して御^ご購^{こう}求^{きゅう}を願い一

面^{しどう}斯^{しどう}道^{しどう}発達の一助となすと同時に又一面には
きんしょう^{きんしょう}僅^{きんしょう}少^{きんしょう}の利潤を蓄積して校舎建築費に当つ

る^{つもり}心^{つもり}算^{つもり}に御座^{そろ}候 依^{なんとも}っては近頃^{なんとも}何^{なんとも}共^{なんとも}恐縮
の至りに存じ候えども本校建築費中へ御寄附

なしくださる^{おぼしめ}被^{おぼしめ}成^{おぼしめ}下^{おぼしめ}と御思召し茲^{ここ}に呈供仕^{そろ}候 秘
術綱要一部を御購求の上御侍女の方へなりとも

御分与^{なしくだされ}被^{なしくだされ}成^{なしくだされ}下^{なしくだされ}候^{そろ}て御賛同の意を御表章

なしくだされたく
被 成 下 度 伏して懇願仕 候 敬具

大日本女子裁縫最高等大学院

校長 ぬいだしんさく
縫 田 針 作 九拜

とある。主人はこの鄭 重なる書面を、冷淡
に丸めてぽんと 屑 籠の中へ ほう
ていちょう
くずかご
抛り込んだ。せ
っかくの針作君の九拜も臥薪嘗胆も何の役にも
立たなかったのは気の毒である。第三信にかかる。

第三信はすこぶる風変りの光彩を放っている。状

袋が紅白のだんだらで、あめ ぼう
餡 ん 棒 の看板のごと

くはなやかなる真中に ちんのくしゃみ
珍 野 苦 沙 弥 先生

こひか はっぶんたい したた
虎皮下と 八 分 体 で肉太に 認 めてある。

中からお太さんが出るかどうか受け合わない
た

おもて
が 表 だけはすこぶる立派なものだ。

も ひとつち
若し我を以て天地を律すれば 一 口 にして

せいこう
西江の水を吸いつくすべく、^も若し天地を以て
我を律すれば我は ^{すなわ} 則 ^{はくじょう} ち 陌 上 の塵のみ。

^いすべからく道え、^{いんも}天地と我と 什 麼 の交渉がある。

……始めて ^{なまこ}海鼠 ^{いだ}を食い 出 せる人は其胆力に

於て敬すべく、始めて ^{ふぐ}河豚 ^{きつ}を 喫 ^{おとこ}せる 漢 は其

勇氣に ^{おい}於 て重んずべし。海鼠を ^{くら}食 えるものは

^{しんらん}親 鸞 の再来にして、^{ふぐ}河豚を喫せるものは

^{にちれん}日 蓮 の分身なり。苦沙弥先生の如きに至って

^{ただかんぴょう}は 只 干 瓢 ^{すみそ}の酢味噌を知るのみ。干瓢の酢

味噌を ^{くら}食 って天下の士たるものは、われ ^{いま}未 だ

^{これ}之 を見ず。……

親友も ^{なんじ}汝 を売るべし。^{ふぼ}父母も汝に ^{わたくし}私 あ

るべし。愛人も汝を棄つべし。^{ふつき}富 貴 ^{もと}は 固 より

頼みがたかるべし。^{しゃくろく}爵 禄 ^{いっちょう}は 一 朝 にし

て失うべし。汝の頭中に秘蔵する学問には ^か ^び 黻 が
は ^た の
生えるべし。汝何を 恃 まんとするか。天地の
うち
裡 に何をたのまんとするか。神？ 神は人間の
でつぞう どぐう
苦しまぎれに 捏 造 せる土 偶 のみ。人間のせ
ぐそ ^た の
つな 糞 の凝結せる臭骸のみ。 恃 むまじきを恃
んで安しと云う。とつとつ みだ うろん
の言辞を弄して、^{まん} ^{さん} 蹒 跚 として墓に向う。油尽
きて ^{とう} ^お ^の ^ず ^か
灯 自 ら滅す。業尽きて何物をか ^の ^こ 遺
す。苦沙弥先生よろしく御茶でも上がれ。……

人を人と思わざれば ^お ^そ 畏 るる所なし。人を人と思
わざるものが、吾を吾と思わざる世を ^い ^き ^ど ^お 憤 る
^い ^{かん}
は 如 何。権貴栄達の士は人を人と思わざるに於
て得たるが如し。 ^た ^だ ^ひ ^と
只 他 の吾を吾と思わぬ時に
於て ^ふ ^つ ^{ぜん} 怫 然 として色を ^な 作す。任意に色を作し来

れ。馬鹿野郎。……

吾の人を人と思うとき、^{ひと}他の吾を吾と思わぬ時、
不平家は^{ほっさてき}発作的に^{あまくだ}天降る。此発作的活動
を名づけて革命という。革命は不平家の所為にあ
らず。権貴栄達の士が好んで産する所なり。朝鮮

^{にんじん}に人參多し先生何が故に服せざる。

在巢鴨 ^{てんどうこうへい}天道公平 再拝

針作君は九拝であったが、この男は単に再拝だ
けである。寄附金の依頼でないだけに七拝ほど

^{おうふう}横風に構えている。寄附金の依頼ではないが
その代りすこぶる分りにくいものだ。どこの雑誌

へ出しても没書になる価値は充分あるのだから、

頭脳の不透明をもって鳴る主人は必ず^{ずたずた}寸断寸断

に引き裂いてしまうだろうと^{おもい}思のほか、打ち

返し打ち返し読み直している。こんな手紙に意味
があると考えて、あくまでその意味を^{きわ}究めよう
という決心かも知れない。およそ天地の^{かん}間にわ
からんものは沢山あるが意味をつけてつかない
ものは一つもない。どんなむずかしい文章でも解
釈しようとすれば容易に解釈の出来るものだ。人
間は馬鹿であると云おうが、人間は利口であると
云おうが手もなくわかる事だ。それどころではな
い。人間は犬であると云っても豚であると云って
も別に苦しむほどの命題ではない。山は低いと云
っても構わん、宇宙は狭いと云っても差し^さ支^{つか}え
はない。烏が白くて小町が醜婦で苦沙弥先生が君
子でも通らん事はない。だからこんな無意味な手
紙でも何とか^か蚊^{りくつ}とか理窟^{りくつ}さえつければどうと

も意味はとれる。ことに主人のように知らぬ英語を無理矢理にこじ附けて説明し通して来た男はなおさら意味をつけたがるのである。天気の良いのになぜグード・モーニングですかと生徒に問われて^{なぬかかん}七日間考えたり、コロンバスと云う名は日本語で何と云いますかと聞かれて三日三晩かかって答を工夫するくらいな男には、

^{かんぴょう}干瓢 ^{すみそ}の酢味噌が天下の士であろうと、朝鮮の^{にんじん}仁参を食って革命を起そうと随意的意味は随処に^わ湧き出る訳である。主人はしばらくしてグード・モーニング流にこの難解な^{ごんく}言句を呑み込んだと見えて「なかなか意味深長だ。何でもよほど哲理を研究した人に違ない。^{あっぱれ}天晴な見識だ」と大変賞賛した。この^{いちごん}一言でも主人の愚^ぐ

なところはよく分るが、^{ひるがえ}
翻^{ひるがえ}って考えて見る
といささかもっともな点もある。主人は何に寄ら
ずわからぬものをありがたがる癖を有している。

これはあながち主人に限った事でもなかろう。分
らぬところには馬鹿に出来ないものが潜伏して、

測るべからざる辺には何だか^{けだか}
気^{けだか}高い心持が起
るものだ。それだから俗人はわからぬ事をわかつ

たように^{ふいちょう}吹^{ふいちょう}聴^{ふいちょう}するにも^{かかわ}
係^{かかわ}らず、学者は
わかつた事をわからぬように講釈する。大学の講

義でもわからん事を^{しゃべ}
喋^{しゃべ}舌^{しゃべ}る人は評判がよくつ
てわかる事を説明する者は人望がないのでもよ

く知れる。主人がこの手紙に敬服したのも意義が
明瞭であるからではない。その主旨が^{なへん}
那^{なへん}辺に存

するかほとんど^{とら}
捕^{とら}え難いからである。急に

なまこ ぐそ
海鼠が出て来たり、せつな 糞が出てくるから
である。だから主人がこの文章を尊敬する唯一の

理由は、^{どうけ}道家で道德経を尊敬し、^{じゅか}儒家で
^{えききょう}易経を尊敬し、^{ぜんけ}禅家で^{りんざいろく}臨済録を尊
敬すると一般で全く分らんからである。^{ただ}但し全
然分らんでは気がすまんから勝手な註釈をつけ

てわかった顔だけはする。わからんものをわかつ
たつもりで尊敬するのは昔から愉快なものであ

る。――主人は^{うやうや}恭しく^{はっぶんたい}八分体の名筆
を巻き納めて、これを机上に置いたまま

^{ふところ}懐^{めいそう}手をして冥想に沈んでいる。

ところへ「頼む頼む」と玄関から大きな声で案
内を乞う者がある。声は迷亭のようだが、迷亭に
似合わずしきりに案内を頼んでいる。主人は先か

ら書齋のうちにその声を聞いているのだが懷手

のまま ^{ごう}毫 も動こうとしない。取次に出るのは主人の役目でないという主義か、この主人は決して

書齋から挨拶をした事がない。下女は

さっきせんたくシャボン
先刻洗濯石鹼を買いに出た。細君は

はばかりである。すると取次に出べきものは吾輩だけになる。吾輩だって出るのはいやだ。すると

客人は ^{くつぬぎ}沓脱から敷台へ飛び上がって障子を
開け放ってつかつか上り込んで来た。主人も主人

だが客も客だ。座敷の方へ行っただけだと思つた

ふすま
襖を二三度あけたり閉てたりして、今度は書齋の方へやってくる。

「おい ^{じょうだん}冗談 じゃない。何をしているんだ、
御客さんだよ」

「おや君か」

「おや君かもしれないもんだ。そこにいるなら何とか
云えばいいのに、まるで空^{あきや}家のようじゃない
か」

「うん、ちと考え事があるもんだから」

「考えていたって通れくらいは云えるだろう」

「云えん事もないさ」

「相変らず度胸がいいね」

「せんだってから精神の修養を^{つと}力めているん
だもの」

「物好きだな。精神を修養して返事が出来なくな
った日には来客は御難だね。そんなに落ちつかれ
ちゃ困るんだぜ。実は僕一人来たんじゃないよ。
大変な御客さんを連れて来たんだよ。ちょっと出

て逢ってくれ給え」

「誰を連れて来たんだい」

「誰でもいいからちょっと出て逢ってくれたまえ。是非君に逢いたいと云うんだから」

「誰だい」

「誰でもいいから立ちたまえ」

ふと
主人は 懐 手 のままぬっと立ちながら「また人を 担 ぐつもりだろう」と 椽 側 へ出て何の気もつかずに客間へ這入り込んだ。すると六尺の床を正面に一個の老人が 肅 然 と 端 坐 して 控 えている。主人は思わず懐から両手を出してぺたりと 唐 紙 の 傍 へ尻を片づけてしまった。これでは老人と同じく西向きであるから
むかし 堅 氣 の人は

礼義はやかましいものだ。

「さあどうぞあれへ」と床の間の方を指して主人
を^{うな}促^ながす。主人は両三年前までは座敷はどこへ
坐っても構わんものと心得ていたのだが、その後^ご
ある人から床の間の講釈を聞いて、あれは上段の
ま^ま間の变化したもので、^{じょうし}上^し使^しが坐わる所だと悟
って以来決して床の間へは寄りつかない男であ
る。ことに見ず知らずの年長者が^{がん}頑^んと構えてい
るのだから^{じょうざ}上^し座^ざどころではない。挨拶さえ
ろく^{ろく}
碌^{ろく}には出来ない。一応頭をさげて
「さあどうぞあれへ」と向うの云う通りを繰り返
した。

「いやそれでは御挨拶が出来かねますから、どう
ぞあれへ」

「いえ、それでは……どうぞあれへ」と主人はい
い加減に先方の口上を真似ている。

「どうもそう、^{ごけんそん}御謙遜では恐れ入る。かえっ
て手前が痛み入る。どうか御遠慮なく、さあどう
ぞ」

「御謙遜では……恐れますから……どうか」主人
は^{まっか}真赤になって口をもごもご云わせている。精
神修養もあまり効果がないようである。迷亭君は
^{ふすま}襖の影から笑いながら立見をしていたが、も
ういい時分だと思って、^{うし}後ろから主人の尻を押
しやりながら

「まあ出たまえ。^{からかみ}そう唐紙へくつついては僕
が坐る所がない。遠慮せずに前へ出たまえ」と無
理に割り込んでくる。主人はやむを得ず前の方へ

すり出る。

「苦沙弥君これが毎々君に噂をする静岡の伯父だよ。伯父さんこれが苦沙弥君です」

「いや始めて御目にかかります、毎度迷亭が出て御邪魔を致すそうで、いつか参上の上御高話を拝聴致そうと存じておりましたところ、幸い

こんにち

今日は御近所を通行致したもので、御礼
かたがた

旁 伺った訳で、どうぞ御見知りおかれまして今後共 ^{よろ}宜しく」と ^{むか}昔し風な口上を ^{よど}淀みなく述べたてる。主人は交際の狭い、無口な人間で

ある上に、こんな古風な ^{じい}爺さんとはほとんど出

会った事がないのだから、最初から多少 ^ば場うての

気味で ^{へきえき}辟易していたところへ、 ^{とうとう}滔々と浴

びせかけられたのだから、 ^{ちょうせん}朝鮮 ^{にんじん}仁参も

あめ
飴 ン棒の状袋もすっかり忘れてしまったただ
苦しまぎれに妙な返事をする。

「私も……私も……ちょっと伺がうはずであり
ましたところ……何分よろしく」と云い終って頭
を少々畳から上げて見ると老人は いま 未 だに平伏
しているので、はっと恐縮してまた頭をぴたりと
着けた。

老人は呼吸を計って首をあげながら「私ももと
はこちらに屋敷も あ 在って、永らく御膝元でくらし
たのですがすが、 瓦 解 の折にあちらへ参ってか
らとんと出てこんのでな。今来て見るとまるで方
角も分らんくらいで、――迷亭にでも つ 伴れてある
いてもらわんと、とても ようたし 用 達 も出来ません。
そうそう へん ごにゅうこく
滄 桑 の 変 とは申しながら、 御 入 国 以

来三百年も、あの通り將軍家の……」と云いかけると迷亭先生面倒だと心得て

「伯父さん將軍家もありがたいかも知れませんが、明治の^よ代も結構ですぜ。昔は赤十字なんてものもなかったでしょう」

「それはない。赤十字などと称するものは全くない。ことに宮様の御顔を拝むなどと云う事は明治の^{みよ}御代でなくては出来ぬ事だ。わしも長生きをした御蔭でこの通り^{こんにち}今日の總會にも出席するし、宮殿下の御声もきくし、もうこれで死んでもいい」

「まあ久し振りで東京見物をするだけでも得ですよ。苦沙弥君、伯父はね。今度赤十字の總會があるのでわざわざ静岡から出て来てね、今日いっ

しょに上野へ出掛けただが今その帰りがけな
んだよ。それだからこの通り先日僕が白木屋へ注
文したフロックコートを着ているのさ」と注意す
る。なるほどフロックコートを着ている。フロッ
クコートは着ているがすこしもからだに合わな

そで えり ぴら せなか
い。袖 が長過ぎて、襟 がおっ 開 いて、背 中
へ池が出来て、わき
腋 の下が釣るし上がっている。

ぶかっこう
いくら 不 恰 好 に作ろうと云ったって、こうま
で念を入れて形を くず
崩 す訳にはゆかないだろう。

しろえり
その上白シャツと 白 襟 が離れ離れになって、
あお のどぼとけ
仰 むくと間から 咽 喉 仏 が見える。第一黒い
襟飾りが襟に属しているのか、シャツに属してい

はんぜん
るのか 判 然 しない。フロックはまだ我慢が出
来るが しらが まげ
白 髪 のチョン 髷 ははなはだ奇観であ

る。評判の鉄^{てっせん}扇^つはどうかと目を注げると膝の横にちゃんと引きつけている。主人はこの時ようやく本心に立ち返って、精神修養の結果を存分に老人の服装に応用して少々驚いた。まさか迷亭の話ほどではなかろうと思っていたが、逢って見ると話以上である。もし自分のあばたが歴史的研究の材料になるならば、この老人のチョン^{まげ}髻や鉄扇はたしかにそれ以上の価値がある。主人はどうかしてこの鉄扇の由来を聞いて見たいと思ったが、まさか、打ちつけに質問する訳には行かず、と云って話を途切らすのも礼に欠けると思って「だいぶ人が出ましたろう」と^{きわ}極めて尋常な問をかけた。

「いや非常な人で、それでその人が皆わしをじろ

じろ見るので――どうも近来は人間が物見高く
な^{むか}ったようだがすな。昔 しはあんなではなかつ
たが」

「ええ、さよう、昔はそんなではなかったですな」
と老人らしい事を云う。これはあながち主人が知^し
たかぶ^{たかぶ}う高^{もうろう}振りをした訳ではない。ただ 朦^さ朧^さたる
頭脳から好い加減に流れ出す言語と見れば差^さし
つか^{つか}支^支えない。

「それにな。皆この^{かぶとわ} 甲^{かぶとわ} 割^割りへ目を着けるの
で」

「その鉄扇は^{だいぶ} 大^{だいぶ} 分^分 重いものでございましょう」

「苦沙弥君、ちょっと持って見たまえ。なかなか
重いよ。伯父さん持たして御覧なさい」

老人は重たそうに取り上げて「失礼ですが」
と主人に渡す。京都の黒谷で参詣人が
れんしょうぼう たち いただ
蓮生坊の太刀を戴くようなかたで、
苦沙弥先生しばらく持っていたが「なるほど」と
云ったまま老人に返却した。

「みんながこれを鉄扇鉄扇と云うが、これは
かぶとわり とな
甲割と称えて鉄扇とはまるで別物で
……」

「へえ、何にしたものでございましょう」

「兜を割るので、一一敵の目がくらむ所を撃ちと
ったものでがす。楠正成時代から用い
たようで……」

「伯父さん、そりゃ正成の甲割ですかね」

「いえ、これは誰のかわからん。しかし時代は古

けんむじだい
い。建武時代の作かも知れない」

「建武時代かも知れないが、寒月君は弱っていましたぜ。苦沙弥君、今日帰りにちょうどいい機会だから大学を通り抜けるついでに理科へ寄って、物理の実験室を見せて貰ったところがね。この甲割が鉄だものだから、磁力の器械が狂って大騒ぎさ」

「いや、そんなはずはない。これは建武時代の鉄で、しょう性のいい鉄だから決してそんなおそ虞れはない」

「いくら性のいい鉄だってそうはいきませんよ。現に寒月がそう云ったから仕方がないです」

「寒月というのは、あのガラスだます球を磨っている男かい。今の若さに気の毒な事だ。もう少し何か

やる事がありそうなものだ」

「^{かわいそう}可愛想に、あれだって研究でさあ。あの球を磨り上げると立派な学者になれるんですからね」

「玉を^す磨りあげて立派な学者になれるなら、誰にでも出来る。わしにでも出来る。ビードロやの主人にでも出来る。ああ云う事をする者を^{かんど}漢土では^{きゅうじん}玉人と称したもので至って身分の軽いものだ」と云いながら主人の方を向いて暗に賛成を求める。

「なるほど」と主人はかしこまっている。

「すべて今の世の学問は皆^{けいじか}形而下の学でちょっと結構なようだが、いざとなるとすこしも役には立ちませんてな。昔はそれと違って^{さむらい}侍は

いのちが　しょうばい
皆　命　懸　けの　商　買　だから、いざと云う時
ろうばい
に　狼　狽　せぬように心の修業を致したもので、
御承知でもあらっしゃろうがなかなか玉を磨っ
たり針金を^よ縋ったりする^{たやす}ような容　易　いもので
はなかったのがすよ」

「なるほど」とやはりかしこまっている。

「伯父さん心の修業と云うものは玉を磨る代り
ふところで
に　懷　手　をして坐り込んでるんでしょう」
「それだから困る。決してそんな^{ぞうさ}造　作　のないも
のではない。^{もうし　きゅうほうしん}孟子は　求　放　心　と云われた
くらいだ。^{しょうこうせつ　しんようほう}邵　康　節　は　心　要　放　と説い
た事もある。また^{ぶっか}仏　家　では　^{ちゅうほうおしょう}中　峯　和　尚
と云うのが^{ぐふたいてん}具　不　退　転　と云う事を教えている。
なかなか容易には分らん」

「とうてい分りっこありませんね。全体どうすればいいんです」

「御前は 沢 菴 禅 師 の
ふどうちしんみょうろく
不動智神妙録 というものを読んだ事
があるかい」

「いいえ、聞いた事ありません」

「心をどこに置こうぞ。敵の身の ^{はたらき} 働 に心を
置けば、敵の身の働に心を取らるるなり。敵の
たち
太刀に心を置けば、敵の太刀に心を取らるるなり。
敵を切らんとするところに心を置けば、敵を切ら
んとするところに心を取らるるなり。わが太刀に
心を置けば、我太刀に心を取らるるなり。われ切
られじとするところに心を置けば、切られじと思
うところに心を取らるるなり。人の ^{かまえ} 構 に心を

置けば、人の構に心を取らるるなり。とかく心の置きどころはないとある」

「よく忘れずに ^{あんしょう} 暗誦 したものですな。伯父さんもなかなか記憶がいい。長いじゃありませんか。苦沙弥君分ったかい」

「なるほど」と今度もなるほどですましてしまった。

「なあ、あなた、そうでござりましょう。心をどこに置こうぞ、敵の身の働に心を置けば、敵の身の働に心を取らるるなり。敵の太刀に心を置けば……」

「伯父さん苦沙弥君はそんな事は、よく心得ているんですよ。近頃は毎日書齋で精神の修養ばかりしているんですから。客があっても取次に出ない

くらい心を置き去りにしているんだから大丈夫
ですよ」

「や、それは^{ごきどく}御奇特な事で――御前などもちと
ごいっしょにやったらよかろう」

「へへへそんな暇はありませんよ。伯父さんは自
分が楽なからだだもんだから、人も遊んでと思
っていらっしゃるんでしょう」

「實際遊んでるじゃないかの」

「ところが^{かんちゅう}閑中^{おのず}自^{ぼう}から忙ありでね」

「そう、^{そこつ}粗忽だから修業をせんといかないと云
うのよ、忙中^{おのずか}自^{かん}ら閑ありと云う^{せいく}成句は
あるが、閑中自ら忙ありと云うのは聞いた事がな
い。なあ苦沙弥さん」

「ええ、どうも聞きませんようで」

「ハハハハそうなっちゃあ ^{かな}敵 ^わない。時に伯父
さんどうです。久し振りで東京の ^{うなぎ}鰻 でも食っ
ちゃあ。 ^{ちくよう}竹 ^{おご}葉 でも ^さ奢 りましょう。これから
電車で行くとすぐです」

「鰻も結構だが、今日はこれから ^{はら}すい 原 へ行く
約束があるから、わしはこれで御免を ^{こうむ}蒙 ろ
う」

「ああ ^{すぎはら}杉 原 ですか、あの ^{じい}爺 さんも達者です
ね」

「^{すぎはら}杉 原 ではない、^{はら}すい 原 さ。御前はよく間
違ばかり云って困る。他人の姓名を取り違えるの
は失礼だ。よく気をつけんといけない」

「だって ^{すぎはら}杉 原 とかいてあるじゃありません

か」

すぎはら はら
「杉 原 と書いてすい 原 と読むのさ」

「妙ですね」

「なに妙な事があるものか。 みょうもくよ
名 目 読 みと云
って昔からある事さ。 きゅういん わみょう
蚯 蚓 を和 名 でみ
みずと云う。あれは目見ずの名目よみで。がま
蝦蟆の
事をかいると云うのと同じ事さ」

「へえ、驚ろいたな」

「蝦蟆を打ち殺すと あおむ
仰 向 きにかえる。それを名
目読みにかいると云う。 すきがき がき
透 垣 をすい 垣、
くきたち すいはら
茎 立 をくく立、皆同じ事だ。杉 原 をすぎ
原などと云うのは いなか
田 舎 ものの言葉さ。少し気を
付けないと人に笑われる」

「じゃ、その、すい原へこれから行くんですか。

困ったな」

「なに ^{いや} 厭 なら御前は行かんでもいい。わし一人で行くから」

「一人で行けますかい」

「あるいてはむずかしい。車を雇って頂いて、ここから乗って行こう」

主人は ^{かしこ} 畏 まって直ちに ^{おさん} 御 三 を車屋へ走らせる。老人は長々と挨拶をしてチョン

まげあたま
^髷 頭 へ山高帽をいただいて帰って行く。迷亭はあとへ残る。

「あれが君の伯父さんか」

「あれが僕の伯父さんさ」

「なるほど」と再び ^{ざぶとん} 座 蒲 団 の上に坐ったなり
ふところで
懐 手 をして考え込んでいる。

「ハハハ豪傑だろう。僕もああ云う伯父さんを持って仕合せなものさ。どこへ連れて行ってもあの通りなんだぜ。君驚ろいたろう」と迷亭君は主人を驚ろかしたつもりで ^{おおい}大に喜んでいる。

「なにそんなに驚きゃしない」

「あれで驚かなけりゃ、胆力の ^{すわ}据ったもんだ」

「しかしあの伯父さんはなかなかえらいところがあるようだ。精神の修養を主張するところなぞ ^{おおい}は ^大に敬服していい」

「敬服していいかね。君も今に六十くらいになるとやっぱりあの伯父見たように、時候おくれになるかも知れないぜ。しっかりしてくれたまえ。時候おくれの廻り持ちなんか気が ^き利かないよ」

「君はしきりに時候おくれを気にするが、時と場合によらず、時候おくれの方がえらいんだぜ。第一今の学問と云うものは先へ先へと行くだけで、どこまで行っただって際限はありゃしない。とうてい満足は得られやしない。そこへ行くと東洋流の学問は消極的で大に ^{あじわい} 味 がある。心そのものの修業をするのだから」とせんだって哲学者から承わった通りを自説のように述べ立てる。

「えらい事になって来たぜ。何だか ^{やぎどくせん} 八 木 独 仙 君のような事を云ってるね」

八木独仙と云う名を聞いて主人ははっと驚ろいた。実はせんだって ^{がりょうくつ} 臥 竜 窟 を訪問して主人を説服に及んで ^{ゆうぜん} 悠 然 と立ち帰った哲学者と云うのが取も直さずこの八木独仙君であって、

今主人が^{しかつめ}鹿爪らしく述べ立てている議論は
全くこの八木独仙君の受売なのであるから、知ら
んと思った迷亭がこの先生の名を

かんふようはつ
間不容髪の際に持ち出したのは暗に主人
の一夜作りの^{かりばな}飯^{くじ}鼻を挫いた訳になる。

「君独仙の説を聞いた事があるのかい」と主人は
けんのん^お
剣呑だから念を推して見る。

「聞いたの、聞かないのって、あの男の説ときた
ら、十年前学校にいた時分と^{こんにち}今日と少しも変
りゃしない」

「真理はそう変わるものじゃないから、変らないと
ころがたのもしいかも知れない」

「まあそんな^{ひいき}鼻負があるから独仙もあれで立
ち行くんだね。第一八木と云う名からして、よく

出来てるよ。あの ^{ひげ}髯 が君全く ^{やぎ}山羊だからね。そ
うしてあれも寄宿舍時代からあの通りの

かつこう
恰 好 で生えていたんだ。名前の独仙なども
ふる
振 ったものさ。 ^{むか}昔 し僕のところへ泊りがけに
来て例の通り消極的の修養と云う議論をしてね。

いつまで立っても同じ事を繰り返してやめない

から、僕が君もう ^ね寝ようじゃないかと云うと、先
生気楽なものさ、いや僕は眠くないとすまし切っ
て、やっぱり消極論をやるには迷惑したね。仕方
がないから君は眠くなかろうけれども、僕の方は
大変眠いのだから、どうか寝てくれたまえと頼む
ようにして寝かしたまではよかったが――その

^{ねずみ}晩 鼠 が ^{かじ}出て独仙君の鼻のあたまを 噛 っ
てね。夜なかに大騒ぎさ。先生悟ったような事を云

うけれども命は依然として惜しかったと見えて、
非常に心配するのさ。鼠の毒が^{そうしん}総身にまわると大変だ、君どうかしてくれと責めるには閉口したね。それから仕方がないから台所へ行っ
かみざれ^は紙片へ飯粒を貼ってごまかしてやったあね」

「どうして」

「これは舶来^{こうやく}の膏薬で、近来^{ドイツ}独逸の名医が
発明したので、^{インドじん}印度人などの毒蛇^かに噛まれた
時に用いると即効があるんだから、これさえ貼っ
ておけば大丈夫だと云ってね」

「君はその時分からごまかす事に妙を得ていた
んだね」

「……すると独仙君はああ云う好人物だから、全

くだと思って安心してぐうぐう寝てしまったの

さ。あくる日起きて見ると膏藥の下から糸屑^{いとくず}

がぶらさがって例の山^{やぎ}羊^{ひげ}髯に引っかかっていた

たのは滑^{こっけい}稽だったよ」

「しかしあの時分より大^{だいぶ}分えらくなかったよう
だよ」

「君近頃逢ったのかい」

「一週間ばかり前に来て、長い間話しをして行っ
た」

「どうりで独仙流の消極説を振り舞わすと思っ
た」

「実はその時大^{おお}に感心してしまったから、僕
も大に奮発して修養をやろうと思ってるところ
なんだ」

「奮発は結構だがね。あんまり人の云う事を^ま真に受けると馬鹿を見るぜ。一体君は人の言う事を何でもかでも正直に受けるからいけない。独仙も口だけは立派なものだがね、いざとなると御互と同じものだよ。君九年前の大地震を知ってるだろう。あの時寄宿の二階から飛び降りて怪我をしたものは独仙君だけなんだからな」

「あれには当人^{だいぶ}大分説があるようじゃないか」

「そうさ、当人に云わせるとすこぶるありがたいものさ。禅の^{きほう}機鋒は^{しゅんしょう}峻峭なもので、い^{せっか}わゆる石火の^き機となると^{こわ}怖いくらい早く物に応ずる事が出来る。ほかのものが地震だと云っ^{うろた}て狼狽えているところを自分だけは二階の窓

から飛び下りたところに修業の効があらわれて
嬉しいと云って、^{びっこ} 跛 を引きながらうれしがっ
ていた。負惜みの強い男だ。一体 ^{ぜん} 禅 とか ^{ぶつ} 仏 と
か云って騒ぎ立てる連中ほどあやしいのはない
ぜ」

「そうかな」と苦沙弥先生少々腰が弱くなる。

「この間来た時禅宗坊主の ^{ねごと} 寝言 見たような事
を何か云ってったろう」

「うん ^{でんこうえいり} 電光影裏に ^{しゅんぷう} 春風 をきるとか
云う句を教えて行ったよ」

「その電光さ。あれが十年前からの ^{おはこ} 御箱 なんだ
からおかしいよ。 ^{むかくぜんじ} 無覚禅師 の電光ときたら寄
宿舎中誰も知らないものはないくらいだった。そ
れに先生時々せき込むと間違えて電光影裏を

さか
逆さまに春風影裏に電光をきると云うから面
白い。今度ためして見たまえ。^{むこう}向で落ちつき
払って述べたてているところを、こっちでいろい
ろ反対するんだね。するとすぐ^{てんとう}顛倒して妙な
事を云うよ」

「君のようないたずらものに逢っちゃ^{かな}叶わな
い」

「どっちがいたずら者だか分りゃしない。僕は禅
坊主だの、悟ったのは大嫌だ。僕の近所に
^{なんぞういん}南蔵院と云う寺があるが、あすこに八十ば
かりの隠居がいる。それでこの間の^{ゆうだち}白雨の時
じない^{らい}寺内へ雷が落ちて隠居のいる庭先の松の木
^さを割いてしまった。ところが^{おしょう}和尚泰然として
平気だと云うから、よく聞き合わせて見るとから

つんば
聾 なんだね。それじゃ泰然たる訳さ。大概そ
んなものさ。独仙も一人で悟ってればいいのだ
が、ややともすると人を誘い出すから悪い。現に
独仙の御蔭で二人ばかり きちがい 氣 狂 にされている
からな」

「誰が」

「誰がって。一人は りのとうぜん 理 野 陶 然 さ。独仙の御蔭
で おおい 大 に禅学に こ 凝り固まって鎌倉へ出掛けて
行って、とうとう出先で氣狂になってしまった。

えんがくじ
円 覺 寺 の前に汽車の踏切りがあるだろう、あ
の踏切り うち 内 へ飛び込んでレールの上で座禅を
するんだね。それで向うから来る汽車をとめて見
せると云う だいきえん 大 氣 焰 さ。もっとも汽車の方で留
ってくれたから一命だけはとりとめたが、その代

り今度は火に^い入って焼けず、水に入^{おぼ}って溺れぬ
こんごうふえ
金剛不壊のからだだと号^{じない}して寺内の
はすいけ はい
蓮池へ這入^{はい}ってぶくぶくあるき廻ったもん
だ」

「死んだかい」

「その時^{さいわい}も 幸、道場の坊主が通りかかって
助けてくれたが、その^ご後東京へ帰ってから、とう
とう腹膜炎で死んでしまった。死んだのは腹膜炎
だが、腹膜炎になった原因は僧堂で麦飯や
まんねんづけ
万年漬を食ったせいだから、つまるところ
は間接に独仙が殺したようなものさ」

「むやみに熱中するの^よも善^あし悪^あししだね」と主人
はちょっと気味のわるいという顔付をする。

「本当にさ。独仙にやられたものがもう一人同窓

中にある」

「あぶないね。誰だい」

「たちまちょうばいくん
「立町老梅君さ。あの男も全く独仙に
そそのかされて^{うなぎ}鰻が天上するような事ばかり
言っていたが、とうとう君本物になってしまっ
た」

「本物たあ何だい」

「とうとう鰻が天上して、豚が仙人になったの
さ」

「何の事だい、それは」

「八木が独仙なら、立町は^{ぶたせん}豚仙さ、あのくら
い食い意地のきたない男はなかったが、あの食意
地と禅坊主のわる意地が^{へいはつ}併発したのだから
助からない。始めは僕らも気がつかなかったが今

から考えると妙な事ばかり並べていたよ。僕のうちなどへ来て君あの松の木へカツレツが飛んで
きやしませんかの、僕の国では ^{かまぼこ}蒲 鉾 が板へ乗
って泳いでいますのって、しきりに警句を吐いた
ものさ。ただ吐いているうちはよかったが君表の
どぶへ ^{きん}金 とんを掘りに行きましょうと ^{うな}促 が
すに至っては僕も降参したね。それから ^{にさんち}二 三日
するとついに豚仙になって巢鴨へ収容されてし
まった。元来豚なんぞが気狂になる資格はないん
だが、全く独仙の御蔭であすこまで漕ぎ付けたん
だね。独仙の勢力もなかなかえらいよ」

「へえ、今でも巢鴨にいるのかい」

「いるだんじゃない。 ^{じだいきょう}自 大 狂 で ^{だいきえん}大 気 焰
を吐いている。近頃は立町老梅なんて名はつまら

ないと云うので、^{みずか}自^{てんどうこうへい}ら天道公平と号
して、天道の^{ごんげ}権化をもって任じている。すさま
じいものだよ。まあちょっと行って見たまえ」

「天道公平？」

「天道公平だよ。気狂の癖にうまい名をつけたも
のだね。時々は^{こうへい}孔平とも書く事がある。それ
で何でも世人が迷ってるからぜひ救ってやりた
いと云うので、むやみに友人や何かへ手紙を出す
んだね。僕も四五通貰ったが、中にはなかなか長
い奴があって不足税を二度ばかりとられたよ」

「それじゃ僕の^{ところ}所へ来たのも老梅から来たん
だ」

「君の所へも来たかい。そいつは妙だ。やっぱり
赤い状袋だろう」

「うん、真中が赤くて左右が白い。一風変った状袋だ」

「あれはね、わざわざ支那から取り寄せるのだそうだよ。天の道は白なり、地の道は白なり、人は中間に^あ在って赤しと云う豚仙の格言を示したんだって……」

「なかなか^{いんねん}因縁のある状袋だね」

「気狂だけに^{おおいこ}大に凝ったものさ。そうして気狂になっても食意地だけは依然として存しているものと見えて、毎回必ず食物の事がかいてあるから奇妙だ。君の所へも何とか云って来たろう」

「うん、^{なまこ}海鼠の事がかいてある」

「老梅は海鼠が好きだったからね。もっともだ。」

それから？」

「それから^{ふぐ}河豚と^{ちょうせん}朝鮮^{にんじん}仁参か何か書いてある」

「河豚と朝鮮仁参の取り合せは^{うま}旨いね。おおかた河豚を^{あた}食って中^{せん}ったら朝鮮仁参を煎じて飲めとでも云うつもりなんだろう」

「そうでもないようだ」

「そうでなくても構わないさ。どうせ氣狂だもの。それっきりかい」

「まだある。苦沙弥先生御茶でも上がれと云う句がある」

「アハハハ御茶でも上がればきびし過ぎる。それ^{おおい}で大に君をやり込めたつものに違ない。大出来だ。天道公平君万歳だ」と迷亭先生は面白がっ

て、大に笑い出す。主人は少からざる尊敬をもつ

て反覆^{どくしょう}読^{しゅ}誦^{じゅ}した書^{しょ}翰^{かん}の差出人が

金^{きん}箔^{ぱく}

つきの狂人であるを知ってから、最前の
熱心と苦心が何だか無駄骨のような気がして腹

立たしくもあり、また^{ふうてんびょう}瘋^{ふう}癲^{てん}病^{びょう}者の文章を

さほど心^{がんみ}勞^{らう}して翫^{くわん}味^みしたかと思うと恥ずかし

くもあり、最後に狂人の作にこれほど感服する以
上は自分も多少神経に異状がありはせぬかとの

疑念もあるので、立腹と、^{ざんき}慚^{ざん}愧^きと、心配の合併

した状態で何だか落ちつかない顔付をして^{ひか}控^{ひか}
えている。

折から表格子をあららかに開けて、重い靴の音
が二た足ほど^{くつぬぎ}沓^{くつ}脱^{ぬぎ}に響いたと思ったら「ちょ
っと頼みます、ちょっと頼みます」と大きな声が

する。主人の尻の重いに反して迷亭はまたすこぶ
る気軽な男であるから、御^{おさん}三の取次に出るのも
待たず、通れと云いながら隔ての中の^ま間を二た足
ばかりに飛び越えて玄関に^{おど}躍り出した。人のう
ちへ案内も乞わずにつかつか^{はい}這入り込むところ
は迷惑のようだが、人のうちへ這入った以上は書
生同様取次を^{つと}務めるからはなはだ便利である。
いくら迷亭でも御客さんには相違ない、その御客
さんが玄関へ出張するのに主人たる苦沙弥先生
が座敷へ構え込んで動かん法はない。普通の男な
らあとから引き続いて出陣すべきはずであるが、
そこが苦沙弥先生である。平氣に座布団の上へ尻
を落ちつけている。^{ただ}但し落ちつけているのと、
落ちついているのとは、その趣は^{だいぶ}大分似ている

が、その実質はよほど違う。

玄関へ飛び出した迷亭は何かしきりに弁じていたが、やがて奥の方を向いて「おい御主人ちょっと御足労だが出てくれたまえ。君でなくっちゃ、間に合わない」と大きな声を出す。主人はやむを得ず^{ふところ}懐^で手^でのままのそりのそりと出てくる。見ると迷亭君は一枚の名刺を握ったまましゃがんで挨拶をしている。すこぶる威厳のない腰つきである。その名刺には警視庁刑事巡查

よしだとらぞう
吉田虎蔵とある。虎蔵君と並んで立っているのは二十五六の^{せい}背^の高い、いなせな^{とうざん}唐^の棧^のずくめの男である。妙な事にこの男は主人と同じ

く懐手をしたまま、無言で^{つった}突^つ立^たっている。何だか見たような顔だと思ってよくよく観察すると、

見たようなところじゃない。この間深夜御来訪になつて^{やま いも}山の芋を持って行かれた泥棒君である。おや今度は白昼公然と玄関からおいでになったな。

「おいこの^{かた}方は刑事巡査でせんだったの泥棒をつらまえたから、君に出頭しろと云うんで、わざわざおいでになったんだよ」

主人はようやく刑事が踏み込んだ理由が分つたと見えて、頭をさげて泥棒の方を向いて
ていねい
鄭寧に御辞儀をした。泥棒の方が虎蔵君より男振りがいいので、こっちが刑事だと^{はやがてん}早合点をしたのだろう。泥棒も驚ろいたに相違ないが、
^{わたし}
まさか私が泥棒ですよと断わる訳にも行かなかったと見えて、すまして立っている。やはり

懷手のままである。もっとも ^{てじょう}手錠をはめてい
るのだから、出そうと云っても出る ^{きづかい}氣遣はない。通例のものならこの様子でたいていはわかる
はずだが、この主人は当世の人間に似合わず、む
やみに役人や警察をありがたがる癖がある。

^{おかみ}御上の御威光となると非常に恐いものと心
得ている。もっとも理論上から云うと、巡査なぞ
は自分達が金を出して番人に雇っておくのたく
らいの事は心得ているのだが、実際に臨むといや
にへえへえする。主人のおやじはその昔場末の名
主であったから、上の者にびよこびよこ頭を下げ
て暮した習慣が、因果となってかように子に ^{むく}酬
ったのかも知れない。まことに気の毒な至りであ
る。

巡査はおかしかったと見えて、にやにや笑いながら「あしたね、午前九時までに^{にほんづつみ}日本堤の分署まで来て下さい。――盗難品は何と何でしたかね」

「盗難品は……」と云いかけたが、あいにく先生たいがい忘れている。ただ覚えているのは^{たたらさんぺい}多々良三平の山の芋だけである。山の芋などはどうしても構わんと思ったが、盗難品は……と云^{よたろう}いかけてあとが出ないのはいかにも与太郎の^{ていさい}ようで体裁がわるい。人が盗まれたのならいざ知らず、自分が盗まれておきながら、明瞭の答が出来んのは^{いちにんまえ}一人前ではない証拠だと、思い切って「盗難品は……山の芋一箱」とつけた。

泥棒はこの時よほどおかしかったと見えて、下を向いて着物の^{えり}襟へあごを入れた。迷亭はアハハハと笑いながら「山の芋がよほど惜しかったと見えるね」と云った。巡査だけは存外真面目である。

「山の芋は出ないようだがほかの物件はたいがい戻ったようです。――まあ来て見たら分るでしょう。それでね、下げ渡したら^{うけしよ}請書が入るから、^{いんぎょう}印形を忘れずに持っておいでなさい。――九時までに来なくってはいかん。

にほんづつみぶんしよ
日本堤分署です。――浅草警察署の
かんかつない
管轄内の日本堤分署です。――それじゃ、
さようなら」と^{ひと}独りで弁じて帰って行く。泥棒君も続いて門を出る。手が出せないの、門をし

める事が出来ないから開け放しのまま行ってしまった。恐れ入りながらも不平と見えて、主人は頬をふくらして、ぴしゃりと立て切った。

「アハハハ君は刑事を大変尊敬するね。つねにあ
あ云う ^{きょうけん} 恭 謙 な態度を持ってるといい男だ
が、君は巡査だけに ^{ていねい} 鄭 寧 なんだから困る」
「だってせっかく知らせて来てくれたんじゃない
いか」

「知らせに来るたって、先は商売だよ。当り前
にあしらってりゃ沢山だ」

「しかしただの商売じゃない」

「無論ただの商売じゃない。探偵と云ういけすか
ない商売さ。あたり前の商売より下等だね」

「君そんな事を云うと、ひどい目に逢うぜ」

「ハハハそれじゃ刑事の悪口^{わるくち}はやめにしよう。しかし刑事を尊敬するのは、まだしもだが、泥棒を尊敬するに至っては、驚かざるを得んよ」

「誰が泥棒を尊敬したい」

「君がしたのさ」

「僕が泥棒に近付きがあるもんか」

「あるもんかって君は泥棒にお辞儀をしたじゃないか」

「いつ？」

「たった今^{へいしんていとう}平身低頭したじゃないか」

「馬鹿あ云ってら、あれは刑事だね」

「刑事があんななりをするものか」

「刑事だからあんななりをするんじゃないか」

がんこ
「頑固だな」

「君こそ頑固だ」

「まあ第一、刑事が人の所へ来てあんなに
ふところで 懐 手 なんかして、 つった 突 立 っているものか
ね」

「刑事だって懐手をしないとは限るまい」

「そう猛烈にやって来ては恐れ入るがね。君がお
辞儀をする間あいつは始終あのままで立ってい
たのだぜ」

「刑事だからそのくらいの事はあるかも知れん
さ」

「どうも自信家だな。いくら云っても聞かない
ね」

「聞かないさ。君は口先ばかりで泥棒だ泥棒だと

云ってるだけで、その泥棒がはいるところを見届
けた訳じゃないんだから。ただそう思って^{ひと}独り
で強情を張ってるんだ」

迷亭もここにおいてとうてい^{さいど}濟度すべから
ざる男と断念したものと見えて、例に似ず黙って
しまった。主人は久し振りで迷亭を^{へこ}凹ましたと
思って大得意である。迷亭から見ると主人の価値
は強情を張っただけ下落したつもりであるが、主
人から云うと強情を張っただけ迷亭よりえらく

なったのである。世の中にはこんな^{とんちんかん}頓珍漢
な事はまゝある。強情さえ張り通せば勝った気で
いるうちに、当人の人物としての相場は^{はる}遙かに
下落してしまう。不思議な事に頑固の本人は死ぬ
まで自分は^{めんぼく}面目を施こしたつもりかなにか

で、その時以後人が ^{けいべつ} 軽蔑 して相手にしてくれないのだとは夢にも悟り得ない。幸福なものである。こんな幸福を豚的幸福と名づけるのだそうだ。

「ともかくもあした行くつもりかい」

「行くとも、九時までに来いと云うから、八時から出て行く」

「学校はどうする」

「休むさ。学校なんか」と ^{たた} 擲 きつけるように云ったのは ^{さかん} 壮 なものだった。

「えらい ^{いきおい} 勢 だね。休んでもいいのかい」

「いいとも僕の学校は月給だから、差し引かれる ^{きづかい} 気遣 はない、大丈夫だ」と真直に白状してしまった。ずるい事もずるいが、単純なことも単純

なものだ。

「君、行くのはいいが路を知ってるかい」

「知るものか。車に乗って行けば訳はないだろう」とぶんぶんしている。

「静岡の伯父に譲らざる東京通なるには恐れ入る」

「いくらでも恐れ入るがいい」

「ハハハ日本堤分署と云うのはね、君ただの所じゃないよ。よしわら
吉原だよ」

「何だ？」

「吉原だよ」

「あの遊廓のある吉原か？」

「そうさ、吉原と云やあ、東京に一つしかないやね。どうだ、行ってみる気かい」と迷亭君またか

らかいかける。

主人は吉原と聞いて、そいつはと少々

しゅんじゅん てい
逡 巡 の 体 であったが、たちまち思い返
して「吉原だろうが、遊廓だろうが、いったん行
くと云った以上はきつと行く」と入らざるところ
りきん
に 力 味 で見せた。愚人は得てこんなところに意
地を張るものだ。

迷亭君は「まあ面白かろう、見て来たまえ」と

云ったのみである。一 ひと は らん
波 瀾 を生じた刑事事件
ひと ま ら く ちゃく
はこれで一 先 ず 落 着 を告げた。迷亭はそ
ろ う
れから相変らず駄弁を 弄 して日暮れ方、あまり
おこ
遅くなると伯父に 怒 られると云って帰って行
った。

迷亭が帰ってから、そこそこに晩飯をすまして、

また書齋へ引き揚げた主人は再び^{きょうしゅ}拱^し手^しし
て^{しも}下^しのように考え始めた。

「自分が感服して、^{おお}大^いに見習おうとした八木
独仙君も迷亭の話しによって見ると、別段見習う
にも及ばない人間のようなのである。のみならず彼の
唱道するところの説は何だか非常識で、迷亭の云
う通り多少^{ふうてんてき}瘋^て癲^き的系統に属してもおりそ
うだ。いわんや彼は^{れつき}歴^き乎^{ちがい}とした二人の^き氣^ら狂^い
の子分を有している。はなはだ危険である。

めった^ひ減^ず多^ひに近寄ると同系統内に引き摺り込まれそ
うである。自分が文章の上において驚嘆の余、こ
れこそ大見識を有している偉人に相違ないと思
い込んだ

てんどうこうへいことじつみょう
天 道 公 平 事 実 名

たちまちろうばい

立町老梅は純然たる狂人であって、現に
巢鴨の病院に起居している。迷亭の記述が棒大の

ざれ言にもせよ、彼が^{ふうてんいん}瘋癲院中に盛名を

ほしい
擅^{みずか}ままして天道の主宰をもって自^らら

任ずるは恐らく事実であろう。こう云う自分もこ
とによると少々ござっているかも知れない。同気
相求め、同類相集まると云うから、気狂の説に感
服する以上は――少なくともその文章言辞に同
情を表する以上は――自分もまた気狂に縁の近

い者であるだろう。よし同型中に^{ちゅうか}鑄化せられ

んでも軒を^{なら}比べて狂人と隣り合せに^{きよ}居を
ぼく

トするとすれば、境の壁を一重打ち抜いていつ

の^ま間にか同室内に膝を突き合せて談笑する事が

ないとも限らん。こいつは大変だ。なるほど考え

て見るとこのほどじゅうから自分の脳の作用は

我ながら驚くくらい 奇^{きじょう} 上^{みょう} に 妙^{みょう} を点じ

へんぼう ちん
変 傍 に 珍 を添えている。

のうしょう いっせき
脳 漿 一 勺 の化学的变化はとにかく意

志の動いて行為となるところ、発して言辞と化す

あたり
る 辺 には不思議にも中庸を失した点が多い。

ぜつじょう りゅうせん えきか せいふう
舌 上 に 竜 泉 なく、腋 下 に 清 風

しょう しこん きょうしゅう
を 生 ぜざるも、歯 根 に 狂 臭 あり、

きんとう ふうみ
筋 頭 に 風味 あるをいかんせん。いよいよ大

変だ。ことによるともうすでに立派な患者になっ

ているのではないかしらん。まだ さいわい 幸 に人を
きずつ

傷 けたり、世間の邪魔になる事をし出かさん
からやはり町内を追払われずに、東京市民として

存在しているのではなかろうか。こいつは消極の

積極のと云う段じゃない。まず^{みゃくはく}脈搏からして検査しなくてはならん。しかし脈には変りはないようだ。頭は熱いかしらん。これも別に逆上の気味でもない。しかしどうも心配だ。」

「こう自分と^{きちがい}氣狂ばかりを比較して類似の点ばかり勘定しては、どうしても氣狂の領分を脱する事は出来そうにもない。これは方法がわるかった。氣狂を標準にして自分をそっちへ引きつけて解釈するからこんな結論が出るのである。

もし健康な人を本位にしてその^{そば}傍へ自分を置いて考えて見たらあるいは反対の結果が出るかも知れない。それにはまず手近から始めなくてはいかん。第一に今日来たフロックコートの伯父さんはどうだ。心をどこに置こうぞ……あれも少々

怪しいようだ。第二に寒月はどうだ。朝から晩ま

で弁当持参で^{たま}球ばかり磨いている。これも

ほうぐみ

棒組だ。第三にと……迷亭？ あれはふざけ

廻るのを天職のように心得ている。全く陽性の気

狂に相違ない。第四はと……金田の妻君。あの毒

悪な^{こんじょう}根性は全く常識をはずれている。純然

たる気じるしに^{きま}極ってる。第五は金田君の番だ。

金田君には御目に懸った事はないが、まずあの細

君を^{うやうや}恭しくおっ立てて、^{きんしつ}琴瑟調和して

いるところを見ると非凡の人間と見立てて

^{さしつか}差支えあるまい。非凡は気狂の^{いみょう}異名であるから、まずこれも同類にしておいて構わない。

それからと、――まだあるある。落雲館の諸君子

だ、年齢から云うとまだ芽生えだが、^{そうきょう}躁狂

の点においては一世を^{むな}空しゅうするに足る

あっぱれ^{ごう}

天晴な豪のものである。こう数え立てて見ると大抵のものは同類のようである。案外心丈夫

になって来た。ことによると社会はみんな気狂の

寄り合かも知れない。気狂が集合して^{しのぎ}鎬を

けず^{のし}削ってつかみ合い、いがみ合い、罵り合い、

奪い合って、その全体が団体として細胞のように

くず^ず崩れたり、持ち上ったり、持ち上ったり、崩れ

たりして暮して行くのを社会と云うのではない

か知らん。その中で多少^{りくつ}理窟がわかって、分別のある奴はかえって邪魔になるから、

ふうてんいん

瘋癲院というものを作って、ここへ押し込めて出られないようにするのはないかしらん。

すると瘋癲院に幽閉されているものは普通の人

で、院外にあばれているものはかえって気狂である。気狂も孤立している間はどこまでも気狂にされてしまうが、団体となって勢力が出ると、健全の人間になってしまうのかも知れない。大きな気狂が金力や威力を^{らんよう}濫用して多くの^{しょうきちがい}小気^{しえき}狂を使役して乱暴を働いて、人から立派な男だと云われている例は少なくない。何
が何だか分らなくなった」

以上は主人が当夜^{けいけい}螢々たる孤灯の^{もと}下で
沈思熟慮した時の心的作用をありのままに^{えが}描
き出したものである。彼の頭脳の不透明なる事は
ここにも著るしくあらわれている。彼はカイゼル
に似た^{はちじひげ}八字髯^{たくわ}を蓄うるにもかかわらず
狂人と常人の差別さえなし得ぬくらいの

ぼんくら

凡 倉 である。のみならず彼はせっかくこの問題を提供して自己の思索力に訴えながら、ついに何等の結論に達せずしてやめてしまった。何事によらず彼は徹底的に考える脳力のない男である。

ぼうばく

彼の結論の 茫 漠 として、彼の鼻孔から

ほうしゅつ

ほそく

迸 出 する朝日の煙のごとく、捕 捉 しがたきは、彼の議論における唯一の特色として記憶すべき事実である。

吾輩は猫である。猫の癖にどうして主人の心中をかく精密に記述し得るかと疑うものがあるかも知れんが、このくらいな事は猫にとって何でもない。吾輩はこれで読心術を心得ている。いつ心得たなんて、そんな余計な事は聞かんでもいい。

ひざ

ともかくも心得ている。人間の 膝 の上へ乗って

眠っているうちに、吾輩は吾輩の柔かな^{けごろも}毛衣
をそっと人間の腹にこすり付ける。すると一道の
電気が起って彼の腹の中のいきさつが手にとる
ように吾輩の心眼に映ずる。せんだってなどは主
人がやさしく吾輩の頭を^な撫で廻しながら、突然こ
の猫の皮を^は剥いでちゃんちゃんにしたらさぞあ
たたかでもかろうと飛んでもない^{りょうけん}了見を
むらむらと起したのを即座に^{けど}気取って覚えずひ
やとした事さえある。^{こわ}怖い事だ。当夜主人の
頭のなかに起った以上の思想もそんな^{わけあい}訳合
で^{さいわい}幸にも諸君にご報道する事が出来るよ
うに相成ったのは吾輩の^{おお}大に榮譽とすると
ころである。^{ただ}但し主人は「何が何だか分からなく
なった」まで考えてそのあとはぐうぐう寝てしま

ったのである、あすになれば何をどこまで考えた
かまるで忘れてしまうに違ない。向^{こう}後^ごもし主人
が^{きちがい}気^い狂^{きやう}について考える事があるとすれば、も
う一^{ぺん}返^{へん}出直して頭から考え始めなければなら
ぬ。そうすると果してこんな^{けいろ}径^{けい}路^ろを取って、こ
んな風に「何が何だか分らなくなる」かどうか
保証出来ない。しかし何返考え直しても、
なんじょう^{なんじょう}何^{なん}条^{じょう}の径路をとって進もうとも、ついに
「何が何だか分らなくなる」だけはたしかである。

十

「あなた、もう七時ですよ」と^{ふすまご}襖^{ふすま}越^ごしに細君
が声を掛けた。主人は眼がさめているのだから、寝
ているのだから、向うむきになったぎり返事もしな

い。返事をしないのはこの男の癖である。ぜひ何
とか口を切らなければならない時はうんと^い云う。
このうんも容易な事では出てこない。人間も返事
がうるさくなるくらい^{ぶしょう}無精になると、どこと
なく^{おもむき}趣があるが、こんな人に限って女に好
かれた試しがない。現在連れ添う細君ですら、あ
まり珍重しておらんようだから、その他は^お推して
知るべしと云っても大した間違はなかろう。親兄
弟に見離され、あかの他人の^{けいせい}傾城に、可愛が
らりょうはずがない、とある以上は、細君にさえ
持てない主人が、世間一般の淑女に気に入るはず
がない。何も異性間に不人望な主人をこの際こと
さらに^{ばくろ}暴露する必要もないのだが、本人におい
て存外な考え違をして、全く年廻りのせいで細君

に好かれないのだなどと理窟をつけていると、
まよい
迷 の種であるから、自覚の一助にもなろうかと親切心からちょっと申し添えるまでである。

言いつけられた時刻に、時刻がきたと注意しても、先方がその注意を無にする以上は、むこう向を
むいてうんさえ発せざる以上は、そのきよく曲は夫
にあって、妻にあらずと論定したる細君は、遅く
なっても知りませんよと云う姿勢でほうき箒とは
たきを かつ 担 いで書斎の方へ行ってしまった。やが
てぱたぱた書斎中を たた 叩 き散らす音がするのは
例によって例のごとき掃除を始めたのである。一
体掃除の目的は運動のためか、遊戯のためか、掃
除の役目を帯びぬ吾輩の関知するところでない
から、知らん顔をしていればさ つか 支 えないよう

なものの、ここの細君の掃除法のごときに至ってはすこぶる無意義のものと云わざるを得ない。何が無意義であるかと云うと、この細君は単に掃除のために掃除をしているからである。はたきを一通り^{しょうじ}障子^{すべ}へかけて、箒を一応畳の上へ滑らせる。それで掃除は完成した者と解釈している。

掃除の源因及び結果に至っては^{みじん}微塵の責任だに背負っておらん。かるが故に綺麗な所は毎日綺麗だが、ごみのある所、ほこりの積っている所はいつでもごみが^{たま}溜^{こじ}ってほこりが積っている。告朔^{こくさく}のと云う故事もある事だから、これでもやらんよりはましかも知れない。しかしやっても別段主人のためにはならない。ならないところを毎日毎日御苦勞にもやるところが細君のえらい

ところである。細君と掃除とは多年の習慣で、器械的の連想をかたちづくって^{がん}頑として結びつけられているにもかかわらず、掃除の^{じつ}実に至っては、妻君がいまだ生れざる以前のごとく、はたきと箒が発明せられざる昔のごとく、^{ごう}毫^{あが}も^拳挙っておらん。思うにこの両者の関係は形式論理学の命題における名辞のごとくその内容のいかににかかわらず結合せられたものであろう。

吾輩は主人と違って、元来が早起の方だから、この時すでに空腹になって参った。とうていうちのものさえ^{ぜん}膳に向わぬさきから、猫の身分をもって朝めしに有りつける訳のものではないが、そこが猫の浅ましきで、もしや煙の立った汁のにおい^{あわび}が^い香^が鮑^貝の中から、うまそうに立ち上

っておりはすまいかと思うと、じっとしていられ
なくなった。はかない事を、はかないと知りなが
ら頼みにするときは、ただその頼みだけを頭の中
に描いて、動かずに落ちついている方が得策であ
るが、さてそうは行かぬ者で、心の願と實際が、
合うか合わぬか是非とも試験して見たくなる。試
験して見れば必ず失望するにきまつてゐる事です

ら、最後の失望を ^{みずか} 自 ら事実の上に受取るまで
は承知出来んものである。吾輩はたまらなくなつ

て台所へ ^{はいだ} 這 出した。まずへつついの影にある
あわびがい ^{のぞ} 鮑 貝 の中を ^{たが} 覗 いて見ると案に 違 わず、
^{げきぜん} ゆう な 夕 べ舐め尽したまま、 闐 然 として、怪しき

光が引窓を ^{も はつあき} 洩る 初 秋 の日影にかがやいてい
る。 ^{おさん} 御 三 はすでに炊き ^{た たて} 立 の飯を、 ^{おはち} 御 櫃 に移

して、今や^{しちりん}七輪^{なべ}にかけた鍋の中をかきまぜ
つつある。^{かま}釜の周囲には^わ沸き上がって流れだし
た米の汁が、かさかさに^{いくすじ}幾条となくこびりつ
いて、あるものは吉野紙を^は貼りつけたごとくに見
える。もう飯も汁も出来ているのだから食わせて
もよさそうなものだと思った。こんな時に遠慮す
るのはつまらない話だ、よしんば自分の望通りに
ならなかったって元々で損は行かないのだから、
思い切って朝飯の催促をしてやろう、いくら
^{いそうろう}居候の身分だってひもじいに変りはない。
と考え定めた吾輩はにゃあにゃあと甘えるごと
く、訴うるがごとく、あるいはまた^{えん}怨ずるがご
とく泣いて見た。御三はいっこう顧みる^{けしき}景色が
ない。生れついでのお^{たかく}多角だから人情に^{うと}疎い

のはとうから承知の上だが、そこをうまく泣き立てて同情を起させるのが、こっちの手^{てぎわ}際である。今度はにゃごにゃごとやって見た。その泣き声は吾ながら悲壮の^{おん}音を帯びて^{てんがい}天涯の^{ゆうし}遊子をして断腸の思あらしむるに足ると信ずる。御三は^{てん}恬として^{かえり}顧みない。この女は^{つんぼ}聾なのかも知れない。聾では下女が勤まる^{わけ}訳がないが、ことによると猫の声だけには聾なのだろう。世の中には^{しきもう}色盲というのがある、当人は完全な視力を具えているつもりでも、医者から云わせる^{かたわ}と片輪だそうだが、この御三は^{せいもう}声盲なのだろう。声盲だって片輪に違いない。片輪のくせに^{おうふう}いやに横風なものだ。夜中なぞでも、いくらこっちが用があるから開けてくれろと云っても

決して開けてくれた事がない。たまに出してくれ
たと思うと今度はどうしても入れてくれない。夏
だ^{しも}って夜露は毒だ。いわんや霜^{しも}においてをやで、
軒下に立ち明かして、日の出を待つのは、どんな
つら^{つら}に辛^{つら}いかとうてい想像が出来るものではない。
この間しめ出しを食った時なぞは野良犬の襲撃
を^{こうむ}蒙^{こうむ}って、すでに危うく見えたところを、よ
うやくの事で物置の^{やね}家根^{あが}へかけ上^{あが}って、終夜
ふる^{ふる}顫^{ふる}えつづけた事さえある。これ等は皆御三の不
人情から^{はいたい}胚^{はいたい}胎^{はいたい}した不都合である。こんなもの
を相手にして鳴いて見せたって、^{かんのう}感^{かんのう}応^{かんのう}のある
はずはないのだが、そこが、ひもじい時の神頼み、
貧のぬすみに恋のふみと云うくらいだから、たい
ていの事ならやる気になる。にゃごおうにゃごお

うと三度目には、注意を喚起するためにことさらに複雑なる泣き方をして見た。自分ではベトヴェンのシンフォニーにも劣らざる美妙の^{おん}音と確信しているのだが御三には何等の影響も生じないようだ。御三は突然膝をついて、揚げ板を一枚は^のね除けて、中から堅炭の四寸ばかり長いのを一本つかみ出した。それからその長い奴を^{しちりん}七輪の角でぽんぽんと^{たた}敲いたら、長いのが三つほどに碎けて近所は炭の粉で真黒くなった。少々は汁の中へも^{はい}這入ったらしい。御三はそんな事に頓着する女ではない。直ちにくだけたる三個の炭をなべ鍋の尻から七輪の中へ押し込んだ。とうてい吾輩のシンフォニーには耳を傾けそうにもない。仕方がないから^{しょうぜん}悄然と茶の間の方へ引きか

えそうとして風呂場の横を通り過ぎると、ここは
今女の子が三人で顔を洗ってる最中で、なかなか
はんじょう
繁昌 している。

顔を洗うと云ったところで、上の二人が幼稚園
の生徒で、三番目は姉の尻についてさえ行かれな
いくらい小さいのだから、正式に顔が洗えて、器
用に御化粧が出来るはずがない。一番小さいのが
バケツの中からぬ ぞうきん
濡れ 雑巾 を引きずり出して
しきりに顔中撫で廻わしている。雑巾で顔を洗う
のは定めし心持ちがわるかろうけれども、地震が
ゆるたびにおもしろいわと云う子だからこのく
らいの事はあっても驚ろくに足らん。ことによる
と八木独仙君より悟っているかも知れない。さす
がに長女は長女だけに、姉をもって みずか
自 ら任じ

ているから、うがい茶碗をからからかんと
ほうりだ
抛 出して「坊やちゃん、それは雑巾よ」と雑
巾をとりにかかる。坊やちゃんもなかなか自信家
だから容易に姉の云う事なんか聞きそうにしな
い。「いやーよ、ばぶ」と云いながら雑巾を引っ
張り返した。このばぶなる語はいかなる意義で、
いかなる語源を有しているか、誰も知ってるもの
がない。ただこの坊やちゃんが かんしゃく 癪 癪 を起し
た時に折々ご使用になるばかりだ。雑巾はこの時
姉の手と、坊やちゃんの手で左右に引っ張られる
から、水を含んだ真中からぽたぽた しずく た 雫 が垂れ
て、容赦なく坊やの足にかかる、足だけなら我慢
するが膝のあたりがしたたか濡れる。坊やはこれ
でも げんろく 元 禄 を着ているのである。元禄とは何の

事だとだんだん聞いて見ると、^{ちゅうがた}中 形 の模様
なら何でも元禄だそうだ。一体だれに教わって来
たものか分らない。「坊やちゃん、元禄が濡れる

から御よしなさい、ね」と姉が^{しゃ}洒落れた事を云う。

その^{くせ}癖 この姉はついこの間まで元禄と
すごろく^{ものし}とを間違えていた物 識 りである。

元禄で思い出したからついでに^{しゃべ}喋 舌 ってし
まうが、この子供の言葉ちがいをやる事は
おびただ

夥^きしいもので、折々人を馬鹿にしたような
間違を云ってる。火事で^{きのこ}茸 が飛んで来たり、

おちゃ^{みそ}みそ 御 茶 の味噌の女学校へ行ったり、恵比寿、^{えびす}
だいどこ

台 所 と並べたり、或る時などは「わたしゃ
わらだな^た 薬 店 の子じゃないわ」と云うから、よくよく

聞き^た 糺 して見ると^{うらだな}裏 店 と薬店を混同して

いたりする。主人はこんな間違を聞くたびに笑っているが、自分が学校へ出て英語を教える時などは、これよりも滑稽な誤^{ごびゅう}謬を真面目になって、生徒に聞かせるのだろう。

坊やは――当人は坊やとは云わない。いつでも坊ばと云う――元禄が濡れたのを見て「元^{げん}どこがべたい」と云って泣き出した。元禄が冷たくては大変だから、御三が台所から飛び出して来て、雑巾を取上げて着物を拭^ふいてやる。この騒動中比較的静かであったのは、次女のすん子嬢である。すん子嬢は向うむきになって棚の上からころがり落ちた、お白^{しろい}粉^{びん}の瓶をあけて、しきりに御化粧を^{ほどこ}施している。第一に突っ込んだ指をもって鼻の頭をキューと撫^なでたから^{たて}豎に一本白

い筋が通って、鼻のありかがいささか ^{ぶんみょう} 分 明 になって来た。次に塗りつけた指を転じて頬の上を摩擦したから、そこへもってきて、これまた白いかたまりが出来上った。これだけ装飾がととのったところへ、下女がはいって来て坊ばの着物を拭いたついでに、すん子の顔もふいてしまった。

すん子は少々不満の ^{てい} 体 に見えた。

吾輩はこの光景を横に見て、茶の間から主人の寝室まで来てもう起きたかとひそかに様子をうかがって見ると、主人の頭がどこにも見えない。

その代り ^{ともんはん} 十 文 半 の甲の高い足が、夜具の ^{すそ} 裾 から ^は 一本食み出している。頭が出ていては起こされる時に迷惑だと思って、かくもぐり込んだのであろう。亀の子のような男である。ところへ書斎

の掃除をしてしまった妻君がまた^{ほうき}箒とはた
き^{かつ}を担いでやってくる。^{さいぜん}最前のよう
に^{ふすま}襖の入口から

「まだお起きにならないのですか」と声をかけた
まま、しばらく立って、首の出ない夜具を見つめ
ていた。今度も返事がない。細君は入口から
^{ふたあし}二歩ばかり進んで、箒をとんと突きながら

「まだなんですか、あなた」と重ねて返事を承わ
る。この時主人はすでに目が^さ覚めている。覚めて
いるから、細君の襲撃にそなうため、あらかじ

め夜具の中に首もろとも立て^{こも}籠ったのである。
首さえ出さなければ、^{みのが}見逃してくれる事もある
うかと、詰まらない事を頼みにして寝ていたとこ
ろ、なかなか許しそうもない。しかし第一回の声

は敷居の上で、少くとも一間の間隔があったから、まず安心と腹のうちで思っていると、とんと突いた箒が何でも三尺くらいの距離に追っていたにはちょっと驚ろいた。のみならず第二の「まだなんですか、あなた」が距離においても音量においても前よりも倍以上の勢を以て夜具のなかまで聞えたから、こいつは駄目だと覚悟をして、小さな声でうんと返事をした。

「九時までにいらっしゃるのでしょうか。早くなさらないと間に合いませんよ」

「そんなに言わなくても今起きる」と夜着^{よぎ}のそでぐち袖口から答えたのは奇観である。妻君はいつでもこの手を食って、起きるかと思って安心してると、また寝込まれつけているから、油断は出

来ないと「さあお起きなさい」とせめ立てる。起きると云うのに、なお起きろと責めるのは気に食わんものだ。主人のごとき ^{わがままもの} 我 儘 者 にはなお気に食わん。ここにおいてか主人は今まで頭からかぶ ^は 被 っていた夜着を一度に跳ねのけた。見ると大きな眼を二つとも ^あ 開いている。

「何だ騒々しい。起きると云えば起きるのだ」

「起きるとおっしゃってもお起きなさらんじゃありませんか」

「誰がいつ、そんな ^{うそ} 嘘 をついた」

「いつでもですわ」

「馬鹿を云え」

「どっちが馬鹿だか分りゃしない」と妻君ぷんとして箒を突いて枕元に立っているところは勇ま

しかった。この時裏の車屋の子供、八っちゃんが急に大きな声をしてワーと泣き出す。八っちゃん
は主人が ^{おこ}怒り出しさえすれば必ず泣き出すべく、車屋のかみさんから命ぜられるのである。かみさんは主人が怒るたんびに八っちゃんを泣か
して ^{こづかい}小遣になるかも知れんが、八っちゃんこそいい迷惑だ。こんな ^{おふくろ}御袋を持ったが最後朝から晩まで泣き通しに泣いていなくてはならない。少しはこの辺の事情を察して主人も少々怒る
のを差し ^{ひか}控えてやったら、八っちゃんの寿命が少しは延びるだろうに、いくら金田君から頼まれたって、こんな ^ぐ愚な事をするのは、天道公平君よりもはげしくおいでになっている方だと鑑定してもよかろう。怒るたんびに泣かせられるだけな

ら、まだ余裕もあるけれども、金田君が近所のゴ
ロツキを^{やと}備^{いまどやき}って今戸焼をきめ込むたびに、
八っちゃんは泣かねばならんのである。主人が怒
るか怒らぬか、まだ判然しないうちから、必ず怒
るべきものと予想して、早手廻しに八っちゃんは
泣いているのである。こうなると主人が八っチャ
んだか、八っちゃんが主人だか判然しなくなる。

主人にあてつけるに^{てすう}手数^{けんつく}は掛らない、ちょっと
八っちゃんに^{よこ}剣^{つら}突^{むか}を食わせれば何の苦もな
く、主人の横^ひっ面^{つうぎょう}を張った訳になる。昔し
西洋で犯罪者を所刑にする時に、本人が国境外に
逃亡して、^{とら}捕えられん時は、偶像をつくって人
間の代りに^ひ火あぶりにしたと云うが、彼等のうち
にも西洋の故事に^{つうぎょう}通曉する軍師があると

見えて、うまい計略を授けたものである。落雲館と云い、八っちゃんの御袋と云い、腕のきかぬ主人にとっては定めし^{にがて}苦手であろう。そのほか苦手はいろいろある。あるいは町内中ことごとく苦手かも知れんが、ただいまは関係がないから、だんだん成し崩しに紹介致す事にする。

八っちゃんの泣き声を聞いた主人は、朝っぱらからよほど^{かんしゃく}癪癪が起ったと見えて、たちまちがばと^{ふとん}布団の上に起き直った。こうなると精神修養も八木独仙も何もあったものじゃない。起き直りながら両方の手でゴシゴシゴシと表皮のむけるほど、頭中引き^か搔き廻す。一ヵ月も溜っているフケは遠慮なく、^{くびすじ}頸筋やら、寝巻の^{えり}襟へ飛んでくる。非常な壮観である。^{ひげ}髯はどうだ

と見るとこれはまた驚ろくべく、ぴん然とおっ立
っている。持主が^{おこ}怒っているのに髯だけ落ちつ
いていてはすまないとでも心得たものか、一本一
本に^{かんしゃく}癪癪を起して、勝手次第の方角へ猛烈
なる勢をもって突進している。これとてもなかな
かの^{みもの}見物である。^{きのう}昨日は鏡の手前もある事だ
から、おとなしく^{ドイツ}独乙皇帝陛下の真似をして整
列したのであるが、一晩寝れば訓練も何もあった
者ではない、直ちに本来の面目に帰って思い思い
^いの出で^{たち}立に戻るのである。あたかも主人の一夜
作りの精神修養が、あくる日になると^{ぬぐ}拭うがご
とく奇麗に消え去って、生れついで^{やちよてき}の野猪的
本領が直ちに全面を暴露し^{きた}来るのと一般であ
る。こんな乱暴な髯をもっている、こんな乱暴な

男が、よくまあ今まで免職にもならず教師が勤
まったものだと思うと、始めて日本の広い事がわ
かる。広ければこそ金田君や金田君の犬が人間と
して通用しているのもあろう。彼等が人間とし
て通用する間は主人も免職になる理由がないと
確信しているらしい。いざとなれば巢鴨へ^{はがき}端書
を飛ばして天道公平君に聞き合せて見れば、すぐ
分る事だ。

この時主人は、^{きのう}昨日紹介した^{こんとん}混沌たる太
古の眼を精一杯に見張って、向うの戸棚をきつと
見た。これは高さ一間を横に仕切って上下共
おのおの^各二枚の袋戸をはめたものである。下の方
の戸棚は、^{ふとん}布団の^{すそ}裾とすれすれの距離にある
から、起き直った主人が眼をあきさえすれば、天

然自然ここに視線がむくように出来ている。見ると模様を置いた紙がところどころ破れて妙な
はらわた
腸があからさまに見える。腸にはいろいろな
ながある。あるものは活版摺で、あるものは肉筆である。あるものは裏返しで、あるものは逆さまである。主人はこの腸を見ると同時に、
何がかいてあるか読みたくなった。今までは車屋のかみさんでもつらま捕えて、鼻づらを松の木へこすりつけてやろうくらいにまでおこ怒っていた主人が、突然この反古紙ほごがみを読んで見たくなるのは不思議のようであるが、こう云う陽性の癪癢持ちには珍らしくない事だ。小供が泣くときに最中もなかの一つもあてがえばすぐ笑うと一般である。主人がむか昔し去る所の御寺に下宿していた時、

ふすまひ え
襖 一と重を隔てて尼が五六人いた。尼などと
云うものは元来意地のわるい女のうちでもっと
も意地のわるいものであるが、この尼が主人の性
質を見抜いたものと見えて自炊の^{なべ}鍋をたたき
ながら、今泣いた烏がもう笑った、今泣いた烏が
もう笑ったと拍子を取って歌ったそうだが、主人が
尼が大嫌になったのはこの時からだと云うが、尼
は^{きらい}嫌にせよ全くそれに違ない。主人は泣いた
り、笑ったり、嬉しがったり、悲しがったり人一
倍もする代りにいずれも長く続いた事がない。よ
く云えば執着がなくて、心^{しんき}機がむやみに転ずる
のだろうが、これを俗語に翻訳してやさしく云え
ば奥行のない、^{うす}薄っ^{ぺら}片の、^{はな}鼻っ^{ぱり}張だけ強
いだだっ子である。すでにだだっ子である以上は、

喧嘩をする勢で、むっくと^は匆ね起きた主人が急に
気をかえて^{ふくろど}袋戸の腸を読みにかかるのもも
っともと云わねばなるまい。第一に眼にとまった

のが伊藤博文の^{さだ}逆か立ちである。上を見ると明治
十一年九月廿八日とある。^{かんこくとうかん}韓 国 統 監 もこ

の時代から^{おふれ}御布令の^{しっぽ}尻尾を追っ懸けてあるい
ていたと見える。大将この時分は何をしていたん
だろうと、読めそうにないところを無理によむと
おおくらきょう

^大大 蔵 卿 とある。なるほどえらいものだ、
いくら逆か立ちしても大蔵卿である。少し左の方
を見ると今度は大蔵卿横になって昼寝をしてい
る。もっともだ。逆か立ちではそう長く続く
きづかい^{もくばん}
気遣はない。下の方に大きな木板で汝は
と二字だけ見える、あとが見たいがあいにく露出

しておらん。次の行には早くの二字だけ出ている。
こいつも読みたいがそれぎれで手掛りがない。もし主人が警視庁の探偵であつたら、人のものでも構わずに引っぺがすかも知れない。探偵と云うものには高等な教育を受けたものがないから事実を挙げるためには何でもする。あれは始末に^ゆ行かないものだ。^{ねがわ}願くばもう少し遠慮をしてもらいたい。遠慮をしなければ事實は決して挙げさせない事にしたらよかろう。聞くところによると彼等は^{らしききょこう}羅織虚構をもって良民を罪におとし^い陥れる事さえあるそうだ。良民が金を出して雇っておく者が、雇主を罪にするなどときはこれまた立派な^{きちがい}気狂である。次に眼を転じて真中を見ると真中には^{おおいたけん}大分県が宙返りを

している。伊藤博文でさえ逆か立ちをするくらいだから、大分県が宙返りをするのは当然である。主人はここまで読んで来て、双方へ^{にぎ}握^り^{こぶし}拳をこしらえて、これを高く天井に向けて突きあげた。あくびの用意である。

このあくびがまた^{くじら}鯨^{とおぼえ}の遠吠^ののようにすこぶる変調を^{きわ}極めた者であったが、それが一段落を告げると、主人はのそのそと着物をきかえて顔を洗いに風呂場へ出掛けて行った。待ちかねた細君はいきなり^{ふとん}布団をまくって^{よぎ}夜着を畳んで、例の通り掃除をはじめめる。掃除が例の通りであるごとく、主人の顔の洗い方も十年一日のごとく例の通りである。先日紹介をしたごとく依然としてがーがー、げーげーを持続している。やがて

頭を分け終って、西洋手^{てぬぐい}拭を肩へかけて、茶
の間へ^{しゅつぎょ}出御になると、超然として長火鉢の
横に座を占めた。長火鉢と云うと^{けやき}櫨の
じょりんもく　あか　そうおと
如輪木か、銅の総落しで、
あらいがみ　ながぎせる
洗髪^の姉御が立膝で、長煙管を
くろがき　ふち
黒柿の縁へ叩きつける様を想見する諸君
もないとも限らないが、わが^{くしゃみ}苦沙弥先生の長火
鉢に至っては決して、そんな意気なものではない、
何で造ったものか^{しろうと}素人^{けんとう}には見当のつか
んくらい古雅なものである。長火鉢は拭き込んで
てらてら光るところが^{しんしょう}身^の上^のなのだが、この
しろもの　きり
代物^のは櫨か桜か桐か元来不明瞭な上に、ほ
とんど^{ふきん}布巾^をかけた事がないのだから陰気で
引き立たざる事^{おびただ}夥しい。こんなものをどこ

から買って来たかと云うと、決して買った^{おぼえ}覚
はない。そんなら貰ったかと聞くと、誰もくれた
人はないそうだ。しからば盗んだのかと^{ただ}糺して
見ると、何だかその辺が^{あいまい}曖昧である。昔し親
類に隠居がおって、その隠居が死んだ時、当分留
守番を頼まれた事がある。ところがその後一戸を
構えて、隠居所を引き払う際に、そこで自分のも
ののように使っていた火鉢を何の気もなく、つい
持って来てしまったのだそうだ。少々たちが悪い
ようだ。考えるとたちが悪いようだがこんな事は
世間に往々ある事だと思う。銀行家などは毎日人
の金をあつかいつけているうちに人の金が、自分
の金のように見えてくるそうだ。役人は人民の召
使である。用事を弁じさせるために、ある権限を

委托した代理人のようなものだ。ところが委任された権力を ^{かさ} 笠 に着て毎日事務を処理していると、これは自分が所有している権力で、人民などはこれについて何らの ^{くちばし} 喙 ^い を容るる理由がないものだなどと狂ってくる。こんな人が世の中に充満している以上は長火鉢事件をもって主人に泥棒根性があると断定する訳には行かぬ。もし主人に泥棒根性があるとすれば、天下の人にはみんな泥棒根性がある。

長火鉢の ^{そば} 傍 に陣取って、食卓を前に ^{ひか} 控 えた主人の三面には、先 ^{さっき} 刻 ^{ぞうきん} 雑 巾 で顔を洗った坊 ^{おちゃ} ばと 御 茶 の味噌の学校へ行くとん子と、おしろい ^{びん} 白 粉 罎 に指を突き込んだすん子が、すでに ^{せいぞろい} 勢 揃 をして朝飯を食っている。主人は一応

この三女子の顔を公平に見渡した。とん子の顔は
なんばんてつ つば りんかく
南 蛮 鉄 の 刀 の 鐔 の よう な 輪 廓 を 有
している。すん子も妹だけに多少姉の おもかげ
面 影 を
存して りゅうきゅうぬり しゅぼん
琉 球 塗 の 朱 盆 くらいな資
格はある。ただ坊ばに至っては ひと
独 り異彩を放っ
て、おもなが おもなが ただ たて
面 長 に出来上っている。但 し 豎 に長
いのなら世間にその例もすくなくないが、この子
のは横に長いのである。いかに流行が変化し やす
易
くたって、横に長い顔がはやる事はなかりう。
主人は自分の子ながらも、つくづく考える事があ
る。これでも生長しなければならぬ。生長するど
ころではない、その生長の すみや
速 かなる事は
ぜんでら たけのこ
禅 寺 の 筍 が若竹に変化する勢で大き
くなる。主人はまた大きくなったなと思うたんび

に、^{うし}後^ろから^{おって}追^手にせまられるような気がしてひやひやする。いかに^{くうばく}空^漠なる主人でもこの三令嬢が女であるくらいは心得ている。女である以上はどうにか片付けなくてはならんくらいも承知している。承知しているだけで片付ける手腕のない事も自覚している。そこで自分の子ながらも少しく持て余しているところである。持て余すくらいなら製造しなければいいのだが、そこが人間である。人間の定義を云うとほかに何にもない。ただ^い入^らざる事を^{ねつぞう}捏^造して^{みずか}自^ら苦しんでいる者だと云えば、それで充分だ。

さすがに子供はえらい。これほどおやじが処置に窮しているとは夢にも知らず、楽しそうにご飯をたべる。ところが始末におえないのは坊ばであ

る。坊ばは当年にとって三歳であるから、細君が氣
を利^きかして、食事のときには、三歳然たる小形の
はし^{はし}箸と茶碗をあてがうのだが、坊ばは決して承知
しない。必ず姉の茶碗を奪い、姉の箸を引ったく
って、持ちあつかい^{にく}悪い奴を無理に持ちあつか
っている。世の中を見渡すと無能無才の小人ほど、
いやにのさばり出て^{がら}柄にもない官職に登りた
がるものだが、あの性質は全くこの坊ば時代から
ほうが^{ほうが}萌芽しているのである。その^よ困^{きた}って来^{きた}るところ
はかくのごとく深いのだから、決して教育や
くんとう^{くんとう}なお^{なお}薰^薰陶^陶で癒^癒せる者ではないと、早くあきらめ
てしまうのがいい。

坊ばは隣りから^{ぶんど}分^{ぶんど}捕^{ぶんど}った偉大なる茶碗と、長
大なる箸を専有して、しきりに暴威を^{ほしいまま}擅^擅

にしている。使いこなせない者をむやみに使おうとするのだから、^{いきおい}勢 ^{たくま}暴威を 逞しくせざるを得ない。坊ばはまず箸の根元を二本いっしょに握ったまもうんと茶碗の底へ突込んだ。茶碗の中は飯が八分通り盛り込まれて、その上に味噌汁が一面に ^{みなぎ}漲っている。箸の力が茶碗へ伝わるやいなや、今までどうか、こうか、平均を保っていたのが、急に襲撃を受けたので三十度ばかり傾いた。同時に味噌汁は容赦なくだらだらと胸のあたりへこぼれだす。坊ばはそのくらいの事で ^{へきえき}辟易する訳がない。坊ばは暴君である。今度は突き込んだ箸を、うんと力一杯茶碗の底から ^は 剝ね上げた。同時に小さな口を ^{ふち}縁まで持って行って、^は 剝ね上げられた米粒を ^{はい}這入るだけ口の中へ受

納した。打ち^も洩らされた米粒は黄色な汁と相和して鼻のあたまと^ほ頬^{あご}つぺたと^{あご}顎とへ、やっと掛声をして飛びついた。飛びつき損じて畳の上へこぼれたものは^{ださん}打算の限りでない。随分無分別な飯の食い方である。吾輩は^{つつし}謹んで有名なる金田君及び天下の勢力家に忠告する。^{こうら}公等の他をあつかう事、坊ばの茶碗と箸をあつかうがごとく^{こうら}んば、公等の口へ飛び込む米粒は極めて^{きんしょう}僅少のものである。必然の勢をもって飛び込むにあらず、^{とまどい}戸迷をして飛び込むのである。どうか御再考を^{わずら}煩わしたい。^{せこ}世故にたけた敏腕家にも似合しからぬ事だ。

姉のとん子は、自分の箸と茶碗を坊ばに^{りやくだつ}掠奪されて、不相応に小さな奴をもってさ

つきから我慢していたが、もともと小さ過ぎるの
だから、一杯にもった積りでも、あんとあけると
三口ほどで食ってしまう。したがって 頻 繁 に^{ひんぱん}
御はちの方へ手が出る。もう四膳かえて、今度は
五杯目である。とん子は御はちの 蓋^{ふた}をあけて大
きなしゃもじを取り上げて、しばらく 眺^{なが}めてい
た。これは食おうか、よそうかと迷っていたもの
らしいが、ついに決心したものと見えて、焦^こげの
なさそうなところを見計^{ひと}って 一 掬^{しゃく}いしゃ
もじの上へ乗せたまでは 無^ぶ難^{なん}であったが、それ
を裏返して、ぐいと茶碗の上をこいたら、茶碗に
はい 入^{かた}りきらん飯は 塊^{ころ} まったまま畳の上へ 転
がり出した。とん子は驚ろく 景^け色^{しき}もなく、こぼ
れた飯を 鄭^{てい}寧^{ねい}に拾い始めた。拾って何にする

かと思ったら、みんな御はちの中へ入れてしまった。少しきたくないようだ。

坊ばが一大活躍を試みて箸を^は刎ね上げた時は、
ちょうどん子が飯をよそい^{おわ}了った時である。
さすがに姉は姉だけで、坊ばの顔のいかにも乱雑
なのを見かねて「あら坊ばちゃん、大変よ、顔が
ご^{さっそく}御ぜん粒だらけよ」と云いながら、早 速 坊ば
の顔の掃除にとりかかる。第一に鼻のあたみに
きぐう
寄 寓 していたのを取払う。取払って捨てると思
のほか、すぐ自分の口のなかへ入れてしまったの
には驚ろいた。それから^ほ頬っぺたにかかる。ここ
には^{だいぶぐん}大 分 群 をなして^{かず}数 にしたら、両方を合
せて約二十粒もあったろう。姉は丹念に一粒ずつ
取っては食い、取っては食い、とうとう妹の顔中

にある奴を一つ残らず食ってしまった。この時た
だ今まではおとなしく ^{たくあん} 沢 庵 をかじっていた
すん子が、急に盛り立ての味噌汁の中から
さつまいも
薩 摩 芋 のくずれたのをしゃくい出して、勢よ
く口の内へ ^{ほう} 抛 り込んだ。諸君も御承知であらう
が、汁にした薩摩芋の熱したのほど ^{こうちゅう} 口 中 に
こたえる者はない。 ^{おとな} 大人ですら注意しないと
やけど
火 傷 をしたような心持ちがする。ましてすん子
のごとき、薩摩芋に経験の ^{とぼ} 乏 しい者は無
ろうばい
狼 狽 する訳である。すん子はワッと云いなが
^{こうちゅう} ら 口 中 の芋を食卓の上へ吐き出した。その
^{ぺん} 二三 片 がどう云う拍子か、坊ばの前まですべ
て来て、ちょうどいい加減な距離でとまる。坊ば
^{もと} は 固 より薩摩芋が大好きである。大好きな薩摩

芋が眼の前へ飛んで来たのだから、早速箸を^{ほう}抛り出して、^{てづか}手攫みにしてむしゃむしゃ食ってしまった。

^{さっき}先刻からこの^{てい}体たらくを目撃していた主人は、^{いちごん}一言も云わずに、専心自分の飯を食い、自分の汁を飲んで、この時はすでに^{ようじ}楊枝を使っている最中であつた。主人は娘の教育に関して絶

体的放任主義を執^とるつもりと見える。今に三人が^{えびちゃしきぶ}海老茶式部か^{ねずみしきぶ}鼠式部かになって、三人とも申し合せたように^{じょうふ}情夫をこしらえて^{しゅっぱん}出奔しても、やはり自分の飯を食って、自分の汁を飲んで澄まして見ているだろう。働きのない事だ。しかし今の世の働きのあると云う人を拝見すると、嘘をついて人を釣る事と、先へ廻っ

て馬の眼玉を抜く事と、虚勢を張って人をおどか
す事と、^{かま}鎌をかけて人を^{おとしい}陥れる事よりほ
かに何も知らないようだ。中学などの少年輩まで
^{みようみまね}が見様見真似に、こうしなくては幅が^き利かない
と心得違いをして、本来なら赤面してしかるべき
のを^{とく}得々と^{りこう}履行して未来の紳士だと思っ
ている。これは働き手と云うのではない。ごろつ
き手と云うのである。吾輩も日本の猫だから多少
の愛国心はある。こんな働き手を見るたびに^{なぐ}撲
ってやりたくなる。こんなものが一人でも^ふ殖えれ
ば国家はそれだけ衰える訳である。こんな生徒の
いる学校は、学校の恥辱であって、こんな人民の
いる国家は国家の恥辱である。恥辱であるにも関
らず、ごろごろ世間にごろついているのは心得が

たいと思う。日本の人間は猫ほどの気概もないと

見える。^{なさけ}情ない事だ。こんなごろつき手に比
べると主人などは^{はる}遙かに上等な人間と云わな
くてはならん。意気地のないところが上等なので
ある。無能なところが上等なのである。

^{ちょこざい}猪口才でないところが上等なのである。

かくのごとく働きのない食い方をもって、無事
^{あさめし}に朝食を済ましたる主人は、やがて洋服を着
て、車へ乗って、日本堤分署へ出頭に及んだ。

^{こうし}格子をあけた時、車夫に日本堤という所を知っ
てるかと聞いたら、車夫はへへへと笑った。あの
遊廓のある吉原の近辺の日本堤だぜと念を押し

たのは少々^{こっけい}滑稽であった。

主人が珍らしく車で玄関から出掛けたあとで、

妻君は例のごとく食事を済ませて「さあ学校へおいで。遅くなりますよ」と催促すると、小供は平気なもので「あら、でも今日は御休みよ」と^{したく}支度を^{けしき}景色がない。「御休みなもんですか、早くなさい」と^{しか}叱るように言って聞かせると「それでも^{きのう}昨日、先生が御休だって、おっしゃってよ」と姉はなかなか動じない。妻君もここに至って多少変に思ったものか、戸棚から^{こよみ}暦を出して繰り返して見ると、赤い字でちゃんと御祭日と出ている。主人は祭日とも知らずに学校へ欠勤届を出したのだろう。細君も知らずに郵便箱へ^{ほう}抛り込んだのだろう。ただし迷亭に至っては実際知らなかったのか、知って知らん顔をしたのか、そこは少々疑問である。この発明におやと驚ろいた

妻君はそれじゃ、みんなでおとなしく御遊びなさいと平生の通り針箱を出して仕事に取りかかる。

その後三十分間は家内平穩、別段吾輩の材料になるような事件も起らなかったが、突然妙な人が御客に來た。十七八の女学生である。かかと踵のまがった靴を履いて、紫色のはかま袴を引きずって、そろばんだま髪を算盤珠のようにふくらまして勝手口から案内も乞わずにこあが上って來た。これは主人のめい姪である。学校の生徒だそうだが、折々日曜にやって来て、よく叔父さんと喧嘩をして歸って行く雪江とか云う綺麗な名のお嬢さんである。もつとも顔は名前ほどでもない、ちょっと表へ出て一二町あるけば必ず逢える人相である。

「叔母さん今日は」と茶の間へつかつか^{はい}這入って来て、針箱の横へ尻をおろした。

「おや、よく早くから……」

「今日は大祭日ですから、朝のうちにちょっと上がろうと思って、八時半頃から^{うち}家を出て急いで来たの」

「そう、何か用があるの？」

「いいえ、ただあんまり御無沙汰をしたから、ちょっと上がったの」

「ちょっとでなくっていいから、^{ゆっ}緩くり遊んでいらっしゃい。今に叔父さんが帰って来ますから」

「叔父さんは、もう、どこへかいらしたの。珍しいのね」

「ええ今日はね、妙な所へ行ったのよ。……警察へ行ったの、妙でしょう」

「あら、何で？」

「この春^{はい}這入った泥棒がつらまったんだって」

「それで引き合に出されるの？　いい迷惑ね」

「なあに品物が戻るのよ。取られたものが出たから取りに来いって、^{きのう}昨日 巡査がわざわざ来たものですから」

「おや、そう、それでなくっちゃ、こんなに早く叔父さんが出掛ける事はないわね。いつもなら今時分はまだ寝ていらっしゃるんだわ」

「叔父さんほど、寝坊はないんですから……そうして起こすとぷんぷん^{おこ}怒るのよ。今朝なんかも七時までに是非おこせと云うから、起こしたんで

しょう。すると夜具の中へ^{もぐ}潜って返事もしない
んですもの。こっちは心配だから二度目にまたお
こすと、夜着の^{よぎ}袖^{そで}から何か云うのよ。本当にあ
きれ返ってしまうの」

「なぜそんなに眠いんでしょう。きっと神経衰弱
なんでしょう」

「何ですか」

「本当にむやみに怒る^{かた}方ね。あれでよく学校が
勤まるのね」

「なに学校じゃおとなしいんですって」

「じゃなお悪るいわ。まるで^{こんにゃくえんま}蒟蒻閻魔
ね」

「なぜ？」

「なぜでも蒟蒻閻魔なの。だって蒟蒻閻魔のよう

じゃありませんか」

「ただ怒るばかりじゃないのよ。人が右と云えば左、左と云えば右で、何でも人の言う通りにした事がない、——そりゃ強情ですよ」

あまのじゃく
「天 探 女 でしょう。叔父さんはあれが道楽なのよ。だから何かさせようと思ったら、うらを云うと、こっちの思い通りになるのよ。こないだこうもり蝙蝠傘を買ってもらう時にも、いらない、いらないって、わざと云ったら、いらない事があるものかって、すぐ買って下すったの」

うま
「ホホホホ 旨 いのね。わたしもこれからそうしよう」

「そうなさいよ。それでなくっちゃ損だわ」

おはい
「こないだ保険会社の人に来て、是非御這入んな

さいって、勧めているんでしょう、——いろいろ
わけ
訳 を言っ、こう云う利益があるの、ああ云う
利益があるのって、何でも一時間も話をしたんで
すが、どうしても這入らないの。うちだって貯蓄
はなし、こうして小供は三人もあるし、せめて保
険へでも這入ってくれるとよっぽど心丈夫なん
ですけれども、そんな事は少しも構わないんです
もの」

「そうね、もしもの事があると不安心だわね」と
十七八の娘に似合しからん ^{しょうたいじ}世帯染みたこと
を云う。

「その談判を蔭で聞いていると、本当に面白いの
よ。なるほど保険の必要も認めないではない。必
要なものだから会社も存在しているのだろう。し

かし死なない以上は保険に^{はい}這入る必要はないじゃないかって強情を張っているんです」

「叔父さんが？」

「ええ、すると会社の男が、それは死ななければ無論保険会社はいりません。しかし人間の命と云うものは丈夫なようで^{もろ}脆いもので、知らないうちに、いつ危険が^{せま}逼っているか分かりませんと云うとね、叔父さんは、大丈夫僕は死なない事に決心をしているって、まあ無法な事を云うんですよ」

「決心したって、死ぬわねえ。わたしなんか是非^{きゅうだい}及第するつもりだったけれども、とうとう落第してしまったわ」

「保険社員もそう云うのよ。寿命は自分の自由に

はなりません。決心で^{な い}長が生きが出来るものなら、
誰も死ぬものはございませんって」

「保険会社の方が^{しとう}至当ですわ」

「至当でしょう。それがわからないの。いえ決して死なない。誓って死なないって威張るの」

「妙ね」

「妙ですとも、^{おおみょう}大妙ですわ。保険の掛金を出すくらいなら銀行へ貯金する方が^{はる}遙かにましだってすまし切っているんですよ」

「貯金があるの？」

「あるもんですか。自分が死んだあとなんか、ちっとも構う考なんかないんですよ」

「本当に心配ね。なぜ、あんななんでしょう、ここへいらっしゃる^{かた}方だって、叔父さんのような

のは一人もいないわね」

「いるものですか。無類ですよ」

「ちっと鈴木さんにでも頼んで意見でもして貰
うといいんですよ。ああ云う ^{おだ} 穏やかな人だとよ
っぽど ^{らく} 楽ですがねえ」

「ところが鈴木さんは、うちじゃ評判がわるいの
よ」

「みんな ^{さか} 逆なのね。それじゃ、あの ^{かた} 方がいい
でしょう——ほらあの落ちついてる——」

「八木さん？」

「ええ」

「八木さんには ^{だいぶ} 大分閉口しているんですがね。
^{きのう} 昨日迷亭さんが来て悪口をいったものだから、
思ったほど ^き 利かないかも知れない」

「だっていいじゃありませんか。あんな風に
おうよう
鷹 揚 に落ちついていれば、——こないだ学校
で演説をなすったわ」

「八木さんが？」

「ええ」

「八木さんは雪江さんの学校の先生なの」

「いいえ、先生じゃないけども、
しゅくとかふじんかい
淑 徳 婦 人 会 のときに招待して、演説を
して頂いたの」

「面白かって？」

「そうね、そんなに面白くもなかったわ。だけど
も、あの先生が、あんな長い顔なんでしょう。そ
うして天神様のような ^{ひげ} 髯 を生やしているもん
だから、みんな感心して聞いていてよ」

「御話しって、どんな御話なの？」と妻君が聞きかけていると、^{えんがわ}椽側の方から、雪江さんの話し声をききつけて、三人の子供がどたばた茶の間へ乱入して来た。今までは竹垣の外の^{あきち}空地へ出て遊んでいたものであろう。

「あら雪江さんが来た」と二人の姉さんは嬉しそうに大きな声を出す。妻君は「そんなに騒がないで、みんな静かにして御坐わりなさい。雪江さんが今面白い話をなさるところだから」と仕事を隅へ片付ける。

「雪江さん何の御話し、わたし御話しが大好き」と云ったのはとん子で「やっぱりかちかち山の御話し？」と聞いたのはすん子である。「坊ばも御はなち」と云い出した三女は姉と姉の間から膝を

前の方に出す。ただしこれは御話を^{うけたま}承^るわると云うのではない、坊ばもまた御話を^{つかまつ}仕^ると云う意味である。「あら、また坊ばちゃんの話だ」と姉さんが笑うと、妻君は「坊ばはあとでなさい。雪江さんの御話がすんでから」と^す賺^かして見る。坊ばはなかなか聞きそうにない。「いやーよ、ばぶ」と大きな声を出す。「おお、よしよし坊ばちゃんからなさい。何と云うの? 」と雪江さんは^{けんそん}謙遜^{した}した。

「あのね。坊たん、坊たん、どこ行くのって」

「面白いのね。それから? 」

「わたくしは^{たんぼ}田圃^へ稲刈いに」

「そう、よく知ってる事」

「御前がくうと^{だま}邪魔^{になる}になる」

「あら、くうとじゃないわ、くるとだわね」ととん子が口を出す。坊ばは相変らず「ばぶ」といっかつ
一 喝^{へきえき}して直ちに姉を辟^{へきえき}易^{えき}させる。しかし途中で口を出されたものだから、続きを忘れてしまつて、あとが出て来ない。「坊ばちゃん、それぎりなの？」と雪江さんが聞く。

「あのね。あとでおならは ^{ごめん}御免^{ごめん}だよ。ぷう、ぷうぷうって」

「ホホホホ、いやだ事、誰にそんな事を、教わったの？」

おたん
「御三^{ごさん}に」

「わるい ^{おさん}御三^{ごさん}ね、そんな事を教えて」と妻君は苦笑をしていたが「さあ今度は雪江さんの番だ。坊やはおとなしく聞いているのですよ」と云うと、

さすがの暴君も ^{なっとく} 納得 したと見えて、それぎり
当分の間は沈黙した。

「八木先生の演説はこんなのよ」と雪江さんがと
うとう口を切った。「昔ある ^{つじ} 辻 の真中に大きな
石地藏があったんですってね。ところがそこがあ
いにく馬や車が通る大変 ^{にぎ} 賑やかな場所だもん
だから邪魔になって仕様がないうでね、町内のもの
が大勢寄って、相談をして、どうしてこの石地
蔵を隅の方へ片づけたらよかろうって考えたん
ですって」

「そりゃ本当にあった話なの？」

「どうですか、そんな事は何ともおっしゃらなく
ってよ。――でみんながいろいろ相談をしたら、
その町内で一番強い男が、そりゃ訳はありません、

わたしがきっと片づけて見せますって、一人でその辻へ行って、^{もろはだ}両肌を抜いで汗を流して引っ張ったけれども、どうしても動かないんですって」

「よっぽど重い石地藏なのね」

「ええ、それでその男が疲れてしまって、うちへ帰って寝てしまったから、町内のものはまた相談をしたんですね。すると今度は町内で一番利口な男が、^{わたし}私に任せて御覧なさい、一番やって見ますからって、重箱のなかへ^{ぼたもち}牡丹餅を一杯入れて、地藏の前へ来て、『ここまでおいで』と云いながら牡丹餅を見せびらかしたんだって、地藏だ^{くいいじ}って食意地が張ってるから牡丹餅で釣れるだろうと思ったら、少しも動かないんだって。利口

な男はこれではいけないと思ってね。今度は
ひょうたん
瓢 箆 へお酒を入れて、その瓢箆を片手へぶ
ら下げて、片手へ ^{ちょこ}猪口 を持ってまた地藏さんの
前へ来て、さあ飲みたいくはないかね、飲みたいけれ
ばここまでおいでと三時間ばかり、からかって見
たがやはり動かないんですって」

「雪江さん、地藏様は ^{おなか}御腹 が減らないの」とと
ん子がきくと「牡丹餅が食べたいな」とすん子が
云った。

「利口な人は二度共しくじったから、その次には
にせさつ
贗 札 を沢山こしらえて、さあ欲しいだろう、
欲しければ取りにおいでと札を出したり引っ込
ましたりしたがこれもまるで ^{やく}益 に立たないん
ですって。よっぽど ^{がんこ}頑固 な地藏様なのよ」

「そうね。すこし叔父さんに似ているわ」

「ええまるで叔父さんよ、しまいに利口な人も
あいそ
愛想をつかしてやめてしまったんですとき。そ
それでそのあとからね、大きな^{ほら}法螺を吹く人が出て、
わたし
私ならきっと片づけて見せますからご安心
なさいとさも^{たやす}容易い事のように受合ったそう
です」

「その法螺を吹く人は何をしたんです」

「それが面白いのよ。最初にはね巡査の服をきて、
つ ひげ
付け髯をして、地藏様の前へきて、こらこら、
動かんとその方のためにならんぞ、警察で棄てて
おかんぞと威張って見せたんですとき。今の世に
警察の^{こわいろ}仮声なんか使ったって誰も聞きゃし
ないわね」

「本当ね、それで地藏様は動いたの？」

「動くもんですか、叔父さんですもの」

「でも叔父さんは警察には大変恐れ入っているのよ」

「あらそう、あんな顔をして？ それじゃ、そんなに^{こわ}怖い事はないわね。けれども地藏様は動かないんですって、平気でいるんですとさ。それで法螺吹は^{おこ}大変怒って、巡査の服を脱いで、付け髯を^{かみくずかご}紙屑籠へ^{ほう}抛り込んで、今度は大金持ち^{なり}の服装をして出て来たそうです。今の世で云うと岩崎男爵のような顔をするんですとさ。おかしいわね」

「岩崎のような顔ってどんな顔なの？」

「ただ大きな顔をするんでしょう。そうして何も

しないで、また何も云わないで地蔵の^{まわ}周りを、
大きな^{まきたばこ}巻煙草を^{ある}ふかしながら歩行している
んですとさ」

「それが何になるの？」

「地蔵様を^{けむ}煙に^ま捲くんです」

「まるで^{はな}噺^かし家の^{しゃれ}洒落のようね。首尾よく
^{けむ}煙に^ま捲いたの？」

「駄目ですわ、相手が石ですもの。ごまかしもた
いていにすればいいのに、今度は殿下さまに化け
て来たんだって。馬鹿ね」

「へえ、その時分にも殿下さまがあるの？」

「有るんでしょう。八木先生はそうおっしゃって
よ。たしかに殿下様に化けたんだって、恐れ多い
事だが化けて来たって――第一不敬じゃありま

せんか、^{ほらふ}法螺吹きの^{ぶんざい}分際で」

「殿下って、どの殿下さまなの」

「どの殿下さまですか、どの殿下さまだって不敬
ですわ」

「そうね」

「殿下さまでも^き利かないでしょう。法螺吹きもし
ようがないから、とても^{わたし}私の^{てぎわ}手際は、あ
の地蔵はどうする事も出来ませんと降参をした
そうです」

「いい気味ね」

「ええ、ついでに^{ちょうえき}懲役^もにやればいいのに。
——でも町内のものは大層気を揉んで、また相談
を開いたんですが、もう誰も引き受けるものがない
んで弱ったそうです」

「それでおしまい？」

「まだあるのよ。一番しまいに車屋とゴロツキを
大勢雇って、地蔵様の^{まわ}周りをわいわい騒いであ
るいたんです。ただ地蔵様をいじめて、いたたま
れないようにすればいいと云って、夜昼^{こうたい}交替
で騒ぐんだって」

「御苦労様ですこと」

「それでも取り合わないんですとさ。地蔵様の方
も随分強情ね」

「それから、どうして？」ととん子が熱心に聞く。

「それからね、いくら毎日毎日騒いでも^{げん}験が見
えないので、^{だいぶ}大分^{いや}みんなが厭になって来たん
ですが、車夫やゴロツキは^{いくんち}幾日でも^{にっとう}日当

になる事だから喜んで騒いでいましたとさ」

「雪江さん、日当ってなに？」とすん子が質問をする。

「日当と云うのはね、御金の事なの」

「御金をもらって何にするの？」

「御金を貰ってね。……ホホホホいやなすん子さ
んだ。——それで叔母さん、毎日毎晩から騒ぎを

していますとね。その時町内に^{ばかたけ}馬鹿竹と云って、
なに

何 も知らない、誰も相手にしない馬鹿がいた
んですってね。その馬鹿がこの騒ぎを見て

おまえがた
御前方は何でそんなに騒ぐんだ、何年かかっ
ても地藏一つ動かす事が出来ないのか、

かわいそう
可哀想なものだ、と云ったそうですって
——」

「馬鹿の癖にえらいのね」

「なかなかえらい馬鹿なのよ。みんなが馬鹿竹^{ばかたけ}の云う事を聞いて、物はためしだ、どうせ駄目だろうが、まあ竹にやらして見ようじゃないかとそれから竹に頼むと、竹は一も二もなく引き受けたが、そんな邪魔な騒ぎをしないでまあ静かにしろと車引やゴロツキを引き込まして^{ひょうぜん}飄然と地蔵様の前へ出て来ました」

「雪江さん飄然て、馬鹿竹のお友達？」ととん子が^{かんじん}肝心なところで奇問を放ったので、細君と雪江さんはどっと笑い出した。

「いいえお友達じゃないのよ」

「じゃ、なに？」

「飄然と云うのはね。――云いようがないわ」

「飄然て、云いようがないの？」

「そうじゃないのよ、飄然と云うのはね——」

「ええ」

「^{たたらさんぺい}そら多々良三平さんを知ってるでしょう」

「ええ、山の芋をくれてよ」

「あの多々良さん見たようなを云うのよ」

「多々良さんは飄然なの？」

「ええ、まあそうよ。——それで馬鹿竹が地蔵様の前へ来て^{ふところで}懐手をして、地蔵様、町内のものが、あなたに動いてくれと云うから動いてやんなさいと云ったら、地蔵様はたちまちそうか、そんなら早くそう云えばいいのに、とのこのこ動き出したそうです」

「妙な地蔵様ね」

「それからが演説よ」

「まだあるの？」

「ええ、それから八木先生がね、^{こんにち}今日 は御婦人の会であります、私がかような御話をわざわざ致したのは少々考があるので、こう申すと失礼かも知れませんが、婦人というものはとにかく物をするのに正面から近道を通って行かないで、かえ^{へい}って遠方から廻りくどい手段をとる 弊 がある。もっともこれは御婦人に限った事でない。明治の^よ代は男子といえども、文明の弊を受けて多少女性的になっているから、よくいらざる^{てすう}手 数 と労力を ^{つい}費 やして、これが本筋である、紳士のやるべき方針であると誤解しているものが多いようだ

が、これ等は開化の業に束縛された^{きけいじ}畸形児である。別に論ずるに及ばん。ただ御婦人に^あ在ってはなるべくただいま申した昔話を御記憶になって、いざと云う場合にはどうか馬鹿竹のような正直な了見で物事を処理していただきたい。あなた方が馬鹿竹になれば夫婦の間、^{よめしゅうと}嫁姑の間に^{いま}起る^{かつとう}忌わしき^{さんぶいち}葛藤の三分一はたしかに減ぜられるに相違ない。人間は^{こんたん}魂胆があればあるほど、その魂胆が^{たた}崇^{みなもと}って不幸の源をなすので、多くの婦人が平均男子より不幸なのは、全くこの魂胆があり過ぎるからである。どうか馬鹿竹になって下さい、と云う演説なの」

「へえ、それで雪江さんは馬鹿竹になる気なの」

「やだわ、馬鹿竹だなんて。そんなものになりたくはないわ。金田の富子さんなんぞは失敬だって
大変^{おこ}怒^こってよ」

「金田の富子さんて、あの^{むこうよこち}向^や横^{まち}町^{ちょう}の？」

「ええ、あのハイカラさんよ」

「あの人も雪江さんの学校へ行くの？」

「いいえ、ただ婦人会だから傍聴に来たの。本当にハイカラね。どうも驚ろいちまうわ」

「でも大変いい器量だって云うじゃありませんか」

「並ですわ。御自慢ほどじゃありませんよ。あんなに御化粧をすればたいていの人によく見えるわ」

「それじゃ雪江さんなんぞはそのかたのように御化粧をすれば金田さんの倍くらい美しくなるでしょう」

「あらいやだ。よくってよ。知らないわ。だけど、あの^{かた}方は全くつくり過ぎるのね。なんぼ御金があったって――」

「つくり過ぎても御金のある方がいいじゃありませんか」

「それもそうだけれども――あの^{かた}方こそ、少し馬鹿竹になった方がいいでしょう。^{むやみ}無暗に威張るんですもの。この間もなんとか云う詩人が新体詩集を捧げたって、みんなに^{ふいちょう}吹聴しているんですもの」

「東風さんでしょう」

「あら、あの方が捧げたの、よっぽど^{ものずき}物数奇ね」

「でも東風さんは大変真面目なんですよ。自分じゃ、あんな事をするのが^{あたりまえ}当 前 だとまで思ってるんですもの」

「そんな人があるから、いけないんですよ。——それからまだ面白い事があるの。^{こないだ}此 間 だれか、あの方の^{ところ}所 へ^{えんしょ}艶 書 を送ったものがあるんだって」

「おや、いやらしい。誰なの、そんな事をしたのは」

「誰だかわからないんだって」

「名前はないの？」

「名前はちゃんと書いてあるんだけれども聞い

た事もない人だって、そうしてそれが長い長い一
間ばかりもある手紙でね。いろいろな妙な事がか
いてあるんですとき。^{わたし}私^{おも}があなたを恋^{って}っ
ているのは、ちょうど宗教家が神にあこがれている
ようなものだの、あなたのためならば祭壇に供え
る小羊となって^{ほふ}屠^られるのが無上の名誉であ
るの、心臓の^{かた}形^ちが三角で、三角の中心にキュー
ピッドの矢が立って、吹き矢なら大当りである
の……」

「そりゃ真面目なの？」

「真面目なんですとき。現にわたしの御友達のう
ちでその手紙を見たものが三人あるんですもの」

「いやな人ね、そんなものを見せびらかして。あ

の方は寒月さんのところへ御嫁に行くつもりなんだから、そんな事が世間へ知れちゃ困るでしょうにね」

「困るどころですか大得意よ。こんだ寒月さんが来たら、知らしてあげたらいいでしょう。寒月さんはまるで御存じないんでしょう」

「どうですか、あの方は学校へ行って ^{たま}球ばかり磨いていらっしゃるから、大方知らないでしょう」

「寒月さんは本当にあの方を ^{おもらい}御 貰 になる気なんじゃないかね。御気の毒だわね」

「なぜ？ 御金があって、いざって時に力になって、いいじゃありませんか」

「叔母さんは、じきに金、金って ^{ひん}品 がわるいの

ね。金より愛の方が大事じゃありませんか。愛がなければ夫婦の関係は成立しやしないわ」

「そう、それじゃ雪江さんは、どんなところへ御嫁に行くの？」

「そんな事知るもんですか、別に何もないんですもの」

雪江さんと叔母さんは結婚事件について何か
弁論を ^{たくま}逞しくしていると、さっきから、分らないなりに謹聴しているとん子が突然口を開いて「わたしも御嫁に行きたいな」と云いだした。
この無鉄砲な希望には、さすが青春の気に満ちて、
おおい ^大に同情を寄すべき雪江さんもちょっと毒
気を抜かれた ^{てい}体であったが、細君の方は比較的
平気に構えて「どこへ行きたいの」と笑ながら聞

いて見た。

「わたしねえ、本当はね、^{しょうこんしゃ}招魂社へ御嫁
に行きたいんだけど、水道橋を渡るのがいや
だから、どうしようかと思ってるの」

細君と雪江さんはこの名答を得て、あまりの事
に問い返す勇氣もなく、どっと笑い崩れた時に、
次女のすん子が姉さんに向ってかような相談を
持ちかけた。

「御ねえ様も招魂社がすき？　わたし也大すき。
いっしょに招魂社へ御嫁に行きましょう。ね？
いや？　^いいやなら好いわ。わたし一人で車へ乗っ
てさっさと行っちまうわ」

「坊ばも行くの」とついには坊ばさんまでが招魂
社へ嫁に行く事になった。かように三人が顔を

そろ
揃えて招魂社へ嫁に行けたら、主人もさぞ楽であらう。

ところへ車の音がかがらりと門前に留ったと思つたら、たちまち威勢のいい御帰りと云う声がした。主人は日本堤分署から戻つたと見える。車夫が差出す大きな風呂敷包を下女に受け取らして、主人は悠^{ゆう}然^{ぜん}と茶の間へ這^{はい}入^いって来る。「やあ、来たね」と雪江さんに挨拶しながら、例の有
名なる長火鉢の^{そば}傍^へへ、ぽかりと手に^{たずさ}携^へえた
とっくりよう^{ほう}徳^{とく}利^り様のものを抛^{ほう}り出した。徳利様と云うのは純然たる徳利では無論ない、と云つて
^{はない}花^{はな}活^{かつ}けとも思われない、ただ一種異様の陶器であるから、やむを得ずしばらくかように申したのである。

「妙な徳利ね、そんなものを警察から貰っていら
しったの」と雪江さんが、倒れた奴を起しながら
叔父さんに聞いて見る。叔父さんは、雪江さんの
顔を見ながら、「どうだ、いい ^{かつこう} 恰 好 だろう」
と自慢する。

「いい恰好なの？　それが？　あんまりよかあ
ないわ？　^{あぶらつぼ} 油 壺　なんか何で持っていらっ
しったの？」

「油壺なものか。そんな趣味のない事を云うから
困る」

「じゃ、なあに？」

「^{はないけ} 花 活 さ」

「花活にしちゃ、口が ^ち 小さいさ過ぎて、いやに胴が
張ってるわ」

「そこが面白いんだ。御前も無風流だな。まるで
叔母さんと^{えら} 択^ぶところなしだ。困ったものだ
な」と^{ひと} 独^りで油壺を取り上げて、^{しょうじ} 障^子の方
へ向けて^{なが} 眺^めている。

「どうせ無風流ですわ。油壺を警察から貰ってく
るような真似は出来ないわ。ねえ叔母さん」叔母
さんはそれどころではない、風呂敷包を^と 解^{いて}
さらまなこ^し 皿^眼 になって、盗難品を^{しら} 検^べている。「お
や驚ろいた。泥棒も進歩したのね。みんな、解い
て洗い張をしてあるわ。ねえちょっと、あなた」

「誰が警察から油壺を貰ってくるものか。待つて
るのが退屈だから、あすこいらを散歩しているう
ちに堀り出して来たんだ。御前なんぞには分るま

いがそれでも珍品だよ」

「珍品過ぎるわ。一体叔父さんはどこを散歩したの」

「どこって ^{にほんづつみ}日本堤界隈さ。吉原へも
はい ^{さかん}盛な所だ。あの鉄の
門を ^み観た事があるかい。ないだろう」

「だれが見るもんですか。吉原なんて
せんぎょうふ ^{いんねん}賤業婦のいる所へ行く因縁がありませんわ。叔父さんは教師の身で、よくまあ、あんな所へ行かれたものねえ。本当に驚ろいてしまうわ。ねえ叔母さん、叔母さん」

「ええ、そうね。どうも ^{しなかず}品数が足りないよう
だ事。これでみんな戻ったんでしょうか」

「戻らんのは山の芋ばかりさ。元来九時に出頭し

ろと云いながら十一時まで待たせる法があるものか、これだから日本の警察はいかん」

「日本の警察がいけないって、吉原を散歩しちゃんおいけないわ。そんな事が知れると免職になってよ。ねえ叔母さん」

「ええ、なるでしょう。あなた、私の帯の^{かたかわ}片側がないんです。何だか足りないと思ったら」

「帯の片側くらいあきらめるさ。こっちは三時間も待たされて、大切な時間を半日^{つぶ}潰してしまっ
た」と日本服に着代えて平気に火鉢へもたれて油
壺を^{なが}眺めている。細君も仕方がないと^{あきら}諦めて、戻った品をそのまま戸棚へしまい込んで座に
帰る。

「叔母さん、この油壺が珍品ですとさ。きたない

じゃありませんか」

「それを吉原で買っていたの？　まあ」

「何がまあだ。分りもしない癖に」

「それでもそんな壺なら吉原へ行かなくっても、
どこにだってあるじゃありませんか」

「ところがないんだよ。^{めった}滅多に有る品ではない
んだよ」

「叔父さんは随分^{いしじぞう}石地蔵ね」

「また小供の癖に生意気を云う。どうもこの頃の
女学生は口が悪くっていかん。ちと女大学でも
読むがいい」

「叔父さんは保険が^{きらい}嫌でしょう。女学生と保
険とどっちが嫌なの？」

「保険は嫌ではない。あれは必要なものだ。未来

の考のあるものは、誰でも^{はい}這入る。女学生は無用の長物だ」

「無用の長物でもいい事よ。保険へ這入ってもいない癖に」

「来月から這入るつもりだ」

「きっと？」

「きっとだとも」

「およしなさいよ、保険なんか。それよりかそのかけきん
懸金で何か買った方がいいわ。ねえ、叔母さん」叔母さんはにやにや笑っている。主人は真面目になって

「お前などは百も二百も生きる気だから、そんなのんき
呑気な事を云うのだが、もう少し理性が発達して見ろ、保険の必要を感ずるに至るのは

あたりまえ
当 前 だ。ぜひ来月から這入るんだ」

「そう、それじゃ仕方がない。だけどこないだの
ように ^{こうもり} 蝙蝠傘を買って下さる御金があるなら、
保険に這入る方がましかも知れないわ。ひとがい
りません、いりませんと云うのを無理に買って下
さるんですもの」

「そんなにいらなかったのか？」

「ええ、蝙蝠傘なんか欲しくないわ」

「そんなら ^{かえ} 還 すがいい。ちょうどん子が欲し
がってるから、あれをこっちへ廻してやろう。今
日持って来たか」

「あら、そりゃ、あんまりだわ。だって ^{ひど} 苛 いじ
ゃありませんか、せっかく買って下すっておきな
がら、還せなんて」

「いないと云うから、還せと云うのさ。ちっとも苛くはない」

「いない事はいないんですけれども、苛いわ」

「分らん事を言う奴だな。いないと云うから還せと云うのに苛い事があるものか」

「だって」

「だって、どうしたんだ」

「だって苛いわ」

ぐ
「愚だな、同じ事ばかり繰り返している」

「叔父さんだって同じ事ばかり繰り返しているじゃありませんか」

「御前が繰り返すから仕方がないさ。現にいないと云ったじゃないか」

「そりゃ云いましたわ。いらない事はいらないんですけれども、還すのは^{いや}厭 ですよ」

「驚ろいたな。^{わからずや}没 分 暁 で強情なんだから仕方がない。御前の学校じゃ論理学を教えないのか」

「よくってよ、どうせ無教育なんですから、何でもおっしゃい。人のものを還せだなんて、他人だってそんな不人情な事は云やしない。ちっとばかたけ
馬 鹿 竹の真似でもなさい」

「何の真似をしろ？」

「ちと正直に^{たんぱく}淡 泊 になさいと云うんです」

「お前は愚物の癖にやに強情だよ。それだから落第するんだ」

「落第したって叔父さんに学資は出して貰やし

ないわ」

雪江さんは^{げん}言　ここに至って感に^た堪えざるもの
のごとく、^{さんぜん}潜然として一^{いっきく}掬の^{なんだ}涙を
紫の^{はかま}袴の上に落した。主人は^{ぼうこ}茫乎として、
その涙がいかなる心理作用に起因するかを研究
するもののごとく、袴の上と、^う俯つ向いた雪江さ
んの顔を見つめていた。ところへ^{おさん}御三が台所か
ら赤い手を敷居越に^{そろ}掬えて「お客さまがいらっ
しゃいました」と云う。「誰が来たんだ」と主人
が聞くと「学校の生徒さんでございます」と御三
は雪江さんの泣顔を横目に^{にら}睨めながら答えた。
主人は客間へ出て行く。吾輩も種取り^{けん}兼人間研
究のため、主人に^び尾して忍びやかに^{えん}椽へ廻った。
人間を研究するには何か波瀾がある時を^{えら}択ば

ないといっこう一向結果が出て来ない。平生は大方の
人が大方の人であるから、見ても聞いても張合の
ないくらい平凡である。しかしいざとなるとこの
平凡が急に靈妙なる神秘的作用のためにむくむ
くと持ち上がって奇なもの、変なもの、妙なものの、

い
異なもの、一と口に云えば吾輩猫共から見てすこ
ぶる後学になるような事件が至るところに

おうふう横風にあらわれてくる。雪江さんのこうるい紅涙
のごときはまさしくその現象の一つである。かく

のごとく不可思議、ふかそく不可測の心を有している雪
江さんも、細君と話をしているうちはさほどとも

思わなかったが、主人が帰ってきて油壺をほう
抛り

出すやいなや、たちまちしりゅう死竜に

じょうきポンプ
蒸気唧筒を注ぎかけたのごとく、ぼつぜん
勃然

としてその^{しんおう}深奥^{さち}にして窺知すべからざる、巧妙なる、美妙なる、奇妙なる、靈妙なる、麗質を、

惜気もなく発揚し^{おわ}了った。しかしてその麗質は天下の^{によしょう}女性に共通なる麗質である。ただ惜

しい事には容易にあらわれて来ない。^{いや}否あられる事は二六時中断なくあらわれているが、か

くのごとく顕著に^{しゃくぜんへいこ}灼然炳乎として遠慮なくはあらわれて来ない。幸にして主人のように

吾輩の毛をややともすると逆さに^な撫でたがるつむじまが^{きどくか}旋毛曲りの奇特家がおったから、かかる狂言も拝見が出来たのであろう。主人のあとさえつ

いてあるけば、どこへ行っても舞台の役者は吾知らず動くに相違ない。面白い男を旦那様に^{いただ}戴

いて、短かい猫の命のうちにも、^{だいぶ}大分多くの経

験が出来る。ありがたい事だ。今度のお客は何者であろう。

見ると年頃は十七八、雪江さんと^お追つつ、^か返つつの書生である。大きな頭を^じ地の^す隙いて見えるほど刈り込んで^{だんご}団子^{ぱな}っ鼻を顔の真中にかためて、座敷の隅の方に^{ひか}控えている。別にこれと云う特徴もないが^{ずがいこつ}頭蓋骨だけはすこぶる大きい。青坊主に刈ってさえ、ああ大きく見えるのだから、主人のように長く延ばしたら定めし人目を^ひ惹く事だろう。こんな顔にかぎって学問はあまり出来ない者だとは、かねてより主人の持説である。事実はそうかも知れないがちょっと見るとナポレオンのようですこぶる偉観である。着物は通例の書生のごとく、^{さつまがすり}薩摩^{くるめ}緋か、久留米がすり

かまた^{いよ}伊予^{かすり}紺^{かすり}が分らないが、ともかくも^{かすり}紺^{かすり}と
名づけられたる^{あわせ}袷^{あわせ}を袖短かに着こなして、下
には^{シャツ}襯^{じゅばん}衣^{すあわせ}も^{すあわせ}襦^{すあわせ}袢^{すあわせ}もないようだ。素^{すあし}袷^{すあし}や
素^{すあし}足^{すあし}は意気なものだそうだが、この男のはなは
だむさ苦しい感じを与える。ことに畳の上に泥棒

のような親指を歴然と三つまで^{いん}印^{いん}しているの
は全く素足の責任に相違ない。彼は四つ目の足跡

の上へちゃんと坐って、さも窮屈そうに畏^かしこま
っている。一体かしこまるべきものがおとなしく

^{ひか}控^{ひか}えるのは別段気にするにも及ばんが、
^{いがぐりあたま}毬^い栗^が頭^{あたま}のつんつるてんの乱暴者が恐縮
しているところは何となく不調和なものだ。途中
で先生に逢ってさえ礼をしないのを自慢にする
くらいの連中が、たとい三十分でも人並に坐るの

は苦しいに違ない。ところを生れ得て ^{きょうけん} 恭 謙
の君子、盛徳の ^{ちょうしゃ} 長 者 であるかのごとく構え
るのだから、当人の苦しいにかかわらず ^{はた} 傍 から
見ると大 ^{だいぶ} 分 おかしいのである。教場もしくは運
動場であんなに騒々しいものが、どうしてかよう
に自己を ^{かんそく} 箝 束 する力を ^{そな} 具 えているかと思
うと、憐れにもあるが ^{こっけい} 滑 稽 でもある。こうや
って一人ずつ ^{あいたい} 相 対 になると、いかに ^{ぐがい} 愚 な
る主人といえども生徒に対して幾分かの重みがある
ように思われる。主人も定めし得意であろう。
^{ちり} 塵 積って山をなすと云うから、微々たる一生徒
も ^{たぜい} 多 勢 が ^{しゅうごう} 聚 合 すると ^{あなど} 侮 るべからざ
る団体となって、^{はいせき} 排 斥 運動やストライキをし
でかすかも知れない。これはちょうど臆病者が酒

を飲んで大胆になるような現象であろう。衆を頼
んで騒ぎ出すのは、人の氣に酔っ払った結果、正
氣を取り落したるものと認めて ^{さしつか} 差 支 えある
まい。それでなければかように恐れ入ると云わん
よりむしろ ^{しょうぜん} 悄 然 として、 ^{みずか} 自 ら ^{ふすま} 襖 に
押し付けられているくらいな薩摩絣が、いかに老
朽だと云って、 ^{かりそ} 苟 めにも先生と名のつく主人
^{けいべつ} を 軽 蔑 しようがない。馬鹿に出来る訳がない。

主人は ^{ざぶとん} 座 布 団 を押しやりながら、「さあお敷
き」と云ったが毬栗先生はかたくなったまま「へ
え」と云って動かない。鼻の先に ^は 剥げかかった
^{さらさ} 更 紗 の座布団が「御乗んなさい」とも何とも云
わずに着席している ^{うし} 後 ろに、生きた大頭がつく

ねんと着席しているのは妙なものだ。布団は乗るための布団で見詰めるために細君が勧工場から仕入れて来たのではない。布団にして敷かれずんば、布団はまさしくその名誉を^{きそん}毀損せられたるもので、これを勧めたる主人もまた幾分か顔が立たない事になる。主人の顔を^{つぶ}潰してまで、布団と^{にら}睨めくらをしている毬栗君は決して布団その物が^{きらい}嫌なのではない。実を云うと、正式に坐った事は^{じい}祖父さんの法事の時のほかは生れてから^{めった}滅多にないので、^さ先っきからすでにしびれが切れかかって少々足の先は困難を訴えているのである。それにもかかわらず敷かない。布団が手持無沙汰に^{ひか}控えているにもかかわらず敷かない。主人がさあお敷きと云うのに敷かない。厄

介な毬栗坊主だ。このくらい遠慮するなら
たにんず
多人数集まった時もう少し遠慮すればいいの
に、学校でもう少し遠慮すればいいのに、下宿屋
でもう少し遠慮すればいいのに。すまじきところ
きがね けんそん
へ気兼ねをして、すべき時には謙遜しない、
おおい ろうぜき
否大に狼藉を働らく。たちの悪るい毬栗
坊主だ。

ところへ うし ふすま
後ろの襖をすうと開けて、雪江
さんが一碗の茶を うやうや
恭しく坊主に供した。平
生なら、そらサヴェジ・チーが出たとひ冷やかすの
だが、主人一人に対してすら痛み入っている上へ、
妙齡の よしょう
女性 が学校で覚え立ての
おがさわらりゅう おつ
小笠原流で、乙に気取った手つきをし
て茶碗を突きつけたのだから、坊主は おおい
大に

くもん てい
苦悶の体に見える。雪江さんは ふすま
襖をしめ
る時に後ろからにやにやと笑った。して見ると女
は同年輩でもなかなかえらいものだ。坊主に比す
はる 遥かに度胸が据わっている。ことに さっき
の無念にはらはらと流した一滴の こうるい
紅涙のあ
とだから、このにやにやがさらに目立って見えた。

雪江さんの引き込んだあとは、双方無言のまま、
しばらくの間は しんぼう
辛防していたが、これでは
ぎょう
業をするようなものだと思がついた主人は
ようやく口を開いた。

「君は何とか云ったけな」

ふるい
「古井……」

「古井？ 古井何とかだね。名は」

ぶえもん
「古井武右衛門」

「古井武右衛門——なるほど、だいぶ長い名だな。

今の名じゃない、昔の名だ。四年生だったね」

「いいえ」

「三年生か？」

「いいえ、二年生です」

「甲の組かね」

「乙です」

「乙なら、わたしの監督だね。そうか」と主人は感心している。実はこの大頭は入学の当時から、主人の眼についているんだから、決して忘れるところではない。のみならず、時々夢に見るくらい感銘した頭である。しかし呑^{のん}気^きな主人はこの頭とこの古風な姓名とを連結して、その連結した

ものをまた二年乙組に連結する事が出来なかったのである。だからこの夢に見るほど感心した頭が自分の監督組の生徒であると聞いて、思わずそうかと心の^{うち}裏で手を拍ったのである。しかしこの大きな頭の、古い名の、しかも自分の監督する生徒が何のために今頃やって来たのか^{とん}頓とすいり^{よう}推諉出来ない。元来不人望な主人の事だから、学校の生徒などは正月だろうが暮だろうがほとんど寄りついた事がない。寄りついたのは古井武右衛門君をもって^{こうし}嚙矢とするくらいな珍客であるが、その来訪の主意がわからんには主人もおおい^{うち}大に閉口しているらしい。こんな面白くない人の家へただ遊びにくる訳もなかろうし、また辞職勧告ならもう少し^{こうぜん}昂然と構え込みそう

だし、と云って武右衛門君などが一身上の用事相談があるはずがないし、どっちから、どう考えても主人には分らない。武右衛門君の様子を見るとあるいは本人自身にすら何で、ここまで参ったのか判然しないかも知れない。仕方がないから主人からとうとう表向に聞き出した。

「君遊びに来たのか」

「そうじゃないんです」

「それじゃ用事かね」

「ええ」

「学校の事かい」

「ええ、少し御話ししようと思って……」

「うむ。どんな事かね。さあ話したまえ」と云う

と武右衛門君下を向いたぎり ^{なん}何にも言わない。

元来武右衛門君は中学の二年生にしてはよく弁
ずる方で、頭の大きい割に脳力は発達しておらん
が、喋^{しゃべ}舌^{しやべ}る事においては乙組中 鏘^{そう}々^{そう}たるも
のである。現にせんだってコロンバスの日本訳を
教えろと云って 大^{おお}に主人を困らしたはまさ
にこの武右衛門君である。その鏘々たる先生が、
さいぜん どもり
最 前 から 吃^くの御姫様のようにもじもじ
しているのは、何か云^いわくのある事でなくてはな
らん。単に遠慮のみとはとうてい受け取られない。
主人も少々不審に思った。

「話す事があるなら、早く話したらいいじゃない
か」

「少し話しにくい事で……」

「話しにくい？」と云いながら主人は武右衛門君

の顔を見たが、先方は依然として ^{うつむき} 俯 向 になっ
てるから、何事とも鑑定が出来ない。やむを得ず、
少し語勢を変えて「いいさ。何でも話すがいい。

ほかに誰も聞いていやしない。わたしも ^{たごん} 他 言 は
しないから」と ^{おだ} 穏 やかにつけ加えた。

「話してもいいでしょうか？」と武右衛門君はまだ迷っている。

「いいだろう」と主人は勝手な判断をする。

「では話しますが」といいかけて、
^{いがぐりあたま} 毬 栗 頭 をむくりと持ち上げて主人の方
をちょっとまぼしそうに見た。その眼は三角であ
る。主人は頬をふくらまして朝日の煙を吹き出し
ながらちょっと横を向いた。

「実はその……困った事になっちまって……」

「何が？」

「何がって、はなはだ困るもんですから、来たんです」

「だからさ、何が困るんだよ」

「そんな事をする考はなかったんですけれども、
はまだ
浜田が借せ借せと云うもんですから……」

「浜田と云うのは浜田 ^{へいすけ} 平 助 かい」

「ええ」

「浜田に下宿料でも借したのかい」

「何そんなものを借したんじゃないありません」

「じゃ何を借したんだい」

「名前を借したんです」

「浜田が君の名前を借りて何をしたんだい」

「^{えんしょ} 艶 書 を送ったんです」

「何を送った？」

「だから、名前は^よ廃して、^{とうかんやく}投函役になると
云ったんです」

「何だか要領を得んじゃないか。一体誰が何をし
たんだい」

「^{えんしょ}艶書を送ったんです」

「艶書を送った？ 誰に？」

「だから、話しにくいと云うんです」

「じゃ君が、どこかの女に艶書を送ったのか」

「いいえ、僕じゃないんです」

「浜田が送ったのかい」

「浜田でもないんです」

「じゃ誰が送ったんだい」

「誰だか分らないんです」

「ちっとも要領を得ないな。では誰も送らんのかい」

「名前だけは僕の名なんです」

「名前だけは君の名だって、何の事だかちっとも分らんじゃないか。もっと条理を立てて話すがいい。元来その艶書を受けた当人はだれか」

「金田って ^{むこうよこちょう} 向横丁 にいる女です」

「あの金田という実業家か」

「ええ」

「で、名前だけ借したとは何の事だい」

「あすこの娘がハイカラで生意気だから艶書を送ったんです。――浜田が名前がなくちゃいけないって云いますから、君の名前を掛けて云ったら、僕のじゃつまらない。古井武右衛門の方がい

いって――それで、とうとう僕の名を借してしま
ったんです」

「で、君はあすこの娘を知ってるのか。交際でも
あるのか」

「交際も何もありゃしません。顔なんか見た事も
ありません」

「乱暴だな。顔も知らない人に艶書をやるなんて、
まあどう云う了見で、そんな事をしたんだい」

「ただみんながいっつは生意気で威張ってるて
云うから、からかってやったんです」

「ますます乱暴だな。じゃ君の名を公然とかいて
送ったんだな」

「ええ、文章は浜田が書いたんです。僕が名前を
借して遠藤が夜あすこのうちまで行って投函し

て来たんです」

「じゃ三人で共同してやったんだね」

「ええ、ですけれども、あとから考えると、もしあらわれて退学にでもなると大変だと思って、非常に心配して二^{にさんち}三日は寝られないんで、何だかぼん^{ぼん}やりしてしまいました」

「そりゃまた飛んでもない馬鹿をしたもんだ。それで文明中学二年生古井武右衛門とでもかいたのかい」

「いいえ、学校の名なんか書きゃしません」

「学校の名を書かないだけまあよかった。これで学校の名が出て見るがいい。それこそ文明中学の名誉に関する」

「どうでしょう退校になるでしょうか」

「そうさな」

「先生、僕のおやじさんは大変やかましい人で、
それにお^{っか}母^{ママ}さんが^{はは}継^{ママ}母^{はは}ですから、もし退校
にでもなろうもんなら、僕あ困っちゃうです。本
当に退校になるでしょうか」

「だから滅^{めった}多^たな真似をしないがいい」

「する気でもなかったんですが、ついやってしま
ったんです。退校にならないように出来ないでし
ょうか」と武右衛門君は泣き出しそうな声をして

しきりに哀願に及んでいる。^{ふすま}襖^{ふすま}の蔭では
さいぜん

最^{さい}前^{ぜん}から細君と雪江さんがくすくす笑って
いる。主人は飽^あくまでももったいぶって「そうさ
な」を繰り返している。なかなか面白い。

吾輩が面白いというと、何がそんなに面白いと

聞く人があるかも知れない。聞くのはもっともだ。

人間にせよ、動物にせよ、^{おのれ}己を知るのは
しょうがい^{おのれ}生涯の大事である。己を知る事が出来
さえすれば人間も人間として猫より尊敬を受け
てよろしい。その時は吾輩もこんないたずらを書
くのは気の毒だからすぐさまやめてしまうつも
りである。しかし自分で自分の鼻の高さが分らな
いと同じように、自己の何物かはなかなか
けんとう^に見当がつき悪くいと見えて、平生から
けいべつ
軽蔑している猫に向ってさえかような質問
をかけるのであろう。人間は生意気なようでもや
はり、どこか抜けている。万物の霊だなどとどこ
へでも万物の霊を^{かつ}担いであるくかと思うと、こ
れしきの事実が理解出来ない。しかも^{てん}恬として

平然たるに至ってはちと ^{いっきやく} 一 を催したくなる。彼は万物の霊を ^{せなか} 背 ^{かつ} 中へ担いで、おれの鼻はどこにあるか教えてくれ、教えてくれと騒ぎ立てている。それなら万物の霊を辞職するかと思うと、どう致して死んでも放しそうにしない。このくらい公然と矛盾をして平気でいられれば ^{あいきょう} 愛嬌になる。愛嬌になる代りには馬鹿をも ^{あまん} って甘じなくてはならん。

吾輩がこの際武右衛門君と、主人と、細君及雪江嬢を面白がるのは、単に外部の事件が ^{はちあわ} 鉢合 ^{おつ} せをして、その鉢合せが波動を乙なところに伝えるからではない。実はその鉢合の反響が人間の ^{ねいろ} 心に個々別々の音色を起すからである。第一主人はこの事件に対してむしろ冷淡である。武右衛

門君のおやじさんがいかにやかましくって、おっ
かさんがいかに君を^{ままこ}継子あつかいにしようとも、あんまり驚ろかない。驚ろくはずがない。武
右衛門君が退校になるのは、自分が免職になるの
とおおい おもむき
とは 大 に 趣 が違う。千人近くの生徒が
みんな退校になったら、教師も衣食の^{みち}途に窮す
るかも知れないが、古井武右衛門君^{いちにん}一人の運
命がどう変化しようと、主人の^{ちょうせき}朝夕にはほ
とんど関係がない。関係の薄いところには同情も
おのず
自 から薄い訳である。見ず知らずの人のため
に^{まゆ}眉をひそめたり、鼻をかんだり、嘆息をする
のは、決して自然の傾向ではない。人間がそんな
なさけぶか
に 情 深い、思いやりのある動物であるとは
はなはだ受け取りにくい。ただ世の中に生れて来

ふぜい
た 賦 税 として、時々交際のために涙を流して見
たり、気の毒な顔を作って見せたりするばかりで
ある。云わばごまかし せい 性 表情で、実を云うと
だいぶ
大 分 骨が折れる芸術である。このごまかしをう
まくやるものを芸術的良心の強い人と云って、こ
れは世間から大変珍重される。だから人から珍重
される人間ほど怪しいものはない。試して見れば
すぐ分る。この点において主人はむしろ せつ 拙 な部
類に属すると云ってよろしい。拙だから珍重され
ない。珍重されないから、内部の冷淡を存外隠す
ところもなく発表している。彼が武右衛門君に対
して「そうさな」を繰り返しているのでも しゃり 這 裏
の消息はよく分る。諸君は冷淡だからと云って、
けっして主人のような善人を嫌ってはいけない。

冷淡は人間の本来の性質であって、その性質をか

くそうと^{つと}力めないのは正直な人である。もし諸君がかかる際に冷淡以上を望んだら、それこそ人

間を^{かぶ}買い被ったと云わなければならない。正直

ですら^{ふってい}払底な世にそれ以上を予期するのは、

ばきん^{しの}馬^{こぶんご}琴の小説から志乃や小文吾が抜けだして、

向う三軒両隣へ^{はっけんでん}八犬伝が引き越した時で

なくては、あてにならない無理な注文である。主

人はまずこのくらいにして、次には茶の間で笑っ

てる^{おんなれん}女連に取りかかるが、これは主人の冷

淡を一步^{むこう}向へ^{また}跨いで、^{こっけい}滑稽の領分

におど^{おど}躍り込んで嬉しがっている。この女連には武右

衛門君が頭痛に病んでいる艶書事件が、^{ぶっだ}仏陀の

ふくいん^{ふくいん}福音のごとくありがたく思われる。理由はな

ただありがたい。強いて解剖すれば武右衛門君が困るのがありがたいのである。諸君女に向って聞いて御覧、「あなたは人が困るのを面白がって笑いますか」と。聞かれた人はこの問を呈出した者を馬鹿と云うだろう、馬鹿と云わなければ、わざとこんな問をかけて淑女の品性を侮辱したと云うだろう。侮辱したと思うのは事実かも知れないが、人の困るのを笑うのも事実である。である

とすれば、これから ^{わたし}私 の品性を侮辱するような事を自分でしてお目にかけますから、何とか云っちゃいやよと断わるのと一般である。僕は泥棒をする。しかしけっして不道德と云ってはならん。もし不道德だなどと云えば僕の顔へ泥を塗ったものである。僕を侮辱したものである。と主張す

るようなものだ。女はなかなか利口だ、考えに筋道が立っている。いやしくも人間に生れる以上は踏んだり、蹴^けたり、どやされたりして、しかも人が振りむきもせぬ時、平気でいる覚悟が必用であるのみならず、唾を吐きかけられ、糞をたれかけられた上に、大きな声で笑われるのを快よく思わなくてはならない。それでなくてはかように利口な女と名のつくものと交際は出来ない。武右衛門先生もちょっとしたはずみから、とんだ間違をし

おおい
て大に恐れ入ってはいるようなものの、かように恐れ入ってるものを蔭で笑うのは失敬だとくらは思うかも知れないが、それは年が行かな

ちき
い稚氣というもので、人が失礼をした時に^{おこ}怒るのを気が小さいと先方では名づけるそうだから、

そう云われるのがいやならおとなしくするがよろしい。最後に武右衛門君の心行きをちょっと紹介する。君は心配の^{ごんげ}権化である。かの偉大なる頭脳はナポレオンのそれが功名心をもって充満せるがごとく、まさに心配をもってはちきれんとしている。時々その団子っ鼻がぴくぴく動くのは心配が顔面神経に^{つたわ}伝って、反射作用のごとく無意識に活動するのである。彼は大きなてっぽうだま^{くだ}鉄砲丸を飲み下したごとく、腹の中にいかんともすべからざる^{かた}塊^{いだ}まりを抱いて、この^{りょうさんち}両三日処置に窮している。その切なさの余り、別に分別の^{でどころ}出所もないから監督と名のつく先生のところへ出向いたら、どうか助けてくれるだろうと思って、いやな人の^{うち}家へ大きな頭を

下げにまかり越したのである。彼は平生学校で主人にからかったり、同級生を^{せんだう}煽動して、主人を困らしたりした事はまるで忘れてゐる。いかにからかおうとも困らせようとも監督と名のつく以上は心配してくれるに相違ないと信じてゐるらしい。随分単純なものだ。監督は主人が好んでなつた役ではない。校長の命によってやむを得ずいただゐてゐる、云わば迷亭の叔父さんの山高帽子の種類である。ただ名前である。ただ名前だけではどうする事も出来ない。名前がいざと云う場合に役に立つなら雪江さんは名前だけで見合が出来る訳だ。武右衛門君はただに^{わがまま}我儘なるのみならず、他人は^{おの}己れに向つて必ず親切でなくてはならんと云う、人間を^{かぶ}買い被つた仮定から

出立している。笑われるなどとは思も寄らなかつたろう。武右衛門君は監督の^{うち}家へ来て、きっと人間について、一の真理を発明したに相違ない。彼はこの真理のために将来ますます本当の人間になるだろう。人の心配には冷淡になるだろう、人の困る時には大きな声で笑うだろう。かくのごとくにして天下は未来の武右衛門君をもって^み充たされるであろう。金田君及び金田令夫人をもって充たされるであろう。吾輩は切に武右衛門君のために瞬時も早く自覚して^{まにんげん}真人間にならん事を希望するのである。しからずんばいかに心配するとも、いかに後悔するとも、いかに善に移るの心が切実なりとも、とうてい金田君のごとき成功は得られんのである。いな社会は遠からずし

て君を人間の居住地以外に放逐するであろう。文明中学の退校どころではない。

かように考えて面白いなと思っていると、
こうし
格子ががらがらとあいて、玄関の障子しょうじの蔭
から顔が半分ぬうと出た。

「先生」

主人は武右衛門君に「そうさな」を繰り返して
いたところへ、先生と玄関から呼ばれたので、誰
だろうとそっちを見ると半分ほど筋違すじかいに障
子から食はみ出している顔はまさしく寒月君であ
る。「おい、御這入りおはい」と云ったぎり坐っている。

「御客ですか」と寒月君はやはり顔半分で聞き返
している。

「なに構わん、まあ^{おあ}御上がり」

「実はちょっと先生を誘いに来たんですがね」

「どこへ行くんだい。また赤坂かい。あの方面はもう御免だ。せんだつては^{むやみ}無闇にあるかせられて、足が棒のようになった」

「今日は大丈夫です。久し振りに出ませんか」

「どこへ出るんだい。まあ御上がり」

「上野へ行って虎の鳴き声を聞こうと思うんです」

「つまらんじゃないか、それよりちょっと御上り」

寒月君はとうてい遠方では談判不調と思ったものか、靴を脱いでそのそ上がって来た。例のごとく^{ねずみいろ}鼠色の、尻につぎの^{あた}中ったずぼん

は
を穿いているが、これは時代のため、もしくは尻
の重いために破れたのではない、本人の弁解によ
ると近頃自転車の稽古を始めて局部に比較的多
くの摩擦を与えるからである。未来の細君をもつ
て しょうくもく 目 された本人へ ふみ 文 をつけた恋の
あだ
仇 とは夢にも知らず、「やあ」と云って武右衛
門君に軽く えしゃく 会 釈 をして えんがわ 椽 側 へ近い所へ
座をしめた。

「虎の鳴き声を聞いたって詰らないじゃないか」

「ええ、今じゃいけません、これから方々散歩し
て夜十一時頃になって、上野へ行くんです」

「へえ」

「すると公園内の老木は しんしん 森 々 として

ものすご
物 凄 いでしょう」

「そうさな、昼間より少しは^{さみ}淋 しいだろう」

「それで何でもなるべく樹^きの茂った、昼でも人の
通らない所を^よ択ってあるいと、いつの^ま間に
か^{こうじんばんじょう} 紅 塵 万 丈 の都会に住んでる気はな
くなって、山の中へ迷い込んだような心持ちにな
るに相違ないです」

「そんな心持ちになってどうするんだい」

「そんな心持ちになって、しばらく^{たたず} 佇 んでい
るとたちまち動物園のうちに、虎が鳴くんです」

「そう^{うま} 旨 く鳴くかい」

「大丈夫鳴きます。あの鳴き声は昼でも理科大学
へ聞えるくらいなんですから、深夜^{げきせき} 闌 寂 とし

て、^{しぼう}四望人なく、^{はだえ}鬼気^{せま}肌^{ちみ}に逼って、魑魅
^つ鼻を衝く^{さい}際に……」

「魑魅鼻を衝くとは何の事だい」

「そんな事を云うじゃありませんか、^{こわ}怖い時
に」

「そうかな。あんまり聞かないようだが。それで」

「それで虎が上野の^{ろうさん}老杉の葉をことごとく
振り落すような勢で鳴くでしょう。物凄いでさ
あ」

「そりゃ物凄いだろう」

「どうです冒険に出掛けませんか。きっと愉快だ
ろうと思うんです。どうしても虎の鳴き声は夜な
かに聞かなくっちゃ、聞いたとはいわれないだろ

うと思うんです」

「そうさな」と主人は武右衛門君の哀願に冷淡であるごとく、寒月君の探検にも冷淡である。

この時まで ^{もくねん}黙然として虎の話を ^{うらや}羨まし
そうに聞いていた武右衛門君は主人の「そうさ
な」で再び自分の身の上を思い出したと見えて、
「先生、僕は心配なんです、どうしたらいいで
しょう」とまた聞き返す。寒月君は不審な顔を
してこの大きな頭を見た。吾輩は思う ^{しさい}仔細あつて
ちょっと失敬して茶の間へ廻る。

茶の間では細君がくすくす笑いながら、京焼の
安茶碗に番茶を ^{なみなみ}浪々と注いで、アンチモニー
の ^{ちゃたく}茶托の上へ載せて、
「雪江さん、 ^{はばか}憚りさま、これを出して来て下

さい」

「わたし、いやよ」

「どうして」と細君は少々驚ろいた ^{てい}体 で笑いを
はたと留める。

「どうしても」と雪江さんはやにすました顔を
即席にこしらえて、^{そば}傍 にあった読売新聞の上に
のしかかるように眼を落した。細君はもう一応
^{きょうしょう}協 商 を始める。

「あら妙な人ね。寒月さんですよ。構やしないわ」

「でも、わたし、いやなんですもの」と読売新聞
の上から眼を放さない。こんな時に一字も読める
ものではないが、読んでいないなどとあばかれた
らまた泣き出すだろう。

「ちっとも恥かしい事はないじゃありませんか」
と今度は細君笑いながら、わざと茶碗を読売新聞
の上へ押しやる。雪江さんは「あら人の悪るい」
と新聞を茶碗の下から、抜こうとする拍子に
ちゃたく
茶 托 に引きかかって、番茶は遠慮なく新聞の
上から畳の目へ流れ込む。「それ御覧なさい」と
細君が云うと、雪江さんは「あら大変だ」と台所
か
へ馳け出して行った。 ぞうきん 雑 巾 でも持ってくる
りょうけん
了 見 だろう。吾輩にはこの狂言がちょっと
面白かった。

寒月君はそれとも知らず座敷で妙な事を話し
ている。

しょうじ か
「先生 障 子 を張り易えましたね。誰が張った
んです」

「女が張ったんだ。よく張れているだろう」

「ええなかなかうまい。あの時々おいでになる御嬢さんが御張りになったんですか」

「うんあれも手伝ったのさ。このくらい障子が張れば嫁に行く資格はあると云って威張ってるぜ」

「へえ、なるほど」と云いながら寒月君障子を見つめている。

「こっちの方は ^{たいら}平 ですが、右の ^{はじ}端 は紙が余って波が出来ていますね」

「あすこが張りたてのところで、もっとも経験のとぼ ^{とぼ} 乏 しい時に出来上ったところさ」

「なるほど、少し ^{おてぎわ}御手際 が落ちますね。あの表面は ^{ちょうぜつてききょくせん}超絶的曲線 でとうてい普通

のファンクションではあらわせないです」と、理
学者だけにむずかしい事を云うと、主人は
「そうさね」と好い加減な挨拶をした。

この様子ではいつまで嘆願をしても、とう
てい見込がないと思い切った武右衛門君は突然
かの偉大なる頭蓋骨^{ずがいこつ}を畳の上に^お押しつけて、
無言の裡^{うち}に暗に^{けつべつ}訣別の意を表した。主人は
「帰るか」と云った。武右衛門君は^{しょうぜん}悄然^{しやうぜん}
として薩摩下駄を引きずって門を出た。

かわいそう
可愛想^{がんとう}に。打ちちゃって置くと巖頭の吟^{ぎん}
でも書いて^{けごんのたき}華巖滝から飛び込むかも知れ
ない。元を^{ただ}糺せば金田令嬢のハイカラと生意気
から起った事だ。もし武右衛門君が死んだら、幽
霊になって令嬢を取り殺してやるがいい。あんな

ものが世界から一人や二人消えてなくなったって、男子はすこしも困らない。寒月君はもっと令嬢らしいのを貰うがいい。

「先生ありゃ生徒ですか」

「うん」

「大変大きな頭ですね。学問は出来ますか」

「頭の割には出来ないがね、時々妙な質問をするよ。こないだコロンバスを訳して下さいって
おおい

大 に弱った」

「全く頭が大きい過ぎますからそんな余計な質問をするんでしょう。先生何とおっしゃいました」

「ええ？ ^いなあに好い加減な事を云って訳して
やった」

「それでも訳す事は訳したんですか、こりゃえらい」

「小供は何でも訳してやらないと信用せんからね」

「先生もなかなか政治家になりましたね。しかし今の様子では、何だか非常に元気がなくて、先生を困らせるようには見えないじゃありませんか」

「今日は少し弱ってるんだよ。馬鹿な奴だよ」

「どうしたんです。何だかちょっと見たばかりで非常に^{かわいそう}可哀想になりました。全体どうしたんです」

「なに^ぐ愚な事さ。金田の娘に^{えんしょ}艶書を送ったんだ」

「え？ あの大頭がですか。近頃の書生はなかなかえらいもんですね。どうも驚ろいた」

「君も心配だろうが……」

「何ちっとも心配じゃありません。かえって面白いです。いくら、艶書が降り込んだって大丈夫です」

「そう君が安心していれば構わないが……」

「構わんですとも私はいっこう構いません。しかしあの大頭が艶書をかいたと云うには、少し驚ろきますね」

「それがさ。 ^{じょうだん} 冗談 にしたんだよ。あの娘がハイカラで生意気だから、からかってやろうって、三人が共同して……」

「三人が一本の手紙を金田の令嬢にやったんで

すか。ますます奇談ですね。一人前の西洋料理を
三人で食うようなものじゃありませんか」

「ところが手分けがあるんだ。一人が文章をかく、
一人が^{とうかん}投函する、一人が名前を借す。で今来
たのが名前を借した奴なんだがね。これが一番愚
だね。しかも金田の娘の顔も見た事がないって云
うんだぜ。どうしてそんな無茶な事が出来たもの
だろう」

「そりゃ、近来の大出来ですよ。傑作ですね。ど
うもあの大頭が、女に^{ふみ}文をやるなんて面白いじ
ゃありませんか」

「飛んだ間違にならあね」

「なになったって構やしません、相手が金田です
もの」

「だって君が貰うかも知れない人だぜ」

「貰うかも知れないから構わないんです。なあに、
金田なんか、構やしません」

「君は構わなくっても……」

「なに金田だって構やしません、大丈夫です」

「それならそれでいいとして、当人があとになっ
て、急に良心に責められて、恐ろしくなったもの
だから、^{おおい}大に恐縮して僕のうちへ相談に来た
んだ」

「へえ、それであんなに^{しおしお}悄々としているん
ですか、気の小さい子と見えますね。先生何とか云
っておやんなすったんでしょう」

「本人は退校になるでしょうかって、それを一番
心配しているのさ」

「何で退校になるんです」

「そんな悪るい、不道德な事をしたから」

「何、不道德と云うほどでもありませんやね。構
やしません。金田じゃ名誉に思ってきつと
ふいちょう
吹 聴 していますよ」

「まさか」

「とにかく ^{かわいそう}可愛想 ですよ。そんな事をするの
がわるいとしても、あんなに心配させちゃ、若い
男を一人殺してしまいますよ。ありゃ頭は大きい
が人相はそんなにわるくありません。鼻なんかぴ
くぴくさせて可愛いです」

「君も ^{だいぶ}大分 ^{のんき}迷亭見たように呑気な事を云う
ね」

「何、これが時代思潮です、先生はあまり ^{むか}昔し

ふう
風 だから、何でもむずかしく解釈なさるんです」

「しかし愚^ぐじゃないか、知りもしないところへ、
いたずらに 艶^{えん} 書^{しよ} を送るなんて、まるで常識を
かいてるじゃないか」

「いたずらは、たいがい常識をかいていまさあ。

救っておやんなさい。功^く 徳^{どく} になりますよ。あの
ようす けごん
容 子 じゃ 華 厳 の滝へ出掛けますよ」

「そうだな」

「そうなさい。もっと大きな、もっと分別のある
おおぞう
大 僧 共がそれどころじゃない、わるいいたず
らをして知らん 面^{かお} をしていますよ。あんな子を
退校させるくらいなら、そんな奴らを 片^{かた} っ 端^{ぱし}
から放逐でもしなくっちゃ不公平でさあ」

「それもそうだね」

「それでどうです上野へ虎の鳴き声をききに行くのは」

「虎かい」

「ええ、聞きに行きましょう。実は二三日中にさんちうち
にちょっと帰国しなければならない事が出来
ましたから、当分どこへもおとも御伴は出来ませんから、
今日は是非いっしょに散歩をしようと思って来
たんです」

「そうか帰るのかい、用事でもあるのかい」

「ええちょっと用事が出来たんです。——ともかくも出ようじゃありませんか」

「そう。それじゃ出ようか」

「さあ行きましょう。今日は私がばんさん おご
晩餐を奢

りますから、——それから運動をして上野へ行く
とちょうど好い刻限です」としきりに^{うな}促がすも
のだから、主人もその気になって、いっしょに出
掛けて行った。あとでは細君と雪江さんが遠慮の
ない声でげらげらけらけらからからと笑ってい
た。

十一

床の間の前に碁盤を中に^す据えて迷亭君と独仙
君が対坐している。

「ただはやらない。負けた方が何か^{おご}奢るんだぜ。
いいかい」と迷亭君が念を押すと、独仙君は例の
ごとく山^{やぎひげ}羊髯を引っ張りながら、こ^いう云った。

「そんな事をする、せっかくの^{せいぎ}清戯を
ぞくりょう
俗了してしまう。かけなどで勝負に心を奪

われては面白くない。^{せいはい}成敗を度外において、
白雲の自然に^{しゅう}岫を出でて^{ぜんぜん}再々たるごと
き心持ちで一局を了してこそ、^{こちゅう}個中の
あじわい

味はわかるものだよ」

「また来たね。そんな仙骨を相手にしちゃ少々骨
が折れ過ぎる。^{えんぜん}宛然たる列仙伝中の人物だ
ね」

^{むげん}「無絃の^{そきん}素琴を弾じさ」

「無線の電信をかけかね」

「とにかく、やろう」

「君が白を持つのかい」

「どっちでも構わない」

「さすがに仙人だけあって ^{おうよう}鷹揚だ。君が白なら自然の順序として僕は黒だね。さあ、来たまえ。どこからでも来たまえ」

「黒から打つのが法則だよ」

「なるほど。しからは ^{けんそん}謙遜して、^{じょうせき}定石にここいらから行こう」

「定石にそんなのはないよ」

「なくっても構わない。新奇発明の定石だ」

吾輩は世間が狭いから碁盤と云うものは近來になって始めて拝見したのだが、考えれば考えるほど妙に出来ている。広くもない四角な板を狭苦しく四角に仕切って、目が ^{くら}眩むほどごたごたとくくびやく ^{くろ}黒 ^{しろ}白の石をならべる。そうして勝ったとか、負けたとか、死んだとか、生きたとか、あぶら汗

を流して騒いでいる。高が一尺四方くらいの面積だ。猫の前足で掻き散らしても滅茶滅茶になる。引き寄せて結べば草の^{いおり}庵にて、解くればもとの野原なりけり。入らざるいたずらだ。ふところで^{はる}懐手をして盤を眺めている方が遥かに気楽である。それも最初の三四十^{もく}目は、石の並べ方では別段目障りにもならないが、いざ天下わけ目と云う^{めざわ}間際に^{まぎわ}覗いて見ると、いやはや御気の毒な有様だ。白と黒が盤から、こぼれ落ちるまでに押し合って、御互にグューグュー云っている。窮屈だからと云って、隣りの奴にどいて貰う訳にも行かず、邪魔だと申して前の先生に退去を命ずる権利もなし、天命とあきらめて、じっとして身動きもせず、すくんでいるよりほかに、ど

うする事も出来ない。碁を発明したものは人間で、
人間の^{しこう}嗜好が局面にあらわれるものとすれば、
窮屈なる碁石の運命はせせこましい人間の性質
を代表していると云っても^{さしつか}差支えない。人間
の性質が碁石の運命で^{すいち}推知出来るもの
とすれば、人間とは^{てんくうかいかつ}天空海濶の世界を、
我からと縮めて、^{おの}己れの立つ両足以外には、ど
うあっても踏み出せぬように、^{こがたなざいく}小刀細工で
自分の領分に縄張りをするのが好きなんだと断
言せざるを得ない。人間とはしいて苦痛を求める
ものであると^{いちごん}一言に評してもよかろう。
^{のんき}呑気なる迷亭君と、^{ぜんき}禅機ある独仙君とは、
どう云う了見か、今日に限って戸棚から古碁盤を
引きずり出して、この暑苦しいいたずらを始めた

のである。さすがに御兩人^{おそろ}御揃いの事だから、最初のうちは各自任意の行動をとって、盤の上を白石と黒石が自由自在に飛び交わしていたが、盤の広さには限りがあって、横^{よこ}縦^{たて}の目盛りはひとつ^{うま}一手ごとに埋^{うま}って行くのだから、いかに香気でも、いかに禅機があっても、苦しくなるのは当り前である。

「迷亭君、君の碁は乱暴だよ。そんな所へ^{はい}這入ってくる法はない」

「禅坊主の碁にはこんな法はないかも知れないが、本^{ほん}因^{いん}坊^{ぼう}の流儀じゃ、あるんだから仕方がないさ」

「しかし死ぬばかりだぜ」

「臣死をだも辞せず、いわんやをやと、一つ、こ

う行くかな」

「そうおいでになったと、よろしい。薫風
みんなみ びりょう
南 より来って、殿閣 微 涼 を生ず。こう、
ついでおけば大丈夫なものだ」

「おや、ついだのは、さすがにえらい。まさか、
つぐ きづかい
気 遣 はなかろうと思った。ついで、くり
はちまんがね
やるな 八 幡 鐘 をと、こうやったら、どうす
るかね」

「どうするも、こうするもないさ。一剣天に^よ倚っ
て寒し——ええ、面倒だ。思い切って、切ってし
まえ」

「やや、大変大変。そこを切られちゃ死んでしま
う。おい じょうだん
冗 談 じゃない。ちょっと待った」

「それだから、さっきから云わん事じゃない。こ
うな^{はい}ってるところへは這入れるものじゃないん
だ」

「這入って失敬 ^{つかまつ} 仕 ^り 候。ちょっとこの白を
とってくれたまえ」

「それも待つのかい」

「ついでにその隣りのも引き揚げて見てくれた
まえ」

「ずうずうしいぜ、おい」

「Do you see the boy か。――なに君と僕の間
柄じゃないか。そんな水臭い事を言わずに、引き
揚げてくれたまえな。死ぬか生きるかと云う場合
だ。しばらく、しばらくって ^{はなみち} 花 ^か 道 から馳け出
してくるところだよ」

「そんな事は僕は知らんよ」

「知らなくってもいいから、ちょっとどけたまえ」

「君さっきから、六^{ぺん}返^ご待ったをしたじゃないか」

「記憶のいい男だな。向^{こう}後^ごは旧に倍し待ったをつかまつ
仕^しり候。だからちょっとどけたまえと云う
のだあね。君もよッぽど強情だね。座禅なんかし
たら、もう少し^{さば}捌^はけそうなのだ」

「しかしこの石でも殺さなければ、僕の方は少し
負けになりそうだから……」

「君は最初から負けても構わない流じゃないか」

「僕は負けても構わないが、君には勝たしたくな

い」

「飛んだ悟道だ。相変らず ^{しゅんぷうえいり} 春 風 影 裏 に
でんこう
電 光 をきってるね」

「春風影裏じゃない、電光影裏だよ。君のは
さかさ
逆 だ」

「ハハハハもうたいてい ^さ 逆かになっていい時分
だと思ったら、やはりたしかなところがあるね。

それじゃ仕方がないあきらめるかな」

^{しょうしじだい むじょうじんそく}
「生 死 事 大、無 常 迅 速、あきらめ
るさ」

「アーメン」と迷亭先生今度はまるで関係のない
方面へびしゃりと ^{いっせき} 一 石 を ^{くだ} 下 した。

床の間の前で迷亭君と独仙君が一生懸命に
^{しゅえい}
輪 贏 を争っていると、座敷の入口には、寒月

君と東風君が相ならんでその^{そば}傍に主人が黄色い顔をして坐っている。寒月君の前に^{かつぶし}鰹節が三本、裸のまま畳の上に行儀よく排列してあるのは奇観である。

この鰹節の^{しゅっしょ}出^{ふところ}処は寒月君の^{ふところ}懷で、取り出した時は^{あつ}暖たく、手のひらに感じたくらい、裸ながらぬくもっていた。主人と東風君は妙な眼をして視線を鰹節の上に注いでいると、寒月君はやがて口を開いた。

「実は四日ばかり前に国から帰って来たのですが、いろいろ用事があつて、方々^か馳けあるいていたものですから、つい上がられなかったのです」

「そう急いでくるには及ばないさ」と主人は例の

ぶあいきょう
ごとく 無 愛 嬌 な事を云う。

「急いで来んでもいいのですけれども、このおみ
やげを早く けんじょう
献上 しないと心配ですから」

「鰹節じゃないか」

「ええ、国の名産です」

「名産だって東京にもそんなのは有りそうだぜ」
と主人は一番大きな奴を一本取り上げて、鼻の先
へ持って行って にお
臭いをかいで見る。

「かいだって、鰹節の よしあし
善 悪 はわかりません
よ」

「少し大きいのが名産たる ゆえん
所以 かね」

「まあ食べて御覧なさい」

「食べる事はどうせ食べるが、こいつは何だか先
が欠けてるじゃないか」

「それだから早く持って来ないと心配だと云う
のです」

「なぜ？」

「なぜって、そりゃ ^{ねずみ}鼠 が食ったのです」

「そいつは危険だ。 ^{めった}滅 多に食うとペストになる
ぜ」

「なに大丈夫、そのくらいかじったって害はあり
ません」

「全体どこで ^{かじ}噛 ったんだい」

「船の中ですよ」

「船の中？ どうして」

「入れる所がなかったから、ヴァイオリンといっ
しょに袋のなかへ入れて、船へ乗ったら、その晩
にやられました。 ^{かつぶし}鰹 節 だけなら、いいのです

けれども、大切なヴァイオリンの胴を鰹節と間違

えてやはり少々 ^{かじ} 噛 りました」

「そそっかしい鼠だね。船の中に住んでると、そ

^{みさかい}
う 見 境 がなくなるものかな」と主人は誰にも
分らん事を云って依然として鰹節を ^{なが} 眺 めてい
る。

「なに鼠だから、どこに住んでてもそそっかしい
のでしょう。だから下宿へ持って来てもまたやら

れそうでね。 ^{けんのん} 剣 呑 ^よ だから夜るは寢床の中へ入
れて寝ました」

「少しきたないようだぜ」

「だから食べる時にはちょっとお洗いなさい」

「ちょっとくらいじゃ奇麗にゃなりそうもない」

「それじゃ^{あく}灰汁でもつけて、ごしごし磨いたらいいでしょう」

「ヴァイオリンも抱いて寝たのかい」

「ヴァイオリンは大き過ぎるから抱いて寝る訳には行かないんですが……」と云いかけると

「なんだって？　ヴァイオリンを抱いて寝たって？　それは風流だ。行く春や重たき^{びわ}琵琶のだき心と云う句もあるが、それは遠きその^{かみ}上の事だ。明治の秀才はヴァイオリンを抱いて寝なくっちゃ古人を^{しの}凌ぐ訳には行かないよ。かい^{まき}巻に長^{よも}き夜守るやヴァイオリンはどうだい。東風君、新体詩でそんな事が云えるかい」と向うの方から迷亭先生大きな声でこちらの談話にも関係をつける。

東風君は真面目で「新体詩は俳句と違ってそう
急には出来ません。しかし出来た暁にはもう少し

せいれい きび
生 霊 の機微に触れた妙音が出ます」

「そうかね、しょうりょう
生 霊 はおがらを焚いて迎え
奉るものと思ってたが、やっぱり新体詩の力でも
御来臨になるかい」と迷亭はまだ碁をそっちのけ
からかっ
にして 調 戯 ている。

「そんな無駄口を たた
叩 くともまた負けるぜ」と主人
は迷亭に注意する。迷亭は平気なもので

「勝ちたくても、負けたくても、相手が ふちゅう
釜 中
たこ
の章魚同然手も足も出せないのだから、僕も
ぶりょう
無 聊 でやむを得ずヴァイオリンの御仲間を
つかまつ
仕 するのさ」と云うと、相手の独仙君はいさ
さか激した調子で

「今度は君の番だよ。こっちで待ってるんだ」と
云い放った。

「え？ もう打ったのかい」

「打ったとも、とうに打ったさ」

「どこへ」

「この白をはすに延ばした」

「なあるほど。この白をはすに延ばして負けにけりか、そんならこっちはと——こっちは——こっちはこっちはとて暮れにけりと、どうもいい手がないね。君もう一返打たしてやるから勝手なところ

いちもく
ろへ 一 目 打ちたまえ」

「そんな碁があるものか」

「そんな碁があるものかなら打ちましょう。——それじゃこのかど地面へちょっと曲がって置く

かな。――寒月君、君のヴァイオリンはあんまり

安いから鼠が馬鹿にして ^{かじ} 噛 るんだよ、もう少し

いいのを奮発して買うさ、僕が ^{イタリア} 以太利亜から三百

年前の ^{こぶつ} 古 物 を取り寄せてやろうか」

「どうか願います。ついでにお払いの方も願いたいもので」

「そんな古いものが役に立つものか」と何にも知

らない主人は ^{いっかつ} 一 喝 にして迷亭君を ^き 極めつけた。

「君は人間の ^{こぶつ} 古 物 とヴァイオリンの ^{こぶつ} 古 物 と
同一視しているんだらう。人間の古物でも金田某
のごときものは今だに流行しているくらいだから、
ヴァイオリンに至っては古いほどがいいのさ。
――さあ、独仙君どうか御早く願おう。けいまさ

のせりふじゃないが秋の日は暮れやすいからね」

「君のようなせわしない男と碁を打つのは苦痛だよ。考える暇も何もありゃしない。仕方がないから、ここへ ^{いちもく} 一 ^め 目 入れて目にしておこう」

「おやおや、とうとう生かしてしまった。惜しい事をしたね。まさかそこへは打つまいと思って、いささか駄弁を ^{ふる} 振 ^{かんたん} って 肝 胆 を砕いていたが、やっぱり駄目か」

「当り前さ。君のは打つのじゃない。ごまかすのだ」

「それが本因坊流、金田流、当世紳士流さ。——おい苦沙弥先生、さすがに独仙君は鎌倉へ行って万年漬を食っただけあって、物に動じないね。ど

うも敬々服々だ。暮はまずいが、度胸は^{すわ}据^{つて}る」

「だから君のような度胸のない男は、少し真似をするがいい」と主人が^{うし}後^ろ^{むき}向^ののままで答えるやいなや、迷亭君は大きな赤い舌をぺろりと出した。独仙君は^{ごう}毫^も関せざるもののごとく、「さあ君の番だ」とまた相手を^{うなが}促^{した}。

「君はヴァイオリンをいつ頃から始めたのかい。僕も少し習おうと思うのだが、よっぽどむずかしいものだそうだね」と東風君が寒月君に聞いている。

「うむ、一と通りなら誰にでも出来るさ」

「同じ芸術だから^{しいか}詩^の歌^の趣味のあるものはやはり音楽の方でも上達が早いだろうと、ひそかに

たの

持 むところがあるんだが、どうだろう」

「いいだろう。君ならきっと上手になるよ」

「君はいつ頃から始めたのかね」

「高等学校時代さ。――先生 ^{わたく}私 ^しのヴァイオリンを習い出した ^{てんまつ}顛末 をお話しした事がありましたかね」

「いいえ、まだ聞かない」

「高等学校時代に先生でもあってやり出したのかい」

「なあに先生も何もありゃしない。独習さ」

「全く天才だね」

「独習なら天才と限った事もなかろう」と寒月君はつんとする。天才と云われてつんとするのは寒月君だけだろう。

「そりゃ、どうでもいいが、どう云う風に独習したのかちょっと聞かしたまえ。参考にしたいから」

「話してもいい。先生話しましょうかね」

「ああ話したまえ」

「今では若い人がヴァイオリンの箱をさげて、よく往来などをあるいておりますが、その時分は高等学校生で西洋の音楽などをやったものはほとんどなかったのです。ことに私のおった学校はいなか
田舎の田舎で麻裏草履あさうらぞうりさえないと云う
くらいな質朴な所でしたから、学校の生徒でヴァイオリンなどを弾くものはもちろん一人もありません。……」

「何だか面白い話が向うで始まったようだ。独仙

君いい加減に切り上げようじゃないか」

「まだ片づかない所が二三箇所ある」

「あってもいい。大概な所なら、君に進上する」

「そう云ったって、貰う訳にも行かない」

「禅学者にも似合わん 几帳面 な男だ。それ
じゃ 一気呵成 にやっちまおう。――寒月君何
だかよっぽど面白そうだね。――あの高等学校だ
ろう、生徒が 裸足 で登校するのは……」

「そんな事はありません」

「でも、 皆 なのはだしで兵式体操をして、廻れ右
をやるんで足の皮が大変厚くなっていると云う話
だぜ」

「まさか。だれがそんな事を云いました」

「だれでもいいよ。そうして弁当には偉大なる握
り飯を一個、^{なつみかん}夏蜜柑のように腰へぶら下げて
来て、それを食うんだって云うじゃないか。食う
と云うよりむしろ食いつくんだね。すると中心か
ら梅干が一個出て来るそうさ。この梅干が出るの
を楽しみに塩気のない周囲を一心不乱に食い欠
いて突進するんだと云うが、なるほど元気
^{おうせい}旺盛なものだね。独仙君、君の気に入りそう
な話だぜ」

「質朴剛健でたのもしいい気風だ」

「まだたのもしいい事がある。あすこには^{はいふ}灰吹き
がないそうさ。僕の友人があすこへ奉職をしてい
^{とげつほう いん}る頃吐月峰の印のある灰吹きを買いに出
たところが、吐月峰どころか、灰吹と名づくべき

ものが一個もない。不思議に思って、聞いて見たら、灰吹きなどは裏の^{やぶ}藪へ行って切って来れば誰にでも出来るから、売る必要はないと澄まして答えたそうだ。これも質朴剛健の氣風をあらわす^{びだん}美譚だろう、ねえ独仙君」

「うむ、そりゃそれでいいが、ここへ駄目を一つ入れなくちゃいけない」

「よろしい。駄目、駄目、駄目と。それで片づいた。――僕はその話を聞いて、実に驚いたね。そんなところで君がヴァイオリンを独習したのは見上げたものだ。にして不^{ふぐん}羣なりと楚辞にある^{そじ}が寒月君は全く明治の^{くつげん}屈原だよ」

「屈原はいやですよ」

「それじゃ今世紀のウェルテルさ。――なに石を

上げて勘定をしろ？ やに ^{ものがた}物 ^{たち}堅い性質だね。

勘定しなくっても僕は負けてるからたしかだ」

「しかし ^{きま}極りがつかないから……」

「それじゃ君やってくれたまえ。僕は勘定所じゃない。一代の才人ウェルテル君がヴァイオリンを習い出した逸話を聞かなくっちゃ、先祖へ済まないから失敬する」と席をはずして、寒月君の方へすり出して来た。独仙君は丹念に白石を取っては白の穴を ^う埋め、黒石を取っては黒の穴を埋めて、しきりに口の内 で 計算 を している。寒月君は話をつづける。

「土地柄がすでに土地柄なのに、私の国のものがまた非常に ^{がんこ}頑固なので、少しでも柔弱なものがおっては、他県の生徒に外聞がわるいと云って、

むやみに制裁を嚴重にしましたから、ずいぶん厄介でした」

「君の国の書生と来たら、本当に話せないね。元
来何だって、^{こん}紺の無地の^{はかま}袴なんぞ穿くんだ
い。^{だいち}第一あれからして^{おつ}乙だね。そうして塩風に吹かれつけているせいか、どうも、色が黒いね。
男だからあれで済むが女があれじゃさぞかし困
るだろう」と迷亭君が一人這入ると^{はい}肝^{かんじん}心の話はどっかへ飛んで行ってしまう。

「女もあの通り黒いのです」

「それでよく貰い手があるね」

「だって^{いっこくじゅう}一國中ことごとく黒いのだから仕方がありません」

^{いんが}
「因果だね。ねえ苦沙弥君」

「黒い方がいいだろう。^{なま}生じ白いと鏡を見るた
おのぼれ
んびに己惚が出ていけない。女と云うものは
始末におえない物件だからなあ」と主人は^{きぜん}喟然
として^{たいそく}大息^もを洩らした。

「だって一國中ことごとく黒ければ、黒い方で
うぬぼ
己惚れはしませんか」と東風君がもっともな質
問をかけた。

「ともかくも女は全然不必要な者だ」と主人が云
うと、

「そんな事を云うと妻君が後でご機嫌がわるい
ぜ」と笑いながら迷亭先生が注意する。

「なに大丈夫だ」

「いないのかい」

「小供を連れて、さっき出掛けた」

「どうれで静かだと思った。どこへ行ったの
だい」

「どこだか分らない。勝手に出てあるくのだ」

「そうして勝手に帰ってくるのかい」

「まあそうだ。君は独身でいいなあ」と云うと東
風君は少々不平な顔をする。寒月君はにやにやと
笑う。迷亭君は

さい
「妻を持つとみんなそう云う気になるのさ。ね
え独仙君、君なども妻君難の方だろう」

「ええ？　ちょっと待った。四六二十四、二十五、
二十六、二十七と。狭いと思ったら、四十六^{もく}目
あるか。もう少し勝ったつもりだったが、こしら
えて見ると、たった十八目の差か。――何だっ
て？」

「君も妻君難だろうと云うのさ」

「アハハハハ別段難でもないさ。僕の^{さい}妻は元来僕を愛しているのだから」

「そいつは少々失敬した。それでこそ独仙君だ」

「独仙君ばかりじゃありません。そんな例はいくらでもありますよ」と寒月君が天下の妻君に代ってちょっと弁護の労を取った。

「僕も寒月君に賛成する。僕の考では人間が絶対の^{いき い}域に入るには、ただ二つの道があるばかりで、その二つの道とは芸術と恋だ。夫婦の愛はその一つを代表するものだから、人間は是非結婚をして、この幸福を^{まっと}完うしなければ天意に^{そむ}背く訳だと思ふんだ。――がどうでしょう先生」と東風

君は相変らず真面目で迷亭君の方へ向き直った。

「御名論だ。僕などはとうてい絶対の^{きょう}境^うに
はい
這入れそうもない」

^{さい}
「妻を貰えばなお這入れやしない」と主人はむ
ずかしい顔をして云った。

「ともかくも我々未婚の青年は芸術の靈氣にふ
れて向上の一路を開拓しなければ人生の意義が
分からないですから、まず手始めにヴァイオリン
でも習おうと思って寒月君にさっきから
けいけん^{だん}
経 験 譚 をきいているのです」

「そうそう、ウェルテル君のヴァイオリン物語を
拝聴するはずだったね。さあ話し給え。もう邪魔
はしないから」と迷亭君がようやく^{ほうぼう}鋒 鋳 を収

めると、

「向上の一路はヴァイオリンなどで開ける者ではない。そんな ^{ゆうぎざんまい} 遊 戯 三 昧 で宇宙の真理が知れては大変だ。 ^{しゃり} 這 裡 の消息を知ろうと思えばやはり ^{けんがい} 懸 崖 に手を ^{さっ} 撒 して、 ^{ぜつご} 絶 後 に再びよみが ^{てい} 蘇 える ^{きはく} 底 の 氣 魄 がなければ駄目だ」と独仙君はもったい振って、東風君に訓戒じみた説教をしたのはよかったが、東風君は禅宗のぜの字も知らない男だから ^{とん} 頓 と感心したようすもなく

「へえ、そうかも知れませんが、やはり芸術は人間 ^{かつごう} の 渴 仰 の極致を表わしたものだと思えますから、どうしてもこれを捨てる訳には参りません」

「捨てる訳に行かなければ、お望み通り僕のヴァ

イオリン談をして聞かせる事にしよう、で今話す通りの次第だから僕もヴァイオリンの稽古をはじめるまでには ^{だいぶ}大分苦心をしたよ。第一買うのに困りましたよ先生」

「そうだろう ^{あさうらぞうり}麻裏草履がない土地にヴァイオリンがあるはずがない」

「いえ、ある事はあるんです。金も前から用意して溜めたから ^{さしつか}差支えないのですが、どうも買えないのです」

「なぜ？」

「狭い土地だから、買っておればすぐ見つかります。見つければ、すぐ生意気だと云うので制裁を加えられます」

「天才は昔から迫害を加えられるものだからね」

と東風君は ^{おおい}大 に同情を表した。

「また天才か、どうか天才呼ばわりだけは
ごめんこうむ
御 免 蒙 りたいね。それでね毎日散歩をして
ヴァイオリンのある店先を通るたびにあれが買

えたら好かろう、あれを手に ^{かか}抱 えた心持ちはど
んなだろう、ああ欲しい、ああ欲しいと思わない

^{いちんち}
日は 一 日 もなかったのです」

「もっともだ」と評したのは迷亭で、「妙に凝っ
^げ
たものだね」と解しかねたのが主人で、「やはり
君、天才だよ」と敬服したのは東風君である。た

だ独仙君ばかりは超然として ^{ひげ}髯 を ^{ねん}撚 してい
る。

「そんな所にどうしてヴァイオリンがあるかが
第一ご不審かも知れないですが、これは考えて見

ると当り前の事です。なぜと云うとこの地方でも女学校があって、女学校の生徒は課業として毎日ヴァイオリンを稽古しなければならないのですから、あるはずです。無論いいのはありません。

ただヴァイオリンと云う名が^{かろ}辛うじてつくくらしいのもであります。だから店でもあまり重きをおいていないので、二三挺いっしょに店頭へ^つ吊るしておくのです。それがね、時々散歩をして前を通るときに風が吹きつけたり、小僧の手が^{さわ}障ったりして、そら音を出す事があります。その^ね音を聞くと急に心臓が破裂しそうな心持で、いても立ってもいられなくなるんです」

みずてんかん　ひとでんかん
「危険だね。水　癲　癇、人　癲　癇と癲癇にもいろいろ種類があるが君のはウェルテルだ

けあって、ヴァイオリン癲癩だ」と迷亭君が冷やかすと、

「いやそのくらい感覚が鋭敏でなければ真の芸術家にはなれないですよ。どうしても天才肌だ」と東風君はいよいよ感心する。

「ええ実際 ^{てんかん} 癲癩 かも知れませんが、しかしあの ^{ねいろ} 音色 だけは奇体ですよ。その後 ^{ごこんにち} 今日 まで随分ひきましたがあのくらい美しい ^ね 音が出た事がありません。そうさ何と形容していいでしょう。とうてい言いあらわせないです」

「^{りんろうきゅうそう} 琳 琅 として鳴るじゃないか」とむずかしい事を持ち出したのは独仙君であったが、誰も取り合わなかったのは気の毒である。

「私が毎日毎日店頭を散歩しているうちにとう

とうこの靈異な音を三度ききました。三度目にどうあってもこれは買わなければならないと決心しました。仮令^{たとい}国^{けん}のものから譴責^{けんせき}されても、他^{けい}県^{べつ}のものから輕蔑^{けいべつ}されても――よしでっけん^{てっけん}鐵拳^{てっけん}制裁^{ぜいさく}のために絶息^{ぜつそく}しても――まかり間違^{まちが}って退校^{たいこう}の処分^{しゅぶん}を受けても――、こればかりは買わずにいられないと思いました」

「それが天才だよ。天才でなければ、そんなに思い込める訳のものじゃない。うらやま^{うらやま}羨^{せん}しい。僕もどうかして、それほど猛烈な感じを起して見たいと年来心掛けているが、どうもいけないね。音楽会などへ行って出来るだけ熱心に聞いているが、どうもそれほどに感興^{かんきやう}が乗らない」と東風君はしきりにうら^{うら}羨^{せん}やましがっている。

「乗らない方が仕合せだよ。今でこそ平気で話
ようなもののその時の苦しみはとうてい想像が
出来るような種類のものではなかった。――それ
から先生とうとう奮発して買いました」

「ふむ、どうして」

「ちょうど十一月の天長節の前の晩でした。国の
ものは ^{そろ}揃って泊りがけに温泉に行きましたか
ら、一人もいません。私は病気だと云って、その
日は学校も休んで寝ていました。今晚こそ一つ出
て行って ^{かね}兼て望みのヴァイオリンを手に入れ
ようと、床の中でその事ばかり考えていました」

^{けびょう}
「偽病をつかって学校まで休んだのかい」

「全くそうです」

「なるほど少し天才だね、こりゃ」と迷亭君も少々恐れ入った様子である。

「夜具の中から首を出していると、日暮れがまちどお待遠でたまりません。仕方がないから頭からもぐり込んで、眼を^{ねむ}眠って待って見ましたが、やはり駄目です。首を出すと烈しい秋の日は、六尺の^{しょうじ}障子へ一面にあたって、かんかんするに^{かんしゃく}は癩癩が起りました。上の方に細長い影がかたまって、時々秋風にゆすれるのが眼につきます」

「何だい、その細長い影と云うのは」

「渋柿の皮を^む剥いて、軒へ^つ吊るしておいたのです」

「ふん、それから」

「仕方がないから、^{とこ}床を出て障子をあけて
^{えんがわ}椽側へ出て、^{あまぼ}渋柿の甘干しを一つ取って食
いました」

「うまかったかい」と主人は小供みたような事を
聞く。

「うまいですよ、あの辺の柿は。とうてい東京な
どじゃあの味はわかりませんね」

「柿はいいがそれから、どうしたい」と今度は東
風君がきく。

「それからまたもぐって眼をふさいで、早く日が
暮れればいいかと、ひそかに神仏に念じて見た。
約三四時間も立ったと思う頃、もうよかろうと、
首を出すとあにはからんや烈しい秋の日は依然
として六尺の障子を照らしてかんかんする、上の

方に細長い影がかたまって、ふわふわする」

「そりゃ、聞いたよ」

なんべん
「何返もあるんだよ。それから床を出て、障子をあけて、甘干しの柿を一つ食って、また寝床

はい
へ這入って、早く日が暮ればいいと、ひそかに神仏に祈念をこらした」

「やっぱりもとのところじゃないか」

「まあ先生そう焦^せかずに聞いて下さい。それから約三四時間夜具の中で辛^{しんぼう}抱して、今度こそもうよかろうとぬっと首を出して見ると、烈しい秋の日は依然として六尺の障子へ一面にあたって、上の方に細長い影がかたまって、ふわふわしている」

「いつまで行っても同じ事じゃないか」

「それから床を出て障子を開けて、^{えんがわ} 椽 側 へ出
て甘干しの柿を一つ食って……」

「また柿を食ったのかい。どうもいつまで行っ
ても柿ばかり食ってて際限がないね」

「私もじれったくてね」

「君より聞いてる方がよっぽどじれったいぜ」

「先生はどうも^{せっかち} 性 急 だから、話がしにくくっ
て困ります」

「聞く方も少しは困るよ」と東風君も^{あん} 暗 に不平
も
を洩らした。

「そう諸君が御困りとある以上は仕方がない。た
いていにして切り上げましょう。要するに私は甘
干しの柿を食ってはもぐり、もぐっては食い、と
うとう^{のきば} 軒 端 に吊るした奴をみんな食ってしま

いました」

「みんな食ったら日も暮れたろう」

「ところがそう行かないので、私が最後の甘干しを食って、もうよかろうと首を出して見ると、相変らず烈しい秋の日が六尺の障子へ一面にあたって……」

「僕あ、もう御免だ。いつまで行っても^は果てしがない」

「話す私も^あ飽き飽きします」

「しかしそのくらい根気があればたいていの事業は^{じょうじゅ}成就するよ。だまっていたら、あしたの朝まで秋の日がかんかんするんだろう。全体いつ頃にヴァイオリンを買う気なんだい」とさすがの迷亭君も少し^{しんぼう}辛抱し切れなくなったと見え

る。ただ独仙君のみは泰然として、あしたの朝までも、あさっての朝までも、いくら秋の日がかんかんしても動ずる^{けしき}気色はさらにはない。寒月君も落ちつき払ったもので

「いつ買う気だとおっしゃるが、晩になりさえすれば、すぐ買いに出掛けるつもりなのです。ただ残念な事には、いつ頭を出して見ても秋の日がかんかんしているものですから——いえその時のわたくし^私の苦しみと云ったら、とうてい今あなた方の御じれになるところの騒ぎじゃないです。私は最後の甘干を食っても、まだ日が暮れないのを見て、として思わず泣きました。東風君、僕は実^{なさ}に情けなくって泣いたよ」

「そうだろう、芸術家は本来多情多恨だから、泣

いた事には同情するが、話はもっと早く進行させたいものだね」と東風君は人がいいから、どこまでも真面目で ^{こっけい}滑稽な挨拶をしている。

「進行させたいのは山々だが、どうしても日が暮れてくれないものだから困るのさ」

「そう日が暮れなくちゃ聞く方も困るからやめよう」と主人がとうとう我慢がし切れなくなつたと見えて云い出した。

「やめちゃんとお困ります。これからがいよいよ佳境^いに入るところですから」

「それじゃ聞くから、早く日が暮れた事にしたらよかろう」

「では、少しご無理なご注文ですが、先生の事ですから、^ま枉げて、ここは日が暮れた事に致しまし

よう」

「それは好都合だ」と独仙君が澄まして述べられたので一同は思わずどっと噴き出した。

「いよいよ夜に入ったので、まず安心とほっと一
息ついて くらかけむら 鞍 懸 村 の下宿を出ました。私は
しょうらいそうぞう きらい
性 来 騒 々 しい所が 嫌 ですから、わ
ざと便利な市内を避けて、 じんせきまれ
人と 人 迹 稀 な寒村の
百姓家にしばらく かぎゅう いおり
蝸 牛 の 庵 を結んでいた
たのです……」

「人迹の稀なはおんまり おおげさ
大 袈 裟 だね」と主人が
抗議を申し込むと「蝸牛の庵も ぎょうさん
仰 山 だよ。
床の間なしの四畳半くらいにしておく方が写生
的で面白い」と迷亭君も苦情を持ち出した。東風
君だけは「事実はどうでも言語が詩的で感じがいい

い」と褒^ほめた。独仙君は真面目な顔で「そんな所に住んでいては学校へ通うのが大変だろう。何里くらいあるんですか」と聞いた。

「学校まではたった四五丁です。元来学校からして寒村にあるんですから……」

「それじゃ学生はその辺にだいぶ宿をとってるんでしょう」と独仙君はなかなか承知しない。

「ええ、たいていな百姓家には一人や二人は必ずいます」

「それで人迹稀なんですか」と正面攻撃を^{くら}喰^くわせる。

「ええ学校がなかったら、全く人迹は稀ですよ。

……で当夜の服装と云うと、^{ておりもめん}手織木綿の綿入の上へ^{きんボタン}金釦^{がいう}の制服外套^{がいう}を着て、外套の

ずきん かぶ
頭巾をすぽりと被ってなるべく人の目につ

かないような注意をしました。おりから折柄柿落葉の

時節で宿からなんごうかいどう 南郷街道へ出るまでは木

の葉で路が一杯です。ひとあし 一歩運ぶごとにがさが

さするのが気にかかります。誰かあとをつけて来

そうでたまりません。振り向いて見ると

とうれいじ
東嶺寺の森がこんもりと黒く、暗い中に暗く

写っています。この東嶺寺と云うのは

まつだいらけ ぼだいしょ こうしんやま
松平家の菩提所で、庚申山の

ふもと
麓にあって、私の宿とは一丁くらいしか

へだた ゆうすい ぼんせつ
隔っていない、すこぶる幽邃な梵刹

です。森から上はのべつ幕なしの星月夜で、例の

すじかい
天の河が長瀬川を筋違に横切って末は――

末は、そうですね、まずハワイ 布哇の方へ流れていま

す……」

「布哇は突飛だね」と迷亭君が云った。

「南郷街道をついに二丁来て、^{たかのだいまち}鷹台町から市内に這入って、^{こじょうまち}古城町を^{せんごくまち}仙石町を曲って、^{くいしろちょう}喰代町を横に見て、^{とおりちょう}通町を一丁目、二丁目、三丁目と順に通り越して、それから^{おわりちょう}尾張町、^{なごやちょう}名古屋町、^{しゃちほこちょう}鱈鉾町、^{かまぼこちょう}蒲鉾町……」

「そんなにいろいろな町を通らなくてもいい。要するにヴァイオリンを買ったのか、買わないのか」と主人がじれったそうに聞く。

「楽器のある店は^{かねぜん}金善即ち金子善兵衛方ですから、まだなかなかです」

「なかなかでもいいから早く買うがいい」

「かしこまりました。それで金善方へ来て見ると、
店にはランプがかんかんともって……」

「またかんかんか、君のかんかんは一度や二度で
済まないんだから ^{なんじゅう} 難 渋 するよ」と今度は迷
亭が予防線を張った。

「いえ、今度のかんかんは、ほんの通り一返のか
んかんですから、別段御心配には及びませ
ん。…… ^{ほかけ} 灯 影 にすかして見ると例のヴァイオリ
ンが、ほのかに秋の ^ひ 灯 を反射して、くり込んだ胴
の丸みに冷たい光を帯びています。つよく張った
きんせん ^{うつ} 琴 線 の一部だけがきらきらと白く眼に 映
ります。……」

「なかなか叙述がうまいや」と東風君がほめた。

「あれだな。あのヴァイオリンだなと思うと、急
どうき
に動悸がして足がふらふらします……」

「ふふん」と独仙君が鼻で笑った。

「思わず馳^かけ込んで、隠^{かくし}袋から蝦蟇^{がまぐち}口を出し
て、蝦蟇口の中から五円札を二枚出して……」

「とうとう買ったかい」と主人がきく。

「買おうと思いましたが、ましてばし、ここが
かんじん
肝心のところだ。滅^{めった}多な事をしては失敗す
る。まあよそうと、^{きわ}際どいところで思い留まり
ました」

「なんだ、まだ買わないのかい。ヴァイオリン一
挺でなかなか人を引っ張るじゃないか」

「引っ張る訳じゃないんですが、どうも、まだ買

えないんですから仕方ありません」

「なぜ」

「なぜって、まだ^{よい}宵の口で人が大勢通るんですもの」

「構わんじゃないか、人が二百や三百通ったって、君はよっぽど妙な男だ」と主人はぶんぶんしている。

「ただの人なら千が二千でも構いせんがね、学校の生徒が腕まくりをして、大きなステッキを持って^{はいかい}徘徊しているんだから容易に手を出せませんよ。中には^{ちんでんとう}沈 澱 党などと号して、いつまでもクラスの底に溜まって喜んでるのがありますからね。そんなのに限って柔道は強いのですよ。^{めった}滅多にヴァイオリンなどに手出しは出来

ません。どんな目に^あ逢うかわかりません。私だっ
てヴァイオリンは欲しいに相違ないですけれど
も、命はこれでも惜しいですからね。ヴァイオリ
ン^ひを弾いて殺されるよりも、弾かずに生きてる方
が楽ですよ」

「それじゃ、とうとう買わずにやめたんだね」と
主人が念を押す。

「いえ、買ったのです」

「じれったい男だな。買うなら早く買うさ。いや
ならいやでいいから、早くかたをつけたらよさそ
うなものだ」

「えへへへ、世の中の事はそう、こっちの思う
ように^{らち}埒があくもんじゃありませんよ」と云い
ながら寒月君は冷然と「朝日」へ火をつけてふか

し出した。

主人は面倒になったと見えて、ついでと立って書
齋へ^{はい}這入ったと思ったら、何だか古ぼけた洋書を
一冊持ち出して来て、ごろりと^{はらばい}腹這になって
読み始めた。独仙君はいつの^ま間にやら、床の間の
前へ退去して、^{ひと}独りで碁石を並べて
ひとりずもう
一人相撲をとっている。せっかくの逸話もあり
長くかかるので聴手が一人減り二人減って、
残るは芸術に忠実なる東風君と、長い事にかつて
へきえき
辟易した事のない迷亭先生のみとなる。

長い煙をふうと世の中へ遠慮なく吹き出した
寒月君は、やがて^{ぜんどうよう}前同様の速度をもって談
話をつづける。

「東風君、僕はその時こう思ったね。とうていこ

りゃ宵の口は駄目だ、と云って真夜中に来れば金善は寝てしまうからなお駄目だ。何でも学校の生徒が散歩から帰りつくして、そうして金善がまだ寝ない時を見計らって来なければ、せっかくの計画が水泡に帰する。けれどもその時間をうまく見計うのがむずかしい」

「なるほどこりゃむずかしからう」

「で僕はその時間をまあ十時頃と見積ったね。それで今から十時頃までどこかで暮さなければならぬ。うちへ帰って出直すのは大変だ。友達のうちへ話しに行くのは何だか気が^{とが}咎めるようで面白くなし、仕方がないから相当の時間がくるまで市中を散歩する事にした。ところが平生ならば二時間や三時間はぶらぶらあるいているうち

に、いつの間にか経ってしまうのだがその夜に限
って、時間のたつのが遅いの何のっ
て、——^{せんしゅう}千 秋の思とはあんな事を云うのだ
ろうと、しみじみ感じました」とさも感じたら
しい風をしてわざと迷亭先生の方を向く。

「古人を待つ身につらき^{おきごたつ}置 炬 燵と云われた
事があるからね、また待たる身より待つ身はつ
らいともあって軒に吊られたヴァイオリンもつ
らかったろうが、あてのない探偵のようにうろ
ろ、まごついている君はなおさらつらいだろう。

^{るいりい}累々として^{そうか}喪家の犬のごとし。いや宿のな
い犬ほど気の毒なものは実際ないよ」

「犬は残酷ですね。犬に比較された事はこれでも
まだありませんよ」

「僕は何か君の話をきくと、^{むか}昔^しの芸術家の
伝を読むような気持がして同情の念に^た堪えない。
犬に比較したのは先生の^{じょうだん}冗談だから気に
掛けずに話を進行したまえ」と東風君は^{いしや}慰藉
した。慰藉されなくても寒月君は無論話をつづける
つもりである。

「それから^{おかちまち}徒町^{ひゃっきまち}から百騎町を通っ
て、^{りょうがえちょう}両替町^{たかじょうまち}から鷹匠町へ出て、
県庁の前で枯柳の数を勘定して病院の横で窓の
^ひ灯を計算して、^{こんやばし}紺屋橋^{まきたばこ}の上で巻煙草を二
本ふかして、そうして時計を見た。……」

「十時になったかい」

「惜しい事にならないね。――紺屋橋を渡り切っ
て川添に東へ^{のぼ}上^{あんなま}って行くと、按摩に三人あつ

た。そうして犬がしきりに^ほ吠えましたよ先生
……」

「秋の夜長に川端で犬の遠吠をきくのはちょっと芝居がかりだね。君は^{おちゅうど}落人^どと云う格だ」

「何かわるい事でもしたんですか」

「これからしようと云うところさ」

^{かわいそう}
「可哀相にヴァイオリンを買うのが悪い事じゃ、音楽学校の生徒はみんな罪人ですよ」

「人が認めない事をすれば、どんないい事をして
も罪人さ、だから世の中に罪人ほどあてにならない
ものはない。^{ヤソ}耶蘇もあんな世に生れれば罪人さ。
好男子寒月君もそんな所でヴァイオリンを買えば罪人さ」

「それじゃ負けて罪人としておきましょう。罪人はいいですが十時にならないのには弱りました」

「もう一返^{ぺん}、町の名を勘定するさ。それで足りなければまた秋の日をかんかんさせるさ。それでもおっつかなければまた甘干しの渋柿を三ダースも食うさ。いつまでも聞くから十時になるまでやりたまえ」

寒月先生はにやにやと笑った。

「そう先^{せん}を越されては降参するよりほかはありません。それじゃ一足飛びに十時にしてしましましょう。さて御約束の十時になって金^{かね}善^{ぜん}の前へ来て見ると、夜寒の頃ですから、さすがめぬき^{めぬき}の^{りょう}両^{がえち}替^{ょう}町^うもほとんど人通りが

絶えて、むこうからくる下駄の音さえ淋しい心
持ちです。金善ではもう大戸をたてて、わずかに
くぐりとしょうじ
潜り戸だけを障子にしています。私は何と
なく犬に尾けられたような心持で、障子をあけて
はい
這入るのに少々薄気味がわるかったです……」

この時主人はきたらしい本からちょっと眼
をはずして、「おいもうヴァイオリンを買ったか
い」と聞いた。「これから買うところです」と東
風君が答えると「まだ買わないのか、実に永いな」

ひとごと
と独り言のように云ってまた本を読み出し
た。独仙君は無言のまま、白と黒で碁盤を大半
うず
埋めてしまった。

「思い切って飛び込んで、ずきん かぶ
頭巾を被ったまま
ヴァイオリンをくれと云いますと、火鉢の周囲に

四五人小僧や若僧がかたまって話をしていたのが驚いて、申し合せたように私の顔を見ました。私は思わず右の手を挙げて頭巾をぐいと前の方に引きました。おいヴァイオリンをくれと二度目に云うと、一番前にいて、私の顔を^{のぞ}覗き込むようにしていた小僧がへえと^{おぼつか}覚束ない返事をして、立ち上がって例の店先に^つ吊るしてあったのを三四挺一度に^{おろ}卸して来ました。いくらかと聞くと五円二十銭だと云います……」

「おいそんな安いヴァイオリンがあるのかい。おもちゃじゃないか」

「みんな^{どうね}同 価かと聞くと、へえ、どれでも変りはございません。みんな丈夫に念を入れて^{こし}拵らえてございますと云いますから、^{がまぐち}蝦蟇口のなか

から五円札と銀貨を二十銭出して用意の大風呂敷を出してヴァイオリンを包みました。この

あいだ

間、店のものは話を中止してじっと私の顔を見えています。顔は頭巾でかくしてあるから分る

きづかい

気遣はないのですけれども何だか気がせい

て一刻も早く往来へ出たくて^{たま}堪りません。よう

やくの事風呂敷包を^{がいとう}外套の下へ入れて、店を

出たら、番頭が声^{そろ}を揃えてありがたいと大きな声を出したのにはひやっとしました。往来へ出て

ちょっと見廻して見ると、^{さいわい}幸誰もいないよ

うですが、一丁ばかり^{むこう}向から二三人して町内中に響けとばかり詩吟をして来ます。こいつは大

変だと金善の角を西へ折れて^{ほりばた}濠端を

やくおうじみち

薬王師道へ出て、はんの木村から

こうしんやま すそ
庚 申 山 の 裾 へ出てようやく下宿へ歸り
ました。下宿へ歸って見たらもう二時十分前でした」

「夜通しあるいていたようなものだね」と東風君
が気の毒そうに云うと「やっと上がった。やれや
れ長い 道 中 どうちゅうすごろく 双 六 だ」と迷亭君はほっと
一と息ついた。

「これからが聞きどころですよ。今までは単に序
幕です」

「まだあるのかい。こいつは容易な事じゃない。
たいていのものは君に逢っちゃ根氣負けをする
ね」

「根氣はとにかく、ここでやめちゃ仏作って魂入
れずと一般ですから、もう少し話します」

「話すのは無論随意さ。聞く事は聞くよ」

「どうです苦沙弥先生も御聞きになつては。もうヴァイオリンは買ってしまいましたよ。ええ先生」

「こん度はヴァイオリンを売るところかい。売るところなんか聞かなくってもいい」

「まだ売るどこじゃありません」

「そんならなお聞かなくってもいい」

「どうも困るな、東風君、君だけだね、熱心に聞いてくれるのは。少し張合が抜けるがまあ仕方がない、ざっと話してしまおう」

「ざっとでなくともいいから ^{ゆっ} 緩く^り話したまえ。大変面白い」

「ヴァイオリンはようやくの思で手に入れたが、

まず第一に困ったのは置き所だね。僕の所へは
だいぶ
大分人が遊びにくるから滅多な所へぶらさ
めった
げたり、立て懸けたりするとすぐ露見してしまう。

穴を掘って埋めちゃ掘り出すのが面倒だろう」

「そうさ、天井裏へでも隠したかい」と東風君は
気楽な事を云う。

「天井はないさ。ひゃくしょうや
百 姓 家 だもの」

「そりゃ困ったろう。どこへ入りたい」

「どこへ入れたと思う」

「わからないね。戸袋のなかか」

「いいえ」

「夜具にくるんで戸棚へしまったか」

「いいえ」

東風君と寒月君はヴァイオリンの かく が
隠 れ 家に

ついてかくのごとく問答をしているうちに、主人と迷亭君も何かしきりに話している。

「こりゃ何と読むのだい」と主人が聞く。

「どれ」

「この二行さ」

「何だって？ Quid aliud est mulier nisi
amiciti æ [# 「 amiciti æ 」 は 底 本 で は
「amiticiae」 inimica……こりゃ^{ラテンご}君羅匈語じゃ
ないか」

「羅匈語は分ってるが、何と読むのだい」

「だって君は平生羅匈語が読めると云ってるじゃないか」と迷亭君も危険だと見て取って、ちょっと逃げた。

「無論読めるさ。読める事は読めるが、こりゃ何

だい」

「読める事は読めるが、こりゃ何だは手ひどいね」

「何でもいいからちょっと英語に訳して見ろ」

「見ろは烈しいね。まるで従卒のようだね」

「従卒でもいいから何だ」

「まあ羅匈語などはあとにして、ちょっと寒月君
のご高話を拝聴^{つかまつ} 仕^{つかまつ} ろうじゃないか。今大変
なところだよ。いよいよ露見するか、しないか危
機一髪と云う^{あたか} 安^{せき} 宅^{せき} の^{せき} 関^{せき} へかかっているんだ。
——ねえ寒月君それからどうしたい」と急に乗気
になって、またヴァイオリンの仲間入りをする。
主人は^{なさ} 情^{なさ} けなくも取り残された。寒月君はこれ
に勢を得て隠し所を説明する。

「とうとう古つづらの中へ隠しました。このつづらは国を出る時^{おばあ}御祖母さんが餞別にくれたものですが、何でも御祖母さんが嫁にくる時持って来たものだそうです」

「そいつは古^{こぶつ}物だね。ヴァイオリンとは少し調和しないようだ。ねえ東風君」

「ええ、ちと調和せんです」

「天井裏だって調和しないじゃないか」と寒月君は東風先生をやり込めた。

「調和はしないが、句にはなるよ、安心し給え。

あきさび
秋 淋 しつづらにかくすヴァイオリンはどうだい、両君」

「先生今日は^{だいぶ}大分俳句が出来ますね」

「今日に限った事じゃない。いつでも腹の中で出

来てるのさ。僕の俳句における ^{ぞうけい}造詣 と云ったら、^{こしきし}故子規^ま子も舌を捲いて驚ろいたくらいのものさ」

「先生、子規さんとは御つき合でしたか」と正直な東風君は ^{しんそつ}真率 な質問をかける。

「なにつき合わなくっても始終無線電信で肝胆相照らしていたもんだ」と無茶苦茶を云うので、東風先生あきれて黙ってしまった。寒月君は笑いながらまた進行する。

「それで置き所だけは出来た訳だが、今度は出すのに困った。ただ出すだけなら人目を ^{かす}掠めてなが ^眺めるくらいはやれん事はないが、眺めたばかりじゃ何にもならない。^ひ弾かなければ役に立たない。弾けば音が出る。出ればすぐ露見する。ちょ

うど 木 槿 垣 を一重隔てて南隣りは
ちんでんぐみ
沈 澱 組 の頭領が下宿しているんだから
けんのん
剣 呑 だあね」

「困るね」と東風君が気の毒そうに調子を合わせる。

「なるほど、こりゃ困る。論より証拠音が出るん
だから、小 督 の 局 も全くこれでしくじった
んだからね。これがぬすみ食をするとか、
にせさつ
贗 札 を造るとか云うなら、まだ始末がいいが、
おんぎょく
音 曲 は人に隠しちゃ出来ないものだから
ね」

「音さえ出なければどうでも出来るんですが
……」

「ちょっと待った。音さえ出なけりゃと云うが、

音が出なくても ^{かく} 隠 ^{おお} し 了 せないのがあるよ。

むか

昔 し僕等が小石川の御寺で自炊をしている時

分に鈴木の ^{とう} 藤 さんと云う人がいてね、この藤さ

んが大変 ^{みりん} 味 淋 がすきで、ビールの ^{とっくり} 徳 利 へ味

淋を買って来ては一人で楽しみに飲んでいたの

さ。ある日 ^{とう} 藤 さんが散歩に出たあとで、よせば
いいのに苦沙弥君がちょっと盗んで飲んだところ

ろが……」

「おれが鈴木の意味淋などをのむものか、飲んだのは君だぜ」と主人は突然大きな声を出した。

「おや本を読んでるから大丈夫かと思ったら、やはり聞いているね。油断の出来ない男だ。耳も八丁、目も八丁とは君の事だ。なるほど云われて見ると僕も飲んだ。僕も飲んだには相違ないが、発覚し

たのは君の方だよ。――両君まあ聞きたまえ。苦
沙弥先生元来酒は飲めないのだよ。ところを人の
味淋だと思って一生懸命に飲んだものだから、さ
あ大変、顔中^{まっか}真赤にはれ上ってね。いやもう
ふため
二目とは見られないありさまさ……」

「黙っている。^{ラテンご}羅匈語も読めない癖に」
「ハハハハ、それで^{とう}藤さんが帰って来てビールの
徳利をふって見ると、半分以上足りない。何でも
誰か飲んだに相違ないと云うので見廻して見
ると、大将隅の方に^{しゅでい}朱泥を練りかためた人形
のようにかたくなっていなあね……」

三人は思わず^{こうぜん}哄然と笑い出した。主人も本
をよみながら、くすくすと笑った。^{ひと}ひとり独仙君
に至っては^{きがいき}機外の機を^{ろう}弄し過ぎて、少々疲労

したと見えて、碁盤の上へのしかかって、いつのまにやら、ぐうぐう寝ている。

「まだ音がしないもので露見した事がある。僕が昔し ^{うばこ} 姥 子 の温泉に行って、一人のじじいと相宿になった事がある。何でも東京の呉服屋の隠居か何かだったがね。まあ相宿だから呉服屋だろうが、古着屋だろうが構う事はないが、ただ困った事が一つ出来てしまった。と云うのは僕は ^{うばこ} 姥 子 へ着いてから三日目に ^{たばこ} 煙 草 を切らしてしまったのさ。諸君も知ってるだろうが、あの姥子と云うのは山の中の一軒屋でただ温泉に ^{はい} 這入って飯を食うよりほかにどうもこうも仕様のない不便の所さ。そこで煙草を切らしたのだから御難だね。物はないとなるとなお欲しくなるもので、煙草がな

いなと思うやいなや、いつもそんなでないのが急に呑みたくなり出してね。意地のわるい事に、そのじじいが風呂敷に一杯煙草を用意して登山しているのさ。それを少しずつ出しては、人の前であぐら
胡坐をかいて呑みたいだろうと云わないばかりに、すばすばふかすのだね。ただふかすだけなら勘弁のしようもあるが、しまいには煙を輪に吹

いて見たり、^{たて}豎に吹いたり、横に吹いたり、
ないし ^{かんたんゆめ} 乃 至 は 邯 鄲 夢 の ^{まくら} 枕 と ^{ぎゃく} 逆 に 吹い
たり、または鼻から獅子の ^{ほらい} 洞 入 り、 ^{ほらがえ} 洞 返 り
に吹いたり。つまり呑みびらかすんだね……」

「何です、呑みびらかすと云うのは」

^{いしょうどうぐ}
「衣 装 道 具 なら見せびらかすのだが、煙草
だから呑みびらかすのさ」

「へえ、そんな苦しい思いをなさるより貰ったらいいでしょう」

「ところが貰わないね。僕も男子だ」

「へえ、貰っちゃいけないんですか」

「いけるかも知れないが、貰わないね」

「それでどうしました」

「貰わないで ^{ぬす} 偷んだ」

「おやおや」

「奴さん ^{てぬぐい} 手拭 をぶらさげて湯に出掛けたから、呑むならここだと思って一心不乱立てつづけに呑んで、ああ愉快だと思いう ^ま 間もなく、 ^{しょうじ} 障子 がからりとあいたから、おやと振り返ると煙草の持ち主さ」

「湯には這入らなかったのですか」

「這入ろうと思ったら^{きんちゃく}巾着を忘れたのに
気がついて、廊下から引き返したんだ。人が巾着
でもとりゃしまいし第一それからが失敬さ」

「何とも云えませんね。煙草の^{おてぎわ}御手際じゃ」

「ハハハハじじいもなかなか眼識があるよ。巾着
はとにかくだが、じいさんが障子をあけると二日
間の溜め呑みをやった煙草の煙りがむっとする
^{へや}ほど室のなかに^{こも}籠ってるじゃないか、悪事千
里とはよく云ったものだね。たちまち露見してし
まった」

「じいさん何とかいいましたか」

「さすが年の功だね、何にも言わずに^{まきたばこ}巻煙草
を五六十本半紙にくるんで、失礼ですが、こんな
^{そは}粗葉でよろしければどうぞお呑み下さいましと

云って、また湯壺^{ゆつぽ}へ下りて行ったよ」

「そんなのが江戸趣味と云うのでしょうか」

「江戸趣味だか、呉服屋趣味だか知らないが、そ

れから僕は爺さんと ^{おおい}大 ^{かんたん}に ^{あいて}肝 胆 相 照 ら
して、二週間の間面白く ^{とうりゅう}逗 留 して帰って来
たよ」

「煙草は二週間中爺さんの御馳走になったんで
すか」

「まあそんなところだね」

「もうヴァイオリンは片ついたかい」と主人はよ
うやく本を伏せて、起き上りながらついに降参を
申し込んだ。

「まだです。これからが面白いところです、ちょ
うどいい時ですから聞いて下さい。ついでにあの

碁盤の上で昼寝をしている先生――何とか云いましたね、え、独仙先生、――独仙先生にも聞いていただきたいな。どうですあんなに寝ちゃ、からだに毒ですぜ。もう起してもいいでしょう」

「おい、独仙君、起きた起きた。面白い話がある。起きるんだよ。そう寝ちゃ毒だとさ。奥さんが心配だとさ」

「え」と云いながら顔を上げた独仙君の山^{やぎ}羊^{ひげ}髯
を伝わって垂^{よだれ}涎が一筋長々と流れて、
かたつむり^{あと}の這った迹のように歴然と光っている。

「ああ、眠かった。山上の白雲わが^{ものう}懶^ねきに似たりか。ああ、いい心持ちに寝たよ」

「寝たのはみんなが認めているのだがね。ちっと

起きちゃどうだい」

「もう、起きてもいいね。何か面白い話があるかい」

「これからいよいよヴァイオリンを――どうするんだったかな、苦沙弥君」

「どうするのかな、とんと^{けんとう}見^{けんとう}当^{けんとう}がつかない」

「これからいよいよ弾くところです」

「これからいよいよヴァイオリンを弾くところだよ。こっちへ出て来て、聞きたまえ」

「まだヴァイオリンかい。困ったな」

「君は^{むげん}無^{そきん}絃^{そきん}の素^{そきん}琴^{そきん}を弾ずる連中だから困らない方なんだが、寒月君のは、きいきいぴいぴいきんじょがっぺき^{おおい}近^{おおい}所^{おおい}合^{おおい}壁^{おおい}へ聞えるのだから大^{おおい}に困

ってるところだ」

「そうかい。寒月君近所へ聞えないようにヴァイ
オリンを弾く^{ほう}方^方を知らんですか」

「知りませんね、あるなら伺いたいもので」

「伺わなくても^{ろじ}露地の^{びやくぎゅう}白^牛を見ればす
ぐ分るはずだが」と、何だか通じない事を云う。

寒月君はねぼけてあんな珍語を^{ろう}弄^弄するのだろ
うと鑑定したから、わざと相手にならないで話頭
を進めた。

「ようやくの事で一策を案出しました。あくる日
は天長節だから、朝からうちにいて、つづらの
^{ふた}蓋^いをとって見たり、かぶせて見たり^{いちんち}一日^日そ
わそわして暮らしてしまいましたがいよいよ日
が暮れて、つづらの底でが鳴き出した時思い切っ

て例のヴァイオリンと弓を取り出しました」

「いよいよ出たね」と東風君が云うと「滅^{めった}多に弾くとあぶないよ」と迷亭君が注意した。

「まず弓を取って、^{きっさき}切^{つばもと}先^{つばもと}から^{つばもと}鐔^{つばもと}元^{つばもと}までしらべて見る……」

「下手な刀屋じゃあるまいし」と迷亭君が^{ひやか}冷^{ひやか}評^{ひやか}した。

「実際これが自分の魂だと言うと、^{さむらい}侍^とが研ぎ澄した名刀を、^{ちょうや}長^{ほかげ}夜^{さやばらい}の灯^{さやばらい}影^{さやばらい}で^{さやばらい}鞘^{さやばらい}払^{さやばらい}をする時のような心持ちがするものですよ。私は弓を持ったままぶるぶるとふるえました」

「全く天才だ」と云う東風君について「全く^{てんかん}癩^{てんかん}癩^{てんかん}だ」と迷亭君がつけた。主人は「早く弾いたらよかろう」と云う。独仙君は困ったものだ

と云う顔付をする。

「ありがたい事に弓は無難です。今度はヴァイオリンを同じくランプの ^{そば} 傍へ引き付けて、裏表共よくしらべて見る。この ^{あいだ} 間 約五分間、つづらの底では始終が鳴いていると思って下さい。……」

「何とでも思っ^てやるから安心して弾くがいい」

「まだ弾きゃしません。――幸いヴァイオリンも ^{きず} 疵がない。これなら大丈夫とぬくと立ち上がる……」

「どっかへ行くのかい」

「まあ少し黙って聞いて下さい。そう一句毎に邪魔をされちゃ話が出来ない。……」

「おい諸君、だまるんだとさ。シーシー」

「しゃべるのは君だけだぜ」

「うん、そうか、これは失敬、謹聴謹聴」

「ヴァイオリンを小脇に^か抱い込んで、^{ぞうり}草履を
つつ
突 かけたまま二歩草の戸を出たが、まてしば
し……」

「そらおいでなすった。何でも、どっかで停電す
るに違ないと思った」

「もう帰ったって甘干しの柿はないぜ」

「そう諸先生が御ませ返しになってははなはだ
^いかん
遺 憾の至りだが、東風君一人を相手にするより
致し方がない。――いいかね東風君、二歩出た
がまた引き返して、国を出るとき三円二十銭で買
^あか^げつと ^かぶ
った 赤 毛 布 を頭から 被 っ てね、ふっとラン

まっくらやみ
プを消すと君 真 暗 闇 になって今度は
どうり ありか
草履の所在地が判然しなくなった」

「一体どこへ行くんだい」

「まあ聞いてたまい。ようやくの事草履を見つけ
て、表へ出ると星月夜に柿落葉、赤毛布にヴァイ

オリン。右へ右へと つまさきあが
爪先上りに
こうしんやま とうれいじ
庚申山へ差ししかかってくると、東嶺寺
の鐘がボーンと けっと
毛布を通して、耳を通して、頭
の中へ響き渡った。 なんじ
何時だと思う、君」

「知らないね」

「九時だよ。これから秋の夜長をたった一人、山
道八丁を おおだいら
大 平 と云う所まで登るのだが、平
生なら臆病な僕の事だから、恐しくってたまらな
いところだけれども、一心不乱となると不思議な

もので、^{こわ}怖いにも怖くないにも、毛頭そんな念
はてんで心の中に起らないよ。ただヴァイオリン
が弾きたいばかりで胸が一杯になってるんだか
ら妙なものさ。この大平と云う所は庚申山の南側
で天気の良い日に登って見ると赤松の間から城

下が一目に^{みおろ}見下せる眺望佳絶の平地で――そ
うさ広さはまあ百坪もあろうかね、真中に八畳敷

ほどな一枚岩があって、北側は^{うぬま}鵜の沼と云う池
つづきで、池のまわりは三抱えもあろうと云う

くすのき
^樟ばかりだ。山のなかだから、人の住んで

る所は^{しょうのう}樟脳^とを採る小屋が一軒あるばかり、
池の近辺は昼でもあまり心持ちのいい場所じゃ
ない。幸い工兵が演習のため道を切り開いてくれ
たから、登るのに骨は折れない。ようやく一枚岩

の上へ来て、毛^{けっと}布を敷いて、ともかくもその上へ坐った。こんな寒い晩に登ったのは始めてなんだから、岩の上へ坐って少し落ち着くと、あたり

の^{さみ}淋^ししさが次第次第に腹の底へ沁^しみ渡る。こう云う場合に人の心を乱すものはただ^{こわ}怖いと云う感じばかりだから、この感じさえ引き抜くと、

余るところは^{こうこうれつれつ}皎々冽々たる空霊の気だけになる。二十分ほど^{ぼうぜん}茫然としているうちに何だか水晶で造った御殿のなかに、たった一人住んでるような気になった。しかもその一人住んでる僕のからだが一—いやからだばかりじゃない、心も魂もことごとく寒天か何かで製造されたごとく、不思議に^{すとお}透き徹^{とお}ってしまって、自分が水晶の御殿の中にいるのだか、自分の腹の中に水晶

の御殿があるのだか、わからなくなって来た
……」

「飛んだ事になって来たね」と迷亭君が真面目に
からかうあとに付いて、独仙君が「面白い
きょうがい
境 界 だ」と少しく感心したようすに見えた。

「もしこの状態が長くつづいたら、私はあすの朝
まで、せっかくのヴァイオリンも弾かずに、^{ぼん}茫
やり一枚岩の上に坐ってたかも知れないです
……」

「狐でもいる所かい」と東風君がきいた。

「こう云う具合で、自他の区別もなくなって、生
きているか死んでいるか方角のつかない時に、突
うし
然 後 ろの古沼の奥でギャーと云う声がした。

……」

「いよいよ出たね」

「その声が遠く反響を起して満山の秋の^{こずえ}梢
を、^{のわき}野分と共に渡ったと思ったら、はっと我に
帰った……」

「やっと安心した」と迷亭君が胸を^な撫でおろす真
似をする。

「たいしいちばんけんこんあらた
「大 死 一 番 乾 坤 新 なり」と独仙君
は目くばせをする。寒月君にはちっとも通じない。

「それから、我に帰ってあたりを見廻わすと、
^{こうしんやま}庚 申 山 一面はしんとして、雨垂れほどの音
もしない。はてな今の音は何だろうと考えた。人
の声にしては鋭すぎるし、鳥の声にしては大き過

ぎるし、猿の声にしては——この辺によもや猿は
おるまい。何だろう？ 何だろうと云う問題が頭
のなかに起ると、これを解釈しようとするので今
まで静まり返っていたやからが、
ふんぜんざつぜんじゅうぜん
紛然雑然糅然としてあたかもコ
ンノート殿下歓迎の当時における都人士狂乱の
態度を^{もっ}以て脳裏をかけ廻る。そのうちに
そうしん^{しょうちゅう}
総身の毛穴が急にあいて、焼酎を吹
きかけた毛^{けずね}脛のように、勇氣、胆力、分別、沈
着などと号するお客様がすうすうと蒸発して行
く。心臓が肋骨の下でステテコを踊り出す。両足
が紙^{たこ}鳶のうなりのように震動をはじめ。これは
たまらん。いきなり、毛^{けつと}布を頭からかぶって、
ヴァイオリンを小脇に^か掻い込んでひょろひょろ

と一枚岩を飛び下りて、一目散に山道八丁を
ふもと麓の方へかけ下りて、宿へ帰ってふとん布団へく
るまって寝てしまった。今考えてもあんな気味の
わるかった事はないよ、東風君」

「それから」

「それでおしまいさ」

「ヴァイオリンは弾かないのかい」

「弾きたくっても、弾かれないじゃないか。ギャ
一だもの。君だってきっと弾かれないよ」

「何だか君の話は物足りないような気がする」

「気がしても事実だよ。どうです先生」と寒月君
は一座を見廻わして大得意のようすである。

「ハハハハこれは上出来。そこまで持って行くに
はだいぶ苦心惨憺たるものがあつたのだろう。僕

は男子のサンドラ・ベロニが東方君子の^{くに}邦に出現するところかと思って、今が今まで真面目に拝聴していたんだよ」と云った迷亭君は誰かサンドラ・ベロニの講釈でも聞くかと思のほか、何にも質問が出ないので「サンドラ・ベロニが月下にたてごと^{イタリアふう}イタリヤふう^堅琴を弾いて、以太利亜風の歌を森の中でうたっているところは、君の^{こうしんやま}庚申山へヴァイオリンをかかえて^{のぼ}上るところと同曲にして異巧なるものだね。惜しい事に向うは^{げっちゅう}月^中の^{じょうが}じょうが^{ふるぬま}を驚ろかし、君は^{かいり}古沼の怪狸におどろかされたので、^{きわ}際^{こっけい}どいところで滑稽と崇高の大差を来たした。さぞ^{いかん}遺憾だろう」と一人で説明すると、

「そんなに遺憾ではありません」と寒月君は存外

平気である。

「全体山の上でヴァイオリンを弾こうなんて、ハイカラをやるから、おどかされるんだ」と今度は主人が酷評を加えると、

こうかん きくつり
「好 漢 この鬼窟裏に向って生計を営む。惜しい事だ」と独仙君は嘆息した。すべて独仙君の云う事は決して寒月君にわかったためしがない。寒月君ばかりではない、おそらく誰にでもわからないだろう。

「そりゃ、そうと寒月君、近頃でも矢張り学校へ行って ^{たま}珠ばかり磨いてるのかね」と迷亭先生はしばらくして話頭を転じた。

「いえ、こないだうちから国へ帰省していたもんですから、^{ざんじ}暫時中止の姿です。珠ももうあきま

したから、実はよそうかと思ってるんです」

「だって珠が磨けないと博士にはなれんぜ」と主人は少しく眉をひそめたが、本人は存外気楽で、

「博士ですか、エヘヘヘ。博士ならもうならなくってもいいんです」

「でも結婚が延びて、双方困るだろう」

「結婚って誰の結婚です」

「君のさ」

「私が誰と結婚するんです」

「金田の令嬢さ」

「へええ」

「へえって、あれほど約束があるじゃないか」

「約束なんかありゃしません、そんな事を言い触^ふ

らすなあ、向うの勝手です」

「こいつは少し乱暴だ。ねえ迷亭、君もあの一件は知ってるだろう」

「あの一件た、鼻事件かい。あの事件なら、君と僕が知ってるばかりじゃない、公然の秘密として天下一般に知れ渡ってる。現に^{まんちょう}万朝^うなどで花簪花嫁と云う表題で両君の写真を紙上に掲ぐるの栄はいつだろう、いつだろうって、うるさく僕のところへ聞きにくるくらいだ。東風君などはすでに^{えんおうか}鴛鴦歌と云う一大長篇を作って、三^{ぜん}箇月^{げん}前から待ってるんだが、寒月君が博士にならないばかりで、せっかくの傑作も宝の持ち腐れになりそうで心配でたまらないそうだ。ねえ、東風君そうだろう」

「まだ心配するほど持ちあつかつてはいませんが、とにかく満腹の同情をこめた作を公けにするつもりです」

「それ見たまえ、君が博士になるかならないかで、四方八方へ飛んだ影響が及んでくるよ。少ししっかりして、珠を磨いてくれたまえ」

「へへへへいろいろ御心配をかけて済みませんが、もう博士にはならないでもいいのです」

「なぜ」

「なぜって、私にはもう歴^{れつき}然とした女房があるんです」

「いや、こりゃえらい。いつの間^まに秘密結婚をやったのかね。油断のならない世の中だ。苦沙弥さんただ今御聞き及びの通り寒月君はすでに妻子

があるんだとさ」

「子供はまだですよ。そう結婚して一と月もたたないうちに子供が生れちゃ事でさあ」

「元来いつどこで結婚したんだ」と主人は予審判事見たような質問をかける。

「いつって、国へ帰ったら、ちゃんと、うちで待ってたのです。今日先生の所へ持って来た、このかつぶし
鰹節は結婚祝に親類から貰ったんです」

「たった三本祝うのはけちな」

「なに沢山のうちを三本だけ持って来たのです」

「じゃ御国の女だね、やっぱり色が黒いんだね」

「ええ、真黒です。ちょうど私には相当です」

「それで金田の方はどうする気だい」

「どうする気でもありません」

「そりゃ少し義理がわるかろう。ねえ迷亭」

「わるくもないさ。ほかへやりゃ同じ事だ。どうせ夫婦なんてものは闇の中で鉢合せをするようなものだ。要するに鉢合せをしないでもすむところをわざわざ鉢合わせるんだから余計な事さ。すでに余計な事なら誰と誰の鉢が合ったって構いっこないよ。ただ気の毒なのは ^{えんおうか} 鴛鴦歌 を作った東風君くらいなものさ」

「なに鴛鴦歌は都合によって、こちらへ向け ^か 易えでもよろしゅうございます。金田家の結婚式にはまた別に作りますから」

「さすが詩人だけあって自由自在なものだね」

「金田の方へ断わったかい」と主人はまだ金田を
気にしている。

「いいえ。断わる訳がありません。私の方でくれ
とも、貰いたいとも、先方へ申し込んだ事はない
ませんから、黙っていれば沢山です。――なあに
黙ってても沢山ですよ。今時分は探偵が十人も二
十人もかかって一部始終残らず知れていますよ」

探偵と云う^{ことば}言^に語^がを聞いた、主人は、急に^に苦^に
い顔をして

「ふん、そんなら黙っている」と申し渡したが、
それでも飽^あき足らなかったと見えて、なお探偵に
ついて^{しも}下^{しも}のような事をさも大議論のように述
べられた。

「不用意の際に人の懷中を抜くのがスリで、不用意の際に人の胸中を釣るのが探偵だ。知らぬ^ま間に雨戸をはずして人の所有品を^{ぬす}偷むのが泥棒で、知らぬ間に口を^{すべ}滑らして人の心を読むのが探偵だ。ダンビラを畳の上へ刺して無理に人の金銭を着服するのが強盗で、おどし文句をいやに並べて人の意志を^し強うるのが探偵だ。だから探偵と云う奴はスリ、泥棒、強盗の一族でとうてい人のかざ^{かみ}かみ風上に置けるものではない。そんな奴の云う事を聞くと癖になる。決して負けるな」

「なに大丈夫です、探偵の千人や二千人、風上に隊伍を整えて襲撃したって^{こわ}怖くはありません。たま^すす珠磨りの名人理学士水島寒月でさあ」

「ひやひや見上げたものだ。さすが新婚学士ほど

おうせい
あつて元氣 旺 盛 なものだね。しかし苦沙弥さん。探偵がスリ、泥棒、強盜の同類なら、その探偵を使う金田君のごときものは何の同類だろう」

くまさかちょうはん
「熊 坂 長 範 くらいなものだろう」

「熊坂はよかったね。一つと見えたる長範が二つ
になつてぞ 失 せにけりと云うが、あんな
からすがね しんだい
鳥 金 で 身 代 を つ く っ た
むこうよこちょう ごう
向 横 丁 の長範なんかは 業 つく張り
の、慾張り屋だから、いくつになつても失せる
きづかい
氣 遣 はないぜ。あんな奴につかまったら因果
だよ。 しょうがい
生 涯 たたるよ、寒月君用心したまえ」

ぬすびと
「なあに、いいですよ。ああら物々し 盗 人 よ。」

手並はさきにも知りつらん。それにも懲りず打ち
入るかって、ひどい目に合せてやりまさあ」と寒
月君は自若として ほうしょうりゅう きえん
宝 生 流 に 氣 を
は
吐いて見せる。

「探偵と云えば二十世紀の人間はたいてい探偵
のようになる傾向があるが、どう云う訳だろう」
と独仙君は独仙君だけに時局問題には関係のな
い超然たる質問を呈出した。

「物価が高いせいでしょう」と寒月君が答える。

「芸術趣味を解しないからでしょう」と東風君が
答える。

「人間に文明の つの 角 が生えて、 こんぺいとう
金 米 糖 のよ
うにいらいらするからさ」と迷亭君が答える。

今度は主人の番である。主人はもったい^ぶ振った口調で、こんな議論を始めた。

「それは僕が^{だいぶ}大分考えた事だ。僕の解釈によると当世人の探偵的傾向は全く個人の自覚心の強過ぎるのが原因になっている。僕の自覚心と名づけるのは独仙君の方で云う、けんしょうじょうぶつ見性成仏とか、自己は天地と同一体だとか云う悟道の^{たぐい}類ではない。……」

「おや^{だいぶ}大分むずかしくなつて来たようだ。苦沙弥君、君にしてそんな大議論を^{ぜつとう ろう}舌頭に弄する以上は、かく申す迷亭も^{はばか}憚りながら御あとで現代の文明に対する不平を堂々と云うよ」

「勝手に云うがいい、云う事もない癖に」

「ところがある。^{おおい}大にある。君なぞはせんだ

うやま
敬
ってハ刑事巡査を神のごとく 敬 い、また今日
へんげ
ハ探偵をスリ泥棒に比し、まるで矛盾の 変 怪 だ
ふもみしょういぜん
が、僕などは終始一貫 父 母 未 生 以 前 からた
だ今に至るまで、かつて自説を変じた事のない男
だ」

「刑事ハ刑事だ。探偵ハ探偵だ。せんだってハせ
んだってで今日は今日だ。自説が変らないのは発
達しない証拠だ。かぐ
下愚ハ移らずと云うのは君の事
だ。……」

「これはきびしい。探偵もそうまともにくると可
愛いところがある」

「おれが探偵」

「探偵でないから、正直でいいと云うのだよ。喧
嘩はおやめおやめ。さあ。その大議論のあとを拝

聴しよう」

「今の人の自覚心と云うのは自己と他人の間に
せつぜん 截 然 たる利害の こうこう 鴻 溝 があると云う事を
知り過ぎていると云う事だ。そうしてこの自覚心
なるものは文明が進むにしたがって一日一日と
鋭敏になって行くから、しまいには一挙手一投足
も自然天然とは出来ないようになる。ヘンレーと
云う人がスチーヴンソンを評して彼は鏡のかか
った部屋に はい 入 っ て、鏡の前を通る ごと 毎 に自己の
影を写して見なければ気が済まぬほど瞬時も自
己を忘るる事の出来ない人だと評したのは、よく
こんにち すうせい 今 日 の 趨 勢 を言いあらわしている。寝て
もおれ、^さ覚めてもおれ、このおれが至るところに
つけまつわっているから、人間の行為言動が人工

的にコセつくばかり、自分で窮屈になるばかり、
世の中が苦しくなるばかり、ちょうど見合をする
若い男女の心持ちで朝から晩までくらさなけれ

ばならない。悠^{ゆう}々^{ゆう}とか従^{しょう}容^{よう}とか云う字
は^{かく}劃^{かく}があつて意味のない言葉になってしまう。

この点において^{きんだい}今^{きん}代^{だい}の人は探偵的である。泥
棒^{かす}的である。探偵は人の目を^{かす}掠^{かす}めて自分だけう
まい事をしようと云う商売だから、^{いきおい}勢^{いき}自覚
心が強くならなくては出来ん。泥棒も^{つか}捕^{つか}まるか、
見つかるかと云う心配が念頭を離れる事がない
から、^{おの}勢^{おの}自覚心が強くならざるを得ない。今の人
はどうしたら^{おの}己^{おの}れの利になるか、損になるかと
寝^さても醒^さめても考えつづけだから、勢探偵泥棒と
同じく自覚心が強くならざるを得ない。二六時中

キョトキョト、コソコソして墓に^い入るまで一刻の
安心も得ないのは今の人の心だ。文明の^{じゅそ}呪^そ詛だ。
馬鹿馬鹿しい」

「なるほど面白い解釈だ」と独仙君が云い出した。

こんな問題になると独仙君はなかなか^{ひっこ}引^こ込^んでいない男である。「苦沙弥君の説明はよく

^{わがい}我意を得ている。^{むか}昔^{むか}し^{むか}の人は己れを忘れろと
教えたものだ。今の人は己れを忘れるなと教える

からまるで違う。二六時中己れと云う意識をもつ
て充満している。それだから二六時中太平の時
はない。いつでも焦熱地獄だ。天下に何が薬だと云

って己れを忘れるより薬な事はない。

さんこうげっかむがに^いいる
^い三^い更^い月^い下^い入^い無^い我^いとはこの至境を^{えい}咏
じたものさ。今の人は親切をしても自然をかいて

イギリス
いる。英吉利のナイスなどと自慢する行為も存
外自覚心が張り切れそうになっている。英国の天
子^{インド}が印度へ遊びに行つて、印度の王族と食卓を
共にした時に、その王族が天子の前とも心づかず
に、つい自国の我流を出して^{じゃがいも}馬鈴薯^{てづか}を手攫
みで皿へとって、あとから^{まっか}真赤^はになって愧じ入
ったら、天子は知らん顔をしてやはり二本指で馬
鈴薯を皿へとったそうだ……」

「それが英吉利趣味ですか」これは寒月君の質問
であつた。

「僕はこんな話を聞いた」と主人が^{あと}後をつける。
「やはり英国のある兵營で聯隊の士官が大勢し
て一人の下士官を御馳走した事がある。御馳走が
済んで手を洗う水を^{ガラスばち}硝子鉢へ入れて出した

ら、この下士官は宴会になれんと見えて、硝子鉢を口へあてて中の水をぐうと飲んでしまった。すると聯隊長が突然下士官の健康を祝すと云いながら、やはりフヒンガー・ボールの水を一息に飲み干したそうだ。そこで並^なみいる士官も我劣らじみずさかずきと水盃を挙げて下士官の健康を祝したと云うぜ」

「こんな^{はなし}噺もあるよ」とだまつてる事のきらい嫌^な迷亭君が云った。「カーライルが始めてじょこう女^{うし}皇に謁した時、宮廷の礼に^{なら}嫺わぬへんぶつ^変物の事だから、先生突然どうですと云いながら、どさりと椅子へ腰をおろした。ところが女皇の^{うし}後ろに立っていた大勢の侍従や官女がみんなくすくす笑い出した――出したのではない、

出そうとしたのさ、すると女皇が後ろを向いて、
ちょっと何か相図をしたら、^{おおぜい}多勢の侍従官女
がいつの^ま間にかみんな椅子へ腰をかけて、カー
ライルは面目を失わなかったと云うんだが随分御
念の入った親切もあったもんだ」

「カーライルの事なら、みんなが立ってても平気
だったかも知れませんよ」と寒月君が短評を試み
た。

「親切の方の自覚心はまあいいがね」と独仙君は
進行する。「自覚心があるだけ親切をするにも骨
が折れる訳になる。気の毒な事さ。文明が進むに
従って殺伐の気がなくなる、個人と個人の交際が
おだやかになるなどと普通云うが大間違いさ。こ
んなに自覚心が強くって、どうしておだやかにな

れるものか。なるほどちょっと見るとごくしずかで無事なようだが、御互の間は非常に苦しいのさ。ちょうど相撲が土俵の真中で^よ四つに組んで動かないようなものだろう。はたから見ると平穩至極だが当人の腹は波を打っているじゃないか」

けんか　むか
「喧嘩も昔しの喧嘩は暴力で圧迫するのだからかえって罪はなかったが、近頃じゃなかなか巧妙になってるからなおなお自覚心が増してくるんだね」と番が迷亭先生の頭の上に廻って来る。

「ベーコンの言葉に自然の力に従って始めて自然に勝つとあるが、今の喧嘩は正にベーコンの格言通りに出来上ってるから不思議だ。ちょうど柔術のようなものさ。敵の力を利用して敵を^た斃^おす事を考える……」

「または水力電気のようなものですね。水の力に
逆らわないでかえってこれを電力に変化して立
派に役に立たせる……」と寒月君が言いかけると、
独仙君がすぐそのあとを引き取った。「だから
ひんじ　　ひん　　ばく　　ふじ　　ふ
貧 時 には 貧 に 縛 せられ、富 時 には 富 に 縛 せ
られ、ゆうじ　　ゆう　　きじ　　き
憂 時 には 憂 に 縛 せられ、喜 時 には 喜 に
縛 せられるのさ。才人は才に たお 斃 れ、智者は智に
敗れ、苦沙弥君のような かんしゃくも 癩 癩 持 ちは癩癩を
利用さえすればすぐに飛び出して敵のぺてんに
かか
罹 る……」

「ひやひや」と迷亭君が手をたたくと、苦沙弥君
はにやにや笑いながら「これでなかなかそう うま
くは行かないのだよ」と答えたら、みんな一度に
笑い出した。

「時に金田のようなのは何で斃れるだろう」

「女房は鼻で斃れ、主人は^{いんごう}因業で斃れ、子分は探偵で斃れか」

「娘は？」

「娘は――娘は見た事がないから何とも云えないが――まず着倒れか、食い倒れ、もしくは呑^{たぐい}だくれの類だろう。よもや恋い倒れにはなるまい。ことによると^{そとばこまち}卒塔婆小町のように行き倒れになるかも知れない」

「それは少しひどい」と新体詩を捧げただけに東風君が異議を申し立てた。

「だから^{おうむしょじゅうにしょうごしん}応無所住而生其心と云うのは大事な言葉だ、そう云う^{きょうがい}境界に至らんと人間は苦しくてならん」と独仙君しきりに

ひと
独り悟ったような事を云う。

「そう威張るもんじゃないよ。君などはことによ
でんこうえいり
ると電光影裏にさか倒れをやるかも知れ
ないぜ」

「とにかくこの勢で文明が進んで行った日にや
僕は生きてるのはいやだ」と主人がいい出した。

「遠慮はいらないから死ぬさ」と迷亭が言^{ごんか}下^かに
どうは
道破する。

「死ぬのはなおいやだ」と主人がわからん強情を
張る。

「生れる時には誰も熟考して生れるものは有り
ませんが、死ぬ時には誰も苦にすると見えます
ね」と寒月君がよそよそしい格言をのべる。

「金を借りるときには何の気なしに借りるが、返す時にはみんな心配するのと同じ事さ」とこんな時にすぐ返事の出来るのは迷亭君である。

「借りた金を返す事を考えないものは幸福であるごとく、死ぬ事を苦にせんものは幸福さ」と独仙君は超然として ^{しゅっせけんてき} 出世間的である。

「君のように云うとつまり ^{ずぶと} 図太いのが悟ったのだね」

「そうさ、禅語に ^{てつぎゅうめん} 鉄牛面の ^{てつぎゅうしん} 鉄牛心、牛鉄面の牛鉄心と云うのがある」

「そうして君はその標本と云う訳かね」

「そうでもない。しかし死ぬのを苦にするようになったのは神経衰弱と云う病気が発明されてか

ら以後の事だよ」

「なるほど君などはどこから見ても神経衰弱以前の民だよ」

迷亭と独仙が妙な ^{かけあい} 掛合 をのべつにやっていると、主人は寒月東風二君を相手にしてしきりに文明の不平を述べている。

「どうして借りた金を返さずに済ますかが問題である」

「そんな問題はありませんよ。借りたものは返さなくちゃなりませんよ」

「まあさ。議論だから、だまって聞くがいい。どうして借りた金を返さずに済ますかが問題であるごとく、どうしたら死なずに済むかが問題である。いな問題であった。^{れんきんじゅつ} 錬金術 はこれで

ある。すべての錬金術は失敗した。人間はどうしても死ななければならん事が^{ぶんみょう}分^明になった」

「錬金術以前から分明ですよ」

「まあさ、議論だから、だまって聞いている。いいかい。どうしても死ななければならん事が分明になった時に第二の問題が起る」

「へえ」

「どうせ死ぬなら、どうして死んだらよかろう。これが第二の問題である。自殺クラブはこの第二の問題と共に起るべき運命を有している」

「なるほど」

「死ぬ事は苦しい、しかし死ぬ事が出来なければなお苦しい。神経衰弱の国民には生きている事が

死よりもはなはだしき苦痛である。したがって死
を苦にする。死ぬのが^{いや}厭だから苦にするのでは
ない、どうして死ぬのが一番よかろうと心配する
のである。ただたいいのものは^{ちえ}智慧が足りない
から自然のままに^{ほうてき}放擲しておくうちに、世間
がいじめ殺してくれる。しかし一と癖あるものは
世間からなし崩しにいじめ殺されて満足するも
のではない。^{かなら}必ずや死に方に付いて種々考究
の結果、^{ざんしん}斬新な名案を呈出するに違ない。だ
からして世界^{こうご}向^{すうせい}後の趨勢は自殺者が増加
して、その自殺者が皆独創的な方法をもってこの
世を去るに違ない」

^{だいぶぶっそう}
「大分物騒な事になりますね」

「なるよ。たしかになるよ。アーサー・ジョーン

スと云う人のかいた脚本のなかにしきりに自殺を主張する哲学者があつて……」

「自殺するんですか」

「ところが惜しい事にしないのだがね。しかし今から千年も立てばみんな実行するに相違ないよ。

万年の^{のち}後には死と云えば自殺よりほかに存在しないもののように考えられるようになる」

「大変な事になりますね」

「なるよきつとなる。そうなると自殺も大分研究が積んで立派な科学になって、落雲館のような中学校で倫理の代りに自殺学を正科として授けるようになる」

「妙ですな、傍聴に出たいくらいのもですね。迷亭先生御聞きになりましたか。苦沙弥先生の御

名論を」

「聞いたよ。その時分になると落雲館の倫理の先生はこう云うね。諸君公德などと云う野蛮の遺風

を^{ぼくしゅ}墨守してはなりません。世界の青年として諸君が第一に注意すべき義務は自殺である。しか

して^{おの}己れの好むところはこれを人に^{ほど}施こして可なる訳だから、自殺を一步展開して他殺にし

てもよろしい。ことに表の^{きゅうそだい}窮措大珍野苦沙弥氏のごときものは生きてござるのが大分苦痛

のように見受けらるるから、一刻も早く殺して進ぜるのが諸君の義務である。もっとも昔と違って

今日は開明の時節であるから^{やり}槍、^{なぎなた}薙刀もし

くは飛道具の^{たぐい}類を用いるような^{ひきょう}卑怯な振舞をしてはなりません。ただあてこすりの高尚

なる技術によって、からかい殺すのが本人のため
くどく
功 徳 にもなり、また諸君の名誉にもなるのであ
ります。……」

「なるほど面白い講義をしますね」

「まだ面白い事があるよ。現代では警察が人民の
生命財産を保護するのを第一の目的としている。
ところがその時分になると巡査が犬殺しのよう
な ^{こんぼう} 棍 棒 をもって天下の公民を ^{ぼくさつ} 撲 殺 して
あるく。……」

「なぜです」

「なぜって今の人間は ^{いのち} 生 命 が大事だから警察
で保護するんだが、その時分の国民は生きてるの
が苦痛だから、巡査が慈悲のために ^ぶ 打ち殺してく
れるのさ。もっとも少し気の ^き 利いたものは大概自

殺してしまうから、巡査に^{ぶちころ}打殺されるような
奴はよくよく意気地なしか、自殺の能力のない白
痴もしくは不具者に限るのさ。それで殺されたい
人間は^{かどぐち}門口へ張札をしておくのだね。なにた
だ、殺されたい男ありとか女ありとか、はりつけ
ておけば巡査が都合のいい時に^{まわ}巡ってきて、す
ぐ志望通り取計ってくれるのさ。死骸かね。死骸
はやっぱり巡査が車を引いて拾ってあるくのさ。
まだ面白い事が出来てくる。……」

「どうも先生の^{じょうだん}冗談は際限がありません
ね」と東風君は^{おおい}大に感心している。すると独
仙君は例の通り^{やぎひげ}山羊髯を気にしながら、のその
そ弁じ出した。

「冗談と云えば冗談だが、予言と云えば予言かも

知れない。真理に徹底しないものは、とにかく眼前
の現象世界に束縛せられて ほうまつ むげん
泡 沫 の 夢 幻 を
永久の事実と認定したがるものだから、少し飛び
離れた事を云うと、すぐ冗談にしてしまう」

「 えんじゃく いずく たいほう ころろざし
燕 雀 焉 大 鵬 の 志
を知らんやですね」と寒月君が恐れ入ると、独仙
君はそうさと云わぬばかりの顔付で話を進める。

むか
「昔 しスペインにコルドヴァと云う所があっ
た……」

「今でもありゃしないか」

「あるかも知れない。今昔の問題はとにかく、そ
この風習として日暮れの鐘がお寺で鳴ると、家々
の女がことごとく出て来て河へ はい
這入って水泳を

やる……」

「冬もやるんですか」

「その辺はたしかに知らんが、とにかく
きせんろうにゃく 貴 賤 老 若 の別なく河へ飛び込む。ただ
男子は一人も交らない。ただ遠くから見ている。

遠くから見ていると ぼしょくそうぜん 暮 色 蒼 然 たる波の
上に、白い 肌 はだえ もこ が模糊として動いている……」

「詩的ですね。新体詩になりますね。なんと云う
所ですか」と東風君は 裸 体 が出さえすれば前へ
乗り出してくる。

「コルドヴァさ。そこで地方の若いものが、女と
いっしょに泳ぐ事も出来ず、さればと云って遠く
から判然その姿を見る事も許されないのを残念

に思って、ちょっといたずらをした……」

「へえ、どんな趣向だい」といたずらと聞いた迷

亭君は ^{おおい}大 に嬉しがる。

「お寺の鐘つき番に ^{わいろ}賄賂 を使って、日没を合図
に ^つ撞く鐘を一時間前に鳴らした。すると女などは
あさはか
浅 墓 なものだから、そら鐘が鳴ったと云うの
で、めいめい ^{かし}河岸へあつまって ^{はんじゅばん}半 襦 袢 、
^{はんももひき}半 股 引 の服装でざぶりと水の中へ
飛び込んだ。飛び込みはしたものの、いつもと違
って日が暮れない」

^{はげ}「烈 しい秋の日がかんかんしやしないか」

「橋の上を見ると男が大勢立って ^{なが}眺 めている。
恥ずかしいがどうする事も出来ない。大に赤面し
たそうだ」

「それで」

「それでさ、人間はただ眼前の習慣に迷わされて、根本の原理を忘れるものだから気をつけないと駄目だと云う事さ」

「なるほどありがたい御説教だ。眼前の習慣に迷わされの御話しを僕も一つやろうか。この間ある雑誌をよんだら、こう云う詐欺師さぎしの小説があった。僕がまあここで書画こっとうてん骨董店を開くとする。で店頭に大家の幅ふくや、名人の道具類を並べておく。無論贋物にせものじゃない、しょうじきしょうめい正直正銘、うそいつわりのない上等品ばかり並べておく。上等品だからみんな高価にきまってる。そこへ物数ものずき奇な御客さんが来て、この元信もとのぶの幅はいくらだねと聞く。六百円な

ら六百円と僕が云うと、その客が欲しい事はほしいが、六百円では手元に持ち合せがないから、残念だがまあ見合せよう」

「そう云うときまってるかい」と主人は相変らず
しばいぎ
芝居 氣のない事を云う。迷亭君はぬからぬ顔で、

「まあさ、小説だよ。云うとしておくんだ。そこで僕がなに ^{だい}代 は構いませんから、お気に入った
ら持っていらっしゃいと云う。客はそうも行かないからと ^{ちゅうちょ}躊躇 ^{げっぷ}する。それじゃ月 賦でいただきますしょう、月賦も細く、長く、どうせこれか
^{ごひいき}
ら御 鼻 屑になるんですから——いえ、ちっとも御遠慮には及びません。どうです月に十円くらい
じゃ。何なら月に五円でも構いませんと僕が ^{ごく}極

きさくに云うんだ。それから僕と客の間に二三の
問答があつて、とど僕が^{かのうほうげん}狩野法眼元信の幅
を六百元ただし月賦十円払込の事で売渡す」

「タイムスの百科全書見たようですね」

「タイムスはたしかだが、僕のはすこぶる
ふたしか
不慥だよ。これからがいよいよ巧妙なる詐偽
に取りかかるのだぜ。よく聞きたまへ月十円ずつ
で六百元なら何年で^{かいさい}皆済になると思う、寒月
君」

「無論五年でしょう」

「無論五年。で五年の歳月は長いと思うか短かい
と思うか、独仙君」

^{いちねんばんねん ばんねんいちねん}
「一念万年、万年一念。短かく
もあり、短かくもなしだ」

「何だそりゃ^{どうか}道歌か、常識のない道歌だね。そこで五年の間毎月十円ずつ払うのだから、つまり先方では六十回払えばいいのだ。しかしそこが習慣の恐ろしいところで、六十回も同じ事を毎月繰り返していると、六十一回にもやはり十円払う気になる。六十二回にも十円払う気になる。六十二回六十三回、回を重ねるにしたがってどうしても期日がくれば十円払わなくては気が済まないようになる。人間は利口のようだが、習慣に迷って、根本を忘れると云う大弱点がある。その弱点に乗じて僕が何度でも十円ずつ毎月得をするのさ」

「ハハハハまさか、それほど忘れっぽくもならないでしょう」と寒月君が笑うと、主人はいささか真面目で、

「いやそう云う事は全くあるよ。僕は大学の
たいひ
貸 費 を毎月毎月勘定せずに返して、しまい
むこう
向 から断わられた事がある」と自分の恥を人
間一般の恥のように公言した。

「そら、そう云う人が現にここにいるからたしか
なものだ。だから僕の先^{さつき}刻述べた文明の未来記
を聞いて冗談だなどと笑うものは、六十回でいい
月賦を^{しょうがい}生 涯 払って正当だと考える連中だ。
ことに寒月君や、東風君のような経験の^{とぼ}乏 しい
青年諸君は、よく僕らの云う事を聞いてだまされ
ないようにしなくっちゃいけない」

「かしこまりました。月賦は必ず六十回限りの事
に致します」

「いや冗談のようだが、実際参考になる話ですよ、

寒月君」と独仙君は寒月君に向いだした。「たとえばですね。今苦沙弥君か迷亭君が、君が無断で結婚したのが ^{おんとう} 穩 当 でないから、金田とか云う人に謝罪しろと忠告したら君どうです。謝罪する見ですか」

「謝罪は御容赦にあずかりたいですね。向うがあやまるなら特別、私の方ではそんな慾はありません」

「警察が君にあやまれと命じたらどうです」

「^{ごめんこうむ} なのにお 御 免 蒙 ります」

「大臣とか華族ならどうです」

「いよいよもって御免蒙ります」

「それ見たまえ。昔と今とは人間がそれだけ変ってる。昔は ^{おかみ} 御 上 の御威光なら何でも出来た時代

です。その次には御上の御威光でも出来ないものが出来てくる時代です。今の世はいかに殿下でも閣下でも、ある程度以上に個人の人格の上にのしかかる事が出来ない世の中です。はげしく云えば先方に権力があればあるほど、のしかかられるものの方では不愉快を感じて反抗する世の中です。

だから今の世は ^{むか}昔しと違って、御上の御威光だから出来ないのだと云う新現象のあらわれる時代です、昔しのものから考えると、ほとんど考えられないくらいな事柄が道理で通る世の中です。世態人情の変遷と云うものは実に不思議なもので、迷亭君の未来記も冗談だと云えば冗談に過ぎないのだが、その辺の消息を説明したものとすれば、なかなか ^{あじわい}味があるじゃないですか」

「そう云う^{ちき}知己が出てくると是非未来記の続き
が述べたくなるね。独仙君の御説のごとく今の世

に御上の御威光を^{かさ}笠にきたり、竹槍の二三百本

を^{たのみ}侍にして無理を押し通そうとするのは、ち

ょうどカゴへ乗って何でも^か蚊でも汽車と競争し

ようとあせる、時代後れの^{がんぶつ}頑物——まあわか

らずやの^{ちょうほん}張本、^{からすがね}烏金の

^{ちょうはんせんせい}ちょうはんせんせい
長範先生 くらいのものであるから、黙って

おてぎわ
御手際を拝見していればいいが——僕の未来

記はそんな当座間に合せの小問題じゃない。人間

全体の運命に関する社会的現象だからね。つらつ

ら目下文明の傾向を達観して、遠き将来の

^{すうせい}すうせい^{ぼく}ぼく
趨勢を卜すると結婚が不可能の事になる。

驚ろくなかれ、結婚の不可能。訳はこうさ。^{ぜん}前

申す通り今の世は個性中心の世である。一家を主人が代表し、一郡を代官が代表し、一国を領主が代表した時分には、代表者以外の人間には人格はまるでなかった。あっても認められなかった。それががらりと変ると、あらゆる生存者がことごとく個性を主張し出して、だれを見ても君は君、僕は僕だよと云わぬばかりの風をするようになる。ふたりの人が途中で逢えばうぬが人間なら、おれも人間だぞと心のうち けんかで喧嘩を買いながら行き違う。それだけ個人が強くなった。個人が平等に強くなったから、個人が平等に弱くなった訳になる。人がおのれを害する事が出来にくくなった点において、たしかに自分は強くなったのだが、めった減多に人の身の上に手出しがならなくなった

点においては、明かに昔より弱くなったんだろう。

強くなるのは嬉しいが、弱くなるのは誰もありが
たくないから、人から ^{いちごう}一 ^{おか}毫 も 犯 されまいと、
強い点をあくまで固守すると同時に、せめて
はんもう ^{おか}半 毛 でも人を 侵 してやろうと、弱いところ
は無理にも ^{ひろ}拡 げたくなる。こうなると人と人の
間に空間がなくなって、生きてるのが窮屈になる。

出来るだけ自分を張りつめて、はち切れるばかり
にふくれ返って苦しがつて生存している。苦しい
から色々の方法で個人と個人との間に余裕を求
める。かくのごとく人間が自業自得で苦しんで、
その苦し ^{まぎ}紛 れに案出した第一の方案は親子別
居の制さ。日本でも山の中へ這入って見給え。

いっけいちもん
一 家 一 門 ことごとく一軒のうちにごろご

ろしている。主張すべき個性もなく、あっても主張しないから、あれで済むのだが文明の民はたとい親子の間でもお互に ^{わがまま} 我儘 を張れるだけ張らなければ損になるから ^{いきお} 勢 い両者の安全を保持するためには別居しなければならない。歐洲は文明が進んでいるから日本より早くこの制度が行われている。たまたま親子同居するものがある。でも、^{むすこ} 息子 がおやじから利息のつく金を借りたり、他人のように下宿料を払ったりする。親が息子の個性を認めてこれに尊敬を払えばこそ、こんな美風が成立するのだ。この風は早晩日本へも是非輸入しなければならん。親類はとくに離れ、親子は ^{こんにち} 今日 に離れて、やっと我慢しているようなものの個性の発展と、発展につれてこれに対

する尊敬の念は無制限にのびて行くから、まだ離れなくては楽が出来ない。しかし親子兄弟の離れたる今日、もう離れるものはない訳だから、最後の方案として夫婦が分れる事になる。今の人の考ではいっしょにいるから夫婦だと思ってる。それが大きな見違いさ。いっしょにいるためにはいっしょにいるに充分なるだけ個性が合わなければならぬだろう。昔しなら文句はないさ、異体同心とか云って、目には夫婦二人に見えるが、内

いちにんまえ
実は一人前なんだからね。それだから
かいろうどうけつ
偕老同穴とか号して、死んでも一つ穴の
狸に化ける。野蛮なものさ。今はそうは行かない
やね。夫はあくまでも夫で妻はどうしたって妻だ
からね。その妻が女学校で あんどんばかま は
行 灯 袴 を穿い

ろうこ
て牢乎たる個性を鍛^{きた}え上げて、束髪姿で乗り
込んでくるんだから、とても夫の思う通りになる
訳がない。また夫の思い通りになるような妻なら
妻じゃない人形だからね。賢夫人になればなるほ

ど個性は^{すご}凄^{すご}いほど発達する。発達すればするほ
ど夫と合わなくなる。合わなければ自然の
いきおい

勢^{いきおい} 夫と衝突する。だから賢妻と名がつく以
上は朝から晩まで夫と衝突している。まことに結
構な事だが、賢妻を迎えれば迎えるほど双方共苦
しみの程度が増してくる。水と油のように夫婦の

間には^{せつぜん}截然^{せつぜん}たるしきりがあって、それも落ち
ついて、しきりが水平線を保っていればまだしも
だが、水と油が双方から働らきかけるのだから家
のなかは大地震のように上がったたり下がったり

する。ここにおいて夫婦雑居はお互の損だと云う事が次第に人間に分ってくる。……」

「それで夫婦がわかれるんですか。心配だな」と寒月君が云った。

「わかれる。きっとわかれる。天下の夫婦はみんな分れる。今まではいっしょにいたのが夫婦であったが、これからは ^{どうせい}同棲しているものは夫婦の資格がないように世間から ^{もく}目されてくる」

「すると私なぞは資格のない組へ編入される訳ですね」と寒月君は ^{きわ}際どいところでのろけを云った。

「明治の ^{みよ}御代に生れて幸さ。僕などは未来記を作るだけあって、頭脳が時勢より一二歩ずつ前へ出ているからちゃんと今から独身でいるんだよ。人

は失恋の結果だなどと騒ぐが、近眼者の^み視るところは実に憐れなほど浅薄なものだ。それはとにかく、未来記の続きを話すところさ。その時一人の

哲学者が ^{あまくだ}天 ^{はてんこう}降って破天荒の真理を唱道する。その説に ^{いわ}曰くさ。人間は個性の動物である。個性を滅すれば人間を滅すると同結果に

おちい ^{まった}陥る。いやしくも人間の意義を ^完からしめんためには、いかなる ^{あた}価を払うとも構わないからこの個性を保持すると同時に発達せしめ

なければならん。かの ^{ろうしゅう}陋習に縛せられて、いやいやながら結婚を執行するのは人間自然の傾向に反した蛮風であって、個性の発達せざる

もうまい ^{こんにち}蒙昧の時代はいざ知らず、文明の ^{今日}今 ^{かえり}日な
おこの ^{へいとう}弊 ^{おちい}實に ^{てん}陥 ^{かえり}って ^顧恬として ^顧顧

みないのははなはだしき ^{びゅうけん} 謬 見 である。開化
の高潮度に達せる ^{きんだい} 今 代 において二個の個性
が普通以上に親密の程度をもって連結され得べ
き理由のあるべきはずがない。この ^{みやす} 靚 易 き理由
はあるにも関らず無教育の青年男女が一時の劣
情に駆られて、 ^{みだり} 漫 に ^{ごうきん} 合 の式を挙ぐるは
はいとくぼつりん
悖 徳 没 倫 のはなはだしき所為である。吾
人は人道のため、文明のため、彼等青年男女の個
性保護のため、全力を挙げこの蛮風に抵抗せざる
べからず……」

「先生私はその説には全然反対です」と東風君は
この時思い切った調子でぴたりと ^{ひらて} 平 手 で
ひざがしら
膝 頭 を叩いた。「私の考では世の中に何が
たっと
尊 いと云って愛と美ほど尊いものはないと

思います。吾々を慰^{いしや}藉し、吾々を完全にし、吾々を幸福にするのは全く両者の御蔭であります。吾人の情操を優美にし、品性を高潔にし、同情を洗鍊するのは全く両者の御蔭であります。だから吾人はいつの世いずくに生れてもこの二つのものを忘れることが出来ません。この二つの者が現実世界にあらわれると、愛は夫婦と云う関係になります。美は詩^{しいか}歌、音楽の形式に分れます。それだからいやすくも人類の地球の表面に存在する限りは夫婦と芸術は決して滅する事はなかりうと思います」

「なければ結構だが、今哲学者が云った通りちゃんと滅してしまうから仕方がないと、あきらめるさ。なに芸術だ？　芸術だって夫婦と同じ運命に

帰着するのさ。個性の発展というのは個性の自由
と云う意味だろう。個性の自由と云う意味はおれ
はおれ、人は人と云う意味だろう。その芸術なん
か存在出来る訳がないじゃないか。芸術が繁昌す
るのは芸術家と ^{きょうじゅしゃ} 享 受 者 の間に個性の一
致があるからだろう。君がいくら新体詩家だって
^{ふんば} 踏 張 っても、君の詩を読んで面白いと云うもの
が一人もなくっちゃ、君の新体詩も御気の毒だが
君よりほかに読み手はなくなる訳だろう。

^{えんおうか} 鴛 鴦 歌 をいく篇作ったって始まらないやね。
幸いに明治の ^{こんにち} 今 日 に生れたから、天下が ^{こぞ} 挙
って愛読するのだろうが……」

「いえそれほどでもありません」

「今でさえそれほどでなければ、^{じんぶん} 人 文 の発達

した未来^{すなわ}即ち例の一大哲学者が出て非結婚論を主張する時分には誰もよみ手はなくなるぜ。

いや君のだから読まないのじゃない。

にんにんここ
人々個々おのおの特別の個性をもってるか

ら、人の作った詩文などは^{いっこう}一向面白くないの
さ。現に今でも英国などではこの傾向がちゃんと

あらわれている。現今英国の小説家中でもっとも

個性のいちじるしい作品にあらわれた、メレジス

を見給え、ジェームスを見給え。読み手は^{きわ}極め

て少ないじゃないか。少ない^{わけ}訳さ。あんな作品

はあんな個性のある人でなければ読んで面白く

ないんだから仕方がない。この傾向がだんだん発

達して婚姻が不道徳になる時分には芸術も

まった
完く滅亡さ。そうだろう君のかいたものは僕

にわからなくなる、僕のかいたものは君にわからなくなった日にゃ、君と僕の間には芸術も糞もないじゃないか」

「そりゃそうですけれども私はどうも直覺的にそう思われななんです」

「君が直覺的にそう思われなければ、僕はきょっかくてき
曲 覺 的 にそう思うまでさ」

「曲覺的かも知れないが」と今度は独仙君が口を出す。「とにかく人間に個性の自由を許せば許すほど御互の間が窮屈になるに相違ないよ。ニーチェが超人なんか 担^{かつ}ぎ出すのも全くこの窮屈のやりどころがなくなって仕方なしにあんな哲学に変形したものだね。ちょっと見るとあれがあの男の理想のように見えるが、ありゃ理想じゃない、

不平さ。個性の発展した十九世紀にすくんで、隣りの人には心置なく滅^{めった}多に寝返りも打てないから、大将少しやけになってあんな乱暴をかき散らしたのだね。あれを読むと壮快と云うよりむしろ気の毒になる。あの声は勇^{ゆう}猛^{もう}精^{しょう}進^{じん}の声じゃない、どうしても怨^{えん}恨^{こん}痛^{つう}憤^{ふん}の音だ。それもそのはずさ昔は一人えらい人があれば天下^{きゅうぜん}翕^{しゅ}然^{ぜん}としてその旗下にあつまるのだから、愉快なものさ。こんな愉快が事実に出てくれば何もニーチェ見たように筆と紙の力でこれを書物の上にあらわす必要がない。だからホーマーでもチェヴィ・チェーズでも同じく超人的な性格を写しても感じがまるで違うからね。陽気ださ。愉快にかいてある。愉快的事実があって、この愉

快な事実を紙に写しかえたのだから、^{にがみ}苦味はないはずだ。ニーチェの時代はそうは行かないよ。

英雄なんか一人も出やしない。出たって誰も英雄と立てやしない。昔は^{こうし}孔子がたった一人だったから、孔子も幅を^き利かしたのだが、今は孔子が幾人もいる。ことによると天下がことごとく孔子かも知れない。だからおれは孔子だよと威張っても^{おし}圧が利かない。利かないから不平だ。不平だから超人などを書物の上だけで振り廻すのさ。吾人は自由を欲して自由を得た。自由を得た結果不自由を感じて困っている。それだから西洋の文明などはちょっといいようでもつまり駄目なものさ。これに反して東洋じゃ昔しから心の修行をした。その方が正しいのさ。見給え個性発展の結果みんな

な神経衰弱を起して、始末がつかなくなった時、
おうしゃ たみとうとう
王者の民蕩々たりと云う句の価値を
始めて発見するから。むいか
無為にして化すと云う語の
馬鹿に出来ない事を悟るから。しかし悟ったって
その時はもうしょうがない。アルコール中毒に
かか
罹って、ああ酒を飲まなければよかったと考
えるようなものさ」

「先生方は大^{だいふ}分厭世的な御説のようだが、私は
妙ですね。いろいろ伺っても何とも感じません。
どう云うものでしょう」と寒月君が云う。

「そりゃ妻君を持ち立てだからさ」と迷亭君がす
ぐ解釈した。すると主人が突然こんな事を云い出
した。

さい
「妻を持って、女はいいものだなどと思うと飛

んだ間違になる。参考のためだから、おれが面白い物を読んで聞かせる。よく聴くがいい」と
さいぜん
最 前 書齋から持って来た古い本を取り上げて「この本は古い本だが、この時代から女のわるい事は歴然と分ってる」と云うと、寒月君が
「少し驚きましたな。元来いつ頃の本ですか」と聞く。「タマス・ナッシと云って十六世紀の著書だ」

「いよいよ驚ろいた。その時分すでに私の ^{さい}妻 の悪口を云ったものがあるんですか」

「いろいろ女の悪口があるが、その内には是非君
の ^{さい}妻 も這入る訳だから聞くがいい」

「ええ聞きますよ。ありがたい事になりましたね」

「まず古来の賢哲が女性観を紹介すべしと書いてある。いいかね。聞いてるかね」

「みんな聞いているよ。独身の僕まで聞いているよ」

「アリストートル^{いわ}曰く女はどうせ^{ろく}碌でなしなれば、嫁をとるなら、大きな嫁より小さな嫁をとるべし。大きな碌でなしより、小さな碌でなしの方が^{わざわざ}災^い少なし……」

「寒月君の妻君は大きいかい、小さいかい」

「大きな碌でなしの部ですよ」

「ハハハハ、こりゃ面白い本だ。さああとを読んだ」

「或る人問う、いかなるかこれ^{さいだいきせき}最大奇蹟。賢者答えて曰く、貞婦……」

「賢者ってだれですか」

「名前は書いてない」

「どうせ振られた賢者に相違ないね」

「次にはダイオジニスが出ている。或る人間う、
妻を^{めと}娶るいずれの時ににおいてすべきか。ダイオ
ジニス答えて曰く青年は^{いま}未だし、老年はすでに
遅し。とある」

「先生^{たる}樽の中で考えたね」

「ピサゴラス^{いわ}曰く天下に三の恐るべきものあり
曰く火、曰く水、曰く女」

ギリシャ^{うかつ}
「希臘の哲学者などは存外迂濶な事を云
うものだね。僕に云わせると天下に恐るべきもの
なし。火に^い入って焼けず、水に入って溺れず……」
だけで独仙君ちょっと行き詰る。

「女に逢ってとろけずだろう」と迷亭先生が援兵に出る。主人はさっさとあとを読む。

「ソクラチスは婦女子を^{ぎょ}御するは人間の最大難事と云えり。デモスセニス曰く人もしその敵を苦しめんとせば、わが女を敵に与うるより策の得たるはあらず。家庭の風波に日となく夜となく彼を^{こんぱい}困憊起つあたわざるに至らしむるを得ればなりと。セネカは婦女と無学をもって世界における二大厄とし、マーカス・オーレリアスは女子は制御し難き点において船舶に似たりと云い、プロータスは女子が^{きら}綺羅を飾るの性癖をもってその^{てんぴん}天稟の^{おお}醜を^{ろうさく}蔽うの陋策にもとづくものとせり。ヴァレリアスかつて書をその友某におくって告げて曰く天下に何事も女子の忍んで

なし得ざるものあらず。願わくは皇天^{あわれみ} 憐^み を
垂れて、君をして彼等の術中に^{おちい} 陷^ち らしむるな
かれと。彼また曰く女子とは何ぞ。友愛の敵にあ
らずや。避くべからざる苦しみにあらずや、必然
の害にあらずや、自然の誘惑にあらずや、^{みつ} 蜜^{みつ} に
似たる毒にあらずや。もし女子を棄つるが不徳な
らば、彼等を棄てざるは一層の^{かしやく} 呵^か 責^{さく} と云わざ
るべからず。……」

「もう沢山です、先生。そのくらい愚妻のわる口
を拝聴すれば申し分はありません」

「まだ四五ページあるから、ついでに聞いたらど
うだ」

「もうたいていにするがいい。もう奥方の御帰りの
刻限だろう」と迷亭先生がからかい掛けると、

茶の間の方で

「清や、清や」と細君が下女を呼ぶ声がする。

「こいつは大変だ。奥方はちゃんというぜ、君」

「ウフフフ」と主人は笑いながら「構うものか」と云った。

「奥さん、奥さん。いつの^ま間に御帰りですか」

茶の間ではしんとして答がない。

「奥さん、今のを聞いたんですか。え？」

答はまだない。

「今のはね、御主人の御考ではないですよ。十六世紀のナッシ君の説ですから御安心なさい」

「存じません」と妻君は遠くで簡単な返事をした。

寒月君はくすくすと笑った。

「私も存じませんで失礼しましたアハハハハ」と
迷亭君は遠慮なく笑つてると、^{かどぐち}門口をあらあ
らしくあけて、頼むとも、御免とも云わず、大き
な足音がしたと思ったら、座敷の唐紙が乱暴にあ
^{たた}らさん^{ぺい}
いて、多々良三平君の顔がその間からあらわ
れた。

三平君今日はいつに似ず、真白なシャツに
^{おろした}
卸立のフロックを着て、すでに幾分か
^{そうば}
相場を狂わせてる上へ、右の手へ重そうに下げ
^{ビール}た四本の麦酒を縄ぐるみ、^{かつぶし}鰹節の^{そば}傍へ置
くと同時に挨拶もせず、どっかと腰を下ろして、
^{めざま}かつ膝を崩したのは目覚しい^{むしゃぶり}武者振であ
る。

「先生胃病は近来いいですか。こうやって、うち

にばかりいなさるから、いかんたい」

「まだ悪いとも何ともいやしない」

「いわんばってんが、顔色はよかなかごたる。先生顔色が^{きい}黄 ですよ。近頃は釣がいいです。品川から舟を一艘雇うて――私はこの前の日曜に行きました」

「何か釣れたかい」

「何も釣れません」

「釣れなくっても面白いのかい」

「^{こうぜん}浩然の気を養うたい、あなた。どうですかあなたがた。釣に行った事がありますか。面白いですよ釣は。大きな海の上を小舟で乗り廻わしてあるのですからね」と誰彼の容赦なく話しかける。

「僕は小さな海の上を大船で乗り廻してあるきたいんだ」と迷亭君が相手になる。

「どうせ釣るなら、くじら鯨か人魚でも釣らなくっちゃ、詰らないです」と寒月君が答えた。

「そんなものが釣れますか。文学者は常識がないですね。……」

「僕は文学者じゃありません」

「そうですか、何ですかあなたは。私のようなビジネス・マンになると常識が一番大切ですからね。

先生私は近来よっぽど常識に富んで来ました。どうしてもあんな所にいると、はた傍が傍だから、おのずから、そうになってしまうです」

「どうになってしまうのだ」

「たばこ煙草でもですね、朝日や、しきしま敷島をふかし

ていては幅が利^きかんです」と云いながら、吸口に
きんぱく　金箔のついた　エジプト　埃及煙草を出して、すばす
ば吸い出した、

「そんな　ぜいたく　贅　沢　をする金があるのかい」

「金はなかばってんが、今にどうかなりたい。こ
の煙草を吸ってると、大変信用が違います」

「寒月君が珠を磨くよりも楽な信用でいい、
てすう　手　数　がかからない。軽便信用だね」と迷亭が寒
月にいうと、寒月が何とも答えない間に、三平君
は

「あなたが寒月さんですか。博士にゃ、とうとう
ならんですか。あなたが博士にならんものだから、
私が貰う事にしました」

「博士をですか」

「いいえ、金田家の令嬢をです。実は御気の毒と
思うたですたい。しかし先方で是非貰うてくれ貰
うてくれと云うから、とうとう貰う事に極^きめました、先生。しかし寒月さんに義理がわるいと思っ
て心配しています」

「どうか御遠慮なく」と寒月君が云うと、主人は

「貰いたければ貰ったら、いいだろう」と
あいまい
曖昧な返事をする。

「そいつはおめでたい話だ。だからどんな娘を持
っても心配するがものはないんだよ。だれか貰う
と、さっき僕が云った通り、ちゃんとこんな立派
な紳士の御^{むこ} 賀さんが出来たじゃないか。東風君
新体詩の種が出来た。早速とりかかりたまえ」と

迷亭君が例のごとく調子づくると三平君は

「あなたが東風君ですか、結婚の時に何か作って
くれませんか。すぐ活版にして方々へくばります。
太陽へも出してもらいます」

「ええ何か作りましょう、いつ ^{ごろ} ^{にゅうよう} 頃 御 入 用
ですか」

「いつでもいいです。今まで作ったうちでもいい
です。その代りです。 ^{ひろ} ^う 披 露 のとき呼んで
ごちそう
御 馳 走 するです。シャンパンを飲ませるです。
君シャンパンを飲んだ事がありますか。シャンパ
ンは ^{うま} 旨 いです。――先生披露会のときに楽隊を
呼ぶつもりですが、東風君の作を譜にして奏した
らどうでしょう」

「勝手にするがいい」

「先生、譜にして下さらんか」

「馬鹿云え」

「だれか、このうちに音楽の出来るものはおらん
ですか」

「落第の候補者寒月君はヴァイオリンの妙手だ
よ。しっかり頼んで見たまえ。しかしシャンパン
くらいじゃ承知しそうもない男だ」

「シャンパンもですね。 ^{ひとびん} 一 瓶 四円や五円のじ
ゃよくないです。私の御馳走するのはそんな安い
のじゃないですが、君一つ譜を作ってくれませんか」

「ええ作りますとも、一瓶二十銭のシャンパンで
も作ります。なんならただでも作ります」

「ただは頼みません、御礼はするです。シャンパ

ンがいやなら、こう云う御礼はどうです」と云い
ながら上着の^{かくし}隠袋のなかから七八枚の写真を出してばらばらと畳の上へ落す。半身がある。全身がある。立ってるのがある。坐ってるのがある。
はかま^は袴^はを穿^はいてるがある。^{ふりそで}振袖^はがある。高島田がある。ことごとく妙齡の女子ばかりである。

「先生候補者がこれだけあります。寒月君と東風君にこのうちどれか御礼に周旋してもいいです。こりゃどうです」と一枚寒月君につき付ける。

「いいですね。是非周旋を願ひましょう」

「これでもいいですか」とまた一枚つきつける。

「それもいいですね。是非周旋して下さい」

「どれをです」

「どれでもいいです」

「君なかなか多情ですね。先生、これは博士の
めい
姪 です」

「そうか」

「この方は性質が^{ごく} 極 いいです。年も若いです。
これで十七です。――これなら持参金が千円あり
ます。――こっちのは知事の娘です」と一人で弁
じ立てる。

「それをみんな貰う訳にゃいかないでしょうか」

「みんなですか、それはあまり慾張りたい。君
いっふたさいしゅぎ
一 夫 多 妻 主 義 ですか」

「多妻主義じゃないですが、^{にくしよくろんしゃ} 肉 食 論 者

です」

「何でもいから、そんなものは早くしまったら、
よかろう」と主人は叱りつけるように言い放った
ので、三平君は

「それじゃ、どれも貰わんですね」と念を押しな
がら、写真を一枚一枚にポケットへ収めた。

「何だいそのビールは」

「お見やげでござります。^{まえ}い^{わい}かど^前祝^に角^の酒
屋で買うて来ました。一つ飲んで下さい」

主人は手を^う拍^て下女を呼んで^{せん}栓^を抜かせ
る。主人、迷亭、独仙、寒月、東風の五君は^{うやうや}恭^に
しくコップを捧げて、三平君の^{えんぷく}艶^福を祝した。

三平君は^{おおい}大^にに愉快的様子で

「ここにいる諸君を披露会に招待しますが、みん

な出てくれますか、出てくれるでしょうね」と云う。

「おれはいやだ」と主人はすぐ答える。

「なぜですか。私の一生に一度の^{たいれい}大 礼 ですばい。出てくんなさらんか。少し不人情のごたるな」

「不人情じゃないが、おれは出ないよ」

「着物がないですか。羽織と^{はかま}袴 くらいどうでも
oshimashitai. choto ^{hitonaka}人 中 へも出るがよかたい
先生。有名な人に紹介して上げます」

^{まっぴら めん}
「真 平 ご 免 だ」

^{なお}
「胃病が 癒 りますばい」

^{さしつか}
「癒らんでも 差 支 えない」

^{がんこば}
「そげん 頑 固 張 りなさるならやむを得ません。」

あなたはどうぞ来てくれますか」

「僕かね、是非行くよ。出来るならばいしゃくにん
媒 酌 人 たるの栄を得たいくらいのものだ。シャンパンの三々九度や春の宵。――なになこうど
仲 人 は鈴木^{とう}の 藤 さんだって？ なるほどそこいらだろうと思った。これは残念だが仕方がない。仲人が二人出来ても多過ぎるだろう、ただの人間としてまさに出席するよ」

「あなたはどうです」

「僕ですか、^{いっかんのふうげつかんせいけい}
一 竿 風 月 閑 生 計、
ひとはつりすはくひんこうりょうのかん
人 釣 白 蘋 紅 蓼 間」

「何ですかそれは、唐詩選ですか」

「何だかわからんです」

「わからんですか、困りますな。寒月君は出てく

れるでしょうね。今までの関係もあるから」

「きっと出る事にします、僕の作った曲を楽隊が奏するのを、きき落すのは残念ですからね」

「そうですとも。君はどうです東風君」

「そうですね。出て ^{ごりょうにん} 御 両 人 の前で新体詩を朗読したいです」

「そりゃ愉快だ。先生私は生れてから、こんな愉快な事はないです。だからもう一杯ビールを飲みます」と自分で買って来たビールを一人でぐいぐい飲んで ^{まっか} 真 赤 になった。

短かい秋の日はようやく暮れて、巻煙草の ^{しがい} 死 骸 が算を乱す火鉢のなかを見れば火はとくの昔に消えている。さすが ^{のんき} 呑 氣 の連中も少しく興が尽きたと見えて、^{だいふ} 「大 分 遅 くな った。もう

帰ろうか」とまず独仙君が立ち上がる。つづいて

「僕も帰る」と口々に玄関に出る。寄席^{よせ}がはねた
あのように座敷は淋しくなった。

主人は夕飯^{ゆうはん}をすまして書斎に入る。妻君は
はださむ じゅばん えり あら
肌 寒 の 襦 袢 の 襟 をかき合せて、洗 い
ざら
晒 しの不断着を縫う。小供は枕を並べて寝る。
下女は湯に行った。

のんき
呑 気 と見える人々も、心の底を叩いて見ると、
どこか悲しい音がする。悟ったようでも独仙君の
足はやはり地面のほかは踏まぬ。気楽かも知れな
いが迷亭君の世の中は絵にかいた世の中ではな
い。寒月君は珠磨^{たます}りをやめてとうとうお国から
奥さんを連れて来た。これが順当だ。しかし順当
が永く続くと定めし退屈だろう。東風君も今十年

したら、無暗に新体詩を捧げる事の非を悟るだろう。三平君に至っては水に住む人か、山に住む人かちと鑑定がむずかしい。しょうがいシャンパン

生涯三鞭酒を御馳走して得意と思う事が出来れば結構だ。鈴

木のとう藤さんはどこまでもころ転がって行く。転がれば泥がつく。泥がついても転がれぬものよりも

幅がき利く。猫と生れて人の世に住む事もはや二年越しになる。自分ではこれほどの見識家はまたと

あるまいと思うていたが、せんだっ先達でカーテル・

ムルと云う見ず知らずの同族が突然だいきえん大気

あを揚げたので、ちょっとびっくり驚した。よくよく

聞いて見たら、実は百年ぜん前に死んだのだが、ふとした好奇心からわざと幽霊になって吾輩を驚

かせるために、遠いめいど冥土から出張したのだそう

だ。この猫は母と対面をするとき、挨拶のしるしとして、一匹の^{さかな}肴^{くわ}を^{くわ}啣えて出掛けたところ、途中でとうとう我慢がし切れなくなって、自分で食ってしまったと云うほどの不孝ものだけあって、才気もなかなか人間に負けぬほどで、ある時などは詩を作って主人を驚かした事もあるそうだ。こんな豪傑がすでに一世紀も前に出現しているなら、吾輩のような^{ろく}碌でなしはどうにおいとま^{むかうのきょう}御暇^{きが}を頂戴して無^{むかうのきょう}何^{きが}有^{むかうのきょう}郷に帰臥してもいいはずであった。

主人は早晩胃病で死ぬ。金田のじいさんは慇懃でもう死んでいる。秋の^こ木の葉は大概落ち尽した。死ぬのが万物の^{じょうごう}定業で、生きていてもあんまり役に立たないなら、早く死ぬだけが賢いか

も知れない。諸先生の説に従えば人間の運命は自殺に帰するそうだ。油断をすると猫もそんな窮屈な世に生れなくてはならなくなる。恐るべき事だ。何だか気がくさくさして来た。三平君のビールでも飲んでちと景気をつけてやろう。

勝手へ廻る。秋風にがたつく戸が細目にあいてる間から吹き込んだと見えてランプはいつの間にか消えているが、月夜と思われて窓から影がさす。コップが盆の上に三つ並んで、その二つに茶色の水が半分ほどたまっている。^{ガラス}硝子の中のもの
は湯でも冷たい気がする。まして夜寒の月影に照らされて、静かに^{ひけしつぽ}火消壺とならんでいるこの液体の事だから、唇をつけぬ先からすでに寒くて飲みたいもない。しかしものは試しだ。三平な

どはあれを飲んでから、^{まっか}真赤になって、
^{あつくる}熱 ^{いきづか}苦しい息遣いをした。猫だって飲めば
陽気にならん事もあるまい。どうせいつ死ぬか知
れぬ命だ。何でも命のあるうちにしておく事だ。

死んでからああ残念だと墓場の影から^く悔やんでも
おっつかない。思い切って飲んで見ろと、勢よ
く舌を入れてぴちゃぴちゃやって見ると驚いた。
何だか舌の先を針でさされたようにぴりりとし

た。人間は何の^{すいきょう}酔興でこんな腐ったものを
飲むのかわからないが、猫にはとても飲み切れな

い。どうしても猫とビールは^{しょう}性が合わない。

これは大変だと一度は出した舌を^{ひっこ}引込めて見
たが、また考え直した。人間は口癖のように良薬

口に^{にが}苦しと言って^{かぜ}風邪などをひくと、顔をしか

めて変なものを飲む。飲むから^{なお}癒るのか、癒るのに飲むのか、今まで疑問であったがちょうどい^{さいわい}い^幸だ。この問題をビールで解決してやろう。飲んで腹の中までにながくたったらそれまでの事、もし三平のように前後を忘れるほど愉快になれば空前の^{もう}儲^{もの}け者で、近所の猫へ教えてやってもいい。まあどうなるか、運を天に任せて、やっつけると決心して再び舌を出した。眼をあいていると飲みにくいから、しっかり眠って、またびちゃびちゃ始めた。

吾輩は我慢に我慢を重ねて、ようやく一杯のビールを飲み干した時、妙な現象が起った。始めは舌がぴりぴりして、口中が外部から圧迫されるように苦しかったのが、飲むに従ってようやく^{らく}楽

になって、一杯目を片付ける時分には別段骨も折れなくなった。もう大丈夫と二杯目は難なくやつけた。ついでに盆の上にこぼれたのも^{ぬぐ}拭うがごとく^{ふく}腹^{ない}内に収めた。

それからしばらくの間は自分で自分の動静を伺うため、じっとすくんでいた。次第にからだが暖かになる。眼のふちがぼうっとする。耳がほてる。歌がうたいたくなる。猫じゃ猫じゃが踊りたくなる。主人も迷亭も独仙も糞を^{くら}食えと云う気になる。金田のじいさんを^{ひっか}引搔いてやりたくなる。妻君の鼻を食い欠きたくなる。いろいろになる。最後にふらふらと立ちたくなる。^た起ったらよたよたあるきたくなる。こいつは面白いとそとへ出たくなる。出ると御月様今晚はと挨拶したくな

る。どうも愉快だ。

陶然とはこんな事を云うのだろうと思いながら、あてもなく、そこかしこ散歩するような、しないような心持でしまりのない足をいい加減に運ばせてゆくと、何だかしきりに眠い。寝ているのだか、あるいてるのだか判然しない。眼はあけるつもりだが重い事^{おびただ}夥しい。こうなればそれまでだ。海だろうが、山だろうが驚ろかないんだと、前足をぐにゃりと前へ出したと思う途端ぼちゃんと音がして、はっと云ううち、――やられた。どうやられたのか考える^ま間がない。ただやられたなと気がつくか、つかないのにあとは滅茶苦茶になってしまった。

我に帰ったときは水の上に浮いている。苦しい

から爪でもって^{やたら か}矢鱈に搔いたが、搔けるものは水ばかりで、搔くとすぐもぐってしまう。仕方が

ないから^{あとあし}後足で飛び上っておいて、前足で搔いたら、がりりと音がしてわずかに^{てごたえ}手応があった。ようやく頭だけ浮くからどこだろうと見廻

わすと、吾輩は大きな^{かめ}甕の中に落ちている。この^{かめ}甕は夏まで^{みずあおい}水葵と称する^{みずくさ}水草が茂っていたがその後烏の勘公が来て葵を食い尽

した上に^{ぎょうずい}行水を使う。行水を使えば水が減る。減れば来なくなる。近来は^{だいぶ}大分減って烏が見えないなと^{さっき}先刻思ったが、吾輩自身が烏の代りにこんな所で行水を使おうなどとは思ひも寄らなかった。

水から^{ふち}縁までは^よ四寸余もある。足をのばして

も届かない。飛び上っても出られない。^{のんき}呑気に
していれば沈むばかりだ。もがけばがりがり^きと甕
に爪があたるのみで、あたった時は、少し浮く気
味だが、すべればたちまちぐっともぐる。もぐれ
ば苦しいから、すぐがりがり^きをやる。そのうちか
らだが疲れてくる。気は^{あせ}焦るが、足はさほど利
かなくなる。ついにはもぐるために甕を搔くのか、
搔くためにもぐるのか、自分でも分りにくくなっ
た。

その時苦しいながら、こう考えた。こんな
かしやく^{きやく}呵責に逢うのはつまり甕から上へあがりた
いばかりの願である。あがりたいのは山々である
が上がれないのは知れ切っている。吾輩の足は三
寸に足らぬ。よし水の^{おもて}面^{おもて}にからだが浮いて、

浮いた所から思う存分前足をのばしたって五寸
にあまる甕の縁に爪のかかりようがない。甕のふ
ちに爪のかかりようがなければいくらか搔いて
も、あせっても、百年の間身を粉にしても出られ
っこない。出られないと分り切っているものを出
ようとするのは無理だ。無理を通そうとするから
苦しいのだ。つまらない。みずか 自 ら求めて苦しん
で、自ら好んで 拷 問 に 罹 っているのは馬鹿
気ている。

「もうよそう。勝手にするがいい。がりがりはこ
れぎりご めんこうむ 免 蒙 るよ」と、前足も、後足も、
頭も尾も自然の力に任せて抵抗しない事にした。

次第に楽になってくる。苦しいのだからありがた

いのだか見当がつかない。水の中にいるのだから、
座敷の上にいるのだから、判然しない。どこにどう
していても ^{さしつか} 差 支 えはない。ただ樂である。
^{いな} 否 ^{じつげつ} 樂そのものすらも感じ得ない。日 月 を切
り落し、天地を ^{ふんせい} 粉 塵 して不可思議の太平に入る。
吾輩は死ぬ。死んでこの太平を得る。太平は
死ななければ得られぬ。 ^{なむあみだぶつ} 南無阿弥陀仏南無阿弥
陀仏。ありがたいありがたい。

底本：「夏目漱石全集 1」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和 62）年 9 月 29 日第 1 刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版夏目漱石全集」筑

摩書房

1971（昭和 46）年 4 月～1972（昭和 47）

年 1 月

入力：柴田卓治

校正：渡部峰子（一）、おのしげひこ（二、五）、
田尻幹二（三）、高橋真也（四、七、八、十、十
一）、しず（六）、瀬戸さえ子（九）

1999 年 9 月 17 日公開

2010 年 8 月 13 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、[青空
文庫](http://www.aozora.gr.jp/) (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られまし
た。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテ
ィアの皆さんです。

●表記について

- このファイルは W3C 勧告 XHTML1.1 にそった形式で作成されています。
- [#...] は、入力者による注を表す記号です。
- 「くの字点」をのぞく JIS X 0213 にある文字は、画像化して埋め込みました。
- アクセント符号付きラテン文字は、画像化して埋め込みました。

●図書カード